ちくま学芸文庫

原典訳 マハーバーラタ 4

第3巻（179-299章） 第4巻（1-67章）

上村勝彦 訳

筑摩書房

目次

家系図　11
主要登場人物　12
マハーバーラタ関連地図　16
第3巻　森林の巻（ヴァナ・パルヴァン）　17
(37)　マールカンデーヤとの会合（第百七十九章―第二百二十一章）…19
クリシュナとの再会　20／バラモンと王の偉大さ　26／マヌと大洪水　35／最悪の時代とユガの終末（一）　39／最高神の本性　49／最悪の時代とユガの終末（二）　54／蛙の奥方　64／亀は鶴よりも長寿　74／阿修羅を殺したドゥンドゥマーラ　77／バラモンに教える女性　90／バラモンに法を説く猟師　96／アンギラス（火神）の系譜　130／スカンダ（韋駄天）の誕生　136／スカンダ、神軍を破る　145／スカン

ダ、神々の将軍になる　150／病魔(グラハ)の種類　155／悪魔の群を滅ぼすスカ
ンダ　162

(38)　ドラウパディーとサティヤバーマーとの対話（第二百二十二章
—第二百二十三章）……171
夫を惹きつける法　172

(39)　牧場視察（第二百二十四章—第二百四十三章）……181
ドゥルヨーダナ、牧場視察を企てる　182／クル軍がガンダルヴァの軍
に敗れる　194／パーンダヴァに救われたドゥルヨーダナ　199／ドゥル
ヨーダナ、生きる希望を失う　207／悪魔に励まされたドゥルヨーダナ
218／ドゥルヨーダナの大祭　225

(40)　鹿の夢（第二百四十四章）……235
カーミヤカの森に移る　236

(41)　一枡の米（第二百四十五章—第二百四十七章）……239
ヴィヤーサの教え　240／ムドガラの不思議な枡　243／天界の幸せと涅
槃　246

(42)　ドラウパディー強奪（第二百四十八章—第二百八十三章）……251
シンドゥ国王、ドラウパディーを掠奪する　252／ドラウパディーの救
出　262
ラーマ物語　277
不死身の羅刹王ラーヴァナ　277／神々は地上に降臨する　284／ラー
ヴァナ、シーターを奪う　286／ラーヴァナの横恋慕　299／ハヌーマ
ット、シーターを発見する　308／ランカーに渡る橋の建設　314／ラ
ンカーの攻防　319／ラーマ兄弟の苦戦　328／ラーヴァナの殺害
333／シーターとの再会　336
サーヴィトリー物語　344
サーヴィトリーが選んだ夫　344／ヤマ（閻魔）から夫を取りもどす
355／百人の息子を授かる　372

(43)　耳環の奪取（第二百八十四章—第二百九十四章）……381
太陽神、カルナに忠告する　382／カルナの出生の秘密　389／インドラ
に耳環と鎧を奪われる　405

(44) 火鑽棒（ひきりぼう）（第二百九十五章―第二百九十九章）……413
夜叉の湖 414／謎をかける夜叉 420／ダルマ神の恩寵 431

第4巻 ヴィラータ王の巻（ヴィラータ・パルヴァン） 439

(45) ヴィラータ王（第一章―第十二章）……441
正体を隠してヴィラータの都に滞在する 442／主君に仕える方法 449／五王子たちの変装 453

(46) キーチャカ殺し（第十三章―第二十三章）……473
キーチャカ将軍の邪恋 474／ドラウパディーを足蹴にするキーチャカ 479／ビーマに悲痛を訴えるドラウパディー 484／キーチャカを殺すビーマ 492／ビーマ、キーチャカの一族を殺す 499

(47) 牛の略奪（第二十四章―第六十二章）……507
パーンダヴァたちの探索 508／クル軍とトリガルタ軍の連合 516／トリガルタの王を捕える 519／女形のブリハンナダー、御者となる 526／ウッタラ王子を励ますアルジュナ 532／アルジュナの十の名前 537／アルジュナの進軍 545／ドゥルヨーダナたちの協議 547／アルジュナ、カルナを退却させる 558／クリパを圧倒するアルジュナ 561／ドローナ親子と戦うアルジュナ 565／アルジュナ、カルナをうち破る 570／ビーシュマを苦しめるアルジュナ 572／敗走するドゥルヨーダナ 577／アルジュナの勝利 580

(48) アビマニユの結婚（第六十三章―第六十七章）……585
ユディシティラ、骰子をぶつけられる 586／ウッタラ王子の帰還 592／王女ウッタラー、アルジュナの嫁になる 596

原典訳 マハーバーラタ4

〔家系図〕

太陽神―タパティー
パラターサンヴァラナ
クル―プラティーパ
ガンガー女神
シャンタヌ
ビーシュマ
サティヤヴァティー
チトラーンガダ
ヴィチトラヴィーリヤ
アンバー
アンビカー
アンバーリカー
パラーシャラ
ヴィヤーサ
スバラ
ガーンダーリー
シャクニ
ドリタラーシトラ
パーンドゥ
マードリー
ヴィドゥラ
ドゥルヨーダナ
ドゥフシャーサナ
（百王子）
ヴィカルナ
クリピー
ドローナ
アシュヴァッターマン
太陽神
カルナ
ヤドゥ―ヴリシュニ……シューラ
クンティー
ヴァスデーヴァ
ナクラ
サハデーヴァ
ユディシティラ
ビーマセーナ
アルジュナ
（マツヤ国王）
ヴィラータ
ウッタラー
アビマニユ
パリクシット―ジャナメージャヤ
スバドラー
クリシュナ
バララーマ
ドラウパディー
（クリシュナー）
ドルパダ
ドリシタデュムナ
シカンディン

パーンダヴァ
カウラヴァ

主要登場人物

アシュヴァッターマン　ドローナの息子で、父に劣らぬ勇士。
アルジュナ　パーンドゥの五王子のうちの三男。母クンティーがインドラ神より授かった息子。あらゆる武芸に秀でた勇士。妻スバドラーとの間に息子アビマニユが生まれる。
アビマニユ　アルジュナとスバドラーの息子。
アンバー　カーシ国王の長女。アンビカーとアンバーリカーの姉。ビーシュマに復讐を誓い、後にシカンディンという男性になる。
アンバーリカー　カーシ国王の三女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。パーンドゥの母。
アンビカー　カーシ国王の次女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。ドリタラーシトラの母。
ヴァイシャンパーヤナ　聖仙。ヴィヤーサの弟子。蛇の供犠祭を催すジャナメージャヤ王の前で、ヴィヤーサから聞いた『マハーバーラタ』を吟誦する。
ヴァスデーヴァ　ヤドゥ族の長シューラの息子。クンティーの兄。バララーマ、クリシュナ、スバドラーの父。
ヴィチトラヴィーリヤ　シャンタヌとサティヤヴァティーの次男。カーシ国王の娘アンビカーとアンバーリカーを妃に迎える。
ヴィドゥラ　ヴィヤーサとアンバーリカーの召使女の徳高い息子。ドリタラーシトラとパーンドゥの異母弟。

ヴィヤーサ（クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ）　聖仙。『マハーバーラタ』の作者。サティヤヴァティーと聖仙パラーシャラとの間に生まれる。ドリタラーシトラ、パーンドゥ、ヴィドゥラの実父。
ヴィラータ　マツヤ国の王。パーンダヴァたちは変装してこの王の宮廷に仕えた。
ウグラシュラヴァス　吟誦詩人。ローマハルシャナの息子。ヴァイシャンパーヤナが語った『マハーバーラタ』をナイミシャの森で聖仙たちに語る。
ウッタラ　ヴィラータの息子。妹のウッタラーはアビマニユの妻になる。
カルナ　クンティーが太陽神より授かった息子。生まれつき甲冑と耳環をつけた勇士。
ガンガー　ガンジス川の女神。シャンタヌ王との間に息子ビーシュマを産む。
ガーンダーリー　ガーンダーラ国王スバラの娘。ドリタラーシトラの妻。百王子の母。
クリシュナ　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの息子（ヴァースデーヴァ）。バララーマの弟。ヴィシュヌ神の化身とみなされる。
クリパ　武術の達人で、クル族に仕える。妹のクリピーはドローナの妻。
クンティー（プリター）　ヤドゥ族の長シューラの娘。太陽神よりカルナを授かる。パーンドゥの妻。ユディシティラ、アルジュナ、ビーマの母。
サティヤヴァティー　漁師の長の娘。聖仙パラーシャラとの間にヴィヤーサをもうける。シャンタヌの妻となり、チトラーンガダ、ヴィチトラヴィーリヤを産む。
サハデーヴァ　パーンドゥの五王子のうちの五男。マードリーの双子の息子の一人。
サーティヤキ　ヴリシュニ族の勇士。ユユダーナとも呼ばれる。シニの孫。
サンジャヤ　ドリタラーシトラの吟誦者。『マハーバーラタ』の戦争の語り手。

シカンディン　ドルパダの次男。アンバーの生まれ変わり。

シャウナカ　聖仙。十二年におよぶ祭祀を行うナイミシャの森の祭場で、様々な神聖な物語をウグラシュラヴァスから聞く。

シャクニ　ガンダーラ国王スバラの長男。ドゥルヨーダナ兄弟の叔父。

ジャナメージャヤ　パーンダヴァ族の後裔。パリクシットの息子。ヴィヤーサの弟子ヴァイシャンパーヤナの物語る『マハーバーラタ』の聞き手。

ジャヤドラタ　シンドゥの王。ドリタラーシトラの娘婿。

シャンタヌ　クル族の王プラティーパの息子。ガンガー女神との間に息子ビーシュマを、サティヤヴァティーとの間にチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤをもうける。

スバドラー　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの娘。バララーマとクリシュナの妹。夫アルジュナとの間にアビマニユをもうける。

チトラーンガダ　シャンタヌとサティヤヴァティーの長男。

ドゥフシャーサナ　ドリタラーシトラの次男。

ドゥルヨーダナ　ドリタラーシトラの長男。邪悪な性格で、パーンダヴァ兄弟を苦しめる。

ドラウパディー（クリシュナー）　パーンチャーラ国王ドルパダの娘。パーンドゥの五王子の共通の妻。

ドリシタデュムナ　ドルパダの長男。

ドリタラーシトラ　ヴィヤーサとアンビカーの盲目の息子。ガーンダーラ国王の娘ガーンダーリーを妃とする。百王子の父。

ドルパダ　パーンチャーラ国王プリシャタの息子。祭火よりドラウパディー、ドリシタデュムナ、シカンディンの三人の子を授かる。

ドローナ　聖仙バラドゥヴァージャの息子。クリピーを妻とする。アシュヴァッターマンの父。パーンドゥの五王子とドリタラーシトラの百王子に武術を教授する。

ナクラ　パーンドゥの五王子のうちの四男。マードリーの双子の息子の一人。

パラーシャラ　聖仙。ヴィヤーサの父。

バララーマ　ヴァスデーヴァの長男。クリシュナの兄。

パリクシット　アビマニユとウッタラーの息子。ジャナメージャヤの父。

パーンドゥ　ヴィヤーサとアンバーリカーの息子。ドリタラーシトラの弟。五王子の父。

ビーシュマ（デーヴァヴラタ）　シャンタヌ王とガンガー女神の息子。パーンドゥとドリタラーシトラの伯父。

ビーマ（ビーマセーナ）　パーンドゥの五王子のうちの次男。クンティーが風神より授かった息子。

マードリー　マドラ国王の娘。パーンドゥの妻。アシュヴィン双神より双子の息子ナクラとサハデーヴァを授かる。

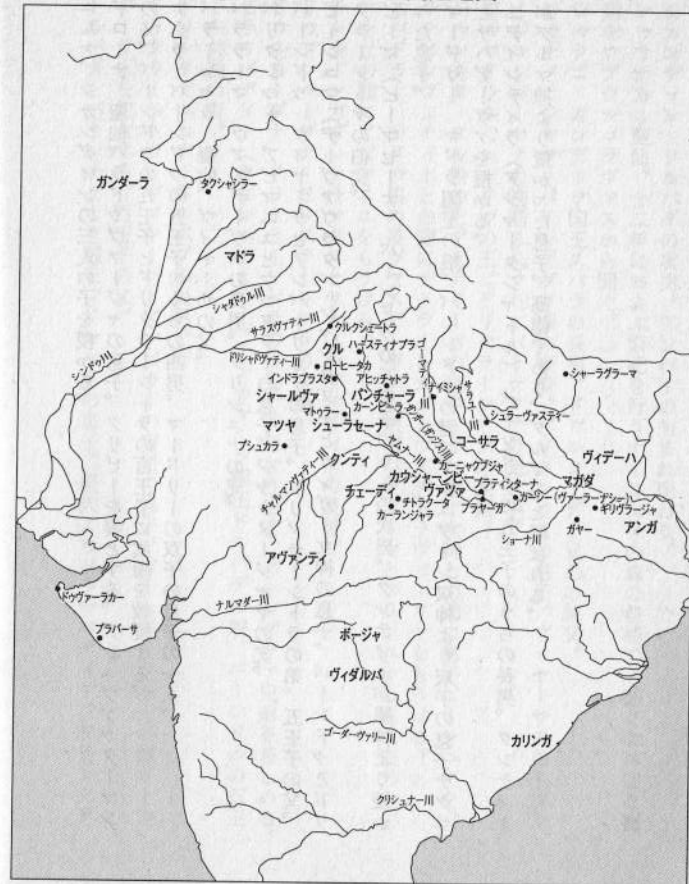
ユディシティラ（アジャータシャトル）　パーンドゥの五王子のうちの長男。クンティーがダルマ神より授かった息子。高徳であり、ダルマ王と呼ばれる。

マハーバーラタ関連地図

第3巻　森林の巻（ヴァナ・パルヴァン）

第百七十九章―第二百九十九章

(37)

マールカンデーヤとの会合（第百七十九章—第二百二十一章）

クリシュナとの再会

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼らがそこに滞在している間に雨季が訪れた。それは夏を終わらせ、万物に幸せをもたらす季節である。(一)雨季には、大音響をたてる黒雲が空と諸方位をおおい、昼夜、絶えず雨を降らせる。(二)この雨季の標(しるし)である幾百幾千の雲は、日光の網を離れ、稲光で清浄に輝く。(三)大地は若草が生じ、そこであぶや蛇が酔い、水につかって、煙とほこりは失せ、赤色でなくなった。(四)水にすっかりおおわれて、平坦地も平坦でない土地も、川も山も、何も見分けがつかない。(五)雨季には河川は波立ち、大きな音をたててあえぐかのように急流となり、森林を美しくする。(六)森では色々な音が聞こえる。猪や鹿や鳥たちは、雨に打たれて鳴いている。(七)チャータカ鳥、孔雀、雄のコーキラ(郭公)の群は酔って、蛙たちは誇らしげに跳びまわる。(八)

彼らが砂漠を歩いている間、雷雲の轟く吉祥の雨季は、このように多様な相を見せて過ぎて行った。(九)そして秋が来た。クラウンチャ鳥とハンサ鳥の群に満ち、森や高原には草が茂り、川の水は澄む。(一〇)空と星々は澄み、鳥獣に満ち、秋は彼ら偉大なパーンダヴァにとって幸あるものであった。(一一)彼らはほこりの静まった、雲で涼しくなった夜々を見つつ、惑星と星宿の群や月に照らされていた。(一二)彼らは睡蓮(クムダ)や白蓮華(プンダリーカ)に飾られ、冷たい水をたたえた吉祥の川や蓮池を見た。(一三)霊場のあるサラスヴァティー川は、虚空のような堤を持ち、ニーパ樹と野生の米に満ち、そこを歩く彼らを喜ばせた。(一四)剛弓の勇士たちは、澄んだ水に満ちた吉祥のサラスヴァティーを見ながら楽しんだ。(一五)彼らにとって、月相の変わり目の秋の夜は最も清浄であった。彼らがそこに滞在している間に、カールッティカ月(十月―十一月)となった。(一六)バラタの最上者パーンダヴァたちは、その最高の合(満月がクリッティカー星に近づく時)のすべての時期を、気力に満ちた善行の苦行者たちと会合した。(一七)そして闇夜が現われた時、パーンダヴァたちは、ダウミヤ、御者たち、厨房長たちとともに、カーミヤカの森へ行った。(一八)

(第百七十九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ユディシティラをはじめとするパーンダヴァ兄弟はカーミヤカに着き、聖者の群に歓迎されて、クリシュナー(ドラウパディー)とともにそこに滞在した。(一)パーンドゥの王子たちが安心してそこに住んでいる間、多くのバラモンたちが彼らのまわりをぐるりと取り囲んだ。(二)その時、あるバラモンが告げた。

「アルジュナの親友がここにやって来る。高邁で強力な勇士シャウリ(クリシュナ)だ。(三)というのは、あなた方クルの王子がここに来たことがハリ(クリシュナ)に知られたから。ハリは常にあなた方の幸せを願い、会いたいと望んでいたのである。(四)そしてまた、ヴェーダ学習と苦

行に専心する、長寿の大苦行者マールカンデーヤが、速やかにあなたに会いに来るであろう。（五）」

彼がそのように言っている時、最高の戦士クリシュナが、サイニヤとスグリーヴァ（馬の名）をつないだ戦車に乗って現われた。（六）インドラがパウローミー（シャチー）を連れているように、彼は〔妻の〕サティヤバーマーを連れていた。クリシュナはクル族の最上者たちに会いたいと望んでやって来たのである。（七）賢者クリシュナは戦車から降り、喜んでダルマ王と最高の強者ビーマとに、礼儀正しく挨拶した。（八）それから彼はダウミヤに敬意を表し、双子の挨拶を受けた。そしてアルジュナを抱きしめ、ドラウパディーを励ました。（九）クリシュナは久しぶりで帰った親愛なる勇士アルジュナを見て、何度も何度も抱きしめた。（一〇）同様に、クリシュナの愛しい妃であるサティヤバーマーも、パーンダヴァたちの愛妻のドラウパディーを抱きしめた。（一一）それからすべてのパーンダヴァたちは、妻や司祭とともに、蓮花の眼の男（クリシュナ）を歓迎し、ぐるりと取り囲んだ。（一二）

賢者クリシュナは阿修羅を征伐するアルジュナと再会し、偉大な万物の主である神（シヴァ）が直々に息子のグハ（スカンダ）と再会した時のように輝いた。（一三）それからアルジュナは、森におけるすべての出来事を、ありのままクリシュナに告げた。それからまた、スバドラーやアビマニユの様子をたずねた。（一四）クリシュナはパーンダヴァたちとクリシュナーと司祭にふさわしく敬意を表してから、彼らとともに座り、称讃してユディシティラ王に告げた。（一五）

「パーンダヴァよ、王国を得るよりも法（ダルマ）が優れている。王よ、苦行（タパス）（修養）はまさにそれのためにあると言われる。あなたは真実と廉直さにより自己の法を行なって、現世と来世とを勝ち取った。（一六）あなたはまず誓戒を行なって学習し、すべての弓のヴェーダ（兵学）を正しく習得し、王族の法により富を獲得して、古（いにしえ）のすべての祭式を行なった。（一七）あなたは粗野な法を喜ばない。王よ、あなたはいかなることでも恣意的に行なわない。財物を貪って法を捨てない。それ故、あなたは本性よりしてダルマ王なのである。（一八）

王よ、王国と富と諸々の享楽を獲得してから、布施、真実、苦行、信仰、寂静、堅固さ、忍耐は、プリターの息子よ、常にあなたの最高の楽しみであった。（一九）クルの国土の群衆が、恐れている無力なクリシュナーを見た時、パーンダヴァよ、あなた以外の誰が、その無法な所行を見て耐えることができたろうか。（二〇）疑いもなく、あなたは願望をすべて成就し、速やかに、正しく国民を守護するであろう。あなた方の約定が遂行されたら、我々はクル一族の制圧に努めよう。（二一）」

そしてクリシュナは、ダウミヤ、クリシュナー、ユディシティラ、双子、ビーマに告げた。

「アルジュナが武器を習得して、喜び勇んで帰って来たのは、あなた方にとって幸いなことだ。めでたいことだ。（二二）」

クリシュナはまた親しい人々とともに、クリシュナー（ドラウパディー）に言った。

「クリシュナーよ、あなたの幼い息子たちは専ら弓のヴェーダを楽しみ、約束を守り、行儀よく、いつも立派な人々と交わり、精神統一を行なっている。（二三）クリシュナーよ、あな

たの父や兄弟たちは子供たちに王国や領土を与えてもてなそうとしたが、子供たちは彼らの家では楽しめなかった。（二四）クリシュナーよ、あなたの息子たちは、アーナルタ国めざして恙無く進み、専ら弓のヴェーダにいそしんだ。彼らはヴリシュニ族の都に入り、神々を羨まない〔ほど楽しく過ごした〕。（二五）」（二六―三四略）

〔クリシュナはユディシティラに向かって言った。〕

「あなたは怒りを離れ、罪悪を除去し、望むがままに時を過ごし、憂いを離れ、直ちに繁栄する象の都（ハースティナプラ）とその地方にもどるであろう。（三五）」

それから偉大なダルマ王は、その最高の人が適切に述べたことを聞いて、讃え、色々と考え、合掌してケーシャヴァ（クリシュナ）に告げた。（三六）

「ケーシャヴァよ、あなたは疑いなくパーンダヴァ一族の寄る辺である。彼らはあなたを拠り所とするから。時節が来れば、あなたは更にいっそうの仕事をしてくれるだろう。疑いない。（三七）約束した通り、合計十二年間、無人の地で時を過ごした。約定のように、人に知られず過ごしてから、パーンダヴァ一族はあなたに寄る辺を求めるであろう。ケーシャヴァよ。（三八）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナとダルマ王がこのように語っていた時、苦行を積み、幾千年の齢（よわい）を重ねた、徳性ある大苦行者マールカンデーヤが現われた。（三九）幾千年の齢を重ねたその高齢の聖仙が

訪れた時、すべてのバラモンとクリシュナとパーンダヴァたちは彼に敬礼した。（四〇）その最高の聖仙が歓迎され、すっかりくつろいだ時、クリシュナはバラモンたちとパーンダヴァの言葉に従って彼に告げた。（四一）

「パーンダヴァたち、集まったバラモンたち、ドラウパディー、サティヤバーマー、そして私は、あなたの最高のお話を聞きたいと願っております。（四二）諸王や女性や聖仙たちに関する、昔の神聖な物語、永遠に語られる、良俗を説く物語を、私たちに語って下さい。マールカンデーヤよ。（四三）」

彼らがそこに座っていた時、高潔な神仙ナーラダも、パーンダヴァたちに会うために訪れた。（四四）すべての人中の雄牛たちは、その偉大な賢者をも、洗足の水ともてなしの品を出して、礼儀正しく接待した。（四五）神仙ナーラダは、マールカンデーヤが物語をすることを彼らが待ち焦がれていることを知ると、彼らに賛成した。（四六）そして、適切な時を知るナーラダは、微笑して彼に言った。

「梵仙よ、語りたいことをパーンダヴァたちに語って下さい。（四七）」

苦行を積んだマールカンデーヤは、このように言われると、それに答えた。

「少しの間待って下さい。語るべきことがたくさんあります。（四八）」

そう言われて、パーンダヴァたちは、バラモンたちとともに、少しの間待った。真昼の太陽のようなその大仙を見つめながら。（四九）

（第百八十章）

バラモンと王の偉大さ

クル族の王であるパーンドゥの息子は、大仙が語ろうとしているのを見て、話の口火を切るためにたずねた。(一)

「あなたは太古より存し、すべての魔類や偉大な聖仙や王仙たちの業績を知っておられる。(二)あなたは奉仕され崇拝されるべきです。我々は長いことあなたをお待ちしていました。そして今、このデーヴァキーの息子(クリシュナ)が、我々に会いに来ました。(三)私自身が幸福から堕ち、邪悪なドリタラーシトラの息子たちが繁栄しているのを見て、私は思いました。(四)人間は善悪の行為をなし、自己の果報を享受します。一体、主なる神が行為の主体なのでしょうか。(五)ブラフマンを知る人々の最上者よ、幸不幸において、人々の行なったことは、この世において人々につき従うのか、または他生においてつき従うのか。(六)最高のバラモンよ、主体《デーヒン》(個我)は種々の善悪の業につき従われて、身体を捨てるが、死後にそれらと結びつくのか、あるいはこの世で結びつくのか。(七)業は現世に属するものか、来世に属するものか。バールガヴァよ、死んだ生類の諸々の業はどこにとどまるのですか。(八)」

マールカンデーヤは語った。——

最も雄弁なる者よ、その質問はあなたにふさわしい。あなたは知るべきことをすでに知っているが、確認のために質問したのだ。(九)この点についてあなたに説くであろう。一意専心してそれを聞きなさい。この世とあの世で人が幸不幸を享《う》けている有様を。(一〇)最初に生じた造物主《プラジャーパティ》は、主体(個我)のために、法《ダルマ》に従う、汚れない清浄な身体を創造した。(一一)クル族の王よ、古《いにしえ》の人々は、力と意向を無駄にせず、よく誓戒を守り、真実を述べ、ブラフマンと合一し、清浄であった。(一二)すべての人々は意のままに神々とともに天に行き、そしてまた、意のままに飛行して帰って来た。(一三)人々は意のままに死に、意のままに生きた。障害が少なく、苦悩がなく、目的を成就し、災いがなかった。(一四)彼らは実際に、神々の群や偉大な聖仙たちや一切の法を見た。彼らは自制し、妬みを離れていた。(一五)彼らは千年間生き、千人の息子を得た。

それから、時が移って、人々は地上のみを歩くようになった。(一六)それから人々は欲望と怒りに支配され、まやかしと欺瞞に生き、貪欲と迷妄に支配され、神々に見捨てられた。(一七)彼ら悪党は邪悪な行為により、畜生道や地獄へ行く。そして様々な輪廻において、繰り返し煮られる。(一八)彼らは空しい願い、空しい意向、空しい知識を抱き、分別を失い、あらゆることを恐れ、煩悩のとりこになり、総じて不浄な行為により印を刻まれる。(一九)彼らは悪い家に生まれ、多病、性悪で、威光がない。その悪党どもは、短命で、恐ろしい所行の報いを受ける。彼らは一切の享楽を求め、信仰なく、常軌を逸している。(二〇)

クンティーの息子よ、死者の帰趣はこの世における自己の行為によって決まる。知者や愚者の業（カルマン）を貯える場所はどこにあるか。(二一)その者はどこにいて、その善行と悪行を享受するのか。これがあなたの知りたいことだ。その解答を聞きなさい。(二二)

人間は神に創られた原初の身体によって、善悪の業の多大な集積を作る。(二三)寿命が終わる時、彼はほとんど消滅した肉体を捨て、それと同時に母胎に再生する。中有（ちゅうう）は存在しない。(二四)彼のなした業が、影のように彼につき従う。そして結実し、彼は再生して幸福や不幸を享ける。(二五)その者は運命に支配され、善悪の特徴をともない、それを克服することができないと、知識の眼を有する人々は見る。(二六)

ユディシティラよ、以上は無知な人々の帰趣であると言われる。それよりも優れた、知識ある人々の最高の帰趣を知りなさい。(二七)苦行を修め、すべての聖典に通達し、誓戒を固く守り、真実に専念し、目上（グル）の人々に仕えることに勤しむ人々、(二八)よい性行の、清らかな生まれの人々、忍耐づよく、自制し、輝かしい人々は、概してよい母胎に入り、よい特徴を有する。(二九)彼らは感官を制御しているから自己を制御し、清浄であるから病にかからず、圧迫される恐れがないから災禍がない。(三〇)没しても、生まれても、胎内にいても、彼はあらゆる場合、知識の眼を持ち、自己と最高我とを知る。彼らはこの地上に達して、再び神々の住処に行く。(三一)(三二—四一略)

(第百八十一章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時、パーンドゥの息子たちは、偉大なマールカンデーヤに告げた。

「我々は偉大なバラモンたちの偉大さを聞きたいと思います。お話し下さい。(一)」

そう言われて、威光に満ちあふれ一切の学問に通じた、聖なる大苦行者マールカンデーヤは語った。(二)——

ハイハヤ朝に属する勇猛な王族で、容姿端麗で強力な王子が、狩に出かけた。(三)彼は草や蔓におおわれた森を歩きまわっているうちに、近くに、黒鹿の上衣を着た聖者を見た。森の中で、王子は彼を鹿だと思って射殺した。(四)その行為をして、苦悩し、悲嘆に暮れ、ハイハヤの偉大な指導者たちのもとに行った。(五)蓮のような眼をした王子は彼ら王たちに、起こったことを話した。(六)根と木の実を食べる聖者が殺されたことを聞き、そして見て、彼らは意気消沈した。(七)この聖者は誰の息子かと、あちこち探しまわり、彼らはみなして、タールクシャ・アリシタネーミの隠棲所に急いで行った。(八)彼ら一同は、その誓戒を厳守する偉大な聖者に挨拶をして立っていた。(九)その聖者も彼らを接待した。彼らはその偉大な聖者に言った。

「聖者よ、我々はあなたからもてなしを受けるにはふさわしくありません。罪を犯しましたから。我々はバラモンを殺したのです。(一〇)」

すると梵仙は彼らに言った。

「あなた方はどのようにしてバラモンを殺したのか。彼はどこにいるのか、言いなさい。みなして私の苦行の力を見なさい。(一一)」
そこで彼らは一部始終をすべて彼に告げたが、そこに集まった彼らがいくら探しても、死んだ聖者を見つけることはできないで、夢を見たかのように、恥じ入り、狼狽した。(一二)するとタールクシャは彼らに言った。
「あなた方に殺されたのはこのバラモンかね。王たちよ、これが苦行の力をそなえた私の息子だ。(一三)」
彼らは「大奇蹟だ」と言いながら、その聖仙を見つめて最高に驚嘆した。(一四)
「彼が死んだのを見たのに、どうして生き返ったのか。彼が生き返ったのは、苦行の力なのか。梵仙よ、もし聞けるなら聞きたいと思います。(一五)」
聖者は彼らに答えた。
「王たちよ、死は我々には力を及ぼさない。私は手短に要領よくその原因を語ろう。(一六)我々は真実のみを認める。不真実に心を向けない。我々は自己の義務(ダルマ)を実践している。それ故、我々には死の恐怖はない。(一七)我々はバラモンのよい点を語る。彼らの悪行を語らない。それ故、我々には死の恐怖はない。(一八)我々は客人を飲食物により、従者を過分の食物により、威光ある者を土地と住宅により〔満足させる〕。それ故、我々には死の恐怖はない。(一九)以上、ごくわずかのことをあなた方に説いた。妬みを離れ、みなしていっしょに行きなさい。あなた方は罪を恐れることはない。(二〇)」
すべての王は、「そのようにします」と言って、偉大な聖仙を敬い、喜んで自分の国に帰った。バラタの雄牛よ。(二一)　(第百八十二章)

マールカンデーヤは語った。――
更にまた、バラモンの偉大さを私から聞きなさい。ヴァイニヤという名の王仙が、馬祀(アシュヴァメーダ)のために潔斎に入った。アトリ仙は報酬を求めて、彼のもとに行こうと企てたということだ。(一)彼はそれに固執しなかった。別の法(ダルマ)を考慮したからである。威光に満ちた彼は考えた末、森へ行くことに決めた。彼は妻と息子たちを呼んで告げた。(二)
「我々がこの上なく、災いのない、多くの果実を得ようというなら、すぐに森へ行くべきだ。その方がずっと優れている。(三)」
妻は最初の法のみに固執して、彼に答えた。
「偉大なヴァイニヤのもとに行き、多くの財物を求めなさい。祭主であるその王仙は、求めるあなたに財物をくれるでしょう。(四)梵仙よ、その多くの財を受け取って、従者や息子たちに分配してから、望みどおりの所へ行きなさい。これが、法を知る人々に説かれた最高の法なのです。(五)」
アトリは言った。
「妻よ、偉大なガウタマが私に告げた。ヴァイニヤは法と実利(アルタ)を実践し、真実の誓いをそな

えている。(六)しかし、そこに、私を憎むバラモンたちが住んでいる。ガウタマがそう言ったので、私はそこに行かないことに決めた。(七)そこで私が法と享楽(カーマ)と実利をそなえたすばらしい言葉を説いたとしても、彼らは曲解し、それを無益な言葉と言うであろう。(八)しかし知性に満ちた女よ、私はそこに行くであろう。お前の言ったことが私の気に入ったから。ヴァイニヤは私に、牛と多大の財産を与えるであろう。(九)」

マールカンデーヤは語った。――

苦行を積んだ彼はこのように告げると、速やかにヴァイニヤの祭場へ行った。アトリはその祭場に着くと、王を讃えた。(一〇)

「ヴァイニヤ王よ、あなたは君主であり、地上における第一の王です。聖者の群があなたを讃えます。あなた以外には法を知る者はおりません。(一一)」

そこで、苦行を積んだ聖仙(ガウタマ)は、怒って彼に言った。

「アトリよ、二度とそのように言ってはならぬ。あなたの知性は定まっていない。我々にとって、この世で、生類の主(造物主)である大インドラこそが第一人者である。(一二)」

するとアトリの方もガウタマに言った。

「インドラが生類の主であるように、彼も制定者(ヴィダートリ)である。あなたこそ迷妄により迷っている。あなたには知性はない。(一三)」

ガウタマは言った。

「私は知っている。私は迷っていない。そのように言おうとするあなたが迷っているのだ。彼と会って、幸運を望んで、あなたは彼を讃えるのだ。(一四)あなたは最高の法(ダルマ)を知らない。そしてその意図することを知らない。あなたは幼稚で愚かである。年甲斐もない。(一五)」

マールカンデーヤは語った。――

王の祭祀に集まった聖者(ムニ)たちが見ているところで二人が口論しているうちに、彼らはたずねた。

「この二人はどうしたのか。誰がこの二人をヴァイニヤの集会に入れたのか。いかなるわけで彼らは大声で叫びながら立っているのか。(一六―一七)」

最高に徳性あり、すべての法を知るカーシャパは、やって来て口論している二人に語りかけた。(一八)するとガウタマは、祭場にいる最高の聖者たちに告げた。

「バラモンの雄牛たちよ、私たち二人の論争点を聞いて下さい。ヴァイニヤが制定者であるとアトリは言うが、私は大いに疑問だと思います。(一九)」

それを聞くやいなや、偉大な聖者たちは、疑問を解決するために、法を知るサナトクマーラのもとに急いで走って行った。(二〇)その偉大な苦行者はありのままに彼らの言葉を聞いて、彼らに法と実利(アルタ)をそなえた言葉を返した。(二一)

サナトクマーラは言った。

「バラモンの力は王族の力と結びつき、王族の力はバラモンの力と結びつく。王は実に第一

の法であり、臣民の主君に他ならない。実に彼はシャクラ（インドラ）であり、シュクラ（悪魔の師）であり、配置者(ダートリ)であり、ブリハスパティ（神々の師）である。（二一）王は生類の主であり、君主(ヴィラート)であり、帝王(サムラート)であり、戦士(クシャトリヤ)であり、大地の主、人類の守護者である。（二二）王はこれらの呼称で讃えられるのに、誰が彼を敬わないでいられるか。（二三）王はまた第一原因であり、戦勝者、攻撃者である（中略）。聖仙たちは非法(アダルマ)を恐れ、王族に力を付与した。（二四―二五）天上において太陽は、その光輝により神々の闇を除去する。同様に、地上において王は、非法をすべて除去する。（二六）故に、教典の権威に示されているから、王は最も重要である。王が重要と言った側が勝ちだ。（二七）」

マールカンデーヤは語った。――

そこで気高い王は、勝った側に満足し、前に彼を讃えたアトリに、喜んで告げた。（二八）

「梵仙よ、あなたは私のことを、すべての人のうちで最上であり、すべての神に等しく、優れているとさえ述べたので、それ故、私はあなたに多くの多様な財物を与えよう。（二九）すばらしい衣装で飾られた美しい千人の女奴隷、一億の金貨、十バーラの黄金。バラモンよ、私はこれらのものを与えよう。あなたは一切知であると思うから。（三〇）」

気高いアトリは、それをすべて礼儀正しく受け取った。それから威光に満ちた大苦行者は家に帰った。（三一）そして自己を制御した彼は、喜んで、その財産を息子たちに与えてから、苦行をしようと決意して森に入った。（三二）（第百八十三章）／（第百八十四章略）

マヌと大洪水

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからパーンダヴァは、再びマールカンデーヤに告げた。

「ヴィヴァスヴァットの息子であるマヌの事績を私に語って下さい。（一）」

マールカンデーヤは語った。――

勇猛な王よ、ヴィヴァスヴァットの息子である最高の聖仙（マヌ）は、威光にあふれ、造物主(プラジャーパティ)に等しい輝きを持っていた。（二）この王は、威厳、威光、富貴、特に苦行にかけて、マヌは自分の父と祖父を凌駕していた。（三）彼は、バダリー・ヴィシャーラー（「大きな棗(なつめ)の木」、三・一四五・一〇参照）において、腕を上方に上げ、一本足で立ち、非常に激しい苦行を行じた。（四）頭を下にして、瞬き(まばた)をしないで、彼は激しい苦行を一万年間行なった。（五）

ある時、濡れた衣を着て編髪を結った彼が苦行を行なっていると、一匹の魚がヴィーリニー川の岸にやって来て、次のように言った。（六）

「主よ、私は小さな魚です。私は大きな魚を恐れます。誓戒固き人よ、私を他の魚から救って下さい。（七）特に力ある魚は弱い魚を食べるというのが、我々に定められた永遠の道なのです。（八）ですから、恐怖の大洪水に沈んだ私を特別に救って下さい。私はあなたに恩返し

をします。（九）」
ヴィヴァスヴァットの息子マヌは、魚の言葉を聞くと憐れみに満ち、自らその魚を手に取った。（一〇）マヌはその月光のように輝く魚を運んで水瓶の水の中に放った。（一一）王よ、その魚はこの上なく大事に育てられ、そこで成長した。マヌは息子のように、その魚に特別の愛情をそそいだ。（一二）
さて、長い間たって、その魚は非常に大きくなり、水瓶の水の中に入らなくなった。（一三）すると魚はマヌを見て言った。
「尊者よ、今はどうか私を他の場所に運んで下さい。（一四）」
そこで聖者マヌは、魚をその水瓶から取り出して、大きな池に運んで行った。（一五）マヌはそこに魚を放った。それから長い年月がたって、魚は更に成長した。（一六）その池は長さ二由旬で、幅は一由旬であったが、その池にも魚は入らなくなり、動くこともできなくなった。（一七）魚はマヌを見て再び言った。
「尊者よ、善き主人よ、私を海の王妃であるガンガー（ガンジス）に運んで下さい。父よ、もしよろしければ、私はそこに住みます。（一八）」
このように言われて、自己を制した不屈の聖者マヌは魚をガンガー川に運び、自らそれを放った。（一九）その魚はそこでもわずかの間に成長し、マヌを見て言った。（二〇）
「主人よ、私は大きくなったので、ガンガー川でも動くことができません。尊者よ、お願いです。私を早く海に連れて行って下さい。（二一）」

そこでマヌは、自ら魚をガンガーの水から取り上げて、海に連れて行き、そこに魚を放った。（二二）その魚は非常に大きかったが、マヌの心にとって、それを運ぶのは快く、接触も臭いも快かった。（二三）
マヌがその魚を海に放った時、魚は微笑して次のように告げた。（二四）
「尊者よ、あなたは何かにつけて、特別に私を守ってくれました。時が来たらあなたがなすべきことを申し上げますから、お聞きなさい。（二五）気高い尊者よ、遠からずこの地上のすべての動不動のものが帰滅するでしょう。（二六）諸世界の大帰滅の時が近づきました。ですから、今、あなたにとって最も有益なことをお知らせします。（二七）あらゆる種類の動不動のものにとって、最高に恐ろしい時がやって来ます。（二八）あなたは綱をつけた堅固な舟を造りなさい。大仙よ、そこに七仙（七名の聖者）とともに乗りなさい。（二九）私が前もって告げたすべての種子を、区分ごとによく保護して、その舟に乗せなさい。（三〇）聖者たちに愛される者よ、そして私を待ちなさい。私はやって来るでしょう。私は角を持っていますから、認識できるでしょう。苦行者よ。（三一）あなたはこのようにやって下さい。御機嫌よう。私は行きます。私の言葉を疑わないで下さい。主よ。（三二）」
「そのようにしよう」と彼は魚に答えた。両者は互いに別れの挨拶を交わしてから、思い思いにその場を去った。（三三）
大王よ、それからマヌは魚に言われた通りに、すべての種子を集めて、美しい舟で、波高い海に乗り出した。勇猛な人よ。（三四）王よ、それからマヌはあの魚のことを考えた。彼が

考えたことを知って、角のある魚は速やかにそこに来た。(三五) マヌは海中にその魚を見た。それは前に告げたような姿をして、角があり、山のようにそびえていた。(三六) マヌは綱の先を輪にして、魚の頭の上の角に固定した。(三七) 魚はその輪縄で縛られ、海上で、全速力で舟を引っぱった。(三八) 彼はその舟とともに海を渡った。海の波は踊るかのようであり、その水はうなるかのようであった。(三九) その舟は海上で、強風によって揺り動かされ、酔った浮気女のようにぐるぐるまわった。(四〇) 陸地も諸々の方角も見分けられなかった。空も天も一切は水におおわれていた。(四一)

バラタの雄牛よ、このように世界が混沌としている時、七仙とマヌと魚だけが認められた。(四二) そして非常に長年の間、海上で魚はその舟を怠ることなく曳いた。(四三) それから魚は、その舟をヒマーラヤの最高の峰まで曳いて行った。(四四) そこで魚は笑いながら、聖仙たちに穏やかに告げた。

「急いでこの舟をヒマーラヤの峰につなぎなさい。(四五)」

聖仙たちは魚の言葉を聞いて、急いでその舟をヒマーラヤの峰につないだ。(四六) そこでクンティーの息子よ、バラタの雄牛よ、そのヒマーラヤの最高の峰は、今もなお、「舟の係留」(ナウバンダ)と呼ばれているのだ。(四七)

その時、魚は集まった聖仙たちに告げた。

「私は造物主の梵天である。私より優れたものは見出されない。私は魚の姿をとって、あなた方をこの危険から解放した。(四八) マヌは神と阿修羅と人間を含むすべての生類を、そして動不動のすべての世界を創造するであろう。(四九) 激しい苦行により、彼に霊能が生ずるであろう。私の恩寵により、生類を創造するにあたり、彼が迷うことはないであろう。(五〇)」

魚はそのように告げると、あっという間に姿を消した。

ヴィヴァスヴァットの息子マヌは、自ら生類を創造しようと欲した。ところが生類をいかに創造するかと迷い、激しい苦行を行なった。(五一) マヌは激しい苦行を積んで、現に一切の生類を適切に創り始めた。(五二)

以上のように、私は魚に関する古伝承を語った。この一切の罪を除く物語を語った。(五三) 常にこのマヌの物語を始めから聞く人は、幸福になり、すべての目的を成就し、天界へ行くであろう。(五四)

(第百八十五章)

最悪の時代とユガの終末(一)

(一)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから礼儀正しいダルマ王ユディシティラは、再び高名なマールカンデーヤにたずねた。

「偉大なる聖者よ、あなたは幾千の宇宙紀の終わりを見てきた。そしてこの世には、あなた

のように長寿の者は誰もいない。最上者である偉大な梵天を除いては。(二)この世が空もなく、神も魔類もいない時、大帰滅の時、バラモンよ、あなただけが梵天に仕える。(三)そして大帰滅が終わり、祖父（梵天）が目覚める時、この世であなたのみが、梵天に創造される生類を見る。(四)梵天は諸方を風（空気）で満たして、それから水を捨ててから、四種（胎生、卵生、熱気から生じたもの、植物から生じたもの）の生類を適切に創造するのである。(五)最高のバラモンよ、あなたは世界の長上（グル）である全世界の祖父自身を、その神にのみ精神を集中することにより満足させた。(六)それ故、一切を終わらせる死や、身体を消滅させる老いは、梵天の恩寵により、あなたに入りこまない。梵仙よ。(七)太陽も火も風も月もなく、天も地も何も残らない時、(八)動不動の世界が滅び一つの海に帰す時、神や阿修羅の群が滅び、大蛇たちが滅びる時、(九)一切万物の主である、限りなく高邁な梵天は、蓮花の中で眠る。あなたのみがその梵天に仕える。(一〇)最高のバラモンよ、あなたは以上すべての過去のできごとを目撃しました。それ故、一切の原因を説く物語を聞きたいと思います。(一一)最高のバラモンよ、あなたのみが幾度も経験したから。常に全世界であなたに知られないことは何もありません。(一二)」

マールカンデーヤは語った。——

おお、自存者、古（いにしえ）のプルシャ（神人）、常住で不滅の者に敬礼して、あなたに語ろう。(一三)大きくて切れ長の眼をし、黄色い衣を着たこのジャナールダナ（ヴィシュヌ＝クリシュナ）は、創造者であり、種々相を創る者であり、一切を実現させるもの（梵天？）を創った者である。(一四)不可思議な存在であり、大なるもの（マハット）であり、驚異であり、最高の浄めるものであり、始めも終わりもないものであり、一切であり、不滅であり、不変である。(一五)この創造者は創られることなく、すべての力の原因である。このプルシャを知る者を、神々ですらも知らない。(一六)

最高の王よ、人中の虎よ。全世界の帰滅の後で、まず最初に、一切の驚異〔の創造〕が生じた。(一七)〔神々の〕四千年間がクリタ・ユガと呼ばれる。その薄明は四百年であり、薄暮も四百年である。(一八)その次の三千年がトレーター・ユガと呼ばれる。その薄明は三百年であり、薄暮も三百年である。(一九)またドゥヴァーパラ・ユガの長さは二千年である。その薄明は二百年であり、薄暮も二百年である。(二〇)そしてカリ・ユガは一千年間であると伝えられる。その薄明は百年であり、薄暮も百年である。薄明と薄暮は等しい長さであると考えよ。(二一)カリ・ユガが尽きると、再びクリタ・ユガが訪れる。以上の一万二千年が「ユガ」と呼ばれるものである。(二二)梵天の昼は一千ユガで終わるとされる。実に全宇宙は、すべからく梵天の住処の中に回帰する。人中の虎よ、それが世界の大帰滅であると、賢者らは知っている。(二三)

バラタの雄牛よ、千年間で終わる最後のユガが残り少なくなった時、すべての人々は一般に嘘つきになる。(二四)プリターの息子よ、その時期には、祭祀と布施と誓戒の代行者が現われる。(二五)そのユガが終わる時、バラモンがシュードラ（僕従）の仕事をし、シュードラが財産を獲得し、あるいは王族の義務（クシャトラダルマ）を仕事とする。(二六)カリ・ユガにおいては、バラモン

は祭祀とヴェーダ学習をやめ、団子と水を〔祖霊に供えることを〕やめ、どんな食物でも食べるようになるであろう。(二七) わが子よ、バラモンは念誦せず、シュードラが念誦に専念するであろう。世の中があべこべになったら、それは滅亡の前兆である。(二八) 多くの邪悪な蛮族の王が悪政により地上を統治し、偽言にふけるであろう。(二九) アーンドラ族、シャカ族、プリンダ族、ヤヴァナ族、カーンボージャ族、アウルニカ族、シュードラの王、アービーラなどの蛮族の王が……。(三〇)

その時期には、バラモンは誰も自己の義務によって生活しないであろう。王族も実業者も悪しき仕事をする。王よ。(三一) 人々は短命になり、力が弱まり、威光や勇武が衰え、身体が小さく、無気力で、めったに真実を語らなくなる。(三二) 地方はほとんど空になり、諸方は獣や猛獣に満ちる。ユガの終わりが来ると、梵行者たちは空しくなる。シュードラたちが「おい」と言い、バラモンたちが「旦那様」と呼びかける。(三三)

人中の虎よ、ユガの終わりには生き物が多くなる。すべての香りは悪臭となり、ものの味はおいしくなくなる。(三四) 王よ、ユガの終わりには、女たちは多産になり、背が低くなり、性行が悪くなり、口唇により情交するであろう。(三五) 王よ、ユガの終末には、地方には塔が林立し、四辻はジャッカル（または異本「死体」）に満ち、女たちは毛だらけになる（原文疑問）。(三六) また牝牛はわずかな乳しか出さなくなり、樹木はわずかな花と実しかつけず、多くの鴉が止まる。(三七) バラモンたちは、バラモン殺しの罪に汚れた、いわれもなく人を非難する王たちの〔贈物を〕受ける。(三八) 諸方は貪欲と迷妄に満ち、偽りの法の旗におおわれ、バラモンた

ちは施食を求めてそこで右往左往する。(三九) 家長たちは重税を恐れて盗人となり、あるいは隠者のふりをしたり、商いにより生活する。(四〇) その時、人々は偽って爪と毛をのばす。梵行者（ヴェーダ学生）たちは財物を貪り、不正に過ごす。(四一) 彼らは隠棲所において不適切に行動し、酒を飲み、師の妻と交わる。現世的なことを望み、自分の肉と血を増大させる。(四二) ユガの終末には、多くの異端者に満ち、他者に給される食物の美点を論ずるようになり、隠棲所は滅亡する。(四三)

またインドラ神は季節に応じた雨を降らさない。その時、すべての種子は正しく生長しない。その時は、非法の果実がこの上なくできる。(四四) また法（徳道）を守る者は短命になるであろう。いかなる法も存在しないからである。(四五) 人々は大概の場合、インチキの計量によって商品を売る。商人たちは多くの詐術を用いる。(四六) 敬虔な者が衰え、悪い者が栄える。法の力は失せ、非法が強力になろう。(四七) ユガの終末には、敬虔な人々は短命で貧困になる。そして無法な人々が長寿で繁栄する。(四八) 生類は法にもとる方法により行動する。わずかな資本により富者となり慢心する。(四九) 人々は詐術的なふるまいをし、大概の場合、密かに信頼によって託された財産を奪おうと企てる。(五〇) 人間を食う生物、鳥獣が、都市の園林や聖域で寝る。(五一) 七、八歳の少女が妊娠し、十か十二の男児が子供を生ませる。(五二) 人々はまた十六歳で白髪になる。人間の寿命は速やかに尽きる。(五三) ユガが終わる時、若者は老人のようにふるまい、老人は若者のようにふるまう。(五四) その時、女性は堕落し、密かに夫を騙す。不倫にふけり、召使や獣たちとも姦淫する。(五五)

その一千ユガの終わりになり、寿命の終わりが来る時、長年にわたる旱魃が生ずる。（五六）それから地上において、諸生物は気力を失い、飢え、ほとんど滅亡する。（五七）それから七つの燃え立つ太陽が、海や川におけるすべての水を呑み干す。（五八）木も草も、乾いたものも濡れたものも、すべてが灰燼に帰す。（五九）それから終末の火（サンヴァルタカ）が風とともに、先に諸々の太陽により干上がった世界を襲う。（六〇）それからその火は大地を裂いて地底界（ラサータラ）に入り、神や魔類や夜叉などに大恐怖を生じさせる。（六一）そしてそれは竜の世界を焼き、地下にあるすべてのものを即座に滅ぼす。（六二）それから不吉な風と終末の火は、二十由旬（ヨージャナ）の百千倍の範囲を焼き尽くす。（六三）燃え上がる世界の主は、神、阿修羅、ガンダルヴァ、夜叉、蛇、羅刹など、一切を焼く。（六四）

それから、象の群のような、稲妻の環に飾られた、不思議な外観をした大雲が空に湧き上がる。（六五）ある雲は青蓮のように黒ずみ、ある雲は白蓮に似て、ある雲は蓮糸のようで、ある雲は黄色である。（六六）あるものはウコンのような金色で、あるものは鴉の卵（カーカーンダカ）（植物名？）のような緑色である。あるものは紅蓮の花弁のような色である。あるものは朱の色である。（六七）あるものは大都市のような形をしている。あるものは象の群のようである。あるものはアイシャドーのような色である。あるものはマカラ（海豚、または鰐）のようである。それらの雲は稲妻に取り巻かれ、そびえ立っている。（六八）それから、それらの恐ろしい形状の雲は、すべて恐ろしい音を響かせ、天空をおおう。（六九）それらは、山や森や鉱脈をともなう全地上を満たし、豪雨で水びたしにする。（七〇）それから、雷鳴を轟かすそれらの恐ろしい雲は、

最高の神に命じられて、速やかに一切を水びたしにする。（七一）それらは大雨を降らせ、大地を満たし、非常におぞましい、恐ろしい不吉な火を消す。（七二）

その災禍の間、十二年間、それらの雲は偉大な主（マハートマン）に命じられて、大雨で水びたしにする。（七三）すると海は自己の境界を越え、山々は砕け、大地も砕ける。（七四）それらの雲はいたるところを経巡り、空をおおっているが、強風に打たれて突然消え失せる。（七五）それから、自存者（スヴァヤンブー）である神（梵天）は、原初の蓮花にやすらい、その恐ろしい風を飲んで眠る。（七六）

動不動の生物は滅亡し、神や阿修羅の群も滅び、夜叉や羅刹も滅し、人間も動植物も滅び、空もなく、一面に大海原となったその恐ろしい世界で、私は用心深く一人きりでただよっている。（七七―七八）私はこの恐ろしい一面の大海原でただよいつつ、何の生物も見ることなく、この上なく当惑している。（七九）そして非常に長いこと泳いで行って、私は疲れるが、注意深く探しても、どこにも避難所を見出せない。（八〇）

それからある時、私はその洪水の中に、非常に高くて、大きく広がったバニヤン樹を見た。（八一）その樹の広がった枝の中で、神々しい敷物をしいたソファーに、満月のような顔をし、満開の蓮花のように大きい眼をした童子が座っているのを見た。（八二―八三）王よ、私の驚きは大変なものであった。世界が帰滅した時、いったいどうしてこの幼児は寝ているのか。（八四）私は過去と現在と未来とを知っているが、苦行の力により考えても、その幼児のことが理解できなかった。（八五）彼は亜麻（アタシー）の花のような色をし、卍（まんじ）の印をつけ、実際に吉祥（ラクシュ

ーミ)のすみかのように見えた。(八六)

すると蓮花のような眼をし、卐の印をつけた、輝かしい童子は、私の耳に快い言葉を告げた。(八七)

「汝が疲れ、休息を願っていることを知っている。ブリグ族のマールカンデーヤよ、好きなだけここに座っていなさい。(八八) 最高の聖者(ムニ)よ、私の体内に入って座れ。おお、住むように定められているのだ。私は汝に恩寵を授ける。(八九)」

その童子にこう告げられた時、長い寿命、人間であることに対する厭離の情が私に生じた。(九〇) それからその童子は、突然その口を開けた。私は運命の力により、その口に導き入れられた。(九一) その口に突然入った私は、地方や都市に満ちた全地上を見た。(九二) ガンガーなど(中略)、多くの河川を、その偉大な存在の胎内で地上を経巡っているうちに見た。(九三―九六)

それから私は海獣(ヤーダス)の群が住む海を見た。宝の源であり、水の大きな器である海を。(九七) それから私は、月や太陽に照らされた天空を見た。それは火や太陽のように輝いて、ぎらぎらと燃えていた。そして私は、森に飾られた大地を見た。(九八) バラモンたちは多様な祭祀を行ない、王族(クシャトリヤ)たちはすべての種姓(ヴァルナ)を喜ばせることに従事していた。(九九) 実業者(ヴァイシャ)はふさわしく農業を行なっていた。従僕(ヴリシャラ)たちはバラモンに対する奉仕に専念していた。(一〇〇)

その偉大な存在の胎内を経巡っているうちに、私はヒマーラヤとヘーマクータ山を見た。(一〇一) また、ニシャダ、白銀(しろがね)におおわれたシュヴェータ、ガンダマーダナ山を見た。(一〇二)

マンダラ、大山ニーラ、黄金の山メールを見た。(一〇三) そしてまた、マヘーンドラ、最高の山ヴィンディヤ、マラヤ、パーリヤートラ山を見た。(一〇四) そしてその他多くの、一切の宝に飾られた山々を彼の胎内に見た。(一〇五) そしてその大地で、獅子、虎、猪、蛇、その他すべての動物を見ながら、私は歩きまわった。(一〇六)

彼の胎内に入った私は、諸方を歩きまわりながら、シャクラ(インドラ)などのすべての神の群を見た。(一〇七) そして、ガンダルヴァ、天女、夜叉、聖仙、ダイティヤとダーナヴァとカーレーヤ(魔物の種類)、シンヒカー(ラーフの母)の息子たち、その他の神の敵たちを見た。(一〇八) 私がこの世で見た動不動のすべてのものを、その偉大な存在の胎内で見た。果実を食べつつ、そのすべての世界を経巡りながら。(一〇九) 私は百年以上も彼の胎内にいたが、その体の終極を決して見出すことはなかった。(一一〇) いつも走りまわり、考えても、その偉大な存在の果てに達することはできなかった。(一一一)

そこで私は、まさにそのお方に礼儀正しく庇護を求めた。願いをかなえて下さる最高の神に、心と行為により庇護を求めた。(一一二) すると王よ、突然私は強風により、その偉大な存在の大きく開いた口から外に吐き出された。(一一三) 彼は同じバニヤン樹の枝に、全世界を支えながら座っていた。(一一四) 同じ童子のなりをして、卐の印をつけ、無量の威光を放つ彼を私は見た。(一一五) 卐の印をつけ、光り輝き、黄色い衣服を着たその童子は、微笑して私に告げた。(一一六)

「最高の聖者(ムニ)マールカンデーヤよ。汝は今、私の体に住んで、よく休息したか。私に言いな

さい。(二一七)」
するとその瞬間、私に新しい眼が生じた。それにより、私は真我（アートマン）が知性を得て、解放されるのを見た。(二一八) 彼の両足は、その足の裏は赤く、確固とし、美しく、柔らかい赤い指で飾られていた。(二一九) 私は頭を下げて平伏し、その両足を抱いて挨拶をした。そして、その無量の威力をもつ方の無限の力を見た。(二二〇) それから私は礼儀正しく合掌し、ようやくのことでそばに近づき、生類の本体（アートマン）である、蓮花の眼をした神を見た。(二二一)
私は合掌して敬礼し、彼に言った。
「神よ、私はあなたについて、そしてこの最高の幻力（マーヤー）について知りたいと思います。(二二二) 尊い神よ、私はあなたの口を通って体の中に入りました。そしてあなたの胎内で、全世界を残らず見ました。(二二三) 神よ、神々、魔類、羅刹、夜叉、ガンダルヴァ、竜、その他の動不動の世界があなたの胎内にあります。(二二四) 神よ、あなたの恩寵により、私があなたの体の中を絶えず急いで駆けまわっている間、私の記憶が失せることはありませんでした。(二二五) 蓮花の眼をした方よ、非の打ち所のない方よ、あなたは現に幼児でありながら、この全世界を呑みこんでおられる。どうしてか。おっしゃって下さい。(二二六) 完全無欠な方よ、どうして全世界があなたの体内にあるのか。無敵な方よ、あなたはどのくらいの期間、ここにとどまっておられるのか。(二二七) 神々の主よ、蓮弁の眼をした方よ、バラモン特有の好奇心により、あなたからありのままに詳しくお聞きしたいと思います。というのは、私の見たことは大そう不可思議なことですから。(二二八)」

私にそう言われて、その栄光ある神々の中の神、光輝に満ちた最高に雄弁な神は、私を慰撫しながら次のように告げた。(二二九)　(第百八十六章)

最高神の本性

神は告げた。
「バラモンよ、確かに神々といえども私を真実には知らない。しかし汝に対する愛情から、私がこの世界を創造した次第を語ろう。(一) 梵仙よ、汝は祖霊に献身している。そして私に帰依している。だから汝は直接に私を見ることができた。汝の梵行は偉大である。(二) 水はナーラと呼ばれていた。私がその呼称をつけた。水は常に私の住処（アヤナ）であるから、私はナーラーヤナと呼ばれる。(三) 私はナーラーヤナである。万物の源泉であり、永遠にして不滅である。万物を創造する者であり、また回収（壊破）する者である。最高のバラモンよ。(四) 私はヴィシュヌである。梵天（ブラフマー）である。神々の王シャクラ（インドラ、帝釈天）である。私はヴァイシュラヴァナ（毘沙門天）王である。死者の王ヤマ（閻魔）である。(五) 私はシヴァである。ソーマである。造物主カシャパである。私は配置者（ダートリ）である。制定者（ヴィダートリ）である。私は祭祀である。最高のバラモンよ。(六) 火は私の口である。地は両足である。月と太陽が両眼である。空と方位は身体である。風は私の意（マナス）に存する。(七) 私は多くの謝礼をともなう幾百の祭祀を行なう。ヴェーダを知る人々が祭場にいる私を崇拝する。(八) 地上における王族（クシャトリヤ）の最上者、王たちは、

天界を望み私を崇拝する。同様に、実業者たちも、天界を得たいと望み私を崇拝する。(九)四海に囲まれ、メール山とマンダラ山に飾られたこの大地を、私はシェーシャ竜となって支える。(一〇)バラモンよ、かつて私は猪の姿をとって、水に沈みつつある世界を力まかせに持ち上げた。(一一)最高のバラモンよ、私は牝馬の顔をした火(海中火)となって、波立つ水を呑み、また吐き出す。(一二)バラモンは私の口である。王族は両腕である。実業者は私の両腿である。従僕は私の両足である。その力に応じて、順次、以上のように配される。(一三)これらの『リグ・ヴェーダ』、『サーマ・ヴェーダ』、『ヤジュル・ヴェーダ』、『アタルヴァ・ヴェーダ』は私から現われ、他ならぬ私に入る。(一四)苦行者たちは寂静に専念し、自制し、解脱を求める。欲望と怒りと憎しみを離れ、執着なく、汚れを離れている。(一五)善性に立ち、我執なく、常に真我に関することに通じている。これらのバラモンは、常に私のことのみを考えて奉仕している。(一六)私は世界を滅ぼす(サンヴァルタカ)光(焔火)であり、ヤマであり、太陽であり、風である。(一七)空に星々の形で見えるもの、それらは私の姿であると知れ。最高のバラモンよ。(一八)すべての宝の鉱脈、海、四方位は、私の衣服、寝台、住処であると知れ。(一九)欲望、怒り、喜悦、恐怖、迷妄、それらはすべて他ならぬ私の相であると知れ。最高の者よ。(二〇)約束を守ること、布施、激しい苦行、生類を害さないことなどの善行を行なって人々が得るところも同様である。(二一)生物は私の定めたあり方により、私の体内をさまよう。彼らは私に支配された知性をもって行動し、自由意志で行動することはできない。(二二)

正しくヴェーダを学び、種々の祭祀を行なう、寂静の心をして、怒りを克服したバラモンたちは、大きな果報を得る。(二三)賢者であっても悪業をなして、貪欲に支配され、卑しく、気高くなく、自制しない人々によっては、それは得られない。(二四)善業の結果得られる大きな果報、私をその果報であると知れ。迷った者たちには到達されがたく、ヨーガによって達することのできる道である果報……。(二五)最高の者よ、法が衰え、非法が栄える度に、私は自身を現わすのである。(二六)神々にも殺されない、殺害を好む魔物たちや、恐ろしい羅刹たちが、この世に現われる時、私は人間の体に入り、善行の人々の家に生まれ、彼らをすべて鎮圧するであろう。(二七―二八)

神々、人間、ガンダルヴァ、蛇、羅刹、及び不動の生物を創り出してから、私は自己の幻力によってそれらを回収する(生滅させる)。(二九)行為の時が来ると、私は再び体を持つことを考え、人間の体に入って、道徳の規範を保つために自身を創造する。(三〇)私の色はクリタ・ユガには白色である。トレーター・ユガには黄色である。ドゥヴァーパラ・ユガになると赤色である。カリ・ユガには黒色である。(三一)その時期には、非法が四分の三を占める。終末の時期になると、私は非常に恐ろしいカーラ(時間、破壊神)となって、単独で動不動の三界すべてを帰滅させる。(三二)

私は三界をまたぐ者であり、一切の本性であり、全世界に幸福をもたらす者であり、最上者であり、遍在者であり、無限であり、フリシーケーシャ(感官の制御者)であり、大股で闊歩する者である。(三三)私のみが時輪を転じる。私は形なきものである。一切万物を鎮静する

ものであり、全世界の利益に努力する。(三四)
　最高の聖者よ、このように私の本性（アートマン）はまさしく万物に入りこんでいる。しかも誰も私を知らない。(三五) バラモンよ、汝が私の中で何か苦しみを感じたとしても、それは、すべて汝の幸福を増し、至福をもたらすものである。欠陥のないものよ。(三六) そして、その世界において汝が見た動不動のものは何でも、すべからく私の本性が〔個々のものとして〕定められたものである。最高の聖者よ。(三七) 全世界の祖父（梵天）は、私の半身である。私はナーラーヤナであり、法螺貝と円盤と棍棒を持つ。(三八) 梵仙よ、一千ユガが巡る間、宇宙の本性であり全世界の祖父である私は眠る。(三九)
　このようにして、梵天が目覚めないうちは、私はすべての時にここにいる。童子ではないのだが童子の姿をして。最高の聖者よ。(四〇) 梵天の姿をとった私は幾度も満足して、汝にこの恩寵を与える。梵仙の群に讃えられた者よ。(四一) 一切が一面の海に帰し、動不動のものが滅したのを見て、汝は恐怖にかられた。私はそれを知り、汝に世界を見せた。(四二) 汝が私の体内に入った時、全世界を見て汝は驚き、理解しなかった。(四三) 梵仙よ、そこで私は急いであなたを口から出した。そして私の本性は神々や阿修羅たちにも理解されがたいが、私はそれを汝に語った。(四四) 大苦行を積んだ尊い梵天が目覚めないうちに、梵仙よ、汝はここで安心して幸せに暮らしなさい。(四五) 全世界の祖父である彼が目覚めたら、私は一体となり、身体から創造するであろう。(四六) 虚空を、大地を、光（火）を、風を、水を、そしてその他、世界に存する動不動のものを。最高のバラモンよ。(四七)」

　マールカンデーヤは語った。──
わが子よ、その最高に驚異的な神はこのように告げて消え失せた。そして私は、多彩であり多様に造られたこれらの生類を見た。(四八)
　王よ、あのユガの終末が訪れた時、私は以上のような驚嘆すべきことを見た。バラタ族の長よ。一切の法（ダルマ）を守る人々の最上者よ。(四九) かつて私が見た蓮花のような眼の神は、あなたの縁者のジャナールダナ（クリシュナ）である。(五〇) 彼が恩寵を授けてくれたので、記憶と長寿は私から失われず、私は自由意志で死ぬことができる。クンティーの息子よ。(五一) まさにあのヴリシュニ族のクリシュナは、古（いにしえ）の神人（プルシャ）であり、遍在する主であり、ハリであり、その本性は不可思議で、戯れるかのようであり、強力である。(五二) このサートヴアタは配置者であり、制定者であり、破壊者である。卍（まんじ）の印が胸にある。ゴーヴィンダである。造物主（プラジャーパティ）の主たる神である。(五三)
　このヴリシュニ族の虎を見て、私に記憶がもどった。彼は黄色い衣をまとう神ヴィシュヌであり、原初の神であり、不生である。神人である。(五四) マーダヴァであり、一切万物の父であり母である。クル族の雄牛よ、守護者である彼に庇護を求めよ。(五五)

（第百八十七章）

最悪の時代とユガの終末（二）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そのように告げられたプリターの息子たちと、人中の雄牛である双子は、ドラウパディーとともに、ジャナールダナ（クリシュナ）に敬礼した。（一）作法通りに敬意を表された彼は、非常に優しい声で、尊敬に価する彼らを慰撫した。（二）

ユディシティラは偉大な聖者マールカンデーヤに、彼の帝国における世界の行く末について再びたずねた。（三）

「最高に雄弁なブリグ族の聖者よ。我々はユガの始めに起こった驚異的な出来事、帰滅と創造とをあなたから聞きました。（四）ところで私はこのカリ・ユガ（暗黒時代）にも興味があります。法（ダルマ）が混乱する時、その他のものはどうなるか。（五）ユガの終末において、人間はいかなる精力を持つか。いかなる食物と娯楽を持つか。どのくらいの寿命を持ち、いかなる衣服を着るか。（六）どのような帰結に達して、再びクリタ（黄金時代）が来るのか。聖者よ、詳細にお告げ下さい。あなたは多彩なことを話されますから。（七）」

そう言われて、最高の聖者は再び語った。ヴリシュニ族の虎（クリシュナ）と、パーンダヴァたちとを楽しませつつ。（八）

マールカンデーヤは語った。――

暗黒時代になって、すべての世界のものたちに将来どのようなことが起きるかお話しするから、お聞きなさい。（九）

かつてクリタにおいては、法（ダルマ）は四足をそなえ完全で、欺瞞なく、障害を離れていて、人々の間において、雄牛のように強力に確立していた。（一〇）トレーター（第二のユガ）においては、非法のために一本の足が切られ、法は三本の足により確立している。ドゥヴァーパラ（第三のユガ）においては、法は非法と半々に混じる。（一一）今や、非法が四分の三になり、諸世界を圧倒している。一方、法は四分の一になり、人々につき従っている。（一二）人間の寿命、精力、知性、体力、威光も、ユガごとに減少すると知りなさい。（一三）ユディシティラよ、（カリには）王族とバラモンと実業者（ヴァイシャ）と従僕（シュードラ）は偽善者であり、欺瞞により法を行なうであろう。（一四）この世で賢者であると自慢する人々は、真実を捨てるであろう。真実を滅ぼすことにより、彼らの寿命はわずかになるであろう。（一五）寿命が短くなることにより、彼らは学問を学ぶことができなくなるであろう。学問のない人々は、無知であるから、貪欲に支配されるであろう。（一六）人々はもっぱら貪欲と怒りにかられ、迷い、享楽にふけり、敵意によって束縛され、お互いを殺すことを望むようになるであろう。（一七）バラモンと王族と実業者はお互いに混血するであろう。彼らは修養（タパス）と真実を捨て、従僕に等しくなるであろう。（一八）下層の者が中間の階層となり、中間層が下層に帰するであろう。ユガの終末が近づくと、世界はこのようになるであろう。（一九）ユガの終末には、麻が最上の衣服となり、最低

の穀物（コードラヴァ）が最上の穀物になるであろう。男にとって妻が敵となるであろう。（二〇）ユガの終末には、人々は魚を食べて生活し、牛がいなくなるので、山羊と羊の乳を搾るであろう。（二一）人々はお互いに盗み合い殺し合うであろう。ユガの終末には、人々は聖句を唱えず、無神論者で、盗人となろう。（二二）ユガの終末には、人々は川岸に鋤で草（の種）をまくであろう。しかもその草はわずかな実しかつけないであろう。（二三）祖霊祭や神々の供養に対し常に誓戒を保つ人々も、貪欲にかられ、お互いに食いものにし合うであろう。（二四）ユガの終末には、父が息子を、息子が父を食いものにするであろう。常軌を逸したものが享受されるようになろう。（二五）バラモンたちはヴェーダ聖典を非難し、誓戒を行なわないだろう。彼らは論争に惑わされて、祭祀を行なうことなく、護摩も行なわないだろう。（二六）人々は低地（湿地）で耕作を行なうであろう。頸木に乳牛をつなぐであろう。一歳の仔牛に荷を運ばせるであろう。（二七）息子は父を殺し、父は息子を殺すが、悔いることなく、多弁で（自慢し）、非難されることもない。（二八）全世界は野蛮になり、儀式も祭祀もなくなり、喜びもなく、祝祭もなくなるであろう。（二九）人々は一般に、貧者や縁者や寡婦たちの財産を奪うであろう。（三〇）精力や体力が弱まり、強情で、貪欲と迷妄に支配され、邪悪な者たちの名ばかりの布施に満足し、悪しき行為によって取得して資産を蓄積する。（三一）愚かなのに賢者とうぬぼれる王たちは、邪悪な意図を持ち、相互に相手を殺そうと努力し、攻撃し合う。ユガの終末には、王族たちは世界の棘（危険物）となる。（三二）ユガの終末には、彼らは守護せず、貪欲で、高慢で我執に満ち、刑罰のみを好むようになろう。（三三）彼らは無慈悲にも、嘆き悲

しむ善人たちの妻を絶えず襲い、財産を自分のものにするだろう。（三四）ユガの終末になると、誰も娘をもらいたいと（親に）求婚しない。娘が求婚者に与えられることもない。人々は勝手に強奪するであろう。（三五）ユガの終末になると、満ち足りることなく、心迷い、あらゆる手段を用いて他人の財物を奪うであろう。（三六）ユガの終末になると、全世界は野蛮な状態になるであろう。一方の手が他方の手からものを奪うであろう。（三七）世間で賢者と自慢する人々は、真実を滅ぼすであろう。老人が若者のように考え、若者が老人のように考えるだろう。（三八）臆病者が勇士だと考え、勇士が臆病のように嘆く。ユガの終末になると、人々はお互いに信頼し合わないであろう。（三九）全世界は貪欲と迷妄にかられ、同じものを食べる。非法が大いに栄え、法は栄えない。（四〇）

バラモン、王族、実業者たちは消失する。ユガの終末には、世界は一つの種姓のみになろう。（四一）父は息子を容赦せず、息子は父を容赦しない。いかなる妻も夫に仕えないであろう。（四二）ユガの終末になると、人々は、大麦や小麦を食べる民のいる地方に避難するであろう。（四三）王よ、ユガの終末になると、男女は自分勝手にふるまい（異本による）、お互いに容赦しないであろう。（四四）ユディシティラよ、全世界は野蛮な状態になるであろう。人々は祖霊祭により祖霊たちを満足させないであろう。（四五）何人も何人の弟子でなく、何人も何人の師ではない。その時、世界は暗黒に呑み込まれるであろう。（四六）ユガの終末になると、寿命はせいぜい十六歳になり、人々はそれから息をひきとるであろう。（四七）娘は五、六歳で子を産むだろう。男は七、八歳で子を産ませるであろう。（四八）ユガの終末には、妻は夫

に対し、夫は妻に対し、満足しないであろう。(四九) 人々はわずかな財産しか持たず、偽りの宗教上の標を持ち、傷害がはびこることであろう。ユガの終末には、何人も誰かに布施しないであろう。(五〇) ユガの終末には、地方には塔が林立し、四辻はジャッカルに満ち、女たちは毛だらけになる（三・一八六・三六参照）。(五一)

終末には、人々は野蛮で、残酷で、あらゆるものを食い、すべての行為において無慈悲であろう。この点、疑いない。(五二) ユガの終末になると、いかなる人も、生きることにがつがつし、売買に際し、誰彼なしに人を騙すであろう。(五三) ユガの終末になると、人々は正しい知識を知らずに祭式を行なうであろう。勝手気ままにふるまうだろう。(五四) ユガの終末が来ると、すべての人々は本性よりして残酷な行為をし、お互いに不信を抱くであろう。(五五) 人々は心を痛めることなく庭園や樹々を破壊するであろう。この世における諸生物の生命は滅する。(五六) 貪欲に支配された連中が地上をうろつき、バラモンとなり、バラモンの財産を享受するであろう。(五七) 再生族（上位三階級、特にバラモン）は従僕に苦しめられ、嘆声を発し、恐怖にかられ、救護者を得られず、地上をさまよう。(五八) 人々が残酷で、殺生し、生類を害する時、このユガは帰滅するであろう。(五九) 再生族たちは恐れて逃げまどい、川や山や平坦でない土地に避難した。(六〇) バラモンたちは盗賊に苦しめられ、鴉のようになり、いつも悪王たちに、重税により苦しめられる。(六一) 恐ろしいユガの終末には、人々は平静さを捨て、従僕の従者となり、非行をなすであろう。(六二) 従僕たちが法を説き、バラモンたちが奉仕者になり、従僕たちを権威として頼り、彼らの聴聞者になるであろう。(六三)

この世はすっかりさかさまになるであろう。人々は納骨堂を崇拝し、神々を捨てるであろう。ユガの終末には、従僕は再生族たちに仕えないだろう。(六四) ユガの終末には、大仙の隠棲所やバラモンの住処においても、神域や聖域や竜宮においても、地上は納骨堂だらけになり、神殿で飾られることはないであろう。以上がユガの終末の特徴である。(六五―六六) 人々が常に恐ろしく、法を欠き、肉を食べ、酒を飲むならば、ユガは帰滅するであろう。(六七) 偉大な王よ、花が花の中に、果実が果実の中に宿って生ずる時に、ユガは帰滅するであろう。(六八) ユガが滅びる時、雨神（または「雲」）は季節はずれの雨を降らし、人々の祭式は不規則になり、従僕がバラモンに背くであろう。(六九) それからすぐに、地上は蛮族で満ちあふれるであろう。バラモンたちは重税を恐れ、十方に逃亡するであろう。(七〇) 諸地方は一様に、旱魃に悩まされ、人々は果実や根を食べ、隠棲所を襲うであろう。(七一)

世界はこのように混乱し、規範がなくなるであろう。弟子たちは不快なことを行ない、教えに従わなくなるであろう。(七二) それから、学匠は貧乏な生活をするであろう。友人や縁者や親類たちは、財物を求めて去るであろう。ユガの終末には、一切万物は無に帰すであろう。(七三) すべての方角は燃え上がり、星宿は動揺し、星々は逆行し、風は荒れ狂い、多くの流星があり、大恐怖を示すであろう。(七四) 太陽は他の六つの太陽とともに熱するであろう。いたるところ大音響が起こり、諸方は燃え上がる。太陽は出没に際しラーフに隠される。(七五) ユガの終末になると、千眼者（インドラ）は時ならぬ雨を降らせ、穀物は生長しないであろう。(七六) その時、女性は絶えず酷薄に語り、乱暴で、よく泣きわめき、夫の言葉に従わないで

あろう。(七七)ユガの終末には、息子が父母を殺すであろう。妻は息子に依存して、夫を殺すであろう。(七八)大王よ、ラーフはその時期でないのに太陽に近づくであろう。ユガの終末には、火はいたるところで燃え上がるであろう。(七九)その時、旅人は水と食物とを求めても得られず、宿る場所も得られず、追い払われ、路傍で眠る。(八〇)ユガの終末になると、凶兆を示す鴉、竜（蛇）、鳥獣、魚たちは、荒々しい声を発するであろう。(八一)ユガの終末になると、人々は友人や縁者や一族や従者たちをも捨てるであろう。(八二)ユガの終末になると、人々は次第に、諸国、諸地域、諸都市、城砦に避難するであろう。(八三)人々はその時、ああ父よ、ああ息子よと恐ろしい声でお互いに叫びながら、地上を歩きまわるであろう。(八四)

それから、ユガの終末に大混乱が生じた後、バラモンをはじめとする世界が次第に生ずるであろう。(八五)それから時が過ぎて、自ずと運命は好転し、再び世界の繁栄が訪れる。(八六)月、太陽、鬼宿（ティシュヤ）、木星が同じ宮で合する時、クリタ・ユガ（黄金時代）が訪れるであろう。(八七)雨神（または「雲」）は季節にふさわしく雨を降らせ、星宿は吉祥で、星々は幸先よく正しく運行する。安寧、多くの食物、無病、息災があるであろう。(八八)カルキ・ヴィシュヌヤシャスという、強力で知性と勇猛さに満ちたバラモンが、時間（カーラ）にかりたてられて出現するであろう。(八九)彼はサンバラという村で清らかなバラモンの家に生まれる。彼が心で考えると、すべての乗物、武器、戦士、刀剣、鎧が彼の前に現われる。(九〇)彼は法（ダルマ）により勝利し、王となり、転輪王となるであろう。彼はこの混乱した世界を平安にするであろう。(九一)この

そびえ立ち燃え上がる高邁な知性のバラモンは帰滅を終わらせる。彼は一切の破壊〔者〕であり、ユガを回転させる者である。(九二)そのバラモンはバラモンたちに取り囲まれ、いたるところで一切の蛮族の群を滅ぼすであろう。(九三)

（第百八十八章）

マールカンデーヤは語った。——

それから彼（カルキ）は、地上から盗賊を一掃し、馬祀（アシュヴァメーダ）の大祭において、この地上を作法通り、バラモンたちに引き渡すであろう。(一)彼は自存者（梵天）に定められた聖なる規範を確立した後、清らかな名声を得、清らかな行為をし、老いた時、森に引退するであろう。(二)世界中に住む人々は彼の性行に倣うであろう。バラモンたちにより盗賊が滅ぼされた時、平安になるであろう。(三)バラモンの虎であるカルキは、征服した国々に黒鹿の皮と槍と三叉戟と種々の武器を置いて、優れたバラモンたちに讃えられ、また最高のバラモンたちに敬意を表しつつ、常に盗賊（ダスユ）を殺すことに専念し、地上を遍歴するであろう。(四―五)「ああ父よ、ああ息子よ」と、種々の非常に恐ろしい言葉を叫ぶ盗賊たちを全滅させるであろう。(六)

それから、クリタ・ユガ（黄金時代）が訪れる時、非法（アダルマ）は滅び、法（ダルマ）は増大し、人々は祭式を正しく行なうであろう。(七)クリタ・ユガには、遊園、聖域（チャイティヤ）、池、井戸、種々の祭式が復活するであろう。(八)バラモンたちは善良で、隠者たちは苦行にいそしみ、異教徒に満ちていた隠棲所は正常にもどり、国民も真実を守る。(九)まかれたすべての種は生長する。王中の王

よ、すべての季節にすべての穀物が生ずるであろう。(一〇)人々は布施や誓戒や戒行に専念する。バラモンたちは念誦の祭祀に専念し、法を願い、喜びに満ちる。王たちは法によりこの大地を守護するであろう。(一一)クリタ・ユガには、実業者(ヴァイシャ)たちは職業に専念するであろう。バラモンたちは六種の行為(ヴェーダ学習、祭祀など)に専念し、王族(クシャトリヤ)たちは人民の守護に専念する。(一二)従僕(シュードラ)たちは他の三種姓(ヴァルナ)に奉仕することに専念する。

以上、クリタ・ユガ、トレーター・ユガ、ドゥヴァーパラ・ユガ、そして最後のユガ(カリ)における法をあなたに説いた。(一三)パーンダヴァよ、ユガの列挙は全世界の人に知られている。聖仙に讃えられた、ヴァーユ(風神)に説かれたプラーナ(古伝承)を想起して、私は過去と未来をあなたにすべて告げた。(一四)私は長く生きて来たから、このように幾度も輪廻の道を見たり経験したりした。私はそれらをあなたに語った。(一五)

不滅の者よ、更にまた、弟たちとともに、法に関する疑問を解くために、私の次の言葉を聞きなさい。(一六)法を守る人々のうちの最高者よ、あなたは常に法に心を結びつけるべきだ。というのは、法を性とする王は、現世と来世において幸せに楽しく過ごせるから。(一七)非の打ち所のない者よ、私があなたに語る清浄な言葉を聞きなさい。決してバラモンを侮辱してはならない。怒ったバラモンは、誓言により全世界の人々を殺すであろう。(一八)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

聡明で輝きに満ちた、クル族の最高者である王は、マールカンデーヤの言葉を聞くと、最

高の言葉を述べた。(一九)

「聖者よ、私が臣民を守護している間、いかなる法(ダルマ)に立脚すべきか。またどのように行動したら、自分の法から逸脱しないか。(二〇)」

マールカンデーヤは語った。――

一切万物に対し哀れみを抱き、有益で愛情あり、悪意なく、自分の子供のように臣民を守ることに勤しみ、法を実践し非法を捨て、祖先と神々を供養せよ。(二一)あなたが不注意からしたことを、正しい布施により償いなさい。慢心を捨て、常に謙虚であれ。(二二)すべての地上を征服し、喜びに満ち、幸福であれ。以上、過去と未来の法があなたに説かれた。(二三)

この地上には、過去未来のものであなたが知らないものは何もない。それ故、わが子よ、このように心を悩ます必要はない。(二四)勇者よ、この時間(カーラ)は一切の神々にも存する。わが子よ、実に生類は時間にかりたてられて迷う。(二五)非の打ち所のないものよ、私の言ったことを疑ってはならぬ。この言葉をあまりにも疑えば、あなたの法は損なわれるであろう。(二六)バラタの雄牛よ、あなたはクル族の名高い家系に生まれた。行為と心と言葉により、以上すべてを実行せよ。(二七)

ユディシティラは言った。

「最高のバラモンよ、あなたが告げた言葉は耳に快いものです。主よ、私は努力して、あなたの教え通りにいたします。(二八)最高のバラモンよ、私には貪欲も恐怖も妬みもありません。主よ、あなたが私に言われたすべてを実行いたします。(二九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

偉大なユディシティラの言葉を聞いて、パーンダヴァたちとクリシュナは歓喜した。(三〇)そしてまた、叡知あるマールカンデーヤのすばらしい言葉を聞いて歓喜した。古伝承(プラーナ)を聞いて驚嘆したものである。(三一)　(第百八十九章)

蛙の奥方

ユディシティラは再びマールカンデーヤに、「バラモンの偉大さをお話し下さい」と告げた。(一)そこでマールカンデーヤは語った。(二)――

アヨーディヤー市に、イクシュヴァークの家系に生まれた、パリクシットという王がいた。ある日、彼は狩に出かけた。(三)彼がただ一騎で鹿を追いかけているうちに、鹿は彼を遠方に連れて行った。(四)さて、王は途中で疲れ、飢えと渇きに悩まされたが、あるところに青い森を見て、そこに入って行った。(五)そしてその森の中に心地よい池を見て、馬とともにそこに飛び込んだ。(六)彼は元気をとりもどし、馬の前に蓮の繊維を置き、蓮池の岸に座った。(七)それから横になった彼は、甘美な歌声を聞いた。(八)それを聞いて彼は考えこんだ。

「ここには人跡は認められない。あれは誰の歌声であろうか。(九)」

その時彼は、最高に美しい姿の娘が花を摘みながら歌を歌っているのを見た。(一〇)彼女は王の近くに歩いて来た。(一一)王は彼女にたずねた。

「美しい女よ、あなたは誰の妻か。(一二)」

彼女は「私は処女(むすめ)です」と答えた。(一三)王は彼女に言った。

「私はあなたが欲しい。(一四)」

すると娘は答えた。

「約束をして下さればあなたのものになります。さもなければだめです。(一五)」

「その約束とは何か」と王はたずねた。(一六)すると娘は言った。

「私に水を見せてはなりませぬ。(一七)」

王は「承知した」と答え、彼女と交わってからいっしょに座っていた。(一八)

王がそこに座っている間に、軍隊がその足跡を追ってやって来た。そして王を見つけ、取り巻いて立った。(一九)王はすっかり元気になり、彼女とぴったり寄り添って、輿(こし)に乗って帰って行った。彼は自分の都に着くと、密かに彼女とともに愉しんで過ごし、他の何ものをも見なかった。(二〇)

ある日、宰相が王のそばに近くに仕える女たちに、「ここで何か必要なものがあるか」とたずねた。(二一)すると女たちは言った。

「前例のないことのように思われますが、ここには水を運べません。(二二)」
そこで大臣は水のない森を造らせて、王に告げた。
「これは水のないすばらしい森です。どうぞここで楽しんで下さい。(二三)」
王は彼の言葉に従い、かの王妃とともにその森に入った。
ある日、王はその美しい森で、王妃とともに散策していた。彼は飢えと渇きに苦しみ、疲れたが、非常に大きいアティムクタ（蔓草の一種）のあずまやを見た。(二四) 王は王妃とともにそこに入り、漆喰で念入りに塗りかためた、清浄な水に満ちた池を見出した。(二五) それを見るやいなや、彼は王妃とともにその岸に立った。(二六) そして王は王妃に「さあ、池の水の中に入りなさい」と言った。(二七) 彼女は王の言葉を聞くと、池に降りて沈み、再び上がってこなかった。(二八) 王は彼女を探したが、見つからなかった。(二九) 池を空にさせたところ、穴の入口に蛙を見て、怒った彼は命令を出した。
「すべての蛙を殺せ。私に何かを望む者は、死んだ蛙を贈り物にもって来い」と。(三〇)
こうしてすべての方角で恐ろしい蛙の殺戮が行なわれたので、蛙たちは恐怖にかられた。恐れた彼らは蛙の王に一部始終を報告した。(三一) そこで蛙の王は苦行者の身なりをして、王のもとに行った。(三二) 彼は近づいて王に告げた。
「王よ、怒りにかられてはなりませぬ。お願いです。罪もない蛙たちを殺してはいけません。(三三) これについて二つの詩節があります。
蛙を殺してはならぬ。不滅のものよ、怒りを抑えよ。無知な人々の豊かな富は消耗する。

(三四)
彼らに会っても怒りを抑えると誓いなさい。あなたは非法（アダルマ）を行なってはいけない。蛙たちを殺して何になるのか。(三五)」
最愛の妻を失って悲嘆に暮れている王は彼に言った。
「私は我慢できない。蛙たちを殺すぞ。私の愛しい妻はあの邪悪な連中に食われたのだ。何としてでも蛙を殺さねばならぬ。賢者よ、私を止めてくれるな。(三六)」
蛙は王の言葉を聞くと、心を痛めて言った。
「王様、お許し下さい。私はアーユという名の蛙の王です。彼女は私の娘で、スショーバナーというものです。これが彼女の悪い癖なのです。以前にも多くの王が彼女に騙されました。(三七)」
王は彼に「私は彼女が必要だ。彼女を私に下さい」と言った。(三八) そこで父親は彼に娘を与え、彼女に、「この王様にお仕えしろ」と命じた。(三九) そして彼は娘に告げた。
「お前は王たちを騙したから、嘘をついた報いにより、お前の子供たちは敬虔なものにならないであろう。(四〇)」
王は彼女との悦楽に心を奪われていたので、彼女を得て、三界の主権を得たかのように喜び、嬉し涙で声をつまらせ、平伏して敬意を表し、蛙の王に「有難うございます」と言った。(四一) 蛙の王は婿に別れを告げて、引き返して行った。(四二)
それからしばらくして、王と妃との間に三人の王子が生まれた。シャラとダラとバラとで

ある。やがて父親は、彼らのうちの長子のシャラを即位させ、苦行に専心し、森に行った。（四三）

さてある時、シャラは狩に出かけた。彼は鹿を見つけて、戦車でその後を追った。（四四）そして御者に、「もっと速く行け」と命じた。（四五）そう言われて、御者は王に答えた。

「そのような望みはやめなさい。あなたはあの鹿をつかまえられません。仮にあなたの戦車に二頭のヴァーミヤ（聖仙ヴァーマデーヴァの馬）をつないだとしても。（四六）」

すると王は御者に命じた。

「ヴァーミヤについて私に教えろ。さもなければお前を殺す。（四七）」

御者はそう言われて、王を恐れ、またヴァーマデーヴァの呪いを恐れたが、王に告げた。

「ヴァーミヤはヴァーマデーヴァの馬で、思考のように駿足です。（四八）」

彼がそう言うと、王は「ヴァーマデーヴァの隠棲所へ行け」と彼に命じた。（四九）

王はヴァーマデーヴァの隠棲所に行き、その聖仙に言った。

「私は鹿を射たが、逃げられてしまいました。それをつかまえたいのです。私に二頭のヴァーミヤを下さい。（五〇）」

聖仙は彼に答えた。

「私はあなたに二頭のヴァーミヤを渡しましょう。しかし用がすんだら、すぐに私に返して下さい。（五一）」

王は二頭の馬を受け取り、聖仙に別れを告げ、ヴァーミヤをつないだ戦車で鹿を追った。

車で行きながら御者に言った。

「この二頭の馬は宝石のようだ。バラモンにはふさわしくない。ヴァーマデーヴァに返すべきではない。（五二）」

そう言ってから、鹿を捕えて、自分の都に帰り、二頭の馬を宮中に止め置いた。（五三）

さて、聖仙は考えた。

「あの若い王は、見事な馬車を得て喜んでいる。彼は私にそれを返さない。ああ、何たることか。（五四）」

彼は決意して、満一カ月たった時、弟子に言った。

「アートレーヤよ、行って王に告げなさい。『もし用がすんだら、先生の二頭のヴァーミヤを返して下さい』と。（五五）」

彼は出かけて行って、そのように王に告げた。（五六）王は彼に答えた。

「これは王族の乗物である。バラモンはこのような宝物にはふさわしくない。バラモンにどうして馬が必要か。どうぞお帰り下さい。（五七）」

彼は帰って、師にそのように告げた。（五八）ヴァーマデーヴァはその不快な言葉を聞いて、怒りにかられ、自ら王のところへ行って、馬を返すように迫った。しかし王は返さなかった。（五九）ヴァーマデーヴァは言った。

「王よ、私のヴァーミヤたちを返しなさい。あなたは他の人々ができないようなことをした。

バラモンと王族とに介在するヴァルナ（天水）が、恐ろしい輪縄によりあなたを殺すことのないように。（六〇）」

王は言った。

「ヴァーマデーヴァよ、バラモンの乗物は、行ないよく、よく訓練された二頭の雄牛である。大仙よ、二頭の牛で好きな場所に行きなさい。実に諸ヴェーダがあなたのような人を運ぶ。（六一）」

ヴァーマデーヴァは言った。

「まことに諸ヴェーダは私のような者を運ぶ。しかし王よ、それらは来世に存する。この世では、これが私の乗物である。そしてまた我々のような他の人々の乗物でもある。王よ。（六二）」

王は言った。

「四頭の驢馬があなたを運べばよい。あるいは、すばらしい騾馬や鹿毛の馬が運んでもよい。あなたはそういうもので行け。しかしこの二頭のヴァーミヤは、王族である私の乗物であって、あなたの乗物ではないのだ。（六三）」

ヴァーマデーヴァは言った。

「バラモンの誓戒は恐るべきものと言われる。もし私がそのような誓戒により生活しているなら、王よ、鉄でできた恐ろしい姿の、鋭い槍を持った巨大な鬼たちが、あなたを四つに裂くであろう。（六四）」

王は言った。

「ヴァーマデーヴァよ、バラモンであるあなたが言葉と心と行為で殺そうとしているのを知る者たちは、私の命により、鋭い槍と刀をもって、あなたと弟子たちを倒すであろう。（六五）」

ヴァーマデーヴァは言った。

「王よ、バラモンは言葉と心と行為について処罰されない。しかし、このように修養によりブラフマンを追求する賢者に従って生きる者は最高である。（六六）」

マールカンデーヤは語った。――

王よ、ヴァーマデーヴァがこのように告げた時、恐ろしい姿の羅刹たちが立ち上がった。槍を手にした彼らに殺されそうになった時、王は大声で次のように叫んだ。（六七）

「バラモンよ、もしイクシュヴァーク家の人々が、ダラ（弟）であろうと他の人々であろうと、実業者たちであろうと、彼らが私に従ってくれるなら、私はヴァーマデーヴァの二頭のヴァーミヤを手放さないだろう。彼らのように義務に専念する者たちはいないから。（六八）」

王はこのように言っているうちに、羅刹たちに殺されて、即座に大地に倒れた。王が死んだことを知って、イクシュヴァーク家の人々はダラを王位につけた。（六九）

ヴァーマデーヴァは王国を治めるダラ王のもとに行って告げた。

「王よ、バラモンには布施をすべきであると、一切の法（の論書）において説かれていま

す。（七〇）王よ、もし非法に陥ることを恐れるなら、今すぐに二頭のヴァーミヤを私に返しなさい。」
　ヴァーマデーヴァの言葉を聞くと、王は怒って御者に言った。（七一）
「私の所蔵する、あの珍らしい形の毒を塗った一本の矢を持ってこい。それで射られて、ヴァーマデーヴァは横たわるだろう。犬に食われて、惨めな姿で。（七二）」
　ヴァーマデーヴァは言った。
「あなたには王妃から生まれたシェーナジットという、十歳の息子がいるね。あなたは私の言葉にかりたてられて、恐ろしい形の矢で、その愛し子を直ちに殺せ。（七三）」
　マールカンデーヤは語った。――
　ヴァーマデーヴァがそう言うと、放たれた鋭い矢は、婦人部屋にいる王子を殺した。ダラはそのことを聞くと次のように告げた。（七四）
「イクシュヴァークの人々よ、私はあなた方によいことをしよう。今、このバラモンを撃ち殺してくれよう。別の鋭い矢を持って来い。王たちよ、今こそ私の力量を見なさい。（七五）」
　ヴァーマデーヴァは言った。
「王よ、あなたは毒を塗ったその恐ろしい形の矢を私に向けているが、あなたはそのすばらしい矢を放つことも、私に向けることもできぬ。（七六）」
　王は言った。

「イクシュヴァークの人々よ、見よ。私は自由がきかない。このように矢を放つことができない。彼を殺すことができない。長老ヴァーマデーヴァよ、生きよ。（七七）」
　ヴァーマデーヴァは言った。
「その矢で王妃に触れなさい。そうすればあなたはその罪から解放される。（七八）」
　マールカンデーヤは語った。――
　そこで王は言われた通りにした。それから王女（王妃）は聖者（ムニ）に告げた。
「ヴァーマデーヴァ様、私がこの夫を、日々交わりながら讃えて来た、そしてバラモンたちに好意を求めて来たのが真実であるなら、バラモンよ、私は清浄な世界を得られますように。（七九）」
　ヴァーマデーヴァは言った。
「美しい眼の女よ、あなたは王家を救った。無比の願いを選びなさい。かなえてあげよう。非の打ち所のない王女よ、自己の一族とイクシュヴァークの王家とを統治しなさい。（八〇）」
　王女は言った。
「主よ、私は一つだけお願いします。今、夫が罪悪から解放されますように。そして彼とその息子や縁者たちの幸せを祈って下さい。最高のバラモンよ、私はこの願いを選びます。（八一）」

マールカンデーヤは語った。——
聖者は王女の言葉を聞くと、「そのようであれ」と言った。王は喜んで、彼に敬礼して二頭のヴァーミヤを返した。(八二)

(第百九十章)

亀は鶴よりも長寿

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
聖仙たちとパーンダヴァたちはマールカンデーヤにたずねた。
「あなたより長寿のものがいるか。(一)」
彼は彼らに語った。——
インドラデュムナという王仙がいた。彼は(前生に積んだ)功徳が尽きたので、天界から堕ちた。「汝の名声は尽きた」と言われて。
彼は私のもとに来て、「あなたは私を知っていますか」とたずねた。(二) 私は彼に言った。
「私は不老不死の術を行なう者ではない。身体を苦しめることによって、自己の目的を遂行することを企てている。(三) しかし、ヒマーラヤに、プラーカーラカルナという梟がいるという。もしかすると彼はあなたを知っているかもしれない。ヒマーラヤは遠くにあるが、そこに彼は住んでいる。(四)」

王仙は馬になって、その梟のいるところに私を運んで行った。(五) そして王仙は彼にたずねた。
「あなたは私を知っていますか。(六)」
梟は少しの間考えてから、「私はあなたを知らない」と彼に答えた。(七) そう言われて、王仙インドラデュムナは再び梟にたずねた。
「誰かあなたより長寿のものはいますか。(八)」
そう問われて梟は彼に答えた。
「インドラデュムナ湖という湖があります。そこにナーディージャンガという名の鶴(バカ)が住んでいます。彼は私より長寿です。彼にたずねなさい。(九)」
それからインドラデュムナは、私と梟とを連れて、ナーディージャンガという名の鶴がいる湖に行った。(一〇) 我々は鶴にたずねた。
「あなたはインドラデュムナ王を知っていますか。(一一)」
そうたずねられて、彼は少しの間考えてから告げた。
「私はインドラデュムナ王を知りません。(一二)」
そこで我々は彼にたずねた。
「あなたより長寿のものはいますか。(一三)」
彼は我々に言った。
「この湖にアクーパーラという亀が住んでいます。彼は私よりも長寿です。もしかすると彼

はその王を知っているかもしれないので、その亀に聞いてみましょう。(二四)」
それから鶴は、亀のアクーパーラに告げた。
「我々はあなたに聞きたいことがあります。どうかやって来て下さい。(二五)」
それを聞くと、その亀はその湖から出現し、その湖岸の我々が立っている場所に来た。
(二六)我々はやって来た彼にたずねた。
「あなたはインドラデュムナ王を知っていますか。(二七)」
彼は少しの間考えてから、その眼は涙にあふれ、心乱れ、ふるえながら、ほとんど失神しそうになり、合掌して言った。
「どうして私がこの方を知らないことがありましょう。かつて彼は千回も火壇設置祭において私の上に火壇を積みました。そしてこの湖は、彼がバラモンに贈物として与えた牛たちに踏まれてできたものです。そして私はここに住んでいます。(二八)」
この亀の言葉を聞いた直後に、天界から神の車が出現した。(二九)そしてインドラデュムナに対する次のような言葉が聞こえてきた。
「あなたは天界に行く資格がある。ふさわしい場所に行きなさい。あなたは名声を保っている。心置きなく行きなさい。(三〇)
功徳ある行為の音は天と地とに触れる。その音が続く限り人は天界にいると言われる。
(三一)この世である生き者の不名誉が語られる時、その声がある限り、その者は最低の世界に堕ちている。(三二)それ故、この世の人は徹底的に善を行なうべきである。邪悪な行為を

捨てて、法のみに依るべきである。(三三)」
これを聞いて王は言った。
「この長老たちをふさわしい場所にもどすまでお待ち下さい。(三四)」
彼は私と梟のプラーカーラカルナとをふさわしい場所にもどしてから、その天車に乗ってめでたくふさわしい場所にもどった。(三五)私は長生きして以上のことを目撃しましたと、マールカンデーヤはパーンダヴァたちに語った。(三六)
パーンダヴァたちは喜んで言った。
「お見事。あなたが天から堕ちたインドラデュムナ王を再びふさわしい場所にもどしたとは、すばらしいことをなさいました。(三七)」
すると彼は彼らに告げた。
「デーヴァキーの息子クリシュナも、地獄に沈んでいた王仙ヌリガを、その苦境から救い上げて、再び天界にもどしたではないですか。(三八)」
（第百九十一章）

阿修羅を殺したドゥンドゥマーラ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
ダルマ王ユディシティラは、長寿で苦行を積んだ汚れなきマールカンデーヤにたずねた。

(一)「法［ダルマ］に通じた方よ、あなたは神々や魔類や羅刹たちや、諸王の系譜や、様々な永遠の聖仙の系譜を知っておられる。最高のバラモンよ、この世であなたが知らないことは何もない。(二)聖者［ムニ］よ、あなたは人間や蛇や羅刹〔など〕に関する神聖な物語を知っておられる。ありのままにお話し下さい。お聞きしたいものです。(三)イクシュヴァーク家に属する無敵のクヴァラーシュヴァと呼ばれていたものが、どうして改名してドゥンドゥマーラとなったのですか。(四)ブリグ族の最上者よ、私はそのことを如実に知りたいのです。賢明なクヴァラーシュヴァが改名したわけを。(五)」

マールカンデーヤは語った。――

おお、ユディシティラ王よ、お聞きなさい。ドゥンドゥマーラの法にかなう物語をあなたに語りますから、聞いて下さい。(六)王よ、イクシュヴァーク家の王であるクヴァラーシュヴァがドゥンドゥマーラとなったわけを聞きなさい。(七)

わが子よ、ウッタンカという有名な大仙がいた。彼の隠棲所は心地よい砂漠にあった。(八)偉大な王よ、このウッタンカはヴィシュヌ神を満足させようと望んで、非常に長年の間、最も難行の苦行を行なった。(九)ヴィシュヌ神は彼に満足して、直々に姿を現わした。聖仙は神を見るやいなや平伏して、種々の讃歌により神を讃えた。(一〇)(一一―一九略)偉大なヴィシュヌ神は、ウッタンカにこのように讃えられ、彼に告げた。

「私は汝に満足した。願いをかなえてあげるから選びなさい。(二〇)」

ウッタンカは言った。

「私がハリ（ヴィシュヌ）を見たということで、私の願望はかないました。永遠の神人［プルシャ］、神聖なる世界の創造主を。(二一)」

ヴィシュヌは言った。

「最高のバラモンよ、私は汝の無欲さと信愛［バクティ］に満足した。しかし汝はどうしても私から贈物を受けなければならぬ。(二二)」

このようにヴィシュヌに願いをかなえられて、ウッタンカは合掌して、願いごとを選んだ。

(二三)「蓮のような眼をした神よ、もしあなたが私に満足して下さるなら、私の知性が常に法［ダルマ］と真実［サティヤ］と自制に集中しますように。偉大な主よ、常にあなたに対し、信愛をこめて絶えず専念できますように。(二四)」

ヴィシュヌは言った。

「バラモンよ、私の恩寵により汝にすべてが実現するであろう。そしてヨーガ（神秘力）が顕現するであろう。汝はそれをそなえて、神々と三界のために偉大な仕事をなすであろう。(二五)ドゥンドゥという大阿修羅［アスラ］が、世界を滅ぼすために恐ろしい苦行を行じている。聞け、彼を殺す者について。(二六)ブリハダシュヴァという王が出るであろう。彼に、クヴァラーシュヴァと呼ばれる、清らかで自制した息子がいるであろう。(二七)梵仙よ、この最高の王

は、私のヨーガの力によって、汝の命によりドゥンドゥマーラ（ドゥンドゥを殺す者）となるであろう。（二八）」

マールカンデーヤは語った。——

ヴィシュヌはウッタンカにこのように告げると姿を消した。（二九）

（第百九十二章）

マールカンデーヤは語った。——

王よ、イクシュヴァークが逝去した時、シャシャーダが地上を治めた。彼は最高に徳性あり、アヨーディヤーの王となった。（一）シャシャーダの後継者のカクツタは強力であった。カクツタの息子がアネーナスであり、アネーナスの息子がプリトゥであった。（二）プリトゥの息子がヴィシュヴァガシュヴァであり、彼からアールドラが生まれた。アールドラの息子がユヴァナーシュヴァで、彼の息子がシュラーヴァスタである。（三）シュラーヴァスティー市はこの王によって建設された。シュラーヴァスタの後継者が強力なブリハダシュヴァである。そしてブリハダシュヴァの息子がクヴァラーシュヴァであると伝えられる。（四）クヴァラーシュヴァには二万一千人の息子がいた。すべて学術に通じ、強力で、無敵であった。（五）

ところでクヴァラーシュヴァは、諸々の美質の点で父を凌駕していた。そこで父は適切な時に、勇猛で最高に有徳なクヴァラーシュヴァを王位につけた。（六）この敵を滅ぼす賢明なブリハダシュヴァ王は、富を息子に譲ってから、苦行をするために苦行林に行った。（七）その時、最高のバラモンであるウッタンカは、王仙ブリハダシュヴァが森に行ったことを聞いた。（八）大威光ある高潔なウッタンカは、一切の武器に最も通じている最高の人物のところに行き彼を制止した。（九）

ウッタンカは言った。

「あなたは臣民を守護すべきです。まず第一にそれを行なうべきです。王よ、あなたの恩恵により、我々は憂いなく生活できます。（一〇）王よ、実に大地は偉大なあなたに守られてこそ憂いのないものになるでしょう。森へ行ってはなりませぬ。（一一）ここで臣民を守護することに、大なる法（ダルマ）（王の義務）があります。森にはありません。森へ行くなどと決意されてはなりませぬ。（一二）王中の王よ、かつて王仙たちは臣民を守護して法を実践しましたが、そのような法は他にはどこにも見られません。臣民たちは王によって守られるべきです。あなたは彼らを守護しなければなりません。（一三）

王よ、私はもはや憂いなく苦行を行なうことができません。

私の隠棲所の付近の砂漠に、ウッジャーナカと呼ばれる砂の海があります。それは何由旬（ヨージャナ）の幅と長さを持つ広大な地域です。（一四—一五）そこには、マドゥとカイタバとの息子である、ドゥンドゥという名の非常に恐ろしい魔王がいます。彼は強力で、武勇に長じています。（一六）彼は限りなく勇猛で、地中に住んでいます。偉大な王よ、あなたは彼を殺してから森

へ行って下さい。(一七)彼は世界を滅ぼすため、天界を滅ぼすために、恐ろしい苦行を行なって、横たわっています。(一八)王よ、彼は全世界の祖父（梵天）から恩寵を得ましたから、神々、魔物、羅刹、竜、夜叉、ガンダルヴァ（半神）たちにより、すべからく殺されることがありません。(一九)彼を殺しなさい。どうかお願いです。他のことを考えてはなりませぬ。あなたは永遠で不滅で確固たる、大なる名声を得ることでしょう。(二〇)一年の終わりに、その砂の中で眠っている残忍な悪魔が息を吐く時、大地は山や森や林もろとも震動します。(二一)彼の吐息の風により、大砂塵が舞い上がり、太陽の道をおおいました。非常に恐ろしい地震は、火花と火焔と煙をともない、七日間続きました。(二二)

以上のようなわけで、私はあの隠棲所に住むことができません。王中の王よ、世界の安寧を願って彼を殺しなさい。今あの阿修羅が殺されたら、世界は幸せになります。(二三)というのは、あなたは彼を殺す能力があると私は思います。ヴィシュヌはその威光によってあなたの威光を増大させるでしょう。(二四)かつて私はヴィシュヌにより彼を殺す恩寵を与えられました。あの恐ろしい大阿修羅を殺す人には、無敵のヴィシュヌの威光がのりうつるでしょう。(二五)王よ、あなたはこの地上において耐えがたいその威光を受け入れて、あの恐ろしく勇猛な悪魔を殺しなさい。(二六)というのは王よ、大威光を有するドゥンドゥは、わずかな威光では、百年かかっても焼き尽くせないからです。(二七)」

（第百九十三章）

マールカンデーヤは語った。——

ウッタンカがそのように告げると、無敵の王仙は合掌して、ウッタンカに言った。(一)

「バラモンよ、あなたの来られたことは無駄にはならないでしょう。尊者よ、私にクヴァラーシュヴァという息子がいます。(二)彼は堅忍で、敏速に行動し、勇猛さにかけて地上に並びなき男です。すべてあなたの気に入るように行動することは疑いありません。(三)彼はすべて勇士である、鉄の棍棒のような腕をした息子たちに囲まれています。私は御容赦して下さい。私は今は武器を棄てています。(四)」

無量の威光をもつ聖者は、「それでけっこうです」と言った。王仙は偉大なウッタンカのために仕事をせよと息子に命じてから、最高の森林へ行った。(五)

ユディシティラは言った。

「苦行を積んだ尊者よ、その強力な魔物は何者ですか。誰の息子か。誰の孫か。それを知りたいと思います。(六)このように強力な魔物について私は聞いたことがありません。苦行を積んだ尊者よ、ありのままに知りたいと思います。大知者である苦行者よ、詳らかにすべてを知りたいのです。(七)」

マールカンデーヤは語った。——

王よ、一部始終をすべてお聞き下さい。

動不動の諸物が滅び、恐ろしいただ一つの海になり、一切万物が滅びた時、一切万物の永遠の源であり、不滅の神人（プルシャ）であるヴィシュヌ神は一人で、無量の威光をもつシェーシャ竜の大きな体の上で、水の床の中で眠っていた。（八—九）その世界創造神、不滅のハリは、大きな蛇の体でこの大地を取り巻いて眠っていた。（一〇）眠っているその神の臍に、太陽のような色をした蓮の花が生じた。その太陽か月のような色をした蓮の花の中に、世界の長上（グル）である梵天が現に生じた。（一一）彼は四ヴェーダであり、四つの体からなり、四つの顔を持つ。自己の力により、無敵であり、非常に強力で勇猛である。（一二）

さてある時、非常に強力な魔王であるマドゥとカイタバは主ヴィシュヌを見た。（一三）その光輝に満ちた神は神聖な竜の体の寝台に横たわっていた。その竜の寝台は、幾多の由旬（ヨージャナ）にわたる広さと長さを有していた。（一四）ヴィシュヌは王冠とカウストゥバ宝珠をつけ、黄色い絹の衣を着ていた。王よ、その神は光輝と威光と美しい体で輝き、千の太陽のような驚異的な外観をしていた。（一五）マドゥとカイタバは、蓮花の中に、蓮花のような眼をした梵天を見て、この上なく驚いた。（一六）それから両者は、無量の威厳に満ちた梵天を脅した。誉れ高い梵天は、何度も両者に脅されて、蓮の茎を揺すった。そこでヴィシュヌは目覚めた。（一七）

さて、ヴィシュヌは強力な魔王たちを見た。神は二人を見て言った。

「強力な者たちよ、よく来た。あなた方のために、最高の願いごとをかなえるであろう。私に喜びが生じたから。（一八）」

強力な大阿修羅たちは笑って、二人してヴィシュヌに答えた。（一九）

「神よ、あなたが我々に願いごとを言え。最高の神よ、我らがあなたのために願いをかなえてやる。遠慮せずに言いなさい。（二〇）」

尊い神は告げた。

「勇者たちよ、私は願いごとをかなえてもらおう。私にはある願望があるから。実にあなた方は力にあふれており、あなた方に匹敵する男はいない。（二一）不屈の勇者たちよ、あなた方が私に殺されるように。私は世界の安寧のために、この願いを成就したいのだ。（二二）」

マドゥとカイタバは言った。

「我々はくつろいでいる時も、かつて嘘をついたことがない。いわんやそうでない時はなおさらである。最高の神人（プルシャ）よ、我々は真実と法（ダルマ）に専念していると知りなさい。（二三）力、容姿、気力、平静さにおいて、我々に匹敵する者はいない。法、苦行、布施、性行、勇気、自制においても。（二四）ケーシャヴァよ、大きな災いが我々に近づいている。言ったことを実行しなさい。時間（カーラ）（命運）は乗り越えがたいから。（二五）しかし神よ、一つあなたにやっていただきたいことがあります。最高の神よ、何かにおおわれていない場所で殺して下さい。（二六）美しい眼のお方よ、我々はあなたの息子になりたいです。最高の神よ、我々はこの願いごとを選んだのです。（二七）」

尊い神は告げた。

「よろしい、そのようにしよう。このことはすべて実現するであろう。（二八）」

マールカンデーヤは語った。――
ヴィシュヌはよくよく考えて見たが、地上にも天界にも、何かにおおわれていない場所を見出すことができなかった。(二九)その時、誉れ高い最高の神は、自分のおおわれていない腿を見て、鋭い刃をもつ円盤(チャクラ)により、マドゥとカイタバの頭を切り落とした。(三〇)

(第百九十四章)

マールカンデーヤは語った。――
マドゥとカイタバにはドゥンドゥという息子がいた。彼は大威光を持ち、輝きに満ちていた。強力で非常に勇猛であり、大苦行を行なった。(一)彼は痩せ細り、血管が全身に浮き出て、一本足で立っていた。梵天は満足して、彼の願いをかなえてやった。彼は願いごとを選んだ。(二)

「神々、魔物、夜叉、蛇、ガンダルヴァ、羅刹。私は以上のものどもに殺されるべきでない。私はこの願いごとを選びました。(三)」

梵天は「そのようであれ。行きなさい」と彼に告げた。そう言われて、彼は梵天の足もとに頭をつけて敬礼してから立ち去った。(四)

非常に強力で勇猛なドゥンドゥは、梵天の恩寵を得た後、父が殺されたことを思い出してヴィシュヌを攻撃した。(五)遺恨を抱くドゥンドゥは、神々とガンダルヴァたちをうち破って、何度も、すべての神々とヴィシュヌをひどく悩ませた。(六)ウッジャーナカという、砂で満ちた海があった。その悪魔はそこへ行き、力ずくでウッタンカの隠棲所をひどく苦しめた。(七)恐ろしく勇猛なマドゥとカイタバの息子ドゥンドゥは、地下に行き、砂の中に隠れた。(八)彼は世界を滅ぼすため、苦行の力により、火焔を吐きながら、ウッタンカの隠棲所の近くで寝ていた。(九)

丁度その時、クヴァラーシュヴァ王が、臣下や軍隊や乗物をともない、ウッタンカとともに、ドゥンドゥの住処に行った。彼は力に満ちた二万一千人の息子を連れていた。(一〇―一一)ウッタンカの要請により、尊いヴィシュヌ神が、世界の安寧を願って、その威光により彼にのりうつっていた。(一二)その無敵の王が出発した時、天空に大音声が響いた。

「この栄光ある王子はドゥンドゥマーラ(ドゥンドゥを殺すもの)となるであろう。(一三)」

神々は神聖な花々を一面にまいた。神々の太鼓が自ら鳴り響いた。(一四)そしてその聡明な王が行進する時に涼しい風が吹いた。神々の王(インドラ)は雨を降らせて、大地のほこりを鎮めた。(一五)大阿修羅ドゥンドゥがいる場所の空中に、神々の天車が出現した。(一六)大仙たちも、神々やガンダルヴァたちとともに、クヴァラーシュヴァとドゥンドゥとの戦いに好奇心をかられて見ていた。(一七)

その王はナーラーヤナ(ヴィシュヌ)の威光に満ちあふれ、息子たちとともに速やかにすべての方角へ行った。(一八)クヴァラーシュヴァ王は、例の砂の海で、彼の息子たちに海を掘らせ

た。（一九）七日間掘って、強力なドゥンドゥを見出した。砂の中に隠れた彼の恐ろしい巨体は、その威光により太陽のように燃えていた。バラタの雄牛よ。（二〇）ドゥンドゥは西の方角に横たわり、終末の火のような輝きを放って眠っていた。（二一）クヴァラーシュヴァの息子たちは、彼のまわりをすっかり取り囲み、鋭い矢や棍棒や杵、矛、鉄棒、飛道具、曇りない利剣により彼を攻撃した。（二二）強力な悪魔は攻撃され、怒って立ち上がった。そして怒りにまかせ、彼らの種々の武器を食ってしまった。（二三）彼は口から終末の火にも似た火を吐き、その威光によりすべての王子たちを焼いた。（二四）怒った彼は、口から吐く火により、即座に世界を滅ぼすかのようであった。ちょうど怒った主カピラがかつてサガラ王の息子たちを焼いたように。それは驚くべき光景であった。（二五）

王子たちが悪魔の怒りの火に焼かれてしまった時、威光に満ちたクヴァラーシュヴァ王は、まるでクンバカルナ（羅刹の名）のような、目を覚ました大魔王に近づいた。（二六）大王よ、王の身体から多量の水が流れ出した。それで相手の威光（火）は飲み尽くされた。ヨーガ行者がヨーガによって火を鎮めるように、王は水よりなる火を水によって鎮めた。（二七）それから王は、全世界の安全のために、その恐ろしく勇猛な魔物をブラフマ・アストラ（梵天の武器）により焼き殺した。（二八）王仙クヴァラーシュヴァはこの武器で大阿修羅（ドゥンドゥ）を焼き殺した。まるで敵を滅ぼす三界の主が神々の敵を焼き殺すように。そこで彼は、それ以来ドゥンドゥマーラ（ドゥンドゥを殺した者）という名で知られるようになった。（二九）

すべての神々と大仙たちは喜んで「願いごとを選びなさい」と彼に言った。彼は合掌し、

おじぎをして、非常に喜んで次のように告げた。（三〇）

「優れたバラモンたちに財物を与えられますように。敵に敗れることがないように。ヴィシュヌと友達になれますように。生類を害することのないように。常に法に専念するように。永遠に天界に住みますように。（三一）」

喜んだ神々、聖仙、ガンダルヴァ、賢者ウッタンカたちは、「そのようになるであろう」と彼に告げた。（三二）神々や大仙たちは、種々の祝福の言葉で王に敬意を表してから、それぞれの住処に帰って行った。（三三）

ユディシティラよ、彼に三人の息子が残された。すなわち、ドリダーシュヴァ、カピラーシュヴァ、チャンドラーシュヴァである。彼らから偉大なイクシュヴァークの家系が生じた。（三四）このように、マドゥとカイタバの息子である強力なドゥンドゥは、クヴァラーシュヴァによって殺された。（三五）有徳なクヴァラーシュヴァ王は、それ以来、ドゥンドゥマーラという名で知られるようになった。（三六）

以上、あなたが私にたずねたことについて、すべて語った。その業績により有名になったドゥンドゥマーラの物語を。（三七）ヴィシュヌを称讃するこの神聖な物語を聞く人は、徳性あり息子にめぐまれた者になるであろう。（三八）節日（月相の変わり目）にこれを聞けば長寿となり、志操堅固となり、苦熱を離れ、いかなる病にもかからないであろう。（三九）（第百九十五章）

バラモンに教える女性

ヴァイシャンパーヤナは語った。

それからバラタの最上者ユディシティラ王は、輝きに満ちたマールカンデーヤに、非常に説きがたい法(ダルマ)についての質問をした。――(一)

「バラモンよ、私は女性のこの上ない偉大さと、微妙な法について如実に聞きたい。お話し下さい。(二)というのは最高の梵仙よ、太陽、月、風、地、火、父、母、牝牛その他創造されたものは何でも、実際に眼に見える神であるから。ブリグ族の尊者よ。(三―四)私はそれらをすべて師のように考えます。夫に貞節な女性たちも同様です。夫に忠実な女性たちのように夫に奉仕することは行ないがたいと私には思われます。(五)聖者よ、夫に忠実な妻たちの偉大さを語って下さい。感官の群を抑制し、意(こころ)を制御し、いつも夫を神のようにみなしている妻たちの。(六)聖者よ、女性が父母や夫に奉仕することは行ないがたいと私には思われます。(七)女性の恐るべき法よりも実行しがたいものを他に知りません。バラモンよ、行ない正しい女性が常に孜々として行なうところの。ああ、父や母がそれをいっそう行ないがたいものにします。(八)女性は時至って生まれ、夫に貞節で、真実を語り、その胎内に十カ月間胎児を保つ。これ以上の驚異があるでしょうか。(九)女性は最高の危険、たとえようのない苦痛を経験して、非常に苦しんで子供を生み、大きな愛情をもって育てます。最高のバラモ

ンよ。(一〇)

そしてまた、男はあらゆる残酷なことに従事しつつも、常に自分の仕事を行なっています。それは難儀なことだと私は考えます。(一一)バラモンよ、王族の法(クシャトラダルマ)の実践について、如実に語って下さい。残酷な悪人によっては法は得られがたいものです。(一二)どのような質問にも答えられる最高の聖者よ、以上の質問に対する答えをお聞きしたい。ブリグ家の最上者よ、よく誓戒を保つ方よ、是非ともお願いします。(一三)」

マールカンデーヤは言った。

「おお、この答えがたい質問にすべて答えよう。如実に話すから、私の言うことを聞きなさい。(一四)ある人々は母を、他の人々は父を評価する。母親は子供たちを育てるという困難なことをする。(一五)父親は苦行、神々の崇拝、称讃、忍耐、呪法その他の方法により息子を望む。(一六)このようにして、非常に苦労して、得がたい息子を得ると、この子はどのようになるであろうと、いつも心配する。(一七)父母は息子に期待する。名誉を、富貴を、子孫を、義務(ダルマ)の遂行を。(一八)義務を知る息子が両親の希望を実りあるものにするなら、そして父母がその息子に常に満足するなら、現世においても来世においても、その息子の名声と徳(ダルマ)は永遠である。(一九)

だが女性には、祭祀も祖霊祭(シュラーッダ)も断食も関係ない。女性は夫に仕えることにより天界へ行く。(二〇)ユディシティラ王よ、この主題に関し、夫に貞節な女性に定められた法(ダルマ)について、注意深く聞きなさい。(二一)」

(第百九十六章)

マールカンデーヤは語った。——

バーラタよ、カウシカという最高のバラモンがいた。彼はヴェーダを学び、苦行を積んだ苦行者で、法を実践していた。(一) この最高のバラモンは、ヴェーダとその補助学とウパニシャッドを学んだ。ある時、彼はとある樹の根もとに、ヴェーダを朗誦しながら座っていた。(二) その樹の上方に雌の鶴がとまっていた。その時、鶴はバラモンの上に糞を落とした。(三) そこで怒ったバラモンは、鶴を見て敵意を抱いた。激しい怒りにかられたバラモンに、敵意を抱いて凝視されて、その鶴は地面に落ちた。鶴が意識を失い死んで落ちたのを見て、バラモンは憐憫にかられて悲嘆に暮れた。(四—五)

「私は激し、怒りにかられ、なすべきでないことをやった。」

賢者は幾度もこのように言って、托鉢するために村へ行った。(六) 村で清らかな家々をまわっているうちに、以前に立ち寄ったことのある家に入った。(七) 彼が「与えよ」と乞うと、家の主婦は「待っていて下さい」と彼に言い、器を洗った。(八) その時、彼女の夫がひどく飢えに悩まされて、突然帰って来た。(九) 貞節な妻は夫を見ると、バラモンのことをほっておいて、夫に洗足の水や口をゆすぐ水や座具をさし出した。(一〇) その黒い眼の女は、食物や御馳走や非常に優しい言葉により、恭しく夫に奉仕した。(一一) 彼女はいつも夫の残りものを食べる。ユディシティラよ。そして夫を神と崇め、夫の心に添うようにする。(一二) 実

際の行為によっても、心によっても、言葉によっても、一心不乱に夫に従った(異本による)。全身全霊で彼に仕えることに専念していた。(一三) 彼女は善行を行ない、清らかで、諸事に巧みで、家族の幸福を願い、常に夫のためになるように努めていた。(一四) 彼女はいつも感官を制御し、神々と客と従者、舅と姑に対し、常に一心に奉仕した。(一五)

その時、その美しい眼の女は、夫に奉仕しているうちに、施食を求めて立っているバラモンを見た。(一六) その誉れ高い貞女は恥じ入り、バラモンのために施食を持って出て行った。(一七)

バラモンは告げた。

「美しい女よ、これはどうしたことか。あなたは私に待っていて下さいと言って、引き止めて、去らせなかった。(一八)」

マールカンデーヤは語った。——

バラモンが怒りにかられ、威光で燃えるかのようであるのを見て、貞女は怒りを和らげようとして言った。(一九)

「バラモン様、どうかお許し下さい。私にとって夫は偉い神様なのです。しかも彼は飢え、疲れて帰って来ましたので、私は彼に奉仕しました。(二〇)」

バラモンは言った。

「バラモンというものはもっと大切ではないのか。お前は夫の方を大事にした。お前は家庭

の主婦の務めを行なって、バラモンを軽んじた。(二一)インドラでさえもバラモンに敬礼する。いわんや地上の人間においてをや。高慢な女よ、お前は知らないのか。長老たちから聞いたことがないのか。バラモンは火のように、全地上をも焼くことができる。(二二)」

女は言った。

「私はバラモンを軽んじたりしません。彼らは聡明で、神々に等しいですから。非の打ち所のないバラモン様、どうか私の過失を許して下さい。(二三)私は知性あるバラモンの威光と栄光を知っています。彼らの怒りにより、海は塩水にされ飲めなくなりました。(二四)苦行の熱力が燃え上がり、その心が浄められた聖者（ムニ）の場合も同様です。彼らの怒りの火は、ダンダカの森において、いまだに鎮まっていません。(二五)邪悪で残酷な大阿修羅ヴァータービはバラモンを侮辱して、聖仙アガスティヤを害そうとその腹に入ったが、消化されてしまいました。(二六)ヴェーダを学ぶバラモンたちには多くの力があると言われます。バラモン様、偉大なバラモンの怒りと恩寵は非常に大きなものです。(二七)非の打ち所のないバラモン様、どうか私の過失をお許し下さい。バラモン様、夫に仕えることにより私の義務（ダルマ）は輝きます。(二八)私の夫はすべての神のうちでも最高の神です。最高のバラモン様、私は神と区別することなく彼のために義務を行なうべきです。(二九)

バラモン様、夫に仕えることの果報を御覧なさい。あなたが怒って雌の鶴を殺したことを、私は知っています。(三〇)最高のバラモンよ、人間にとって怒りは身体に存する敵です。怒りと迷妄とを捨てた人を、神々はバラモンと呼びます。(三一)真実を語り、目上（グル）を満足させ、自分が傷つけられても他者を傷つけない人を、神々はバラモンと呼びます。(三二)感官を制し、法（ダルマ）に専念し、ヴェーダ学習に専念し、清らかで欲望と怒りを克服した人を、神々はバラモンと呼びます。(三三)法を知り、賢明で、世人は自分と等しいと見て、一切の法に専念する人を、神々はバラモンと呼びます。(三四)教授したり、学んだり、祭祀を行なったり行なわせたり、力の限り布施したりする人を、神々はバラモンと呼びます。(三五)清浄な行い(梵行)を守り、ヴェーダ聖典を学び、最高のバラモンで、怠ることなく学習する人を、神々はバラモンと呼びます。(三六)

バラモンにとって楽しいことを彼らに告げるべきです。いつも真実を語る彼らの心は、虚偽に楽しむことはありません。(三七)バラモンの財産は以下のものだと言われます。ヴェーダ学習、自制、廉直、常に感官を制すること。最高のバラモン様、法を知る人々は、真実と廉直とが最高の法(美徳)であると言います。(三八)永遠の法を知ることは至難のことですが、それは真実（サティヤ）において確立します。(三九)最高のバラモン様、しばしば法はヴェーダ聖典を根拠とすべきであると、長老たちは教えます。法はヴェーダ聖典を根拠とすべきであると、長老たちは教えます。(三九)最高のバラモン様、しばしば法は微妙なものだと考えられています。あなたは法を知り、学習に専念し、清浄です。しかし、あなたは真実には法を知らないと私は思います。(四〇)

ミティラーに住む一人の猟師は、父母に仕え、真実を語り、感官を制御しています。彼があなたに法を説くでしょう。最高のバラモン様、もしお望みなら、どうぞそこへお行きなさい。(四一)非の打ち所のない方よ、私はしゃべりすぎました。すべてお許し下さい。法を知

る人はすべからく女を殺してはなりませぬ。（四二）」
「私はあなたに満足した。幸あらんことを。私の怒りは去った。美しい女よ。あなたが言った批判は私にとって最高の幸せだ。御機嫌よう。私は行く。私は目的を達成するであろう。（四三）」
マールカンデーヤは語った。――
彼女と別れ、そのカウシカ・バラモンは出発し、自己批判をしながら、自分自身の家に帰った。（四四）

（第百九十七章）

バラモンに法を説く猟師

マールカンデーヤは語った。――
その女に言われた驚くべきことを残らず考えて、バラモンは自己批判をしながら、罪を犯したかのように見えた。（一）彼は法（ダルマ）の微妙な道について考えながら言った。
「私は信じなければならぬ。ミティラーに行こう。（二）そこに自己を制し法を知る猟師が住んでいるという。私はまさに今日、法について問うために、苦行（修養）を積んだ彼のもとへ行こう。（三）」

彼はそう考えた。彼は女の言葉を信じていた。彼女は鶴の件を知っていたから。そして、彼女の法（ダルマ）にかなった見事な言葉からも。
彼は好奇心にかられ、ミティラーに出発した。（四）彼は森や村や都市を通過して、ジャナカ王によく守られたミティラーに行った。（五）その都は、法という堤（規範）に満ち、祭祀と祝祭に満ち、美しく、ゴープラ門と小塔（アッターラカ）があり、家々や城壁で飾られていた。（六）彼はその心地よい都に入った。そこは多くの宮殿に満ち、多くの商品にあふれ、見事に区分された大通りがあった。（七）多くの馬、戦車、象、乗物にあふれ、喜び、栄養の十分な人々に満ち、絶えず多くの祝祭が行なわれていた。（八）
そのバラモンはそこを通っているうちに多くの出来事を見た。そして、例の徳高い猟師についてたずねたところ、バラモンたちが彼のことを教えてくれた。（九）彼はそこに行って、屠殺場の中にいて、鹿や水牛の肉を売っているその聖者を見た。そこは買い手たちで混んでいたので、バラモンは片隅で待っていた。（一〇）ところが猟師の方は、バラモンの来訪を知って、突然急いで立ち上がり、一隅でバラモンが座っている場所にやって来た。（一一）
猟師は言った。
「尊者よ、あなたに敬礼いたします。最高のバラモンよ、ようこそ。私は猟師ですが、何の御用ですか。お命じ下さい。（一二）例の貞女が、あなたがミティラーに来られるということを言って来ました。あなたがここに来られた目的をすべて存じております。（一三）」

マールカンデーヤは語った。——

彼の言葉を聞くと、バラモンは非常に喜んで、これは第二の驚異であると考えた。（二四）

猟師はバラモンに言った。

「あなたはふさわしくない場所におられます。非の打ち所のない方よ、もしよろしければ、私の家に行きましょう。（二五）」

バラモンは喜んで、「承知した」と答えた。猟師は彼に従って家に行った。（二六）

その最高のバラモンは、心地よい家に入り、恭しく席に座らされ、洗足の水と口をゆすぐ水を受けた。（二七）それから、快適に座った彼は、猟師に告げた。

「私には、この仕事はあなたにはふさわしくないように見える。友よ、私はあなたのおぞましい仕事が、ひどくつらいのだが。（二八）」

猟師は言った。

「これは私の父祖伝来の、一族にふさわしい仕事です。私が自己の義務（ダルマ）に従事しているからといって、怒らないで下さい。バラモン様。（二九）私はかつて創造神が定めた自分の仕事に従事しています。最高のバラモン様、私は努力して老いた両親に仕えています。（三〇）私は真実を述べ、不満を抱かず、能力の限り布施し、神と客人と従者の残りもので生活しています。（三一）私は何ものをも軽蔑せず、より強力なものを中傷しません。前生になされた業が行為者につき従うのですから。最高のバラモンよ。（三二）

この世間の職業は、農業、牧畜業、商業で〔それらを扱うのが経済学です。そして〕政治

学と三ヴェーダ学があります。かくして諸々の世界は存立します。（二三）労働は従僕（シュードラ）に、農業は実業者（ヴァイシャ）に、戦闘は王族（クシャトリヤ）に属します。清浄行、苦行、聖句（マントラ）、真実は、常にバラモンに属します。（二四）王は自己の仕事にいそしむ臣民を法（ダルマ）により治めます。そして邪悪な行為に従事する人々を、本来の仕事に結びつけます。（二五）王たちは常に恐れられるべきです。彼らは臣民の支配者であるから。彼らは邪悪な行為をする者を殺します。猟師が矢で鹿を殺すように。（二六）梵仙よ、ここジャナカの治世下では、邪悪な行為をする者はおりません。四姓の人々はすべて、自己の仕事にいそしんでいます。最高のバラモンよ。（二七）このジャナカ王は、たとえ息子であっても、悪行を犯して処罰されるべきであれば処刑します。また、有徳な人を悩ませることはありません。（二八）この王はうまくスパイを用い、すべてを法によって見ます。最高のバラモンよ、繁栄と王権と王杖（ダンダ）（武力／刑罰）は王族に属します。（二九）実に王というものは、自己の義務（ダルマ）として、より多くの繁栄を望みます。王はすべての種姓（ヴァルナ）の救護者です。（三〇）

バラモンよ、私は他人に殺された猪や水牛をいつも売っています。自分では殺しません。（三一）私は肉を食べません。私は受胎に適する時期に妻に近づきます。バラモンよ、私はいつも〔昼に〕断食し、夜間に食べます。（三二）人は徳性なく生まれても、徳性ある者になります。殺生を好む者も、有徳になることがあります。（三三）

王たちの過失により偉大な法は混乱し、非法が栄えます。そして臣民たちも混交します。（三四）様々な障害にかかった人々が生まれます。王が非法であれば、臣民は常に不幸です。

（三五）ところがこのジャナカ王は、すべてを法（ダルマ）により見ます。一切の臣民に好意を抱き、常に自己の義務に専念しています。（三六）

この私は、私を称える人でも非難する人でもすべて、最善を尽くして満足させます。（三七）自己の義務によって生活し享受する、有能で精励な性質の王は、何ものにも依存して生活することはありません。（三八）能力に応じて食物を与えること、常に忍耐すること、常に法を守ること、ふさわしく接待すること、一切の生類に対する憐れみ。そして、人間にとって、人々のために惜しみなく与えることほど優れた美徳は他にありません。（三九）虚言を避けるべきです。乞われなくとも親切にするべきです。欲望や性急さや憎悪により法を捨てるべきではありません。（四〇）好ましいことに喜びすぎても、好ましくないことに悩みすぎてもいけません。窮迫時においても迷うべきでなく、法を捨てるべきではありません。（四一）

ある行為が誤っていたら、二度とそのようにすべきではありません。よいと考えることに専念すべきです。（四二）悪に対して悪を返してはいけません。常に善であるべきです。悪をなそうと望む悪人は自ら滅びます。（四三）邪悪で罪深い人々の行為は悪人にふさわしい。彼らは法（正義）は存在しないと考えて、清い人々を嘲笑い、法を信ずることなく、疑いもなく滅びます。（四四）悪人は常に大きな皮袋のようにふくれます（慢心する）。うぬぼれた愚者たちの言葉は空しいでしょう。それは昼の太陽がものを照らすように、彼らの内心をさらけ出します。（四五）この世では、愚者は単に自賛しても輝きません。ところが学を修めた者は、汚れた体をしていても輝きます。何人（なんぴと）を非難することもなく、自賛することもなく、この世で、有徳

の人が有名であると限りません。（四六－四七）

悪行により苦しむ人が、『このようなことは二度としない』と悔い改めれば、第二の罪悪を免れます。最高のバラモン様、法（ダルマ）に関する聖句（シュルティ）があります。（四八－四九）法を性とする人は、以前に知らずになした諸悪を、後で滅する。バラモン様、法は人々がこの世で不注意からなした罪悪を除去します。（五〇）

人は悪をなしたら、自分は存在すると考えるべきではありません。信じつつ、不満なく、善を追求すべきです。（五一）

あたかも衣服の穴をおおうように、善人の欠乏をおおう人は、悪をなしても、善に趣きます。月が大雲から脱するように、すべての悪から脱するでしょう。（五二）

太陽が昇って、すべての闇を除くように、人は善を行なって、すべての罪悪から解放されます。（五三）最高のバラモン様、貪欲こそが諸悪の根源であると知りなさい。貪欲であって、博識でない人々は、罪悪に帰着します。彼らはうわべは法の皮をかぶるが、実は法を欠いています。草におおわれた穴のように。（五四）彼らには自制と清らかさが、法に関する会話が、すべてそなわっているようですが、彼らのうちで徳行の人は非常に得がたいものです。（五五）」

マールカンデーヤは語った。――

知性に満ちたバラモンは、徳高い猟師にたずねた。

「最高の人よ、どのようにして徳行の人を知ることができるでしょうか。大智ある猟師よ、そのことを如実に教えて下さい。（五六）」

猟師は告げた。

「最高のバラモン様。祭祀、布施、苦行、ヴェーダ、真実。徳行の人には、常に以上の五つの浄らかなものがあります。（五七）徳行の人は欲望、怒り、偽善、貪り（迷い）、不正直を抑制して法において充足し、徳行の人に尊敬されます。（五八）祭祀とヴェーダ学習を習いとする人々は生活できなくなることはありません。そして正しい行動様式を守ることが、徳行の人の第二の特徴です。（五九）目上に仕えること、真実、怒らぬこと、布施。バラモン様、以上の四は、常に徳行の人に存します。（六〇）徳行に専心し、あらゆる点で確立し、満足する。それは他の方法では得られないものです。（六一）徳行の人においては、常に、ヴェーダの秘説は真実です。真実の秘説は自制です。自制の秘説は捨離です。（六二）知性に迷いある人々が法を謗るならば、悪しき道を行く彼らに従う者たちも苦しみます。（六三）しかし徳行の人々はよく自制し、学習と捨離に専念し、法にかなった道に登り、真実と法に専念します。（六四）徳行をそなえた人々は最高の知性を得ます。師匠の意見に専ら従い、孜々として法の意義を考察します。（六五）

無神論者、道徳の規範から外れた者、残酷な人、悪人の説に従う者。知識に依存し、有徳者に仕えて、そのような者たちを捨てなさい。（六六）欲望や貪りという鰐に満ち、五根という水をたたえた川を、生存（廻輪）という難所を、堅固さよりなる舟を造って渡りなさい。（六七）

次第に積み重ねられた、知性の集中よりなる偉大な法は、徳行の人の美質になります。白い布の美しい赤色のように。（六八）不殺生と真実語は、一切の生類にとって最高に有益です。不殺生は最高の法であり、それは真実において確立します。諸活動は真実に依存する時に確立します。（六九）しかし徳行の人に実践された真実こそがより重要です。

善き人々の行動様式が法（徳）です。善き人々は正しい行動様式を特徴とします。（七〇）

生類はその本性に応じ、それぞれの本性を得ます。悪性のものは、自己を制御せず、怒りや欲望などの罪過を得ます。（七一）

道理ある企てがまさに法であると伝えられます。それに対し、正しくない行動様式が非法であるというのが、徳ある人の教えです。（七二）

怒らず、不満なく、我執なく、もの惜しみせず、廉直で、静寂さをそなえている人々が徳行の人々です。（七三）ヴェーダ学に関し長老で、清潔で、行ない正しく、聡明で、目上に従順で、自制している人々が徳行の人々です。（七四）気力充実し、なしがたい徳行を行なう、彼ら善行の人々にとって、彼ら自身の行為により、おぞましさはすべて消滅します。（七五）賢者らが法に従って、その驚異的な、古の、永遠で確固たる徳行を法であると見れば、彼らは天界へ行きます。（七六）信仰あり、高慢でなく、バラモンを敬い、学識あり行ない正しい、そういう善き人々は天界へ行きます。（七七）

最高の法はヴェーダに説かれ、他の法は諸法典に説かれていて、そして有徳者に実行され

ます。有徳者にとって、以上の三種の法（ダルマ）の様相があります。(七八) 諸学を究（きわ）めること、聖場で沐浴すること、忍耐、真実、廉直、清潔さ。以上が徳行の例です。(七九) 善き人々は、一切生類に憐れみを抱き、常に不殺生に専念し、バラモンを愛し、いつも乱暴なことを言いません。(八〇) 有徳者たちに承認された有徳者たちは、善悪の業（ごう）の結果が集積してどのように熟するか、よく知っています。(八一) 善き人々は、道理をそなえ、美質をそなえ、すべての人々の幸せを望み、天界を獲得し、潔白であり、善き道に専念します。(八二) 有徳者たちに承認された有徳者たちは、布施をし、困窮者を援助し、一切の生類に憐れみを抱きます。(八三) 彼らはすべての人に尊敬され、学識を財産とし、苦行（タパス）（功徳）を積み、常に布施をし、幸福な世界を得、この世で繁栄を得ます。(八四)

善き人々は善き人々に会うと、専心して、力の限り与えます。妻や従者たちが苦しんでも。(八五) 善き人々は、このように世間の営みと法と自己の幸福を見て永遠に栄えます。(八六) 不殺生、真実語、柔和、廉直、敵意のないこと、高慢でないこと、廉恥、忍耐、自制、静寂〔をそなえています。〕(八七) 善き人々は、知性あり、志操堅固で、生類を憐れみ、欲望と憎悪を抱かず、世の人々に尊敬されます。(八八)

善き人々には三つの道のみがあると言われます。それは最高の行為です。すなわち、憎むべきでない、与えるべきである、常に真実を語るべきである、ということです。(八九) 善き人々はあらゆる場合に憐れみをもち、慈悲を知り、この世でこよなく満足して、法にかなった最高の道を進みます。偉大な徳行の人々にあっては、法はよく確定しています。(九〇) 彼

らは不満なく、忍耐し、静寂で、満足し、柔和に語ります。欲望と怒りを捨て、徳行に勤しみます。(九一) 彼らは常に孜々として法（ダルマ）に専心し、善行と博識をそなえた、善き人々の無上の道、徳行に勤しみます。(九二) 最高のバラモン様、彼らは智慧（プラジュニャー）の高楼に昇り、迷っている大衆を眺めます。そして、非常に清らかな、あるいは悪しき、様々な世間の営みを眺めます。(九三) バラモンの雄牛よ、以上、徳行の美質をはじめとして、すべてのことを、私の知性に応じて、聞いた通りに、あなたにお話ししました。(九四)」（第百九十八章）

マールカンデーヤは語った。――

ユディシティラよ、それからまたその徳高い猟師はバラモンに告げた。

「確かに私はこのようなおぞましい仕事をしています。(一) しかしバラモン様、運命は強力です。前生の業は越えがたいものです。これは前生になした悪業の報いなのです。バラモン様、私はこの悪業を滅しようと努力しています。(二) 運命が前もって定めた時は、殺害者は道具（実際に手を下す者）でありましょう。最高のバラモンよ、我らは実にこの仕事の道具なのです。(三) バラモンよ、我々は殺された動物たちの肉を売っています。神々や客人や従者たちや祖霊たちに供えて、享受され食べられることにより、彼らの法があります。(四) 草や蔓草や家畜や鳥獣が世の人々の食物である、という聖句（シュルティ）も説かれています。(五)

忍耐強い、ウシーナラの息子であるシビ王は、自分の肉を与えることにより、到達しがた

い天界に行きました。最高のバラモン様。(六)

バラモン様、かつてランティデーヴァ王の台所においては、毎日、二千頭の家畜が殺されました。(七)ランティデーヴァ王は常に肉をともなう食物を布施したので、彼の名声は比類のないものになりました。最高のバラモンよ、常に四カ月ごとの祭祀において、家畜が屠られました。(八)

『火は肉を欲する』という聖句も説かれています。バラモン様、バラモンたちは常に祭祀において、呪句によって浄化された家畜たちを殺しますが、それでも天界へ行くということです。(九)

最高のバラモン様、もし火がかつてあれほど肉を欲しなかったら、肉は何人の食物にもならなかったでしょう。(一〇)この点に関し、聖者たちは肉食について規定(令教)を述べました。

『常に神々や祖霊たちに、規定通りに、信仰をもって供えてから食べる者は、食べても罪にならない。(一一)』

そのようにすれば、肉を食べないものと見なされるという聖句も説かれています。梵行者(清浄行者)が受胎期に妻に近づいても、清らかなバラモンと見なされるように。(一二)この点に関しても、真実と虚偽とを確定して、規定が述べられています。バラモン様、かつてサウダーサ王は人間を食べました。彼はひどい呪詛に支配されていたのです。この点についてあなたはどう思われますか。(一三)

最高のバラモン様、私は自己の法(務職)だと考えて、この仕事を捨てません。前生の業の

結果だと考えて、この仕事によって生活します。(一四)バラモン様、この世で自己の職務を捨てれば、それは法にもとると見られます。自己の仕事に勤しむことが法であると確定しています。(一五)実に前生になされた業は、人間を捨てることはありません。配置者は[各々の]仕事を決定する際に、この規定を様々に観察しました。(一六)賢者よ、酷い仕事に携わる人は考慮すべきです。いかにしたら業を善にできるか。いかにしたらそれに支配されないですむか。このおぞましい業を除く多くの方法があるでしょう。(一七)私はいつも、布施、真実語、目上に仕えること、バラモンを敬うこと、法を守ることに専念しています。最高のバラモン様、私は多弁と高慢さを避けます。(一八)

農業は良いと考えられていますが、そこでは最高の殺生が行なわれると言われます。人々は鋤で耕作して、地中にいる多くの生き物や、その他の多くの生命を殺します。あなたはそれをどう思われますか。(一九)最高のバラモン様、彼らが米などと呼ぶ穀物の種は、すべて生きています。あなたはそれをどう思われますか。(二〇)バラモン様、人々は獣を襲い、殺し、食べます。木や草を切ります。(二一)バラモン様、木や果実には多くの生命があります。水にも多くの生命があります。あなたはそれをどう思われますか。(二二)バラモン様、全世界は生物を食べて生きる生物たちに満ちています。魚は魚を喰らいます。あなたはそれをどう思われますか。(二三)最高のバラモン様、多くの生物は他の生物によって生きています。生物は互いに食べ合っています。あなたはそれをどう思われますか。(二四)人間は歩きまわって、地面にいる多くの生命を足で踏み殺します。あなたはそれをどう思われますか。

(二五) 知識と分別を持つ人々が、座ったり寝たりして、多くの生命を殺しています。(二六) この一切は生命でいっぱいです。虚空も地上も。彼らは知らないで殺しています。あなたはそれをどう思われますか。(二七)

かつて人々は得意になって『不殺生！』と説きました。しかし最高のバラモン様、この世に生きているいかなる者が殺さずにすむでしょうか。いくら考えても、この世で殺生しない者は誰もいないのです。(二八) 最高のバラモン様、修行者たちは不殺生に専念しながらも、どうしても殺生を行ないます。彼らの努力により非常にわずかにはなっていますが……。(二九) 良家に生まれ、偉大な美質をそなえた人々が、あからさまに、非常におぞましい行為をして、しかも恥じないのです。(三〇) 人々は友人や敵が正しく行動しても正当に評価しません。(三一) 親類が繁栄しても喜びません。自分が賢者であるとうぬぼれる愚者たちは、師をも非難します。(三二) 最高のバラモン様、世間には多くのさかしまのことが見られます。それが法をそなえているとかいないとか言われるのです。あなたはそれをどう思われますか。(三三) 法とか非法とされる行為についても、多様なことが言えるのです。しかし、自己の仕事に専念する人は、大なる名声を得るでしょう。(三四)」

（第百九十九章）

マールカンデーヤは語った。——

ユディシティラよ、一切の法を守る人々の最上者である、その徳高い猟師は、再びバラモンの雄牛に、巧みに告げた。(一)

「長老たちは、法は聖典（ヴェーダ）を基準とすると説きます。というのは、法の道は微妙であり、多岐であり、無限でありますから。(二) 臨終や結婚に際して、虚偽を言ってもよい。虚偽は真実になり、真実は虚偽になるでしょう。(三) この上なく生類を益することが真実であると考えられています。非法はその反対からもたらされます。見なさい、法の微妙さを。(四)

最高のバラモン様、人が悪業をなそうと善業をなそうと、必ずその果報をうけます。この点は疑いありません。(五) 愚者は困難な状況に達して、ひどく神々を非難します。自分の業の悪果だということを理解しません。(六) 最高のバラモン様、愚者、不実な人、軽はずみな人は、幸不幸が転変する時、知性や善行や雄々しい努力によっても救われません。(七) もし人間の行為の結果が他に依存するものでないなら、人がある願望を抱けば、彼はそのそれぞれの願望を達成することでしょう。(八) ところが、自制し、巧妙で、叡知ある人々が、すべての仕事に失敗し、成果を得られないことが認められます。(九) 一方、常に生類を殺すことや、世人を騙すことに懸命な他の人は幸福に生きています。(一〇) 幸運の女神は座って何もしない男に奉仕します。しかし努力して仕事する人が目的を達成しません。(一一) 息子を欲する哀れな人々が神々を供養し苦行を行じた結果、十カ月間母胎にとどまってから息子が生まれます。しかし、それが一族の面汚しという場合があります。(一二) また他の者たちは、同様の吉祥な方法により生をうけ、父親の蓄積した莫大な財産や穀物や諸楽を生まれながら

に享受します。(二三)

人間の病気は業から生じたものです。この点は疑いありません。そして彼らは、小さな獣が猟師に苦しめられるように、種々の苦悩によって苦しめられます。(二四) 薬草を集めた巧妙な名医たちが、それらの病気を駆逐します。猟師が獣を狩るように。バラモン様。(二五) 食物に不自由しない人々は消化器官の疾患に苦しめられ、食べることができません。ご覧なさい。法（ダルマ）を守る人々の最上者よ。(二六) その他の腕力のある多くの人々は困窮して、食物を得ることに難儀します。最高のバラモン様。(二七)

このように世人は援助なく、迷妄と悲しみに圧倒され、何度も激流に引き倒され、流されて行きます。(二八) もし自由があれば、すべてのものは死なず、老いないでしょう。一切の願望を達成し、不快な目に会わないでしょう。(二九) あらゆる人は世人の上に上に行くことを望み、力の限り努力しますが、思い通りには行きません。(三〇) 同じ星宿に生まれ、同じ祝福を受けていても、業の結合において、はなはだしく多様な結果が認められます。(三一) 最高のバラモン様、誰も運命を支配できません。それぞれの本来の業の成果が現世で見られるのです。(三二) バラモン様、聖典（シュルティ）にあるように、この世の一切の生類の肉体は無常ですが、生命（ジーヴァ）(個我)は永遠です。(三三) 個々の生物が殺される時、肉体は滅びますが、生命は業の束縛と結びついて、他の個体に移ります。(三四)」

バラモンは言った。

「法を守るものたちの最上者よ、生命はどのようにして永遠であるのか、私はそのことを如実に知りたいのです。最も雄弁な人よ。(三五)」

猟師は言った。

「身体が滅びても生命は滅びません。しかし愚者たちは、誤って、それが死ぬと考えます。生命は他の身体に移ります。彼の身体が滅びることが『五元素に帰すること』(死)と呼ばれるにすぎません。(三六) ある人が行なった行為を他の人が引き受けることはできません。それを行なった人のみが苦楽を引き受けるのです。人が何かある行為をすれば、その人がそれを引き受けます。行なわれたことが消滅することはありません。(三七) その性行が清浄でなかった人々が清浄なものになる。最上であった人々が悪人になる。この世の人々は各自の業によってつきまとわれています。それらの業によって影響を受けて、再び〔他の個体として〕生まれるのです。(三八)」

バラモンは言った。

「どのようにして彼(生命)は母胎に生ずるか。またどのようにして清浄な者たち、清浄でない者たちは、善と悪との生をうけるか。また、彼はどのように立ち去るか。最高の人よ。(三九)」

猟師は告げた。

「この業は受胎とともに連結すると思われます。ところで私はあなたに、次のことを簡潔に手短に申しあげましょう。最高のバラモン様。(四〇) 集積したものがいかにして再び生まれるか。善をなしたものが善い母胎に生まれ、悪をなしたものが悪い母胎に生まれる次第を。

(三一) よい行為により神となり、善悪の混じった行為により人間となり、愚かしい行為により畜生の胎に生まれ、罪悪により下方に趣きます。(三二)

人間は輪廻において、常に生死老の苦しみに攻撃され、自分がなした罪過によって苦しめられています。(三三) 諸々の生命（個我）は、業の束縛により縛られて、幾千という畜生の胎に行き、巡り巡って地獄へも行きます。(三四)

生類は死んでから、自分のなした種々の行為に苦しみ、その苦しみを除去するために、清浄でない母胎に達します。(三五) それから再び多くの新しい業を積み、再び苦しむのです。病人が不適切な食物を食べて苦しむように。(三六) 彼は絶えず苦しみますが、苦しみなく幸福だといわれます。それから、業の束縛はなくならず、また新しい業が生起するから、彼は多大な苦痛とともに、輪廻において、車輪のように動きまわります。(三七) もし彼が束縛を離れ、諸々の行為により清らかになれば、善行者たちの世界に達します。そこに行けば悲しむことのない世界に。(三八) 悪人は悪をなしつつ、悪の終わりに達することはありません。それ故、善を行なうべく努め、罪を避けるべきです。(三九) 不満なく、恩を知り、善にのみに専念すれば、人間は幸福と、法（ダルマ）と実利（アルタ）と、天界とを獲得します。(四〇) 浄化され、制御され、抑制され、自制した賢者は、この世とあの世において、幸せな生活を続けます。(四一) 善き人々の法に従うべきです。徳行の人のように行為を行なうべきです。人々を苦しめないように生活しようと望むべきです。バラモン様。(四二) 思慮分別をそなえ、教典に通達した

徳行の人々がいます。この世では自己の法（ダルマ）（職務）に従って行為すべきです。職務が混乱してはいけません。(四三) 知者は法により喜びます。法に依存して生活します。最高のバラモン様、法に従って彼に財産が得られる時、まさにその法の根に、彼が見出した諸徳を注ぎます。(四四) このようにして彼は徳性あるものになり、彼の心は平静になります。彼は友人に満足し、現世と来世において喜びます。(四五) 最上の方よ、彼は好ましい音声と接触、美しい形、芳香を得て、主権をも得ます。これが法の果報であると知られております。(四六)

偉大なバラモン様、彼は法の果報を得ても満足しません。彼は知識の眼により、満足しないで、厭世を感じます。(四七) 智慧の眼を持つ人は、この世で、罪悪を犯すことを好みません。彼は望みのままに欲を離れ、法を捨てません。(四八) 世間は必ず滅するものであると見て、一切を捨てることに努め、それから、誤った手段でなく正しい手段によって、解脱に向けて努力します。(四九) このようにして彼は厭世を感じ、悪しき行為を捨てます。そして徳性ある人になり、最高の解脱を得ます。(五〇) 生類にとって、苦行（タパス）（修養）は最高です。静寂と自制がその根です。それにより彼は、心で望むすべての願望を得ます。(五一) 諸々の感官を抑制することにより、真実により、自制により、彼はブラフマン（梵、絶対者）の最高の境地に達します。(五二)」

バラモンはたずねた。

「誓戒を堅く守る者よ、諸感官と呼ばれるものはいかなるものか。どのようにして制御できるか。それらを制御した果報は何か。(五三) また、どのようにしてそれらの果報を得られる

か。法を守る者たちの最上者よ、徳高い人よ、私はこの法を如実に知りたいのです。(五四)」

（第二百章）

マールカンデーヤは語った。

ユディシティラよ、徳高い猟師はバラモンにこのように問われて、バラモンに次のように答えた。王よ、それを聞きなさい。(一)

猟師は告げた。――

「人間にとって、認識のためにまず最初に思考器官が働きます。それを得ると、〔人は〕欲望と怒りを得ます。最高のバラモン様。(二) それから、それらを満たすために、人は努力し、大きな仕事を企てます。そして好ましい形や香りを絶えず求めます。(三) それから激情が、それに続いて憎悪が生じます。それから貪りが、それに続いて迷妄（愚かしさ）が生じます。(四) 貪欲、激情、憎悪に支配された人は法を理解することはありません。彼は偽善により法を行ないます。(五) 偽善により法を行ない、欺瞞により利益を喜び、欺瞞により成就した財産に満足します。それから悪行を望みます。最高のバラモン様。(六) 友人や賢者たちに制止されても、彼は聖典に関係した、結びついた回答を述べます。(七) しかし激情と憎悪により、彼に三種の非法が増大します。彼は悪いことを考え、言い、行ないます。(八) 非法に専念する彼の善い性質は消滅します。その悪行をなす者と同様の性行の人々が彼の友達にな

ります。(九) 彼はそれにより、現世と来世において不幸になり、破滅します。

以上が邪悪な性質のものです。ところで法による利得について私の申し上げることを聞いて下さい。(一〇) まずこれらの罪悪を智慧によって知り、幸不幸について通達し、善き人々に仕える人、そういう人は善を企てるから、法についての理解が生じます。(一一)」

バラモンは言った。

「あなたは、いまだかつて説かれたことがないような、すばらしい法を説きました。あなたは神聖な力をもつ偉大な聖仙であると私は思います。(一二)」

猟師は言った。

「偉大なバラモンは祖霊たちと同じく、常に優先的に食べます。この世で思慮ある人々は、全身全霊で彼に好ましいことをしなければなりません。(一三) 最高のバラモン様、そこで彼らに好ましいことをあなたに申し上げましょう。バラモンたちに敬礼して、バラモンの知識を述べますから、私の話をお聞き下さい。(一四)

バラモン様、いたるところ何ものにも征服されがたいこの全世界は、五元素よりなり、それよりも高いものはありません。(一五) 五元素とは、空（霊気）、風、火、水、地です。それらの属性は、音声、接触、形、味、香です。(一六)（(一七)は原文疑問。英訳注は、空には音声が属し、風には音声、接触が属し、火には音声、接触、形が属し、水には音声、接触、形、味が属し、地には音声、接触、形、味、香が属するということを説こうとしたもの、と解する。）

第六の要素はマナス（思考器官）と呼ばれます。また、第七の要素はブッディ（根源的思惟機能）で、その次がアハンカーラ（自我意識）です。(一八) それから、五つの感官、そして、激質、純質、暗質で

す。第十七の群が非顕現者と呼ばれます。(一九) 顕現、非顕現の一切の感官の対象によって深く覆い隠された、第二十四の、顕現・非顕現よりなる属性(群)(原文疑問)があります。以上、あなた様にすべてお話ししました。更にどのようなことを聞きたいと望まれますか。(二〇)」

(第二百一章)

マールカンデーヤは語った。――

バーラタよ、徳高い猟師にこのように言われたバラモンは、再び心の喜びを増大させる対話をした。(一)

バラモンは言った。

「法を知る人々の最上者よ、五元素と言われるものがあるが、五元素の一つ一つの属性を私に正しく説いて下さい。(二)」

猟師は言った。

「地水火風空が五元素です。それらすべての属性について順次申し上げましょう。(三) バラモン様、地は五つの属性を持ち、水は四つの属性を持ちます。火は三つの属性を持ち、虚空と風とで三つの属性を持ちます。(四) 音声、接触、形、味、香が、地の五つの属性です。他のすべての元素のうちで最も多くの属性を有します。(五) 最高のバラモン様、音声、接触、形、味が水の属性です。(六) 音声、接触、形が火の三つの属性です。音声、接触が風の属性

です。虚空の属性は音声のみです。(七)

バラモン様、これらの十五の属性は、五元素において存します。これらの一切の元素において、諸世界は安立します。それらは相互に他を侵害せず、調和が存します。(八) しかるに、動不動の諸物が不均衡な状態になると、主体(個我)は死の時を迎え、他の身体に乗り移ります。(九) それらは次々と滅し、次々と生じ、いたるところに、五元素からなる諸要素が認められます。この動不動の全世界は、それらに取り巻かれています。(一〇) 諸感官により作られる各々のものが「顕現したもの」(ヴィヤクタ)であると伝えられます。感官を超えた、証因によって把捉されるものが「非顕現のもの」(アヴィヤクタ)であると知られるべきです。(一一)

人がここで各自、音声などを把捉する諸感官を制御して苦行すれば、自己が世界のうちに広がり、世界が自己のうちに広がるのを見ます。一方、高いものと低いもの(一切)を知ってはいるが、執着している人は、一切万物を見ます。(一二―一三) あらゆる時、すべての状態における一切万物を見る、ブラフマンと一体になった人は、不善と結びつくことはありません。(一四) 感覚器官にもとづく、迷妄より生ずる煩悩を克服した人にとって、世界は、最高存在に至る道を照らす知性の照明により見られます。(一五) 人(生類、個我)は始めもなく終わりもなく、自ら生じ、常に不滅であり、比べるものもなく、身体がない。叡知ある尊者はそう説かれました。バラモン様、それについてあなたが私に問われたところの一切は苦行(修養)にもとづいています。(一六)

天界と地獄とは、いずれもすべて諸感官に他なりません。感官が制御されれば天界をもた

らし、自由にされれば地獄をもたらします。(二七)あのヨーガの作法全体は、感官を制御することです。それはすべての苦行（修養）と地獄との原因です。(二八)諸感官の執着により、人は疑いもなく罪過を受けます。しかしそれらを統御すれば、成就を得ます。(二九)この常に働く六根を自己のうちで支配すれば、その感官を制御した人は、決して罪悪や不利益と結びつくことはありません。(三〇)

人間にとって、身体が車であるとされる。アートマン（真我）が御者であり、諸感官が馬であると言われる。賢者は巧みな御者のように、調教されたそれらの良馬により、安楽に進んで行く。(三一)

この常にかき乱す六根を自己のうちで制御できる賢者は、手綱を巧みにさばく最高の御者のようです。(三二)道で自由に走らされた馬のような、制御されない感官を確固たるものにすれば、その確かな操縦により、必ずや感官を征服することができるでしょう。(三三)もし意が動きまわる感官に従えば、それはその人の知性を奪います。風が水上の舟を吹き払うように。(三四)人々は迷妄から、六根に関する果報を期待してあくせくしていますが、それらについて決定して学ぶ者は、瞑想により生ずる果報を見出します。(三五)（第二百二章）

マールカンデーヤは語った。──

徳高い猟師がこのように微妙なことを語った時、バラモンは非常に集中して、再び微妙な

ことを質問した。(一)

バラモンは言った。

「純質と激質と暗質という属性について、おたずねします。私に如実に御教示下さい。(二)」

猟師は言った。

「おお、あなたが私にたずねられたことを申し上げます。それらの属性を一つ一つお話ししますからお聞き下さい。(三)

それらのうち暗質は迷妄を本性とします。激質は活動を促進するものです。そして純質は照明作用に富むから最高であると言われます。(四)暗質におおわれた者は、無知に支配され、迷い、いつも眠り、分別をなくし、見た目が悪く、暗く沈みこみ、怒り、無気力です。(五)激質的な人は、雄弁で、政策力があり、情熱的で、不満を抱き、好奇心があり、頑固で、誇り高いものです。梵仙よ。(六)純質的な人は、輝きに満ち、堅固で（充足し）、好奇心がなく、不満がない。怒らず、知性あり、自制心があります。(七)純質的な人は目覚め、世間の営みにより苦しみます。悟るべきことに目覚めた時、彼は世間の営みを嫌悪します。(八)というのは、まず離欲の性質が生じ、我執が穏やかになり、廉直さが輝きます。(九)それから、彼にとって、すべての相対的なことがなくなり、いかなる場合も全く迷うことがなくなります（異本による）。(一〇)よい徳性を保つなら、従僕の胎に生まれた者は実業者や王族となります。バラモン様。(一一)廉直さを保つ者は、バラモンの地位に生まれます。

以上、あなた様にすべての属性について申し上げました。更に何についてお聞きになりた

いですか。(二二)」(二三―五一略)

(第二百三章)

マールカンデーヤは語った。――

このように、すべての解脱（モークシャダルマ）の法が説かれた時、ユディシティラよ、バラモンは心から喜び、徳高い猟師に告げた。(一)

「あなたは道理をそなえたこれらすべてのことを説かれました。法（ダルマ）についてあなたの知らないことは何もありません。(二)」

猟師は言った。

「最高のバラモン様、私の法を実際に見て下さい。その法によって私はこの成就を得ました。バラモンの雄牛よ。(三)尊者よ、お立ちなさい。速やかに家の中にお入りなさい。法を知る方よ、どうか私の父母に会って下さい。(四)」

マールカンデーヤは語った。――

そう言われて、中に入ったバラモンは、四屋よりなる白い大邸宅を見た。それは最高に飾られ、心地よく、非常に魅力的だった。(五)神の家にも似て、神々にもこよなく敬われ、寝台や座席に満ち、最高の香りにあふれていた。(六)そこに白い衣服を着た彼の両親がいた。彼らは尊敬され、食事を終え、非常に満足し、最上の席に座っていた。徳高い猟師は彼らを

見ると、その足下に平伏した。(七)

両親は言った。

「法を知る者よ、立ちなさい。立ちなさい。法があなたを守りますように。私たちはあなたの清さを喜んでいます。長寿でありますように。息子よ、私たちはよい息子であるあなたに、いつもよく敬われています。(八)神々のうちでも、あなたには〔両親以上の〕神は他に何もありません。あなたは敬虔だから、バラモンの自制をそなえています。(九)父親の祖父、曾祖父たちは、あなたの自制により、そして我々を敬うことにより、いつも喜んでいます。(一〇)心と行為と言葉とにより、あなたは奉仕を欠いたことはありません。そして今、あなたには〔我々に仕える〕以外の無益な考えは見られません。(一一)ちょうどジャマダグニの息子であるラーマ（パラシュラーマ）が両親をよく敬ったように、あなたも同様に、いやそれ以上に、何でもしてくれました。(一二)」

マールカンデーヤは語った。――

それから徳高い猟師はバラモンを両親に紹介した。二人は「ようこそ」とバラモンに挨拶した。(一三)バラモンはそのもてなしを受け入れて、二人にたずねた。

「あなた方と、御子息と、従者たちは、この家で恙（つつが）無くお過ごしですか。お身体はいつも健康ですか。(一四)」

両親は言った。

「バラモン様、我々はこの家で、従者たちに囲まれていつも息災です。尊者よ、あなた様もここに恙無く来られましたか。(二五)」

マールカンデーヤは語った。――

バラモンは喜んで、彼らに「はい」と答えた。徳高い猟師はバラモンに内容のある言葉を告げた。(二六)

「尊者よ、この父母は私の最高の神様です。私は神に対してなすべきことを彼らにしています。(二七)インドラをはじめとするすべての三十三神が全世界の人々に敬われるべきであるように、この老父母は私に敬われるべきです。(二八)バラモンたちが神々に供物を捧げるように、私も孜々として両親に仕えます。(二九)バラモン様、この父母は私にとって最高の神です。私はいつも、花や果実や宝物で二人を満足させます。(三〇)私にとってこの二人は、賢者たちが語るところの聖火です。私にとって彼らは祭祀であり、四ヴェーダであり、一切です。(三一)私の生命、妻、子供たち、友人たちは彼らのためにあります。私は妻子とともに、いつも彼らに仕えています。(三二)私は自ら彼らを入浴させ、足を洗います。自ら食事を出します。最高のバラモン様。(三三)私は彼らに不快なことを言わず、快い話をします。私はたとい法に背いても、彼らの好むことをします。(三四)親が法であると考えてそうするのです。最高のバラモンよ。このように私は孜々として、いつも彼らに仕えています。

(二五)バラモン様、繁栄しようと望む人によって、五つのものが大切です。父、母、火、自身、師です。最高のバラモン様。(二六)最高のバラモン様、これらに対して正しく処すれば、彼にとって聖火を常に保つのと同じ功徳があります。以上が家住期にある者の永遠の法です。(二七)」

(第二百四章)

マールカンデーヤは語った。――

徳高い猟師は、父母をグル(敬うべき存在)としてバラモンに示して、再びバラモンに告げた。(一)

「私は開眼しました。この苦行(修養)の力を御覧なさい。そのために、あの夫に懸命に仕える自制した貞女が、『ミティラーに行きなさい。そこに住む猟師があなたに法を説くでしょう』と、あなたに告げたのです。(二―三)」

バラモンは言った。

「誓戒を堅く守る、法を知る方よ。夫に貞節で真実で、徳性に満ちた女性の言葉を思い出すにつけ、あなたが高徳であると確信します。(四)」

猟師は言った。

「最高のバラモン様、あの時、あの貞節な妻が私についてあなたに告げたことは、疑いもなく正しい見方です。(五)しかしバラモン様、あなたによかれと思って、私はこのように申し上げたのです。友よ、私の言葉をお聞きなさい。あなたに有益なことを申します。(六)

最高のバラモン様、あなたは父母に悪いことをしました。非の打ち所のない方よ、あなたはヴェーダの発声(学習)のために、彼らの許しを得ないで家を出ました。あなたのしたことは不適切です。(七)あなたの御両親は、お気の毒にも、悲しみのあまり盲目になってしまいました。彼らを慰めるためにお帰りなさい。偉大な法(ダルマ)があなたを見捨てないように。(八)あなたは苦行し、偉大で、いつも法に専念しています。それらすべてが無意味になってしまいます。すぐに彼らを慰めなさい。(九)バラモン様、私を信じて下さい。決して背いてはなりません。梵仙よ、今すぐお行きなさい。私はあなたにとってよいことを申し上げました。(一〇)」

バラモンは言った。

「あなたが言われたことは、疑いもなく、すべて真実です。私はあなたに満足しました。法を知る人よ、善行と徳性をそなえた方よ。(一一)」

猟師は言った。

「あなたは神のような人です。というのは、古の永遠の法、神聖で、自己を制しない人々には到達されがたい神聖な法に、あなたは専心していますから。(一二)急いで、父母に対する孝行に精を出しなさい。それ以上の法は何もありません。(一三)」

バラモンは言った。

「私はここに来て、非常に幸いなことにあなたに会えました。あなたのように法を説く人は、この世で得られがたいものです。(一四)法を知る人は、千人に一人いるかいないかです。私

はあなたの真実により満足しました。最高の人よ、幸あらんことを。(一五)あなたは地獄に堕ちようとする私を救って下さった。私があなたに会えたのも、そうなるべく定められたことです。非の打ち所のない人よ。(一六)ヤヤーティ王が堕ちたが、娘のよい息子たちに救われたように、ここで私もあなたに救われました。人中の虎よ。(一七)あなたの言葉に従い、私は父母に仕えます。自己を制御しない人は、法(ダルマ)と非法とを判別できません。(一八)

永遠の法は、シュードラ(従僕の階層)から生まれた者には知られがたいものです。あなたはシュードラではないと私は思います。業(ゴウ)(カルマン)が熟してあなたがシュードラの状態になったのも、運命がその原因です。(一九)大知者よ、そのことを如実に知りたいと思います。あなたは自己を制御した方です。どうかすべてをありのままに言って下さい。(二〇)」

猟師は言った。

「最高のバラモン様。バラモン(の頼みは)無視できないものです。前生の体において私に起こったことをすべてお聞きなさい。(二一)最高のバラモン様。まことに私は前生はバラモンでした。私はヴェーダを学び、非常に有能で、ヴェーダの補助学に通達していましたが、自分の犯した過失により、今の状態になりました。(二二)

ある弓のヴェーダ(兵学)に通達した王が私の友でした。バラモン様、私は彼とつきあううちに、弓が得意になりました。(二三)ある時、王は狩に出かけました。彼は主立った戦士を連れ、大臣たちに囲まれていました。彼はそこ、隠棲所の付近で、非常に多くの鹿を殺しました。(二四)最高のバラモン様、その時、私は恐ろしい矢を放ちました。ある聖者(ムニ)がその真

っ直ぐな矢に撃たれました。彼は大地に倒れて、大声で叫びました。
『私は何も罪を犯していない。（二五）誰がこのような悪さをしたのか。（二六）』
私はその聖者を鹿だと思い、急いでそのそばに行きました。ところが私は、その恐ろしい苦行を積んだバラモンの聖者が、真っ直ぐな矢に射られ、地面でうめいているのを見ました。（二七）とんでもないことをしたと、私の心はひどく痛みました。そして、私は聖者に言いました。
『知らないでこのようなことをしました。バラモン様、どうか私をお許し下さい。（二八）』
聖者は怒り狂って、私にこう答えました。
『残酷なバラモンよ、お前はシュードラの胎に生まれ、猟師となるであろう。（二九）』

（第二百五章）

猟師は言った。
「このように、私はその時、その聖仙によって呪詛をかけられました。最高のバラモン様。私はその言葉に通達した聖仙を次のように言ってなだめようとしました。（一）
『聖者よ、私は今日、知らないでこのようなことをしたのです。尊者よ、どうかすべてを許して下さい。お願いします。（二）』
聖仙は言った。

『呪いは変わることはない。必ずその通りになる。しかし慈悲により私は今、少し恩寵をかけるとしよう。（三）
あなたはシュードラの胎に生まれるが、法（ダルマ）を知る者となろう。疑いもなく、父母に孝行をするであろう。（四）その孝行により、あなたは大きな成果を達成するであろう。あなたは前生を記憶しているだろう。そして天界へ行くであろう。呪詛が尽きた時は、あなたは再びバラモンになるであろう。（五）』」
猟師は続けた。
「このようにして、かつて私はその恐ろしい威光をもつ聖仙に呪われました。しかし彼はこのような恩寵を私に授けました。最上の人よ。（六）私は彼の矢を抜き、隠棲所に連れて行きました。彼は一命を取り留めました。（七）
最高のバラモン様。私の過去世の話をすべてあなたに申し上げました。私はすぐに天界へ行かなければなりません。（八）」
バラモンは言った。
「大知者よ、人間はこのように諸々の幸不幸を得るものです。嘆いてはなりませぬ。友よ、自分の生まれを知って、なしがたいことをやりました。（九）賢者よ、あなたの仕事の罪は、自分の生まれがもたらしたものにすぎません。少しの間それに耐えなさい。それからあなたはバラモンになるでしょう。今でもあなたはバラモンだと私は考えます。疑う余地はありません。（一〇）

バラモンであっても、堕落させる邪悪な行為を行ない、偽善者で、悪事にふければ、シュードラと等しいでしょう。（一一）シュードラといえども、自制、真実、法に常に精励すれば、彼はバラモンであると私は考えます。実に行動によって、バラモンなのです。（一二）人は業の罪により、恐ろしい難儀な帰趣に達します。最上の人よ、あなたの罪過はすっかり尽きたと私は考えます。（一三）あなたは嘆くことはありません。あなたのような、世間の営みを知り、いつも法に専念している人は嘆かないものです。（一四）」

猟師は言った。

「智慧により心の苦しみを滅すべきである。薬により身体の苦しみを滅すべきである。これが分別の力である。愚者と同等になってはいけません。（一五）小知の人々は、好まないものに会うことにより、好ましいものと別れることにより、心が苦しみます。（一六）一切の生類はよい面と悪い面をそなえています。ただ一つのものに悲しみの種があるわけではありません。（一七）人々は好ましくないものを見ると速やかに嫌悪します。何か方策を見出したらそれに対処します。嘆いている者には何も実現しないでしょう。ただ苦しむだけです。（一八）

苦と楽とをともに捨てる人々のみが幸福に暮らします。その賢者らは知識に満足しています。（一九）愚者はもっぱら不満を抱き、賢者は満足します。不満が尽きることはなく、満足は最高の幸福です。道に達した人は、最高の帰趣を見て、嘆くことはありません。（二〇）心を嘆きに向けてはならぬ。嘆きは最高の毒である。それは怒った蛇のように、無知な愚者を殺す。（二一）困難な状況になった時、嘆きがその人を支配すれば、威光を失った彼には、人

間の目的は存在しません。（二二）なされた業の果報は必ずや認められます。絶望したなら、何のよい結果も得られません。（二三）更に、苦しみを脱する方法を見出すべきです。嘆くことなく開始し、専心し、悪徳（禍災）を離れるべきです。（二四）万物が滅することを考えて、知性（根源的思惟機能）のかなたに達した知者たちは、最高の帰趣を見つつ、嘆くことはありません。（二五）賢者よ、私は時（死）を待ち望みつつ、嘆くことはありません。このように予見して、私は意気消沈しません。最高のバラモン様。（二六）」

バラモンは言った。

「あなたは知者です。叡知ある人です。あなたの知性は広大です。私はあなたのことを嘆きません。あなたは知識に満足して、法を知っています。（二七）私はあなたとお別れします。御機嫌よう。法があなたを守りますように。法に関し放逸でないように。法を守る人々の最上者よ。（二八）」

マールカンデーヤは語った。——

猟師は合掌して、「かしこまりました」と言った。最上のバラモンは右まわりにまわって敬意を表してから出発した。（二九）一方バラモンも家に帰り、道理にかない、老いた父母に孜々として孝養を尽くした。（三〇）

ユディシティラよ、以上、たずねられた法について、あなたにすべて残らずお話しした。わが子よ、法を保つ者のうちの最上者よ。（三一）夫に貞節な女性の偉大さ、バラモンの父母

に対する孝養、猟師に存する法が語られた。(三二)
ユディシティラは言った。
「一切の法を保つ者のうちの最上者よ。最高のバラモンよ。この最高の法に関する話は、非常に驚異的です。(三三) 賢者よ、耳に快いので、あっという間に終わってしまいました。しかし尊者よ、私は最上の法について聞いていて、飽きることはありません。(三四)」

(第二百六章)

アンギラス(火神)の系譜

ダルマ王はこの法をそなえた神聖な物語を聞いてから、再び、苦行を積んだマールカンデーヤ仙にたずねた。(一)
ユディシティラは言った。
「かつて、どのようなわけで火神(アグニ)は森へ行ったか。そして火がなくなった時、大仙アンギラスはどのようにして火となって供物を運んだか。(二) 火神は唯一なのに、諸々の祭式において多数のように見えます。尊者よ、私はこれらすべてを知りたいと望みます。(三)
クマーラ(スカンダ)が生まれたこと、火神の息子となったこと、ルドラ(シヴァ)により、ガンガーやクリッティカーに生まれた次第を。(四) ブリグ族の聖者よ、私は好奇心にかられ、以上

のことをあなたからありのままに聞きたいと望んでいます。(五)」
マールカンデーヤは語った。——
この点に関し、次のような昔話(イティハーサ)が伝わっている。火神が怒って、苦行を行なうために森へ行った次第について。(六) そして、アンギラス仙が自ら火神となり、自己の輝きにより熱し、闇を滅ぼした次第について。(七) そして聖者が火神のようになり、火神を凌駕しつつ隠棲所に住み、全世界を照らしていたことについて。(八)
威光ある火神は苦行を行なっていたが、聖者の威光に苦しめられてひどく落胆し、どうしたらよいかわからなくなった。(九) 火神は考えた。
「梵天は世のため別の火を作り出した。私が苦行を行なっているうちに、火神の性質がなくなったから。(一〇) どうしたら私は再び火神にもどれるのか。」
彼はそう考えて、火神のように諸世界を熱している偉大な聖者を見た。(一一) 彼は恐る恐る、ゆっくりと近づいた。するとアンギラスは彼に言った。
「速やかに、再び世界を繁栄させる火神の状態にもどりなさい。動不動の三界において、あなたはよく知られています。(一二) 梵天は闇を払うあなたをまず最初に創造しました。すぐにもとの地位にもどりなさい。闇を払う者よ。(一三)」
火神(アグニ)は言った。
「世界における私の名声は失せた。あなたが火神となったから。人々はあなただけを火神と

思い、私はそうではないと思うであろう。（二四）私は火神の性質を捨てる。あなたが第一の火となれ。私は第二の火、プラージャーパティヤカになる。（二五）」

アンギラスは言った。

「生類を天界に導く功徳（プニャ）を行ないなさい。闇を払う火神となりなさい。神よ、速やかにまず私を第一の息子にして下さい。（二六）」

マールカンデーヤは語った。——

火神はアンギラスの言葉を聞いて、その通りにした。王よ。そのアンギラスの息子がブリハスパティである。（二七）そのアンギラス（火神に等しい）の息子が火神の第一の息子であることを知って、神々は近づいて、その原因についてたずねた。（二八）彼は神々にたずねられて、そこで原因を告げた。神々はアンギラスの言葉を受けいれた。（二九）

ここで、輝きに満ちた種々の火について語ろう。「ブラーフマナ」（祭儀書）において、多くの祭式に用いられて、多様であると知られた火について。（三〇）（第二百七章）

クル族の王子よ、彼（アンギラス）は梵天の第三の息子であるが、アーパヴァの娘が彼の妻となった。彼の子供たちについて、私の言うことをお聞きなさい。（一）

ブリハッジョーティス、ブリハトキールティ、ブリハドブラフマン、ブリハンマナス、ブ

リハンマントラ、ブリハドバーサ、ブリハスパティが彼の息子である。（二）

アンギラスの長女のバーヌマティーという女神は、彼のすべての子供のうちで、その容色にかけて比べるものがなかった。（三）アンギラスの次女はラーガーという。すべての生類は彼女に愛（ラーガ）を抱いた。それ故、ラーガーと呼ばれたのである。（四）アンギラスの三女はシニーヴァリー（新月）である。彼女は体が華奢なので、見えるか見えないかであるから、カパルディ（シヴァ）の娘（弦月）と呼ばれた。（五）（四女は）光輝をともなうからアルチシュマティー、（五女は）供物（ハヴィス）をともなうからハヴィシュマティーと呼ばれた。アンギラスの清らかな六女はマヒシュマティーと呼ばれた。（六）アンギラスの七女はマハーマティーである。輝かしい盛大な祭式において尊重される（マハーマティー）からそう呼ばれた。（七）そしてそのアンギラスの娘である女神を見て、唯一で分割できないから、人々がクフクフと言って驚嘆するから、彼女をクフーとも呼ぶ。（八）（第二百八章）

マールカンデーヤは語った。——

ブリハスパティの妻は誉れ高いチャーンドラマシーであった。彼女は六名の聖火と一名の娘を生んだ。（一）ブリハスパティの輝きに満ちた息子に、シャンユという火がいた。献供において、その火のために精製バターが捧げられる。（二）季節祭、献供、馬祀において最初に生じた獣が彼に捧げられる。この強力な火は唯一であるが、多量の光輝をもつ焔により輝い

ている。（三）シャンユの無比の妻である貞女サティヤーはダルマの娘である。彼には輝く火(アグニ)の息子と、貞節な三人の娘がいた。（四）

彼の長男はバラドゥヴァージャ火と呼ばれる。この火は、祭祀において、最初のバターの部分で供養される。（五）シャンユから生まれた次男がバラタという名の火である。すべての満月祭において、精製バターがスルヴァ杓で供えられる。（六）その他に三人の娘がいて、バラタが彼女たちの夫である。しかるに彼の息子がバラタで、一人娘がバラティーである。（七）バラタ火は造物主(プラジャーパティ)バラタ火の息子である。大きい時はこの上なく恐ろしい。（八）バラドゥヴァージャの妻はヴィーラーで、跡継ぎがヴィーラである。ソーマと同じように精製バターで、ただし小声で彼の祭祀を行なう、とバラモンたちは言う。（九）

第二の供物によりソーマと結びつく火は、ラタプラブ、ラタドゥヴァーナ、クレンバレータスと呼ばれる。（一〇）彼はサラユーにシッディを生ませた。そしてその輝きにより太陽をおおった。彼は常にアグニ讃歌を受け取り、祈願において呼びかけられる。（一一）ニシュチヤヴァナという火は、常に名声と力と繁栄にかけて凋落する(アチャヴァテー)ことがないのでそう呼ばれるが、ひたすら大地〔の女神〕を讃える。（一二）彼の息子であるヴィパーパ火は、協約の行為において真実であり、罪悪を離れ(ヴィパープマン)、汚れから離れ、清浄で、火焔を出して燃え上がる。（一三）ニシュクリティという火は、泣き喚ぶ生類を癒してくれる(ニシュクリティ)。彼は正しく敬われれば輝かせてくれる。（一四）彼の息子はスヴァナという火であり、苦痛をもたらす。彼により、苦悩にあえぐ者たちはうめき続ける。（一五）全世界の知性を凌駕して存する火を、真我(アートマン)について知る人々は、ヴィシュヴァジットと呼ぶ。（一六）生類の内部に宿って、食べたものを消化する火は、祭祀において、ヴィシュヴァブジュ（一切を食べるもの）という名で、すべての人々の間で知られている。（一七）梵行者であり、自制し、常に偉大な誓戒を保つ火、バラモンたちが調理祭(パーカヤジュニャ)においてその火を供養する。（一八）それはゴーパティという名で広く知られ、川がその愛しいものであった。祭官たちは、その火に対してすべての祭式を行なう。（一九）雌馬の顔をして水を飲んでいる、最高に恐ろしい、上方に向かう（ウールドゥヴァバージュ）火、このウールドゥヴァバージュと呼ばれる聖者(カヴィ)は、出息(プラーナ)に宿っている。（二〇）彼のために家庭の北口の供物が常に供えられるところの、それによりバターが見事に供えられる（スヴィシタ）最高の火が、スヴィシタクリットと呼ばれる。（二一）

静まり返った生類における怒りの火であり、怒りの精髄であるマニャティーという娘が生まれた。それはスヴァーハーであり、一切の生類の間で、恐ろしく、残酷である。（二二）カーマという火があるが、天界においても、容色にかけて彼に等しいものはいないということで、無比であるということで神々はそう名づけたのである。（二三）アモーガという火は、戦闘において敵を滅ぼす火である。彼は歓びによって怒り、弓を持ち、花輪をつけ、戦車に乗っている。（二四）三種のウクタ（嘆讃）により讃えられるウクタは、大なる音声を生み出すが、サーカーマーシュヴァと呼ばれる。（二五）

（第二百九章）／（第二百十章～第二百十二章略）

スカンダ（韋駄天）の誕生

マールカンデーヤは語った。――
非の打ち所のない人よ、私はあなたに様々な火の系譜を語った。クルの王子よ、今度は英邁なカールティケーヤ（韋駄天）の誕生について聞きなさい。(一) その無量の力を持つ、アドブタの驚異的な（アドブタ）息子である彼について語ろう。その神聖で誉れ高い者は、七仙の妻たちにより生まれた。(二)
かつて、神々と阿修羅たちはお互いに殺し合った。その戦闘において、恐ろしい姿の魔類が常に神々に勝利した。(三) その軍隊が幾度も彼らに殺されるのを見て、インドラは、自分の軍隊の司令官を求めて、非常に思い悩んでいた。(四)
「神々の軍が魔類にうち破られるのを見て、勇猛さによりそれを守れるような、そういう強力な男を見つけなければならぬ。(五)」
インドラはこのことについてひどく思い悩み、マーナサ山に行った。すると、ある女が発する、恐ろしい苦しみの声を聞いた。(六)
「誰か早く来て私を救って下さい。私に夫を示して下さるか、自ら夫になって下さい。(七)」
インドラは彼女に、「恐れるな。そなたに危険はない」と告げた。そして悪魔ケーシンが前に立っているのを見た。(八) 彼は冠をかぶり、棍棒を持ち、鉱脈のある山のようであった。

インドラはその娘を手でつかんで、彼に言った。(九)
「卑劣なことをする者よ、どうしてお前はこの娘を奪おうとするのか。私はインドラである。彼女を悩ませるのはやめろ。(一〇)」
ケーシンは言った。
「シャクラ（インドラ）よ、彼女を放せ。俺はその女が欲しい。生きて自分の都に帰った方がよい。(一一)」
マールカンデーヤは語った。――
ケーシンはこのように言って、インドラを殺すために棍棒を投げた。インドラは飛来する棍棒を、金剛杵（ヴァジュラ）により真二つに断ち切った。(一二) そこでケーシンは怒り、山の峰を投げつけた。インドラは飛来する山頂を見て、金剛杵で断ち切った。それは地上に落下した。(一三) ケーシンは落下する山頂に撃たれ、ひどく苦しみながら、その気高い娘を捨てて逃げ去った。(一四) その阿修羅が去った時、インドラはその娘にたずねた。
「そなたは誰か。誰に属するか。ここで何をしているのか。美しい顔の女よ。(一五)」
娘は答えた。
「私は造物主（プラジャーパティ）の娘で、デーヴァセーナーと申します。私の姉（妹）のダイティヤセーナーは、以前、ケーシンに奪われました。(一六) 我々姉妹は父の許しを得て、連れ立って侍女をともない、マーナサ山に遊びに来ました。(一七) 大阿修羅ケーシンはいつも私たちを奪おう

とするのです。姉は彼を好みますが、私は違います。インドラ様。(一八)彼女は彼に奪われましたが、尊い方よ、私はあなたの力により救われました。神々の王よ、あなたに指示された無敵の夫を望みます。(一九)」

インドラは言った。

「そなたは私の母の姉(妹)の娘だ。ダークシャーヤニーが私の母である。ところで、そなた自身で、自分の力を言って欲しいものだ。(二〇)」

娘は答えた。

「勇士よ、私は無力です。しかし、私の父の恩寵により、私の夫は強力で神々や阿修羅たちに敬礼される者となるでしょう。(二一)」

インドラはたずねた。

「女神よ、そなたの夫の力はどのようになるのか。非の打ち所のない女よ、私はそれをそなたから聞きたい。(二二)」

娘は答えた。

「彼は勇猛で強力で、神、魔類、夜叉、キンナラ、蛇、羅刹、邪悪な者たちの征服者になると見られています。(二三)あなたとともに一切の生類を征服する、その神聖で誉れ高い彼が私の夫になるでしょう。(二四)」

マールカンデーヤは語った。――

インドラは彼女の言葉を聞いて、悩みつつひどく考えこんだ。

「この女神が告げたような夫はいない。(二五)」

その時、太陽のように輝く彼は、太陽がウダヤ(東山)にかかるのを見た。そして光り輝く月が太陽に入るのを見た。(二六)新月の日でルドラの時になった。彼はウダヤ山で神々と阿修羅たちが戦っているのを見た。(二七)

インドラは、雲を真っ赤に染めた黎明を見た。そしてまた、真っ赤な水をたたえたヴァルナの住処(海)を見た。(二八)ブリグたちやアンギラスたちが種々の聖句(マントラ)とともに火中に投じた供物を受け取って、太陽に入りつつある火を見た。(二九)二十四の月相の変わり目の日(パルヴァン)が太陽に仕えているのを見た。また、ダルマに存するルドラの月が太陽に入るのを見た。(三〇)

月と太陽が合一するのを見て、またルドラの時の合を見て、シャクラ(インドラ)は考えた。(三一)

「このルドラの(恐ろしい)結合は偉大で威光をそなえている。このように月が火と太陽に合することは奇蹟だ。月が息子を生めば、その息子はこの女神の夫になるであろう。(三二)火もありとあらゆる美質をそなえており、神格である。もし火が息子を生めば、その息子はこの女神の夫になるであろう。(三三)」

インドラ神はこのように考えて、デーヴァセーナーを連れて梵天の世界に行った。彼は祖父(梵天)に挨拶し、「どうかこの女神に勇猛な夫をお授け下さい」と言った。(三四)

梵天は告げた。
「悪魔を殺す者よ、あなたがそうすべきであると考えている通りになるであろう。強力で非常に勇猛な息子が生まれるであろう。(三五) インドラよ、勇猛な彼はあなたとともに将軍になるであろう。そしてこの女神の夫になるであろう。(三六)」
マールカンデーヤは語った。——
神々の王(インドラ)はそれを聞くと梵天に敬礼し、娘を連れて神仙たちのいる場所に行った。神仙とは、ヴァシシタをはじめとする、非常に偉大な、誓戒を守る主立った最高のバラモンたちのことである。(三七) インドラをはじめとする神々は、自分たちの分け前にあずかるために、祭式において、彼らが苦行で得たソーマ酒を飲みたいと望んで出かけたのである。(三八) 偉大な神仙たちは、作法通りに、よく燃え上がった火の中に供物を投じて、すべての神々を供養した。(三九) アドブタ火が太陽から召喚された。火神は作法通りに言葉を制し、出て来て、アーハヴァニーヤ炉に入った。バラモンたちは聖句(マントラ)を唱えて、供物を火中に投じた。(四〇) 火神は聖仙たちから種々の供物を受け、神々に渡した。(四一)
火神は出て来て、その偉大な聖仙たちの妻を見た。彼女たちは自分たちの隠棲所に座り、安楽に水浴していた。(四二) 彼女たちはすべて、黄金の祭壇(中央がくびれている)のようで、月光のように汚れなく、火のように輝き、星々のように驚異的であった。(四三) 火神は最高のバラモンの妻たちを見て、感官を乱し、懸想し、愛欲のとりこになった。(四四) しかし、彼は更に考

えた。
「私が心を乱すのは正しくない。最高のバラモンの貞女たちで、欲望もない人々を愛するとは。(四五) 私は理由もなしに彼女たちを見ることも、触れることもできない。それ故、ガールハパティヤ(家庭の火)に入って絶えず彼女らを眺めよう。(四六)」
火はガールハパティヤ火に宿り、黄金のように輝く彼女たちすべてに焔の先で触れそうになり、また眺めては喜んでいた。(四七) 火は長いことそこに住み、このように悩殺され、美女たちに懸想し、彼女らを切望していた。(四八) バラモンの妻たちを得られないので、火の心は愛欲で苦しみ、身体を捨てようと固く決意し、森へ行った。(四九)
さて、ダクシャの娘スヴァーハーは、以前から火神を愛していた。その非の打ち所のない美しい娘は、長いこと火神の隙を探していたが、その神は注意深いので、隙を見出すことができなかった。(五〇) その美しい女は、火が森に行き、愛に苦しんでいるのを如実に知ると、次のように考えた。(五一)
「私は七仙の妻たちの姿をとり、彼女たちの姿に迷って愛に苦しんでいる火神を愛そう。このようにすれば、彼は歓び、私の願望も成就するであろう。(五二)」　(第二百十三章)
マールカンデーヤは語った。——
シヴァーはアンギラスの妻で、よい性質と容色と徳性をそなえていた。女神(スヴァーハー)はま

ず第一に彼女の姿をとった。その美しい女は、火神のそばに行って告げた。(一)
「火神（アグニ）よ、愛に苦しむ私をどうか愛して下さい。もしそうしないなら、私はきっと死にますからね。(二) 火神よ、私はアンギラスの妻のシヴァーというものです。友たちと相談してこのように決めたのです。(三)」
火神はたずねた。
「あなたはどうして私が愛に苦しんでいると知ったのですか。また、あなたが言及した七仙のすべての妻たちは、どうしてそのことを知ったのですか。(四)」
シヴァー（実はスヴァーハー）は答えた。
「あなたは私たちにとっていつも愛しかったのですが、私たちはあなたを恐れていました。素振りによってあなたの心を知り、私があなたのもとに派遣されたのです。(五) 私はあなたと交わるためにここに来ました。すぐにあなたの望みを遂げなさい。母神たちが私を待っています。火神よ、私はすぐに行かなければなりません。(六)」
マールカンデーヤは語った。――
そこで火神は喜び勇んで、シヴァー（スヴァーハー）と契りを交わした。女神は喜んで、彼の精液を手に取った。(七) 彼女は考えた。
「人々が森でこのような私の姿を見れば、彼らは火神に対するバラモンの妻たちの不行跡をあげつらうであろう。(八) それ故、そうならないように、私は雌のガルダ鳥になろう。そう

すれば容易に森から出られるだろう。(九)」
彼女はスパルニー（雌のガルダ）となり、大森林から出た。そして、葦の茎ですっかりおおわれたシュヴェータ山を見た。(一〇) その山は七つの頭を持つ猛毒のある奇異の蛇に守られ、羅刹、ピシャーチャ鬼、恐ろしい鬼霊（ブータ）の群、羅刹女、多くの鳥獣に満ちていた。(一一) 彼女は急いでその達しがたい山頂に行き、黄金の窪に精液を投じた。(一二)
その女神（スヴァーハー）は他の偉大な七仙の妻の姿をとって、火神と愛を交わした。(一三) しかし彼女は、アルンダティー（ヴァシシタの妻）の神々しい姿をとることはできなかった。アルンダティーは修養（タパス）の力をそなえ、また夫に忠実であったから。(一四)
愛するスヴァーハーは、白月（びゃくがつ）（月が満ちてゆく十四日間）の初日に、その窪に火神の精液を六度投じた。(一五) その落ちた精液はそこで熱せられて、聖仙たちに尊崇される息子を生み出した。「落ちた」（スカンナ）からスカンダと呼ばれるようになった。(一六)
その童子（クマーラ）は六つの頭、十二の耳、十二の眼と腕と脚、一つの首、一つの胴をそなえていた。(一七) グハ（スカンダ）は二日目に姿を現わし、三日目に幼児となり、四日目にその身体の諸部分が成長した。(一八) 彼は大きな赤い雲に囲まれ、稲光をともない、大雲を赤く染めて昇る朝日のように輝いた。(一九) 彼は身の毛もよだつ大弓を持っていた。それは三都の破壊者（ルドラ＝シヴァ）が、神々の敵を滅ぼすべく託したものであった。(二〇) その最上の弓をつかんで、強力な彼は雄叫びをあげた。動不動の諸物をともなう三界を失神させるほどであった。(二一) 大雲の群のように轟く彼の雄叫びを聞いて、偉大な竜チトラとアイラーヴァタは飛び

上がった。（二二）その両者が落ちてくるのを見て、朝日のように輝く火神の息子は、二つの手で両者をつかみ、一つの手で槍をとり、別の腕で雄の鶏を抱いた。（二三）それは最高に強力な、巨軀の鶏であった。大力のスカンダはそれをつかんで恐ろしい声で咆哮し、遊び戯れた。（二四）強力な神は二本の腕で最高の法螺貝をとって吹き鳴らし、力ある生物をも恐れさせた。（二五）更に二本の腕によって何度も虚空を打ち、マハーセーナ（スカンダ）は戯れながら、三界を呑みこんだ。無量の気力を有する彼は、山頂で、ウダヤ山に昇る太陽のように輝いた。（二六）

無量の気力を持つ、驚異的に勇猛な彼は、その山頂に座り、多くの顔で諸方を眺めた。多様な諸物を見ながら、彼は再び咆哮した。（二七）彼の咆哮を聞いて多くの人々は倒れ、恐れ、意気消沈し、彼にのみ庇護を求めた。（二八）その神に帰依した種々の種姓（ヴァルナ）の人々のことを、バラモンたちは、非常に強力な会衆（パーリシャダ）（信者）と呼ぶ。（二九）大力の彼は立ち上がり、それらの人々を慰撫してから、弓を引き絞り、大山シュヴェータに矢を放った。（三〇）そして彼は、ヒマーラヤの息子クラウンチャ山を矢で砕いた。それ故、ハンサ鳥や禿鷲たちはメール山に行った。（三一）その山は砕けて、大声で苦痛の叫び声をあげて倒れた。それが倒れた時、他の山たちは恐怖のあまり大声でうめいた。（三二）無量の気力をもち、最高に強力な彼は、そのひどく苦しむものたちのうめき声を聞いてもためらうことなく、槍をとり上げて咆哮した。（三三）それから偉大な彼は大槍を投げて、シュヴェータ山の恐ろしい峰を激しく貫いた。（三四）シュヴェータ山は彼に撃たれて、その偉丈夫を恐れ、他の山々とともに大地を捨て、

飛び上がった。（三五）そこで大地（女神）は震動し、いたるところで裂けた。大地は苦しんでスカンダに庇護を求め、再び力を得て輝いた。（三六）山々は彼に敬礼して大地にもどった。かくて世の人々は白月の五日目にスカンダを信仰するのである。（三七）

（第二百十四章）

スカンダ、神軍を破る

マールカンデーヤは語った。――

聖仙たちは種々の非常に恐ろしい凶兆を見て狼狽し、世界を繁栄させるべく、世のために鎮めの儀式を行なった。（一）チトララタの森に住む人々は言った。

「この大きな災いは火神によりもたらされた。七仙の六人の妻たちと交わったから。」（二）

また他のものたちは、あの時女神が雌のガルダ鳥の姿をとって行くのを見たので、ガルダ鳥に、「この災いはあなたによってもたらされた」と言った。しかしそれがスヴァーハーの仕業であるとは何も知らなかった。（三）一方スパルニー（雌のガルダ）は、それが自分の息子だということを聞いて、「私はあなたの母です」とスカンダに言った。（四）また七仙は、強力な息子が生まれたことを聞いて、アルンダティー女神を除いた六名の妻を離縁した。（五）森に住む人々は、彼が六名の妻から生まれたと告げたが、スヴァーハーは七仙に何度も言った。

「彼は私の息子です。私が知っています。みなが言うことは間違っています。」（六）

偉大な聖者ヴィシュヴァーミトラは、七仙の祭祀を終えてから、愛に悩む火神の後を見ら

れることなく追った。そこで彼は、一部始終をすべてありのままに知った。(七)ヴィシュヴァーミトラはまず第一に、クマーラ（スカンダ）に帰依した。そして彼はマハーセーナ（スカンダ）の神聖なる頌詩を作った。(八)その偉大な聖者は、彼のために、誕生式など、幼年期の十三の祝いの儀式をすべてとり行なった。(九)六面者（スカンダ）の偉大さを讃え、鶏、女神シャクティ、最初の会衆の効験を讃えた。(一〇)ヴィシュヴァーミトラは世界に有益なようにこの行為をなした。それ故、この聖仙はクマーラに気に入られている。(一一)彼は七仙に、妻たちが罪を犯さなかったことを告げた。しかし彼から真実を聞いても、七仙たちは相変らず妻たちを離縁したままだった。(一二)

神々はスカンダのことを聞いて、こぞってインドラに言った。

「スカンダは耐えがたい力を発揮している。シャクラよ、すぐに彼を殺して下さい。(一三)もしあなたが今のうちに彼を殺さなければ、強力な彼がインドラ（神々の王）になるでしょう。三界と我々とあなたを圧倒して。(一四)」

彼は動揺して彼らに告げた。

「あの童子は非常に強力である。彼は戦いにおいて、世界創造者をも圧倒して殺すであろう。(一五)しかし、世界の一切の母神(マートリ)たちが、今、スカンダを攻撃すべきである。彼女らは意のままに力を発揮し、彼を殺すであろう。」

彼女たちは「かしこまりました」と言って出かけた。(一六)しかし、彼が無敵であるのを見て、彼女たちはうつむいた。そして「彼を滅ぼすことはできない」と考えて、彼に庇護を

求めた。(一七)そして彼女らは告げた。

「あなたは私たちの息子です。世界は我々により維持されています。私たちを歓迎して下さい。私たちはみな、愛情に満ちて乳を出しています。(一八)」

マハーセーナ（スカンダ）は彼女たちに敬意を表し、彼女たちの望みをかなえた。すると、最も強力な彼は、父である火神がやって来るのを見た。(一九)火神はスカンダと母神の群に敬意を表され、その屈強な息子につき従い、彼を守りながらそこにとどまっていた。(二〇)すべての母神たちのうちで、怒りより生じた女が槍を持ち、乳母として、息子のようにスカンダを守った。(二一)血の海の恐ろしい娘は血を常食とするが、その彼女がマハーセーナを抱きしめて、息子のように守った。(二二)火神は山羊の顔をして、多くの子を持つナイガメーヤ（名神）となって、玩具によってその童子を楽しませた。(二三)(第二百十五章)

マールカンデーヤは語った。——

火神をはじめとして、惑星(グラハ)、彗星(ウパグラハ)、聖仙、母神等、輝く会衆の群、及びその他多くの、恐ろしい天空に住む者たちが、母神の群とともに、マハーセーナ（スカンダ）を取り巻いていた。(一・二)神々の王（インドラ）は勝利を望んだが、勝利は疑わしいと思いつつ、アイラーヴァタ象の肩に乗り、神々とともに出発した。インドラはマハーセーナをうち破りたいと望み、大急ぎで進軍した。(三)神軍は恐ろしく、非常に迅速で、光輝に満ち、多彩な色の旗や装具をそな

え、種々の乗物と弓を持ち、最上の衣服をまとい、幸運の女神に仕えられ、飾られていた。[四]クマーラは彼を殺そうとして進んで来るシャクラ（インドラ）を迎え撃った。強力なシャクラは、道々雄叫びをあげ、速やかに進軍した。神軍を奮い立たせ、火神の息子を殺そうと欲して。[五]

インドラは神々と最高の聖仙たちに敬意を表され、カールティケーヤ（スカンダ）のそばに近づいた。[六]それから神王は神々とともに獅子吼をした。グハ（スカンダ）もその声を聞いて、海のように咆哮した。[七]彼の大音声により、神軍は度を失い、逆巻く海のように、あちこちで動揺した。[八]

火神の息子は、神々が彼を殺そうとして近づいて来るのを見て、その口から大火焔を吐き出した。その火焔は地上にひしめいている神軍を燃やした。[九]彼らの頭や体は燃え、武器や乗物も燃え、突然、多彩な星の群が落ちるように倒れた。[一〇]神々は焼かれながら、火神の息子に庇護を求めた。彼らはインドラを捨てたので、平安を得ることができた。[一一]

神々に捨てられたシャクラは金剛杵（ヴァジュラ）を投じた。放たれた金剛杵は、速やかに、スカンダの右の脇腹にあたり、その偉丈夫の脇腹を裂いた。[一二]金剛杵の打撃により、スカンダの分身が生じた。その男は若く、黄金の鎧を着て、槍を持ち、神聖な耳環をつけていた。金剛杵が入ること（ヴィシャナ）により生じたから、ヴィシャーカと呼ばれることになった。[一三]終末の火のように輝くスカンダの分身が生じたのを見て、インドラは恐れ、合掌してスカンダに庇護を求めた。[一四]スカンダは彼とその軍隊の安全を請け合った。そこで神々は歓喜し、楽

器を鳴らした。[一五]

（第二百十六章）

マールカンデーヤは語った。——

恐ろしい、驚異の姿をした、スカンダの眷属（けんぞく）について聞け。そこで金剛杵の打撃によりスカンダに生じた童子たちは、無慈悲に、新生児や胎児たちを奪った。[一]金剛杵の打撃により、大力の娘たちも彼に生じた。童子たちはヴィシャーカを父親にしたてた。[二]その尊く巧みなバドラシャーカは、山羊の顔をとり、すべての娘の群や自分の息子たちに囲まれ、母神らの見ている中で、戦闘において守護する。それ故、地上の人々は、スカンダを童子の父と呼ぶ。[三—四]息子を欲する人々、息子を持つ人々は、常に各地で、ルドラを火神（アグニ）として、ウマーをスヴァーハーとして崇拝する。[五]

タパスという火が生んだ娘たちがスカンダのところに来た。「自分は何をしようか」と彼がたずねると、その母神たちは告げた。[六]

「私たちは全世界で尊敬される最高の母神となりたいです。あなたの恩寵により、我々に好意をかけて下さい。[七]」

マールカンデーヤは語った。——

彼は承知したと答えた。「あなた方は別々のものになるであろう。不吉であり、また吉祥

であるものに。」高邁な彼は繰り返し告げた。（八）それから、母神の群は、スカンダを息子にしてから立ち去った。かくてカーキー、ハリマー、ルドラー、ブリハリー、アーリヤー、パラーラー、ミトラーは幼児の七母神となった。（九）彼女たちに、気力に満ちた、非常に恐ろしいシシュという名の子が生まれた。スカンダの恩寵により生まれたその息子は、赤い眼をし、恐怖をもたらした。（一〇）このスカンダの母神の群から生じたものが、「八部よりなる勇士」と呼ばれる。山羊の顔をした神とともに、「九部」とも呼ばれる。（一一）王よ、スカンダの六面のうちの、第六の顔は山羊の顔であると知れ。それに常に母神の群に崇拝されている。（一二）六面のうちで最高のものがバドラシャーカと呼ばれる。彼はそれにより神聖な力を創り出す。（一三）

以上のように、白月の第五日目に、様々な出来事が起こった。王よ、第六日目に、非常に恐ろしい戦闘が起こった。（一四）

（第二百十七章）

スカンダ、神々の将軍になる

マールカンデーヤは語った。——

スカンダは黄金の鎧と花環をつけ、黄金の王冠をかぶり、黄金の眼をし、広大な輝きを放って座っていた。（一）赤い衣をまとい、鋭い歯をし、魅力的で、一切の吉相をそなえ、三界の者たちにこよなく愛されていた。（二）その願いをかなえる勇士、清浄な耳飾りをつけた若

者に対し、シュリー（美と繁栄の女神）は蓮の姿をとり、自ら肉体を持って彼につき従った（愛した）。（三）シュリーに愛され、広大な名声を有するその最高の童子（クマーラ）が座っているのを見て、生類は満月の時における月のように思った。（四）偉大なバラモンたちが強力な彼を崇拝した。その時、大仙たちはスカンダに次のように告げた。（五）

「金色をした方よ、あなたに幸あれ。諸世界に幸をもたらすものであれ。六夜にして生じたあなたにより全世界は支配されました。（六）そしてあなたは再び彼らに無畏を与えました。最高の神よ。それ故、あなたはインドラ（神々の王）になって下さい。三界に無畏をもたらす。（七）」

スカンダは言った。

「苦行者たちよ、インドラは全世界の者たちに何をなすか。また神々の王はどのようにして常に神々の群を守るのか。（八）」

聖仙たちは言った。

「インドラは生類に力と威光と子孫と幸福を授けます。神々の王は、満足すると、すべての贈物を与えます。（九）インドラは悪行をなすものたちには与えず、善行をなすものたちには与えます。彼は生類をそれぞれの仕事につくよう導きます。（一〇）太陽がない時には太陽になり、月のない時には月になります。場合によっては火、風、地、水となります。（一一）これがインドラのなすべき仕事です。インドラには大きな力がありますから。そして勇士よ、あなたも最高の力をそなえていますから、我々のインドラになって下さい。（一二）」

シャクラ（インドラ）は言った。

「大力の者よ、幸福をもたらすそなたが、我々すべてのインドラになりなさい。まさに今日、即位しなさい。そなたはそれにふさわしい。最上の者よ。（二三）」

スカンダは言った。

「あなた御自身が三界を統治して下さい。注意深く、勝利に専念して。私はあなたの召使です。シャクラよ。インドラの位につきたくありません。（二四）」

シャクラは言った。

「そなたの力は驚異的だ。勇士よ。神々の敵どもを殺せ。世界の者たちはそなたの力に驚き、私を軽蔑するであろう。（二五）勇士よ、私がインドラの位にとどまっても、力が弱く、圧倒され……。敵たちは孜々として、我々相互を離間させようと努めるであろう。（二六）強力な者よ、そなたが離間したら、世界の者たちは二つに分裂するであろう。世界が決定的に分裂すれば、生類は分裂し、我々の間に戦闘が起きるであろう。強力な者よ。（二七）その戦闘においてわが子よ、そなたは望みのままに私をうち破るであろう。それ故、今日、そなたはインドラになれ。ためらうことはない。（二八）」

スカンダは言った。

「あなたに幸あれ。あなたこそ三界と私の王です。シャクラよ、あなたに何をしましょうか。私に命じて下さい。（二九）」

シャクラは言った。

「もしそなたが確信してそのように誓言するなら、また、もし私の命令を実行したいと望むなら、私の言うことを聞きなさい。（二〇）強力な者よ、神々の将軍（軍司令官）の位につきなさい。そなたの言葉に従い、私がインドラになろう。（二一）」

スカンダは言った。

「魔類を滅ぼすため、神々の目的を成就するため、牛とバラモンを守護するため、私を将軍の位につけて下さい。（二二）」

マールカンデーヤは語った。――

インドラはすべての神群とともに、スカンダを将軍の位につける式を行なった。彼は偉大な聖仙たちに尊敬されて、この上なく輝いた。（二三）彼の持つ黄金の傘は、燃え上がる火の光輪のように輝いた。（二四）栄光あるシヴァは自ら、ヴィシュヴァカルマン（一切造者）が作った黄金製の神聖な花輪を彼にかけた。（二五）その雄牛を旗標とする神は、女神とともに、満足して彼に敬意を表した。（二六）バラモンたちは火神をルドラと呼んだ。彼はルドラ（シヴァ）の息子であるから。ルドラに放出された精液はシュヴェータ山となった。クリッティカーたちは、シュヴェータ山において、火神の男根を作った。（二七）グハ（スカンダ）がルドラに敬意を表されているのを見て、すべての天人たちは、最高の美質をそなえた彼をルドラの息子と呼んだ。（二八）その童子は、ルドラが火神に入りこんで生まれた。そこで生まれたから、スカンダはルドラの息子となった。（二九）ルドラと火神とスヴァーハーと六人の女性の威光（テージャス）によって生

まれたから、最高の神スカンダは、ルドラの息子となった。(三〇)
栄光ある火神の息子は、汚れのない赤衣を着て、燃える体をし、太陽が赤い雲で輝くように輝いていた。(三一)火神により与えられた鶏が、彼の美々しい旗標となり、戦車の上に高くかかげられ、終末の火のように赤々と輝いていた。(三二)彼の身体は生まれつきている鎧におおわれていた。それはこの神が戦っている間、常に現われていた。(三三)槍、鎧、力、威光、美々しさ、真実、不死身、敬虔さ、迷わぬこと、信者(バクタ)の守護、敵の殲滅、諸世界の守護。以上すべてはスカンダとともに生じた。(三四―三五)
このようにすべての神群によって(即位の)水を灌(そそ)がれ、見事に荘厳され、彼は喜び満足して、満月のような顔をして輝いていた。(三六)心地よいヴェーダ学習の声、神々の楽器の音、神々やガンダルヴァ(神半)の歌とともに、すべての天女の群、及びその他の種々の喜び満足し飾られた神々により、パーヴァキ(スカンダ)は、戯れるかのように水を灌がれた。(三七―三八)神々は水を灌がれたマハーセーナ(スカンダ)を、闇を滅して昇った太陽を見るように見た。(三九)すべての神々の軍は、幾千となく、「あなたは私の主君である」と言いながら、いたるところから集まって来た。(四〇)聖なる神はすべての生類の群に囲まれて、彼らを受け入れた。そして彼らに敬われ、讃えられて、彼もまた彼らをねぎらった。(四一)
インドラはスカンダを将軍の位につけてから、かつて彼が救出したデーヴァセーナーのことを想起した。(四二)梵天自身が彼を彼女の夫にするように定めたと考えて、インドラは美しく飾られたデーヴァセーナーを連れて来させた。(四三)そしてインドラはスカンダに言った。
「最高の神よ、そなたが生まれる前に、梵天はこの娘をそなたの妻として定めたのだ。(四四)それ故そなたは、まず聖句(マントラ)を唱え、作法に従い、この女神の蓮華のような右手をとりなさい。(四五)」
このように言われて、スカンダは作法通りに彼女の手をとった。ブリハスパティ(祈禱主神)は聖句を唱え、火中に供物を投じた。(四六)
このように神々は、デーヴァセーナーがスカンダの神妃であると知っている。そしてバラモンたちは、彼女を、シャシュテー、ラクシュミー、アーシャー、スカプラダー、シニーヴァリー、クフー、サッドヴリッティ、アパラージターと呼ぶ。(四七)デーヴァセーナーがスカンダを永遠の夫とした時、ラクシュミー女神(吉祥天、繁栄)は自ら体をとって彼に仕えた。(四八)スカンダは第五日目(パンチャミー)にシュリー(ラクシュミー)に仕えられたので、その日はシュリーパンチャミーであると伝えられる。そして彼は第六日目に目的を達成したから、月の第六日目(シャシュティー)はマハーティティ(重大な日)である。(四九)(第二百十八章)

病魔(グラハ)の種類

マールカンデーヤは語った。――
マハーセーナ(スカンダ)がシュリーに仕えられ、デーヴァセーナーの夫にされた時、七仙の妻

たちのうち六名の女神は彼のもとに行った。(一) 敬虔で誓戒を堅く守る彼女たちは、聖仙たちに離縁されていたが、速やかにやって来て、デーヴァセーナーの夫となった神に告げた。(二)

「わが子よ、神のような夫たちは、理由もなく怒って私たちを離別しました。私たちは清浄な場所から堕ちました。(三) あなたは私たちから生まれたと、誰かが吹聴したのです。それは真実ではありません。その噂から私たちを救って下さい。(四) 主よ、あなたの恩寵により、不滅の天界が我々のものになりますように。我々はあなたが息子となることを望みます。そのようにして、負債を清算なさい。(五)」

スカンダは言った。

「まことにあなた方は私の母であり、私はあなた方の息子です。非の打ち所のない方たちよ。あなた方が望むことはすべて実現するでしょう。(六)」

マールカンデーヤは語った。——

このように告げて、それからスカンダは、「何をすべきでしょうか」とシャクラ(インドラ)にたずねた。スカンダに「お告げ下さい」と言われて、インドラは答えた。(七)

「ローヒニーの妹であり、ライバルでもあるアビジット(星宿の名)女神は、目上になることを望んで、苦行をするために森へ行った。(八) 私は当惑している。星宿が天空から落ちたのだ。スカンダよ、お願いだ。あの最高の時間(カーラ)について、梵天とともに考えてくれ。(九) ダニシタ

(第二十三の月宿) などの時間が梵天に創造された。以前はローヒニーなどがあって、数が満ちていたのだが。(一〇)」

シャクラにこのように言われて、クリッティカーたちは天空に行き、車の形をした星座として輝くようになった。火神がその主宰神である。(一一)

ヴィナター(ガルダの母)もまたスカンダに言った。

「あなたは私のために祭餅(ピンダ)を供える息子です。息子よ、私はあなたといつもいっしょにいることを望みます。(一二)」

スカンダは言った。

「そうしましょう。あなたに敬礼。息子に対する愛情から私にお命じ下さい。女神よ、いつも嫁(スカンダの妻)に尊敬されて、ここに住んで下さい。(一三)」

マールカンデーヤは語った。——

するとすべての母神の群はスカンダに言った。

「私たちはすべての世界の者たちの母として詩人たちに讃えられます。そしてあなたの母にもなりたいです。私たちを供養して下さい。(一四)」

スカンダは言った。

「あなた方は私の母上です。私はあなた方の息子です。私は何をすべきか、あなた方の望むことを言って下さい。(一五)」

母神たちは言った。

「以前にこの世界の母神と定められたものたちの地位が私たちのものになりますように。そして彼女たちがその地位を失いますように。（二六）我々が世界に崇拝されるようになり、彼女たちが崇拝されなくなりますように。神のうちの雄牛よ。彼女たちはあなたのために私たちの子供たちを奪いました。それらを私たちに返して下さい。（二七）」

スカンダは言った。

「あなた方はいったん与えられた子供たちを追い求めることはできない。あなた方が望む誰か他の子供たちをあげます。（二八）」

母神たちは言った。

「私たちはあの母たちの子供を食べたいです。私たちに下さい。あなた以外の、彼女たちの主人も。（二九）」

スカンダは言った。

「あなた方に子供たちをあげましょう。しかし、あなた方がおっしゃったことは難しいことです。お願いです。あなた方に正しく敬意を表した子供たちは守ってやって下さい。（三〇）」

母神たちは言った。

「スカンダよ、わかりました。あなたが言う通り、そういう子供たちは守ってあげましょう。主よ、スカンダよ。私たちはあなたとともに長く住みたいです。（三一）」

スカンダは言った。

「様々な姿をとって、十六歳までの人間の子供たちを苦しめなさい。（三二）そして私は、あなた方に、私の恐ろしい不滅の体（アートマン）をあげましょう。あなた方は尊崇されて、その体とともに最高に幸せに暮らすでしょう。（三三）」

マールカンデーヤは語った。——

それから、スカンダの身体から、金色に輝く強力な男子（プルシャ）が、人間の子どもを食うために飛び出した。（二四）それは大地に落ちたが、飢えて朦朧としていた。それはスカンダに別れを告げ、恐ろしい姿の病魔（グラハ）となった。最高のバラモンたちは、その病魔を、「スカンダの癲癇（アパスマーラ）」と呼ぶ。（二五）それに対し、非常に恐ろしいヴィナター（ガルダの母）は、「鳥魔（シャクニグラハ）」と呼ばれる。プータナーと呼ばれる羅刹女は、「プータナー魔（グラハ）」として知られる。（二六）彼女は残忍な姿をとり、有害で、恐ろしい姿をした夜行の魔女である。残忍な形相のピシャーチャ女は、シータ・プータナーと呼ばれる。この恐ろしい姿の鬼女は、人間の女たちの胎児たちを奪う。（二七）アディティはレーヴァティーと呼ばれる。彼女の病魔がライヴァタである。この恐ろしい大きな病魔も、幼児を殺害する。（二八）魔類（ダイティヤ）の母であるディティは、ムカマンディカーと呼ばれる。この抗しがたい鬼女はこの上なく幼児の肉を好む。（二九）スカンダから生じた、クマーラ（童子）とクマーリー（童女）と呼ばれるものたちも、胎児を食べ、すべて非常に大きな病魔である。（三〇）クマーラたちはクマーリーたちの夫であると言われる。その恐ろしい行為をする者たちは、知らないうちに小児を奪う。（三一）知者たちはスラビを牛たち

の母と呼ぶ。シャクニ（鳥）は彼女に乗って、ともに地上の幼児たちを食べる。(三二) 犬たちの母であるサラマーという女神もまた、常に人間の胎児を奪う。(三三) 樹々の母はカランジャ樹を住処とする。それ故、子供を欲する人々は、カランジャを拝む。(三四) 以上、十八の病魔、及びその他の病魔は、肉と酒を好む。彼女たちはいつも産室に十夜とどまる。(三五) カドルーは微細な体となって、妊婦に入り込むと、そこで胎児を食う。一方、その母親は蛇《ナーガ》を生む。(三六) ガンダルヴァ（半神の一種）たちの母は、胎児を奪って去る。そこで、地上において、流産する女が認められる。(三七) 天女《アプサラス》たちの母は、胎児を奪って座っている。そこで賢者たちは、それを「座りこんだ胎児」（死胎）と呼ぶ。(三八) 赤い海（血の海）の娘はスカンダの乳母であると伝えられる。彼女はカダンバ樹において、ローヒターヤニーとして崇拝される。(三九) ルドラが男に宿るように、アーリヤーは女に宿る。クマーラの母であるアーリヤーは、願望を得るために、個別に崇拝される。(四〇)

以上のように、私は小児《クマーラ》たちの大なる病魔を述べた。それらは十六歳になるまでは災いをもたらし、それ以後は幸せをもたらす。(四一) 以上述べた母神の群と、男の病魔たちは、常に、人々によってスカンダの病魔と知られるであろう。(四二) 彼らを鎮めるために、沐浴、焼香、油を塗ること、御供物、供養を行ない、殊にスカンダに対する祭祀を行なうべきである。(四三) このように供養されたら、彼らはすべて、人々に幸福を授ける。正しく供養して敬礼されたら、彼らは長寿と精力とを授ける。(四四)

ところで、十六歳以上の人々の病魔がある。私は偉大なる主（シヴァ）に敬礼してから、それ

らについて述べるであろう。(四五) 目覚めていても、眠っていても、神々を見て、速やかに気が狂う人がいる。彼は神に取り憑かれた者（デーヴァ・グラハ）と知られる。(四六) 座っていても、眠っていても、祖霊《ピトリ》たちを見て、速やかに気が狂う人がいる。彼は祖霊に取り憑かれた者（ピトリ・グラハ）と知られる。(四七) シッダ（半神の一種）たちを軽蔑し、怒った彼らに呪われ、速やかに気が狂う人がいる。彼はシッダに取り憑かれた者（シッダ・グラハ）と知られる。(四八) 種々の香や味を知覚して、速やかに気が狂う人がいる。彼は羅刹に取り憑かれた者（ラークシャサ・グラハ）と知られる。(四九) 地上において、神聖なるガンダルヴァ（半神の一種）たちがその人に触れると、彼は速やかに気が狂う。彼はガンダルヴァに取り憑かれた者（ガーンダルヴァ・グラハ）である。(五〇) その人にたまたま夜叉《ヤクシャ》たちが入り込む（憑く）と、彼は速やかに気が狂う。彼は夜叉に取り憑かれた者（ヤクシャ・グラハ）と知られる。(五一) ある場合には、ピシャーチャ鬼たちがその人に常に乗り移る。するとその人は速やかに気が狂う。彼がピシャーチャに取り憑かれた者（パイシャーチャ・グラハ）と知られる。(五二) その人の心が三体液の乱れ（ドーシャ）によって怒り、迷妄に陥ると、彼は速やかに気が狂う。彼は医学書により癒される。(五三) 錯乱、恐怖、恐ろしいものを見ることにより、人は速やかに気が狂う。彼は気力《サットヴァ》により癒される。(五四)

病魔《グラハ》は三種である。あるものは戯れることを望む。他のものは食うことを望む。また他のものは貪欲である。(五五) 七十歳になるまで、人間にはこれらの病魔が存する。それ以後は、人間にとって熱病《ジュヴァラ》が病魔に等しいものである。(五六) 感官が散乱せず、自制し、清浄で、常に怠ることなく、神の存在を信じ、信仰している人。病魔は常にそのような人を除外する。

(五七) 以上、人間の病魔に関することが説かれた。偉大なる主（シヴァ）である神を信愛する人々に、病魔が触れることはない。(五八)

（第二百十九章）

悪魔の群を滅ぼすスカンダ

マールカンデーヤは語った。——

このようにスカンダが母神たちに好意をかけた時、スヴァーハーは彼に言った。

「あなたは私の腹から生まれた息子です。(一) 私はあなたから、最高に得がたい喜びをいただきたい。」

するとスカンダは彼女にたずねた。

「どのような喜びをお望みなのか。(二)」

スヴァーハーは言った。

「勇士よ、私はダクシャの愛娘のスヴァーハーという者です。私は生まれてからずっと、火神を愛していました。(三) しかしわが子よ、火神は私が愛情を抱いていることをわかっていないのです。息子よ、私は永遠に火神とともに住むことを望みます。(四)」

スカンダは言った。

「女神よ、今日以来、正道を践む善行のバラモンたちが、聖句とともに、神々や祖霊に捧げる何かの供物を火中にくべる時、いつも『スヴァーハー』と高らかに唱えて供えるであろう。そうすれば、火神はいつもあなたとともにいることになる。美しい女よ。(五—六)」

マールカンデーヤは語った。——

このように言われてスカンダに敬意を表されたスヴァーハーは満足した。彼女は夫である火神といっしょになって、スカンダに敬意を表した。(七)

それから、造物主梵天はマハーセーナ（スカンダ）に告げた。

「父である三都の破壊者マハーデーヴァ（シヴァ）のもとに行け。(八) ルドラ（シヴァ）は火神に入り、ウマー（シヴァ神妃）はスヴァーハーに入り、全世界の安寧のために、無敵の汝を生んだのだ。(九) 偉大なルドラは、ウマーの胎内に精液を注いだ。それは山に落ち、それからミンジカーとミンジカ〔という双子〕が生じた。(一〇) 精液の残りは血の川に落ちた。また他のものは太陽の光線の中に、その他のものは地上に落ちた。その他のものは樹々に付着した。このようにそれは五様に落ちた。(一一) 種々の姿をした、肉を食うあの恐ろしい汝の会衆は、賢者たちにより『ガナ』（眷属）と呼ばれるであろう。(一二)」

「そのようでありますように」と言って、父を愛する限りなく高邁な息子マハーセーナ（スカンダ）は、父のマヘーシュヴァラ（シヴァ）に敬意を表した。(一三) 財産を望む人々は、アルカの花によって、五つのガナを敬うべきである。そして病気を除去するために、供養を行なうべきである。(一四) ルドラ（シヴァ）から生じたミンジカーとミンジカという双子は、児童たちの安

寧を願う者によって敬礼されるべきである。(二五) 子孫を望む人々は、樹木に生じた、人肉を食うヴリッディカーという名前の女性の鬼神に敬礼すべきである。(二六) 以上のようにこれらのピシャーチャ（鬼神の類）の群(ガナ)は数限りないと伝えられる。

王よ、鐘と旗の起源を聞きなさい。(二七) アイラーヴァタ（インドラの象）はヴァイジャヤンティーという二つの鐘をつけている。叡知あるシャクラ（インドラ）は、自ら、それらをグハ（スカンダ）に与えた。(二八) そのうち一つの鐘はヴィシャーカ（スカンダの分身）の、もう一つはスカンダのものになった。カールティケーヤ（スカンダ）とヴィシャーカの旗は赤色である。(二九) 大力のマハーセーナ（スカンダ）神は、神々が彼に与えた諸々の玩具で楽しんだ。(三〇) 彼はピシャーチャの群と神々の群に囲まれ、栄光に燃えて、黄金山において輝いていた。(三一) 美しい森のあるその山は、その勇士により輝いていた。美しい洞窟のあるマンダラ山が、光りを放つ太陽により輝くように。(三二) 花咲くサンターナカの森とカラヴィーラの森、パーリジャータの森とジャパーとアショーカの森、カダンバ樹の茂み、神々しい獣の群、神々しい鳥の群により、シュヴェータ山は輝いていた。(三三―三四) そこにはすべての神々の群、すべての大仙たちがいて、動揺する海のような音をたてる雲の太鼓の音が聞こえた。(三五) そこでは神的なガンダルヴァ（半神の一種）と天女(アプサラス)たちが踊っていた。そこでは喜んだ精霊たちの大音声が聞こえた。(三六) このように、シュヴェータ山に集まっている、インドラをはじめとするすべての世界の者たちは、喜んでスカンダを見つめて、見飽きることがなかった。(三七)

（第二百二十章）

マールカンデーヤは語った。――

尊いスカンダが将軍の地位に任じられた時、栄光あるハラ（シヴァ）神は喜んで、バドラヴァタに向けて出発した。パールヴァティー（神妃）をともない、太陽の色をした戦車に乗って。(一) 彼のその最高の戦車には、千頭の獅子がつながれていた。それは時間(カーラ)にかりたてられて輝く天空に飛び立った。(二) 美しいたてがみをした獅子たちは、虚空を呑むかのように、動不動の生き物を恐れさせつつ、咆哮しながら進んで行った。(三) 獣主(パシュパティ)はその戦車の上に立って、ウマー（パールヴァティー）とともに輝いていた。虹をともなう雲において、太陽が稲妻とともに輝くように。(四) 彼の前を、財宝の主であるクベーラ神が、グヒヤカ（鬼神の一種）たちとともに、輝く天車プシュパカに乗って進んだ。(五) シャクラ（インドラ）もアイラーヴァタ象に乗り、神々とともに、恵み深いシヴァの背後からついて行った。(六) 花輪をつけたジャンバカ（鬼神の類。または「人を食う」?）や夜叉や羅刹に飾られた大夜叉アモーガが、その右翼を進んだ。(七) 彼の右側を、めざましい戦士であるマルト神群が、ヴァス神群とルドラ神群とともに進んだ。(八) 恐ろしい姿形をしたヤマ（閻魔）は、ムリティユ（死神）とともに、恐ろしい幾百の病魔たちに囲まれて進んだ。(九)(一〇―一二略)

その神（シヴァ）は、これらのものたちとともに、望みのままに、先頭を、または殿(しんがり)を進んだ。というのは、彼の歩行の速度は一定していなかったからである。(一三) この世界で人間たちは、ルドラ神を善行（正しい祭式）によって崇拝する。その神は、シヴァ、イーシャ、ルドラ、ピ

ナーキン（など）と呼ばれる。人々は様々なやり方でマヘーシュヴァラ（シヴァ）を崇拝する。（二四）このようにして、デーヴァセーナーの夫であり、クリッティカーの息子である、神聖な（スカンダ）は、神々の軍隊に囲まれて、神々の主（シヴァ）について行った。（二五）

その時、偉大な神はマハーセーナ（スカンダ）に重々しい言葉を述べた。

「汝は常に努めて、マルト神群の第七師団を守れ。（二六）」

スカンダは言った。

「主よ、私はマルト神群の第七師団を守ります。他に私がやるべきことがあれば、神よ、すぐにおっしゃって下さい。（二七）」

ルドラは言った。

「わが子よ、何か仕事をしている時、常に私を見るべきである。信愛をこめて私を見ることにより、汝は最高の幸福に達するであろう。（二八）」

マールカンデーヤは語った。――

マヘーシュヴァラはこのように言って、彼を抱きしめてから別れを告げた。そしてスカンダが立ち去った時、突然に大前兆が現われ、すべての神々をうろたえさせた。（二九）天空は星々とともに燃えた。世界中がすっかり錯乱状態になった。大地は動揺し大きな音をたてた。世界は暗闇になった。（三〇）

その恐ろしい前兆を見てシャンカラ（シヴァ）は動揺した。栄光あるウマーも神々も大仙たち

も動揺した。（三一）彼らがうろたえている時、種々の武器をもつ恐ろしい大軍が、山や雲のように出現した。（三二）その恐ろしい無数の軍隊は、様々な叫び声をあげて、戦いを求め、神々やシャンカラ神を襲撃した。（三三）彼らは神の軍隊に向けて、幾度も、おびただしい矢、山々、百殺棒（シャタグニー）、投槍、鉄棒、棍棒を投じた。（三四）降り注ぐそれらの恐ろしい強力な武器により、神々の軍隊は即座に四散し、すべての者が意気沮喪していた。（三五）神々の軍隊は悪魔に苦しめられ、兵士と象と馬を粉砕され、武器と強力な戦車を破壊され、意気沮喪して見えた。（三六）阿修羅（アスラ）（悪魔）たちは火が森を燃やすように神軍を殺害した。それはほとんど焼けた大樹の森のように倒れた。（三七）神々はその身体から頭を切り落とされて倒れた。彼らは激しい戦闘で殺され続けたが、寄る辺を見出せなかった。（三八）

その時、インドラ神は強力な悪魔に苦しめられて逃走する軍隊を見て、力づけながら次のように告げた。（三九）

「恐れを捨てよ。勇士たちよ、どうか武器をとってくれ。勇敢に戦う決意をせよ。汝らにいかなる恐怖もないように。（四〇）あの極悪非道の、恐ろしい姿をした悪魔たちをやっつけろ。どうか私といっしょにあの大阿修羅たちを攻撃してくれ。（四一）」

シャクラ（インドラ）の言葉を聞いて元気づいた神々は、シャクラを拠り所として悪魔たちに反撃した。（四二）それから、すべての神々、強力なマルト神群、サーディヤ神群とヴァス神群は、猛烈な勢いで反撃した。（四三）怒り狂った彼らが敵軍に放った武器と矢は、悪魔たちの体において多量の血を飲んだ。（四四）それらの鋭い矢は、彼らの身体を貫通して出て、蛇た

ちが丘（蟻塚）から飛び出るように見えた。(四五) 悪魔たちの身体は、矢で切断され、ちぎれ雲のように、いたるところで大地に倒れた。(四六) 戦闘において、すべての神群に種々の矢でおびやかされた悪魔の軍は退却した。(四七) 喜んで武器を振り上げたすべての神々は雄叫びをあげ、一斉にありとあらゆる楽器を打ち鳴らした。(四八) このように神々と悪魔たちの相互の肉や血にまみれた激烈な戦いがあった。(四九) 突然、神々は苦境に陥り、恐ろしい悪魔たちは神々を殺害した。(五〇) そして、楽器は鳴り響き、太鼓は大きな音をたて、悪魔の王たちは恐ろしい獅子吼をあげた。(五一)

その時、恐ろしい悪魔の軍の中から、強力なマヒシャという悪魔が、大きな山を持って出て来た。(五二) 山を持ち上げた、雲に囲まれた太陽のような彼を見て、神々は逃げ出した。(五三) するとマヒシャは神々に襲いかかり、山を投じた。その落下する恐ろしい形の山に打たれ、幾万という神の兵士が地上に倒れた。(五四) かくてマヒシャは悪魔たちとともに、神々をおののかせ、戦いを求めて速やかに神々に襲いかかった。獅子が小さな獣に襲いかかるように。(五五) インドラをはじめとする神々は、襲ってくるマヒシャを見て、戦場において恐れ、武器も旗標も投げ捨てて逃げ出した。(五六)

それからマヒシャは怒り狂い、速やかにルドラ（シヴァ）の戦車のところに行き、攻撃して、ルドラの戦車の轅（ながえ）をつかんだ。(五七) 怒ったマヒシャが突然ルドラの戦車のところに行った時、天地は咆哮し大仙たちは気を失った。(五八) 巨大な体をした、雨雲のような悪魔たちは雄叫びをあげ、「我々は勝った」と確信した。(五九) そのような有様であったが、尊い神（シヴァ）は戦いにおいてマヒシャを殺さなかった。その時、スカンダがその悪者を殺すものであることを思い出したからである。(六〇) 一方マヒシャは、ルドラの戦車を見て、恐ろしく咆哮した。神々をおののかせ、悪魔たちを歓喜させつつ。(六一)

それから、神々に恐ろしい危険が迫った時、マハーセーナ（スカンダ）が、怒りにより太陽のように燃えてもどって来た。(六二) その神は赤色の衣をまとい、赤い花輪で飾られ、赤い口（顔）をし、長い腕を持ち、黄金の鎧を着けていた。(六三) 太陽のような金色に飾く戦車に乗っていた。彼を見ると、悪魔の軍隊は、戦場において、急いで逃げ出した。(六四) そしてその強力なマハーセーナは、相手を裂く光り輝く槍をマヒシャに向けて投じた。(六五) その投じられた槍は、マヒシャの巨大な頭を断ち切った。頭を切られて、マヒシャは生命を失って倒れた。(六六) 神々や悪魔たちが見守る間、その槍は投じられる度に幾千という敵を殺し、その度ごとにまたスカンダの手にもどるのであった。(六七) 叡知あるマハーセーナはほとんどの恐ろしい悪魔の群を矢で殺した。残りの悪魔の群は恐れおののき、スカンダの眷属によって幾百となく殺されて食われた。(六八) 彼らは悪魔たちを食い、その血を飲み、一瞬にして全世界を悪魔のいないものにして、この上なく歓喜した。(六九)

太陽が闇を滅し、火が樹々を焼き尽くし、風が雲を吹き払うように、誉れ高いスカンダは、その力により敵を征服した。(七〇) クリッティカーの息子（スカンダ）は、神々に敬われつつ、マヘーシュヴァラ（シヴァ）に敬礼し、光線をあまねく放つ太陽のように輝いていた。(七一) スカンダが敵を滅ぼし、マヘーシュヴァラのそばに行った時、インドラは彼を抱きしめて告げた。

(七二)「スカンダよ、そなたは梵天に恩寵を受けたあのマヒシャを殺した。最高の勝利者よ、彼にとっては神々も草でできたかのように取るに足りなかった。勇士よ、そなたは神々の棘であるあのマヒシャを殺したのだ。(七三) そなたはまた、マヒシャに匹敵する、神々の敵である悪魔たちを、戦闘において幾百も殺した。我々は前に、彼らにさんざん苦しめられたものだ。(七四) そしてその他の悪魔たちは幾百となく、そなたの眷属によって食われた。そなたは戦闘において、シヴァ神のように敵を征服した。(七五) 神よ、これがそなたにとって第一の名誉ある行為になるであろう。そしてそなたの名声は三界において不滅になるであろう。神の息子よ、神々はそなたに従属するであろう。(七六) マハーセーナよ。」

(七七) このように告げてから、インドラはシヴァ神に別れを告げ、神々とともに引きあげた。ルドラ(シヴァ)はバドラヴァタ(シヴァの住処)に去り、神々も引きあげた。そしてルドラは神々に告げた。「スカンダを私であると見なせ」と。(七八) その火神の息子(スカンダ)は、悪魔の群を滅ぼして、大仙たちに敬意を表され、たった一日のうちに三界すべてを征服した。(七九)

スカンダのこのような出生を、心をこめて読誦する人は、この世で繁栄を得てから、スカンダの世界に行くであろう。(八〇)

(第二百二十一章)

(38) ドラウパディーとサティヤバーマーとの対話(第二百二十二章—第二百二十三章)

夫を惹きつける法

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
バラモンたちと偉大なパーンダヴァたちが座っていた時、ドラウパディーとサティヤバーマー（クリシュナの妻）とはいっしょに中に入り、喜んで大いに笑いながら、楽しく座していた。（一）親密に語る二人の女性は、久しぶりに会って、クル族とヤドゥの王たちについての驚異的な物語をお互いに語り合った。（二）その時、サトラジットの娘であり、クリシュナの愛妻である、美しい腰のサティヤバーマーは、ドラウパディーに密かにたずねた。（三）

「ドラウパディーよ、あなたはどのように行動してパーンダヴァたちに仕えていますか。この若者たちは世界守護神のように勇士で、最高に尊敬されています。彼らはあなたに従属して、どうしてあなたのことを怒らないのですか。美しい女（ひと）よ。（四）というのは、美しい顔の女よ、パーンダヴァたちはいつもあなたに従順で、みながあなたの顔を眺めていますから。本当のことを私に言って下さい。（五）それは誓戒のおかげですか。それとも苦行、沐浴、呪文（マントラ）のせいですか。それとも薬草か、何かの術の力ですか。根（薬）の力のせいですか。念誦、護摩のおかげですか。それとも媚薬のおかげですか。（六）ドラウパディーよ、あなたの名声をもたらす〔夫婦生活の〕幸せの秘訣を私に教えて下さい。私はそれでいつもクリシュナを支配したいのです。（七）」

誉れ高いサティヤバーマーはこのように言って話すのをやめた。夫に貞節な気高いドラウパディーは彼女に答えた。（八）

「サティヤーよ、あなたが私に聞いたようなことは、悪い女のふるまいです。邪道を行なえば名誉が損なわれます。（九）そのような質問や疑問はあなたにふさわしくありません。あなたは知性をそなえた、クリシュナの愛しい妻ですから。（一〇）女が呪文や根（薬）に熱中しているのを夫が知ったら、家に入った蛇を恐れるように彼女を恐れるでしょう。（一一）恐れる人にとって、どうして平安がありましょう。平安でない人にとって、どうして幸福がありましょう。呪文の力によって夫が妻に支配されるということは決してないでしょう。（一二）それに、敵から派遣された刺客が（異本に基づく）、根（薬）という口実のもとに、恐ろしい病気や毒をもたらすこともあります。（一三）そして男が、舌や皮膚によって、与えられた粉末をとれば、それは疑いもなく速やかに彼を殺すでしょう。（一四）女たちは夫を腹水症にかからせ、癩病にし、白髪にし、不能、聾唖、盲目にします。（一五）邪道に従う悪女たちは夫を殺してしまいます。女は決して夫によくないことをすべきではありません。（一六）誉れ高いサティヤバーマー様、偉大なパーンダヴァたちに私がどのような行動をとっているのか、すべて真実を申し上げますからお聞き下さい。（一七）

私はいつも我執と欲望と怒りとを捨て、常にパーンダヴァたちとその妻たちに、恭しく仕えています。（一八）愛執を抑制し、自己〔の心〕を統一し、高慢でなく夫たちに仕え、その心を守っています。（一九）悪いことを言ったり、不適切に立ったり見たり座ったり歩いたり、

あるいはそのようなそぶりをすることすら恐れています。（二〇）太陽や火のような、月のような勇士たちであり、見るだけで敵を殺し、恐るべき威光により敵を苦しめるパーンダヴァたちに、私はこのようにして仕えています。（二一）神、人間、ガンダルヴァ（半神）であろうと、美しく飾られた若者、金持ち、美男子であろうと、私は他の男たちについて考えたことがありません。（二二）夫が食事をせず、沐浴せず、寝ないうちは、私はいつも寝たり食べたりしません。召使たちに対してすら、私は同様にしております。（二三）夫が畑や森や村から帰宅すると、私は立ち上がって出迎え、座席や水を出して歓待します。（二四）私は食器や家具を清潔にしています。おいしい料理を作ります。適切な時に食事を出します。私は努力して穀物を蓄えます。住居をきれいに掃除します。（二五）私はいつも会話を絶やさず、悪い女とはつき合いません。常に愛想よく、いつも怠惰ではありません。（二六）冗談でないのに笑ったり、絶えず門口に立ったり、便所や庭に長くいたりすること。そういうことを私は避けます。（二七）過度に笑ったり怒ったりすることや、怒りの原因を避けます。サティヤーよ、私はいつも夫たちに仕えることに専念しています。私はあらゆる場合、夫と別れることを望みません。（二八）夫が何かの家族の用事で旅に出る時は、私は花やお化粧をつけないで、誓戒を守っています。（二九）私の夫が飲まないもの、嚙まないもの、食べないものは何でも、私はそれをすべて避けます。（三〇）美しい女（ひと）よ、私は教えに従って自制し、よく飾られ、非常に敬虔で、夫の好ましいことと有益なことに専念しています。（三一）

以前、姑（しゅうとめ）が私に話した家庭における義務（ダルマ）、行乞（托鉢）、施食（せじき）、祖霊供養、新月祭と満月祭、

敬うべき人々に対する尊敬ともてなし、その他のことについて私は心得ています。（三二）私は彼らすべてに、昼も夜も孜々として従っております。いつも修養（ヴィナヤ）と戒行（ニヤマ）に、全身全霊で専念しています。（三三）私の夫たちは柔和で、いつも真実で、誓いと義務を守っていますが、私は彼らが怒った毒蛇であるかのように彼らに仕えます。（三四）

女性の永遠の法（ダルマ）は夫に依存すると私は考えます。夫は神様です。夫が帰趨（寄る辺）であって、他に帰趨はありません。夫に好意的でなくふるまう女がいるでしょうか。（三五）私は夫たちを差し置いて寝たり食事をしたり身を飾ったりすることはありません。私はすっかり抑えつけられても、あらゆる場合、姑の悪口を言いません。（三六）美しい女（ひと）よ、このように注意することにより、常に勤め励むことにより、そして目上の人々に仕えることにより、夫たちは私の支配下に帰したのです。（三七）勇士たちの母である、真実を語るクンティー様に対し、私はいつも自分自身で沐浴や着衣や食事の世話をして仕えています。（三八）私は衣服や装飾や食事の点で彼女を差し置いたことは決してありません。また、大地に等しいプリター（クンティー）の悪口を言ったこともありません。（三九）

かつては、ユディシティラの宮殿で、いつも八千人のバラモンが黄金の器で食事をしたものです。（四〇）ユディシティラは、八万八千人のヴェーダ学習を修了した家長たちを扶養しました。一人一人に三十人の奴隷女をつけて。（四一）その他、一万人の禁欲の行者たちに、黄金の器で食事が出されました。（四二）私はヴェーダ学者であるすべてのバラモンに土地を寄進し、飲物や衣服や食物によって適切にもてなしました。（四三）そのクンティーの偉大な

息子には、一万人の奴隷女がいました。彼女たちは貝の腕輪をはめ、金の胸飾りをつけ、美しく着飾っていました。(四四)高価な花環と装身具をつけ、金色で、栴檀香を注がれていました。宝玉と黄金を身につけ、舞踊と歌に巧みでした。(四五)私は彼女たちについてすべて知っています。名前も容姿も、食物や衣服も。彼女たちの行動も、何をして何をしなかったかを。(四六)またクンティーの聡明な息子には十万人の召使女がいて、昼も夜も器を手に持って客人たちに食事を出していました。(四七)そしてインドラプラスタに住むユディシティラには、十万頭の馬と十万頭の象がつき従っていました。(四八)

大地を守護していた時、王には以上のものがありました。私は彼らを数えさせ、その数を聞いていました。(四九)すべての宮中にいる人々と、すべての従者たちについて、牛や羊の番人にいたるまで、彼らのしたことしなかったことを、私はすべて知っていました。(五〇)美しい女よ、誉れ高いパーンダヴァたちのうちで、私ひとりが、王の収入と支出との一切合財を知っていました。(五一)バラタの雄牛たちは、私に家のことをすべてやらせて、私を崇めることに専念していました。美しい顔の女よ。(五二)私はその重荷が悪党どもに侵害されぬように、すべての幸せを捨てて、夜も昼も孜々として努力していたのです。(五三)法を実践する夫たちの宝庫は、ヴァルナの宝に満ちた海のように不可侵でしたが、私ひとりがそれについて知っていました。(五四)

私は夜も昼も飢えと渇きに耐えています。クンティーの息子たちに仕えている私にとっては、夜も昼も同じなのです。(五五)私はあらゆる時に最初に目覚め、最後に寝ます。サティ

ヤーよ、これが私の夫を魅了する術です。(五六)私はこのようなすばらしい夫を魅了する術を行なうことができます。私はよからぬ女たちのふるまいをすることもできませんし、したいとも思いません。(五七)」

ドラウパディーが告げた、法(ダルマ)をともなう言葉を聞いて、サティヤーは法を実践する彼女に敬意を表して言った。(五八)

「ドラウパディーさん、参りました。お許し下さい。というのは女友達にふざけて話すことは慎みのないことですから。(五九)」

(第二百二十二章)

ドラウパディーは言った。

「夫の心をとらえる、欠点のない道をあなたに申し上げます。友よ、その道に適切に従えば、夫を愛人たちから切り離すことができます。(一)

サティヤーよ、神々を含む全世界において、夫に等しいような神様はいません。(二)彼が満足すれば、すべての願いがかないます。彼が怒れば、あなたを滅ぼすでしょう。

子供たち、種々の享楽、目もあやな寝台や座席、衣服、花輪、お香、天の世界、大きな名声(異本にもとづく)が夫から得られます。(三)

この世では幸福は容易には得られません。よい女がやっとのことで幸福を得るのです。そこで、親しみをこめてクリシュナを敬いなさい。常に愛情により、身を尽くして。(四)

彼の方も、『自分は彼女に愛されている』と知って、おいしい食物、上等の花輪、種々のお香を贈り、礼儀正しく、あなただけを全身全霊で抱きしめるでしょう。(五)

夫が門口に来る音を聞いたら、すぐに立って出迎え、家の中で立っていなさい。夫が入って来るのを見たら、急いで座席と足を洗う水とを出してもてなしなさい。(六)

召使女を使いに出したら、立ち上がってすべてを自ら行なうべきです。クリシュナがあなたの心情を知るようになさい。『彼女は全身全霊で私を愛している』と。サティヤーよ。(七)

あなたの夫があなたの前で話したことが秘密でなくても、それを人に言ってはいけません。誰かライバルの女がヴァースデーヴァ（クリシュナ）に告げ口すれば、彼の愛は冷めてしまうでしょう。(八)

夫が気に入っている人々、夫に献身的な人々、夫に有益な人々に、種々のやり方で食事をさせるべきです。彼に嫌われている人々、彼の味方でない人々、有益でない人々、騙す人々、高慢な人々から常に離れなさい。(九)

男たちに対して浮ついた気持や放逸を離れ、沈黙を守って、感情を制御しなさい。息子であるプラデュムナやサーンバの場合も、決して人のいないところで彼らの近くに座ってはなりません。(一〇)

高い家柄の女、邪悪でない女、貞節な女たちと交際しなさい。気性の激しい女、酒飲みの女、大食の女、盗癖のある女、性悪な女、移り気な女は避けるべきです。(一一)

以上のような、〔夫婦生活の〕幸せをもたらす秘訣は、称えられるべきものであり、人を天界に導き、敵を滅ぼすものです。高価な花輪や装飾品をつけ、体に香油を塗り、清らかな香りを放って、夫を満足させなさい。(一二)」

(第二百二十三章)

(39) 牧場視察（第二百二十四章—第二百四十三章）

ドゥルヨーダナ、牧場視察を企てる

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナはマールカンデーヤなどのバラモンや偉大なパーンダヴァたちとともに、親しく語り合って座っていたが、やがて彼らに礼儀正しく別れを告げた。そして彼は、戦車に乗ろうとして、サティヤーを呼んだ。（一―二）するとサティヤバーマーは、そこでドラウパディーを抱きしめ、その心情にふさわしい心地よい言葉をかけた。（三）

「ドラウパディーさん、やきもきしたり、苦しんだり、不眠で悩むことはないわ。神のような夫たちとともに勝利して土地を取りもどすでしょう。（四）あなたのような徳性をそなえ吉相をそなえた女性が長いこと悩んでいるはずはありません。黒い眼の女（ひと）よ。（五）あなたはきっと、棘（危険）がなく対立のない国土を、夫たちとともに享受するでしょう。私はそう聞いております。（六）ドリタラーシトラの息子たちを殺し、彼らの敵意に対し復讐し、大地がユディシティラに帰するのを見るでしょう。ドルパダの娘よ。（七）クル族の女たちは、慢心して迷妄に陥り、あなたが亡命する時にあざ笑いましたが、あなたはすぐに彼女たちが絶望するのを見るでしょう。（八）あなたが苦しんでいた時に不快なことをした連中は、すべてヤマ（閻魔）の住処に行くと知りなさい。ドラウパディーよ。（九）あなたの息子たち――プラティヴィンディヤ、強力なスタソーマ、アルジュナの子シュルタカルマン、ナクラの子シャターニーカ、サハデーヴァとの間に生まれたシュルタセーナ――これらあなたの息子たちはすべて、戦略に巧みで武器に通達した勇士たちです。彼らはアビマニユ同様、ドゥヴァーラヴァティー市において非常に幸せに暮らしています。（一〇―一一）スバドラーもまた、あなたと同じように、喜んで全身全霊で彼らを愛しています。自分の子と分け隔てなく。彼らによって苦しみを癒されて。（一二）プラデュムナの母（ルクミニー）も、一心に彼らを愛しています。ケーシャヴァ（クリシュナ）も、バーヌなどと彼らを区別しません（異本による）。（一三）私の義父はいつも彼らの衣食に気を配っています。[バラ]ラーマをはじめとするアンダカとヴリシュニの人々は、みな彼らを愛しています。彼らに対する愛情はプラデュムナに対する愛情に等しいのです。美しい女（ひと）よ。（一四）」

サティヤバーマーは親愛をこめて、このような親密で喜ばしく心にしみる言葉を告げてから、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）の戦車の方に行く決意をした。（一五）そのクリシュナの妃は、ドラウパディーの周囲を右まわりにまわって敬意を表した。それからその美しい女は、クリシュナの戦車に乗った。（一六）勇猛なるヤドゥ族の長は、微笑してドラウパディーを励ましてから、パーンダヴァたちを引き返させ、それから駿足の馬たちにひかれて立ち去った。（一七）

（第二百二十四章）

ジャナメージャヤ王はたずねた。

「その最高の人であるパーンダヴァたちは、寒暑や風や日光にやつれて森に住み、その湖水と清浄な森に到着してから、その後どのように行動したのか。（一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

パーンドゥの息子たちはその湖に着き、人々を立ち去らせ、彼らに種々の指示をした。それから、心地よい森や山や川岸をさすらった。（二）彼ら勇士が森に住み、学習し、苦行を積んでいた時、古（いにしえ）のヴェーダ学者たちが彼らのもとに来た。そしてその最上の人々は、彼らを歓待した。（三）ある日のこと、物語に巧みなバラモンが、〔敵方の〕クルの王子たちのもとにやって来た。彼は彼らと会い、たまたまドリタラーシトラ王のもとに行った。（四）

彼は座り、もてなされ、クル族の長である老王にうながされて、ダルマ神と風神とインドラの息子たち（ユディシティラ、ビーマ、アルジュナ）と、双子（ナクラ、サハデーヴァ）について語った。（五）彼らは痩せ、風や日光でやつれ、ひどく困難な状況に陥っていたと。そして、勇士たちが夫でありながら身寄りのないドラウパディーが、ひどく苦しんでいることを語った。（六）

その話を聞いて、ドリタラーシトラ王は憐憫の情にかられた。王の息子や孫たちが森で暮らして、苦悩の川に落ちていることを聞いて、王は悲しみで心が傷つき、ため息と涙を出して悩んだが、すべては自分が原因であると考えて、やっとのことで心を落ち着けて、次のように言った。（七―八）

「何と、真実で清廉で高貴な、私の息子たちのうちで最年長であるダルマ王、アジャータシャトルが、以前はランク鹿の毛布で寝ていたのに、地面に寝ているとは。（九）あのインドラのような王子は、いつも、彼を讃える讃嘆者（マーガダ）や吟誦者（スータ）の群によって目覚めさせられたものだ。きっと今は、地面で寝ている彼は、夜の終わりに、鳥の群によって目覚めさせられるのだ。（一〇）何とあの狼腹（ビーマ）が、風や日光にやつれ、怒りを全身にみなぎらせ、ドラウパディーの面前で地面に座り、彼の身体はそのようなことには慣れていないのに、地面で寝ているとは。（一一）また聡明で繊細なアルジュナは、ダルマの息子である王に従い、全身で苦悩し、必ずや怒りから夜も眠らない。（一二）そして双子は、幸せを失ったドラウパディーとユディシティラとビーマを見て、恐ろしい力を持つ蛇のように息を吐いて、疑いもなく怒りから夜も眠らない。（一三）また幸せにふさわしい双子は不幸である。天上の神のようなすばらしい姿をしているのに。彼らはきっと心が安まらず、眠れずにいるだろう。ただ、法（ダルマ）と真実とにより我慢しているのだ。（一四）あの強力な風神の息子は、風神にも劣らない力を持つが、法の輪縄にその恐るべき威光を縛られて、ため息をついて怒りをこらえているに違いない。（一五）そして彼は地面をころげまわり、私の息子たちを殺すことを望んでいるが、法と真実に制止されて時節を待っている。戦闘にかけて余人に勝る彼は……。（一六）

ユディシティラが詐術により敗れた時、ドゥフシャーサナは乱暴な言葉を告げた。それが狼腹の身体に入り込み、彼の急所を燃やす。火が薪を燃やすように。（一七）ダルマの息子は悪いことを考えない。アルジュナも彼に従う。しかしビーマの怒りは森に住むことにより増大する。火が風により増大するように。（一八）その勇士はその怒りに引き裂かれ、手で手を

握りしめて、非常に熱い恐ろしいため息を吐く。私の息子や孫たちを燃やすかのように。（一九）

ガーンディーヴァ弓を持つ者（アルジュナ）とビーマは、死神（アンタカ）とカーラ（時間、破壊神）のように猛烈で、戦闘において雷電のような矢をまき散らし、敵軍を全滅させるであろう。（二〇）ドゥルヨーダナ、シャクニ、御者の息子（スータ）（カルナ）、大馬鹿のドゥフシャーサナたちは、蜜のみを見て、ビーマとアルジュナという断崖を見ない。（二一）人間は善悪の行為をして、行為者はその果報をうける。彼は否応なくその果報に束縛される。人間がそれから解放されることがどうしてあろう。（二二）よく耕された田畑に種がまかれ、季節にふさわしく雨神が雨を降らせる時も、実りがないことがあろう。運命を除いて他に、ことが成就する原因があろうか。そう私は考える。（二三）

賭博に通じた〔シャクニ〕は、公正にふるまうユディシティラに不当なしうちをした。私もそうだ。悪い息子たちに従ってしまった。その結果、クル族の終末の時が来たのだ。（二四）

風はかきたてられずとも必ず吹くだろう。妊婦は必ずや子を産むだろう。昼の始めには必ず夜は消滅し、また夜の始めには必ず昼は消滅する。（二五）（二六―二七略）

アルジュナは森からシャクラ（インドラ）の世界へ行った。（二八）彼の勇猛さを見よ。彼は四種の神的な武器を習得して、再びこの世界にもどった。いかなる人間が、肉体を持ったままで天界へ行き、再びもどって来ることを望むであろうか。多くのクル族の人々がカーラに襲わ

れてまさに死のうとしているということを、もし彼が予見しなければ……。（二九）手練の弓の使い手アルジュナ、そしてその弓は世界一のガーンディーヴァ、そして彼のあの神的な武器、これらの三つの威光に耐えられる者が誰かいるか。（三〇）」

ドゥルヨーダナとサウバラ（シャクニ）は、密かにその王の言葉を聞いて、カルナのところに行きすべてを報告した。心の狭い彼は不快に思った。（三一）（第二百二十五章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドリタラーシトラの言葉を聞いたカルナは、シャクニとともに、この時とばかりにドゥルヨーダナに次のように言った。（一）

「勇猛なパーンダヴァたちを実力によって追放したからには、バーラタよ、一人でこの大地を享受しなさい。インドラが天界を享受するように。（二）王よ、東南西北に住むすべての王たちは、あなたに進貢するようになりました。（三）かつてパーンダヴァたちのものであった、輝くばかりの富貴を、王よ、今やあなたは弟たちとともに獲得しました。（四）インドラプラスタにいたユディシティラのもとに、輝かしい富貴がとどまっているのを、しばしの間、我々は悲嘆に暮れて眺めておりました、王よ。（五）その富貴はあなたにより、ユディシティラ王から、知恵によって奪われ、輝くばかりに見えます。勇者よ。（六）それに、敵の勇士を殺す王中の王よ、すべての王たちが、何か御用はあるかと、あなたの命令を待っています。

(七)今や、この海を着物とする大地の女神すべてがあなたのものです。山と森をともない、村や町や鉱山をともない、森林地帯をともない、都市で飾られた大地が。(八)バラモンたちに敬われ、その勇気により諸王に尊敬されて、王よ、天空で太陽が輝くように、あなたは王たちの中で輝いています。(九)ヤマ王がルドラ神群に囲まれ、インドラがマルト神群に囲まれるように、王よ、あなたはクル族の人々に囲まれて、星々の王（月）のように輝いています。(一〇)パーンダヴァたちはあなたの命令に従わず、決して悩むことはありませんでしたが、我々はその彼らが富貴を失って森に住んでいるのを見ます。(一一)大王よ、パーンダヴァたちはドゥヴァイタヴァナ湖のそばで、森に住むバラモンたちといっしょに暮らしているということです。(一二)そこで大王よ、最高の富貴をそなえたあなたは遠征しなさい。太陽のようにパーンドゥの息子たちを燃やしつつ。(一三)あなたは王位についていて、富貴に囲まれ、繁栄しています。王よ、御覧なさい。あのパーンダヴァたちは、王位から堕ち、富貴を失い、繁栄を失っています。(一四)あなたは高い家柄で、大きな幸運にめぐまれています。パーンダヴァたちに、ナフシャの子ヤヤーティを見るようにあなたを見させてやりなさい。(一五)王よ、友たちも敵たちも、ある人における富貴を輝かしいと認めるなら、その富貴は強力なものではないか。(一六)自分が平坦なところにいて、平坦でないところにいる敵を見る。自分が山上にいて、平地に立つ敵を見る。これよりも幸せなことがあろうか。(一七)王中の虎よ、人は息子や財産を得ても、王国によっても、敵の不幸を見るほどの喜びを見出さないものだ。(一八)自らは目的を成就して、アルジュナが隠棲所で樹皮や鹿皮を着ているの

を見るほど愉快なことはあるまい。(一九)着飾ったあなたの奥方に、樹皮や鹿皮を着た不幸なドラウパディーを見せてあげなさい。そして、あの女にもう一度絶望させてやりなさい。そしてまた、財産を失った彼女が、自己を呪い生命を呪うようにしてやりなさい。(二〇)あの集会場の真中で彼女が味わった絶望など、着飾ったあなたの奥方を見て味わう絶望と比べれば大したことはない。(二一)」

カルナはシャクニとともに、王にこのように告げて、言い終わると沈黙していた。

（第二百二十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

カルナの言葉を聞くと、ドゥルヨーダナ王は喜んだが、再び沈み込んで次のように言った。(一)

「カルナよ、あなたが言ったことは、すべて私も考えたことだ。しかし、パーンダヴァのいる所へ行く許可を得られないだろう。(二)ドリタラーシトラ王はあの勇士たちのことで嘆いている。そして彼らが苦しんでいるということで、いっそう彼らについて悩んでいる。(三)王が我々の計画を知れば、将来のことを警戒して、行くことを許可しないだろう。(四)というのは、ドゥヴァイタヴァナに行く目的は、森にいるあの私の敵たちをやっつけること以外にないというのは明白だからね。(五)例の賭博に際し、召使女の子（ヴィドゥラ）が私やあなたやシ

ヤクニに言った言葉を憶えているだろう。(六)あの以前の言葉、そしてその他の嘆きのことを考えて、行った方がいいのか行かない方がいいのか決心できないのだ。(七)
私にとっても、ビーマとアルジュナがドラウパディーとともに、森で苦しんでいるのを見るのはとても愉快なことだ。(八)全世界を獲得しても、パーンドゥの息子たちが樹皮と鹿皮を着ているのを見るほど嬉しいことはないだろう。(九)ドラウパディーが森でぼろ衣を着ているのを見るのは最高ではないか。カルナよ。(一〇)ダルマ王やビーマセーナが、最高の富貴をそなえた私を見るならば、愉快なことである。(一一)

しかし、その森に行く口実が見つからないのだ。私が出かけるのを王が許可するような。(一二)シャクニやドゥフシャーサナとともに、あの森に行けるような何かうまい口実を見つけてくれ。(一三)私もまた、今日、行くか行かないか決心して、明朝、王のところに行くであろう。(一四)私と、クルの最上者ビーシュマがそこに座った時、見出した口実をシャクニとともに話してくれ。(一五)それから、ビーシュマと王が我々の出発に関して何か言うのを聞いてから、私は祖父様に懇願して、決心しよう。(一六)」

彼らはみな、承知したと言って、それぞれの住居に帰って行った。

翌朝、カルナは王のもとに行った。(一七)それから、カルナは笑いながらドゥルヨーダナに次のように告げた。

「王よ、私は口実を見つけた。聞きなさい。(一八)ドゥヴァイタヴァナのすべての牧場（牛飼村）はあなたを待っております。王よ、牧場視察の口実で出かけましょう。ためらうことはありません。(一九)というのは、いつも牧場視察に行くのは適切なことですから。王よ、そうすれば父王はあなたが行くことを許可するでしょう。(二〇)」

このように二人が牧場視察に決めようと話している時、ガーンダーラの王のシャクニが笑いながら言った。(二一)

「私は非難されないで行けるような口実を見つけた。王は許可してくれ、しかも我々をうながすであろう。(二二)王よ、ドゥヴァイタヴァナのすべての牧場はあなたを待っている。牧場視察の口実で出かけよう。ためらうことはない。(二三)」

そこで一同は大笑いして、お互いの手をさし出した。そしてこの結論に達して、彼らはクルの最上者に会った。(二四)（第二百二十七章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ジャナメージャヤよ、それから一同はドリタラーシトラに会った。彼らは王の健康をたずね、王も彼らに元気かとたずねた。(一)それから、あらかじめ彼らに指示されていた牛飼が、付近にいる牛たちについて、ドリタラーシトラに報告した。(二)その直後に、カルナとシャクニは、最高の王ドリタラーシトラに言った。(三)

「クル族の王よ、今、牧場（牛飼村）は心地のよい場所にあります。牛の数を数え、仔牛に烙印を押す時が来ました。(四)王よ、この時期には、あなたの御子息が狩猟するにも好適です。

どうかドゥルヨーダナが行くことを許可して下さい。（五）」
ドリタラーシトラは言った。
「わが子よ、狩猟はすばらしい。牛を視察することも同様だ。また、牛飼たちを信用してはならぬと聞いている。（六）しかしあの付近には、あの人中の虎たちがいるということだ。そこで、お前たちが自らそこに行くことは許可しない。（七）というのは、彼らは詐術により敗れ、大森林で苦しんでいる。カルナよ、あの有能な勇士たちは、常に苦行を行じている。（八）ダルマ王は怒らないだろう。しかしビーマセーナは短気であり、ヤジュニャセーナの娘（ドラウパディー）はまさに熱力のかたまりである。（九）そしてお前たちは、慢心で我を忘れ、罪を犯すであろう。そこで苦行の力をそなえた彼らは、お前たちを焼くであろう。（一〇）あるいは、勇士たちは怒りにかられて武器をとり、刀をとり、こぞって武器の威光によりお前たちを焼くであろう。（一一）あるいは、お前たちは多勢をたのんで、何とかして彼らを殺すかも知れない。それは最高に卑劣なことだ。しかもそれもできないと私は思う。（一二）というのは、勇士アルジュナはインドラの世界に滞在し、諸々の神的な武器を獲得して、森にもどって来たのであるから。（一三）アルジュナは以前、そのような武器を習得していないのに地上を征服した。その勇士は今や武器を習得したのだから、どうしてお前たちを殺さないだろうか。（一四）あるいは、私の言うことをきいて、お前たちがそこで注意していたとしても、信用（できないこと）から、びくびく生活し、不幸なことになるであろう。（一五）あるいは、ある兵士

たちがユディシティラに悪いことをすれば、お前としては知らなかった行為でも、結局はお前の罪だということになろう。（一六）それ故、誰か信頼の置ける人々を行かせて、牛の数を数えさせなさい。お前が自らそこに行くことは賛成できない。（一七）」
シャクニは言った。
「パーンダヴァの長子は法（ダルマ）を知っております。彼は、十二年間森で住むと、集会において約束しました。（一八）その他のパーンダヴァたちもみな、彼の行為に従い、法を実践しています。クンティーの息子ユディシティラは、我々に敵対することはないでしょう。（一九）それに、狩に行きたいという我々の希望はつのるばかりです。我々はまた、牛を数えることを目的としています。パーンダヴァに会うつもりはありません。（二〇）そこで何らかのよからぬ行為をすることは決してないでしょう。我々は彼らが住んでいる場所には行かないでしょう。（二一）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
シャクニにそう言われて、ドリタラーシトラ王はしぶしぶ、ドゥルヨーダナと顧問たちの出発を許可した。（二二）バラタ族の長ドゥルヨーダナは、カルナをともない、大軍に囲まれて出発した。（二三）彼はまた、ドゥフシャーサナ、賭博者シャクニ、その他の弟たち、幾千の女たちに囲まれていた。（二四）市民たちはみな、妻をともなって、ドゥヴァイタヴァナ湖に視察に出発するその勇士の後について行った。（二五）八千の戦車兵、三万の象兵、幾千も

の歩兵、九千の騎兵がいた。(二六) それから、荷車、屋台、遊女、商人、吟誦者、猟師たちが、何百何千といた。(二七) 王が行進する音はもの凄く、雨季の暴風の音のようであった。(二八) ドゥルヨーダナ王はありとあらゆる乗物とともに、ドゥヴァイタヴァナ湖に行って、そこから一里ほどのところに滞在した。(二九) (第二百二十八章)

クル軍がガンダルヴァの軍に敗れる

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

さてドゥルヨーダナ王は、森の中であちこちに滞在し、牧場(牛飼村)の近くに行って、そこで野営した。(一) 人々は、心地よく、よく知られた、水と樹木のある、すべての長所をそなえた場所に、彼の住居を造った。(二) そしてカルナやシャクニやその他すべての弟たちのためにも、全く同様にして、彼の住居のそばに、それぞれの多くの住居を造った。(三) それから王は、牛を幾百幾千と見て、その印と特徴についてすべての牛を検査した。(四) そして彼は仔牛に烙印を押し、交配した牛を知り、幼い仔牛のいる雌牛の数を数えた。(五) それから、クルの王子は三年牛の数を数え、印をつけてから、牛飼たちに囲まれて楽しく遊んだ。(六) そしてすべての市民や幾千の兵士たちは、その森で、神々のように、好きなように遊んだ。(七) 牛飼や歌手や、踊りと楽器に巧みな人々や着飾った少女たちが、ドゥルヨーダナにかしずいた。(八) 女の群に囲まれた王は喜んで、彼らに相応の財物や種々の飲食物を与えた。(九)

それから彼らは、みなで集まり、ハイエナ、水牛、鹿、ガヴァヤ牛、熊、猪たちを一斉に追いかけた。(一〇) 大森林で彼は動物たちを矢で殺し、象を捕え、心地よい場所で鹿たちを捕獲させた。(一一) 彼は牛の乳を飲み、諸々の食物を味わい、非常に美しい花々の咲く森林を見た。(一二) その森は酔った蜂たちに好まれ、孔雀たちの鳴き声が聞こえた。彼は次第に、清浄なドゥヴァイタヴァナ湖の方へ行った。彼は最高の富貴にめぐまれ、金剛杵(ヴァジュラ)を持つ大インドラのようであった。(一三) たまたまその同じ日に、ダルマの息子ユディシティラは、一日の王仙の祭祀(ラージャルシャジュニヤ)を行なった。彼は森に産するもので神聖な作法によりその祭祀を行なった。(一四) 叡知あるユディシティラ王は、正式な妻のドラウパディーとともに、湖の近くに滞在していた。(一五)

それから、ドゥルヨーダナは、弟たちとともに、「娯楽の家を速やかに作れ」と召使たちに命じた。(一六) 彼らはかしこまりましたと彼に言って、娯楽の家を作ろうとしてドゥヴァイタヴァナ湖に行った。(一七) ドゥルヨーダナの軍隊の先駆兵が湖に着くと、森の入口で、ガンダルヴァ(半神の一種)が入ろうとする兵士を制止した。(一八) 実はそこには、その前に、ガンダルヴァの王が従者たちに囲まれて、クベーラの宮殿からやって来て滞在していたのであった。(一九) 彼は天女(アプサラス)の群や神々の子たちとともにいつも遊ぶのであるが、遊ぶためにその湖を立入禁止にしたのである。(二〇) ドゥルヨーダナ王の従者たちは、ガンダルヴァ王によってそこが立入禁止になっているのを見て、王のいるところにもどった。(二一) ドゥルヨーダナは彼らの言葉を聞き、「彼らを追い払え」と言って、戦いに酔う兵士たちを派遣した。

（二二）王の言葉を聞いて、先駆兵たちはドゥヴァイタヴァナ湖に行って、ガンダルヴァたちに告げた。（二三）

「ドリタラーシトラの息子である、強力なドゥルヨーダナという王が、ここに遊びに来ている。そういうことだから退去しなさい。（二四）」

そう言われてガンダルヴァたちはあざ笑い、王の従者たちに乱暴に答えた。（二五）

「お前たちの愚かなスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）王はわかってないな。天人である我々に対して、まるで従者に対するように命令するとは。（二六）無知な彼の命により我々にそのように言う愚かなお前たちは、疑いもなくまさに死のうとしているのだ。（二七）みなしてクルの王のいるところに早く帰れ。ダルマ王（死の神ヤマ）の住処に今すぐに行くな。（二八）」

ドリタラーシトラ王の先駆兵たちは、このように言われて、王のいるところに逃げて帰った。（二九）

（第二百二十九章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。──

それから一同はそろってドゥルヨーダナのもとに行き、ガンダルヴァたちが言ったことを彼に報告した。（一）軍隊がガンダルヴァたちに遮られたということで、栄光あるドゥルヨーダナは怒りに満ちて兵たちに告げた。（二）

「私に不快なことをした、法（ダルマ）を知らない彼らを罰してやれ。もしインドラがすべての神々と遊んでいるにせよ。（三）」

ドゥルヨーダナの言葉を聞くと、強力なドリタラーシトラの息子たちと、幾千もの兵士たちは一斉に戦闘準備をした。（四）彼らはガンダルヴァたちを粉砕して、大きな獅子吼により十方を満たして、力ずくで森に入った。（五）それからクル族の軍隊はまた別のガンダルヴァたちに制止された。ガンダルヴァたちは話し合いにより彼らを制止したが、彼らはそれを無視して、大森林に入った。（六）

ドリタラーシトラの息子たちとその他の諸侯が話を聞こうとしないので、天人たちはみなしてチトラセーナのところに行って報告した。（七）ガンダルヴァの王チトラセーナはクル族の人々に対して非常に怒って、「あの卑しい連中を罰せよ」と一同に命じた。（八）ガンダルヴァたちはチトラセーナに許可されて、すべて武器をとり、ドリタラーシトラの息子たちに襲いかかった。（九）武器を振りかざしたガンダルヴァたちが迅速に襲ってくるのを見て、戦場でドゥルヨーダナが見ている前で、兵士たちは一斉に逃げ出した。（一〇）

自軍の兵たちがすべて背を向けて逃げ出すのを見ても、勇士カルナは退却しなかった。（一一）ガンダルヴァの大軍が襲撃して来るのを見て、カルナは大量の矢の雨によりこれを迎え撃った。（一二）御者の息子（カルナ）は、手練の早業で、クシュラプラ、ヴィシカ、バッラ、ヴァッツァダンタ、アーヤナと呼ばれる種々の飛道具により、幾百のガンダルヴァたちを殺した。（一三）その勇士は、ガンダルヴァたちの頭を射落とし、またたく間にチトラセーナのすべての軍を粉砕した。（一四）英邁なカルナがガンダルヴァたちを殺しているうち、彼らはさ

らに幾百、幾千と数を増した。（一五）チトラセーナの軍勢は猛烈に襲撃し、あっという間に、大地はガンダルヴァで埋め尽くされた。（一六）

そこでドゥルヨーダナ王とシャクニとドゥフシャーサナとヴィカルナと、その他のドリタラーシトラの息子たちは、ガルダ鳥のような音をたてる戦車により、敵軍を撃破した。（一七）そして更に、彼らはカルナを先頭に立てて戦った。そして大きな戦車の音をたて、馬で駆けまわり、カルナを補佐して、ガンダルヴァたちを食い止めた。（一八）それからすべてのガンダルヴァたちはクル族の人々とともに交戦し、身の毛がよだつ凄まじい戦闘が行なわれた。（一九）

ガンダルヴァたちは、矢に苦しめられて力を弱めた。クルの軍隊は、ガンダルヴァが苦しんでいるのを見て雄叫びをあげた。（二〇）短気なチトラセーナはガンダルヴァたちがおじけづいたのを見て、怒って席から飛び上がり、彼らを殺そうと企てた。（二一）そこで多彩な道を知る彼は、魔法の武器を用いて戦った。クルの軍はそのチトラセーナの魔術によって幻惑された。（二二）クル軍の一人一人の兵士は、十名ずつのガンダルヴァによって囲まれた。（二三）兵士たちは大軍に苦しめられ、戦場で恐怖にかられ、ユディシティラ王のいるところに逃げて来た。（二四）クル族の軍隊がすっかり粉砕された時、カルナは山のように動かずに立っていた。（二五）ドゥルヨーダナとカルナとシャクニは、戦闘でひどく傷つきながらも、ガンダルヴァたちと戦い続けた。（二六）すべてのガンダルヴァは、幾百幾千と、その戦いにおいてカルナを殺そうと思って、こぞって攻撃した。（二七）強力な軍隊が、剣や矛や槍によ

りカルナを殺そうとして、まわりをぐるりと取り囲んだ。（二八）ある者たちが彼の戦車の頸木を切断した。ある者たちが軍旗を倒した。ある者たちが車軸を、馬たちを、御者を倒した。（二九）ある者たちが傘を、戦車の緩衝用の柵を、制動装置を壊した。幾千のガンダルヴァたちは戦車を粉々に壊した。（三〇）そこでカルナは刀と楯を持って戦車から飛び降り、ヴィカルナの戦車に乗ると、逃げようとして馬をかりたてた。（三一）　（第二百三十章）

パーンダヴァに救われたドゥルヨーダナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

勇士カルナがガンダルヴァたちに敗れた時、ドゥルヨーダナが見ている前で全軍は逃げ出した。（一）自軍がすべて背を向けて逃げるのを見ても、ドゥルヨーダナは退却しなかった。（二）ガンダルヴァの大軍が自分に襲いかかって来るのを見て、勇猛な彼は矢を雨あられと浴びせた。（三）しかしガンダルヴァたちは矢の雨をものともせず、彼を殺そうとしてその戦車をぐるりと取り囲んだ。（四）彼らは彼の戦車の頸木、車軸、緩衝用の柵、軍旗、御者、馬たち、トリヴェーヌ（車軸と轅を連結する三叉の木材）、座席を破壊し、戦車を粉々に破壊した。（五）戦車を失い地面に落ちたドゥルヨーダナに、強力なチトラセーナは襲いかかって彼を生け捕りにした。（六）彼が捕えられた時、ガンダルヴァたちは戦車に乗っているドゥフシャーサナのまわりをぐるりと取り囲み、彼を捕えた。（七）他の者たちは、チトラセーナとともに、ヴィヴィンシ

ヤティに襲いかかった。その他の者たちは、ヴィンダとアヌヴィンダと、すべての王妃たちに襲いかかった。(八)

その時、ドゥルヨーダナの兵士たちはガンダルヴァたちに襲われて、前に負傷した人々とともに、パーンダヴァたちのところへ行った。(九) 荷車、屋台、遊女たち、動物にひかせた車(軍隊につき従っている)はすべて、王が捕えられた時、パーンダヴァたちに庇護を求めた。(一〇)

「見目麗しい勇士、ドリタラーシトラの強力な息子である王がガンダルヴァたちに捕えられました。パーンダヴァたちよ、追いかけて下さい。(一一) ドゥフシャーサナ、ドゥルヴィシャハ、ドゥルムカ、ドゥルジャヤも、王妃たちもすべて、ガンダルヴァたちに捕えられました。(一二)」

ドゥルヨーダナの顧問たちは、このように王の救助を求めて泣き叫び、悲嘆に暮れて、みなしてユディシティラに近づいた。(一三)

ドゥルヨーダナの老いた顧問たちが、このように悲嘆に暮れてユディシティラに懇願した時、ビーマセーナは彼らに告げた。(一四)

「奴らは悪いことをしたから、事態はこのように悪くなった。我々がやらなければならないことをガンダルヴァたちがやったのだ。(一五) これはいかさま賭博をする王の悪い計画のせいである。臆病者の敵を、他の者たちが倒すという言葉を我々は聞いている。(一六) ガンダルヴァたちは我々の眼の前で、このように非常に超人的な行為をしてくれた。幸いなことに、世の中には我々に好意的な男が誰かいるものだ。彼は我々が座っているうちに重荷を取り除き、幸せをもたらしてくれる。(一七) あの邪悪な男は、自分は順境にあって、逆境にある我々が、寒さや風や日光に苦しみ、苦行によってやつれているのを見ようと望んだ。(一八) 非法(アダルマ)を行なうあの邪悪なドゥルヨーダナの性行をまねる者たちは破滅する。(一九) 実にこの計画を教唆した者は非法をなした。それに対しクンティーの息子たちは邪悪ではない。私は以上のことを彼に属する長官である汝らに告げる。(二〇)」

短気なビーマセーナがこのように言った時、ユディシティラ王は彼に、「今は乱暴なことを言う時ではない」と告げた。(二一) (第二百三十一章)

ユディシティラは言った。

「クル族の人々が苦境に陥り、恐れおののき、庇護を求めて我々のもとに来たのに、弟よ、お前はどうしてそのようなことを言うのか。(一) 狼腹(ビーマ)よ、親族の間に離間と喧嘩と絶えざる敵意とが生じたのだ。しかし親族の法(ダルマ)は滅びていない。(二) 誰か外部者が親族のうちの一族(クラ)を攻撃する時は、善き人々は外部者の攻撃に我慢できないのだ。(三) 実にこの愚かなガンダルヴァは、我々がここに長らく滞在していることを知っていながら、我々を軽んじて、このような不快なことをした。(四) ガンダルヴァは戦闘において力ずくでドゥルヨーダナを捕えた。そして婦女が外部者に乱暴されたことにより、我々の一族は侵害された。(五) 庇護を求めて来た人々と、我々の一族を救うために、立ち上がれ。人中の虎よ。すぐさま準備せ

よ。(六)ビーマよ、アルジュナと双子と無敵のお前とで、捕えられているスヨーダナ(ドゥルヨーダナ)を解放せよ。(七)人中の虎よ、これらの戦車はすべての武器をそなえ、黄金の旗をつけ、インドラセーナなどの御者に操られている。(八)弟よ、これらに乗ってガンダルヴァたちと戦場で戦え。スヨーダナを解放するために孜々として努力せよ。(九)およそ王族(武士)は、庇護を求めて来たものを、全力をあげて守ろうとするものだ。お前のような者はなおさらだ。狼腹よ。(一〇)敵といえども手を合わせて庇護を求めて来たのを見て、『急いで救助に行け』とうながされるような男が、誰か他にいるだろうか。(一一)願いがかなうこと、王国、息子の誕生。そして敵を苦しみから解放すること。前の三つと後の一つは等しい(喜びである)。ビーマよ。(一二)スヨーダナが苦境に陥り、お前の腕力を頼って命乞いをする。これ以上のことがあろうか。(一三)狼腹よ、もしこの祭式が行なわれていなければ、私は自ら駆けつけるであろう。勇士よ、私は躊躇しない。(一四)ビーマよ、講和によってスヨーダナを解放するように、あらゆる方策を用いて努力せよ。(一五)もしあのガンダルヴァ王が講和によって彼を引き渡さないなら、穏やかな勇武を示して、彼を解放しなさい。(一六)しかしもし相手が穏やかな戦闘によってクル族の人々を解放しないなら、ビーマよ、あらゆる方策によって敵を攻略して彼らを解放しなさい。(一七)狼腹よ、私は以上のことだけ指示しておく。今は祭式が行なわれている最中であるからね。(一八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ユディシティラの言葉を聞いて、アルジュナは、クル族の人々を解放せよという兄の言葉に同意した。(一九)

アルジュナは言った。

「もしガンダルヴァたちが、講和によってドリタラーシトラの息子たちを解放しないなら、今日、大地はガンダルヴァ王の血を飲むことになろう。(二〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

真実を語るアルジュナのその約束を聞いた時、クル族の人々は再び元気になった。(二一)

(第二百三十二章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ユディシティラの言葉を聞くと、人中の雄牛たちは、ビーマセーナを先頭として、すべて喜ばしい顔つきをして立ち上がった。(一)すべての勇士たちは、黄金で多彩に輝く、(敵の武器により)断たれない鎧を身に着けた。(二)パーンダヴァたちはみな、戦車に乗り、旗標をつけ、弓を持ち、燃える火のように見えた。(三)見事に装備され、駿馬につながれた戦車に乗って、戦士の虎たちは速やかに出発した。(四)偉大な戦士であるパーンドゥの息子たちがみなして出発したのを見て、クル族の兵士たちの間に大歓声があがった。(五)勝ち誇る勇士

たちは空を飛ぶかのように急ぎ、またたくうちに、恐れることなくその森に集結した。(六) 勝ち誇るすべてのガンダルヴァは、戦車に乗り、戦いに長けた四名のパーンダヴァの勇士を見て引き返した。(七) しかしそのガンダマーダナに住む者(ガンダルヴァ)たちは、身構えた世界守護神のように輝いている彼らを見て、隊形を整えて対峙した。(八) 賢明なダルマ王(ユディシティラ)の言葉を聞き入れ、彼らは最初のうちは穏やかな戦い方をしていた。(九) しかしガンダルヴァ王の兵士たちは、愚かにも、穏やかな戦いが実は彼らにとって幸せなことだと理解できなかった。(一〇)

そこで、戦いにおいて無敵なアルジュナは、戦場において、天人たちに穏やかに語りかけた。(一一)

「この不愉快な行為はガンダルヴァの王にふさわしくない。他人の妻に乱暴を働き、人間と関わりを持つとは。(一二) 勇猛なドリタラーシトラの息子たちを解放しなさい。そして彼らの妻たちを解放しなさい。これはダルマ王の命令である。(一三)」

誉れ高いアルジュナにそう言われて、ガンダルヴァたちは笑ってアルジュナに告げた。(一四)

「わが子よ、我々はこの世でただ一人の命令に従う。我らはそのお方の命令をうけて、心安らかに行動できるのだ。(一五) 我々はただその方だけの命令に従うのである。バーラタよ、我々にはその神々の主の他に命令を出すものはいない。(一六)」

ガンダルヴァたちにそう言われて、クンティーの息子アルジュナは、ガンダルヴァたちに

再び告げた。(一七)

「ガンダルヴァたちよ、もし講和によってドリタラーシトラの息子たちを解放しないなら、私は自ら戦って解放する。(一八)」

このように言ってから、手練のアルジュナは鋭い矢を天人たちに向けて放った。(一九) 力を誇るガンダルヴァたちも、矢の雨を浴びせてパーンダヴァたちを攻撃した。パーンダヴァたちも天人たちを攻撃した。(二〇) それから、強力なガンダルヴァたちと、猛烈なパーンダヴァたちの間に、激しい戦いが行なわれた。(二一)

(第二百三十三章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、神的な武器をそなえ、黄金の首飾りをつけたガンダルヴァたちは、燃える矢を放って、まわりをぐるりと取り囲んだ。(一) 四名のパーンダヴァの勇士と、幾千のガンダルヴァたちは、戦場において攻撃し合った。それは奇蹟のようであった。(二) ガンダルヴァたちは、カルナとドゥルヨーダナの二人の戦車をばらばらに砕いたが、彼らの戦車も同様にしようと企てた。(三) 幾百というガンダルヴァが戦闘において襲って来るのに対し、人中の虎たちは無数の矢の雨を降らせて迎え撃った。(四) いたるところ矢の雨を浴びせられて、天人たちはパーンドゥの息子たちの近くに寄ることができなかった。(五)

その時アルジュナは、ガンダルヴァたちが猛り立ったのを見て、神の偉大な武器を用いよ

うと企てた。(六) 力を誇るアルジュナは、戦場で、火神の武器（アーグネーヤ）により、百万のガンダルヴァたちをヤマ（閻魔）の住処に送りこんだ。(七) また最強の戦士である偉大な射手ビーマは、鋭い矢によって幾百のガンダルヴァたちを殺した。(八) また力を誇るマードリーの二人の息子は、先頭に立って戦い、幾百の敵を殺した。(九) ガンダルヴァたちは、偉大な勇士たちに神的な武器で殺されつつ、ドリタラーシトラの息子たちを連れて空中に飛び上がった。(一〇) しかしアルジュナは、彼らが飛ぼうとするのを知って、大きな矢の網により彼らをすっかりおおってしまった。(一一) 彼らは鳥籠の中の鳥のように矢の網で拘束され、怒って、アルジュナに対して棍棒や槍や刀を雨のように浴びせた。(一二) しかし武器に通達したアルジュナは、棍棒や槍や刀を破壊して、半月形の先の矢でガンダルヴァたちの四肢を射た。(一三) 落下する頭や足や腕によって、岩石の雨が降るように見えた。敵たちは恐怖にかられた。(一四)

偉大なパーンダヴァ（アルジュナ）がガンダルヴァたちを殺している間に、彼らの多くは空中にとどまり、彼に矢を雨のように浴びせかけた。(一五) しかし敵を苦しめる威光あるアルジュナは、武器によってその矢の雨を防ぎ、ガンダルヴァたちに射返した。(一六) アルジュナはストゥーナカルナ、インドラジャーラ、サウラ、アーグネーヤ、サウミヤなどの武器を放った。(一七) ガンダルヴァたちはアルジュナの矢に焼かれて、インドラに焼かれる悪魔たちのようにこの上なく悲嘆に暮れた。(一八) アルジュナは上方に逃げようとする者たちを矢の網で制止し、走って逃げようとする者たちを半月形の先の矢で制止した。(一九)

英邁なアルジュナによってガンダルヴァたちが戦慄しているのを見て、チトラセーナは棍棒を持ってアルジュナに襲いかかった。(二〇) 戦いにおいて、棍棒を持つ彼が激しく襲いかかった時、アルジュナは矢を放って、すべて鉄製のその棍棒を七つに砕いた。(二一) 勇士アルジュナにより棍棒が粉砕されたのを見て、チトラセーナは幻術により身を隠して、アルジュナに対して戦った。彼は空中にいて、相手の神的な武器に対して戦ったのである。(二二) 強力なガンダルヴァ王は幻術により姿を隠したが、隠れながらも攻撃してくる彼を見て、アルジュナは、加持された空飛ぶ神的な武器により（異本にもとづく）彼を射た。(二三) 多くの姿を持つアルジュナは怒って、シャブダヴェーディヤという武器を用いて、敵の姿を消す術を破った。(二四) 偉大なアルジュナによって諸々の武器で攻撃されて、チトラセーナは彼の親友として、自分の姿を現わした。(二五) 友人のチトラセーナが戦闘において力を失ったのを見て、パーンダヴァの雄牛は、放っていた武器を収めた。(二六) すべてのパーンダヴァは、アルジュナが武器を収めたのを見て、駆ける馬を止め、弓矢を収めた。(二七) そしてチトラセーナとビーマとアルジュナと双子は、お互いの健康をたずね合って、戦車に立っていた。(二八)

（第二百三十四章）

ドゥルヨーダナ、生きる希望を失う

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから輝きに満ちた勇士アルジュナは、ガンダルヴァの軍隊の中で、笑いながらチトラセーナに告げた。(一)

「勇士よ、あなたはどうしてクル族の人々を捕えたのか。どうしてスヨーダナとその妻を捕えたのか。(二)」

チトラセーナは言った。

「あちらにおられる偉大な方が、邪悪なドゥルヨーダナとカルナの企みを知った。(三)あの連中は、あなた方や誉れ高いドラウパディーが森にいて、ふさわしくなく苦しんでいるのを知って、嘲笑するために来たのである。(四)神々の主は、彼らの意図を知って、私に命じた。『行け。ドゥルヨーダナとその顧問たちを捕えて、ここに連れて来い。(五)そして戦いにおいて、アルジュナとその兄弟を守護せよ。というのは、アルジュナは汝の親友であり弟子であるから。(六)』

神々の王の言葉により、私は急いでここに来たのである。その邪悪な男は捕えられた。私は神々の住処にもどるであろう。(七)」

アルジュナは言った。

「チトラセーナよ、スヨーダナは我々の兄弟も同様だ。ダルマ王の伝言に従って、解放してくれ。もし私に好意をかけてくれるなら。(八)」

チトラセーナは言った。

「あの悪党はいつも邪悪である。解放するに価しない。アルジュナよ、彼はダルマ王とドラ

ウパディーを騙したのだ。(九)偉大な誓戒を守るダルマ王ユディシティラは彼の企みを知らない。あなたは聞いたのだから、望むがままにするがよい。(一〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

彼ら一同はユディシティラ王のところに行き、ドゥルヨーダナの悪行をすべて語った。(一一)ユディシティラはガンダルヴァの言葉を聞くと、すべてのガンダルヴァたちを解放して告げた。(一二)

「幸いなことに、あなた方はみな、強力で能力がありながら、あの邪悪なドゥルヨーダナと、その顧問や親類縁者に危害を加えなかった。(一三)親愛なる天人たちよ、私に大きな好意をかけてくれた。あの邪悪な男を解放して下さるなら、私の一族は侮辱されない。(一四)望むことを申しつけて下さい。我々はあなたに会えて嬉しい。望みをすべて達成したら、すぐに出発しなさい。(一五)」

聡明なユディシティラに別れを告げられたガンダルヴァたちは、喜んで、天女(アプサラス)たちとともに、チトラセーナに率いられて出発した。(一六)神々の王は、神的な甘露の雨を降らせて、戦闘においてクル族軍に殺されたガンダルヴァたちをよみがえらせた。(一七)それからパーンダヴァたちは、親族の人々や王の妻たちを解放した。このようななしがたい行為を行なって、彼らは大いに喜んだ。(一八)クル族の人々とその妻子たちに敬意を表されて、偉大な勇士たちはクル族の中で、火のように輝いていた。(一九)

それからユディシティラは、ドゥルヨーダナとその弟を解放して、愛情をこめて次のように言った。(二〇)

「弟よ、二度と再び決してこのような無謀なことをしてはならぬ。無謀なことをする者は幸せに暮らせないから。バーラタよ。(二一)クルの王子よ、すべての弟たちとともに、恙無く、望みのままに家に帰りなさい。落胆することはない。(二二)」

パーンダヴァと別れて、ドゥルヨーダナ王は、恥ずかしさにさいなまれつつ都に帰った。(二三)クル族の人々が去った時、クンティーの息子である勇士ユディシティラは、弟たちとともに、バラモンたちに敬意を表されていた。(二四)インドラが神々に囲まれるように、彼はすべての苦行者たちに囲まれて、そのドゥヴァイタヴァナの森で、喜んで暮らしていた。(二五)

（第二百三十五章）

ジャナメージャヤは言った。

「高慢で邪悪なドゥルヨーダナは、敵たちに捕えられ、後に戦闘によって偉大なパーンダヴァたちに解放された。(一)彼はいつも自慢し、尊大で、自惚れている。常に勇気と高貴さの点でパーンダヴァたちを軽蔑している。(二)その邪悪でいつも自己中心的に語るドゥルヨーダナが、ハースティナプラの都に入ることは苦痛であったと私には思われる。(三)恥ずかしさに満ち、悲しみで心乱れた彼が都に入る様子を、ヴァイシャンパーヤナよ、詳しく語って

くれ。(四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）はダルマ王と別れ、恥ずかしくてうつ向いて、沈み込み、この上なく苦しんで進んで行った。(五)王は四部よりなる軍に従われ、悲しみに絶望し、敗北のことを考えながら、自分の都に向かって行った。(六)途中、草と水にめぐまれた場所で進むことをやめ、美しく心地よい地点で、望みのままに野営し、象、馬、戦車、歩兵を適切な場所に配置した。(七)

ドゥルヨーダナ王は火のように輝く寝台に座っていたが、夜の終わりにラーフ（日食月食をおこす悪魔）に襲われた月のようであった。その彼のもとにカルナがやって来て言った。(八)

「ガンダーリーの息子よ、よくぞ生きていた。我らが再会できたのはまことに幸せなことだ。幸せなことに、あなたは変幻自在のガンダルヴァたちを征服した。(九)幸せなことに、あなたのすべての弟たちにも会うことができた。クルの王子よ。勝利を望む彼ら勇士たちは、敵を滅ぼし、戦場から帰って来た。(一〇)しかるに私は、あなたの見ている前で、すべてのガンダルヴァにより敗走させられた。逃げ出す自分の軍隊を踏みとどまらせることができなかった。(一一)矢によって体じゅう傷だらけになり、苦しんで退却した。バーラタよ、まったく奇蹟だと思う。あなたが無事で、傷もなく、妻や財物や乗物とともに、あの人間業を超えた戦闘から脱け出たのを見るとは。(一二―一三)大王よ、戦闘においてあなたと弟たちがなしと

げたようなことを行なう男は、この世には存在しない。バーラタよ。(二四)」

カルナにそのように言われて、ドゥルヨーダナ王はうなだれて、涙声で言った。(二五)

(第二百三十六章)

ドゥルヨーダナは言った。

「カルナよ、お前は知らないで言ったことだから、私は怒らない。お前は私が自分の威光で敵のガンダルヴァたちをうち破ったと思っている。(一) 勇士よ、私は弟たちとともにかなり長くガンダルヴァたちと戦い、双方の側に損害が出た。(二) しかし幻術において勝る敵の勇士たちが空中にいて戦うにおよび、天翔る者たちとの戦いは我々に不利になった。(三) 我々は敗戦し、従者、重臣、息子、妻、財物、乗物もろとも捕えられた。彼らは悲嘆に暮れる我々を空高く連れて行った。(四) その時、我々の何人かの兵士と顧問が、パーンダヴァの勇士たちのところに行って、嘆きつつ、庇護を与える彼らに告げた。(五)

『あそこにドゥルヨーダナ王が、弟や顧問や妻たちとともに、天空にいるガンダルヴァたちにより連れて行かれます。(六) どうかあの王と妻たちを解放して下さい。決してクル族の婦人たちが乱暴されることのないように。(七)』

このように言われて、徳性あるパーンドゥの長子は、すべての弟たちを説得して、我々を救出せよと命じた。(八) そこで人中の雄牛であるパーンダヴァたちはその場所に行き、能力

ある勇士たちでありながら、まず講和を求めた。(九) 穏やかに交渉されても、ガンダルヴァたちが我々を解放しなかったので、アルジュナとビーマと力を誇る双子は、ガンダルヴァたちに対して多くの矢の雨を放った。(一〇) するとすべての天人は、戦場を捨てて天空に行った。彼らは心から喜び、惨めな我々を引っぱって行った。(一一) アルジュナが矢の網によってあたり一面を囲み、神的な武器を用いているのを見た。(一二) 彼が鋭い矢で諸方を囲んだのを見て、チトラセーナは彼の友としての姿を現わした。(一三) 勇猛なチトラセーナはアルジュナに抱擁され、健康についてたずねた。パーンダヴァたちも彼が息災であるかどうかたずねた。(一四) 彼らはお互いに集まって、鎧を脱いだ。ガンダルヴァの勇士たちはパーンダヴァたちと一堂に会し、チトラセーナとアルジュナはお互いに敬意を表し合った。(一五)」

(第二百三十七章)

ドゥルヨーダナは続けた。

「勇士アルジュナはチトラセーナに会って、笑いながら、次のような力強い言葉を述べた。(一)

『ガンダルヴァの長よ、我々の兄弟を解放して下さい。パーンダヴァが生きている限り、彼らを苦しめるべきではない。(二)』

偉大なアルジュナにそう言われると、ガンダルヴァは、我々が計らって出発したこと、惨

めなパーンダヴァたちとその妻を見て楽しもうとしたことを告げた。カルナよ。(三)ガンダルヴァがそう言うと、私は恥ずかしさのあまり、地面に穴を掘って入りたい気持だった。(四)ガンダルヴァたちはパーンダヴァたちとともにユディシティラのところに行き、我々の悪だくみを告げ、縛られた我々を引き渡した。(五)縛られ敵の手に落ちた惨めな私は、妻たちの見ている前で、ユディシティラに引き渡された。これよりもつらいことがあろうか。(六)私は彼らを追放した。私は常に彼らの敵である。愚かにも私はその彼らによって解放され、彼らによって私に生命が与えられたのである。(七)勇士よ、あの激戦で死んだほうがましだ。このようにして生きながらえるより。(八)ガンダルヴァに殺されれば、私の名声は地上に知れわたったろう。大インドラの住処において、神聖で不滅の世界が得られたであろう。(九)

人中の雄牛たちよ、私が今決心したことを聞きなさい。私はここで、断食して死のう。お前は家に帰れ。私のすべての弟たちも都に帰るがよい。(一〇)カルナをはじめとする友たち、縁者たちは、ドゥフシャーサナを先に立てて都に帰りなさい。(一一)敵に軽蔑された私は都へは帰らない。私は敵の誇りを奪い、味方に誇りをもたらす者だった。(一二)その私が味方に悲しみをもたらし、敵の喜びを増大させる。象の都（ハースティナプラ）に帰って、王に何と報告しよう。(一三)ビーシュマ、ドローナ、クリパ、ドローナの息子、ヴィドゥラ、サンジャヤ、パーフリーカ、ソーマダッタ、長老に敬われるその他の人々、バラモンたち、組合長たち、自由業者たちは、私に何と言うだろう。そして私は彼らに何と答えようか。(一四—一五)敵たち

の頭に立って、またその胸を踏みつけてから、自分の過失により権威を失墜して、私は彼らにどう話せばよいのか。(一六)修養を積まない人々は、私のように慢心して、富貴や学術や主権を得ても、永く幸せではいられない。(一七)ああ、どうしようもない馬鹿なことをしたものだ。私は、愚かしさと迷妄のために、自ら危機に陥ったのだ。(一八)

それ故、私は断食して死のう。生きながらえることはできぬ。思慮のある男が、敵によって危機から救われたら、どうして生きようと望むだろうか。(一九)誇り高い私が、敵によりあざ笑われ、男らしさを失ったのだ。勇武に満ちたパーンダヴァたちは、軽蔑して私を見ている。(二〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このようにもの思いに沈んで、ドゥルヨーダナはドゥフシャーサナに告げた。

「ドゥフシャーサナよ、私の言うことを聞きなさい。(二一)私が授ける灌頂を受け、王となれ。カルナとシャクニに守護され、繁栄する大地を統治せよ。(二二)インドラがマルト神群を守るように、弟たちを信頼して保護せよ。神々がインドラに依存するように、親類縁者たちがお前に依存して生活するようにせよ。(二三)バラモンに常に怠ることなく恩給を与えるべきである。お前はいつも親類や友人の寄る辺となれ。(二四)ヴィシュヌが神群を見守るように、親族たちを見守りなさい。目上の人々を保護すべきである。さあ、行け。大地を守護せよ。(二五)すべての友たちを喜ばせ、敵たちをこらしめつつ。」

そしてドゥルヨーダナは、弟の首を抱いて、行きなさいと言った。(二六)

兄の言葉を聞いて、ドゥフシャーサナは落胆し、涙で喉をつまらせ、すっかり悲嘆に暮れ、合掌して平伏し、口ごもりながら兄に告げた。(二七)「お許し下さい」と言って、彼は心から苦しみ悩み、涙を流しながら、大地に倒れ、兄の足もとにひれ伏した。(二八) その人中の虎は言った。

「それはあり得ないことです。大地が山もろとも裂けようと、天が砕けようと、太陽がその輝きを失おうと、月が冷い光をなくそうと、風がその速さを失おうと、ヒマーラヤが歩き出そうと、海の水が干上がろうと、火が熱さを捨てようと、王よ、私はあなたなしで大地を統治することはできません。」

そして彼は、何度も何度も「お許し下さい」と言い、「我々の一族において、百年の間、あなたのみが王であります」と告げた。(二九―三一)

このように言って、彼は尊敬に値する兄の両足を抱いて、声を出して泣いた。(三二) このように嘆いているドゥフシャーサナとスヨーダナを見て、カルナは苦悩し、二人に近づいて言った。(三三)

「クルの王子たちが、どうして一般の人たちのように、愚かしさから嘆いているのか。嘆いている人にとって、嘆きは決してなくならないものだ。(三四) もし嘆きが嘆いている人の災いを取り除かないなら、嘆いているあなた方は、嘆きにおいていかなる力を見出すのか。しっかりせよ。嘆いていて敵を喜ばせてはいけない。(三五)

王よ、パーンダヴァたちがあなたを解放したのは、なすべきことをしたまでだ。王の領土に住む者たちは、常に王に好ましいことをしなければならぬ。あなたに守られて、彼らは苦しみを離れて暮らしているのだから。(三六) そのようであるから、一般人のように嘆くことはあなたにふさわしくない。あなたが断食して死ぬ決意をした時、あなたの弟たちは失望した。どうか立ち上がり、行って、弟たちを安心させなさい。(三七)

王よ、あなたは軽率だと私は思う。突然敵の手中に帰したあなたが、パーンダヴァたちに解放されたのは、別に不思議なことではない。勇士よ。(三八) 領土内に住む人々、特に軍人たちは、知られていても知られていなくても、王に好ましいことをすべきである。(三九) しばしば重要人物が、敵軍を動揺させて、戦闘中に捕えられ、また自軍によって救出されることがある。(四〇) 王の領土に住む軍人たちは、集結して、王のために適切に努力すべきである。(四一) 王よ、だからあなたの領土に住むパーンダヴァたちが、今日たまたまあなたを救出したとしても、どうして嘆く必要があろうか。(四二)

最高の王よ、あなたが自軍とともに進軍する時、パーンダヴァたちが後ろから従わないということは適切ではない。(四三) それに、あの戦いにおいて退くことのない強力な勇士たちは、かつて集会場においてあなたの召使になったのである。(四四) あなたは今もなおパーンダヴァの財宝を享受している。しかし、見なさい。パーンダヴァたちは元気である。彼らは断食して死んでいない。

王よ、立ち上がりなさい。どうか嘆かないでくれ。(四五) 王よ、王の領土に住む者たちは

必ず王に好ましいことをしなければならない。それなのにどうして嘆く必要があろう。(四六)王中の王よ、もし私の言葉をきいてくれなければ、私はあなたの足下にかしずいて、ここにとどまるであろう。勇士よ。(四七)あなたなしでは生きることはできない。人中の虎よ。しかし王よ、もし断食して死ねば、王たちの笑いの的になるであろう。(四八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

しかしカルナにこのように言われても、ドゥルヨーダナ王は立ち上がろうとしなかった。天界に行く決意をしていたのである。(四九)（第二百三十八章）

悪魔に励まされたドゥルヨーダナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

短気なドゥルヨーダナ王が断食して死のうとしている時、スバラの息子シャクニが慰めながら言った。(一)

「カルナの言ったことは正しい。お前はそれを聞いたであろう。最高の王よ、どうしてお前は私の奪った大いなる富貴を迷妄から捨てて、愚かにも生命を捨てようと望むのか。(二)そして今、お前は長老を敬っていないと思う。喜びや失望が生じた時、それを制御できない者は、富貴を得ても破滅する。焼かれていない器が水中で滅するように。(三)非常に臆病な王、

非常に弱い王、ぐずぐずする王、怠慢な王、悪徳にふけり感官の対象に溺れる王。富貴（幸運の女神）はそのような王を愛さない。(四)お前は好意を受けたのに、逆にどうして悲しむのか。パーンダヴァたちになされた善行を、悲しむことによって無にしてはならない。(五)お前は喜ぶべきであり、パーンダヴァたちをねぎらうべきであるのに、お前は悲しんでいる。王中の王よ、お前は逆のことをしている。(六)どうか自殺をしないでもらいたい。満足して善行のことを思い出しなさい。パーンダヴァたちに王国を返しなさい。名声と法（ダルマ）とを得なさい。(七)あの行為を認めて、恩知らずになってはならぬ。パーンダヴァたちと兄弟の関係を結んで、彼らの地位を確立し、父からの王国を彼らに返しなさい。そうして、幸福になりなさい。(八)」

ドゥルヨーダナはシャクニの言葉を聞くと、嘆いて足下にひれ伏している勇士ドゥフシャーサナを、兄弟の情愛によって見た。(九)そしてその美しい両腕で勇士ドゥフシャーサナを立ち上がらせ、抱きしめ、その頭に優しく接吻した。(一〇)ドゥルヨーダナ王はカルナとシャクニの言葉を思い出して、つくづく世の中が厭になり、恥ずかしさに打ちのめされ、この上なく絶望した。(一一)そして友たちの言葉を聞いて彼は恨めしそうに言った。

「法、財産、幸福、権力、統治、享楽など、私には必要ない。私を苦しめるな。行ってくれ。(一二)私の考えは決まっている。断食して死ぬ決意をしている。みんな都へ行け。私の目上の人たちを大切にしてくれ。(一三)」

彼らはこのように言われて、勇猛な王に答えた。

「王中の王よ、あなたの行く道は我々の行く道です。我々はあなたなしで、どうして都に入れましょうか。(二四)」

友人や顧問や兄弟や親族たちがありとあらゆるやり方で説得しても、ドゥルヨーダナは決意を変えなかった。(二五)彼は決意にもとづき、ダルバ草を地面にしき、水に触れて、清浄となり、地面に座った。(二六)その王中の虎は、クシャ草とぼろ衣をまとい、最高の誓戒を保ち、言葉を制し、天界へ行くことを望んで、固い決心をして、外的な行為をやめた。(二七)

さて、恐ろしいダイティヤとダーナヴァ(類魔)たちは、以前神々に征服されて地底界に住んでいたが、ドゥルヨーダナの決意を知った。(二八)彼らは彼の死は味方の滅亡をもたらすと考え、ドゥルヨーダナを呼び寄せるために、火の儀式を行なった。(二九)呪句に通じた者たちは、ブリハスパティやウシャナスに説かれ、「アタルヴァ・ヴェーダ」に説かれた呪句により、「ウパニシャッド」にある儀礼を、呪句と祈禱を唱えながら行なった。(三〇)ヴェーダとヴェーダの補助学に通じた、誓戒を厳守するバラモンたちは、呪句を唱え心を統一して、火中に供物や乳を投じた。(三一)

その儀式が成就した時、非常に驚嘆すべきクリティヤー(女妖)が、あくびをしながら立ち上がり、「何をしましょうか」と言った。(三二)悪魔たちは心から喜んで彼女に告げた。

「断食して死のうとしているドゥルヨーダナをここに連れて来なさい。(三三)」

クリティヤーは「かしこまりました」と言って出かけて行き、またたくうちに、スヨーダ

ナ王のいるところに着いた。(二四)彼女は王を連れて地底界に入り、すぐに悪魔たちに彼を連れて来たと報告した。(二五)悪魔たちは夜中に集まって、連れて来られた王を見て、みなして眼を少し見開いて喜んだ。そして彼らは愛情をこめてドゥルヨーダナに次のような言葉を述べた。(二六)(第二百三十九章)

悪魔たちは言った。

「おお、王中の王スヨーダナよ。バラタ族の長よ。常に偉大な勇士たちに囲まれているあなたが、どうして断食死などという無謀なことを企てたのか。自殺する者は地獄に行き、不名誉な非難を受ける。(一―二)あなたのような知者は、悪い結果をもたらし、多くの災禍をともない、根本を害うような行為に執着しないものだ。(三)王よ、法と実利と享楽を滅ぼし、名声と威光と平静さを害し、敵の喜びを増大させるような考えを捨てなさい。(四)王よ、真実を聞きなさい。自身の神性を、そして身体の創造を聞きなさい。そして平静になりなさい。(五)

かつて我々は、苦行を行なって、マヘーシュヴァラ(シヴァ)神からあなたを得た。あなたの上半身はすべて金剛杵の集積から作られた。(六)それは矢や刀などによって断たれない。非の打ち所のない者よ、あなたの下半身は女神により花で作られた。それは美しさの故に女性の心を奪う。(七)最高の王よ、このようにあなたの身体は主と女神とに結びついている。王

中の虎よ、あなたは神的であって、人間ではない。(八)バガダッタをはじめとする強力な王族(クシャトリヤ)たち、神的な武器を知る勇士たちが、あなたの敵を滅ぼすであろう。(九)だから嘆く必要はない。あなたには危険はない。というのは、悪魔たちがあなたを援助するために、勇士として地上に生まれたのであるから。(一〇)他の阿修羅(アスラ)たちが、ビーシュマ、ドローナ、クリパなどに憑依(ひょうい)するであろう。彼らは阿修羅たちに憑依されて、哀れみを捨ててあなたの敵たちと戦うであろう。(一一)彼らは悪魔に憑依されて愛情もなくなり、心が蝕まれて、戦いにおいて、息子、兄弟、父、親類、弟子、親族、幼児、老人をも除外することなく攻撃するであろう。クルの最上者よ。(一二―一三)その人中の虎たちは、心を汚され、喜び勇んで、愛情をすっかり捨てて、親類を攻撃するであろう。彼らは創造神に創られた運命により、無知に迷い、お互いに言い合う。『お前は生きて私から逃れられないだろう』と。クルの最上者よ、彼らは雄々しい勇武を重んじて誇りつつ、ありとあらゆる武器を放って、人々を殺戮するであろう。(一四―一五)偉大なパーンダヴァたちも、力の限り反撃するであろう。しかし運命が味方する強力な勇士たちは、彼らを殺すであろう。(一六)

王族(クシャトラ)の胎に生まれた悪魔と羅刹の群は、棍棒、杵、刀、多種多様の武器により、戦闘において勇ましくあなたの敵と戦うであろう。王よ。(一七)勇士よ、あなたには心のうちにアルジュナに対する恐怖がある。しかし我々はアルジュナを殺す方策をたてた。(一八)勇士よ、殺されたナラカ(阿修羅の名)の霊魂(アートマン)がカルナの体に宿り、恨みを想起しつつ、クリシュナとアルジュナに対して戦うであろう。(一九)武勇を誇る最高の戦士カルナは、戦いにおいてアルジ

ュナと、すべての敵たちをうち破るであろう。(二〇)それを知り、インドラはアルジュナを守るために、術策を用いてカルナの耳飾りと鎧を奪うであろう。(二一)そこで我々は幾百幾千の悪魔と羅刹を起用して特攻隊(サンシャプタカ)と名づけ、勇士アルジュナを殺すであろう。嘆くことはない。(二二)王よ、あなたはライバルのいないこの大地を享受すべきである。我々を悲しませてはならぬ。それはあなたにふさわしくない。あなたが滅びたら、我々の側は滅びるであろう。クルの王よ。(二三)勇士よ、行きなさい。決して考え違いしてはならぬ。あなたは常に我々の寄る辺だ。パーンダヴァたちが神々の寄る辺であるように。(二四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

悪魔たちはそう言って、象のような王を抱きしめた。悪魔の雄牛たちはその無敵の王を、息子を慰めるように慰めた。(二五)彼の知性を確固たるものにして、そして彼に好ましい言葉を告げ、彼らは「行きなさい。勝利を得んことを」と言って彼と別れた。(二六)彼らと別れた勇士を、側のクリティヤーが、彼が断食して死のうとしている場所に再び連れて行った。(二七)クリティヤーはその勇士を置き、挨拶して、王が別れを告げるとその場で消え失せた。(二八)

彼女が去った時、ドゥルヨーダナ王は、すべては夢であったと考えた。そして、「戦いにおいてパーンダヴァたちをうち破ろう」という考えが彼に生じた。(二九)そしてその能力のあるカルナと特攻隊とを、勇士アルジュナを殺す任務に起用しようと考えた。(三〇)

このようにして、パーンダヴァたちを征服しようという願望は、邪悪なドゥルヨーダナにとって確固たるものとなった。(三一) カルナもまた、その身心はナラカの魂に入りこまれて、アルジュナを殺そうという恐ろしい決意をした。(三二) 特攻隊（サンシャプタカ）の勇士たちも、その心は羅刹に憑依されて、激質（ラジャス）と暗質（タマス）に支配され、アルジュナを殺そうと望んだ。(三三) ビーシュマもドローナもクリパたちも、その心が悪魔に支配されたので、それほどパーンドゥの息子たちに愛情を抱かなくなった。(三四) そしてスヨーダナ王は、誰にもそのことを言わなかった。

その夜が終わった時、カルナは微笑し、合掌して、ドゥルヨーダナ王に次のような道理ある言葉を述べた。(三五)

「死んだ者は敵を征服できない。生きている者が幸運を見出す。クルの王よ、死者にはどこに幸運があろうか。どこに勝利があろうか。今は嘆きや恐怖や死の時ではない。(三六)」

その勇士は両腕で彼を抱きしめて言った。

「王よ、立ち上がれ。何故、横たわっているのか。敵を殺す勇士よ、何故嘆いているのか。その力で敵どもを苦しめたのに、どうして死にたいと望むのか。(三七) あるいは、アルジュナの勇武を見てあなたに恐怖が生じたのであるなら、私はこの真実をあなたに誓う。私は戦いにおいてアルジュナを殺すと。(三八) 私は武器にかけて誓う。王よ、十三年が過ぎたら、私はパーンダヴァたちをあなたの支配下に導くと。(三九)」

カルナにそう言われて、また悪魔たちの言葉もあって、そしてまた他の人々が平伏して懇願したので、スヨーダナは立ち上がった。悪魔たちのあの言葉を聞いて、彼は堅く決意した

のであった。(四〇) それからその人中の虎は、多くの戦車兵と象兵と騎兵と歩兵よりなる軍隊を準備させた。(四一) そしてその大軍は、ガンガー（ガンジス）の暴流のように出発した。それは白い傘と旗と純白の払子（ほっす）、戦車と象と歩兵に満ち、こよなく輝いていた。それはあたかも、雲の群が去った時節における、いまだ秋の標（しるし）（月）の顕著でない大空のようであった。(四二―四三) 最高のバラモンたちが、勝利の讃歌により、最高の帝王を讃えるようにドゥルヨーダナ王を讃えた。王は人々の合掌の列という花輪を受けた。(四四) スヨーダナは最高の富貴で輝きつつ、カルナとシャクニとともに先頭を進んだ。(四五) ドゥフシャーサナをはじめとするすべての弟たち、ブーリシュラヴァス、ソーマダッタ、偉大な王バーフリーカなどのクル族の主立った人々が、種々の形の戦車や馬や最上の象に乗って、その獅子のような王につき従った。彼らはわずかな時間の後に自分たちの都に入った。(四六―四七)（第二百四十章）

ドゥルヨーダナの大祭

ジャナメージャヤはたずねた。

「偉大なパーンダヴァたちがその森に住んでいた時、強力な戦士であるドリタラーシトラの息子たちは何をしたか。最高の聖者よ。(一) カルナ、強力なシャクニ、ビーシュマ、ドローナ、クリパたちは……。どうかそれを私に語って下さい。(二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このようにパーンダヴァたちが立ち去り、彼らに解放されたスヨーダナが彼らと別れて象の都（ハースティナプラ）にもどった時、ビーシュマはドゥルヨーダナに、次のように告げた。（三）

「わが子よ、私は以前、お前が苦行林に行こうとする時、『私はお前が行くことに賛成しない』と言った。しかしお前は私の言う通りにしなかった。（四）勇士よ、それからお前は力ずくで敵に捕えられることとなった。そしてお前は法（ダルマ）を知るパーンダヴァたちによって解放されたのに、それを恥じもしない。（五）ガーンダーリーの息子よ、お前と兵士たちの眼前で、御者の息子（カルナ）はガンダルヴァたちを恐れ、戦場から逃げ出した。お前と兵士たちが泣き叫んでいるのに。王中の王よ、王子よ。（六）そして勇士よ、お前は偉大なパーンダヴァたちと、邪悪な御者の息子カルナの勇武を見た。（七）最高の王よ、弓術の点でも勇猛さの点でも法の点でも、カルナはパーンダヴァたちに遠く及ばない。法を愛する者よ。（八）この一族の繁栄のためには、お前があの偉大なパーンダヴァたちと講和することがよいと思う。講和を知る人々の最上者よ。（九）」

ビーシュマがそう言うと、ドゥルヨーダナ王は笑って、突然シャクニとともに立ち去った。（一〇）彼が立ち去ったのを知って、カルナやドゥフシャーサナなどの勇士たちも、強力なドゥルヨーダナを追って行った。（一一）クル族の祖父ビーシュマは、彼らが去ったのを見て、屈辱に堪えず、自分の部屋に行った。（一二）ビーシュマが去った時、ドゥルヨーダナ王は再びその場にもどり、顧問たちとともに協議した。（一三）

「我々にとって何が最善の策か。なすべきこととして何が残っているか。どのようにしたらうまくゆくか。」

彼はこのように諮問した。（一四）

カルナは言った。

「ドゥルヨーダナよ、私が言うことを聞け。勇士よ、それを聞いたら、それをその通りに実行しなさい。（一五）最高の王よ、今やライバルのいない大地はあなたのものだ。心の広い王よ、インドラのように敵を滅ぼして大地を守れ。（一六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

カルナにそう言われて、王は彼に答えた。——

「人中の雄牛よ、あなたがついている者には、得られないものはない。（一七）あなたは協力者であり、私に忠実であり、私のために尽くしてくれる。ところで私にはある計画がある。詳らかにそれを聞きなさい。（一八）あの時、パーンダヴァたちの皇帝即位式（ラージャスーヤ）という最高の祭式を見て、私に願望が生じた。御者の子よ、それを私のために実現してくれ。（一九）」

カルナはそう言われて、王に告げた。

「最高の王よ、今やすべての王たちはあなたの支配下にあります。（二〇）最高のバラモンたちを呼び集めなさい。儀軌（ぎき）に従って祭式の必需品を集めなさい。クルの長よ、祭祀に必要な道具を集めなさい。（二一）呼び集められたヴェーダ聖典に通じた祭官たちは、命じられたま

まに教典に従って、あなたのために儀礼を行なうべきである。勇士よ。(二二) バラタの雄牛よ、多くの飲食物をともなない、豊富な美質をそなえた大祭が、あなたのために行なわれるべきである。(二三)」

カルナにこのように言われて、ドゥルヨーダナは宮廷祭僧を呼んで次のように命じた。(二四)

「私のために、最上の謝礼をともなう皇帝即位式という最高の祭式を、適切に式次第に従って行なって下さい。(二五)」

そのバラモンの雄牛は、このように命じられて、王に答えた。

「クル族の長である最高の王よ、あなた様の一族にあっては、ユディシティラが生きている間は、その最高の祭式を行なうことはできません。(二六) それに、あなた様の父上であられる、長寿のドリタラーシトラ様が生きておられます。最高の王よ、それ故、その祭式をすることはあなたにはできません。(二七) しかし王よ、皇帝即位式に等しい別の大祭があります。あなたはそれで祭祀を行ないなさい。王中の王よ、私の申し上げることをお聞きなさい。(二八)

王よ、あなたのもとに朝貢する王たちに、精錬した金と精錬されない金を貢物として納めさせなさい。(二九) 最高の王よ、あなたは鋤を作りなさい。それによりあなたの祭場の内部の土地を耕しなさい。バーラタよ。(三〇) 最高の王よ、そこで多くの食物をともない、よく整えられ、いたるところ妨げられることのない祭祀が、適切に行なわれるべきであります。

(三一) これがヴァイシュナヴァという名の祭祀で、善き人々に適したものです。古のヴィシュヌを除いて、この祭祀を行なったものは誰もいません。(三二) この大祭は最高の祭式である皇帝即位式に匹敵します。それは我々にとって喜ばしく、あなたに幸福をもたらします。バーラタよ。その祭式が妨げなく行なわれ、あなた様の願望がかないますように。(三三)」

バラモンたちにこのように告げられて、ドゥルヨーダナ王は、カルナとシャクニと弟たちに言った。(三四)

「バラモンたちの言ったことは、疑いもなく、すべて私の気に入った。もしあなたたちもそれが気に入ったら、すぐに私に言ってくれ。(三五)」

このように言われて、一同は王に「賛成する」と告げた。それから王は、その任にあたる人々に順次指示を与えた。(三六) そしてすべての職人たちに、鋤を作るように命じた。すべてのことが順次、指示されたように実行された。(三七)

（第二百四十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、すべての職人たちと、主立った大臣たちと、叡知に満ちたヴィドゥラは、ドゥルヨーダナに告げた。(一)

「王よ、最高の祭式の準備ができました。その時がやって来ました。非常に高価な黄金製の神聖な鋤ができ上がりました。(二)」

それを聞くと、最高の王ドゥルヨーダナは、その最高の祭式の開始を命じた。(三) それから、多くの食物をともない、よく整えられた祭祀が始まった。ドゥルヨーダナは教典に従い、式次第に従って潔斎に入った。(四) ドリタラーシトラは喜んだ。誉れ高いヴィドゥラも、ビーシュマ、ドローナ、クリパ、カルナ、名声あるガーンダーリーも喜んだ。(五) 諸王やバラモンたちを招待するために、迅速に行く使者たちを送った。使者たちは早馬に乗って、指示されたように出発した。(六) そのうち、出発するある使者に、ドゥフシャーサナは告げた。

「急いでドゥヴァイタヴァナに行き、悪党のパーンダヴァたちと、その森にいるバラモンたちを、作法に従って招待せよ。(七)」

彼はパーンダヴァの住処に行き、おじぎをして、彼らに告げた。

「最高の王であるクル族の長ドゥルヨーダナ大王が、自己の力で獲得した莫大な財をもって祭祀を行なう。諸王とバラモンたちが諸方からそこにおもむく。(八―九) 王よ、私は偉大なクル族の王により遣わされた。ドゥルヨーダナ王はあなた方を招待する。あなた方は、王の心を喜ばせるその祭式を御覧下さい。(一〇)」

王中の虎であるユディシティラ王は、使者の口上を聞いて言った。

「スヨーダナ王が最上の祭式を行なうということは幸せなことだ。彼は先祖の名声を高める。(一一) 我らも参加したい。しかし今はどうしてもできない。十三年が過ぎるまで、我々は約定を守らなければならぬ。(一二)」

ダルマ王の言葉を聞くとビーマが言った。

「その時には、ダルマ王ユディシティラは行くであろう。(一三) 十三年が過ぎたら、戦いという祭祀において、王は種々の武器で輝く火の中に彼を投げ込むであろう。(一四) パーンダヴァは、ドリタラーシトラの息子たちに、怒りの供物を捧げるであろう。我々はその時に行くであろう。このことをスヨーダナに報告せよ。(一五)」

しかし他のパーンダヴァたちは、何ら不快なことを言わなかった。使者の方は、一部始終をドゥルヨーダナに報告した。(一六)

諸国の王たちや栄光あるバラモンなど、最高の人々がドゥルヨーダナの都に集まって来た。(一七) 彼らは教典に従い、階層(ヴァルナ)、地位に応じて歓迎され、大いに喜び満足した。(一八) ドリタラーシトラも、すべてのクル族の人々に囲まれて、大いに喜んでヴィドゥラに告げた。(一九)

「ヴィドゥラよ、すべての人が幸せで、食事をとり、祭場で満足するように、速やかに手配しなさい。(二〇)」

そのように命じられて、法(ダルマ)を知る賢者ヴィドゥラは、すべての階層の人々を適切にもてなした。(二一) 彼は喜んで、硬軟の食物、飲食物、よい香りの花輪、種々の衣服を供給した。(二二)

王中の王である勇士は、教典に従い、式次第に従い、祭祀の最後の沐浴をすませてから、幾千という王やバラモンたちを労(ねぎら)い、布施してから、彼らを帰らせた。(二三) そして彼は、諸王を去らせてから、弟たちに囲まれ、カルナやシャクニとともにハースティナプラに入っ

た。(二四)

(第二百四十二章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

吟誦詩人たちが入城する不屈の王を讃えた。他の人々も最高の王である勇士を讃えた。(一)人々は炒り米や栴檀の粉をまいて言った。

「王よ、幸いなことにあなたの祭式は恙無く完了しました。(二)」

しかし、他の辛辣な人々は王に告げた。

「あなたのこの祭式は、ユディシティラの祭祀とは比較にならない。彼の祭式の十六分の一にも及ばない」と。(三)

ある辛辣な人々は王にそう告げたが、親しい人々は言った。

「この祭式はすべてを凌駕する。(四)ヤヤーティ、ナフシャ、マーンダートリ、バラタは、この祭式を完了して浄められ、すべて天界に行った。(五)」

親しい人々のこのような快い言葉を聞きながら、王は喜んで都に入り、わが家に帰った。(六)それから彼は、父母と、ビーシュマとドローナと、賢明なヴィドゥラの足下に敬礼した。(七)そして彼は、若い弟たちに敬礼された。弟たちを愛する彼は、弟たちに囲まれて、最上の席に座った。(八)その時、御者の息子(カルナ)が立ち上がって言った。

「バラタの長よ、あなたの大祭が完了し、おめでとうございます。(九)最高の人よ、パーン

ダヴァたちが殺され、あなたが皇帝即位式（ラージャスーヤ）を行なう時、私はあなたに再びおめでとうと言うでしょう。(一〇)」

誉れ高いドゥルヨーダナ大王は彼に言った。

「勇士よ、あなたの言ったことはまことだ。邪悪なパーンダヴァたちが殺され、皇帝即位式の大祭が実現したら、あなたは再び私を祝うであろう。最高の人よ。(一一―一二)」

そう言って、大知者であるクル族の王はカルナを抱きしめ、最高の祭式である皇帝即位式に思いを馳せた。(一三)その最高の王は傍に立つ友たちに言った。

「クル族の人々よ、私はいつになったら、すべてのパーンダヴァを殺し、多大な財物を要する皇帝即位式という最高の祭式を行なうことができるか。(一四)」

カルナは彼に言った。

「最上の王よ、私の言うことを聞きなさい。私はアルジュナが死ぬまで両足を洗わない。(一五)」

カルナが戦闘においてアルジュナを殺すと誓った時、ドリタラーシトラの息子である偉大な戦士たちは歓声をあげた。そして彼らは、パーンダヴァたちがすでに征服されたも同然と考えた。(一六)

王中の王よ、栄光あるドゥルヨーダナ王は、人中の雄牛たちと別れ、チャイトララタ(ベクーラの庭園)のようなわが家に入った。そしてすべての勇士たちも家に帰った。(一七)しかしパーンダヴァの勇士たちは、使者の言葉にかりたてられ、そのことのみを考えて、決して安らかな

気持になれなかった。(二八)更にスパイたちが、アルジュナを殺すというカルナの誓いについての知らせを伝えた。(二九)それを聞いてダルマの息子（ユディシティラ）は意気消沈した。カルナは貫かれない鎧を着けて驚異的に勇猛であると考え、また自分たちの艱難辛苦を思い出して、平安を見出せなかったのである。(三〇)その偉大な人物は考えこんでいたが、多くの猛獣に満ちたドゥヴァイタヴァナの森を捨てる決意をした。(三一)

一方ドゥルヨーダナ王は、勇猛な弟たちや、ビーシュマ、ドローナ、クリパたちとともに、大地を治めていた。(三二)戦闘において輝く御者の子カルナと組んで、ドゥルヨーダナ王は常に人を喜ばせることに従事し、多大の謝礼をともなう祭式によって、最上のバラモンたちに敬意を表した。(三三)その敵を悩ませる勇士は、弟たちに親切にした。財産の目的は与えることと享受することであると、彼は心に決めていたのである。(三四)（第二百四十三章）

(40) 鹿の夢（第二百四十四章）

カーミヤカの森に移る

ジャナメージャヤはたずねた。

「強力なパーンドゥの息子たちは、ドゥルヨーダナを解放してから、その森で何をしたか。それを私に語って下さい。(一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。

ドゥヴァイタヴァナにおいて、夜中、ユディシティラが眠っていると、夢の中に涙で喉をつまらせた鹿たちが現われた。(二)ふるえて合掌している彼らに、王中の王は言った。

「お前たちが告げたいことを言いなさい。お前たちは何者か。何を望んでいるのか。(三)」

実はこの鹿たちは、猟で殺されずに生き残った鹿たちであったが、誉れあるユディシティラにそう言われて、彼に答えた。(四)

「バーラタよ、我々はドゥヴァイタヴァナにおける生き残りの鹿です。大王様、我々が全滅しないように移住して下さい。(五)あなたの弟さんたちはみな勇士で、武器に秀でておられ、森に住む獣の群を殺し、残るのはあとわずかです。(六)叡知に満ちた方よ、我々わずかのものが種として残りました。王中の王であるユディシティラ様、あなたの恩寵により我々は繁栄したいのです。(七)」

わずかに種として生き残った鹿たちが、恐れてふるえているのを見て、ダルマ王ユディシティラは非常に苦しんだ。(八)そのすべての生類の幸せを願う王は、彼らに「承知した」と告げた。「そなたたちは真実を述べている。言う通りにしよう。(九)」

夜が終わった時、その最高の王は目覚め、哀れみにあふれ、集まった弟たちに鹿の件を話した。(一〇)

「夜、夢の中で、生き残りの鹿たちが私に言った。『我々は残りわずかになりました。どうか我々に哀れみをかけて下さい』と。(一一)彼らは真実を述べている。我々は森に住む獣たちに哀れみをかけなければならぬ。我々は一年と八カ月の間、彼らを食べて来た。(一二)ところで、砂漠地帯の縁に、有名なトリナビンドゥ湖のそばに、カーミヤカという美しい最高の森がある。そこには多くの獣たちがいる。我々は残りの年月をそこに住み、楽しく過ごそう。(一三)」

そこで法(ダルマ)に通じたパーンダヴァたちは速やかに出発した。彼らと森で生活を共にしたバラモンたちもいっしょであった。インドラセーナなどの従者たちもつき従った。(一四)彼らは食物にもめぐまれ清浄な水のある交通路を通って行き、苦行者に満ちた神聖な隠棲所カーミヤカを見た。(一五)最高のバラタ族である彼らは、バラモンの雄牛たちに囲まれて、善行者たちが天界に入るようにその森に入った。(一六)

(第二百四十四章)

(41) 一枡の米（第二百四十五章—第二百四十七章）

ヴィヤーサの教え

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

偉大なパーンダヴァたちが森に住んでいる間に、困苦のうちに十一年が過ぎた。（一）幸福にふさわしい最高の男たちは、木の実や根を食べ、機会の訪れるのを待って、最高の苦難に耐えた。（二）強力な王仙ユディシティラは、弟たちの最高の苦しみが自分の誤った行為から生じたと考え、心に棘が刺さったかのようになって、安楽に眠れなかった。王はその時、賭博から生ずるものの邪悪さについて色々と考えていた。（三―四）彼は御者の息子（カルナ）の乱暴な言葉を思い出して、深くため息をつき、意気消沈し、強い怒りの毒を抱くのであった。（五）アルジュナ、双子、誉れあるドラウパディー、すべてのうちで最も強力である威光に満ちたビーマは、ユディシティラを見て、この上ない苦悩に耐えた。（六）人中の雄牛たちは、もうあと残りわずかだと考え、気力と怒りを示す行動により、自分たちの体を別様に変えたかのようであった。（七）

少し経って、サティヤヴァティーの息子である大ヨーガ行者ヴィヤーサが、パーンダヴァたちに会いに来た。（八）ユディシティラは偉大な聖者が訪れたのを見ると、出迎えて、作法に従ってもてなした。（九）パーンダヴァの王は、ヴィヤーサが座るとその近くに座し、感官を制御してかしずき、平伏して満足させた。（一〇）大仙は孫たちが森でやつれ、森の産物で生活しているのを見ると、涙を流して口ごもりながら同情して言った。（一一）

「強力なユディシティラよ、法（ダルマ）を保つ者たちの最上者よ、聞きなさい。わが子よ、苦しみを経験しない人々は大きな幸福を達成することはできない。（一二）人間は苦楽を交互に経験するものだから。何人（なんぴと）も不幸だけを経験するわけではない。人中の雄牛よ。（一三）しかるに、最高の知性をそなえた智者は、栄枯盛衰を知り、悲しみも喜びもしない。（一四）幸福が訪れたらそれを楽しめ。不幸が訪れたらそれに耐えよ。耕作者が作物の収穫期を待つように、時が至るのを待つべきである。（一五）というのは、苦行（タパス）（修養）よりも優れたものはない。人は苦行により大なるものを見出す。苦行により達成されないものは何もない。バーラタよ、このように知れ。（一六）

真実（サティヤ）、廉直、怒らぬこと、分かち与えること、自制、寂静、妬み（不満）のないこと、不殺生、清浄さ、感官の制御。大王よ、以上が善行の人の手段である。（一七）迷える愚者たちは、非法（アダルマ）を好み、畜生道に専念し、悲惨な胎に達して、幸福を見出すことはない。（一八）この世でなされた行為（カルマン）（業）は他生で享受される。それ故、身体を苦行と誓戒（ニヤマ）とに結びつけるべきである。（一九）王よ、満足し不満を離れて、適切な時に適切な受者に対して敬意を表し、おじぎをして、能力の限り布施すべきである。（二〇）真実を語り、廉直な人は、恙無い長寿を得るであろう。怒らず、不満のない人は、最高の至福を得るであろう。（二一）自制し、寂静に専念する人は、常に苦難を見出すことはない。自己を制した人は、幸運が他者に行くのを見ても苦しむことはない。（二二）分かち与え、布施する人は、諸楽を享受し、幸福になる。

不殺生を守る人は、最高の健康を得る。（二三）尊敬すべき人々を尊敬する人は、偉大な一族に生まれる。感官を制御した人は、諸々の災いにあうことがない。（二四）その知性が善に専念している人は、時間（カーラ）の法（死）に従う時、善性と結びついているから、善い心を持つ人として再生する。（二五）」

ユディシティラはたずねた。

「尊師よ、偉大な聖者（ムニ）よ、布施の徳と苦行とでは、死後にどちらがより多大の功徳があるか。また、どちらがより行ないがたいと言われるか。（二六）」

ヴィヤーサは答えた。

「この世で布施ほど行ないがたいものは何もない。というのは、財物についての渇望は大きく、財物は苦労して得られるものであるから。（二七）勇猛な人々は、財物のために、愛しい生命を捨てて、激しい戦いに身を投じる。また、海や森に入る。（二八）財物のために、ある人々は農業や牧畜に従事し、またある人々は召使になる。（二九）このように苦労して得た財を捨てることは非常にむずかしい。布施ほど行ないがたいものはない。それ故、私は布施が優れていると考える。（三〇）しかし特に次のことに留意しなければならぬ。公正に獲得した財物を、ふさわしい受者と場所と時において、善き人々に与えるべきである。（三一）不正に入手した財物により布施するなら、それは施主を大なる危険から救うことはない。（三二）わずかな布施でも、受者と時がふさわしい場合に、非常に清浄な心で与えられたものは、死後に無限の果報をもたらすと伝えられる。ユディシティラよ。（三三）この点について、古い

昔話（イティハーサ）が例にあげられる。ムドガラは、一枡（ドローナ）の米を布施することによって果報を得た。（三四）」

（第二百四十五章）

ムドガラの不思議な枡

ユディシティラはたずねた。

「その偉大な人は何故に一枡の米を布施したのか。誰に対して、どのようなやり方で与えたのか。尊師よ、私に話して下さい。（一）というのは、法（ダルマ）を体現した尊師がその人の行為に満足するなら、その法を実践する人の生は果報があると私は思うから。（二）」

ヴィヤーサは語った。――

王よ、クルクシェートラにムドガラという有徳の人がいた。彼は落穂拾いの生活をし、堅く誓戒を守り、真実を語り、不満がなかった。（三）彼は鳩のような生活をしていたが、客人を歓待し、祭式を行なった。その大苦行者は、イシティークリタという祭式を行なった。（四）その隠者（ムニ）は妻子とともに、半月の間食事をし、他の半月は鳩の生活をして、一枡の米を拾い集めた。（五）彼は惜しみなく、新月祭と満月祭を行ない、神と客人に供えた残りで生活した。（六）月相の変り目ごとに、三界の主であるインドラ自身が、神々とともに、配分を受け取るのであった。大王よ。（七）彼は新月満月の時に、隠者の生活様式に従い、心から喜ん

で客人たちに食事を出した。（八）その気前のよい偉大な人が米の枡で食事を給すると、お客が現われるごとに枡の中の残りは増加するのであった。（九）百人の賢いバラモンが食べたが、その隠者の清らかな喜捨により、その食物は増加した。（一〇）

王よ、空衣（全裸）の聖者ドゥルヴァーサスが、その法を実践し誓戒を厳守するムドガラのことを聞き、彼のところに行った。（一一）その聖者は狂人のような乱れた身なりをし、剃髪し、種々の乱暴な言葉を発していた。（一二）最高の聖者は、ムドガラのところに行って告げた。

「最高の隠者よ、私は食物を求めてここに来たのである。（一三）」

ムドガラは聖者に、「ようこそ」と答えた。客人をもてなす誓戒を守る彼は、洗足の水と口をゆすぐ水を出し、苦行で得た最上の食物を、この上なく敬意を払って、飢えた狂人の客に与えた。（一四―一五）

その狂人は飢えていて、そのおいしい食物を残らず食べた。そこでムドガラはまた食物を出した。（一六）彼はすべての食物を食べてから、残りを自分の体に塗り、来た道を帰って行った。（一七）次の月相の変り目が来た時、またドゥルヴァーサスはやって来て、落穂拾いで生活する賢者のすべての食物を食べた。（一八）隠者ムドガラは食事をとれず、再び落穂を拾った。飢えは彼を変えることはできなかった。（一九）怒りも物惜しみも軽蔑も、妻子とともに落穂を拾っている最高のバラモンに入ることはなかった。（二〇）

このようにして、決意したドゥルヴァーサスは、落穂を拾う最高の隠者を、季節ごとに六

回訪れた。（二一）しかし聖者は、隠者ムドガラの心に何の変化も見出さなかった。その清らかな人の、清浄で汚れのない心を見出すのみであった。（二二）そこで聖者は喜んでムドガラに言った。

「この世には、あなたのように物惜しみしない施者はいない。（二三）飢えは法の意識を遠ざけ、平静さを奪う。感官の対象に従う舌が、人に味を求めさせる。（二四）生命は食物から生じる。意は動きまわり、制しがたい。そして意と感官とを統一することがまさに苦行（修養）である。（二五）苦労して得たものを清らかな心で喜捨することはむずかしい。善き人よ、あなたはそれをすべて適切になしとげた。（二六）あなたに会えて嬉しい。有難う。感官の制御、平静さ、分け与えること、自制、寂静、憐憫、真実、法。これらはすべてあなたのうちに確立している。あなたは行為により諸世界を獲得した。あなたは最高の帰趨に達した。（二七―二八）ああ、神々もあなたの偉大な布施を称讃した。誓戒を実践する者よ、あなたはその身体のままで天界へ行くであろう。（二九）」

聖者ドゥルヴァーサスがこのように言っている間に、神の使者が天車に乗ってムドガラに近づいた。（三〇）その天車は鵞鳥と鶴にひかれ、鈴の網で囲まれていた。自由にどこにでも行くことができ、きらびやかで、神々しい香りを放っていた。（三一）神の使者は梵仙（バラモンの聖仙）に告げた。

「この天車に乗りなさい。これはあなたが行為によって獲得したのだ。隠者よ、あなたは最高の成就に達した。（三二）」

このように告げる神の使者に、聖仙は言った。

「天界に住む方たちの美質をおっしゃって下さい。決意はいかなるものですか。（三三）そこに住む方たちにはいかなる美質がありますか。苦行はいかなるものですか。また、どのような欠陥があるのですか。天界において、どのような天界の幸福があるのですか。神の使者よ。（三四）一族にふさわしい善き人々は、善き人々にとっては、七歩ともにすれば（または「七語ともに語れば」）友であると言います。主よ、私は友情を前提としてあなたにお聞きします。（三五）この際、本当のことと適切なことを、ためらうことなく言って下さい。私はそれを聞いてあなたの言葉にもとづいて身の振り方を決めましょう。（三六）」

（第二百四十六章）

天界の幸せと涅槃

神の使者は言った。

「大仙よ、あなたはよくわかっていない。高く評価すべき天界の最高の幸せが得られたのに、愚者のように考えこんでいるとは。（一）天と呼ばれるその世界は、高く上方に位置し、すばらしい道路をそなえ、常に天車が行き交っている。隠者よ。（二）苦行を行じない人、大きな祭祀を行なわない人、真実でない人、無神論の人はそこに行けない。ムドガラよ。（三）徳性ある人、自己を制御した人、寂静の人、布施をする人、物惜しみをしない人、布施に勤しむ人、〔戦いの〕傷あとのある勇士は、静寂と自制よりなる最上の行為をなして、そこ、善き

人々の住む善行者の世界へ行く。バラモンよ。（四―五）サーディヤ神群、一切諸神、マルト神群と大仙たち、ヤーマ神群、ダーマン神群、ガンダルヴァと天女（アプサラス）たちが住む。ムドガラよ。（六）これらの神々の群の無数の世界は、一つ一つ輝き、あらゆる願望をかなえ、威光よりなり、美しいものである。（七）ムドガラよ、そこに、三万三千由旬（ヨージャナ）〔の広さの〕黄金よりなる山々の王メールがあり、そこに神々の庭園がある。ムドガラよ。（八）清浄なナンダナ（歓喜園）などが、善行者たちの庭園である。そこには飢えや渇き、疲労、寒暑の恐れはない。（九）嫌悪、不浄、病気もまったくない。すべての香りは心地よく、触れるものはすべて快い。（一〇）隠者よ、そこでは音声はすべて耳に心地よい。そこには悲しみも老いもなく、労苦も嘆きもない。（一一）隠者よ、天界はこのようである。自己の行為の果報により得られる。人々は自己の善業によりそこに生まれるのである。（一二）そこに生まれた人々の身体は輝きを放つ。ムドガラよ、その身体は業（ごう）によって生じるのであり、父母から生じるのではない。（一三）汗も悪臭も大小便もない。天に住む者たちの衣を汚れが害うことはない。隠者よ。（一四）彼らの花輪は神々しい香りを放って魅力的であり、しおれることがない。バラモンよ、彼らはこのように天車で飛行する。（一五）彼らは嫉妬、悲しみ、疲労を離れ、迷妄と物惜しみがない。天界を獲得した者は、そこで幸せに生活する。偉大な隠者よ。（一六）

しかるに、隠者の雄牛よ。そのような諸世界のずっと上方に、神聖な美質をそなえたシャクラ（インドラ）の諸世界がある。（一七）バラモンよ、そのうちの最上に、威光よりなる輝かしい梵天（ブラフマー）の世界がある。自己の善行により清められた聖仙（リシ）たちがそこに行く。（一八）そこにはリ

ブという特別の神々がいる。彼らは神々のうちの神である。彼らの諸世界は最上であり、神々も彼らを崇拝する。(一九) それらの世界は自ら輝きを放ち、光明を有し、最高に望みをかなえるものである。彼らには女性がもたらす苦しみはない。また甘露（アムリタ）を飲むこともない。世間的な権力や物惜しみもない。(二〇) 彼らは供物を食べて生活しない。(二一) それらの永遠の神々のうちの神は、幸せにあって幸せを望まない。また劫末（カルパ）においても滅することはない。(二二) どうして彼らに老いや死があろうか。彼らには歓喜も愛好も幸福もない。苦も楽もない。どうして欲望と怒りがあろうか。隠者よ。(二三) ムドガラよ、その最高の帰趨は神々によっても望まれている。しかしその最高の成就は達成されがたく、欲望に支配される者たちには得られない。(二四)

これらが三十三の世界である。賢明な人々は、最高の自制と教令にもとづく布施とにより、それらの世界とその他の世界に行く。(二五) あなたは布施によりその至福の果報を得たのだ。苦行によって輝きを放って、善行によって得られたその果報を享受しなさい。(二六)

バラモンよ、以上が天界の幸福である。そして天の種々の世界である。これで天界の美質についてあなたに述べた。次にその欠陥を述べるから聞きなさい。(二七) なされた行為の果報は天界において享受され、別に作られることはない。行為〔の果報〕は根こそぎに消費されてしまう。(二八) それが天界の欠陥であると私は思う。行為〔の果報〕が尽きると天界から堕ちること、幸福に満足した人々が堕ちることも欠陥である。ムドガラよ。(二九) 最も輝かしい繁栄を見た後で劣った場所（下界）にいる人々の不満と苦悩は耐えがたいことである。

(三〇) 天界から堕ちる人々は、その意識は麻痺し、ほこりに襲われる。そして花輪はしおれ、まさに堕ちようとする者に恐怖が生ずる。(三一) ムドガラよ、これらの恐ろしい欠陥は、梵天の住処に至るまで存する。しかし天界には、善行をした人々にとって、何万という美質が存するのである。(三二)

ところで隠者よ、天界から堕ちる人々にはまた別の美質がある。彼らは善行の果報と結びついているから、人間に生まれる。(三三) そこにおいても、彼は非常に幸運で、幸福なものとして再生する。しかしそこで正しく理解しなければ、より低い状態に赴（おもむ）く。(三四) この世で行為をなし、それをあの世で享受する。バラモンよ、この世界は行為の世界であり、あの世は果報の世界であるとされる。(三五) ムドガラよ、あなたがたずねたことにすべて答えた。善き人よ。どうかお願いだ。さあ、ぐずぐずしないですぐに行こう。(三六)」

ヴィヤーサは続けた。——

その言葉を聞くとムドガラはよくよく心の中で考えた。最高の隠者は、よく考えてから神の使者に告げた。(三七)

「神の使者よ、あなたに敬礼いたします。友よ、もしよろしければお帰り下さい。天界や幸福は大きな欠陥がありますから、私には必要ありません。(三八) 天から堕ちることは大変につらいことであり、非常に恐ろしい苦しみです。天界に行った人々は、ここに堕ちて来ます。それ故、私は天を望みません。(三九) そこに行ったら嘆くことも苦しむことも動揺すること

もない場所、私はそういう窮極の場所のみを求めます。（四〇）」

その隠者はこのように告げて、神の使者と別れた。彼は落穂拾いの生活をやめて、最高の寂滅に依拠した。（四一）彼は非難と称讃を等しく見て、土塊と石と黄金を同じと考え、清浄な知識のヨーガ（最高存在に関する知に専念すること）により常に禅定を修した。（四二）禅定のヨーガにより彼は力を得て、最高の神通を得た。それから、涅槃（ニルヴァーナ）という永遠なる最高の成就に達した。（四三）

それ故、クンティーの息子よ、あなたは嘆いていてはいけない。お前は繁栄する王権から落ちたが、苦行によりそれを取りもどすであろう。（四四）幸福の直後に不幸が来て、不幸の直後に幸福が来る。それらは交互に人間に巡って来る。輻（や）（スポーク）が輪縁に交互に巡るように。（四五）限りなく勇猛な者よ、十三年が過ぎたら、父祖伝来の王国を取りもどすであろう。お前の心の苦熱が去らんことを。（四六）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

叡知ある尊師ヴィヤーサは、パーンダヴァの王にこのように語ると、再び苦行をするために隠棲所にもどった。（四七）（第二百四十七章）

(42) ドラウパディー強奪（第二百四十八章―第二百八十三章）

シンドゥ国王、ドラウパディーを掠奪する

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

バラタ族の最高の勇士たちは、獣に満ちたそのカーミヤカの森で楽しみながら、神々のように日々を過ごした。(一) 森の中の多様な場所をくまなく眺め、季節に応じて美しい、花々に満ちた森々を眺めながら。(二) パーンダヴァの勇士たちは狩猟を習いとして大森林を歩きまわり、しばらくの間、インドラのように楽しく過ごしていた。(三)

ある時、人中の虎たちは、バラモンたち〔に食物を給する〕ために狩をしようと、全員、同時に四方面に出かけて行った。(四) 苦行の力で輝く大仙トリナビンドゥと司祭のダウミヤの許しを得て出発したが、ドラウパディーは隠棲所に残した。(五) その時、有名なシンドゥ国王（ジャヤドラタ）が訪れた。ヴリッダクシャトラの息子であるこの王は、結婚を望んでシャールヴァ国に向かう途中であった。(六) 彼は王にふさわしい大勢の従者に囲まれ、多くの諸侯とともにカーミヤカに到着した。(七) そこで彼は、パーンダヴァの誉れある美しい妻ドラウパディーを見た。彼女は人気（ひとけ）のない森の、隠棲所の門に立っていた。(八) その体の美しさで輝き、最高の容色をそなえ、稲妻が黒雲を輝かせるように森を輝かせていた。(九) これは天女（アプサラス）か、神の娘か、神の創った幻影か。そう考えて、すべての人々は合掌しているその非の打ち所のない女を見た。(一〇)

ヴリッダクシャトラの息子であるそのシンドゥ国王、すなわちジャヤドラタは、非難の余地のない身体をした彼女を見て驚き、心の中で喜んだ。(一一) 彼は愛欲に迷い、コーティカーシャ王にたずねた。

「あの非難の余地のない身体をした女は誰のものか。それとも、人間の女ではないのか。(一二) このあまりにも美しい女を見たら、私にはあの結婚のことはどうでもよくなった。彼女を連れてわが家に帰ろう。(一三) 友よ、行って彼女について調べてくれ。彼女は誰のものか。彼女は誰か。どこから来たのか。あの美しい眉の女は、何のために茨の森に来たのか。(一四) 美しい尻、切れ長の眼、美しい歯、細い胴を持つ女、この世の美女である彼女は、今日、私を愛してくれるだろうか。この美女を得て、私の願望は成就するだろうか。(一五) コーティカよ、行って調べてくれ。彼女の夫は誰か。(一六)」

耳飾りをつけたコーティカーシャは、それを聞くと、車から飛び下りて、ジャッカルが雌虎に近づくように近づいて、彼女にたずねた。(一七)　（第二百四十八章）

コーティカーシャはたずねた。

「カダンバ樹の枝を撓め、一人で隠棲所に立って輝いているあなたは誰か。あなたは夜にきらめく火焰のようだ。美しい眉をして、風に吹かれてゆらゆら揺れている。(一) あなたはこよなく容色にめぐまれている。しかしどうして森の中で恐れないのか。あなたは女神か、夜

叉女か、魔物(ダーナヴィー)か、天女(アプサラス)か、悪魔(ダイティヤ)の美女か。(二)美しい竜王の娘か、あるいは森をうろつく妖女、夜行の鬼女か。あるいはヴァルナ王(水天)の妻か、ヤマ(閻魔)、ソーマ、財主(クベーラ)の妻か。(三)配置者(ダートリ)、制定者(ヴィダートリ)、太陽神(サヴィトリ)、シャクラ(インドラ)の住処からあなたは来たのか。あなたは我々が誰であるか我々にたずねない。私もあなたの御主人について知らない。私もあなたの御主人について知らない。

女よ、我々はあなたに敬意を表しつつ、あなたの出身(父親)と、御主人についてたずねる。(四)美しい親類と夫と家柄と、ここでいかなる仕事をしておられるのか、ありのままに言って下さい。

(五)私はスラタ王の息子で、コーティカーシャという名で人々に知られている。蓮のような眼の女(ひと)よ、あそこで黄金の車に、火壇で燃える火のように立っているのが、トリガルタ国王で、クシェーマンカラという勇士である。(六)彼の後ろで、大きな弓を持っているのがクニンダ王の強力な息子である。広大な肩をして、常に山に住む彼は、非常に驚いてあなたを見つめている。(七)そして蓮池のそばに立っているあの浅黒いハンサムな青年は、イクシュヴァークの王スバラの息子で、敵を殺す勇士である。美しい身体の女よ。(八)愛らしい女よ、あれがサウヴィーラ(スヴィーラ)の王である。ジャヤドラタという名を聞いたことがあろう。彼の後に旗をかかげたサウヴィーラの十二名の王子たちが続く。彼らはすべて赤色の馬につながれた戦車に乗り、祭場で燃える火のようである。(九)すなわち、アンガーラカ、クンジャラ、グプタカ、シャトルンジャヤ、サンジャヤ、スプラヴリッダ、プラバンカラ、ラヴィ、プラマラ、シューラ、プラターパ、クハラという名である。六千の戦車兵、象兵、騎兵、歩兵がジャヤドラタ王に従う。(一〇―一一)彼の血気盛んな弟たち、バラーハカ、アニーカヴィダーラナなど、その他の主立ったサウヴィーラの強力な若い勇士たちも王に従う。(一二)王はこれらの仲間に囲まれて進む。インドラがマルト神群に守られるように。美しい髪の女よ、我々は何も知らない。告げてくれ。あなたは誰の妻であるか。または誰の娘であるか。(一三)」

(第二百四十九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――シビ族の長にたずねられて、ドラウパディーは、ゆっくりと眺め、カダンバの枝を離れて、絹の(または、クシャ草の)上衣をつかんで、次のように言った。(一)

「王の息子よ、私のような女は、あなたに対して〔直々に〕答えるべきでないとよくわきまえております。しかしここには、他に答える男や女がおりません。(二)今、私は一人です。〔本来なら〕貴い方よ、そこで私が答えましょう。お聞きなさい。というのは、私は森で一人です。どうして自己の法(ダルマ)に専念しているのに、一人のあなたに話しかけることができましょう。(三)

私はあなたがスラタの息子であると知りました。人々はあなたをコーティカーシャと呼んでいると。シビ族の方よ、そこで私も親族についてあなたに語りましょう。お聞きなさい。(四)私はドルパダ王の子です。シビ族の方よ、人々は私をクリシュナーと呼びます。私は五人の男を夫に選びました。カーンダヴァプラスタにいたとお聞きでしょう。(五)ユディシテ

イラ、ビーマセーナ、アルジュナ、マードリーの勇猛な二人の息子たちは、私をここに残して、四方に別れ、狩に出かけました。(六)王は北に、ビーマセーナは南に、アルジュナは東に、双子は西に。もうすぐこれらの最高の戦士たちがここに帰るころだと思います。(七)彼らのおもてなしを受けてから、お望みのままに御出発下さい。馬を車から離し、水浴させなさい。偉大なダルマの息子はお客様が好きです。あなた方を見たら喜ぶでしょう。(八)」

月のような顔をしたドラウパディーは喜んで、シビ族の王の子にこのように言うと、清浄な草庵に入って行った。彼らを客人として接待することは自己の義務(ダルマ)であると考えたのである。(九)　（第二百五十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

すべての諸侯が居並ぶ中で、ジャヤドラタはコーティカーシャの言葉を聞くと、次のように言った。(一)

「彼女が答える時、私の心はその最上の女に喜ぶ。どうしてあなたは引き返したのか。(二)彼女を見たら、私にとって他の女は雌猿同然だ。勇士よ、私の言っていることは本当だ。(三)彼女は見るだけで私の心をすっかり奪う。シビの王よ、あの美女が人間であるかどうか私に言ってくれ。(四)」

コーティカーシャは言った。

「あれは誉れある王の娘、ドラウパディー、クリシュナーである。パーンドゥの五人の息子たちの妻であり、この上なく尊敬されている。(五)すべてのパーンダヴァに愛され、大切にされている。スヴィーラの王よ、彼女に会って、幸せな気持でスヴィーラに帰れ。(六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

サウヴィーラとシンドゥの主である邪悪なジャヤドラタは、そう告げられて、「我々はドラウパディーに会おう」と言った。(七)彼は狼が獅子の巣に入るように、その人気(ひとけ)のない隠棲所に六名の人々とともに入り、クリシュナーに次のように言った。(八)

「美しい尻の女よ、御機嫌よう。御主人たちもお元気か。あなたがその息災を願っている人々も元気でおられるか。(九)」

ドラウパディーは答えた。

「クンティーの息子ユディシティラ王は元気です。私も彼の弟たちも、あなたがたずねた人々も元気です。(一〇)王様、足を洗う水とこの座席をお受け下さい。朝食として五十頭の鹿をあなたにさし上げます。(一一)ユディシティラは、黒鹿、斑鹿、ニヤンク鹿、褐色鹿(ハリナ)、シャラバ、兎(シャシャ)（鹿の種類か）、白足鹿(リシャ)、ルル鹿、シャンバラ、ガヴァヤ（ガヤル）などの多くの鹿、猪、水牛、その他の種類の獣を、自らあなた様に給するでしょう。(一二―一三)」

ジャヤドラタは言った。

「朝食のおもてなしはすべて十分になされた（も同然だ）。さあ、私の車に乗りなさい。幸

福の子を得られよ。(二四) 富貴を失い王位から落ちた、哀れで途方に暮れて、森に住んでいるパーンダヴァたちを愛してはいけない。(二五) 聡明な女は富貴を失った夫を愛さないものだ。繁栄する者を夫に選びなさい。富貴が失われたらとどまるべきではない。(二六) 彼らは富貴を失い、永久に王国を失った。パーンドゥの息子たちを愛して、苦しんでいる必要はない。(二七) 美しい尻の女よ、私の妻になれ、彼らを捨てて幸福になりなさい。私とともに、すべてのシンドゥとサウヴィーラを得なさい。(二八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

シンドゥ王にこのような心をふるわす言葉を言われて、クリシュナー(ドラウパディー)は、眉をひそめてその場を離れた。(二九) 美しい胴のクリシュナーは、彼のその言葉を軽蔑し非難して、「そのようなことを言ってはなりません。恥じなさい」とシンドゥ国王に告げた。(三〇) その非の打ち所のない女は、夫たちが帰ることを期待して、次から次へと言葉を発して相手を幻惑した。(三一)

(第二百五十一章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドラウパディーの美しい顔は、怒りで赤く染まり、眼は赤くなり、その眉はひそめられた。彼女はそのような顔をして、スヴィーラ国の王をなじって言った。(一)

「愚か者。誉れ高い、猛毒の蛇のような勇士たちを軽蔑して、あなたはどうして恥ずかしくないの。彼らは大インドラのようで、自己の行為に専念し、夜叉や羅刹の群をも凌駕します。(二) 森に住むにせよ家に住むにせよ、苦行を積み学問を修了した尊敬されるべき人について、人々は何ら悪いことを言わないものです。スヴィーラよ、犬のような人々がそのように言うのです。(三) でも考えてしまいます。このように王族(クシャトリヤ)が集まっているのに、誰一人として、地底界の口にまさに落ちようとするあなたの手をとって引きもどす人はいないのです。(四) あなたがダルマ王に勝とうと望むことは、ヒマーラヤの山麓を歩きまわる、山のような発情した象を、杖を持って群から追い出そうとするようなものです。(五) 無知のために、眠った強力な獅子のまつげを顔から引き抜くようなものです。足で蹴って……。逃げても、怒ったビーマセーナを見出すことでしょう。(六) 強力で非常に恐ろしい、成長して黄色になった獰猛な獅子が山の洞窟で眠っている時、それを足で蹴るようなものです。怒った恐ろしいアルジュナを制圧しようとすることは、(七) 最高の人物であるパーンダヴァの双子の弟たちと戦おうとすることは、酔い痴れて、猛毒を持つ二枚舌の黒蛇たちの尾を踏むようなものです。(八) 竹やバナナや葦は、実をつけると滅して、繁殖しない。また蟹は懐妊すると死ぬ。それと同様に、彼らに守られている私を奪うと、あなたも死ぬことになります。(九)」

ジャヤドラタは言った。

「クリシュナーよ、あの王子たちがどのようであるか、私は知っている。しかし今は、そのようなおどしで我々を恐れさせることはできない。(一〇) クリシュナーよ、我々一同は、十

六の高い家柄に生まれた。我々は六計（和平、戦争、静止、進軍、依投、二重政策）に関して非常に優れている。パーンドゥの息子たちはそれを欠いていると思う。ドラウパディーよ。（一一）

さあ、早く象か馬に乗りなさい。言葉だけで我々を止めることはできない。あるいは、哀れっぽく話し、サウヴィーラ王の恩寵を乞え。（一二）」

ドラウパディーは言った。

「私は強力であるが、無力であるとサウヴィーラ王は考える。この誉れ高い私が、暴力を恐れて、サウヴィーラ王に哀れっぽく話すでしょうか。（一三）というのは、盟友であるクリシュナとアルジュナが、一つの戦車に同乗して、私の後を追うでしょう。インドラでさえも私を奪えないのに、どうしてその他の哀れなただの人間が奪うことができましょう。（一四）敵の勇士を殺すアルジュナは戦車に乗り、敵たちの心を打ちひしぎ、私のためにあなたの軍隊に攻め入るでしょう。そして暑い季節に火が木材を燃やすように滅ぼすでしょう。（一五）クリシュナに従うヴリシュニの勇士たち、すべてのケーカヤの勇士たち、そしてすべての王子たちが、勇み立って私のあとを追うでしょう。（一六）ガーンディーヴァ弓から放たれた恐ろしい矢は、アルジュナの手をこすると、雷のような音をたてて、もの凄い速度で飛び、この上なく恐ろしくうなる。（一七）アルジュナが法螺貝を鳴らし、弓懸（ゆがけ）の音を響かせて次々と矢を放つ。そのガーンディーヴァから放たれた矢の大群は、蝗（いなご）（または鳥）の群のように速く飛ぶ。彼がそれらの矢をあなたの胸に命中させる時、あなたの心中はどのようであるでしょう。（一八）

棍棒を持ったビーマが襲ってくるのを見て、またマードリーの息子たちが怒って、諸方に怨恨から生じた憤怒の毒を吐いているのを見て、あなたは久しく後悔するであろう。最低の男よ。（一九）私が心の中でさえ、尊敬に値する夫たちに決して背かないように、その真実（サティヤ）にかけて、今、あなたがパーンダヴァたちにうち破られて引きずりまわされるのを見るでしょう。（二〇）邪悪なあなたが無理に奪おうとしても、私を恐れさせることはできない。私はクル（パーンダヴァ）の勇士たちに再会し、またカーミヤカにもどるでしょう。（二一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その目の大きい女は、彼らが自分をつかまえようとしているのを見て、彼らを叱りながら、「さわらないで！」と叫んだ。そして恐れた彼女は、司祭のダウミヤに大声で助けを求めた。（二二）ジャヤドラタは彼女の上衣をつかんだ。彼女は彼を押しのけた。その悪党は、彼女に押されて、根を切られた樹木のように倒れた。（二三）しかし再び非常に激しくつかまれ、王女はあえぎ、ダウミヤの両足に敬礼してから、引きずられて車に乗った。（二四）

ダウミヤは言った。

「あなたはあの勇士たちをうち破らずして彼女を連れて行くことはできない。ジャヤドラタよ、古（いにしえ）の法（ダルマ）を考慮せよ。（二五）このような卑劣なことをすれば、あなたは必ずや悪い果報を受ける。ダルマ王をはじめとするパーンダヴァの勇士たちに会って。（二六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その時ダウミヤはこのように告げて、歩兵の群の中に入って、奪われて行く誉れある王女について行った。(二七)

(第二百五十二章)

ドラウパディーの救出

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

地上で最強の戦士であるパーンダヴァたちは、別々に行動し、諸方を巡って、鹿や猪や水牛を殺した後で合流した。(一)ユディシティラは、鹿や猛獣に満ち、鳥たちがさえずる、あの大きな森を［見て］、鳴き叫んでいる獣たちの声を聞いて、弟たちに告げた。(二)

「鳥獣が太陽に照らされている方角に行き、荒々しく鳴く。それは、恐るべき苦難、大きな戦闘、敵の侵略を知らせる。(三)速やかに引き返せ。鹿などにかまっていられない。私の心は苦しみ焼かれるから。私の体内では、生命の主(魂)が、怒りにかられ、知性をおおって燃え上がる。(四)金翅鳥(スパルナ)(ガルダ)に蛇たちをさらわれた湖、王がおらず富貴がなくなった王国、酒飲みに酒を飲まれた瓶。カーミヤカはちょうどそれと同様に見える。(五)」

シンドゥ産の、風や激流のように速い、非常に駿足な馬たちをつないだ、大きなすばらしい戦車に乗って、勇士たちは隠棲所をめざして行った。(六)彼らが引き返して行くと、ジャッカルが大声をあげて、彼らの左側に近づいて吼えた。それを見て王はビーマとアルジュナ

に告げた。(七)

「卑しい生まれのあのジャッカルは、左側に近づいて吼えている。それからすると、明らかに邪悪なクル族の者たちが、我々を軽んじて、力ずくで攻撃をしかけて来たのだ。(八)」

このように、彼らは大森林で狩猟をした後に、その森に入ると、泣いている少女を見かけた。それは彼らの妻の乳兄弟である侍女であった。(九)インドラセーナ(王の御者)は彼女の方に急いで近づき、戦車から飛び下りて馳け寄った。そして非常に心配して、彼女にたずねた。(一〇)

「お前は地面に倒れて何故泣いているのか。どうしてお前の顔は青白く、乾いているのか。ひょっとしてドラウパディー王女が、残忍な悪者たちに苦しめられているのではないか。非の打ち所のない姿で、非常に大きい眼をして、クルの雄牛(パーンダヴァ)にふさわしい身体をした彼女が。(一一)王妃が大地に入ろうと、天に昇ろうと、海に入ろうと、パーンダヴァたちは彼女の後を追って行く。ダルマ王が苦しむから。(一二)彼らは敵を粉砕し、苦悩に耐え、無敵である。そのような彼らの生命にも等しい最愛の妻を、無上の宝を、いかなる愚者が奪おうとするだろうか。そんな男は、彼女が強い夫を持っていることを知らないのだ。彼女はパーンダヴァたちにとって、外部で動く心なのだ。(一三)彼らの恐ろしく鋭い矢は、今日、誰の体を貫いて大地にささるであろうか。彼女について嘆くことはない。恐れる女よ。今日のうちにクリシュナーはもどると知れ。すべての敵を残らず殺して、パーンダヴァたちはドラウパディーと再会するであろう。(一四)」

すると彼女は、美しい顔をぬぐって、御者のインドラセーナに告げた。
「ジャヤドラタは、五人のインドラのような勇士を軽んじて、力ずくでクリシュナーを奪いました。(一五) 彼らの通った足跡はまだ生々しく残っていて、折られた樹々もまだそのままです。引き返して、すぐに後を追って下さい。王女様はまだ遠くに行っておられません。(一六) インドラのようなみな様は、立派で美しい鎧をおつけ下さい。高価な弓矢をおとりなさい。すぐに足跡を追って下さい。(一七) 彼女がおどしや暴力によって我を失い、心迷い、やつれた顔をして、誰かふさわしくない男に身体を与える前に。上等のバターに満ちた杓を灰にそそぐように……。(一八) 供物をもみがらの火の中にくべる前に。火葬場に花輪を投げる前に。バラモンたちがうっかりしている間に、祭祀用のソーマが犬に舐められる前に。大きな森で狩をして、ジャッカルが蓮池に飛び込む前に。(一九) 犬が供物を食べるように、誰か悪党が、美しい鼻と眼をした、月光のように清らかな、あの愛しい女の美しく輝く顔に触れないように、すぐにこの跡を追って下さい。あなたにとって時間がすぐに過ぎることがありませんように。(二〇)」
ユディシティラは言った。
「御女中、黙りなさい。言葉を慎みなさい。我々の前で粗野なことを言ってはならぬ。王であろうと王子であろうと、力に慢心した者たちは迷うものだ。(二一)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そう言って彼らは速やかに出発して、その跡をたどった。彼らは蛇のように何度も息を吐き、大弓の弦をはじいた。(二二) やがて彼らは、例の軍隊の馬の蹄がたてるほこりを見出した。そして、歩兵たちの中でビーマに向かって「早く来い」と叫んでいるダウミヤを見た。(二三) 王子たちは元気いっぱい(異本による)、「御安心下さい」とダウミヤを力づけ、餌にかりたてられた鷹のように、全速力で敵軍に襲いかかった。(二四) ドラウパディーを強奪されて激した、大インドラのように勇猛な彼らの怒りは、ジャヤドラタを見て、また彼の戦車にいる妻を見て、激しく燃え上がった。(二五) 偉大な戦士であるビーマ、アルジュナ、双子、ユディシティラ王は、シンドゥ国王に対して雄叫びをあげ、敵たちは途方に暮れた。(二六)

(第二百五十三章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
それからその森で、ビーマセーナとアルジュナを見て、猛々しい戦士たちのうちに、非常に恐ろしい叫び声が起こった。(一) 邪悪なジャヤドラタ王は、クルの雄牛(パーンダヴァ)たちの旗の先を見ると、気力がなえて、自ら戦車に乗っているドラウパディーに告げた。(二)
「偉大な五人の戦士が来るが、彼らはあなたの夫たちであると思う。美しい髪のクリシュナーよ、あなたはもちろん彼らを知っている。それぞれの戦車にどのパーンダヴァが乗っているのか教えてくれ。(三)」

ドラウパディーは言った。

「愚か者、あなたがあの偉大な戦士たちを知って何になるのか。非常に恐ろしい致命的な行為をしておきながら！　あそこに勇猛な夫たちが集結している。あなた方のうちの誰も、戦いにおいて生き残ることはできぬ。（四）しかし、まさに死のうとしているあなたには、問われた私はすべてを告げるべきである。これは義務（ダルマ）である。私には苦しみも、あなたに対する恐怖もない。ダルマ王と弟たちを見たからには。（五）

その人の旗の先に、形よく甘い音をたてるナンダとウパナンダという太鼓が響き、自己の法（ダルマ）の真の意味を知り、所用のある人々が常にその人に従い、黄金のように清く輝かしい人、大きな鼻をし、細い体をして、切れ長の眼をしている人、クル族の至高者と言われる人、それが私の夫、ダルマの息子、ユディシティラである。（六－七）その法を実践する英雄は、敵といえども庇護を求めて来たら、生命をも与えるであろう。愚か者よ、武器を捨てて合掌し、身を守るために、急いで彼に寄る辺を求めなさい。（八）

また、あそこに見える、戦車に乗って、太い腕をし、生長したシャーラ樹のような人、唇を噛みしめ、眉をひそめ一つに寄せている人は、狼腹という私の夫である。（九）生まれのよい、強力で、よく自制し、偉大な力を持つ人々が、彼のことを勇士と讃える。彼の行為は超人的である。この地上で、彼はビーマ（恐るべき者）と呼ばれる。（一〇）彼に対して罪を犯した者たちは、この世で生き残れない。彼は決して怨みを忘れない。彼は敵を滅ぼして、その後で一応は気が鎮まるが、完全には鎮まらない。（一一）

柔和で寛大で、堅固で、誉れあり、感官を制し、長老に仕える英雄、ユディシティラの弟であり弟子でもある者、それがダナンジャヤ（アルジュナ）という私の夫である。（一二）彼は欲望によっても恐怖によっても貪りによっても法（ダルマ）を捨てない。残忍なことを行なわない。普遍火（ヴァイシュヴァーナラ）に等しい光輝を持ち、敵によく耐え、敵を粉砕する。彼はクンティーの息子である。（一三）

一切の法の真実の意味を知り、恐怖に苦しむ者たちの恐怖を除く聡明な人、彼の姿は地上で最高であると言われる。すべてのパーンダヴァたちは彼を守る。（一四）彼は生命よりも大事で、彼も忠誠を尽くす。それが勇士ナクラ、私の夫である。

驚異の早業を示す偉大な剣士、無比の知者であるのが、サハデーヴァである。（一五）愚か者よ、戦闘において、悪魔の軍隊に対するインドラの働きのような彼の働きを、今見るであろう。彼は勇士で武器に通達し、叡知あり思慮深く、ダルマの息子である王に好ましいことをする。（一六）彼は月や太陽に等しい威光を持ち、パーンダヴァたちの愛しい末弟である。知性にかけて彼に等しい人はいない。賢者の中において雄弁で、確実なことを知っている。（一七）彼は勇士で常に猛々しい。叡知あり、賢者である。それが私の夫サハデーヴァである。彼は法にもとることをするぐらいなら、生命を捨てたり、火に飛び込んだりするだろう。常に思慮深く、王族（クシャトラ）の法に専念する。クンティーにとって生命よりも愛しい勇士である。（一八）

宝に満ちた船が海上で、マカラ（海豚または鰐）の背中に乗って難破するように、あなたのこの軍

隊が、パーンドゥの息子たちによってすべての兵士を殺され、粉砕されるのを見るであろう。(一九)

以上、パーンドゥの息子たちについて話しました。あなたは迷妄にかられて彼らのことを軽んじて行動したのです。もしあなたが無傷で彼らから逃れられるなら、あなたはこの世で再生を得るでしょう。(二〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

五名のパーンダヴァは、五名のインドラのように怒って、ふるえて合掌する歩兵たちを無視して、いたるところで戦車隊を攻撃して、矢の雨により諸方を暗闇にした。(二一)

(第二百五十四章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

「立ち止れ、攻撃せよ、突撃せよ。」

シンドゥの王はそのように諸侯を鼓舞した。(一) その時は、戦場でもの凄い叫び声があがった。ビーマとアルジュナと双子とユディシティラを見て兵士たちがあげた叫びだった。(二) 強力な人中の虎たちを見て、シビとシンドゥとトリガルタの兵たちは意気沮喪した。(三) ビーマは、太軸の部分が金色に輝く、すべて鋼鉄製の棍棒を持って、カーラ（時間、破壊神）にかり

たてられたシンドゥ国王に襲いかかった。(四) コーティカーシャは、両者の間に割り込み、戦車の大群によりビーマを包囲して攻撃した。(五) しかし勇士たちの腕から投じられる多くの槍や投槍や矢を浴びせられても、ビーマは動揺することはなかった。(六) ビーマは、シンドゥ国王（ジャヤドラタ）の軍隊の前衛において、象と御者と十四名の歩兵を棍棒で殺した。(七) そしてアルジュナは、軍隊の前衛において、サウヴィーラ（ジャヤドラタ）を捕えようとして、五百人の勇猛な山岳出身の戦士たちを殺した。(八) ユディシティラ王は自ら、その戦いにおいて、襲ってくる百人のスヴィーラの勇士たちを、またたく間に殺した。(九) ナクラが刀を手に持って、戦車から飛び上がり、象の足を守る兵士たちの頭を、種をまくように幾度もまいているのが見えた。(一〇) 一方サハデーヴァは、戦車で象兵たちのところに行き、矢を射て、木から孔雀を射落とすように彼らを射落とした。(一一)

その時、トリガルタ国王は、弓を持って大戦車から降りて、ユディシティラ王の四頭の馬を殺した。(一二) ダルマ王は、徒歩でそばに来た彼の胸を、半月形の先の矢で射貫いた。(一三) その勇士は胸を射貫かれ、口から血を吐いて、ユディシティラの前で、根を切られた樹木のように倒れた。(一四) 馬を殺されたダルマ王は、インドラセーナとともに戦車から飛び下り、サハデーヴァの大戦車に乗った。(一五)

一方、クシェーマンカラとマハームカの二人はナクラを攻撃し、両側から鋭い矢の雨を浴びせた。(一六) しかしナクラは、雨季の雲のように矢の雨を降らせる両者を、一人ずつ大きな矢によって殺した。(一七) トリガルタの王スラタは象戦が得意で、戦車の先端に立ち、象

を用いてナクラの戦車を粉砕させようとした。(一八) しかしナクラは恐れることなく、刀と楯を持って戦車から降り、刀を振りまわす戦法をとって、山のように動かずに立っていた。(一九) そこでスラタは、ナクラを殺すために、怒って鼻を振り上げた巨象を送った。(二〇) ナクラはその象がそばに来た時、刀でその鼻と牙を根もとのところで切り取った。(二一) その装飾品で飾られた象は、大声で叫んで、頭を下げて大地に倒れ、御者たちを粉砕した。(二二) 勇士ナクラはこのようなすばらしい行為をしてから、ビーマセーナの戦車に行って乗り込んだ。(二三)

ところでビーマは、攻撃してくるコーティカーシャ王と戦っていたが、馬たちをかりたてる御者の首を矢で切り取った。(二四) その王はビーマに御者を殺されたことに気づかなかった。御者を殺された彼の馬たちは、戦場であちこち走りまわった。(二五) 最高の戦士ビーマは、御者を殺されて退却する彼に近づき、柄（え）のついた投槍で彼を殺した。(二六)

アルジュナは十二名のサウヴィーラの王たちの弓と頭とを、鋭い半月形の矢で切り取った。(二七) その超戦士は、その戦いにおいて、彼の矢の射程範囲に入ったシビ族の人々、イクシュヴァークの長たち、トリガルタの人々、シンドゥの人々を殺した。(二八) 多くの軍旗をともなう象、旗標をつけた勇士たちがアルジュナに殺されるのが認められた。(二九) 頭のない胴体、胴体のない頭が、すべての戦場の地面をおおっていた。(三〇) 犬、禿鷲、鷺（カンカ）、烏（カーカ）、鴉（ウラ）、鳶（バーサ）、ジャッカル、その他の鳥たちは、そこで殺された勇士たちの肉と血で満腹になった。(三一)

これらの勇士たちが殺された時、シンドゥ国王ジャヤドラタは恐れて、クリシュナーを解放し、懸命に逃げた。(三二) その最低の男は、その軍隊が壊滅した時、ドラウパディーを降ろして、命惜しさのあまり森を逃げまわった。(三三)

ダルマ王はダウミヤに先導されたドラウパディーを見出し、マードリーの勇猛な息子に命じて戦車に同乗させた。(三四) ジャヤドラタが逃亡した時、狼腹（ビーマ）は逃げまわる敵軍を幾度も矢でねらって射殺した。(三五) しかしアルジュナは、ジャヤドラタが逃げたのを見て、シンドゥ軍の兵士たちを殺しているビーマを止めた。(三六)

アルジュナは言った。

「ジャヤドラタの悪行のせいでこの耐えがたい苦しみが我々に降りかかったが、その彼を戦場に見かけない。(三七) どうか彼を探してくれ。兵士たちを殺して何になる。それは無益な行為だ。どのように考えているのか。(三八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

英邁なアルジュナにそう言われて、ビーマセーナはユディシティラを見て、雄弁に、次のように言った。(三九)

「敵どもは勇士を殺されて、ほとんど諸方に逃げた。王よ、ドラウパディーを連れて、ここから引きあげて下さい。(四〇) 王中の王よ、双子と偉大なダウミヤとともに、ドラウパディーを隠棲所に連れて帰り、慰めてやって下さい。(四一) あの愚かなシンドゥ国王が地底界に

逃げようとも、インドラがその御者をつとめようとも、私は生きて彼を逃しはしない。(四二)」
　ユディシティラは言った。
「勇士よ、シンドゥ国王は邪悪ではあるが、殺すべきではない。ドゥフシャラー（ドリタラーシトラとガーンダーリーの娘。ジャヤドラタの妻）と、誉れあるガーンダーリーのことを配慮して。(四三)」
　それを聞くとドラウパディーは興奮した。彼女は知性ある女性ではあったが、怒り、恥ずかしがり、夫であるビーマとアルジュナの二人に激しく告げた。(四四)
「私に好ましいことをして下さるというなら、あの最低な男を殺して。シンドゥ族の外道、悪党、馬鹿者、一族の面汚しを。(四五) 恨みもないのに妻を奪う者と王国を奪う敵は、戦場で命乞いしても生きのびることはできません。(四六)」
　ヴァイシャンパーヤナは語った。――
　そう言われて、二人の人中の虎は、シンドゥ国王を求めて出発した。王はクリシュナーを連れ、司祭をともない、引き返した。(四七) 王が隠棲所に入って見ると、そこには隠者たちの座席や水瓶が散乱し、マールカンデーヤなどのバラモンたちが詰めかけていた。(四八) 叡知に満ちた王は、妻をともない、弟たちにはさまれて、ドラウパディーのことを心配して集まって来たバラモンたちに会った。(四九) 王がシンドゥとサウヴィーラの軍を破り、ドラウパディーを取りもどして帰って来たのを見て、彼らは喜んだ。(五〇) 王は彼らに囲まれて、

その場に座っていた。美しいクリシュナーは双子とともに隠棲所に入った。(五一)
ビーマとアルジュナは、敵が一クローシャ（約二マイル）ほどのところにいるのを知って、自ら馬たちをかりたてて、全速力で駆けて行った。(五二) そこで雄々しいアルジュナは、この奇蹟を行なった。彼は一クローシャほどのところにいるシンドゥ国王の馬を殺したのである。(五三) というのは、神的な武器をそなえた彼は、困難な時においてもあわてることなく、加持された矢で行ないがたい行為をしたのである。(五四) それからビーマとアルジュナという二名の勇士は、馬を失い一人で恐れ困惑しているシンドゥ国王に襲いかかった。(五五) シンドゥ国王は自分の馬が殺されたのを見て非常に苦しみ、またアルジュナが勇武を発揮しているのを見て、一目散に逃げて森に走り込んだ。(五六) 勇士アルジュナは、一目散に逃げるシンドゥ国王を見て追いすがり、次のように告げた。(五七)
「これだけの勇気しかないのに、どうして女性を力ずくで奪ったのか。王子よ、引き返せ。逃げるのはお前にふさわしくない。従者たちを敵の中に捨てて、どうして逃げるのか。(五八)」
　アルジュナにそう言われても、シンドゥ国王は引き返さなかった。強力なビーマは、「待て、待て」と言って激しく襲いかかった。情け深いアルジュナは、「殺してはいけない」と彼に言った。(五九)
（第二百五十五章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ジャヤドラタは、武器を振りかざした二人の兄弟を見て、非常に苦しみ、生命が助かりたい一心で、急いで一目散に逃げた。(一)強力なビーマセーナは戦車から降り、逃げる彼に襲いかかって、非常に怒り、その髪の毛をつかんだ。(二)怒りのあまり、ビーマは敵王をもち上げて、地面にたたきつけた。そしてその喉をつかんで、王を打ちすえた。(三)王は再びよみがえり、起き上がろうとしたが、勇士は泣いている彼の頭を足で蹴った。(四)ビーマは彼を膝蹴りし、拳で打った。王は打撃の苦痛で失神した。(五)しかしアルジュナは怒ったビーマセーナを制止した。

「ビーマよ、ドゥフシャラーのために、王が言った通りにせよ。(六)」

ビーマセーナは言った。

「この悪党は理由もなくドラウパディーを苦しめた最低の男だ。私はこいつの生命を助けることはできない。(七)王はいつも情深いが、私は彼の言う通りにはできない。お前は子供っぽい考えでいつも私の邪魔をする。(八)」

ビーマはそう言うと、半月形の先の矢で、何も言えない敵王の頭を剃って、五本の髪の房が残るだけにした。(九)それからビーマは敵王にたずねた。

「愚か者、もし生命が助かりたいなら、その方法を教えてやろう。聞け。(一〇)会合や集会場において、『私は奴隷です』と言え。そうすれば命を助けてやる。これは戦いの勝利者の教命である。(一一)」

生命の危機に瀕しているジャヤドラタ王は「その通りにする」と、戦闘において輝く人中の虎ビーマに答えた。(一二)それからビーマは、おののき、意識を失い、ほこりまみれの彼を縛って戦車に乗せた。(一三)彼を戦車に乗せてから、ビーマはアルジュナをともなって、隠棲所の中にいるユディシティラのもとに行った。(一四)そしてビーマは、そのような状態のジャヤドラタを見せた。王は笑って彼を見て、「解放してあげなさい」と命じた。(一五)ビーマは王に言った。

「ドラウパディーに話して下さい。この悪党はパーンダヴァの奴隷になったと。(一六)」

すると兄は愛情をこめて彼に言った。

「もしお前が私を依り所と仰ぐなら、その最低の男を解放しなさい。(一七)」

ドラウパディーもユディシティラを見てビーマに告げた。

「その王の奴隷を解放しなさい。あなたはその頭を剃って五本の弁髪だけにしたのです。(一八)」

王は解放され、ユディシティラ王のところに行って敬礼し、どぎまぎして、すべての隠者たちにおじぎをした。(一九)情け深いダルマの息子ユディシティラ王は、アルジュナに支えられているジャヤドラタを見て告げた。(二〇)

「あなたは奴隷ではない。解放された。行きなさい。決して再びあのようなことをしてはならぬ。女好き。何ということをしたのだ。卑しい男は卑しい仲間を持つ。あなた以外の、いかなる卑劣な男がこのようなことをするだろうか。(二一)」

しかしそのバラタの最高者である王は、その悪行を犯した男が茫然自失しているのを見てとると情けをかけた。（二二）

「あなたの知性をいつも法（ダルマ）に向けるように。非法に心を向けてはならぬ。ジャヤドラタよ、馬と戦車と歩兵とともに、恙無く帰りなさい。（二三）」

このように言われて、ジャヤドラタ王は恥じ、沈黙し、うつ向いて、苦悩し、ガンガー・ドゥヴァーラ（シヴァ神の聖地）に行った。（二四）彼はウマーの夫である三眼者（シヴァ）なる神に庇護を求め、激しい苦行を行なった。シヴァは彼に満足した。（二五）三眼者なる神は喜んで、自ら供物を受け取り、彼の願望をかなえてやると告げた。彼はそれをうけて願いごとを述べた。それを聞け。（二六）

「私は戦車に乗った五名のパーンダヴァたちを戦闘においてうち破りたい。」

王は神にそう言った。しかし神は「それはできない」と彼に告げた。（二七）

「汝は戦いにおいて、無敵で殺され得ない彼らを食い止めることができるであろう。ただし、勇士アルジュナは除いて。神々も彼にはかなわない。（二八）というのは、無敵の神、法螺貝と円盤と棍棒を持つ神と呼ばれるクリシュナが、その武器に通じた者たちのうちの第一人者アルジュナを守っているのだ。（二九）」

このように告げられたジャヤドラタ王は、自分自身の住処に帰った。またパーンダヴァたちは、そのカーミヤカの森に住み続けた。（三〇）

（第二百五十六章）

ラーマ物語

不死身の羅刹王ラーヴァナ

ジャナメージャヤはたずねた。

「クリシュナーが奪われた時、最高の苦悩を味わってから、その後、人中の虎であるパーンダヴァたちは何をしたのか。（一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このようにジャヤドラタをうち破り、クリシュナーを解放してから、ダルマ王ユディシティラは隠者たちの群とともに座していた。（二）（彼の話を）同情して聞いている偉大な聖仙たちのうちにマールカンデーヤがいた。ユディシティラは彼に話しかけた。（三）

「カーラ（時間、破壊神）は強力であると思う。創造者が創った運命も、また生類の宿命も強力である。それを侵害することはできない。（四）というのは、我々の妻は法（ダルマ）を知り法を実践してい

るのに、どうしてこのようなことが降りかかったのか。清い人に無実の盗みの罪が降りかかるように。(五) ドラウパディーは何も悪い行為、非難される行為を決してしたことがなく、バラモンたちに対しても偉大な法をよく実践している。(六) ところが心迷ったジャヤドラタ王は、力ずくで彼女を奪った。彼は彼女を強奪したから、髪の毛を剃られた。その仲間とともに彼は戦闘において敗北した。(七) 我々はシンドゥの軍隊を破って彼女を取りもどした。しかし妻がさらわれるということを我々は予測できなかったのだ。(八)

そしてこのように森で暮らすことは惨めだ。我々は狩猟で生活している。森に住む者たちが、森に住む種々の獣たちを殺害しているのだ！ そして邪(よこしま)なことを企てる親族たちによって、このように亡命生活をしている。(九) 私よりも不幸な人間をかつて見聞きしたことがあるでしょうか。(一〇)」　(第二百五十七章)

マールカンデーヤは言った。

「バラタの雄牛よ、ラーマは例えようのない苦悩を経験した。彼の妻ジャーナキー（シーター）は羅刹によって強奪された。(一) 羅刹王のラーヴァナが彼女を隠棲所からさらい、幻術を用いて禿鷲のジャターユスを速やかに殺し、空中を通って強奪して行ったのだ。(二) ラーマはスグリーヴァ（猿王）の軍の援助により、海に橋（堤）を築いて、鋭い矢でランカーを焼き、彼女を取りもどした。(三)」

ユディシティラは言った。

「ラーマは何という一族に生まれたのか。どのような気力、勇武をそなえているのか。ラーヴァナは誰の息子であるか。どうしてラーマに敵意を抱いたか。(四) 尊者よ、これらすべてをありのままに語って下さい。汚れなき行為のラーマの業績を聞きたいと思います。(五)」

マールカンデーヤは語った。――

「イクシュヴァークの家系に生まれた、アジャという偉大な王がいた。彼の息子のダシャラタは、廉直で、常にヴェーダ学習に励んでいた。(六) 彼の四人の息子たちは法(ダルマ)と実利(アルタ)に通じていた。すなわち、ラーマと、ラクシュマナと、シャトルグナと、強力なバラタとである。(七) ラーマの母はカウサリヤーで、バラタの母はカイケーイーである。敵を苦しめるラクシュマナとシャトルグナは、スミトラーの息子である。(八) ジャナカはヴィデーハの王で、シーターはその娘である。王よ。トゥヴァシトリ（工巧神）が自ら彼女をラーマの愛妻と定めたのである。(九)

以上、ラーマとシーターの素姓をあなたに話した。王よ。次にラーヴァナの素姓をあなたに語ろう。(一〇) ラーヴァナの祖父は造物主(プラジャーパティ)である神（梵天）御自身である。すなわち、自存者(スヴァヤンブー)、全世界の主、創造者、大苦行者である。(一一) 梵天にはその意(こころ)から生じたプラスティヤという愛しい息子がいた。彼には牝牛に生ませたヴァイシュラヴァナ（毘沙門天）という強力な息子がいた。(一二) ところがその息子は、父をなおざりにして、祖父（梵天）に仕えていた。

父は彼のことを怒って、自分自身から自分自身を（自己の分身を）創り出した。（二三）再生者プラスティヤは怒って、ヴァイシュラヴァナに報復するために、自分の半身によって、ヴィシュラヴァスという名で再生した。（二四）

一方、祖父（梵天）は心から喜んで、ヴァイシュラヴァナに不死性、財宝の主の地位、世界守護神の地位を授けた。（二五）更に、イーシャーナとの友情、息子ナラクーバラを授け、羅刹の群に満ちたランカーを首都として与えた。（二六）

（第二百五十八章）

マールカンデーヤは語った。——

プラスティヤの怒りによりその分身として生じたヴィシュラヴァスという隠者（ムニ）は、怒りを抱いてヴァイシュラヴァナ（クベーラ）を見た。（一）一方、羅刹の王であるクベーラは、常に父を満足させるように努力した。（二）王中の王であるナラヴァーハナ（クベーラ）は、ランカーに住んでいる間、三名の羅刹女を父に侍女として与えた。（三）彼女たちは舞踊や歌に秀でていて、その偉大な聖仙を満足させようと努力した。（四）プシュポートカター、ラーカー、マーリニーという名前であったが、この美しい胴の女たちは、お互いに競い合って、最愛の女になることを望んだ。（五）偉大な聖者は彼女たちに満足して願いをかなえ、望みのままに、一人一人に世界守護神のような息子たちを与えた。（六）プシュポートカターには、羅刹王である二人の息子が生まれた。すなわち、その力にかけて地上に比べるもののない、クンバカルナと十頭者（ダシャグリーヴァ）（ラーヴァナ）とである。（七）マーリニーはヴィビーシャナという一人息子を生んだ。ラーカーには、カラとシュールパナカーという男女の双子が生まれた。（八）ヴィビーシャナは容色の点ですべてに優れていた。彼は徳高く、法（ダルマ）を守り、祭式に勤しんだ。（九）十頭者はすべての兄弟のうちの長子で、羅刹の雄牛（最高者）であった。大なる気力と活力をそなえ、偉大な勇気と勇武をそなえていた。（一〇）クンバカルナは力の点ですべてに優れていた。彼は幻術を用い、戦いに酔い、恐ろしい夜行の羅刹であった。（一一）カラは弓に秀で、バラモンを憎み、肉を食った。そしてシュールパナカーは、聖者の妨害をする、恐ろしい羅刹女であった。（一二）すべてヴェーダを知り、勇猛であり、誓戒をよく実践した。彼らは父とともに、ガンダマーダナ山で幸せに暮らしていた。（一三）

やがて、彼らは父といっしょに座っているナラヴァーハナ（クベーラ）すなわちヴァイシュラヴァナを見た。彼は最高の富貴にめぐまれていた。（一四）そこで彼らは競争心を起こし、苦行の決意をして、恐ろしい苦行によって梵天（ブラフマー）を満足させた。（一五）十頭者は風を食べ（断食して）、五火に囲まれ、よく精神統一して、千年の間一本足で立っていた。（一六）クンバカルナは地面に寝て、節食し、誓戒を守っていた。賢明なヴィビーシャナはしおれた葉のみを食べて断食に専念し、祈禱に専念した。高邁な知性を持つ彼は、あらゆる時に集中して激しい苦行を行なった。（一七—一八）またカラとシュールパナカーとは、心から喜び、苦行をしている彼らに仕え守護した。（一九）

一千年が過ぎた時、無敵の十頭者は頭を（一つずつ）切っては火中にくべた。世界の主

（梵天）は彼に満足した。（二〇）そこで梵天は自ら出かけて行って、彼らの苦行をやめさせた。彼ら全員に、一人一人、願いをかなえてやると約束して。（二一）

梵天は告げた。

「子供たちよ、私はお前たちに満足した。苦行をやめなさい。願いをかなえてやるから選ぶがよい。何でも望んだことがかなうであろう。ただし不死となることだけは除く。（二二）大望によりお前が火中にくべた頭は、望みのままに元通り胴体につくであろう。（二三）お前の体には醜さはなく、お前は望みのままの姿をとることができるであろう。戦いにおいてお前は敵たちを征服するであろう。疑問の余地はない。（二四）」

ラーヴァナは願った。

「ガンダルヴァ、神々、阿修羅、夜叉、羅刹、蛇（竜）、キンナラ、鬼霊たちに、私が敗れることがありませんように。（二五）」

梵天は告げた。

「お前があげたすべての者たちによる危険がお前にないようにしよう。人間を除いて。私はこのように定めた。（二六）」

マールカンデーヤは語った。――

そのように言われて十頭者は満足した。というのは、愚かにもこの食人鬼は人間を軽んじていたからである。（二七）

祖父（梵天）はクンバカルナにも同様に告げた。彼は長く眠ることを選んだ。彼の心は暗質に蝕まれていたのである。（二八）梵天は「そのようになるであろう」と告げてから、ヴィビーシャナに繰り返し言った。

「わが子よ、願いごとを申せ。私は満足した。（二九）」

ヴィビーシャナは言った。

「この上ない窮迫時においても、私が非法を犯そうと思いませんように。主よ。教えられずとも、ブラフマ・アストラ（梵天の武器）が私に顕現しますように。（三〇）」

梵天は告げた。

「敵を滅ぼす者よ、羅刹の胎に生まれたのに、お前の知性は非法において楽しまない。私はお前に不死性を授けよう。（三一）」

マールカンデーヤは語った。――

羅刹である十頭者は、梵天の恩寵を得てから、戦いで財宝の主（クベーラ）を破り、ランカーから追放した。（三二）聖なる財宝の主はランカーを離れ、ガンダルヴァと夜叉に従われ、羅刹やキンプルシャ（半神の種類）たちとともに、ガンダマーダナ山に入った。（三三）ラーヴァナはそこをも攻撃し、彼の天車プシュパカを奪った。ヴァイシュラヴァナ（クベーラ）は彼を呪った。

「それはお前の乗物でなくなるであろう。戦闘でお前を殺す者の乗物になるであろう。お前は目上である私を軽んじたから、すぐに亡き者になるであろう。（三四―三五）」

しかるに最高の栄光をそなえた徳性あるヴィビーシャナは、善き人々の法(ダルマ)を想起して、クベーラにつき従った。(三六) 賢明な兄である聖なる財宝の主は満足して、この弟に、夜叉と羅刹の軍隊の将軍の地位を授けた。(三七)

人間を食う羅刹と強力なピシャーチャ鬼たちは、全員集合して、十頭者を王位につけた。(三八) 十頭者は望みのままの姿をとり、空を飛行し、力に酔い痴れ、魔物や神々を攻撃してその宝物を奪った。(三九) 彼は世界の者たちに〔恐怖で〕叫びをあげさせた(ラーヴァヤ)からラーヴァナと呼ばれる。望みのままの力を発揮する十頭者は、神々に恐怖をもたらした。(四〇)

(第二百五十九章)

神々は地上に降臨する

マールカンデーヤは語った。――

それから梵仙、シッダ、神仙、王仙は、火神(アグニ)を先頭に立てて、梵天に庇護を求めた。(一)

火神は言った。

「ヴィシュラヴァスの息子である強力な十頭者は、前に、あなた様により願いをかなえられ、不死身にされました。(二) その強力な羅刹は、悪行によりすべての生類を苦しめています。そこで主よ、我々を救って下さい。他に救済者はおりませんから。(三)」

梵天は告げた。

「火神よ、神々や阿修羅(アスラ)たちは戦闘で彼を破ることはできない。しかしすぐに彼を罰するために、なすべきことはすでに手配してある。(四) 四本の腕を有するヴィシュヌが、私の要請により、そのために地上に降臨している。最高の攻撃者である彼が、この仕事を果たすであろう。(五)」

マールカンデーヤは語った。――

それから祖父(ピターマハ)(梵天)は彼らの前で次のように告げた。

「すべての神々の群とともに、地上に生まれなさい。(六) すべからくヴィシュヌを援助する者として、欲するがままの姿と力をそなえた、熊や猿たちの息子たちとして生まれなさい。(七)」

そこですべての神やガンダルヴァや悪魔たちは、すぐに、それぞれがいかなる役割をとって地上に降臨するかを相談した(異本の読みによる)。(八) 願いをかなえる神(梵天)は、彼らの面前で、神々の目的が成就するように、ドゥンドゥビーというガンダルヴァ女に命じた。(九) ドゥンドゥビーは梵天の言葉を聞いて、人間界において、マンタラーという傴僂の女として生まれた。(一〇) インドラをはじめとするすべての最高の神々は、猿や熊の最高の雌たちの息子として生まれた。彼らはすべて、名声と力において父親に等しい者たちだった。(一一) 彼らは山々の峰を砕き、シャーラ樹や棕櫚(ターラ)や岩石を武器とし、すべて金剛のように堅固で、すべて

洪水のような力を持っていた。（二二）彼らはみな望みのままの力を発揮し、戦闘に長けていた。一万頭の象に等しい力を持ち、その迅速さは疾風のようであった。ある者たちは好きな所に住み、他の者たちは森に住んだ。（二三）

世界を繁栄させる神は、このようにすべてを設定して、マンタラーになすべきことを一つ一つ教えた。（二四）彼女はその言葉を理解して、思考のように速く、その通りに実行した。すなわち、あちこちに行って、敵意をかきたてることに専念した。（二五）（第二百六十章）

ラーヴァナ、シーターを奪う

ユディシティラは言った。

「あなたはラーマなど一人一人の素姓について述べた。バラモンよ、彼らの亡命の原因を聞きたいものです。お話し下さい。（一）バラモンよ、ダシャラタの息子である勇猛な兄弟、ラーマとラクシュマナ、そして誉れあるミティラーの姫は、どうして森に追放されたか。（二）」

マールカンデーヤは語った。——

ダシャラタ王は祭式に勤しみ、法（ダルマ）に専念し、長老に仕えていた。彼は息子たちが生まれて、非常に喜んだ。（三）威力に満ちた息子たちは次第に成長し、諸ヴェーダとその秘説と弓のヴェーダ（兵学）の奥義に達した。（四）彼らは梵行（学生期）を修了し、妻を娶った。ダシャラタ

は喜び、幸福であった。（五）彼らのうちでラーマが長男であった。彼は臣民たちを魅了した。知性あり、魅力的であるので、父の心を満足させた。（六）

やがて賢明な父は、自分が年をとったと考え、大臣たちや法を知る司祭たちと協議した。（七）彼ら最高の顧問たちは、すべて、ラーマを皇太子に即位させるべきであると考えた。（八）ラーマは赤い眼をし、太い腕を持ち、発情した〔強い〕象のように歩み、長い腕を持ち、大きな胸をし、黒くてカールした髪を有する。（九）栄光に輝き、勇猛で、力にかけてインドラに劣らない。一切の法に通達し、知恵にかけてはブリハスパティに等しい。（一〇）すべての臣民は彼を愛している。彼はすべての学問に通達し、感官を制御し、敵の眼にも魅力的である。（一一）彼は悪人を罰し、法に従う人々を守護する。沈着であり、不可侵であり、勝利者であり、征服されざる者である。（一二）〔王妃〕カウサリヤーの喜びを増すその息子を見て、ダシャラタ王は最高の喜びを味わった。（一三）

威光に満ちた強力な王は、ラーマの諸々の美質について考えて、喜んで宮廷祭僧に告げた。

「バラモンよ、今夜、プシャ星が吉祥の結合になるであろう。私のために必要な品を集め、ラーマを呼んで来て欲しい。（一四—一五）」

この王の言葉を聞いて、マンタラーはカイケーイー（別の王妃）のところに行き、時機をとらえて言った。（一六）

「カイケーイー様、今日、王はあなたに大へん不幸なことを言っておられました。不幸な方よ、恐ろしい毒蛇が怒ってあなたを咬みます。（一七）まことにカウサリヤーは幸運です。彼

女の息子が即位式を受けるでしょう。息子が王位につかないあなたに、どうして幸運がありましょう。(一八)」
王妃はその言葉を聞くと、一切の装身具で身を飾り、祭壇のようにくびれた胴をして、最高に美しい姿をとった。(一九)美しい微笑の彼女は、人のいないところでほほえみを浮べて夫に近づき、愛情を表わすかのように甘い言葉を述べた。(二〇)
「約束に忠実な王様、あなたは一つの願いをかなえると約束しました。それを果たして下さい。肩の荷をおろして下さい。(二一)」
王は言った。
「おお、お前の願いをかなえるであろう。望みのものを受け取れ。今日、殺されるべきでない者でも、誰でも殺してやる。誰か殺されるべき者でも釈放してやる。(二二)今日、誰に財物を与えればよいか。あるいは、誰の財物を没収すればよいか。バラモンの財産を除き、この世の財産は何でも私のものだ。(二三)」
マールカンデーヤは語った。――
王妃はその言葉を聞くと、王を抱きしめ、自分の力を知って、次のように告げた。(二四)
「ラーマのために準備している即位灌頂式を、バラタ（彼女の息子）に受けさせて下さい。ラーマは森に行かせて下さい。(二五)」
その不快で恐怖をもたらす言葉を聞いて、王は苦悩し、何も言わなかった。(二六)それか

ら、強力なラーマは父がそのように言われたことを聞いて、徳性ある彼は、「父が約束を守るように」と考えて森に出発した。(二七)栄光あるラクシュマナ（ラーマの弟）は弓を持って彼に従った。ジャナカの娘でありヴィデーハの姫である、彼の妻シーターも、彼に従った。(二八)ラーマが森に行った時、ダシャラタ王は生者必滅の理に従った。(二九)王妃カイケーイーは、ラーマが去り王が逝去したのを知ると、バラタを呼んで次のように言った。(三〇)
「ダシャラタ王は天界に逝き、ラーマとラクシュマナは森にいる。広大で平安で棘（険危）のない王国を受け取りなさい。(三一)」
徳性あるバラタは彼女に言った。
「ああ、あなたは酷いことをした。財産にがつがつし、夫を殺してこの一族を滅亡させるとは。(三二)一族の面汚しの母上。私の頭上に不名誉をもたらして、あなたは望みをとげなさい。」
そう言ってバラタは号泣した。(三三)それから彼は、すべての臣民の前で身の潔白を証明して、引き返させようと望んで兄のラーマの後を追った。(三四)苦悩に満ちた彼は、カウサリヤーとスミトラー（ラクシュマナの母）とカイケーイーを先頭に立てて、シャトルグナとともに車で出発した。(三五)ヴァシシタとヴァーマデーヴァ、その他の何千というバラモン、市民と地方民たちもいっしょであった。ラーマを連れもどしたいと心から望んでいた。(三六)彼はラクシュマナとともにチトラクータ山にいるラーマに会った。ラーマは弓を持ち、苦行者の装束をしていた。(三七)しかし、父の言葉を実行するラーマは、バラタを帰らせた。バラタは

〔首都でなく〕ナンディ村で国政を担ったが、ラーマのサンダルを〔玉座に置いて〕敬った。(三八) 一方ラーマは、市民や地方民がまたもどって来ることを恐れて、シャラバンガの隠棲所の方に、大森林に入って行った。(三九) 彼はシャラバンガに敬意を表してから、ダンダカの森に入り、心地よいゴーダーヴァリー川に行って滞在した。(四〇)

ラーマはそこに住んでいる間、シュールパナカー（ラーヴァナの妹の羅刹女）が原因で、ジャナスターナに住むカラ（ラーヴァナの弟）と激しく対立した。(四一) 苦行者たちを守るために、ラーマは地上にいる一万四千の羅刹を殺した。(四二) 英邁なラーマは非常に強力なドゥーシャナとカラを殺して、神聖な森を再び平安にした。(四三)

その羅刹たちが殺された時、鼻と唇を切られたシュールパナカーは、兄（ラーヴァナ）の居城であるランカーに行った。(四四) そしてその羅刹女は、苦痛で気を失いつつもラーヴァナのもとに行き、乾いた血がこびりついた顔をして、兄の両足のところで倒れこんだ。(四五) このようにひどい有様にされた彼女を見て、ラーヴァナは怒りで我を忘れ、歯ぎしりして、憤慨して席から飛び上がった。(四六) 彼は自分の大臣たちを去らせて、人のいないところで彼女にたずねた。

「妹よ、何者が私を無視し軽んじて、お前をこのようにしたのか。(四七) 誰が鋭い槍を得て、全身でそれを享受するのか。誰が頭に火をのせて、安心して快く眠っているのか。(四八) 誰が最高に恐ろしい毒蛇に足で触れるのか。誰が立派なたてがみのある獅子の牙に触れて立っているのか。(四九)」

彼がそう言っている時、彼の体中の穴から、燃え上がる火焔が噴き出した。夜に燃える樹木の穴から火焔が噴き出すように。(五〇)

妹は彼にすべてを報告した。ラーマの勇武、カラとドゥーシャナ及びその他の羅刹たちの敗退を。(五一) 羅刹王はなすべきことを決定し、自分の妹を慰めてから、その都の統治を人に託し、空高く飛び上がった。(五二) 彼はトリクータ山とカーラ山を飛び越え、海獣（マカラ）が住む深い海を眺めた。(五三) ラーヴァナはそれを越えて、ゴーカルナ山に行った。そこは槍を持つ偉大な神（シヴァ）が愛する揺るぎなき場所である。(五四) そこでラーヴァナは、以前彼の大臣だったマーリーチャを訪れた。彼はラーマを恐れて苦行者となっていたのである。(五五)

（第二百六十一章）

マールカンデーヤは語った。――

その時、マーリーチャはラーヴァナが来たのを見ると、あわてて、果実や根などを出してもてなした。(一) ラーヴァナが座って休息すると、その羅刹も続いて座った。そして言葉をわきまえた彼は、雄弁なラーヴァナに恭しく言った。(二)

「お顔の色がいつもと違うようですが、あなた様の都では恙無いですか。臣民はすべて、前と同じように、あなた様に忠実ですか。(三) 羅刹王よ、ここに来られた御用は何ですか。いかなる難事でも、すでになされたも同然と御承知置き下さい。(四)」

ラーヴァナはラーマの行為をすべて彼に告げた。しかしマーリーチャは、それを聞くと、手短にラーヴァナに言った。(五)

「ラーマを攻撃することはおやめ下さい。私は彼の力を知っていますから。あの偉大な男の矢の激しさに誰が耐えられましょうか。(六)あの人中の雄牛が、まさに私が隠棲した原因なのです。いかなる悪党が、あなたの破滅の始まりとなるようなことを述べたのですか。(七)」

するとラーヴァナは怒り、彼をおどしながら言った。

「吾輩の言うことをきかないなら、お前は必ず死ぬことになるぞ。(八)」

マーリーチャは考えた。

「どうしても死ななければならぬなら、優れた人の手にかかって死ぬ方がよい。ラーヴァナの命令に従おう。(九)」

そこでマーリーチャは、羅刹王に答えた。

「どんなお手伝いをすればよいのですか。きっとやります。(一〇)」

ラーヴァナは彼に告げた。

「宝石の角を持ち、宝石をちりばめた体毛をした鹿となり、行ってシーターを惑わせろ。(一一)シーターはお前を見ると、必ずやラーマにせっつくだろう。ラーマが出かければ、シーターは手中に帰するであろう。(一二)私は彼女を強奪するであろう。そうすればあの愚か者は妻と別れて、生きていられないだろう。このことで私の助力をしてくれ。(一三)」

そう言われて、マーリーチャは自分に水を手向け、非常に悩んで、前を行くラーヴァナに

つき従った。(一四)そしてその汚れなき行為のラーマの隠棲所に行き、両者は前もって計画した通りにすべてを実行した。(一五)ラーヴァナは鉢と三叉の槍を持つ剃髪の修行者になり、マーリーチャは鹿になってかの地に行った。(一六)鹿の姿をとったマーリーチャは、シーターにその姿を見せた。シーターは運命にかりたてられ、鹿が欲しいとラーマに懇願した。(一七)

ラーマは彼女を喜ばせようとして、急いで弓をとり、彼女の守護をラクシュマナに託し、鹿を追いかけて行った。(一八)ラーマは弓を持ち、箙(えびら)を着け、刀を持ち、弓籠手(ゆごて)と弓懸(ゆがけ)をつけ、ルドラ(シヴァ)が星鹿(ターラームリガ)(造物主が鹿の姿をとったもの)を追うように、その鹿を追いかけた。(一九)その羅刹は姿を消したかと思うとまた姿を現わしてラーマを非常に遠くにおびき寄せた。しかしラーマは、ついに彼の正体を知った。(二〇)閃きを有するラーマは、彼が羅刹であると知り、的を外さぬ矢をとって、鹿の姿をした彼を射た。(二一)彼はラーマの矢に射られた時、ラーマの声をまねて、「ああシーターよ、ラクシュマナよ」と苦しそうな声で叫んだ。(二二)シーターは彼のその悲しい声を聞いた。彼女は声のした方に走って行こうとしたが、ラクシュマナが言った。(二三)

「臆病な女よ、心配する必要はない。誰がラーマにかなうものか。美しい微笑の女よ、すぐにラーマが帰るのを見るであろう。(二四)」

このように言われたが、彼女は嘆き、女の性(さが)に負けて、清らかな行為で飾られた義弟のことを疑った。(二五)その夫に忠実な貞女は、彼に荒々しく話し始めた。

「愚か者、あなたが心で望んでいるようになるはずはない。（二六）それくらいなら、私は刀をとって自殺する。山の峰から飛び下りてやる。火の中に入ってやる。（二七）決して夫であるラーマを捨てて、卑しいあなたに仕えはしない。雌の虎がジャッカルに仕えないように。（二八）」

このような言葉を聞いて、ラーマを愛する善行のラクシュマナは、耳を閉(ふさ)いで、ラーマのいる方に出発した。彼は弓を持って、ラーマの足跡をたどって行った。（二九）

その間に、羅刹のラーヴァナが姿を現わした。彼は邪悪であるのに善良そうな姿をしていた。灰におおわれた火のように。非の打ち所のないシーターをさらおうとして、彼は修行者の身なりをしていた。（三〇）法(ダルマ)を知るシーターは、彼が来たのを見て、木の実や根の食物を出してもてなした。（三一）それらすべてを軽蔑して、羅刹の雄牛は自分の正体を現わし、シーターを懐柔しようとして次のように言った。（三二）

「シーターよ、私は有名な羅刹王で、ラーヴァナという者だ。ランカーという名の私の美しい都は、海の向こう岸にある。（三三）あなたはそこで、私とともに、美しい女たちの間で輝くがよい。美しい尻の女よ。私の妻になれ。苦行者のラーマを捨てなさい。（三四）」

美しい尻のシーターは、このような言葉を聞くと両耳を閉ぎ、「そんなことは言わないで」と言った。（三五）

「星々とともに天が落ちようと、大地が粉々になろうと、火が冷くなろうと、私は決してラーマを捨てない。（三六）どうして雌象が、こめかみが裂け〔て液を流す〕森に住む最高の巨象に仕えてから、豚に触れようか。（三七）マドゥーカの花の酒や蜜酒を飲んでから、いかなる女が、まずいナツメの汁を欲しがるか。（三八）」

彼女は彼にそう告げると、隠棲所の中に入った。ラーヴァナはその美しい尻の女の後を追って、彼女を引き止めた。（三九）そして彼は、荒々しい声で彼女をおどし、失神した彼女の髪をつかみ、空に飛び上がった。（四〇）その哀れな女がさらわれて、「ラーマ、ラーマ」と泣いているのを、山に住む禿鷲のジャターユが見た。（四一）（第二百六十二章）

マールカンデーヤは語った。――

強力な禿鷲の王ジャターユはアルナ（ガルダの兄）の息子で、サンパーティの弟であり、ダシャラタの友であった。（一）その時、彼は友の義理の娘であるシーターがラーヴァナに抱きかかえられているのを見た。その鳥は怒って、羅刹王ラーヴァナに襲いかかった。（二）そこで禿鷲は彼に言った。

「ミティラーの姫を離せ、離せ。私が生きているのに、どうしてさらうのか。羅刹よ。その婦人を離さなければ、生きて私から逃れられぬぞ。（三）」

そう言って彼はその羅刹王を爪でひどく引き裂いた。翼とくちばしの打撃により何度も傷つけられて、ラーヴァナは多くの血を流した。山が水流によって赤色〔の鉱物〕を流すように。（四）ラーマに好意を寄せる禿鷲に攻撃されている間に、彼は刀をとり、その鳥の両翼を

切った。(五)雲の切れた山頂のような禿鷲の王を殺して、羅刹は、シーターを抱きかかえて、上方に向かって行った。(六)

シーターは一団の隠棲所や湖や川を見るたびに、自分の装身具を落とした。(七)ある山の高原に、彼女は雄牛のような五匹の猿を見た。賢明な彼女は、そこに神々しい大衣を投げた。(八)その美しい黄色の衣は風にひらめき、五匹の猿王の真中に落ちた。それは雲の中の稲妻のようだった。(九)このようにシーターがさらわれた時、英邁なるラーマは大鹿を殺して帰る途中、弟のラクシュマナに出会った。(一〇)弟を見てラーマは、

「どうして羅刹の住む森にシーターを残して来たのか」

と非難した。(一一)そして、鹿の姿をとった羅刹におびき寄せられたことや、弟がやってきたことを考えて、彼はひどく心配した。(一二)ラーマは弟を叱りながら、急いで駆け寄ってたずねた。

「シーターは生きているか。あるいはまさか……。ラクシュマナよ。(一三)」

ラクシュマナはシーターの言ったことを彼にすべて告げた。シーターが言ってはならない不適切な言葉を言ったことを。(一四)ラーマは燃える心をして隠棲所に向かって走って行った。すると彼は、山のように横たわっている禿鷲を見た。(一五)ラーマは羅刹だと思い、強力な弓を引き絞り、ラクシュマナとともに彼に駆け寄った。(一六)威光ある彼は、ラーマとラクシュマナの両者に告げた。

「汝らに幸あれ。私は禿鷲の王で、ダシャラタの友人である。(一七)」

二人は彼の言葉を聞くと、すばらしい弓を収めて、「我々の父の名前を告げる彼は何者か」とたずねた。(一八)そして二人は両翼を切られた禿鷲を見た。禿鷲は、シーターを救おうとしてラーヴァナにやられたことを告げた。(一九)ラーマは禿鷲に、「ラーヴァナはどちらの方角に行ったか」とたずねた。禿鷲は頭を振って教え、そして死んだ。(二〇)ラーマはその彼のしぐさから南方だと知った。彼は父の友に敬意を表し、葬式を執り行なった。(二一)

隠棲所が空っぽになり、座席や瓶が散らばり、水瓶が粉々になって、ジャッカルの群に満ちているのを見て、勇猛なラーマ兄弟は悲嘆に暮れ、シーターがさらわれたことで苦しみ、ダンダカの森の南方に行った。(二二―二三)ラーマはラクシュマナとともに、その大森林で、いたるところ走りまわっている鹿の群を見た。そして、燃え盛る森火事の音のような、種々の生き物の恐ろしい声を〔聞いた〕。(二四)すぐに彼らは、恐ろしい姿のカバンダ（「胴体」という意）という羅刹を見た。彼は黒雲か山のようで、シャーラ樹のような肩をし、大きな腕を持っていた。胸に大きな眼を持ち、大きな腹と口をしていた。(二五)たまたまその羅刹はラクシュマナの手を握った。彼はたちまち悲嘆に暮れた。(二六)羅刹が彼を口の方に引っぱると、彼はラーマを見て嘆いてラーマに言った。

「私のこの有様を見てくれ。(二七)シーターはさらわれ、私はこのような災難にあった。あなたは王国を失い、父上は死んだ。(二八)あなたがシーターとともにコーサラに帰り、先祖伝来の地上の王位につくのを、私は見ることができない。(二九)クシャ草や炒り米やシャミーの木切れを用いてあなたが即位灌頂式を受ける時、雲の断片をともなう月のようなあなた

の顔を見られる人々は幸せである。(三〇)」
叡知あるラクシュマナはこのように様々に嘆いた。しかしラーマは、このような火急の際にも動揺することなく、彼に言った。(三一)
「人中の虎よ、嘆くことはない。私がいるからには、奴は何ものでもない。彼の右腕を切れ。私は左腕を切る。(三二)」
ラーマはそう言って、非常に鋭い刀で、胡麻の茎を切るように、彼の片腕を切り落とした。(三三)強力なラクシュマナは、兄のラーマが立っているのを見て、彼の右腕を刀で撃った。(三四)そしてラクシュマナは更にその羅刹の脇腹を撃ったので、巨大なカバンダは息絶えて地面に倒れた。(三五)すると神々しい姿の男がその体から抜け出て、天空にとどまって、天の太陽のように輝いているのが見えた。(三六)雄弁なラーマは彼にたずねた。
「あなたは誰か。おたずねする。よろしければ答えて下さい。この奇蹟は何か。すばらしいことと思われます。(三七)」
彼は答えた。
「王よ、私はガンダルヴァのヴィシュヴァーヴァスです。あるバラモンの呪いにより、羅刹の胎内に宿ったのです。(三八)シーターはランカーに住む羅刹王ラーヴァナにさらわれました。スグリーヴァのところに行きなさい。彼があなたに協力するでしょう。(三九)リシャムーカ山の近くに、パンパーという湖があります。それは吉祥の水をたたえ、そこにはハンサ鳥やカーランダヴァ鳥が住んでいます。(四〇)スグリーヴァは四人の大臣たちとともに、そ

こに住んでいます。彼は黄金の首輪をつけた猿王ヴァーリンの弟です。(四一)私の言えることはこれだけです。あなたはジャーナキー(シーター)に会うでしょう。きっと彼はラーヴァナの住処を知っています。(四二)」
と告げて、その輝きに満ちた天人は消えた。勇猛なラーマとラクシュマナは二人とも驚嘆した。(四三)　(第二百六十三章)

ラーヴァナの横恋慕

マールカンデーヤは語った。——
シーターを奪われて苦悩するラーマは、そこから遠からぬ所にある、種々の蓮が咲くパンパー湖に着いた。(一)その森で、甘露のような香りのする快い涼風に吹かれて、彼は愛しい妻のことを思った。(二)王中の王である彼は、そこで妻を思い出して、愛神(カーマ)の矢に苦しんで悲嘆に暮れた。その時、ラクシュマナは彼に言った。(三)
「誇りを与える人よ、あなたにそのような感情が触れることはふさわしくない。自己を制し老人の正しい生活を守る人に、病気が触れることがふさわしくないように。(四)あなたはシーターとラーヴァナの消息を知った。あなたは勇武と知性により彼女を取りもどしなさい。(五)山中にいる猿の雄牛スグリーヴァのところに行きましょう。私が弟子で臣下で協力者であるのだから、安心しなさい。(六)」

このようにラクシュマナに色々と言われて、ラーマはその本性にもどり、なすべきことに専念した。(七) 勇猛な兄弟は、パンパーの水を用い（沐浴し）、また祖霊たちを満足させ（供養し）てから出発した。(八)

二人の勇士は、根と果実に富むリシャムーカ山に行き、山頂で五匹の猿に会った。(九) スグリーヴァは二人のもとに大臣である賢明な猿を遣わした。それがハヌーマットであり、山のように立っていた。(一〇) 二人はまず彼と話してから、スグリーヴァのところに行った。それからラーマは猿の王と友情を結んだ。(一一) ラーマが猿たちに用向きを伝えた時、彼らは、シーターがさらわれる際に投げた例の衣を彼に見せた。(一二) その証拠の品を得て、ラーマは自ら、猿王スグリーヴァを、地上における猿の帝王の位につけてやった。(一三) そしてラーマは、戦いにおいてヴァーリンを殺すことを約束した。スグリーヴァも、シーターを取りもどすことを約した。(一四)

彼らは以上のように誓って約定を交わし、相互に信頼し合った。そして一同はキシュキンダーに行き、戦闘を望んでとどまっていた。(一五) スグリーヴァはキシュキンダーに着くと、激流のような音をたてて吼えた。ヴァーリンは彼の叫びに我慢できなかったが、ターラーが夫を制止した。(一六)

「強力な猿スグリーヴァが吼えている様子からして、彼は拠り所を得たと思います。出て行ってはなりませぬ。(一七)」

黄金の首輪をつけた、夫である猿王ヴァーリンは、月のような顔をしたターラーに、雄弁

に告げた。(一八)

「お前はすべての生き物の声を理解する。よく考えて、俺の出来損いの弟がどんな庇護者を得たか見てみよ。(一九)」

月のように輝く、叡知あるターラーは、少しの間考えてから、次のように夫に告げた。

「猿の王よ、すべてお聞きなさい。(二〇) ダシャラタの息子である、気力に満ちたラーマが妻を奪われました。その勇士はスグリーヴァと攻守同盟を結びました。(二一) ラクシュマナという彼の弟は、スミトラーの息子であり、強力で無敵で叡知あり、目的の成就に努力しています。(二二) マインダ、ドゥヴィヴィダ、風神の息子ハヌーマット、熊の王ジャーンバヴァットが、スグリーヴァの大臣としてひかえています。(二三) 彼らはすべて偉大で、知性あり、強力であり、ラーマの力を拠り所として、あなたを滅ぼすことができます。(二四)」

猿の王は彼のためを思う彼女の言葉を無視し、嫉妬して、彼がスグリーヴァに心を寄せているのではないかと疑った。(二五) 彼はターラーに乱暴な言葉を残し、洞窟の入口から外に出た。そして、マーリヤヴァット山のそばにいるスグリーヴァに告げた。(二六)

「愚か者、お前は何度も俺にうち負かされた。命を惜しむ（または、「命のように愛しい」）お前は、親族だからといって許されたのだ。どうして再び死に急ぐのか。(二七)」

そう言われて、勇猛なスグリーヴァは兄に理にかなった言葉を述べた。ラーマに時が来たことを告げ知らせるかのように。(二八)

「王よ、あなたに妻を奪われ、王国を奪われた私にとって、どうして命が大事であろうか、

ということで来たのだぞ。（二九）」

このように様々に言い合いをしてから、ヴァーリンとスグリーヴァは戦闘に入り、シャーラ樹や棕櫚や岩石を武器として攻撃し合った。（三〇）両者はお互いに撃ち合い、地面に倒れ、様々に跳び上がり、拳でなぐり合った。（三一）両雄は血にまみれ、爪や歯で傷つき、開花したキンシュカ樹のようであった。（三二）戦闘において両者のうちのいずれが勝るかわからなかった。その時ハヌーマットは、スグリーヴァの首に花輪をかけた。（三三）その勇士は首にかけられた花輪により、雲に取り巻かれた栄光ある大山マラヤのように輝いた。（三四）

大弓を持つラーマは、スグリーヴァが標識をつけたのを見て、ヴァーリンを標的として最上の弓を引き絞った。（三五）その弓の弦の音は機械の音のようであった。ヴァーリンは矢で心臓を射られて驚愕した。（三六）彼は急所を射貫かれ、口から血を吐き、近くにラクシュマナと立っているラーマを見た。（三七）ラーマを非難しながら彼は意識を失い地面に倒れた。ターラーは落ちた星々の主（月）のように大地に横たわっている彼を見た。（三八）ヴァーリンが殺されたので、スグリーヴァはキシュキンダーと、夫を失った月のような顔のターラーとを取りもどした。（三九）叡知あるラーマは四カ月の間、美しいマーリヤヴァットの山頂で、スグリーヴァに仕えられて滞在した。（四〇）

一方ラーヴァナは、ランカーの都に行った後、愛欲にかられて、シーターをナンダナ園のような邸宅に住まわせた。それはアショーカの森の近くにあり、苦行者の隠棲所のような場所であった。（四一）そこでシーターは、夫を思い出して身も細り、苦行者の身なりをし、断

食と苦行を習いとしていた。その大きい眼の女は、木の実や根を食べ、苦しい日々を過ごしていた。（四二）羅刹王は羅刹女たちにそこを守るように命じた。彼女たちは投槍、刀、槍、斧、棍棒、松明を持って警固した。（四三）二つ目の女、三つ目の女、額に眼のある女、長い舌を持つ女、舌のない女、三つの乳房を持つ女、一本足の女、三本の弁髪を持つ女（トリジャター）、一つ目の女がいた。（四四）このような姿をし、あるいはその他の姿をして、燃える眼を持ち、駱駝のように強い髪をした羅刹女たちが、昼も夜も怠ることなくシーターを取り巻いて座っていた。（四五）恐ろしい声をしたおぞましいピシャーチャ鬼女たちが、その切れ長の眼の女を、乱暴な調子で絶えずおどした。（四六）

「この女を食ってやろう。細切れに引き裂いてやろう。こいつは我々の御主人を軽蔑してここで暮らしているのだから。（四七）」

繰り返しこのようにおどす鬼女たちを恐れ、夫のことを想って悲嘆に暮れて、シーターはため息をついて彼女たちに言った。（四八）

「あなた方、すぐに私を食べなさい。あの蓮のような眼をした、黒い巻毛の夫がいないのなら、私にはもう生きる望みもないわ。（四九）命よりも愛しい方がいないのだから、私は断食して身体を枯らしましょうか。棕櫚にいる（冬眠中の）蛇のように。（五〇）ラーマを除いて他の男になびくはずはありません。私のこの誓いを知りなさい。そしてその後のことは思うようにしなさい。（五一）」

彼女の言葉を聞くと、荒々しい声の羅刹女たちは、一部始終を語ろうと羅刹王のもとに行

った。(五二)

みなが去った時、トリジャター（三本の弁髪を持つ女）という名の、法（ダルマ）を知り優しく話す羅刹女が、シーターを慰めた。(五三)

「シーター様、申し上げたいことがあります。友よ、私を信用して下さい。美しい腿の女よ、恐れることはありません。私の言うことをお聞き下さい。(五四)アヴィンディヤという名の、聡明で年老いた羅刹の雄牛がおります。彼はラーマに有益なことを求め、あなたのためを思って私に言いました。(五五)

『シーター様を励まし満足させて、私からのことづてを申し上げてもらいたい。あなたの夫である強力なラーマは、ラクシュマナとともにお元気である。(五六)栄光あるラーマは、インドラのような威光を持つ猿王と友情を結び、あなたを救出する準備を整えた。(五七)』

怯える女（ひと）よ、世界中の者に非難されるラーヴァナを恐れる必要はありません。非の打ち所のない方よ、あなたはナラクーバラ（クベーラの息子）の呪詛により守られています。(五八)というのは、あの悪党はかつて彼の妻のランバーを凌辱して呪われました。――お前は官能の誘惑に負けた時も、抵抗できない女を犯すことができないと。(五九)あなたの賢明な夫はスグリーヴァに守られて、ラクシュマナとともに速やかにやって来て、ここからあなたを救出するでしょう。(六〇)私は非常に恐ろしくぞっとする光景の夢を見ました。プラスティヤの家系を滅ぼすあの愚か者の破滅を告げる夢です。(六一)まことにあの邪悪で卑しい行ないをする恐ろしい羅刹は、その本性から、その誤った行ないにより、すべての者の恐怖を増大させてい

ます。(六二)彼はカーラ（時間、破壊神）のために正気を失い、すべての神々に敵対しています。私は夢の中で彼の滅亡の徴候を見たのです。(六三)

ラーヴァナは油を浴び、髪を剃り、泥につかり、何度も驢馬につながれた車の上で踊るようにして立っていました。(六四)そしてクンバカルナたちが、裸で髪を剃り、赤い花輪と香油をつけ、南の方角に引かれて行くのです。(六五)ヴィビーシャナだけが、白い傘（王者の標）をともない、ターバンを巻き、白い花輪で飾られ、白山（シュヴェータパルヴァタ）に登っていました。(六六)そして彼の四名の大臣は、白い花輪と香油をつけ、白山に登り、その大なる恐怖からまぬかれていました。(六七)大地と海とは、ラーマの武器に包まれていました。あなたの夫は全地上をその名声で満たすでしょう。(六八)私はラクシュマナが骨の山に登っているのを見ました。彼は蜜と乳粥を食べ、すべての方角を眺めていました。(六九)私は何度もあなたが泣いているのを見ました。あなたは血で濡れた体をして、虎に守られ、北方に進んでいました。(七〇)シーター様、あなたはすぐに夫と再会し、久しからずしてラーマとその弟とともに喜びを味わうことでしょう。(七一)」

仔鹿のような眼をした若い女は、トリジャターの言葉を聞くと、夫と再会する希望を抱くようになった。(七二)恐ろしくおぞましいピシャーチャ鬼女たちがもどって来て見ると、シーターは以前と同じようにトリジャターと座っていた。(七三)

（第二百六十四章）

マールカンデーヤは語った。――

夫に貞節なシーターは、夫のことを想って悲嘆に暮れ、汚れた衣を着け、一つの宝石だけで身を飾り、泣いていた。(一) 彼女は羅刹女たちにつき従われ、平石の上に座っていた。愛神の矢に苦しむラーヴァナは、彼女を見て近づいた。(二) 戦いにおいては、神や悪魔やガンダルヴァや夜叉やキンプルシャたちに敗れることがない彼も、愛神に惑わされて、アショーカの森へ行ったのである。(三) 彼は神々しい衣服を着、富貴に満ち、輝かしい宝石の耳環をつけ、きらびやかな花輪と冠をつけ、肉体を持った春のようであった。(四) 彼は念入りに飾りつけ、如意樹(天上の樹)のようであったが、いくら飾りつけても、墓地の聖樹(アシュヴァッタ、またはバニヤン)のように恐ろしかった。(五)

その羅刹は、細い胴をした彼女のそばで、ローヒニー星に近づいた土星のように見えた。(六) 彼は愛神の矢に撃たれ、美しい尻をして鹿のようにおびえているその若い女に挨拶して、次のように言った。(七)

「シーターよ、お前は今まで夫に十分に尽くして来た。しなやかな身体の女よ、今は俺に好意をかけてくれ。化粧をしろ。(八) 美しい尻の女よ、高価な装飾と衣裳をつけて、俺を愛してくれ。美しい顔色の女よ、俺のすべての妻たちのうちで最上の妻となれ。(九) 俺には神々の娘たち、王や聖仙の女たち、ダーナヴァやダイティヤ(類魔)の娘たちがいる。(一〇) 一億四千万のピシャーチャ鬼たちが俺の命令に従う。人を食う恐ろしい所業の羅刹たちがその二倍、それから夜叉たちがその三倍いて、俺の命令を行なう。俺の兄の財宝の主(クベーラ)に従う夜叉はごくわずかしかいない。(一一―一二) 美しい女よ、俺の兄の場合と同様に、酒宴をしている俺に、いつもガンダルヴァや天女たちがかしずく。美しい腿の女よ。(一三)

俺は梵仙である聖者ヴィシュラヴァス自身の息子でもある。第五の世界守護神になるという評判も広まっている。(一四) 俺は神々の主(インドラ)のものと同じような、神的な種々の食物、種々の飲物をとっている。美しい女よ。(一五) 森での生活のような難儀なことはやめろ。美しい尻の女よ、マンドーダリーのように俺の妻になれ。(一六)」

彼にそう言われて、美しい顔のシーターは身を引いて、心の中で彼を草のように取るに足らぬと思い、その羅刹に答えた。(一七) その美しい腿をした若い女は、その隆起した二つの乳房を、絶えず不吉な涙で濡らしていた。夫に貞節なシーターはその卑しい男に告げた。(一八)

「羅刹の王よ、不幸な私は、そのようなあなたの言葉は何度も聞きました。悲しくなってしまいます。(一九) 幸せを楽しむ者よ、どうかお願いですから考えを改めて下さい。私は他人の妻で、いつも夫に貞節であり、ものにすることはできません。(二〇) 哀れな人間の女である私は、あなたにふさわしい妻ではありません。それに抵抗できない女を暴行すれば、あなたはいかなる喜びを得るでしょうか。(二一) あなたの父は梵天から生まれた、造物主にも等しいバラモンです。世界守護神に等しいあなたが、どうして法を守らないのですか。(二二) あなたの兄は王中の王であり、偉大な主の友である財宝の主であるというのに、どうしてあなたは恥ずかしくないのですか。(二三)」

そう言って、しなやかな身体のシーターは、両の乳房をふるわせ、衣で喉と顔をおおって泣いた。(二四) その泣いている美女の頭の、よく編んだ長い弁髪は、漆黒で艶があり、雌の黒蛇のようであった。(二五)

ラーヴァナはシーターの辛辣な言葉を聞くと、拒絶されたにもかかわらず、愚かにも再び言った。(二六)

「シーターよ、愛の神が俺の身体をひどく苦しめる。お前は美しい尻をし、魅力的に笑う。しかし俺は厭がるお前には近づかない。(二七) ラーマは人間で俺様の食物だが、お前は今もなおそのラーマを愛しているから、俺は何もできない。(二八)」

羅刹の群の王は、非の打ち所のない体をした彼女にそう告げて、その場で姿を消して、望むがままの場所に行った。(二九) シーターは羅刹女たちに囲まれ、悲しみにやつれ、トリジャターに仕えられて、その場にとどまっていた。(三〇)

(第二百六十五章)

ハヌーマット、シーターを発見する

マールカンデーヤは語った。――

ラーマはラクシュマナとともに、スグリーヴァに守られて、マーリヤヴァット山の頂に滞在している間、澄みきった空を眺めた。(一) 勇猛な彼は、澄んだ空の中に、惑星、星宿、星々に従われた汚れない月を見た。(二) 涼風が睡蓮(クムダ)や青蓮(ウトパラ)や紅蓮(パドマ)の香を運び、山にいる彼を

突然覚醒させた。(三) 彼は悩んで、朝、勇士ラクシュマナに告げた。その徳性ある男は、羅刹の住処に幽閉されているシーターのことを思い出したのである。(四)

「ラクシュマナよ、行ってキシュキンダーにいる猿の王を見て来てくれ。あの恩知らずは、下品な道に酔い痴れ、自分の利益に夢中だ。(五) 私はあの一族の面汚しである愚か者を王位につけたのだ。あらゆる種類の猿や熊たちがその彼に忠実に仕えている。(六) 勇士ラクシュマナよ、あれのために、私はお前とともに、キシュキンダーの森でヴァーリンを殺したのだ。(七) あいつは恩知らずで、地上で最低の猿だと思う。ラクシュマナよ、あの馬鹿はあのようなことになって、今や私のことを考えていない。(八) あいつは約定を果たすつもりがないと思う。きっと小知により、恩人の私を軽んじているのだ。(九) もし快楽にふけり怠惰になっているなら、お前は彼を、ヴァーリンのたどった道により、すべての生き物の帰結(死)に導け。(一〇) しかしもしあの猿の雄牛が我々のために努力しているなら、ラクシュマナよ、さあ、急いで彼を連れて来い。ぐずぐずしてはいけない。(一一)」

兄にそう言われて、目上の命令を忠実に遂行するラクシュマナは、愛用の弓をとり、弦を張り、矢を持って出発した。彼はキシュキンダーの入口に着き、制止されることなく中に入った。(一二) 猿の王は彼が怒っていると思い、出迎えた。礼儀正しい猿王スグリーヴァは妻とともに、愛想よく、彼にふさわしいもてなしにより接待した。(一三) 恐れるもののないラクシュマナは、ラーマの言葉を彼に伝えた。猿王スグリーヴァは恭しく合掌し、臣下と妻とともに、すべてを残らず聞いてから満足し、象のように強力なラクシュマナに告げた。

(一四—一五)
「ラクシュマナ様、私は愚か者でも恩知らずでも冷酷でもありません。シーター様を探すために私がした努力を聞いて下さい。(一六)私は訓練した猿たちをすべての方角に派遣しました。すべての猿たちが一カ月以内で帰るように期限を定めました。(一七)勇士よ、森、海、都城、村、都市、鉱山をともなう、海に囲まれた大地を、彼らは探さなければなりません。(一八)その一カ月はあと五夜で終わります。その時はラーマ様とともに、大なる吉報を聞くでしょう。(一九)」

賢明な猿王スグリーヴァにそう言われて、ラクシュマナは怒りを捨て、上機嫌で彼に敬意を表した。(二〇)彼はスグリーヴァとともに、マーリヤヴァットの頂にいるラーマのところに行き、行なうべきことが整えられていると報告した。(二一)

このようにして、幾千の猿の長たちは、三つの方角を探してから帰って来た。しかし、南方に行った者たちは帰って来なかった。(二二)猿たちは、海に囲まれた大地を探したが、シーターやラーヴァナを見つけられなかったとラーマに告げた。(二三)ラーマは苦しんだが、南方に行った猿の雄牛たちに望みを託し、生きながらえた。(二四)

やがて二カ月が過ぎた時、猿たちは急いでスグリーヴァのもとに来て、次のように告げた。(二五)

「猿の王よ、かつてヴァーリンが守り、今あなたが守っているあのすばらしい大森林マドゥヴァナに、風神の息子(ハヌーマット)とヴァーリンの息子アンガダとその他の猿の雄牛たちが来て

楽しんでおります。王よ、彼らは南方を探すためにあなたが派遣した者たちです。(二六—二七)」

彼らの勝手なふるまいを聞いて、彼は目的が成就したと考えた。というのは、目的を果たした従者たちがこのようなふるまいをするものであるから。(二八)その賢明な猿の雄牛は、このことをラーマに告げた。ラーマもまた、推量により、シーターが見つかったのだと考えた。(二九)ハヌーマットをはじめとする猿たちは、疲れもとれ、ラーマとラクシュマナのそばにいる猿王のもとに行った。(三〇)ラーマはハヌーマットの歩き方と顔色を見て、いよいよシーターが見つかったと確信した。(三一)ハヌーマットをはじめとする猿たちは満足して、作法通りに、ラーマとスグリーヴァとラクシュマナに敬礼した。(三二)

ラーマは弓矢をとり、帰って来た彼らにたずねた。

「あなた方は私を生きながらえさせてくれるか。あなた方は目的を成就したか。(三三)私はアヨーディヤーで再び王国を統治するだろうか。戦闘で敵どもを殺し、シーターを取りもどして。(三四)シーターを救出せず、戦闘で敵どもを殺さないで、妻を奪われ侮辱されたままでは、私は生きることができない。(三五)」

このように言うラーマに、風神の息子(ハヌーマット)は答えた。

「ラーマ様、よい知らせを申し上げます。私はシーター様を見つけました。(三六)南の方角で山や森や鉱山を探しているうちに疲れましたが、少し経って、我々は大きな洞窟を見ました。(三七)我々はそこに入りました。それは非常に長い洞窟で、暗黒で深く、茂みに満ち、虫たちが住んでいました。(三八)長い道のりを進んで行くうちに、我々はついに太陽の光を

見ました。そしてその中に神々しい宮殿を見出しました。（三九）ラーマ様、それは魔王マヤの宮殿だということです。そこでプラバーヴァティーという女苦行者が苦行を行じていました。（四〇）彼女は種々の飲食物をくれました。我々はそれを食べて力を取りもどし、彼女に示された道を通ってその場所から出発しました。そして海の付近に、サヒヤ山とマラヤ山と大山ダルドゥラを見ました。（四一―四二）それから我々はマラヤ山に登って、ヴァルナの住処（海）を見ました。そこで我々は落胆し、苦悩し、疲労し、すっかり生きる希望を失いました。（四三）幾百ヨージャナの広さで、鯨（ティミ）や鰐やその他の大魚が住む海のことを考えて、すっかり悩んでしまったのです。（四四）我々は断食して死ぬことに決めて、そこに座りました。それから語り合っているうちに、禿鷲のジャターユの話が出ました。（四五）その時、山の峰のような、恐ろしい姿の鳥を見ました。それは恐怖をもたらし、まるでガルダ鳥のようでした。（四六）彼は我々を食おうと考えていましたが、近づいて来て言いました。

『おい、私の弟であるジャターユの話をするのは誰か。（四七）私は彼の兄で、サンパーティという名の鳥の王である。我々兄弟はお互いに競い合って、太陽神の集会場に登って行った。（四八）そこでこの両翼は燃えてしまった。しかしジャターユの翼は燃えなかった。その時、長年見慣れた親しい弟は禿鷲の王になり、翼を焼かれた私はこの大山に落ちた。（四九）』

このように言う彼に、我々はその弟が殺されたことを告げました。そしてあなたの災難についても、手短に告げました。（五〇）王よ、サンパーティはその非常によくない知らせを聞いて、気落ちして、更に我々にたずねました。勇士よ。（五一）

『そのラーマとは誰か。シーターはどのようになったか。またジャターユはどうして殺されたか。最高の猿たちよ、すべてのことを聞きたい。（五二）』

私は彼に、あなたが受けた災難と、我々が断食死する原因を、すべて詳しく語りました。（五三）するとその鳥の王は、次のような言葉で我々を奮い立たせました。

『私はラーヴァナと彼の大都ランカーを知っている。（五四）海の向こう岸の、トリクータ山の渓谷で見たことがある。シーターはそこにいるであろう。私は確信する。（五五）』

彼の言葉を聞いて、我々は急いで立ち上がり、海を越える手段について協議しました。勇士よ。（五六）誰も海を越える決心をしないので、そこで私は父（風神）に入り込んで、百由旬（ヨージャナ）の広さの海を越えました。その際、海の羅刹女を殺しました。（五七）そこでラーヴァナの宮中において、私はシーター様を見つけました。その貞女は断食と苦行を習いとし、夫に会うことを切望していました。彼女は弁髪を結い、汚れにまみれた身体をし、痩せ、悲嘆に暮れ、哀れな状態でした。（五八）一つ一つの特徴により、私は彼女がシーターであると認め、その貴婦人が一人でいる時に近づいて言いました。（五九）

『シーター様、私はラーマ様の使者です。風神の息子である猿です。あなたに会いたいと願って、空を飛んでここに来たのです。（六〇）二人の王子ラーマとラクシュマナの御兄弟はお元気です。すべての猿の王であるスグリーヴァに守護されています。（六一）シーター様、ラーマ様はラクシュマナとともに、あなた様の健康をたずねておられます。友人でありますから、スグリーヴァもあなた様の健康をたずねています。（六二）あなたの御主人は、すべての

猿たちとともに、すぐにやって来られるでしょう。お后様、私を信用して下さい。私は猿です。羅刹ではありません。（六三）』

シーター様は少しの間考えてから、私に答えました。

『アヴィンディヤの言葉から、私はあなたがハヌーマットであるとわかりました。（六四）アヴィンディヤは長老に尊敬されている強力な羅刹です。彼が、あなたのような大臣に囲まれたスグリーヴァについて語りました。（六五）お行きなさい。』

と言って、シーター様は私にこの宝石を渡しました。非の打ち所のないシーター様は、それに頼って今日まで生きながらえておられたのです。（六六）あなた様が信用するように、シーター様は、あなたが大山チトラクータにおいて鴉に葦の矢を放ったという一件を話しました。人中の虎よ、〔他にその一件を知る人はいないので、それがシーターだとあなたが〕再認識できるからです。（六七）それから私は、〔わざと敵に〕自分を捕えさせて（異本の読みによる）、それから都を焼いた後、帰って来たのです。』

ラーマはこのよい知らせを語った彼に敬意を表した。（六八）　（第二百六十六章）

ランカーに渡る橋の建設

マールカンデーヤは語った。――

ラーマがそこに一同とともに座っていた時、スグリーヴァの呼びかけに応じて、主立った

猿たちが集まって来た。（一）ヴァーリンの義父である栄光あるスシェーナは、百億の勇猛な猿たちに囲まれて、ラーマのもとに来た。（二）強力な猿王ガジャとガヴァヤは、それぞれ十億の猿に囲まれて姿を現わした。（三）牛の尾を持つ（ゴーラーングーラ）、恐ろしい姿のガヴァークシャは、六千億の猿を率いて現われた。（四）一方、ガンダマーダナ山に住む、有名なガンダマーダナは、百億の獰猛な猿を率いて来た。（五）パナサという名の、聡明で非常に強力な猿は、五億七千万の猿を率いて来た。（六）栄光あるダディムカという強力な猿の長老は、恐るべき威光を持つ猿の大軍を率いて来た。（七）ジャーンバヴァットは、一兆の猛々しい額に筋（印）のついた黒熊とともに現われた。（八）これらの、またその他の、多くの猿の群の長のうちの長たちが、数限りなく、ラーマのために集まって来た。（九）シリーシャの花のような猿たちが、獅子のような叫びをあげてあちこち走りまわる時、彼らのけたたましい声が聞こえた。（一〇）ある者たちは山の頂のように高かった。ある者たちは水牛のようであった。または秋の雲のようであった。砕かれた辰砂のような〔赤い〕顔をしていた。（一一）猿たちは飛び上がり、飛び下り、跳躍し、またある者はほこりを舞い上がらせ、いたるところから集まって来た。（一二）この満潮の海のような猿の一大世界は、スグリーヴァに許可された時、そこに駐留した。（一三）

それから、それら猿の王たちがいたるところから集結した時、めでたい星宿の吉日の好ましい時刻に、栄光あるラーマはスグリーヴァとともに、陣形を整えた軍隊により諸世界を滅ぼすかのような勢いで出発した。（一四―一五）風神の息子ハヌーマットが軍隊の先頭にいた。何

も恐れるもののないラクシュマナが殿(しんがり)を守った。（一六）弓籠手(ゆごて)と弓懸(ゆがけ)をつけたラグ族の兄弟は、猿の高官たちに囲まれて、星々に囲まれた月と太陽のように輝いていた。（一七）シャーラ樹や棕櫚(ターラ)や岩石で武装した猿の軍隊は、日の出の時の広大な稲田のようであった。（一八）ナラ、ニーラ、アンガダ、クラータ、マインダ、ドゥヴィヴィダに守られ、その大軍はラーマの目的を成就するために行進した。（一九）多くの根と木の実に満ちた好ましい土地、多くの蜜と肉があり、水のある吉祥の土地、山の尾根などに、適切に、妨げられることなく野営し、その猿の軍隊は塩水の海にたどり着いた。（二〇―二一）多くの旗をともなう、第二の海のようなその軍隊は、海岸の森に着いて、そこで野営した。（二二）その時、栄光あるラーマは、主立った猿たちの中で、その時が来たということで、次のような質問をスグリーヴァにした。（二三）

「あなたは何か海を越える方策を考えたか。この軍隊は大軍であり、海は渡りがたい。（二四）」

そこである利発な猿たちが、「海を跳び越えることができます」と言った。しかし、すべての猿ができるわけではない（異本による）。（二五）ある者たちは舟によって、またある者たちは種々の筏によって渡ることを考えた。しかしラーマは、彼らすべてをなだめながら、「それはだめだ」と答えた。（二六）

「すべての猿たちが、百由旬(ヨージャナ)の広さの海を越えることは不可能である。勇士たちよ。諸君の案は最上の考えではない。（二七）また、軍隊を渡せるような多くの舟もない。また、どうして我々のような者が、商人たちを妨害するようなことをするであろうか。（二八）我々の軍隊は膨大であるから、敵は弱点を見つけてわが軍を滅ぼすであろう。筏や小舟で渡ることも、私にはよいと思われない。（二九）ところで私は、方策を用いて海神を説得しよう。断食して懇願しよう。そうすれば彼は姿を現わすであろう。（三〇）もし彼が道を示さないなら、私は激しい火と風で燃え上がる、抗しがたい偉大な武器で彼を焼くであろう。（三一）」

ラーマはそう言うと、ラクシュマナとともに水に触れて（浄め）、作法通りに、クシャ草を敷いた席の上で海神に懇願した。（三二）すると海神は、夢の中でラーマに姿を現わした。その男女の河川の主である栄光ある神は、海獣(ヤーダス)の群に囲まれていた。（三三）幾百という宝物の群に囲まれた彼は、「カウサリヤーの息子よ」と優しく呼びかけて、次のように告げた。（三四）

「人中の雄牛よ、私が何かあなたを助けることができるか、言いなさい。私はイクシュヴァークの家系である。あなたの親族である。」

ラーマは彼に言った。（三五）

「男女の河川の主よ、軍隊が通る道を授けていただきたい。それを通って行き、プラスティヤの一族の面汚しである十頭者（ラーヴァナ）を殺せるような。（三六）もしこのように請願しても、あなたが私に道を授けないならば、神聖な武器(アストラ)（句呪）で浄められた矢により、あなたを干上がらせてしまう。（三七）」

このように言うラーマの言葉を聞くと、海神は悩み、合掌して立ち、次のように告げた。

(三八)

「私はあなたと対立したくない。私はあなたの妨害はしない。ラーマよ、私の言うことを聞きなさい。聞いたら、なすべきことを実行しなさい。(三九)もしあなたの命令により軍隊が通る道を与えたら、他の者たちも武力により、私に同様に命ずるであろう。(四〇)」

ところでここに、建築家(シルピン)に尊敬されるナラという猿がいる。一切造者(ヴィシュヴァカルマン)と呼ばれるトゥヴァシトリ神の強力な息子である。(四一)彼は木材や草や岩石を私に投ずるであろう。私はそのすべてに耐えるであろう。それはあなたの橋(堤)になるであろう。(四二)」

そのように告げて海神が消えた時、ラーマはナラに言った。

「海に橋を造れ。あなたはその能力があると私は思う。(四三)」

このような方策により、ラーマは橋の建設を行なわせた。それは十由旬(ヨージャナ)の広さで、百由旬の長さである。(四四)それは今もなお、『ナラの橋』と呼ばれて、地上で有名である。その山のような橋は、ラーマの命令に基づいて保存されている。(四五)そこにいるラーマのもとに、徳性あるヴィビーシャナが訪れた。彼は羅刹王(ラーヴァナ)の弟で、四名の大臣といっしょであった。(四六)心の広いラーマは彼を「ようこそ」と歓迎したが、スグリーヴァは、彼がスパイではないかと疑った。(四七)しかしラーマは、彼の行動により、そのしぐさも正しいことから、真に満足して、彼をもてなした。(四八)それからヴィビーシャナをすべての羅刹の帝王の位に即位させた。そして彼を顧問にし、ラクシュマナの友人にした。(四九)

彼はヴィビーシャナの意見に従い、一カ月のうちに、軍隊をともない、橋を通って海を越えた。(五〇)それから進軍し、ランカーの多くの大庭園に行き、猿たちによりその多くを破壊させた。(五一)ラーヴァナの大臣であるシュカとサーラナという羅刹は、スパイになって猿の姿をとっていたが、ヴィビーシャナは彼らを捕えた。(五二)その二名の羅刹が羅刹の姿にもどった時、ラーマは軍隊を彼らに見せて、それから釈放してやった。(五三)軍隊を郊外の森に駐屯させて、ラーマは賢明な猿のアンガダを、使者としてラーヴァナのもとに派遣した。(五四)　(第二百六十七章)

ランカーの攻防

マールカンデーヤは語った。——

豊富な食物と水があり、多くの根と木の実がある森に軍隊を駐屯させて、ラーマはそれを適切に守った。(一)一方ラーヴァナは、ランカーにおいて、論書に定められた規定通りに配備した。その都城は自然の要害であり、堅固な城壁とトーラナ門をそなえていた。(二)七つの堀は、深い水をたたえ、魚や鰐に満ち、カディラ樹の棘におおわれて、難攻であった。(三)それはカタパルトをそなえ難攻で、鉄棒と〔投擲用の〕岩石をそなえている。毒蛇の入った瓶を持つ兵たちがいて、樹脂の粉末を貯蔵する。(四)棍棒、松明、鉄矢(ナーラーチャ)、投槍(トーマラ)、刀、戦斧(せんぷ)、百殺棒(シャタグニー)(鉄の棘でおおわれたミサイル?)をそなえ、蜜蠟を塗った棒をそなえていた。(五)すべての都城の門には、動不動の軍営があり、歩兵に満ち、多くの象や馬がいた。(六)

さてアンガダはランカーの城門に着いた。彼が来たことは羅刹王に報告され、その結果、彼は無事に入ることができた。(七) 幾千万の羅刹たちの中央で、非常に強力な彼は、雲の群に囲まれた太陽のように輝いていた。(八) 彼は大臣たちに囲まれたラーヴァナに近づくと、挨拶して、ラーマの伝言を雄弁に述べ始めた。(九)

「王よ、誉れ高いコーサラの王ラーガヴァ（ラーマ）は、この時宜を得た言葉を汝に告げる。それを受け、実行せよ。(一〇) 自己を制することなく悪い政策（非道）に専念する王を戴き、国々や諸都市は、悪い政策の犠牲になって滅亡する。(一一) 力ずくでシーターを奪い、汝一人が私に罪を犯した。しかし他の罪もない者たちを殺す結果になるであろう。(一二) 汝は以前にも、力と高慢さとに酔い、森で生活する聖仙たちに危害を加え、神々を軽んじた。(一三) 汝は王仙たちを殺し、泣いている妻たちを強奪した。今やその非道の果報が汝に訪れたのだ。(一四)

私は大臣もろとも汝を殺すであろう。男らしく戦え。人間である私の弓の威力を見よ。夜行の者よ。(一五) ジャナカの娘、私のシーターを解放せよ。もしどうしても解放しないなら、私は鋭い矢により、この世から羅刹を一掃する。(一六)」

このように告げる使者の激しい言葉を聞いて、ラーヴァナ王は怒りに我を忘れ、我慢することができなかった。(一七) そこで主君のしぐさの意味を知る四名の羅刹たちが、アンガダの四肢をつかんだ。しかしそれは、まるで鳥たちが虎をつかむようであった。(一八) アンガダはそのように身体にしがみついた羅刹たちを連れたまま、空中に飛び上がり、宮殿の屋上

に入った。(一九) 彼は猛烈な速さで飛び上がったので、羅刹たちは地上に落下し、打撃の苦痛により彼らの心臓は裂けた。(二〇) 彼は自由になり、その宮殿の頂から再び飛び下りた。それからランカーの都を越えて、自軍のもとにもどった。(二一) そして威光あるアンガダは、ラーマのところに行ってすべてを報告し、ラーマにねぎらわれ休息した。(二二)

それからラーマは、風のように速い猿たちの総攻撃により、ランカーの城壁を破壊した。(二三) ラクシュマナは、ヴィビーシャナと熊の王を先頭に立てて、難攻の都市の南門を粉砕した。(二四) 彼は駱駝のように褐色の身体をした、戦闘に長けた一兆の猿たちとともに、ランカーを攻撃した。(二五) 飛び上がり、飛び下り、飛びかかる猿たちによって、太陽はほこりで輝きを失い見えなくなった。(二六) 猿たちは稲穂に似て、またシリーシャの花のような色をし、朝日のようでもあり、葦のように白くもあった。(二七) 羅刹たちは、女や老人たちとともに、いたるところで驚愕し、それらの猿たちですべて褐色になった城壁を見た。(二八) 猿たちは宝玉でできた柱やカタパルトの塔を破壊し、威力のなくなった機械を投げ捨てた。(二九) 大力の彼らは百殺棒と円盤と鉄棒と岩石を持って、力いっぱいランカーの市中に投げた。(三〇) その時、城壁を守っていた一群の羅刹たちは、幾百となく、猿たちに襲撃されて逃げた。(三一)

それから、羅刹王の命により、欲するがままの姿をとれる羅刹たちが、姿を変えて、何十万となく群をなして出て来た。(三二) 彼らは武器を雨のように降らせて、猿たちを敗走させた。彼らは最高の勇武を発揮して、城壁から猿を一掃した。(三三) その城壁は、マーシャ豆

の堆積のような、恐ろしい姿の羅刹たちによって占領され、猿がいなくなった。（三四）多くの猿の雄牛（勇士）たちが、身体を槍で貫かれて落下した。羅刹たちも、柱やトーラナ門を破壊されて、落下した。（三五）羅刹と猿とは、お互いに髪をつかみ合うような戦いをした。勇士たちは爪により、歯により、お互いに嚙み合った。（三六）猿と羅刹たちは双方でうなり合い、殺されて地面に倒れても相手を放さなかった。（三七）ラーマは雲が雨を降らせるように、矢を雨と降らせた。それらはランカーをおおって、羅刹たちを殺した。（三八）疲れを知らない強力な弓取りであるラクシュマナは、城砦にいる羅刹たちをしきりに矢でねらって殺した。（三九）それから、ランカーが破壊された時、目標が達せられ、上々の勝利を得たので、ラーマの命により、猿の軍隊は陣営に引き上げた。（四〇）（第二百六十八章）

マールカンデーヤは語った。——

兵士たちが帰陣した時、ラーヴァナに従うピシャーチャ鬼と羅刹の多くの群が彼らを襲った。（一）パルヴァナ、プータナ、ジャンバ、カラ、クローダヴァシャ、ハリ、プラルジャ、アルジャ、プラガーサなどの連中である。（二）これらの邪悪な者どもは、姿を消して襲撃したが、ヴィビーシャナは心得ていて、彼らの姿を消す術を封じた。（三）彼らが姿を現わしたので、強力で跳躍力のある猿たちは彼らをみな殺しにした。彼らは息を引きとって地面に倒れた。（四）ラーヴァナは我慢できなくなり、軍隊を率いて出陣した。彼はウシャナス（魔類の師）の陣形を布き、すべての猿たちを攻撃した。（五）一方ラーマは、配陣したラーヴァナに向かって進み、プリハスパティ（神々の師）の陣形を布いて羅刹に対抗した。（六）ラーヴァナはラーマと交戦した。またラクシュマナはインドラジットと戦った。（七）スグリーヴァはヴィルーパークシャと、ニカルヴァタはターラと戦った。ナラはトゥンダと、パトゥシャはパナサと戦った。（八）各々は、戦いの時にあたって、自分の腕力に応じて、好敵手と思う相手と交戦した。（九）合戦はいよいよ激しくなり、臆病者たちの恐怖をかきたて、身の毛がよだつ恐ろしさで、古の神と阿修羅の戦いのようであった。（一〇）

ラーヴァナは鋭い槍や矛や刀を雨のように浴びせてラーマを攻撃した。ラーマは鋭い鉄の矢でラーヴァナを攻撃した。（一一）またラクシュマナは急所を断つ矢でインドラジットを攻め、インドラジットもまた多くの矢でラクシュマナを射た。（一二）ヴィビーシャナはプラハスタに対し、プラハスタはヴィビーシャナに対し、お互いに恐れることなく、鳥の羽根のついた鋭い矢を浴びせた。（一三）彼らは強力で偉大な武器で交戦し、そのために動不動の三界のすべてのものたちは戦慄した。（一四）（第二百六十九章）

マールカンデーヤは語った。——

それから、果敢に戦うプラハスタは、ヴィビーシャナに激しく襲いかかり、雄叫びをあげて、棍棒で彼を打った。（一）その賢明な勇士は、恐ろしい勢いの棍棒で打たれてもひるまず、

ヒマーラヤのようにしっかりと立っていた。（二）ヴィビーシャナは巨大な「百鐘（シャタガンター）」という大槍をとって、加持して、敵の頭めがけて投げた。（三）それは雷のような音をたてて、速やかに羅刹の上に落下した。頭を断たれた羅刹は、風に折られた樹木のように見えた。（四）羅刹プラハスタが戦闘で殺されたのを見て、ドゥームラークシャは凄まじい勢いで猿たちに襲いかかった。（五）彼の雲のような恐ろしい姿の軍隊が襲って来るのを見て、猿の雄牛たちは戦場で急に分散した。（六）彼らが急に散り散りになったのを見て、猿のうちの虎ハヌーマットは出て行って、ひとり踏みとどまった。（七）風神の息子が戦場にとどまったのを見て、猿たちは一斉に、大急ぎで引き返した。（八）ラーマとラーヴァナの兵士たちは、お互いに攻撃し合って、身の毛がよだつような大音響をあげた。（九）

恐ろしい血まみれの合戦が繰り広げられている時、ドゥームラークシャはその矢で猿たちを逃亡させた。（一〇）敵をうち破る風神の息子ハヌーマットは、攻撃して来る羅刹の高官を迅速に迎え撃った。（一一）猿と羅刹の両雄の間に凄まじい戦いが行なわれた。両者はお互いに戦って勝利しようと欲し、あたかもインドラとプラフラーダ（魔王の名）のようであった。（一二）羅刹は棍棒や鉄棒で猿を打った。猿は大枝と小枝のついた樹木で羅刹を打った。（一三）英邁な風神の息子ハヌーマットはその巨体を利して、馬や戦車や歩兵もろとも、ドゥームラークシャを殺した。（一四）

最高の羅刹ドゥームラークシャが殺されたのを見て、猿たちは安心して襲いかかって、羅刹の兵たちを殺した。（一五）勝ち誇る強力な猿たちに殺されて、羅刹たちは希望を失い、恐

怖にかられてランカー〔の都〕に逃げ帰った。（一六）生き残りの羅刹たちは、うち破られ、都に逃げ帰って、起こったことをすべてラーヴァナ王に報告した。（一七）戦闘において、プラハスタと勇士ドゥームラークシャが、兵士とともに、猿の雄牛たちに殺されたことを聞いて、ラーヴァナは長嘆息し、玉座から飛び上がって告げた。

「今やクンバカルナの出番が来た。（一八―一九）」

彼はそう言って、大きな音を出す種々の楽器により、ぐっすりと眠り込んでいるクンバカルナを目覚めさせた。（二〇）不安にかられた羅刹王ラーヴァナは、強力なクンバカルナを大変な苦労をして目覚めさせたが、相手はようやく完全に眠りから覚めて、安楽に座っているので、そこでラーヴァナは彼に告げた。（二一）

「クンバカルナよ、そのように眠っていられるとは幸せな奴だ。この非常に危険な恐ろしい時を知らないとは。（二二）あのラーマは、橋によって猿どもとともに海を渡り、我らすべてを軽んじて、大殺戮をしている。（二三）俺は彼の妻のシーターをさらったから、奴は彼女を救おうとして、大海に橋を造ってやって来たのだ。（二四）彼はプラハスタをはじめとする我々の親族を殺した。お前以外には誰も彼を殺すことができない。敵を悩ます者よ。（二五）そこでお前は今、鎧をつけて出陣し、ラーマなどの敵を戦場でみな殺しにしろ。最も強力な者よ。敵を滅ぼす勇士よ。（二六）ドゥーシャナの弟であるヴァジュラヴェーガとプラマーティンとの二名が、大軍を率いて、お前とともに出陣するであろう。（二七）」

強力なクンバカルナにそう告げると、羅刹王はヴァジュラヴェーガとプラマーティンに、

なすべきことを命じた。(二八) 勇猛なドゥーシャナの弟たちは、「かしこまりました」とラーヴァナに言って、クンバカルナを先頭に立てて、速やかに都から出撃した。(二九)

(第二百七十章)

マールカンデーヤは語った。——

さてクンバカルナは従者を連れて都から出撃したが、勝ち誇る猿の軍隊が前にいるのを見た。(一) 猿たちはすぐに彼に近づき、ぐるりと取り囲み、多くの大木で打った。他の猿たちは、この上ない危険をものともせず、爪で彼を引っかいた。(二) 猿たちは多様な戦闘法で戦って、種々の武器によりその恐ろしい羅刹の王を打った。(三) ところが彼は打たれても笑って、パナサ、ガヴァークシャ、ヴァジュラバーフなどの猿を食べた。(四) 羅刹クンバカルナの恐るべき行為を見て、ターラなどは恐怖にかられて吼えた。(五) スグリーヴァは大声で叫んでいるターラやその他の猿の群の長たちのところに駆けつけ、恐れることなくクンバカルナに襲いかかった。(六) それからその気高い猿の象(最上者)は、激しくクンバカルナに飛びかかり、シャーラ樹でその頭を力まかせに打った。(七) 気高い猿スグリーヴァは非常に激しく打ち、クンバカルナの頭でシャーラ樹を砕いたが、相手に苦痛を与えることはできなかった。(八) クンバカルナはシャーラで打たれて目が覚め、笑って吼え、両腕でスグリーヴァをつかむと、力ずくで彼を引きずった。(九) 友を喜ばせる勇士ラクシュマナは、スグリーヴァが羅刹クンバカルナに引きずられるのを見て駆け寄った。(一〇) 敵の勇士を殺すラクシュマナは近寄ると、クンバカルナに向けて、黄金の羽根のついた高速の大矢を放った。(一一) その矢は敵の鎧と身体を貫通し、血にまみれ、地面に突き刺さった。(一二) 勇士クンバカルナは、胸を貫かれて猿王を離したが、岩の武器を持って、巨岩を振りかざしてラクシュマナに襲いかかった。(一三) 彼が襲って来た時、ラクシュマナは速やかに、鋭い先端の二本の矢で、その振り上げた両腕を切った。彼は四本の腕になった。(一四) 岩の武器を持つ彼のその他の腕をも、ラクシュマナは手練の早業を発揮して、すべて矢で切り落とした。(一五) すると相手は、巨大な体をとり、多くの足と頭と腕を持つ姿となった。ラクシュマナはブラフマ・アストラ(梵天の武器)で、山の集まりのような彼を燃やした。(一六) 強力な彼はその戦いにおいて、神的な武器に撃たれて、芽の生えた樹木が雷電に焼かれるように倒れた。(一七)

ヴリトラにも似た強力なクンバカルナが息絶えて地上に倒れたのを見て、羅刹たちは恐怖にかられて逃げ出した。(一八) 兵士たちが逃げるのを見て、ドゥーシャナの二名の弟(ヴァジュラヴェーガとプラマーティン)は彼らを止めて、怒ってラクシュマナに襲いかかった。(一九) 怒って襲って来る両者に対し、ラクシュマナは雄叫びをあげて矢で応戦した。(二〇) それから、ドゥーシャナの二名の弟と、賢明なラクシュマナとの間に、大激戦が行なわれた。(二一) 彼は二名の羅刹に、矢の大雨を浴びせた。勇猛な二人の兄弟も怒って矢の雨を降らせた。(二二) ヴァジュラヴェーガとプラマーティンと、勇士ラクシュマナとの、非常に恐ろしい戦いは少しの間続いた。(二三) その時、風神の息子ハヌーマットは、山頂を持って襲いかかり、羅刹ヴァジュラヴェ

ーガの生命を奪った。(二四) 強力な猿ニーラは、巨岩を持ってドゥーシャナの弟プラマーティンに襲いかかって粉砕した。(二五) それからまた、ラーマとラーヴァナの兵士たちはお互いに攻撃し合い、恐ろしい戦いが展開した。(二六) 猿たちは羅刹たちを幾百と殺した。羅刹たちも猿たちを殺した。しかし羅刹の方が猿よりも多く殺された。(二七)　（第二百七十一章）

ラーマ兄弟の苦戦

マールカンデーヤは語った。——

それから、クンバカルナとその従者、勇士プラハスタと威光に満ちたドゥームラークシャが戦闘で殺されたことを聞いて、ラーヴァナは勇猛な息子インドラジットに向かって言った。「敵を滅ぼす者よ、ラーマとスグリーヴァとラクシュマナを殺せ。(一－二) 私のよい息子よ、お前は戦闘において、金剛杵(ヴァジュラ)を持つシャーチーの夫である千眼者（インドラ）をうち破り、輝かしい名声を獲得した。(三) 敵を滅ぼす者よ、最高の戦士よ。お前は姿を消して、あるいは姿を現わして、神聖な恩賜の矢によって、私の敵どもを殺せ。(四) ラーマやラクシュマナやスグリーヴァはお前の矢の打撃に耐えることはできない。いわんやその従者たちはどうして耐えることができようか。非の打ち所のない者よ。(五) プラハスタやクンバカルナは戦闘でカラの復讐をとげられなかったが、勇士よ、復讐をとげてくれ。(六) お前は今日、鋭い矢で敵とその兵士たちを殺して、私を喜ばせてくれ。息子よ。以前にインドラを捕えて私を喜ばせたように。(七)」

インドラジットは、「承知しました」と言って、鎧をつけて戦車に乗り、速やかに戦場に行った。(八) そこでその羅刹の雄牛は高らかに名前を告げて、戦場で、吉祥の徴(ラクシャナ)を有するラクシュマナに挑戦した。(九) ラクシュマナも弓矢をとって、彼に襲いかかった。彼は弓籠手(ゆごて)の音で敵を恐れさせた。それはあたかも獅子が弱い動物を恐れさせるかのようだった。(一〇) 勝利を渇望する両者の間に大激戦が行なわれた。両者とも神的な武器に通じ、互いに競い合っていた。(一一) 最高の強者であるラーヴァナの息子は、矢によって相手を凌駕できなかった時、更にいっそう努力した。(一二) そこで彼は、高速の投槍で相手を攻撃した。ラクシュマナは鋭い矢で飛んで来る槍を断ち切った。それらの槍は鋭い矢で断たれて地面に落ちた。(一三) 栄光あるヴァーリンの息子アンガダは、樹木を振り上げ、全速力で突進し、インドラジットの頭をたたいた。(一四) 強力なインドラジットはあわてず、投槍で彼の胸を攻撃しようとした。ラクシュマナがその槍を断ち切った。(一五) 勇士アンガダが近くに来た時、インドラジットは棍棒でその猿の雄牛の左脇を打った。(一六) 敵を滅ぼす強力なヴァーリンの息子は、その打撃をものともしないで、怒ってシャーラの幹を投げた。(一七) アンガダが怒って、インドラジットを殺すために投げた樹は、インドラジットの戦車と馬と御者を破壊した。(一八) 御者を殺されたインドラジットは、馬が死んだ戦車から飛び下りて、その場で消え失せた。(一九) その多くの幻力をそなえた羅刹が消えたことを知り、ラーマはその場所に行き、彼の軍隊をよく守護した。(二〇)

インドラジットは、ラーマと勇士ラクシュマナに対し、恩賜の矢を射て、全身を貫いた。（二一）勇猛なラーマとラクシュマナの二人は、幻術により姿を消した見えざるラーヴァナの息子に対し、矢で応戦した。（二二）相手は怒って、獅子のような両雄の全身に、さらに幾百幾千の矢を発射した。（二三）絶えず矢を発射する見えざる敵を探して、猿たちは大きな岩石を持って空中に行った。（二四）ラーヴァナの息子である勇猛な羅刹は、幻力におおわれて姿を消し、その猿たちと二人の兄弟に、激しく矢を浴びせた。（二五）勇猛なラーマとラクシュマナの兄弟は、矢を浴びせられて、太陽と月のように、空中から地上に落ちた。（二六）

（第二百七十二章）

マールカンデーヤは語った。——

無量の力をもつ二人の兄弟が落ちたのを見て、ラーヴァナの息子（インドラジット）は更に、恩賜の矢により二人を拘束した。（一）二人の人中の虎は、戦場で、インドラジットにより矢の網で捕えられ、鳥籠の中の鳥のように見えた。（二）二人が地面に落ち、幾百の矢に包まれたのを見て、猿王スグリーヴァは、猿たち、すなわちスシェーナ、マインダ、ドゥヴィヴィダ、クムダ、アンガダ、ハヌーマット、ニーラ、ターラ、ナラたちとともに、彼らを取り巻いて立った。（三―四）有能なヴィビーシャナはその場所に来て、「智慧（プラジュニャー）」という武器（アストラ）で二人の勇士を覚醒させた。（五）そしてスグリーヴァは、「刺抜（ヴィシャリヤ）」という薬草を神聖な呪句（マントラ）とともに用いて、あっという間に二人の勇士の矢を抜いた。（六）最高の男たちは意識を取りもどし、矢も抜けて立ち上がった。その二人の勇士はすぐに疲労困憊から回復した。（七）ヴィビーシャナはラーマが回復したのを見ると、合掌し、次のように告げた。（八）

「王中の王（クベーラ）の命により、この夜叉（グヒヤカ）が水を持って、シュヴェータ山からあなたのもとにやって来ました。敵を滅ぼす勇士よ。（九）クベーラ大王は、姿を消した生き物を見るために、この水をあなたに贈ります。（一〇）これを眼につけると、あなた様は姿を消した生き物を見るでしょう。そしてあなた様がこれを与えた人も同様になるでしょう。（一一）」

「よろしい」と言って、ラーマはその聖なる水を受け取り、両眼を浄めた。気高いラクシュマナも同様にした。（一二）スグリーヴァ、ジャーンバヴァット、ハヌーマット、アンガダ、マインダ、ドゥヴィヴィダ、ニーラなど、大部分の最高の猿たちも同様にした。（一三）すると、ヴィビーシャナが告げた通り、彼らの眼はたちまち通常の能力を超えるものとなった。（一四）

一方、任務を遂行したインドラジットは、父に自分の行為を報告してから、再び戦いの前線に引き返した。（一五）ラクシュマナはヴィビーシャナの意見に従い、再び戦おうとして猛り立って攻撃して来る敵に襲いかかった。（一六）意識を取りもどしたラクシュマナは、勝ち誇る敵が日々の祭式を行なわないうちに殺そうと思い、猛り立って矢で射た。（一七）お互いに相手をうち破りたいと望む両者の間に、非常に多彩で驚嘆すべき戦闘が行なわれた。（一八）それはインドラとプラフラーダとの戦いのようであった。（一八）インドラジットは、急所を断つ

鋭い矢でラクシュマナを射た。そしてラクシュマナは、火のように激しい矢でラーヴァナの息子を射た。（一九）相手はラクシュマナの矢に撃たれて怒り狂い、毒蛇のような八本の矢をラクシュマナに放った。（二〇）勇士ラクシュマナが火のように激しい三本の矢により相手の生命（いのち）を奪った状況を語るから、聞きなさい。（二一）彼はまず一本の矢で、相手の弓を持つ腕を身体から切り落とした。第二の矢で、矢を持つ腕を大地に落とした。（二二）また、広い刃を持つ、輝く第三の矢で、美しい鼻と輝かしい耳環を持つ頭を切り落とした。（二三）腕と肩（頭）を切断された胴体はおぞましい姿だった。最も強力なラクシュマナは、彼を殺してから、その矢で御者をも殺した。（二四）そこで馬たちはその戦車をランカーの市中にひいて行った。ラーヴァナはその戦車を見たが、そこには息子は乗っていなかった。（二五）

ラーヴァナは息子が殺されたことを見て取ると、恐怖のあまり眼をまわし、悲嘆に暮れて正気を失い、シーターを殺そうと企てた。（二六）その悪鬼は、ラーマとの再会を切望してアショーカの林にいるシーターを見ると、刀をとって急いで襲いかかった。（二七）しかしアヴィンディヤは、その愚か者の邪悪な決意を知ると、怒った彼を鎮めた。どのような道理によってか、聞きなさい。（二八）

「あなた様は輝かしい大王の位についておりますから、女性を殺すのはふさわしくありません。この婦人は、あなたの家に幽閉された時、すでに殺されたも同然です。（二九）彼女は身体が断たれても殺されたことになりません。彼女の夫を殺しなさい。彼が殺されれば彼女も死ぬでしょう。（三〇）インドラ自身ですら、勇武にかけてあなた様に匹敵しません。というのは、あなたはインドラをはじめとする神々を、戦闘において何度もおびやかしたのですから。（三一）」

アヴィンディヤはこのように、様々な言葉によって、怒ったラーヴァナをなだめた。ラーヴァナはその言葉を受け入れた。（三二）ラーヴァナは出陣の決意をして、刀をとり、「俺の戦車の用意をせよ」と命じた。（三三）（第二百七十三章）

ラーヴァナの殺害

マールカンデーヤは語った。——

愛しい息子が殺された時、ラーヴァナは怒り、黄金や宝石で飾られた戦車に乗って出撃した。（一）彼は種々の武器を持つ恐ろしい羅刹たちに囲まれ、猿軍の長たちを粉砕しつつ、ラーマに襲いかかった。（二）怒って襲って来る彼に対して、マインダ、ニーラ、ナラ、アンガダ、ハヌーマット、ジャーンバヴァットたちが、軍勢をひきつれて取り囲んだ。（三）熊と猿の群の長たちは、ラーヴァナの見ている前で、彼の軍隊を樹木で粉砕した。（四）自分の軍隊が敵に殺されるのを見て、幻力を持つ羅刹王ラーヴァナは幻術を用いた。（五）彼の身体から、矢や槍や刀を持った羅刹たちが、幾百、幾千と出現した。（六）ラーマはその羅刹たちを、神的な武器でみな殺しにした。すると羅刹王は再び幻術を用いた。（七）ラーヴァナは諸々のラーマとラクシュマナの姿を作り出して、二人に襲いかかった。（八）そしてその羅刹たちはラ

ーマとラクシュマナと向かって行き、強弓をもって二人に襲いかかった。(九)ラクシュマナは羅刹王の幻術を見てもうろたえることなく、高らかにラーマに向かって叫んだ。(一〇)
「自分の姿に似たその邪悪な羅刹どもを殺せ。」
ラーマは自分の姿に似た羅刹たちを殺した。(一一)それから、褐色の馬たちをつないだ、太陽のように輝く戦車に乗って、インドラの御者であるマータリが、戦場でラーマのそばにやって来た。(一二)
マータリは言った。
「この褐色の馬たちをつないだジャイトラ(勝利)は、インドラの最高の戦車である。人中の虎であるラーマよ、シャクラ(インドラ)はこの最高の戦車に乗り、戦場において、幾百というダイティヤとダーナヴァ(魔類)を殺した。(一三)そこで人中の虎よ、私が操縦するこの戦車に乗り、戦場で速やかにラーヴァナを殺せ。ぐずぐずしてはいけない。(一四)」
ラーマはそう告げられても、これは羅刹の幻術ではないかと、マータリの言葉の真偽を疑った。(一五)ヴィビーシャナは彼に言った。
「人中の虎よ、これは邪悪なラーヴァナの幻術ではない。そこで直ちにこのインドラの戦車に乗りなさい。輝きに満ちた人よ。(一六)」
そこでラーマは喜び、「そうしよう」とヴィビーシャナに告げてその戦車に乗り、怒りにかられて速やかにラーヴァナを襲撃した。(一七)ラーヴァナが攻撃された時、生き物たちは「ああ、ああ」と叫んだ。天上では、太鼓の音とともに、神々の獅子吼が響いた。(一八)

その羅刹は恐ろしい槍をラーマに向けて投げた。それはインドラの雷撃のようであり、梵杖(ブラフマダンダ)のように苛酷であった。(一九)ラーマは鋭い矢によって、その槍を途中で断ち切った。そのなしがたい行為を見て、ラーヴァナに恐怖が入り込んだ。(二〇)
それから、怒ったラーヴァナは、迅速に、幾千幾万の鋭い矢と、種々の武器をラーマに向けて放った。(二一)すなわち、ブシュンディー(弩)、シューラ(槍矛)、杵、斧、種々の形の槍、鋭利な刃を持つ百殺棒(シャタグニー)などの武器である。(二二)ラーヴァナの恐ろしい幻術を見て、すべての猿たちは恐怖にかられて、あらゆる方角に逃げた。(二三)それからラーマは、美しい矢羽根と鏃(やじり)と黄金の矢筈を持つ最高の矢を箙(えびら)から取り、ブラフマ・アストラ(梵天の武器)と結びつけた。(二四)ラーマがその最上の矢を梵天の武器により加持したのを見て、インドラをはじめとする神々やガンダルヴァ(半神)たちは喜んだ。(二五)梵天の武器の呪句を唱えることにより、神々やガンダルヴァやキンナラたちは、敵である羅刹の寿命が残りわずかになったと考えた。(二六)それからラーマは、無比の力を持つその矢を放った。その恐るべきラーヴァナを殺す矢は、振り上げられた梵杖のようであった。(二七)それは激しく燃える火で羅刹の王を包み、戦車や馬や御者もろとも焼き尽くした。(二八)汚れなき行為のラーマによりラーヴァナが殺されたのを見て、神々とガンダルヴァとチャーラナ(天上の合唱者)たちは大喜びした。(二九)五元素はかの栄光あるラーヴァナを捨てた。というのは、彼はブラフマ・アストラの威光により、一切の世界において消滅したのである。(三〇)彼の体の諸要素、肉や血などは梵天の武器で無に帰し、灰すらも認められなかった。(三一)

(第二百七十四章)

シーターとの再会

マールカンデーヤは語った。——

神々の敵である卑劣な羅刹王ラーヴァナを殺して、ラーマはラクシュマナや親しい人々とともに喜び合った。(一)ラーヴァナが殺された時、聖仙をはじめとし、神々は万才を唱え祝福してその勇士に敬意を表した。(二)一切の神々、ガンダルヴァたち、その他の天界に住む者たちは、花の雨を降らせて、蓮弁のような眼をしたラーマを讃えた。(三)彼らはラーマに敬意を払ってから、来た道を引き返して行った。虚空はさながら盛大な祭りのようであった。(四)

敵の都市を征服する、誉れ高いラーマ王は、ラーヴァナを殺してから、ランカーをヴィビーシャナに与えた。(五)それから、アヴィンディヤという非常に叡知ある老いた大臣が、ヴィビーシャナに先導されたシーターに従って出て来た。(六)偉大なラーマは何故か苦悩していたが、大臣はその彼に告げた。

「偉大な方よ、貞節な行為の王妃ジャーナキー（シーター）をお受け取り下さい。(七)」

その言葉を聞くと、ラーマは最高の戦車から降りて、涙にかきくれたシーターを見た。(八)彼女は全身魅力的で、悲嘆に暮れ、車の中で座っていた。全身ほこりまみれで、（苦行者のように）弁髪を結い、黒衣をまとっていた。(九)ラーマは彼女が暴行されたと疑い、彼女に

告げた。

「シーターよ、去れ。お前は解放された。私はなすべきことをやったまでだ。(一〇)気高い女よ、私を夫として得て、お前が羅刹の家で老いなかったとは……。それ故、私は羅刹を殺したのだ。(一一)どうして私のような男が、法(ダルマ)の決定を知りながら、他者の手に帰した女を、瞬時といえども置いておくか。(一二)シーターよ、お前が貞節であろうとなかろうと、私はもうお前と楽しむことはできない。犬に舐められた供物を味わうことができぬように。(一三)」

その残酷な言葉を聞くと、若い王妃は苦しみ、突然、切られたバナナの木のように倒れた。(一四)歓喜から生じた彼女の顔の赤みはたちまち消え失せた。吐息により鏡の上に生じた曇りが失せるように。(一五)すべての猿たちとラクシュマナは、ラーマの言葉を聞くと、息を引きとったかのように動かなくなった。(一六)その時、清らかな本性の四面の神、世界創造神である祖父(ピターマハ)（梵天）が、天車に乗って、ラーマの前に姿を現わした。(一七)インドラ（帝釈天）、アグニ（火神）、ヴァーユ（風天）、ヤマ（閻魔）、ヴァルナ（水天）、夜叉の王である神（クベーラ）、汚れなき七仙(サプタルシ)も現われた。(一八)神々しく輝く姿を持つダシャラタ王も、ハンサ（鵞鳥）にひかれた、輝かしい高価な天車に乗って現われた。(一九)神々やガンダルヴァに満ちたすべての天空は、星々がきらきら光る秋空のように輝いていた。(二〇)

それから、美しく誇り高いシーターは彼らの中で立ち上がり、広い胸をしたラーマに次のように告げた。(二一)

「王子様、私はあなたのことを怒っていません。私は男性と女性の道を知っていますから。私の言葉をお聞き下さい。（二二）もし私が過失を犯したとしたら、生き物の内部で常に動く風が私の生命を奪いますように。（二三）もし私が過失を犯したとしたら、火、水、虚空、地、風が私の生命を奪いますように。（二四）」

すると虚空に、一切の方角に響きわたる聖なる声があがった。それはそこにいる偉大な猿たちを喜ばせるものであった。（二五）

ヴァーユは言った。

「ああ、ああ、ラーマよ。まことに私は常に動く風である。王よ、シーターは過失を犯していない。王よ、妻といっしょになりなさい。（二六）」

アグニは言った。

「ラグの後裔よ、私は諸生物の体内に住む。ラーマよ、シーターはほんのわずかの過失も犯していない。（二七）」

ヴァルナは言った。

「ラーマよ、生き物の身体において、液（ラサ）は私から生ずる。私は汝に告げる。シーターを受け入れなさいと。（二八）」

梵天は言った。

「善良な息子よ、王仙の法（ダルマ）に従い、善行の道を歩むお前にとって、この場合このようにふるまうことは不思議ではない。私の言うことを聞きなさい。（二九）勇士よ、お前は今、神々

とガンダルヴァと蛇と夜叉と魔類と偉大な聖仙たちの敵を倒した。（三〇）彼はかつて私の恩寵により一切の生き物に殺されない者となった。悪者も何らかの理由により、いくばくかの間、見逃されるのだ。（三一）その邪悪な男は、自分を殺すためにシーターをさらった。そして私は、ナラクーバラ（クベーラの息子）の呪詛により彼女を守った。（三二）もし彼が、いやがる他人の女を弄（もてあそ）べば、必ずや彼の身体は百に裂けるであろう。彼はかつてそう呪われたのだ。（三三）この点についてお前は疑ってはならぬ。輝きに満ちた者よ、彼女を受け入れなさい。神のような男よ、お前は神々のために偉大な仕事を行なった。（三四）」

ダシャラタは言った。

「わが子よ、私は喜んでいる。お前に幸あらんことを。私はお前の父のダシャラタである。私は許可する。最高の人よ、王国を統治せよ。（三五）」

ラーマは言った。

「王中の王よ、お久しうございます。わが父上であられるか。あなたの命令により、私は美しいアヨーディヤーの都に帰ります。（三六）」

マールカンデーヤは語った。——

父は喜んで再び言った。

「アヨーディヤーに行け。ラーマよ、赤い眦（まなじり）をした者よ。（三七）」

それからラーマは、神々に敬礼し、親しい者たちに祝福されて、妻と再び結びついた。大

インドラがプローマンの娘（シャチー）といっしょになるように。(三八) それからラーマは、例のアヴィンディヤに恩寵を授け、羅刹女トリジャターに財産と名誉を授けた。(三九) インドラをはじめとする神々に囲まれた梵天は彼に告げた。

「カウサリヤーの息子よ、今はいかなる願望をかなえようか。(四〇)」

ラーマは次のような願いを選んだ。法（ダルマ）において確固たること。敵に敗れないこと。羅刹に殺された猿たちがよみがえること。(四一) 梵天が「そのようにしよう」と告げると、猿たちは意識を取りもどして起き上がった。(四二)

気高いシーターは、ハヌマットに恩寵を授けた。

「わが子よ、あなたはラーマの名声が続く限り生き続けるでしょう。(四三) 褐色の眼のハヌマットよ、私の恩寵により、天上の御馳走がいつもあなたのそばにありますように。(四四)」

それから、汚れなき行為の者たちが見守る中、インドラをはじめとするすべての神々は姿を消した。(四五) インドラの御者（マータリ）は、シーターといっしょになったラーマを見て、大喜びして、親しい者たちの間で次のように告げた。(四六)

「不屈の勇者よ、神とガンダルヴァと夜叉と人間と阿修羅と蛇たちの苦しみを、あなたは取り除いた。(四七) 神、阿修羅、ガンダルヴァ、夜叉、羅刹、蛇など、世界の者たちは、大地が存続する限りあなたのことを語り継ぐであろう。(四八)」

彼はこのように告げると、最高の戦士ラーマに別れを告げ、敬意を表し、太陽のように輝く戦車に乗って立ち去った。(四九)

それからラーマは、シーターを先頭に、ラクシュマナやスグリーヴァをはじめとするすべての猿たちとともに、ランカーの守備を整え、ヴィビーシャナに先導されて、再び例の橋（堤）により海を渡った。(五〇―五一) そして彼は、意のままに空を飛行する、輝かしい天車プシュパカに、主立った大臣たちに囲まれて乗った。(五二) そして徳性ある王は、かつて自分が眠った海岸に、すべての猿たちとともに滞在した。(五三) ラーマはふさわしい時に猿たちを集めて敬意を表し、宝物を与えて満足させ、全員を解散させた。(五四) 猿の王たち、牛の尾を持つ猿たち、熊たちが去った時、ラーマはスグリーヴァとともに再びキシュキンダーを訪れた。(五五) 彼は、ヴィビーシャナとスグリーヴァとともに、天車プシュパカに乗って、シーターにその森を見せた。(五六) 勇士ラーマは、キシュキンダーに着くと、任務を遂行したアンガダを皇太子の位につけた。(五七) それからラーマは、ラクシュマナその他の者たちを連れて、来た道をたどって自分の都に帰った。(五八) 国王はアヨーディヤーに着くと、ハヌーマットを使者としてバラタのもとに派遣した。(五九) 風神の息子は、バラタのすべての挙動を観察して〔その高潔さを知り〕彼によい知らせを告げた。風神の息子がもどった時、ラーマはナンディ村に行った。(六〇) 彼はそこで、バラタが汚れにまみれた体で、ぼろを着て、ラーマのサンダルの前で席に座っているのを見た。(六一) 強力なラーマとラクシュマナは、バラタとシャトルグナに再会して喜んだ。(六二) 同様にバラタとシャトルグナも、長兄とシーターに再会して大喜びした。(六三) バラタはもどって来た兄に、大事に守って来た王国を、大喜びで返還した。(六四) それから、ヴィシュヌの星宿のもと、吉日に、ヴァシシタとヴァ

ーマデーヴァとがそろって、その勇士の即位灌頂式を行なった。(六五)

彼は即位すると、猿王スグリーヴァとその親しいものたちと、プラスティヤの息子ヴィビーシャナとに別れを告げ、それぞれの家に帰らせた。(六六)彼は種々の宝物で敬意を表し、両者を喜ばせ満足させ、なすべきことを託して、悲しい気持で彼らを送り出した。(六七)ラーマは天車プシュパカの供養をして、喜んでそれをヴァイシュラヴァナ（クベーラ）に引き渡した。(六八)それから彼は、神仙（ヴァシシタ）とともに、ゴーマティー川のそばで、妨げられることのない、三倍の謝礼をともなう、十回の馬祀（アシュヴァメーダ）を行なった。(六九)

（第二百七十五章）

マールカンデーヤは語った。――

勇士よ、かつてこのように無量の威光を持つラーマは、森の生活がもたらす非常に恐ろしい災難を経験した。(一)人中の虎よ、嘆いてはならぬ。あなたは王族（クシャトリヤ）である。敵を悩ます勇士よ、あなたは腕力にもとづく、輝かしい成果をめざす道を歩んでいる。(二)あなたには全く極微ほどの罪も見出されない。インドラをはじめとする神々や阿修羅（アスラ）たちですら、この道において苦労するであろう。(三)インドラは、マルト神群と連合してヴリトラを殺し、難敵のナムチと羅刹女ディールガジフヴァーを殺した。(四)この世では、あらゆる場合、仲間を有するものにすべての目的が成就する。アルジュナを弟に持つものにとって、戦闘において何が勝ち取られないだろうか。(五)それにまた、最高に強力で恐ろしく勇猛なビーマがいる。そしてマードリーの息子である、偉大な射手の若い双子がいる。勇士よ、このような仲間といて、どうして嘆くのか。(六)このような神のような勇猛な仲間とともに、あなたはマルト神群をともなうインドラの軍隊をもうち破るであろう。バラタの雄牛よ、あなたは戦闘において、すべての敵を征服するであろう。(七)

見なさい。ドラウパディーはあの強力で力に酔う邪悪なシンドゥ国王に奪われたが、これらの偉大な勇士たちは、なしがたい行為を行ない、ジャヤドラタ王を破って捕え、彼女を取りもどした。(八―九)ラーマは仲間がいなかったが、戦闘において、恐ろしく勇猛な羅刹ラーヴァナを殺して、シーターを取りもどした。(一〇)ラーマの友は、人間ではなくて、猿や顔の黒い熊たちである。王よ、そのことをよくよく考えなさい。(一一)それ故、クル族の虎よ、バラタの雄牛よ、嘆いてはいけない。勇士よ、あなたのような偉大な人は嘆かないものだ。(一二)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

賢者マールカンデーヤにこのように力づけられて、高邁な王は苦悩を離れ、再び賢者に問いかけた。(一三)

（第二百七十六章）

サーヴィトリー物語

〔注記──「サーヴィトリー物語」には、前田式子氏による日本語訳がある。『世界文学大系4』（インド集）筑摩書房、七九一—九一頁。今回の訳に際し参照させていただいた。ただし使用したテクストの読みが少し異なる場合がある。〕

サーヴィトリーが選んだ夫

ユディシティラは言った。

「偉大な聖者（ムニ）よ、私は自分のことや弟たちのことや、王国を奪われたことは、それほど悲しくありません。ドラウパディーについて嘆くのです。（一）我々は賭博において、悪党どもに苦しめられた時、彼女によって救われました。そして今度は、彼女はジャヤドラタにより力ずくで森から連れ去られました。（二）ドラウパディーのように夫に貞節で気高い女性は、かつて見られたり聞かれたりしたことがありますか。（三）」

マールカンデーヤは語った。──

ユディシティラ王よ、良家の子女たちの大なる幸運について聞きなさい。それらすべては王女サーヴィトリーによって達成された。（四）マドラにアシュヴァパティという名の王がいた。彼は徳性あり、最高に敬虔で、バラモンを敬い、人々を庇護し、約束を守り、感官を制御し、祭祀を行ない、よく布施をして、有能で、国民に愛され、一切の生類の幸福に専念していた。（五—六）彼は忍耐強く、真実を語り、感官を制御していたが、子供がいなかったので、年をとるにつれて悩むようになった。（七）そこで彼は、子供を得るために激しい戒行（ニヤマ）を実践し、時に応じて食事を制限し、梵行（清浄行）を行ない、感官を制御していた。（八）彼はサーヴィトリー（ガーヤトリー）の聖句とともに十万回も供物を火中に投じ、六食目ごと（三日ごと）にのみわずかな食物をとった。（九）このような戒行を行なって、十八年が経った。十八年が完了した時、サーヴィトリー女神は満足し、自分の姿をとって、王に姿を示した。（一〇）火壇の中から立ち上がり、大いに喜んで、願いをかなえる女神は王に告げた。（一一）

「王よ、あなたの清らかな梵行と自制と戒行により、そして私に対する全身全霊の信愛（バクティ）により、私はあなたに満足しました。（一二）マドラの王アシュヴァパティよ、欲するがままに願望を選びなさい。しかし決して法（ダルマ）において放逸にふるまわぬようにしなさい。（一三）」

アシュヴァパティは言った。

「私は法に従おうと望んで、子供を求めてこの企てを始めたのです。女神よ、一族を栄えさせる多くの息子が私に生まれますように。（一四）女神よ、もし私に満足して下さるなら、私はこの願望を選びます。バラモンたちは、子孫を作ることが最高の法であると私に言いますから。（一五）」

サーヴィトリーは告げた。

「王よ、私はあなたのその意向を以前より知って、あなたのために、梵天に子供のことは申し上げておいた。(一六) よき人よ、梵天の恩寵により、すぐに地上に威光ある娘が生まれるであろう。(一七) 何も言ってはならぬ。私は満足して梵天の指示によりあなたに告げているのだ。(一八)」

マールカンデーヤは語った。――

王はサーヴィトリーの言葉に対して、「承知しました」と約束して、更に「すぐに実現しますように」と恩寵を請うた。(一九) サーヴィトリーが姿を消した時、王は自分の家に帰り、満足し、臣民を法(ダルマ)に従って守護しつつ暮らしていた。(二〇)

やがてその誓戒を守る王は、徳高い第一妃を懐妊させた。(二一) そのマーラヴィー王妃の胎内で、胎児は次第に成長した。ちょうど白分(白月)の空において月が満ちてゆくように。(二二) やがて時が来た時、彼女は蓮のような眼をした娘を産んだ。王は喜んで、彼女のために種々の儀式を行なった。(二三) サーヴィトリーに献供し、満足したサーヴィトリーによって与えられたというので、バラモンたちや父は、彼女をサーヴィトリーと名づけた。(二四)

そのシュリー(吉祥天)の化身のような王女は、時の経過とともに、年頃の娘になった。(二五) 美しい胴の、大きな尻をした、黄金の像のような彼女を見て、人々は天女がやって来たと考えた。(二六) 彼女は蓮弁の眼をし、威光で燃えるかのようで、その威光に気圧されて、誰も

彼女に求婚しなかった。(二七)

さて、ある月相の変り目に、彼女は断食し、頭に水をかけ、神々に近づき、作法通りに火中に供物を投じ、バラモンたちに祈禱を唱えてもらった。(二八) それから残りの花を取って、まるでシュリー女神の化身のような姿で、偉大な父のそばに行った。(二九) 美しい尻をした彼女は、父の両足に敬礼して、まず残りの花を捧げてから、合掌し、王のかたわらに立った。(三〇) 年頃になり、神のように美しい姿をしていながら、いまだ求婚されない自分の娘を見て、王は苦しんだ。(三一)

王は言った。

「娘よ、お前を嫁にやるべき時なのに、誰も私に申し込んでこない。美質の点で自分にふさわしい夫を、自分で探しなさい。(三二) 好ましい男を探したら、私に報告しなさい。よくよく考えてお前を嫁にやろう。望みのままに選びなさい。(三三) 私はバラモンたちが法典の文句を唱えているのを聞いたことがある。可愛い娘よ、私はその言葉を唱えるからお前も聞きなさい。(三四)

『ふさわしい時に娘を嫁にやらぬ父は非難されるべきである。ふさわしい時に妻に近づかない夫は非難されるべきである。夫が死んだ時、母を守らぬ息子は非難されるべきである。(三五)』(『マヌ法典』九・四)

この私の言葉を聞いたら、早く夫を探しにゆきなさい。私が神々に非難されないようにしてくれ。(三六)」

マールカンデーヤは語った。――

父はこのように娘に言うと、老いた大臣たちにお供をするように命じて、「行きなさい」とうながした。(三七) 聡明な彼女は恥じたかのように父の足もとに平伏し、父の言葉を受け入れて、躊躇することなく出発した。(三八) 彼女は黄金の車に乗ると、老いた大臣たちに囲まれて、王仙たちの住む心地よい苦行林に行った。(三九) 彼女は尊敬されるべき長老たちの足もとに敬礼し、次第にすべての森を通って行った。(四〇) すべての聖地において、王女は主立ったバラモンたちに財物を布施しつつ、あちこちの場所を訪れた。(四一)

(第二百七十七章)

マールカンデーヤは語った。――

さて、マドラ国王は、ナーラダ仙と面会し、接見室で語らいながら座っていた。(一) その時、サーヴィトリーが大臣たちとともに、すべての聖場や隠棲所を訪れてから、父の家にもどって来た。(二) その美しい娘は、父がナーラダとともに座っているのを見ると、その両者の足下に頭を下げて敬礼した。(三)

ナーラダはたずねた。

「あなたの娘さんはどこへ行ったのか。王よ、彼女はどこから帰ったのか。また、年頃であ

るのに、どうしてよい夫に嫁がせないのか。(四)」

アシュヴァパティは答えた。

「まさにそのために彼女を旅に出し、そして今日もどって来たのです。神仙よ、彼女が選んだ夫についてお聞き下さい。(五)」

マールカンデーヤは語った。――

「詳しく話しなさい」と父にうながされ、美しい娘は、それを神の言葉であるかのように受け入れて、次のように言った。(六)

「シャールヴァ国に、徳性ある王族(クシャトリヤ)で、デュマットセーナという有名な王がいましたが、後に彼は盲目となりました。(七) この王は聡明でしたが、視力を失い、息子も幼かったので、その弱点に乗じて、以前からの敵であった近隣の王が王国を奪いました。(八) 彼は幼い子を抱く妻とともに森に行き、大森林で生活し、偉大な誓戒を守り、苦行を行じました。(九) 彼の息子のサティヤヴァットは、都で生まれ、苦行林で育ちました。私は彼こそ自分に似合いの夫であると、心の中で選びました。(一〇)」

ナーラダは言った。

「ああ何と。王よ、サーヴィトリーは大きな過失を犯した。知らなかったとはいえ、徳性あるサティヤヴァットを選んだとは。(一一)

彼の父は真実(サティヤ)を語る。母も真実を語る。そこでバラモンたちは、彼の名をサティヤヴァッ

トとつけたのである。(二二) 彼は幼少の時、馬を好み、土で馬を作ったり、絵（チトラ）に馬（アシュヴァ）を描いたりしたので、チトラアシュヴァとも呼ばれる。(二三)」

王はたずねた。

「その王子は今、威光と知性とをそなえていますか。サティヤヴァットは忍耐あり、勇猛で、父を喜ばせていますか。(二四)」

ナーラダは答えた。

「太陽神のように威光をそなえ、知性においてはブリハスパティに等しい。大インドラのように勇猛で、大地のように忍耐強い。(二五)」

アシュヴァパティはたずねた。

「その王子は布施をし、敬虔で、真実を語りますか。容姿端麗で、気高く、見目よいですか。(二六)」

ナーラダは答えた。

「能力の限り布施することでは、彼はサーンクリティ・ランティデーヴァに等しい。彼はウシーナラの子シビのように敬虔で真実を語る。(二七) ヤヤーティのように気高く、月のように見目よい。その強力なデュマットセーナの息子は、容姿にかけてはアシュヴィン双神に匹敵する。(二八) 彼は自制し、柔和であり、勇猛で、約束を守り、感官を制御している。友好的で、悪意がなく、廉恥心あり、充足している。(二九) 要するに、彼には常に廉直さがあり、彼は常に確固としていると、苦行を積み戒を守っている人々は述べる。(三〇)」

アシュヴァパティはたずねた。

「尊者よ、あなたは私に、彼はあらゆる長所をそなえていると言われる。もし彼に欠点が何かあるなら、それについても私におっしゃって下さい。(三一)」

ナーラダは答えた。

「他でもないが、彼には一つの欠点がある。このサティヤヴァットは、今日から一年経つと寿命が尽きて、肉体を捨てるであろう。(三二)」

王は言った。

「美しいサーヴィトリーよ、さあ出かけて行って、他の男を夫に選びなさい。彼の一つの欠点は重大で、諸々の長所を帳消しにしてしまう。(三三) 神々にも敬われる尊者ナーラダが、一年経つと彼は寿命が尽きて肉体を捨てるであろうと、私に言われるのだ。(三四)」

サーヴィトリーは言った。

「『財産の分け前は一度訪れ、娘は一度与えられ、人は一度だけ「私は与える」と言う。これらの三はただ一度だけである。(三五)』(『マヌ法典』九・四七) 長寿であろうと短命であろうと、長所があろうとなかろうと、私は一度だけ夫を選びます。二度は選びません。(三六) 心で決意をしてから、言葉でそれを述べます。それから行為によって行ないます。それ故、私にとって心が拠り所です。(三七)」

ナーラダは言った。

「王よ、あなたの娘サーヴィトリーの決意は固い。彼女をその道（ダルマ）からそれさせることは決

してできない。(二八) サティヤヴァットほどの美質をそなえた男は他にいない。それ故、あなたの娘を嫁がせるのがよいと思う。(二九)」

王は言った。

「尊者に説かれた言葉は真実で、疑うべきではありません。その通りにいたします。尊者は私の尊師(グル)ですから。(三〇)」

ナーラダは言った。

「あなたの娘サーヴィトリーの結婚に障(さわ)りがないように。ひとまず私どもは失礼する。あなた方みなに幸あらんことを。(三一)」

マールカンデーヤは語った。――

ナーラダはこのように告げると、虚空に飛び上がり、天界へ去った。王の方は、娘の結婚のため、すべての準備を整えさせた。(三二)

(第二百七十八章)

マールカンデーヤは語った。――

さて王は、娘を嫁がせるに際し、そのことのみを考えて、婚礼に必要なすべての品をとり集めた。(一)それから彼は、吉日に、長老のバラモンや、すべての祭官と宮廷祭僧を召集し、娘とともに出発した。(二)王はデュマットセーナの隠棲所のある聖なる森に行くと、バラモンたちとともに、徒歩でその王仙に近づいた。(三)そこで彼はその盲目の王に会った。その栄光ある王は、シャーラ樹にもたれ、クシャ草の座席に座っていた。(四)アシュヴァパティ王はその王仙に対しふさわしく敬意を表してから、慎重に言葉を選んで自己紹介をした。(五)法(ダルマ)を知る王仙は、王にもてなしの品(水)と座席と牝牛をさし出し、「何の用で来られたのか」とたずねた。(六)王は彼に、サティヤヴァットに関するその意向と目標をすべて告げた。(七)

アシュヴァパティは言った。

「王仙よ、これはサーヴィトリーという私の可愛い娘です。法を知る方よ、自己の義務(ダルマ)にもとづき、彼女を嫁として私からお受け下さい。(八)」

デュマットセーナは言った。

「我々は王国から追われ、森に住み、苦行者となり、自制して法を実践しています。あなたの娘さんは森に住むのにふさわしくないのに、どうして隠棲所の辛苦に耐えることができましょう。(九)」

アシュヴァパティは言った。

「苦楽は生じては滅するものだということを、娘も私も知っています。私のような者に、そのように言われることは適切ではありません。王よ、私は決意してあなたのもとに来たのです。(一〇)友情と愛情をもって、どうか私の希望を拒絶しないで下さい。愛情をもってここに来た私を拒否することはよくありません。(一一)この結婚の場合、あなたは私にふさわし

く、私はあなたにふさわしい。私の娘をあなたの嫁として、サティヤヴァットの妻としてお受け下さい。(二二)」

デュマットセーナは言った。

「以前には、私もあなたとの結びつきを望んでいました。しかし、私は王国を失いましたので、このように逡巡したのです。(二三)だが今日こそ、その以前に願っていた私の希望がかないますように。まことにあなたは私が願っていた客人なのです。(二四)」

マールカンデーヤは語った。――

それから、二人の王は、隠棲所に住むすべてのバラモンたちを呼んで来て、作法に従って結婚式をとり行なわせた。(二五)アシュヴァパティは娘としかるべき品を引き渡してから、大喜びして自分の宮殿に帰った。(二六)サティヤヴァットも、すべての美質をそなえた妻を得て喜んだ。彼女もまた、意中の夫を得て喜んだ。(二七)父が去った時、彼女はすべての装飾品を捨て、樹皮と赤褐色の衣のみを着た。(二八)彼女は奉仕、美質、礼節、自制、すべての望みをかなえることにより、あらゆる人々を満足させた。(二九)着物その他すべての身のまわりの世話をすることにより姑を、神の崇拝と言葉を慎むことにより舅を満足させた。(三〇)また、優しい言葉、巧みさ、平静さ、秘かな奉仕によって、夫を完全に満足させた。(三一)

こうして、その隠棲所に住む善良な人々が苦行を行なっているうちに、しばらく時間が経

過した。(三二)しかし、サーヴィトリーの心には、寝ても覚めても、夜も昼も、ナーラダが告げた言葉がこびりついていた。(三三)

(第二百七十九章)

ヤマ（閻魔）から夫を取りもどす

マールカンデーヤは語った。――

それから、多くの日々が過ぎた時、サティヤヴァットが死ぬべき時期がやって来た。(一)一日一日と過ぎ、日を数えているサーヴィトリーの心には、ナーラダが告げた言葉が常に存した。(二)その美しい女は、四日目に夫が死ぬと考えて、三夜続く誓戒をめざし、昼も夜も立ったままでいた。(三)嫁が難儀な戒行をしていることを聞いて、王は心配して立ち上がり、サーヴィトリーをなだめながら言った。(四)

「王女よ、そなたは今、あまりにも激しい行を企てた。三夜も立っていることは非常に難かしい。(五)」

サーヴィトリーは言った。

「お父様、心配なさらないで下さい。私は誓戒を成就します。これは決意してやったことですから。決意こそ成就の原因です。(六)」

デュマットセーナは言った。

「誓戒を中止せよとそなたに言うことは決してできない。我々の立場なら、成就せよと言う

ことが正しいであろう。(七)」

マールカンデーヤは語った。——

気高いデュマットセーナは、このように告げて止めることをやめた。サーヴィトリーは立ち続け、まるで木材のように見えた。(八) 夫の死が翌日に迫った時、サーヴィトリーが心を痛めて立っているうちに、その夜は明けた。(九)

「今日はその日だ」ということで、燃火に供物をくべ、太陽が一尋ほど昇った時、朝の祭式をした。(一〇) それから、すべての長老のバラモンや姑や舅に順次挨拶して、自己を制し、合掌して立っていた。(一一) 苦行林に住むすべての苦行者は、サーヴィトリーのために、未亡人にならないような吉祥の祝福の言葉を述べた。(一二)「そのようであれ」と、サーヴィトリーは沈思黙考し、心のうちで苦行者たちのすべての言葉を受け取った。(一三) そして王女は、ナーラダの言葉を考えて非常に悩みつつ、その時、その瞬間を待っていた。(一四)

そこで姑と舅は満足して、片隅に立つ王女に告げた。(一五)

姑と舅は言った。

「そなたは規定された通りに誓戒を正しく完了した。食事をする時が来た。次になすべきことをしなさい。(一六)」

サーヴィトリーは言った。

「太陽が沈んだら、私は願望を成就し、食事をします。私は心のうちでこのような願をかけ、誓ったのです。(一七)」

マールカンデーヤは語った。——

サーヴィトリーが食事についてこのように言っている間に、サティヤヴァットは肩に斧をかついで森に出かけようとした。(一八) しかし、サーヴィトリーは夫に言った。

「一人で行ってはなりませぬ。あなたといっしょに行きます。あなたと離れることはできません。(一九)」

サティヤヴァットは言った。

「美しい女よ、あなたはまだ森へ行ったことがない。それに道は難儀である。誓戒と断食でやつれたあなたが、どうして徒歩で行かれようか。(二〇)」

サーヴィトリーは言った。

「私は断食によって弱っても疲れてもいません。私は行きたくてたまりません。止めないで下さい。(二一)」

サティヤヴァットは言った。

「もしあなたがどうしても行きたいなら、あなたの好きなようにしよう。しかし私の過失にならぬよう、親たちに言ってくれ。(二二)」

マールカンデーヤは語った。——

誓戒を守る彼女は姑と舅に近づいて言った。

「私の夫は今、木の実を集めるために大森林に行きます。(二三) お母様とお父様のお許しを得て、夫とともに行きたいと思います。離れることができませんから。(二四) あなたの息子は、親たちと火供(アグニホートラ)のために出かけるので、止めることはできません。他のことで森へ行くなら止めるのですが。(二五) それに、一年近く私は森から出たことがありません。花の咲く森を見たいという好奇心でいっぱいです。(二六)」

デュマットセーナは言った。

「サーヴィトリーの父が、彼女を私の嫁として与えて以来、彼女がかつてこのように頼んだという記憶はない。(二七) そこで嫁の望む通りにすればよい。娘よ、道々サティヤヴァットに気をつけてやってくれ。(二八)」

マールカンデーヤは語った。——

誉れある彼女は両親に許されて、夫とともに出かけた。微笑を浮べてはいたが、悩める心をして。(二九) 切れ長の眼をした彼女は、孔雀の鳴き声が響き、色とりどりで、いたるところ心地よい森を眺めた。(三〇)「流れの清らかな川、花咲くすばらしい樹々を見なさい」と、サティヤヴァットはサーヴィトリーに優しく言った。(三一) だがその非の打ち所のない女は、夫の状態をすべて見守りつつ、その時々に、聖者(ムニ)の言葉を想起し、夫はすでに死んだのではないかと考えた。(三二) しかし彼女は、ゆっくりとした足どりで夫に従って行った。その時

を待って、心を二様にして。(三三)

(第二百八十章)

マールカンデーヤは語った。——

その強力な男は、妻とともに木の実をとって、それで容器をいっぱいにし、それから薪を切った。(一) 彼が薪を切っているうちに汗が出て、その労働のために、頭痛が生じた。(二) 彼は疲労に苦しみ、愛しい妻のもとに行って言った。

「この労働のために頭が痛くなった。(三) サーヴィトリーよ、身体も心も燃えるようだ。寡黙な女よ、自分は病気のようだ。(四) 頭が槍で貫かれたかのように思われる。美しい女よ、私は眠りたい。私には立っている力はない。(五)」

サーヴィトリーは夫のところに行き、抱きしめ、膝に彼の頭をのせて、地面に座った。(六) その哀れな女は、ナーラダの言葉のことを考え、その瞬時、瞬間、時間、日であると思い巡らした。(七) そして直ちに、彼女は黄色い衣を着た男を見た。彼は冠をかぶり、美しい体をして、太陽のように輝いていた。(八) 黒光りし、赤い眼を持ち、輪縄を手に持ち、恐怖をもたらし、サティヤヴァットのかたわらで、彼を見ながら立っていた。(九)

彼女はその男を見ると、夫の頭をそっと置き、急いで立ち上がり、苦悩し、ふるえる心で合掌して言った。(一〇)

「あなたは神様だと存じます。その姿は超人的です。神よ、お願いですから私にお告げ下さ

い。あなたはどなたで、何を意図しておられるのか。(一一)」

ヤマ（閻魔）は言った。

「サーヴィトリーよ、汝は夫に貞節で苦行を積んでいる。そこで私は汝に告げる。美しい女よ、私をヤマであると知れ。(一二)ここにいる汝の夫サティヤヴァット王子はもはや寿命が尽きた。私は彼を縛って連れて行く。これが私の意図であると知れ。(一三)」

マールカンデーヤは語った。——

祖霊の王である神は、このように彼女に自分の意図を告げると、彼女への好意から、すべてをありのままに語り始めた。(一四)

「彼は法をそなえ、容姿も優れ、美質の海である。私の従卒を用いて連れて行くのはふさわしくない。そこで私は自ら来たのである。(一五)」

それからヤマは、サティヤヴァットの身体から、輪縄で縛られ彼の支配に帰した親指ほどの霊魂を、力まかせに引き抜いた。(一六)すると彼の身体は、生気を抜かれ、呼吸が止まり、輝きを失い、動かなくなり、見るも無惨な姿になった。(一七)一方ヤマは、そのように霊魂を縛って、南方をめざして進んで行った。戒行と誓戒を成就した、気高く夫に貞節なサーヴィトリーも、悲嘆に暮れてヤマの後について行った。(一八)

ヤマは言った。

「サーヴィトリーよ、引き返しなさい。彼の葬式をしなさい。汝は夫に対してなすべきこと

を果たした。汝はもう来てよい所まで来てしまった。(一九)」

サーヴィトリーは言った。

「私の夫が連れて行かれる所、あるいは自ら行く所、私もそこへ行きます。これは永遠の法です。(二〇)苦行、目上への奉仕、夫への愛情、誓戒にかけて、そしてあなた様の恩寵によって、私の行く道は妨げられることはありません。(二一)真理を見る賢者たちは『七歩ともにすれば友である』と述べます。そこで友情を前提として、私の言うことを少しお聞き下さい。(二二)

自己を制御しない人々は、森で法を行ない、生活し、苦行することはない。〔自己を制した人々が〕よくわきまえて、法を宣揚する。それ故、善き人々は法が最も重要であると説く。(二三)善き人々の一人が説く法によって、すべての人は同じ道に従う。私は決して第二第三の道を望まない。それ故、善き人々は法が最も重要であると説く。(二四)」

ヤマは言った。

「引き返しなさい。抑揚と母音と子音と道理をそなえた汝の言葉により、私は満足した。さあ、願いごとを選べ。ただし夫の生命は除いて。非の打ち所のない女よ、汝のすべての願いごとをかなえてあげよう。(二五)」

サーヴィトリーは言った。

「私の舅は、自分の王国を失い、森に住み、視力を失って、隠棲所で暮らしています。その王が、あなた様の恩寵により、視力をとりもどし、強力になり、火や太陽のように輝きます

ように。（二六）」

ヤマは言った。

「非の打ち所のない女よ、汝の願いをすべてかなえてあげよう。汝の言った通りになるであろう。ここまでやってきて、汝は疲れたように見える。引き返しなさい。汝が疲れることのないように。（二七）」

サーヴィトリーは言った。

「夫のそばにいて、どうして私が疲れるでしょう。夫の行くところが必ずや私の行く道です。あなたが夫を連れて行く所が私の行く所です。神々の主よ、また私の言うことをお聞き下さい。（二八）

善き人々と一度でも会うことは最高に望ましいことである。そして彼らの友であることは、いっそうすばらしいことだと言われる。善き人と交わることは、非常に実りのあることである。それ故、善き人々と結び合って暮らすべきである。（二九）」

ヤマは言った。

「汝が私に告げた言葉は、心に適い、賢者の知性を高め、幸せをもたらす。再び、サティヤヴァットの生命を除き、第二の願いを選べ。美しい女よ。（三〇）」

サーヴィトリーは言った。

「私の賢明な舅である王が、かつて奪われた自分の王国を取りもどしますように。そして私の舅が、自己の義務（ダルマ）を捨てることがないように。私はこの第二の願いを選びます。（三一）」

ヤマは言った。

「その王は久しからずして自分の王国を取りもどすであろう。そして自己の義務から外れることはないであろう。王女よ、私は願いをかなえた。引き返しなさい。汝が疲れることのないように。（三二）」

サーヴィトリーは言った。

「あなたは定めに従ってこの生類を抑制して連れて行きます。勝手に連れて行くわけではありません。それ故、神よ、あなたはヤマ（制御者）として知られています。私の申し上げる言葉をお聞き下さい。（三三）

行動、心、言葉によって、一切生類に悪意を抱かぬこと、そして好意をかけて、布施すること、これが善き人々の永遠の法（ダルマ）である。（三四）

この世間は大体このようである。人間というものはその能力に応じて親切である。しかし、善き人々は、敵が訪れてもそれを慈しむ。（三五）」

ヤマは言った。

「喉が渇いた人にとっての水のように、汝はその言葉を述べた。サティヤヴァットの生命を除き、汝が望む願いを選べ。美しい女よ。（三六）」

サーヴィトリーは言った。

「私の父である王は息子がいません。私の父に百人の実の息子ができますように。一族を持続させるような。私はあなたにこの第三の願いを選びます。（三七）」

ヤマは言った。
「美しい女よ、汝の父に、一族を持続させる栄光に満ちた百人の息子ができるように。王女よ、私は願いをかなえた。引き返しなさい。汝は遠方まで来てしまった。（三八）」
サーヴィトリーは言った。
「夫のそばにいて、どうして遠いということがありましょう。私の心はもっと遠方に走りますから。道を行きながら、私の申し上げる高らかな言葉をまたお聞き下さい。（三九）
あなたはヴィヴァスヴァット（太陽神）の威力ある息子です。それ故、賢者らはあなたをヴァイヴァスヴァタと呼びます。生類は静寂と法（ダルマ）により〔あなたに〕喜ばれて（ランジタ）います。それ故、主よ、あなたはこの世で法の王（ダルマラージャ）とされるのです。（四〇）人は自分自身に対しても、善き人々に対するほど信頼を置かない。それ故、すべての人は、とりわけ善き人々を愛することを望む。（四一）一切の生類にとって、友情から信頼が生まれる。それ故、人は、とりわけ善き人々に信頼を置く。（四二）」
ヤマは言った。
「美しい女よ、汝以外の誰からも、汝が述べたような言葉を私は聞いたことがない。私はそれに満足した。彼の生命を除き、第四の願いを選べ。そして去りなさい。（四三）」
サーヴィトリーは言った。
「私とサティヤヴァットの実子として、一族を持続させる、力と気力に満ちた百人の息子たちが、二人に生まれますように。私はこの第四の願いを選びます。（四四）」

ヤマは言った。
「女よ、力と気力に満ち、汝を喜ばせる百人の息子が生まれるであろう。王女よ、汝が疲れるといけないから、引き返せ。汝は遠方まで来てしまった。（四五）」
サーヴィトリーは言った。
「善き人々は常に法を実践する。善き人々は沈み込むことも苦しむこともない。善き人々が善き人々と交際することは実りあるものである。善き人々は善き人々を恐れることはない。（四六）善き人々は真実（サティヤ）により太陽を運行させる。善き人々は苦行により大地を支える。善き人々は未来と過去の拠り所である。王よ。善き人々は善き人々の中で沈みこむことはない。（四七）
これは常に貴人の好む行為であると知り、善き人々は他者のために行動して、報酬を求めない。（四八）
そして善き人々にあっては、恩寵は空しくはならない。実利や名誉が失われることもない。このことは善き人々には常に定まったことであるから、それ故、善き人々は守護者となる。（四九）」
ヤマは言った。
「法（ダルマ）にかない、心地よく、意義深い優れた言葉を汝が語れば語るほど、汝に対する私の愛情は高まる。無比の願いごとを選べ。誓戒を堅く守る女よ。（五〇）」
サーヴィトリーは言った。

「他の贈物のように、好意を欠いた例外（すなわち「夫の生命を除いて」という条件）がありません。このサティヤヴァットが生き返るようにという願いを選びます。私は夫なしでは死んだも同然ですから。（五一）夫なしでは私は幸福を望みません。夫なしでは天界を望みません。夫なしでは富貴を望みません。夫がいなければ、生きていたいとは思いません。（五二）

あなた御自身、私に百人の息子を授けるという願いをかなえ、しかも私の夫を奪うとは……。このサティヤヴァットが生き返るようにという願いを選びます。あなた御自身の言葉が真実になるでしょう。（五三）」

マールカンデーヤは語った。――

ヴィヴァスヴァットの息子である法（ダルマ）の王ヤマは「承知した」と言って、輪縄を解き、心から喜んでサーヴィトリーに告げた。（五四）

「一族を喜ばせる御婦人よ、私は今、汝の夫を解放した。彼は無病息災である。彼を連れて行きなさい。目的を成就するであろう。（五五）彼は汝とともに四百年の寿命を得るであろう。法に従って祭祀を行ない、世間において名声を得るであろう。（五六）サティヤヴァットは汝に百人の息子を生ませるであろう。そして彼らはすべて、王になり王族（クシャトリヤ）になり、息子と孫たちを得るであろう。彼らは永遠に、汝の名前をもって有名になるであろう。（五七）汝の父と汝の母マーラヴィーとの間に、百人の息子ができるであろう。汝の弟たちは永遠にマーラヴァ族と呼ばれ、神々のような王族になり、息子と孫たちを得るであろう。（五八）」

栄光ある法の王はこのようにサーヴィトリーの願いをかなえると、彼女を帰らせ、自らも自分の住居に帰って行った。（五九）ヤマが去った時、サーヴィトリーも夫を取りもどしたので、夫の屍体があったところにもどった。（六〇）彼女は地面に寝ている夫を見て、近づいて抱きしめ、膝に彼の頭をのせて、地面に座った。（六一）サティヤヴァットは意識を取りもどし、サーヴィトリーに話しかけた。旅から帰ったかのように、愛情をこめて何度も見つめて。（六二）

サティヤヴァットは言った。

「まことに私は長いこと眠ってしまった。何故起こしてくれなかったのか。また、私を引きずって行ったあの黒い男はどこにいるのか。（六三）」

サーヴィトリーは言った。

「人中の雄牛よ、実に長い間、あなたは私の膝で眠りました。生類を抑制するあの聖なる神ヤマは去りました。（六四）栄光ある王子よ、あなたは疲れもとれ眠気も去ったでしょう。もしできるなら立ち上がって下さい。夜も更けました。（六五）」

マールカンデーヤは語った。――

サティヤヴァットは意識を取りもどし、安らかに眠った後のように立ち上がり、すべての方角や森の中を眺めて言った。（六六）

「美しい胴の女よ、私は木の実を集めにあなたとともに出かけた。そして木を切っているう

ちに、頭が痛くなった。(六七)頭痛に苦しんで、それ以上立っていることができず、私はあなたの膝で眠った。そこまではすべて覚えている。(六八)あなたに抱かれているうちに、眠りのために私の思考力は奪われた。それから私は、恐ろしい暗黒と、威厳に満ちた男を見た。(六九)もしあなたが知っているなら、言ってくれ。美しい胴の女よ。私は夢を見たのか、あるいはあれは真実なのか。(七〇)」

サーヴィトリーは彼に言った。

「夜が更けました。王子様、明日、起こったことをすべてありのままに申し上げます。(七一)お願いです、お立ちなさい。誓戒を守る方よ、御両親に会いなさい。夜がすっかり更けました。陽が沈んでしまいました。(七二)夜行のものたちは喜んで、残酷な叫び声をあげてうろついています。森で動きまわる獣たちがたてる木の葉の音が聞えます。(七三)あの凄まじい鳴き声のジャッカルたちは、南西の方角にいて、おぞましく吠え、私の心をふるえさせます。(七四)」

サティヤヴァットは言った。

「森は深い闇におおわれて恐怖を起こさせる。道がわからなくなり、進むことができないだろう。(七五)」

サーヴィトリーは言った。

「今日、この森は燃えたので、乾いた樹は燃え続けています。風にあおられた火があちこちに見えます。(七六)あそこから火を持って来て、ここを一面に燃やしましょう。ここに木も

あります。心配することはありません。(七七)もし行くことができませんでしたら……。あなたはまだ痛みが残っていると見受けられます。それに、森は闇におおわれていて、道がわからないでしょう。(七八)明日の明け方、森が見えるようになったら出かけましょう。もし同意して下さるなら、非の打ち所のない方よ、よろしければ今夜はここで過ごしましょう。(七九)」

サティヤヴァットは言った。

「私の頭痛は鎮まった。身体も調子よくなった。私は両親に会いたい。どうかお願いだ。(八〇)私はこれまで、遅い時間に隠棲所に帰ったことは決してなかった。黄昏にならないうちに、母親は私が出るのを止める。(八一)昼間でも私が出かけると、両親は私のことを心配する。父は隠棲所に住む人々とともに私を探す。(八二)以前にも度々、心配した両親から、帰りが遅いと私はひどく叱られたものだ。(八三)今日は私のために二人がどのような状態になったかと心配だ。私がいないので二人はひどく悩んでいるだろう。(八四)以前にも度々老いた両親は、ひどく心配し、愛情をこめて、夜中、涙を流して私に言ったものだ。(八五)『息子よ、お前がいなければ、我々は一瞬たりとも生きてゆけない。お前が生きている限り、我々の生命は確固としている。(八六)お前は老いた盲目の我らの杖だ。家系はお前にかかっている。我々の（祖霊に供える）団子(ピンダ)も、我々の名声も、我々の子孫も、お前にかかっている。(八七)』

母も父も老いている。私はその二人の杖であるという。二人は夜中、私を見ないで、いか

なる状態になっているだろうか。（八八）私は眠りを憎む。眠りのせいで罪もない両親が私のために危機に陥っている。（八九）私もまた危機に陥っている。困難な状況に追い込まれている。父母を失えば私は生きていることができないから。（九〇）知性を眼とする（盲目の）私の父は、今ごろはきっと途方に暮れて、隠棲所に住む一人一人にたずねていることだろう。（九一）美しい女よ、私は自分のことを嘆くよりも、父のことを、そして夫につき従う弱々しい母のことを嘆くのだ。（九二）私のせいで、二人は今日、最高の苦しみに陥っているだろう。二人が生きている限り私も生きる。私は二人を養わなければならぬ。私は二人の喜ぶことをすべきであるということで、私も生きている。（九三）」

マールカンデーヤは語った。——

親に従順で親思いの徳性ある彼は、このように言うと、両腕を上げて悲嘆に暮れ、声をあげて泣いた。（九四）法を実践するサーヴィトリーは、そのように悲嘆に暮れている夫を見て、両眼から涙を拭って言った。（九五）

「もし私が苦行を行じ、布施をし、供物を捧げたことが真実なら、この夜が姑と舅と夫にとって無事に過ぎますように。（九六）私はくつろいでいる時も不真実の言葉を述べた憶えがない。その真実にかけて、私の舅たちが今日、生きながらえますように。（九七）」

サティヤヴァットは言った。

「私は両親に会いたい。サーヴィトリーよ、ぐずぐずしないで行きなさい。もし母や父に何

か悪いことが起これば、私は生きてはいない。この身にかけて誓う。（九八）もしあなたの心が法に決定しているなら、またもし私が生きていて欲しいと望むなら、あるいは私に好意をかけたいなら、隠棲所の方に行け。（九九）」

マールカンデーヤは語った。——

そこで美しいサーヴィトリーは立ち上がり、髪を結び、両手で抱いて夫を立ち上がらせた。（一〇〇）サティヤヴァットも立ち上がり、手で身体をさすり、すべての方角を見まわして、容器に目を向けた。（一〇一）そこでサーヴィトリーは彼に言った。

「木の実は明日、ここに取りに来なさい。しかし私は、安全のために、あなたの斧を持ってゆきます。（一〇二）」

彼女は容器を樹の枝に吊し、斧を持って、夫のそばに再び近づいた。（一〇三）美しい腿の女は、その左の肩に夫の腕を置かせ、右手で抱いて、ゆっくりと歩いて行った。（一〇四）

サティヤヴァットは言った。

「おののく女よ、私は何度も行き来したので、道を知っている。それに、樹々の間からもれる月光によって見ることができる。（一〇五）美しい女よ、来た通りの道をたどって行け。ためらうことはない。（一〇六）あのパラーシャ樹の叢林のところで、道は二つに分かれている。その北側の道を行け。急ぎなさい。私は元気で力も出てきた。両親に会いたい。（一〇七）」

マールカンデーヤは語った。――
彼はそのように言いながら、急いで隠棲所に向けて歩いて行った。（二〇八）

（第二百八十一章）

百人の息子を授かる

マールカンデーヤは語った。――
同じ頃、大森林において、デュマットセーナは視力を取りもどし、心穏やかになり、その眼によってすべてを見た。（一）彼は妻のシャイビヤーとともにすべての隠棲所を訪れ、息子のことを心配し、この上ない苦悩に陥った。（二）その夫婦は、隠棲所、川、森、池など、あちこちの場所を探しまわった。（三）二人は何かの音を聞くたびに、息子ではないかと期待し、サティヤヴァットがサーヴィトリーとともに帰って来たと思って駆け寄った。（四）足は裂け、荒れ、傷つき、血まみれになり、身体はクシャ草や棘で刺され、二人は狂人のように駆けた。（五）それから隠棲所に住むすべてのバラモンたちがやって来て、取り巻き、慰めて、二人をその隠棲所に連れ帰った。（六）そこで苦行を積んだ長老たちは、王と妃を囲んで、昔の王たちのめざましい話を物語って慰めた。（七）そこで老夫妻は落ち着きを取りもどしたが、息子に会いたくてたまらず、息子の幼少の頃のできごとを思い出してはひどく苦しんだ。（八）二人は悲嘆のあまりやつれ、「ああ息子よ、ああよい嫁よ、どこにいるのか、どこにいるのか」

と悲痛な言葉を繰り返して述べて泣いた。（九）
スヴァルチャス仙は言った。
「その妻のサーヴィトリーが、苦行と自制とよい行動様式をそなえている（のが真実である）ように、サティヤヴァットは生きている。（一〇）」
ガウタマ仙は言った。
「私はヴェーダ聖典とその補助学を学習した。大なる苦行を積んだ。童貞を守り梵行を行じている。師と火神を満足させた。（一一）私は専心してすべての誓戒を行なった。風のみを食べる断食を行じ、すべての吉祥の行為を行なった。（一二）このような苦行により私は宿命をすべて知ることができる。この真実を聞きなさい。サティヤヴァットは生きている。（一三）」
弟子は言った。
「私の師匠の口から発せられた言葉が、決して偽りでないように、サティヤヴァットは生きております。（一四）」
聖仙たちは言った。
「彼の妻サーヴィトリーが、寡婦にならないようなすべての吉相をそなえているように、サティヤヴァットは生きている。（一五）」
バーラドゥヴァージャは言った。
「彼の妻サーヴィトリーが、苦行と自制とよい行動様式をそなえているように、サティヤヴァットは生きている。（一六）」

ダールビヤは言った。
「あなたの視力が回復し、サーヴィトリーが誓戒を守り、食事をしないで出かけたように、サティヤヴァットは生きている。（一七）」
マーンダヴィヤは言った。
「鳥獣が静寂な方角で鳴き、あなたの行動が王にふさわしいように、サティヤヴァットは生きている。（一八）」
ダウミヤは言った。
「あなたの息子がすべての美質をそなえ、人々に愛され、長寿の相をそなえているように、サティヤヴァットは生きている。（一九）」
マールカンデーヤは語った。――
真実を語るこれらの苦行者によって、このように元気づけられて、そして色々なことを考慮して、王は落ち着いたかのようであった。（二〇）それからすぐに、夜のうちに、サーヴィトリーは夫のサティヤヴァットとともに喜んで隠棲所に入って来た。（二一）
バラモンたちが言った。
「今日、あなたが息子と再会し、視力を取りもどしたのを見て、王よ、我々はみなしてあなたの幸運を祝います。（二二）息子との再会、サーヴィトリーとの再会、御自身が視力を取りもどしたこと。三重におめでとうございます。（二三）我々みなが言った通りです。その点、

疑問の余地はありません。すぐにあなたは、いやが上にも栄えることでしょう。（二四）」
マールカンデーヤは語った。――
それからすべてのバラモンたちは、聖火を燃やして、デュマットセーナの近くに座った。（二五）シャイビヤー（王妃）とサティヤヴァットとサーヴィトリーは隅の方に立っていたが、一同に許可されて、晴れ晴れとして、彼らといっしょに座った。（二六）
王とともに座っている、すべての森の住人は、好奇心にかられて、王子にたずねた。（二七）
「王子よ、あなたは妻とともに、何故もっと早く帰らなかったのか。どうして夜の終わりに帰ったのか。いかなる障害があなたにあったのか。（二八）御両親も我々も心配した。王子よ。理由があると思う。そのすべてを話してもらいたい。（二九）」
サティヤヴァットは言った。
「私は父に許可されて、サーヴィトリーを連れて出かけました。すると森の中で、木を切っているうちに、私は頭痛に襲われました。（三〇）苦痛のために私は長い間眠っていたようです。いまだかつて私は、それほど長い時間眠ったことは決してありません。（三一）あなたがたみなさんが心配しないようにと、夜の終わりにもどって来たのです。その他に理由はありません。（三二）」
ガウタマは言った。

「あなたの父デュマットセーナは、突然に視力を取りもどした。もしあなたがその理由を知らないのなら、サーヴィトリーが話しなさい。(三三) 私は聞きたい。サーヴィトリーよ、あなたは一部始終を知っている。サーヴィトリーよ、あなたは威光にかけてサーヴィトリー女神のようであると私は知っている。(三四) あなたは理由を知っている。それ故、真実を語りなさい。もしあなたに何も秘密がないなら、我々に言いなさい。(三五)」

サーヴィトリーは言った。

「あなたが御存じの通りです。あなたのお考えは間違えませんから。そして私には何も秘密はありません。真実をお聞き下さい。(三六)

偉大なナーラダ仙が私の夫の死を予言しました。そして今日、その日が来ました。そこで私は彼から離れませんでした。(三七) 彼が眠った時、ヤマ御自身が従者を連れて彼に近づきました。ヤマは彼を縛って、祖霊の住む方角（南方）に連れて行きました。(三八) 私はその強力な神を、真実の言葉によって讃えました。彼は私の五つの願いをかなえてくれました。それらを申し上げますから、お聞き下さい。(三九)

私の舅には両眼と王国という二つの賜物が授けられました。父には百人の息子が、自分にも百人の息子が授けられました。(四〇) 私の夫サティヤヴァットは四百年の寿命を得ました。夫の生命のために私は固い誓願を行なったのです。(四一) これは真実です。私はあなたに、遅くなった理由を詳らかに申し上げました。私の大きな悩みがハッピーエンドになった次第を。(四二)」

聖仙たちは言った。

「王家は災禍に襲われて闇よりなる池に沈んでいたが、行ない正しい貞女よ、家柄よく福徳の高い汝により、再び引き上げられた。(四三)」

マールカンデーヤは語った。——

このようにして、集まった聖仙たちはそのすばらしい女性を称讃し、敬意を表して、王と王子に別れを告げた。そしてすぐに、喜んだ彼らは幸せな気持で各自の家に帰った。(四四)

（第二百八十二章）

マールカンデーヤは語った。——

その夜が過ぎて、太陽が昇った時、すべての苦行者たちは朝の儀礼を終えて集まった。(一) 偉大な聖仙たちは、サーヴィトリーのすべての気高さを繰り返し語って飽きることを知らなかった。(二) それから、シャールヴァ国からすべての臣下がやって来て、あの敵の王が自分の大臣に殺されたことを告げた。(三) そして、敵王とその仲間と親類が大臣に殺されたと聞いて敵の軍隊が逃亡したことを、ありのままに報告した。(四) さらに、「盲目であってもなくても、彼が我々の王であるべきだ」と、王についてすべての国民が同一の意見であることを報告した。(五)

「王よ、我々はこのような決定のもとに派遣されました。これらの車も到着しました。四部門よりなるあなたの軍隊も来ております。(六)王よ、どうか出発して下さるようお願いいたします。あなたの勝利は都に鳴り響いております。幾久しく父祖伝来の地位におつき下さい。(七)」

王が視力を取りもどし、すばらしい姿をしているのを見て、一同は驚きで眼を見開き、頭を地につけて平伏した。(八)それから王は、隠棲所に住む長老のバラモンたちに挨拶し、彼ら一同からも敬意を表されて、都に向けて出発した。(九)シャイビヤー妃もサーヴィトリーとともに、軍隊に囲まれ、美しい敷物でおおわれ、人がひく光り輝く車に乗って出発した。(一〇)それから、宮廷祭僧たちは喜んでデュマットセーナの即位灌頂式を行ない、彼の偉大な息子を皇太子に即位させた。(一一)

その後、長い時が経って、サーヴィトリーに、その名声を増大させ、戦場から退却することのない、百人の勇猛な息子たちが生まれた。(一二)そして彼女と同腹の、非常に強力な百人の弟たちが、マドラ国王アシュヴァパティと王妃マーラヴィーとの間に生まれた。(一三)

このようにしてサーヴィトリーは、自身と父母と、姑と舅と、夫の一族を、すべて苦境から救い出したのである。(一四)同様にして、よい性行で敬われている優れた女性ドラウパディーは、貞女サーヴィトリーのように、あなた方すべてを救うであろう。(一五)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このようにして、偉大な聖者(マールカンデーヤ)に慰められて、パーンダヴァたちは悲しみと苦熱を離れて、カーミヤカの森で生活していた。(一六)

(第二百八十三章)

(43) 耳環の奪取（第二百八十四章―第二百九十四章）

太陽神、カルナに忠告する

ジャナメージャヤはたずねた。

「偉大なバラモンよ、あの時ローマシャは、インドラの言葉をうけて、パーンドゥの息子ユディシティラのもとに行って告げた。（一）『アルジュナがここにもどったら、あなたが決して明かさない深い恐怖を取り除くであろう』と（三・八九・二〇参照）。（二）最高の知者よ、カルナに関する大きな恐怖とは何か。徳性ある彼が誰にも告げなかった恐怖とは。（三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王中の虎よ、バラタ族の最上者よ、あなたがたずねるから、私はあなたに次の物語を語ろう。私の言うことをよく聞きなさい。（四）

十二年が過ぎ、十三年目が訪れた時、パーンドゥの息子たちに好意的なシャクラ（インドラ）は、カルナに施物を乞おうと企てた。（五）カルナの耳環を取ろうとする大インドラの意図を知り、太陽神スーリヤはカルナのもとに行った。（六）その真実を語る敬虔な勇士は、上等な敷布におおわれた高価な寝台に、安心して寝ていた。（七）太陽神は息子（カルナ）への愛情から、最高の哀れみに満ちて、夜中、夢に姿を見せた。（八）スーリヤはヨーガの力により、ヴェーダに通じた美しい姿のバラモンになり、カルナによかれと願って優しく告げた。（九）

「わが子カルナよ、真実を保つ者たちの最上者よ、私の言葉を聞きなさい。勇士よ、私は今、愛情から最高に有益なことを告げるから。（一〇）シャクラ（インドラ）がパーンダヴァたちによかれと願い、バラモンの姿をして、耳環を奪おうと企ててお前に近づくであろう。（一一）全世界の者たちがお前のいつものよい行ないを知っている。善き人々から乞われたら与え、自分は乞わないということを。（一二）わが子よ、お前はバラモンたちから乞われたら、必ず与える。財産であろうと、何か他のものであろうと、お前は決して拒絶しないという。（一三）お前がそのようであるのを知って、インドラは自ら、耳環と鎧を乞うために来るであろう。（一四）彼が乞うても、お前は耳環を与えてはならぬ。全力をあげて彼をなだめるがよい。それがお前にとって一番よいことだ。（一五）わが子よ、もし彼が耳環を乞うたら、お前は多くの理由をあげ、その他の財産を与えると言って、何度でも彼を止めるべきである。（一六）耳環を欲しがるインドラを、宝物や女たちや、享楽や多種の財物により、また多くの例証をあげて止めるべきである。（一七）カルナよ、もしお前が生まれつきつけている美しい耳環を与えるなら、お前の寿命は尽き、死の支配下に赴くであろう。（一八）誇りをもたらす者よ、お前はその鎧と耳環をつけていれば、戦闘において敵に殺されないという私の言葉を信じなさい。（一九）というのはその両者は甘露から生じた宝物からできたものだ。それ故カルナよ、もし生命が愛しいなら、その二つを守りなさい。（二〇）」

カルナは言った。

「あなたはどなたですか。私にこの上ない愛情を示してそのように言われるとは。尊者よ、

もしよろしければおっしゃって下さい。バラモンの装いをしているあなたは誰ですか。(二一)」

バラモンは言った。

「わが子よ、私は千の光線を持つ者(太陽)である。私は愛情からお前に指示するのだ。私の言った通りにしなさい。そうするのがお前にとって最良のことだ。(二二)」

カルナは言った。

「太陽の神が私によかれと願って、今日私に言われることは、まさに私にとってこの上ない幸せなことです。しかし私の言うことをお聞き下さい。(二三)願いをかなえるあなたにお願いします。私は愛情をこめて申し上げます。もし私があなたにとって愛しいなら、この誓戒をやめさせないで下さい。(二四)太陽の神よ、全世界が私の誓戒を知っています。私は必ずや、最高のバラモンに対して命すらも布施するでしょう。(二五)空を行く最上者よ、もしインドラがバラモンに変装して、パーンドゥの息子たちのために私に乞いに来るなら、最高の神よ、私は耳環と最高の鎧を与えるでしょう。三界に知れわたった私の名声が滅しないように。(二六―二七)私のような男にとって、名誉を失って命を守ることはふさわしくありません。名誉を守って死ぬことがふさわしく、世人に高く評価されることなのです。(二八)

もしインドラがパーンドゥの息子たちのために私に耳環を乞うために、施物を求めて私に近づいたら、私はインドラに耳環と鎧を与えるでしょう。そのことは、世間において私の名声を高め、インドラの不名誉となるでしょう。(二九―三〇)太陽の神よ、私は命懸けで世間にお

ける名誉を選びます。誉れ高い者は天界に達し、名誉を失った者は破滅します。(三一)というのは、世間において名誉は母のように人に生命を授けます。人が生きていても、不名誉はその生命を滅ぼします。(三二)世界の主である太陽の神よ、人間にとって名誉が寿命であるということについて、配置者(創造者)御自身が古(いにしえ)の詩節を歌っております。(三三)

人間にとって、来世では名声のみが最高の拠り所である。
またこの世においては、清浄な名声が寿命を増大させる。(三四)

そこで私は、ふさわしい布施を作法通りにバラモンたちに与え、生まれつき身につけた耳環を与えて、永遠の名声を得るでしょう。(三五)身体を戦闘(の火)の中に捧げ、非常になしがたい行為を行ない、戦場で敵を滅ぼして、私は名声のみを得るでしょう。(三六)戦いにおいて恐れ生命を求める人々に無畏を与え、老人と子供とバラモンたちを大きな危険から救って、私は世の中で最高の名声に達するでしょう。太陽の神よ。私にとって名誉は、生命をかけて守られるべきものです。それが私の誓戒であると知って下さい。(三七―三八)そこで私は、バラモンに変装したインドラに、その最高の施物を与えて、この世で最高の帰趨(天界)に行くでしょう。(三九)」

(第二百八十四章)

太陽神(スーリヤ)は言った。

「カルナよ、自分自身と友人と妻子と父母に有益でないことをしてはならぬ。(一)生類の最

上者よ、生類は身体を損なわないように名声を得ることを望むものだ。そうすれば天界における名声は確固たるものになる。(二)お前は生命を損なうことと引きかえに永遠の名声を望んでいるが、それは疑いもなく生命とともになくなってしまう。(三)人中の雄牛よ、この世では、父母も子供もその他の縁者たちも、誰でも、王たちもまた、生きている人々のために努力してなすべきことをするのである。人中の虎よ、わかってくれ。(四)光輝に満ちた男よ、名声も生きている人にとって好ましいのだ。死んで灰になった人にとっては、名声は何にもならない。死んだ者は名声を知ることはない。生きていてこそ名声を享受するのである。(五)死んだ人にとって、名声は死者の花輪のようだ。

お前は私を信愛しているから、お前の幸せを願って、私は次のことを告げる。(六)私の信者たちは守られるべきである、という理由からでもある。勇士よ、彼は最高の信愛により私を愛しているから、私にも愛情が生じた。そこでお前は私の言う通りにしなさい。(七)そしてここには、ある最高の存在が、個物（アートマン）に関して神に創造されたという問題がある。そこで私は、ためらうことなく次のようにしなさいとお前に告げる。(八)人中の雄牛よ、お前は神の秘密を知ることはできない。そこで私は秘密をお前に言わない。やがてお前もそれを知るであろう。(九)カルナよ、私は繰り返し告げる。心して聞け。あの乞食（こつじき）のなりをしたインドラにお前の耳環を与えてはならぬ。(一〇)光輝に満ちた男よ、輝かしい二つの耳環により、天空で二つのヴィシャーカ星の中央にある汚れない月のようにお前は輝く。(一一)名声は生きている人にとって好ましいものだということを知りなさい。わが子よ、お前は耳環を求めるインドラに対して拒絶しなさい。(一二)非の打ち所のない者よ、インドラが耳環を望むのに対し、お前は多くの理にかなった言葉で、何度でも拒絶するがよい。(一三)カルナよ、理路整然とし、優しさで飾られた言葉により、インドラの計画を退けなさい。(一四)というのは、人中の虎よ、お前は常にアルジュナと競い合っている。勇士アルジュナは、戦場において、お前と交戦するであろう。(一五)しかしアルジュナは、戦いにおいて、耳環をつけたお前に勝利することはできない。たとい彼の矢がインドラ自身であるとしても。(一六)それ故カルナよ、お前はこの美しい耳環をインドラに与えてはならぬ。もし戦場でアルジュナに勝利することを望むのなら。(一七)」

（第二百八十五章）

カルナは言った。

「最高に激しい光を放つ太陽の神よ、私が他のいかなる神よりもあなたを信仰しているということは御存知でしょう。(一)私の妻子や私自身や友人たちでさえ、信愛にかけて、あなたほど愛しいということは決してありません。太陽の神よ。(二)偉大な者たちは必ずや、愛し信仰する者たちに好ましい愛情を注ぐということを、太陽よ、あなたは知っておられる。(三)カルナは他のいかなる天の神よりも自分を愛し信仰しているということを知ったので、太陽神は私に有益なことを言われたのだ。(四)再び頭を下げてお願いいたします。また繰り返し申し上げます。太陽の神よ、どうかお許し下さい。(五)私は死よりも虚偽を恐れます。

私はいつもすべての善き人々に、特にバラモンたちに、生命すらもためらうことなく与えます。(六) そして神よ、あなたはまたパーンドゥの息子アルジュナについて私に告げられました。太陽よ、アルジュナや私に関する熱より生じた心の苦しみを追い払いなさい。私は戦いにおいてアルジュナに勝利するでしょう。(七) 神よ、あなたも御存知でしょう。私にはジャマダグニの息子（パラシュラーマ）や偉大なドローナから授けられた強力な武器の力があります。(八) 最高の神よ、私のこの誓戒をお許し下さい。インドラが乞うたら、私は自分の生命すら与えるでしょう。(九)」

太陽（スーリヤ）神は言った。

「わが子よ、もしインドラにこれらの美しい耳環を与えるなら、勝利のために、お前もまた彼に言うべきである。強力な男よ。(一〇) お前は約定により耳環をインドラに与えるべきである。実にお前は耳環をつけていれば、あらゆる生物に殺されない。(一一) インドラはアルジュナを用いて戦場でお前を亡き者にしようと意図して、お前の耳環を奪うであろう。(一二) そこでお前も、快い言葉で何度もインドラの機嫌を取って、その目的を必ず遂げる神々の主に請願すべきである。(一三)

『的を外すことなく敵を粉砕する槍を下さい。インドラよ、そうすればあなたに耳環と最高の鎧をさし上げます。(一四)』

このような約定により、お前はインドラに耳環を与えるべきである。カルナよ、そうすれば、お前は戦いにおいて敵たちを殺すであろう。(一五) というのは、勇士よ、その神々の王

の投槍は、幾百幾千の敵を殺さないうちは、再び持主の手にもどらないからである。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

太陽はこのように告げると、突然姿を消した。それからカルナは、祈禱の終わりに、太陽にその夢のことを報告した。(一七) カルナは見た通りに、ありのままに、両者の間で話されたことをすべて、次々と太陽に告げた。(一八) それを聞いて太陽の神スーリヤは、微笑して「その通りだ」とカルナに答えた。(一九) そこで敵の勇士を殺すカルナは、真実であったと知り、その槍を切望して、インドラを待っていた。(二〇)

（第二百八十六章）

カルナの出生の秘密

ジャナメージャヤはたずねた。

「ここで太陽はいかなる秘密をカルナに告げなかったのか。また、耳環はいかなるものか。鎧はいかなるものか。(一) 最上の方よ、その鎧と耳環はどこから彼のものになったのか。私はこのことを聞きたい。苦行を積んだ方よ、それを私に語って下さい。(二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

王よ、太陽の秘密をお話ししましょう。耳環と鎧がいかなるものであるかも。(三)

王よ、かつてクンティボージャ王のもとに、あるバラモンが訪れた。彼は激しい威光を持ち、偉丈夫で、髭を生やし、杖を持ち、髪を結っていた。(四) 見目よく、全身非の打ち所なく、威光により燃えるかのようであった。彼は蜜のような黄色で、甘美に話し、苦行とヴェーダ学習に飾られていた。(五)

その偉大な苦行者はクンティボージャに告げた。

「寛大な者よ、私はあなたの家で施食を食べることを望む。(六) あなたやあなたの従者たちは、私に不適切なことをしてはならない。もしよろしければ、このような条件であなたの家に滞在したい。非の打ち所のない者よ。(七) 私は望みのままに出入りする。そして、私が寝ている時や座っている時に、誰も邪魔をしないこと。王よ。(八)」

クンティボージャは喜んで次のように答えた。

「そのようにいたします。あるいはそれ以上にもいたします。」

そして更に、彼に告げた。(九)

「偉大なバラモン様、私にはプリター(クンティー)という誉れ高い娘がいます。性質よく、行ない正しく、貞節で、自制し、しかも高慢ではありません。(一〇) 彼女は恭しく軽んずることなくあなたに仕えるでしょう。彼女の性質と行ないに満足なさることでしょう。(一一)」

王はそのバラモンにこのように言って、作法通りにもてなしてから、大きな眼をした娘のプリターのところに行って告げた。(一二)

「娘よ、この気高いバラモンが私の家に住みたいと望んでいる。そして私はそれを承知して、

このように約束した。(一三) バラモンの御機嫌を取ることができるとお前を信頼して。わが子よ。そこで私の言葉を決して偽りにしてくれるな。(一四) この尊いバラモンは、苦行を積みヴェーダ学習に専念している。この威光に満ちた方が望むことは何でも、惜しむことなく与えなければならない。(一五) というのは、バラモンは最高の威光である。バラモンは最高の苦行(タパス)である。バラモンたちの敬礼により、太陽は天空で輝く。(一六) 実に大阿修羅ヴァーターピは尊敬に価する人々を敬わないで、梵杖(バラモンの呪詛)により殺された。ターラジャンガも同様である。(一七) 娘よ、そこで今、お前に重責が委ねられた。お前は常に専心してバラモンの御機嫌を取りなさい。(一八)

娘よ、幼少の頃からお前がすべてのバラモンたちや親や縁者に献身的であったことを、私は知っている。(一九) お前はまた、すべての召使や友人や親類や母や、私に対しても、すべて、ふさわしく尊敬して来た。(二〇) この都や宮中には、お前に満足しない者はいない。欠点のない身体をした女よ、お前は従者たちにも正しくふるまっているから。(二一) そこで短気なバラモンに対して、お前を起用すべきであると思う。プリターよ、お前は幼少の時に私の娘となった。(二二) お前はヴリシュニ族の家に、シューラの愛しい娘として生まれた。かつて父親は喜んで自らその女の子を私に与えた。(二三) お前はヴァスデーヴァ(シューラの息子)の姉で、私の最上の娘である。お前の父は最初に生まれた子を与えると約束したから、お前は私の娘となったのだ。(二四)

お前はそのような一族に生まれ、このような一族で育った。幸福な状態から幸福な状態に

至った。〔蓮が〕池から池に移るように。(二五) 美しい女よ、家柄の悪い女は、子供の頃から苦労して特別に仕込んでも、大概の場合堕落するものだ。(二六) しかしプリターよ、王家の生まれとすばらしい容姿のすべてを、美しいお前はすっかりそなえている。(二七) 美しいプリターよ、お前は尊大さと偽善と誇りをすっかり捨て、願いをかなえるバラモンを満足させれば、幸福と結びつくであろう。(二八) 非の打ち所のないよい女よ、そのようにすれば必ずや幸せになるであろう。しかしその最高のバラモンが怒れば、私のすべての一族は燃え尽きるであろう。(二九)

（第二百八十七章）

クンティー（プリター）は言った。

「王中の王よ、私は専心し尊敬をこめて、あなたが約束したようにバラモンに仕えるでしょう。私は偽りは申しません。(一) それに、バラモンを敬うべきだというのは私の本性に他なりません。そしてあなたの好むことをすべきだということが、私の最高の幸せです。(二) その尊い方が夕方に来られようと、朝に来られようと、夜に来られようと、真夜中に来られようと、私に対して怒ることがないでしょう。(三) 王中の王よ、最上の人よ、あなたの命令に従い、バラモンをもてなして、有益なことをするのは、それは私にとって利益になることです。(四) 王中の王よ、御安心なさい。その最高のバラモンは、あなたの家に滞在して、不愉快になることはないでしょう。私はこの真実をあなたに告げます。(五) 私はそのバラモンに

好ましいこと、あなたに有益なことをするよう努力します。非の打ち所のない王よ。御心配なさらないで下さい。(六) 王よ、栄光あるバラモンというものは尊敬されたら相手を救いますが、それと反対の場合は相手を殺します。(七) そこで私はそのことをよくわきまえて、その最高のバラモンを満足させます。王よ、私のせいでその最高のバラモンから苦しみを受けるということはないでしょう。(八) というのは、王中の王よ、王が過失を犯したら、バラモンは災いをもたらしますから。かつてスカニヤーのせいでチャヴァナが王に報復したように（三・一二二参照）。(九) 私はこの上なく献身的に最高のバラモンに奉仕します。あなたがその最上のバラモンに告げたように。(一〇)」

王は言った。

「よい娘よ、その通りだ。お前はためらうことなく、私のために、一族のために、自分のために、そのように行なうべきである。(一一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

子供を愛する誉れ高いクンティボージャは、そのように娘のプリターに告げると、彼女をかのバラモンに与えた。(一二)

「バラモンよ、ここにいる私の若い娘は安楽に育てられました。何か過失を犯しましても気になさらないで下さい。(一三) 気高いバラモンは、老人や子供や苦行者が過失を犯しても、大概の場合、怒らないものです。(一四) 過失が非常に大きくても、バラモンは忍耐すべきで

す。力の限り、最大の努力を払っておもてなし致しますから、お受け下さい。最高のバラモンよ。(二五)」

バラモンが「承知した」と答えたので王は喜び、彼にハンサ鳥や月光のように白い家を贈った。(二六)そこの聖火室において、彼のために輝かしい座席を作り、食物などすべてを提供した。(二七)王女は怠ることなく、誇りを捨てて、バラモンを満足させるために最大の努力をした。(二八)善良なプリターは専ら清浄さを保ち、礼儀正しく仕えるためバラモンのもとに行き、神のように敬ってすっかり満足させた。(二九)

(第二百八十八章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

さて大王よ、その堅く誓戒を守る少女は、清らかな心で、堅く誓戒を守るバラモンを満足させた。(一)その最高のバラモンは、時には、「私は朝に来る」と告げながら、夕方か夜に来ることもあった。(二)しかしその少女は、あらゆる時に、これでもかこれでもかと飲食物を出し、住居を整えて、いつも接待した。(三)食物などでもてなすこと、寝床や座席でもてなすことは、日が経過するにつれて一層念入りになり、疎略になることはなかった。(四)彼が叱っても、悪口を言っても、不愉快なことを言っても、プリターは決してバラモンに不愉快なことはしなかった。(五)バラモンはたびたび時間に遅れて帰り、また帰らないこともあった。そして食物が入手しがたい時に食物を出せと言った。(六)しかしプリターは、「すべて準

備できております」と彼に答えた。そしてその非の打ち所のない少女は、弟子のように、息子のように、妹のように、非常に献身的に、望みのままに、最高のバラモンを喜ばせた。(七―八)その最高のバラモンは、彼女の性質と行ないに満足した。彼女は更に彼のためにこの上なく努力した。(九)父は朝に夕に彼女にたずねた。

「娘よ、バラモンはお前の奉仕により満足されているか。(一〇)」

誉れある女は、「最高に満足しておられます」と答えた。そこで気高いクンティボージャはこの上ない喜びを得た。(一一)

それから満一年が経過した時、その最高の祈禱者は、プリターにいささかの過失も見出さず、彼女に親愛の情を注ぐようになった。(一二)彼は満足して彼女に告げた。

「美しい女よ、私はお前の奉仕に満足した。(一三)よい女よ、人間には得られがたい願いごとを選べ。それによりお前が名声の点ですべての女を凌駕するような。(一四)」

クンティー（プリター）は言った。

「最高のヴェーダ学者よ、あなたと父が私に満足して下さるなら、私にとってすべてが成就したことになります。バラモンよ、私には願いをかなえる必要がありません。(一五)」

バラモンは言った。

「美しい微笑の女よ、もし私に願いをかなえられることを望まないなら、神々を招き寄せるためにこの呪句（マントラ）を受け取りなさい。(一六)よい女よ、お前がいかなる神をこの呪句で呼び求めようとも、その神はお前の支配下に帰するであろう。(一七)好むと好まざるとにかかわら

ず、その神はお前の支配下に帰せざるを得ない。この呪句に鎮められて、お前の言葉に召使のように平伏するであろう。(二八)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

非の打ち所のない彼女はその時、呪詛を恐れて、その最高のバラモンの申し出を二度ことわることはできなかった。(二九) そこでそのバラモンは、欠陥のない身体をした彼女に、『アタルヴァ・シラス』に説かれている一連の呪句を授けた。(三〇) 彼は呪句を授けてからクンティボージャに告げた。

「王よ、私は快適に滞在し、あの娘にすっかり満足した。(三一) あなたの家において、いつもよくもてなされ、よく敬われた。ひとまずお別れする。」

と言って彼は消え失せた。(三二) 王の方は、その場でバラモンが消えたのを見て、すっかり驚き、そしてプリターに敬意を表した。　(第二百八十九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その最高のバラモンが去って、少し時が経った時、その少女は一連の呪句がどのくらいの効力があるものかと考えた。(一)

「あの偉大な方が私に授けて下さったこの一連の呪句はいかなるものか。私は近いうちにそ

の力を知るだろう。(二)」

このように考えているうちに、彼女はたまたま生理を見た。少女は生娘であるのに生理を迎えたことを恥じた。(三) その時、プリターは、燃える太陽が昇るのを見た。彼女はその黎明の太陽の美しい姿を飽かず眺めていた。(四) 彼女の視力は神的になり、鎧をまとい耳環で飾られた、神聖な姿の神を彼女は見た。(五) 彼女は呪句に対して好奇心を起こした。そしてその美しい女はかの神を呼び出した。(六) 彼女は気(プラーナ)を浄めて、太陽を呼び出した。すると直ちに太陽がやって来た。(七) 彼は蜜のような黄色で、大きな腕を持ち、巻貝のような首をし、微笑し、腕環をつけ、冠をかぶり、諸方を燃やすかのようであった。(八) 彼はヨーガにより自身を二分し、一つはそこに来て、もう一つは〔天空で〕輝いていた。そしてクンティーに向かって、最高に甘い言葉で話しかけた。(九)

「よい女よ、私は呪句の力によりお前の支配下に来た。王女よ、私はお前の意のままだ。何をすればよいか、言ってくれ。私はお前のためにそれをするだろう。(一〇)」

クンティーは言った。

「神様、そこから来られた場所におもどり下さい。私は好奇心からお呼びしました。神様、お許し下さい。(一一)」

太陽は言った。

「細い胴の女よ、お前の言う通り帰るであろう。しかし、神を呼んでおいて、空しく帰らせることは道理にもとる。(一二) 美しい女よ、お前の意図は太陽から息子が生まれるようにと

いうことだ。その力にかけて世に比類ない、鎧と耳環をつけた息子が。(一三)そこで象のように歩く女よ、お前は自分の体を与えよ。意図した通りの息子がお前に生まれるであろう。(一四)美しい微笑の女よ、もし私がお前と交わらないで立ち去るなら、私は怒って、お前やあのバラモンやお前の父親を呪うであろう。(一五)お前のせいで、私は必ずやすべてのものを焼くだろう。そして、お前の非道を知らない、お前の愚かな父をも。(一六)そしてまた、お前の性質と行ないを知らないで呪句を授けたあのバラモンも、今、ひどく懲らしめてやる。(一七)インドラをはじめとする天上のすべての神々は、お前に欺かれた私を笑いながら見ている。美しい女よ。(一八)お前は天眼をそなえているから、あの神々の群を見よ。私はつい先程、お前が私を見られるように、その天眼をお前に与えたのだ。(一九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから王女はすべての神々を見た。彼らは各自のふさわしい場所において、天空に立っていた。そして〔天空の〕輝く偉大な太陽を、同様に、輝きわたる〔眼前の〕太陽神を見た。(二〇)若い王女は彼らを見て恥じらい、恐れて太陽に告げた。

「太陽の神様、御自分の天宮におもどり下さい。私は生娘ですから、そのような要求は困ってしまいます。(二一)父母とその他の目上の人々がこの身を与えることができます。私は世間の法（ダルマ）を破りたくありません。女性が自分の身を守ることは称讃されます。(二二)太陽の神様、私は幼稚さから、呪句の力を知りたいと思ってあなたを呼んでしまいました。子供だと大目に見て、私のことをお許し下さい。(二三)」

太陽は言った。

「私は子供だと大目に見て親切にしているのだ。他の女はこのように親切にされないであろう。クンティ王の娘よ、自分を与えよ。そうすればお前の罪は鎮まるだろう。可愛い女よ。(二四)そしてまた、私が無駄足を踏んで帰ることはよろしくない。欠陥のない身体の女よ、私は世間で笑いものになるであろう。そしてすべての神々の非難の的になるであろう。美しい女よ。(二五)そこでお前は私と交われ。私と似た息子を得るであろう。そしてお前は全世界において最も優れた女になるであろう。美しい女よ。(二六)」　（第二百九十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その賢明な娘は色々と甘い言葉を述べたが、太陽をなだめることはできなかった。(一)少女は太陽を拒絶することができずに、彼の呪詛を恐れて、長い間、方策を考えた。(二)

「この怒った太陽から、どうしたら罪もない父やバラモンが呪われずにすむだろうか。(三)子供といえども賢明な者は、ひどく迷妄にかられて、隠していた威光や苦行の力をあまりにも発揮すべきではない。(四)そこで今、私はこの上なく恐れ、しっかりと手をつかまれてしまった。しかし、どうして、すべきでないことをすることができよう。自らこの身を与えることなど。(五)」

彼女はこのように呪詛を恐れ、何度も考えこみ、すっかり困惑し、何度も笑みを浮べた。（六）彼女は呪いを恐れ、親族のことを気づかい、恥じらいに満ちた声で、その神に告げた。（七）

クンティーは言った。

「神よ、私の父母や他の親族は生きております。彼らが生きているうちは、このように不道徳なことはできません。（八）神よ、あなたと交わるというような不道徳なことがもしあれば、私のせいで、世間におけるこの一族の名誉は失われるでしょう。（九）しかし、熱する者たちの最高者よ、もしあなたが、これが法（ダルマ）であると考えられるなら、親族に与えられることなく、私はあなたの望み通りにします。（一〇）侵しがたい方よ、私はあなたに自分を与えてからも、純潔でありますように。体あるものの法、名誉、名声、寿命はあなたにかかっています。（一一）」

太陽は言った。

「美しい微笑の女よ、お前の父母や目上の人々はお前を支配できない。美しい尻の女よ、お前に幸あらんことを。私の言うことを聞け。（一二）美しい女よ、カニヤー（娘）とはカンという語根からできた語で、すべての者を欲する（カーマヤテー）ということである。それ故、この世でカニヤーは自由にふるまうのだ。美しい尻の、美しい色をした女よ。（一三）お前は何ら非法（アダルマ）を犯すわけではない。美しい女よ、私は世界によかれと願っているのに、どうして非法を犯すことがあろうか。（一四）美しい色の女よ、すべての女は、そして男も、抑制されることは

ない。これは世間のものたちの本性である。その他の状態はむしろ変異であるとされる。（一五）お前は私と交わっても、再び生娘になるであろう。そしてお前に、誉れ高い強力な息子が生まれるであろう。（一六）」

クンティーは言った。

「一切の闇を払う方よ、もしあなたから私に息子が生まれるなら、耳環をつけ、鎧を着た、強力な勇士でありますように。（一七）」

太陽は言った。

「よい女よ、耳環をつけ神聖な鎧を着た勇士が生まれるであろう。その二つは甘露（アムリタ）よりなるものであろう。（一八）」

クンティーは言った。

「もし私の息子の耳環と最高の鎧が甘露からできているなら、どうかその息子を私に生ませて下さい。（一九）神様、おっしゃったように私と交わって下さい。その子があなたの力と容姿と気力と威光をそなえ、徳（ダルマ）をそなえているように。（二〇）」

太陽は言った。

「魅力的な王女よ、アディティ女神がこの耳環を私に与えたのだ。私はそれと、最高の鎧とをお前に授けよう。可愛い女よ。（二一）」

プリター（クンティー）は言った。

「わかりました、太陽の神様。あなたの言われるような息子が生まれるなら、あなた様と交

わりましょう。（二二）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

「よろしい」と言って太陽の神は、ヨーガによりクンティーに入った。そして彼女の臍に触れた。（二三）すると王女は太陽の威光によりぼうっとし、そして寝台の上で失神して倒れた。（二四）

太陽は言った。

「美しい尻の女よ、私は行く。お前は息子を生むであろう。すべての武人の最上者である息子を。そしてお前はまた生娘にもどるであろう。（二五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからその少女は恥じらいながら、去りゆく光り輝く太陽に、「そのようになりますように」と言った。（二六）

クンティ王の娘はこのように告げられ、恥じらいながら太陽に頼んでいたが、失神して、切られた蔓草のように、清浄な寝台に倒れた。（二七）太陽はその威光により彼女を失神させて、ヨーガにより彼女に入りこみ、自分の子を宿させた。しかし太陽は彼女を全く汚さなかった。それから、その少女は再び意識を取りもどした。（二八）（第二百九十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから王よ、プリターに胎児が宿った。それはちょうど第十一番目の白分（白月）の空における月のようであった。（一）その美しい尻の少女は親族を恐れて、妊娠を隠していた。誰も彼女の状態に気づかなかった。（二）その娘は少女部屋にいて、巧みに身を隠していたので、乳母を除いて、他の女たちは誰も彼女について知らなかった。（三）やがてその美しい色の女は、神の恩寵により、生娘のままで、神のような子供を産み落とした。（四）お告げのように、その子は鎧を着て、金色に輝く耳環をつけ、彼の父のように、黄色の眼をし雄牛のような肩をしていた。（五）その美しい女は、乳母の助言に従い、生まれたばかりのその子を、まわりをすっかりおおった葛籠に入れた。（六）その葛籠には蜜蠟がぬられ、〔その内部は〕快適で柔らかで、上等のカヴァーでおおわれていた。そして彼女は泣きながらその子をアシュヴァ川に投げこんだ。（七）処女が妊娠することは許されないと知りつつも、彼女は息子への愛情から、悲痛に嘆いた。（八）葛籠をアシュヴァ川の水に投げこんだ時、泣きながらクンティーが言ったことを聞きなさい。（九）

「息子よ、空中と大地と天上と水中の生き物に害されることがありませんように。（一〇）あなたの道が吉祥でありますように。あなたに障害がありませんように。息子よ、敵意のないものが近づいて来ますように。（一一）水の神であるヴァルナ王が、水中であなたを守りますように。遍在する風が、空中であなたを守りますように。（一二）熱するものの最高者である

太陽、あなたの父が、いたるところであなたを守りますように。息子よ、彼が神聖な作法によりあなたを私に授けたのです。(二三)アーディティヤ神群、ヴァス神群、ルドラ神群、サーディヤ神群、一切諸神、マルト神群、インドラ神、諸方位と方位神たち。(二四)これらすべての神々が、平坦な土地、平坦でない土地においてあなたを守らんことを。あなたが異郷にあっても、鎧が目印となって、私はあなたを見分けるでしょう。(一五)

息子よ、あなたの父親である太陽の神は幸せです。川を流れるあなたを、神聖な眼で見るでしょうから。(二六)あなたを息子と見なす女は幸せです。渇いたあなたが彼女の乳房を飲むでしょうから。神から生まれた息子よ。(一七)彼女はどんな夢を見るでしょう。神聖な鎧を着て神聖な耳環で飾られた、太陽のように輝き、蓮のような切れ長の眼をし、紅蓮のような赤い手で輝き、美しい額で、美しい髪のあなたを、息子と見なす女は。(一八―一九)息子よ、地面をはっているあなたを見る人々は幸せです。はっきりしない可愛い言葉をしゃべり、ほこりでまみれたあなたを……。(二〇)息子よ、青春の盛りに、ヒマーラヤの森に生まれた獅子のようなあなたを見る人々は幸せです。(二一)」

このようにプリターは何度も嘆き悲しみ、それからその葛籠をアシュヴァ川の水に投じた。(二二)王よ、蓮花の眼をしたプリターは乳母とともに、深夜、息子のことで嘆き悲しみ、息子を見たいと切望しながらも、葛籠を投げこんでから王宮に帰った。彼女は父が目を覚ますのを恐れつつも、繰り返し嘆き悲しんでいた。(二三―二四)

一方その葛籠は、アシュヴァ川からチャルマンヴァティー川に流れ、そこからヤムナー川

へ、そこからガンガー川(ガンジス)へと流れて行った。(二五)そして葛籠に入れられた幼児は、波に運ばれて、ガンガー河畔の、スータ(カースト名。吟誦者、御者)の住むチャンパーの都に着いた。(二六)甘露から生じた神聖な鎧と耳環と、神の定めた運命とが、その子を生きながらえさせた。(二七)　(第二百九十二章)

インドラに耳環と鎧を奪われる

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ちょうどその時、ドリタラーシトラの友人で、アディラタというスータが、妻とともにガンガー川に来ていた。(一)彼の妻はラーダーという名前で、容姿にかけて地上に比類のないすばらしい婦人であったが、息子を得ることができなかった。そこで特に子供を得るために、最高の努力をしていた。(二)

彼女はたまたま、葛籠が流れて来るのを見つけた。それはお守りの紐を結び、取っ手で飾られていた。それは、ガンガーの波によって彼女のそばに運ばれた。(三)その美しい女は、好奇心にかられて、その流れて来た葛籠を把捉させて、スータであるアディラタに報告した。(四)彼はその葛籠を取り上げ、水辺から引き離した。そして道具で開けると、そこに赤児を見出した。(五)その子は朝日のようであり、黄金の鎧を身に着け、すばらしい耳環をつけ、輝かしい顔をしていた。(六)スータは妻とともに、驚嘆のあまり眼を大きく見開いた。そし

てその子を膝にのせて、妻に告げた。(七)
「可愛い女よ、生まれて以来、このように不思議なことを見たことがない。神の子が我々のもとに来たと私は思う。(八) 私は子供がいないので、きっと神々がこの子を授けたのだ。」
彼はそう言って、その子をラーダーに渡した。(九) その神々しい姿をした、蓮花の内部のように美しい、栄光に満ちた神の子を、ラーダーは作法に従って、息子として受け入れた。(一〇) そしてふさわしく彼を養育した。彼は強力な男として成長した。それから、二人の実子として、別の息子たちが生まれた。(一一)
バラモンたちはその子供が黄金の鎧を着て、黄金の耳環をつけているのを見て、彼にヴァスシェーナという名前をつけた。(一二) このように、無量の勇猛さをそなえた強力な男は、スータの息子となり、ヴァスシェーナ、あるいはヴリシャとして知られた。(一三) この強力な男は、スータの長男として、アンガ国において成長した。プリター(クンティー)は、彼が神聖な鎧を着ていることを、スパイを通じて知った。(一四) スータのアディラタは、時が来て息子が成長したのを見て、象の都(ハースティナプラ)に旅立たせた。(一五) その強力な男は、そこで弓術を学ぶためにドローナに師事した。そしてドゥルヨーダナと友情を結んだ。(一六) 彼はドローナ、クリパ、(パラシュ)ラーマから四種の武器を修得し、最高の弓取りになり、世に知られるようになった。(一七) 彼はドゥルヨーダナと同盟を結び、プリターの息子たちに敵対し、常に偉大なアルジュナと戦うことを望んだ。(一八) 最初に会った日から、カルナはアルジュナと競い、アルジュナはカルナと競った。(一九) 彼が耳環と鎧をつけているのを見て、

ユディシティラは彼が戦闘において不死身であると考えて苦悩した。(二〇)
王中の王よ、真昼にカルナが合掌して水中に立ち、輝く太陽を讃える時、バラモンたちは財物を求めて彼のもとに行く。その時、彼がバラモンたちに与えないものは何もない。(二一―二二) インドラはバラモンとなって、「施物を下さい」と言って彼のもとに行った。その時カルナは、「ようこそ」と彼に告げた。(二三)

(第二百九十三章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
ヴリシャ(カルナ)は、バラモンに変装した神々の王が訪れたのを見て、「ようこそ」と言った。彼は相手の意図を知らなかった。(一)
「黄金のネックレスか、女か、多くの牛の群のいる村落をさし上げましょうか」と、アディラタの息子はバラモンにたずねた。(二)
バラモンは言った。
「黄金のネックレスや女や、その他の喜びを増大させるものを、私はいただきたくない。そういうものは、それが欲しい連中に与えて下さい。(三) 非の打ち所のない者よ、もしあなたが誓いを忠実に守るなら、生まれつき身につけている鎧と耳環を切り取って私に下さい。(四) 勇士よ、すぐにそれをいただきたい。すべての贈物のうちでそれが私にとって最高の贈物であると考える。(五)」

カルナは答えた。
「バラモンよ、私はあなたに土地か女か牛をあげる。長年にわたって供物をあげる。鎧と耳環はかんべんして下さい。(六)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
バラタの最上者よ、カルナはこのように様々に言葉を尽くして懇願したが、そのバラモンは他の贈物を願わなかった。(七)力の限りなだめ、作法に従って敬ったが、その最高のバラモンは他の賜物を望まなかった。(八)最高のバラモンが他の贈物を願わなかったので、カルナは微笑して言った。(九)
「バラモンよ、私の鎧は生得のものであり、耳環は甘露(アムリタ)から生じたものである。そこでこの世で私は不死身なのだ。だからこれをあげるわけにはゆかない。(一〇)平安で危険を除去した、広大な地上の王国を、どうぞ私から受けて下さい。バラモンの雄牛よ。(一一)耳環と生得の鎧を取られたら、私は敵にうち破られるであろう。最高のバラモンよ。(一二)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
インドラ神が他の贈物を願わなかった時、カルナは笑って次のように言った。(一三)
「神々の主よ、私は前もってあなたの正体を知っていた。だがシャクラよ、私が見返りなくあなたの願いをかなえることは道理にかないません。(一四)というのは、あなたは神々の主

ですから、あなた御自身が私の願いをかなえるべきです。そしてまた、あなたはその他の生類の主であり、万物の創造者ですから。(一五)神よ、もし私が耳環と鎧を与えれば、私は不死身ではなくなり、あなたはもの笑いの種になるでしょう。シャクラよ。(一六)それ故シャクラよ、どうぞ私の耳環と鎧とを交換の品として受け取りなさい。さもなければ私は与えません。(一七)」
インドラは言った。
「前もって私があなたのもとに来ることを太陽が知っていた。彼がお前にすべてを告げたに相違ない。(一八)よろしい、カルナよ、お前の望むようにしよう。私の金剛杵(ヴァジュラ)を除いて、望みのものを選べ。(一九)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
そこでカルナはその希望がかなって喜び、インドラに近づき、「決して的を外さない槍を下さい」と願った。(二〇)
カルナは言った。
「鎧と耳環と交換に、私にその槍を下さい。戦いの最中に敵の群を殺す、決して的を外さぬ槍を。(二一)」
インドラは少しの間、心の中で考えて、槍を求めるカルナに対して告げた。(二二)
「耳環と生得の鎧を私にくれ。カルナよ、次のような約定のもとに、私の槍を受け取れ。

（二三）——私が悪魔たちと戦っている間に、この的を外さぬ槍は、私の手から離れると、幾百の敵を殺してから、再び私の手にもどって来る。（二四）その槍は、お前の手に帰すると、一人の強力な轟きわたる威光に満ちた敵を殺してから、他ならぬ私にもどることとなる。スータの息子よ。（二五）」

カルナは言った。

「私は大きな戦いにおいて、轟きわたる威光に満ちた、私を恐怖させる一人の敵を殺したい。（二六）」

インドラは言った。

「お前は戦場で、一人の強力な轟きわたる敵を殺すであろう。しかしお前が殺したいと願う一人の男は、偉大な者に守られている。（二七）ヴェーダを知る人々がヴァラーハ（猪）、アジタ（無敵の者）、ハリ、不可思議なるナーラーヤナと呼ぶところの、あのクリシュナによって守られているのだ。（二八）」

カルナは言った。

「そうであっても、神よ、一人の勇士を殺すために、その的を外さぬ槍が私のものになりますように。それで威光に満ちた者を私が殺すことができるような。（二九）ところで、私は耳環と鎧を身体から切り取ってさし上げます。切り取られた身体の部分が醜いことがありませんように。（三〇）」

インドラは言った。

「カルナよ、お前には醜さは決してないであろう。身体に傷もつかないだろう。お前は不真実を望まないから。（三一）最も雄弁な男よ、再びお前の父の色と威光と同様になるであろう。カルナよ。（三二）しかし、他の武器がある時、そして身に危険がない場合に、不注意にその的を外さぬ槍を放つならば、それはまさにお前自身に落ちるであろう。（三三）」

カルナは言った。

「あなたが告げられたように、最高に危険な場合に、このインドラの槍を放つであろう。シャクラよ、私はあなたにこの真実を誓う。（三四）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから彼は燃え上がる槍を受け取ってから、鋭利な刀を持ち、全身を切った。（三五）このようにカルナが自分の体を切り裂いているのを見て、すべての神々、人間、魔類、シッダの群は叫び声を上げた。というのは、彼には苦痛から生ずる変化が全くなかったから。（三六）それから、天上の太鼓が鳴り響いた。そして天上の花の雨がおびただしく降った。人間の英雄カルナが刀で全身を切り、何度も微笑しているのを見て。（三七）

それからカルナは、神聖な鎧を身体から切り取り、まだ濡れているそれをインドラに渡した。同様に、耳環を切り取って彼に与えた。カルナはこの行為によりヴァイカルタナ（切り取る者）と呼ばれる。（三八）

そしてインドラは、カルナを欺き、彼に世間の名声を得させてから、笑いながら、パーン

ダヴァたちのためになすべき仕事をしたと考えた。それから彼は天上に昇って行った。（三九）

ドリタラーシトラのすべての息子たちは、カルナが耳環と鎧を奪われたことを聞いて落胆し、誇りを砕かれたようになった。スータの息子がそのような有様になったことを聞いて、森にいるプリターの息子（パーンダヴァ）たちは歓喜した。（四〇）

ジャナメージャヤはたずねた。

「パーンダヴァの勇士たちはどこにいたのか。また彼らはどこからそのよい知らせを聞いたのか。また、十二年目が過ぎた時、彼らは何をしたのか。尊者よ、それをすべて私に語って下さい。」（四一）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

シンドゥ国王（ジャヤドラタ）を敗走させて、クリシュナー（ドラウパディー）を取りもどしてから、彼らはマールカンデーヤから古の神々や聖仙の偉業を詳しく聞いた。そして勇士たちは、バラモンたちとともに、また戦車や随行の人々とともに、御者や厨房長たち一同を引き連れて、カーミヤカの隠棲所から出て、おそましい森の生活をすべて終了して、清浄なドゥヴァイタの森にもどって来た。（四二—四三）

（第二百九十四章）

(44) 火鑽棒（ひきりぼう）（第二百九十五章—第二百九十九章）

ジャナメージャヤはたずねた。

「クリシュナー（ドラウパディー）を奪われてこの上ない苦しみを味わってから、彼女を取りもどした後、パーンダヴァたちは何をしたのか。（一）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このように、クリシュナーが奪われてこの上ない苦しみを味わってから、ユディシティラ王は、弟たちとともにカーミヤカを離れた。（二）それからマールカンデーヤの心地よい隠棲所の方、美味な根と木の実のある美しいドゥヴァイタの森に再びもどった。（三）すべてのパーンダヴァたちはクリシュナーとともに、そこでつましく木の実を食べ、節食して滞在した。（四）クンティーの息子ユディシティラ王、ビーマセーナ、アルジュナ、マードリーの二人の息子たちは、そのドゥヴァイタの森に住んでいたが、その勇猛で徳性あり、誓戒を堅く守る勇士たちは、バラモンのために、結果としては幸せをもたらしたのではあるが、ある大きな苦難を経験した。（五—六）

アジャータシャトル（ユディシティラ）が弟たちとともに森に座っていた時、あるバラモンが急いでやって来て、悩みつつ次のように告げた。（七）

「火鑽棒（ひきりぼう）を含む私の資具が木に吊されていました。ところがそれが、角で木をこすっている鹿の角にひっかかってしまいました。（八）王よ、大鹿はそれを持ち去り、隠棲所から急いで出て全速力で逃げて行きました。（九）そこで大鹿の後を追って、すぐにつかまえて連れて来て下さい。火供（アグニホートラ）を害なうことのないように。パーンダヴァの方々よ。（一〇）」

ユディシティラは弟たちとともに、弓をとって駆け出した。（一一）すべての人中の雄牛たちは、身支度して走り、バラモンのために懸命になり、急いで鹿を追った。（一二）パーンダヴァの勇士たちは、種々の矢を放ったが、すぐ近くに見える鹿を射貫くことができなかった。（一三）彼らは努力したが、大鹿は姿を消してしまった。気高い男たちは、鹿が見えなくなったので疲労困憊した。（一四）パーンダヴァたちは奥深い森に、涼しい陰を落としているバニヤン樹を見つけ、飢えと渇きに満ちた体で、そのそばに座った。（一五）彼らが座っている間、ナクラは苦悩し、憤慨して長兄に言った。（一六）

「この我々の一族においては、法（ダルマ）は決して滅びることはなく、放逸から実利（アルタ）が欠けることもなかった。しかるに王よ、一切の生類のうちで無上の我々が、いかなる理由で再び危機に瀕したのか。（一七）」

（第二百九十五章）

ユディシティラは言った。

「災禍には限界もなければ動機も原因もない。この世では、法が善悪二つの果報を配分する。

(一)」
ビーマは言った。
「あそこで、シーターを召使のように集会場に連れて来た案内係を私が殺さなかったので、このような危機に陥ったのだ。(二)」
アルジュナは言った。
「スータの息子（カルナ）が発した、堅い骨をも砕くような、非常に乱暴な言葉を私が許容したので、このような危機に陥ったのだ。(三)」
サハデーヴァは言った。
「バーラタよ、シャクニが賭博であなたを破った時、私が彼を殺さなかったので、このような危機に陥ったのだ。(四)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
それからユディシティラ王はナクラに告げた。
「マードリーの息子よ、木に登って十方を見よ。(五) 付近に水を見つけろ。あるいは水辺に生える樹木を見つけろ。弟よ、ここにいる兄弟たちは疲れ、渇いている。(六)」
ナクラは「承知しました」と言って、樹木に急いで登り、いたるところ見まわして兄に告げた。(七)
「王よ、水辺に生える多くの樹が見えます。そして鶴（サーラサ）たちの鳴き声がします。そこには疑

いもなく水があります。(八)」
すると堅く誓いを守るユディシティラは言った。
「よい男よ、すぐにそこに行って、急いで水を持って来てくれ。(九)」
ナクラは「承知しました」と言って、長兄の命により、水のあるところに走って行き、すぐにそこに到着した。(一〇) 彼は鶴たちに囲まれた清浄な湖水を見て、水を飲みたいと思ったところ、虚空から声が聞こえた。(一一)
「なあ、無謀なことをしてはならぬ。これは先に私が所有したものだ。マードリーの息子よ、私の問いに答えてから水を飲み、運んでいけ。(一二)」
しかしナクラは非常に渇いていたので、その言葉を無視して冷たい水を飲んだ。そして水を飲むと倒れてしまった。(一三)
ナクラがなかなか帰らないので、ユディシティラはその弟の勇士サハデーヴァに告げた。(一四)
「なあ、サハデーヴァよ、お前の兄はなかなか帰らない。お前が兄を連れもどし、水を運んで来い。(一五)」
サハデーヴァは「承知しました」と言って、同じ方角に行った。すると、兄のナクラが殺されて地面に倒れているのを見つけた。(一六) 彼は兄の死で悲嘆に暮れたが、渇きに苦しみ、水辺に駆け寄った。すると例の言葉が聞こえた。(一七)
「なあ、無謀なことをしてはならぬ。これは私が先に所有したものだ。私の問いに答えてか

ら、望みのままに水を飲み、運んでいけ。(一八)」
　しかしサハデーヴァは非常に渇いていたので、その言葉を無視して冷たい水を飲んだ。そして水を飲むと倒れてしまった。(一九)
　さて、ユディシティラはアルジュナに言った。
「勇士アルジュナよ、お前の弟たちはなかなか帰らない。どうか彼らを連れもどし、水をもって来てくれ。(二〇)」
　そう言われて、賢明なアルジュナは、弓矢をとり、刀を引き抜いて、あの湖に近づいた。(二一)アルジュナは、人中の虎である弟たちが、水を得るために行った場所で殺されているのを見出した。(二二)人中の獅子であるアルジュナは、二人が眠ったかのように倒れているのを見て、非常に悲しみ、弓を構えてその大森林を見た。(二三)その大森林に何ものも見出さなかったので、アルジュナは疲れ、水辺に駆け寄った。(二四)駆け寄った時、彼は虚空から発せられた声を聞いた。
「どうして近寄るのか。お前は力ずくでこの水を飲むことはできない。(二五)クンティーの息子よ、もし私が言った問いに答えたなら、水を飲み、運んでいくことができる。バーラタよ。(二六)」
　このように止められて、アルジュナは言った。
「姿を現わして止めろ。矢で射貫かれて、再びそのように言えなくなるだろう。(二七)」
　アルジュナはそのように言って、呪句で加持した矢を、すべての方角に、声を頼りに雨のように射かけた。(二八)彼は種々の矢を放ち、おびただしい矢の雨を空中に降らせた。バラタの雄牛よ。(二九)
　夜叉は言った。
「アルジュナよ、射ても無駄だ。質問に答えてから水を飲め。質問に答えないで飲めば、お前は生きていられないだろう。(三〇)」
　ヴァイシャンパーヤナは語った。——
　しかしアルジュナは、その必殺の矢を放ってから、渇きに苦しめられた。そこで質問のことはまったく無視して水を飲み、すぐに倒れた。(三一)
　さて、ユディシティラはビーマセーナに言った。
「ナクラとサハデーヴァと無敵のアルジュナは、水を求めに行ったまま、なかなか帰って来ない。どうか彼らを連れもどし、水を運んで来てくれ。(三二―三三)」
　ビーマセーナは「承知しました」と言って、同じ方角に行った。そこには、人中の虎である彼の弟たちが倒れていた。(三四)彼らを見てビーマは悲嘆に暮れたが、渇きにも苦しめられた。そしてその勇士は、これは夜叉か羅刹の仕業であると思った。そして、今日は必ずや戦わなければならないと考えた。(三五)しかし狼腹(ビーマ)は、まず水を飲もうと思った。そしてその人中の雄牛は、水を渇望して、水辺に駆け寄った。(三六)
　夜叉は言った。

「なあ、無謀なことをしてはならぬ。これは先に私が所有したものだ。クンティーの息子よ、私の問いに答えてから水を飲み、運んでいけ。(三七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

無量の威光を持つ夜叉にこのように言われたビーマは、質問のことは全く無視して水を飲み、すぐに倒れた。(三八)

それから、人中の雄牛であるユディシティラ王は考え込み、燃える心をして立ち上がった。(三九)そしてその誉れ高い王は、人の気配のない、ルル鹿や猪や鳥たちが住む大森林に入った。そこは黒ずんだ色や輝く色をした樹々で飾られ、蜂たちや鳥たちが歌声をあげていた。(四〇—四一)栄光ある王は、その森を進んで行くうちに、黄金の群で飾られた、ヴィシュヴァカルマン（一切造者）が造ったような、あの湖を見出した。(四二)その湖は、蓮の群、シンドゥヴァーラ、葦、ケータカ、カラヴィーラ、ピッパラ〔などの植物〕でおおわれていた。疲労したユディシティラは、その湖を見て驚き、そこに近づいて行った。(四三)

（第二百九十六章）

謎をかける夜叉

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ユディシティラはインドラのような弟たちが殺されて倒れているのを見た。それは、宇宙紀（ユガ）の終末が訪れた時、世界守護神たちが倒れているかのようであった。(一)彼はアルジュナが弓矢を散乱させて殺されているのを見た。そして、ビーマセーナと双子が息絶えて動かなくなっているのを見た。(二)彼は悲しみの涙にかきくれてため息をつき、「何者が勇士たちを殺したのか」と、理性的に考えてみた。(三)「彼らには武器による傷あとはない。そこには誰の足あともない。私の弟たちを殺したのは、大きな魔物かも知れない。私は一心不乱に考えてみよう。まてよ、水を飲んでからにしよう。(四)あるいは、いつも邪なドゥルヨーダナが、ガーンダーラの王（シャクニ）が謀ったことを密かに実行したものか。(五)あいつにとっては、善も悪も同じだ。いかなる勇士が、あの自制心のない愚者を信頼できるか。(六)あるいは、あの悪党が秘密工作員を用いてこのように企てたのか。」このようにその勇士は色々と考えた。(七)そして、「彼の毒によりこの水が汚染されたのではない、私の弟たちの顔色は明るく清らかである」とも考えた。(八)「一人一人、暴流のような力を持つこれらの最高の男たちに対し、カーラ（破壊神）、死神（アンタカ）、ヤマ（閻魔）以外の何者が対抗することができようか。(九)

このように結論して、彼はその水に飛び込んだ。彼が水に浴している時、虚空から声が聞こえた。(一〇)

夜叉（ヤクシャ）は言った。

「私は藻や魚を食べる鶴（バカ）である。私がお前の弟たちを殺した。王子よ、もし私がたずねる質問に答えなければ、お前は五番目になるだろう。(一一)なあ、無謀なことをしてはならぬ。これは先に私が所有したものだ。クンティーの息子よ、私の問いに答えてから水を飲み、運

んでいけ。（二二）」
ユディシティラは言った。
「あなたはルドラ神群かヴァス神群か、マルト神群の長か。あなたはいかなる神か、おたずねする。これはシャクニの仕業ではない。（二三）ヒマーラヤ、パリヤートラ、ヴィンディヤ、マラヤという四つの山を、地上で誰がその威光により倒せるのか。（二四）最高に強力な者よ、あなたはこの上なく偉大な行為をした。激戦において神々やガンダルヴァ（半神の一種）や阿修羅や羅刹もできなかったようなことをしたのだから。それは非常に驚異的なことだ。（二五）私はあなたの目的も意図も知らない。私には大きな好奇心が生まれた。そして恐怖も訪れた。（二六）私は心が痛み、頭に熱を生じた。尊い方よ、おたずねする。そこに立っているあなたは何者か。（二七）」
夜叉は言った。
「私は夜叉である。汝に幸いあれ。私は水鳥ではない。お前のこの強力な弟たちはすべて、私に殺されたのだ。（二八）」
ヴァイシャンパーヤナは語った。——
そのように語る夜叉の荒々しい不吉な言葉を聞くと、ユディシティラは近づいて立った。（二九）そしてバラタの雄牛は、堤によりかかって立っている夜叉を見た。それは醜い（または「多くの」）眼を持ち、巨体で、棕櫚のように高くそびえ、火や太陽のようであり、侵しがたく、山のようであった。大力で、雷雲のように深い声で彼をおどしていた。（二〇—二一）

夜叉は言った。
「王よ、そこにいるお前の弟たちは、私に何度も止められたのに、無理に水を取ろうとした。そこで私は彼らを殺した。（二二）生きたいと望む者は、王よ、この水を飲んではいけない。プリターの息子よ、無謀なことをしてはならぬ。これは先に私が所有したものだ。クンティーの息子よ、私の問いに答えてから水を飲み、運んでいけ。（二三）」
ユディシティラは言った。
「夜叉よ、私はあなたが先に所有したものを望まない。なるほど、善き人々は常に、自分で自分を讃えるようなことを非難するものだが、それにしても、知力の限りあなたの質問に答えよう。私に質問して下さい。（二四—二五）」
夜叉は問うた。
「何が太陽を昇らせるか。何がその随行者であるか。何がそれを没せしめるか。それは何において安立するか。（二六）」
ユディシティラは答えた。
「ブラフマン（梵）が太陽を昇らせる。神々がその随行者である。法（ダルマ）がそれを没せしめる。それは真実（サティヤ）において安立する。（二七）」
夜叉は問うた。
「人は何によって博識となるか。何により偉大なるものに達するか。何をもって（よき）伴

侶とするか。何により知性を得るか。（二八）」
　ユディシティラは答えた。
「学習により博識となる。苦行（修養）により偉大なるものに達する。堅固さ（充足）をもって（よき）伴侶とする。長老に仕えることにより知性を得る。（二九）」
　夜叉は問うた。
「バラモンにとって神性とは何か。彼らにとって、善き人々の法（ダルマ）のようなものは何か。彼らの人間性は何か。彼らにとって不善の人々の不正のようなものは何か。（三〇）」
　ユディシティラは答えた。
「彼らにとってヴェーダの学習が神性である。彼らにとって、善き人々の法のようなものは苦行（修養）である。死が人間性である。不善の人々の不正のようなものは中傷である。（三一）」
　夜叉は問うた。
「王族（クシャトリヤ）にとって神性とは何か。善き人々の法のようなものは何か。彼らの人間性は何か。彼らにとって、不善の人々の不正のようなものは何か。（三二）」
　ユディシティラは答えた。
「彼らにとって弓矢が神性である。彼らにとって、善き人々の法のようなものは祭祀である。恐怖が人間性である。不善の人々の不正のように、放棄することが不正である。（三三）」
　夜叉は問うた。
「祭祀の唯一の歌詠（サーマン）は何か。祭祀の唯一の祭詞（ヤジュス）は何か。それのみが祭祀を傷つけるものは何

か。祭祀は何を超えることがないか。（三四）」
　ユディシティラは答えた。
「気息（プラーナ）が実に祭祀の歌詠である。意（こころ）が実に祭祀の祭詞である。言葉のみが祭祀を傷つける。祭祀は言葉を超えることはない。（三五）」
　夜叉は問うた。
「降下するもののうちで最上のものは何か。落下するもののうちで最上のものは何か。立っているもののうちで最上のものは何か。しゃべるもののうちで最上のものは何か。（三六）」
　ユディシティラは答えた。
「降下するもののうちで最上のものは雨。落下するもののうちで最上のものは種。立っているもののうちで最上のものは牛。しゃべるもののうちで最上のものは息子。（三七）」
　夜叉は問うた。
「感官の対象を知覚し、知性をそなえ、世間的に尊敬され、一切の生類のうちで尊ばれ、呼吸をするが、生きていないものは何か。（三八）」
　ユディシティラは答えた。
「神様、客人、使用人、祖先、自己。これら五つに供物を捧げない人は、呼吸をすれども（真に）生きてはいない。（三九）」
　夜叉は問うた。
「大地よりも重いものは何か。空よりも高いものは何か。風よりも速いものは何か。人間の

数よりも多いものは何か。(四〇)」
ユディシティラは答えた。
「母は大地よりも重い。父は空よりも高い。意(こころ)(思考)は風よりも速い。心配は人間の数よりも多い。(四一)」
夜叉は問うた。
「眠っていても眼を閉じないものは何か。生まれても動かないものは何か。心を持たないものは何か。速やかに成長するものは何か。(四二)」
ユディシティラは答えた。
「魚は眠っていても眼を閉じない。卵は生まれても動かない。石は心を持たない。川は速やかに成長する。(四三)」
夜叉は問うた。
「旅人の友は何か。家に住む人の友は何か。病人の友は何か。死に行く人の友は何か。(四四)」
ユディシティラは答えた。
「旅人の友は隊商。家に住む人の友は妻。病人の友は医者。死に行く人の友は布施。(四五)」
夜叉は問うた。
「一人でさまようものは何か。一度生まれて再び生まれるものは何か。寒さの薬は何か。巨大な容器は何か。(四六)」

ユディシティラは答えた。
「太陽が一人でさまよう。月が再び生まれる。火が寒さの薬である。大地が巨大な容器である。(四七)」
夜叉は問うた。
「一言で法(ダルマ)にかなったものは何か。一言で名誉とは何か。一言で〔人を〕天界に導くものは何か。一言で幸福とは何か。(四八)」
ユディシティラは答えた。
「一言で法にかなったものは〔仕事の〕能力である。一言で名誉とは布施である。一言で天界に導くものは真実(サティヤ)である。一言で幸福とは徳性(シーラ)(正しい生活)である。(四九)」
夜叉は問うた。
「人間にとって〔真実の〕自己(アートマン)とは何か。運命に作られた友とは何か。彼の生命を維持するものは何か。彼の最高の寄る辺は何か。(五〇)」
ユディシティラは答えた。
「人間にとって息子が自己である。妻が運命に作られた友である。雨が彼の生命を維持するものである。布施が彼の最高の寄る辺である。(五一)」
夜叉は問うた。
「富の中で最高のものは何か。財産の中で最高のものは何か。所得の中で最高のものは何か。幸福の中で最高のものは何か。(五二)」

ユディシティラは答えた。
「富の中で最高のものは有能さである。財産の中で最高のものは知識である。所得の中で最高のものは健康である。幸福の中で最高の物は満足である。(五三)」
夜叉は問うた。
「世の中で最高の法(ダルマ)は何か。常に実りある法は何か。それを抑制しても、人々が悲しまないものは何か。何ものとの結びつきが、すり切れることがないか。(五四)」
ユディシティラは答えた。
「温情が最高の法である。ヴェーダの法が常に実りある。意(こころ)を抑制(御制)しても、人々は悲しまない。善き人々との結びつき(際交)は、すり切れることはない。(五五)」
夜叉は問うた。
「何を捨てたら人は好ましくなるか。何を捨てても人は悲しまぬか。何を捨てたら人は金持になるか。何を捨てたら人は幸福になれるか。(五六)」
ユディシティラは答えた。
「高慢さを捨てたら人は好ましくなる。怒りを捨てても人は悲しまない。欲望を捨てたら人は金持になる。貪りを捨てたら人は幸福になれる。(五七)」
夜叉は問うた。
「死んだ人間とはどのようなものか。死んだ王国とはどのようなものか。死んだ祖霊祭とはどのようなものか。死んだ祭祀とはどのようなものか。(五八)」

ユディシティラは答えた。
「貧乏人が死んだ人間である。王のいない王国が死んだ王国である。博識のバラモンのいない祖霊祭が死んだ祖霊祭である。謝礼の払われぬ祭祀が死んだ祭祀である。(五九)」
夜叉は問うた。
「何が〔正しい〕方角であるか。何が水と呼ばれるか。何が食物であるか。何が毒であるか。祖霊祭の〔正しい〕時間を告げよ。(六〇)」
ユディシティラは答えた。
「善き人々が〔正しい〕方角である。虚空が水である。牛が食物である。要求が毒である。バラモンが祖霊祭の〔正しい〕時間である。夜叉よ、あなたはどのように考えるか。(六一)」
夜叉は言った。
「勇士よ、お前は私の質問に正しく解答した。今度は人間とは何か語れ。また、一切の財を有する人とは何か。(六二)」
ユディシティラは答えた。
「清浄な行為の〔名〕声は天地にとどく。その〔名〕声が存続する限り、人間と呼ばれる。(六三) その人にとって、好ましいことと好ましくないことが同一で、苦楽も同一で、過去も未来も同一なる時、それがまさに一切の財を有する人である。(六四)」
夜叉は言った。
「王よ、お前は人間と、一切の財を有する人について解答した。それ故、弟たちのうちで、

お前が望む一人を生き返らせてやる。(六五)」
　ユディシティラは言った。
「色浅黒く、赤い眼をし、大きい棕櫚のようにそびえ、広い胸をし、大きな腕を持つナクラが生き返るように。夜叉よ。(六六)」
　夜叉は言った。
「このビーマセーナはお前にとって好ましい。またアルジュナはお前の拠り所である。それなのに王よ、何故、腹違いのナクラを生き返らせたいと望むのか。(六七)ビーマの力は一万頭の象に匹敵する。そのビーマを捨てて、何故にナクラを生き返らせたいと望むのか。(六八)また、ビーマはお前のお気に入りであると人々は言う。それなのに、いかなる根拠で腹違いの弟を生き返らせたいと望むのか。(六九)すべてのパーンダヴァはアルジュナの腕力に依存している。そのアルジュナを捨てて、何故にナクラを生き返らせたいと望むのか。(七〇)」
　ユディシティラは言った。
「真実よりして、温情が最高の法（ダルマ）であると私は考える。私は温情を追求する。夜叉よ、ナクラが生き返るようにして下さい。(七一)人々は、常に徳行の王であると、私のことを知っている。私は自己の法から逸脱することはできない。夜叉よ、ナクラが生き返るようにして下さい。(七二)私にとってはクンティーもマードリーも同様で、二人の間に区別はない。二人の母に平等にしたいのです。夜叉よ、ナクラが生き返るようにして下さい。(七三)」

　夜叉は言った。
「お前は実利（アルタ）や享楽（カーマ）よりも、温情が最高であると考える。それ故、お前のすべての弟たちが生き返るようにしてやろう。バラタの雄牛よ。(七四)」
（第二百九十七章）

ダルマ神の恩寵

　ヴァイシャンパーヤナは語った。——
それから、夜叉の言葉により、パーンダヴァたちは立ち上がった。そしてその瞬間、全員の飢えと渇きはなくなった。(一)
　ユディシティラは言った。
「湖に一本足で立っている無敵のあなたにおたずねする。あなたはいかなる神か。夜叉ではないと私は思う。(二)ヴァス神群かルドラ神群の一人か。あるいはマルト神群の最上者、神々の主であるインドラか。(三)というのは、私のこの弟たちは、無数の戦を戦ったが、倒されるようなことは見たことがない。(四)彼らは快適に目覚め、感官の働きももどったようだ。そこであなたは我々の親友である。あるいは父親である。(五)」
　夜叉は言った。
「わが子よ、私はお前の父のダルマ神である。こよなく柔和な者よ。私はお前に会いたくてやって来たのだよ。バラタの雄牛よ。(六)名声、真実、自制、清浄、廉直、廉恥、落着き、

布施、苦行、梵行（清浄行）。以上は私の体である。(七) 不殺生、平等の境地、寂静、苦行、清浄、物惜しみしないこと。以上は私に至る門であると知れ。お前はいつも私にとって愛しいから。(八) 幸いなことに、お前は五つ〔の善〕に専念し、幸いなことに、六つ〔の災い〕を克服している（六つの災いとは、注によれば、飢え、渇き、悲しみ、迷妄、老年、死。）。それらのうち、二つは最初に生じ、二つは中間に生じ、二つは最後に生じ、来世に結びつく。(九) 私はダルマ神だ。御機嫌よう。お前を試そうとしてここに来たのだ。私はお前の温情に満足した。お前の望みをかなえてやろう。非の打ち所のない者よ。(一〇) 王中の王よ、願いごとを選べ。私はお前に授けるであろう。実に私を信愛する人々が不幸になることはないから。(一一)」

ユディシティラは言った。

「鹿がバラモンの火鑽棒その他を持って行ってしまいました。彼の聖火（アグニ）が損なわれないように、というのが私の第一のお願いです。(一二)」

ダルマは言った。

「クンティーの息子よ、私が鹿に変装してバラモンの火鑽棒などを奪った。王よ、お前を試すためだ。(一三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

尊い神は、「かなえるであろう」と答えた。「どうか他の願いごとを選びなさい。神のような男よ。(一四)」

ユディシティラは言った。

「森林での十二年間が過ぎ、十三年目が来ようとしています。我々がどこに住んでいても、人々が我々を見つけることがありませんように。(一五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

尊い神は、「かなえるであろう」と答えた。そして更に、不屈の勇者ユディシティラを励ました。(一六)

「もしお前がそのままの姿で地上を歩きまわっても、三界において、誰もお前を見分けることがないであろう。バーラタよ。(一七) パーンダヴァたちは私の恩寵により、この十三年目を、ヴィラータ王の都で、密かに人に正体を知られずに暮らすであろう。(一八) みなそれぞれ思い思いの変装をするがよい。(一九) さあ、この火鑽棒その他をバラモンに返しなさい。私はお前たちを試すために、鹿の姿をとってこれを奪ったのだ。(二〇) 息子よ、無比の偉大な第三の願いごとを選べ。というのは、王よ、お前は私から生まれたから。ヴィドゥラも私の部分的化身であるが。(二一)」

ユディシティラは言った。

「私は神々の神である永遠なるあなたを拝見した。父よ、そなたが満足してかなえて下さる願いを私は拝受します。(二二) 私は貪欲と迷妄と怒りを常に克服したいです。主よ。私の意（こころ）がいつも布施と苦行と真実とに存しますように。(二三)」

ダルマは言った。

「パーンダヴァよ、お前は本性よりして一切の美質をそなえている。お前はダルマそのものだから。再び、言われた通りのことがお前に実現するであろう。(二四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

世界を繁栄させる尊い神ダルマは、このように告げると姿を消した。そして賢明なるパーンダヴァは、一同そろって安楽に眠った。(二五) それからすべての勇士たちは、疲労も取れ、隠棲所に帰り、あのバラモンの苦行者に火鑽棒を渡した。(二六)

この〔弟たちの〕再生と、父と息子の出会いの、名声を高める偉大な物語を唱える人は、感官を制御し、自制し、孫子の代まで、百歳生きるものとなろう。(二七)

この物語を常によく知っている人々の心は、決して、非法（アダルマ）、友人の離間、他人の財産を奪うこと、他人の妻を犯すこと、卑しい状態に喜ぶことはなかろう。(二八)

（第二百九十八章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

不屈の勇者パーンダヴァたちは、ダルマと別れ、隠れて、人知れず十三年目を過ごそうと

した。彼らを愛する森に住む苦行者たち、誓戒を堅く守る賢者たちが、こぞって彼らのそばに座った。偉大で徳高い男たちは、合掌して苦行者たちに言った。誓戒を守る彼らは、そのような生活をするため、別れを告げたのである。(一二)

「あなた方はすべてを知っておられる。ドリタラーシトラの息子たちは、詐術により我々の王国を奪い、まったくの無一物にした。(三) 我々は森において十二年間、苦労して生活した。残りの十三年目は、人に知られずに住む期間である。であるから我々は隠れて生活する。そこで、お別れすることをお許し下さい。(四) 我々の仇敵である邪悪なスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）とカルナとシャクニとは、スパイを用いて（異本の読みに従う）我々のことを知れば、専心して、我々の市民や縁者に悪さをすることであろう。(五) 我々一同が、バラモンたちとともに、自分の国土において自分の王位につけるような、そんなことが我らに再びあるであろうか。(六)」

清浄なるダルマの息子ユディシティラ王は、そのように言って悲嘆に暮れ、涙で喉をつまらせて、気絶せんばかりであった。(七) すべてのバラモンたちは、弟たちとともに、彼を元気づけた。その時ダウミヤは、意義深い言葉を王に告げた。(八)

「王よ、あなたは賢明で、自制し、約束を守り、感官を制御している。そのような人々は、いかなる窮迫時にも迷わぬものだ。(九) 偉大な神々ですら、敵対者と戦うために、しばしばあちこちで隠れて窮迫時をしのいだ。(一〇) インドラはニシャダ国に行き、山の高原の隠棲所に隠れ住み、敵たちの力をくじく仕事をした。(一一) ヴィシュヌは悪魔たちを殺すために、アディティの胎内に宿る前に、馬の頭をつけて、長い間、知られることなく過ごした。

（二二）またヴィシュヌは、御存知のように、侏儒の姿をとって身を隠し、その超三界により〔諸世界〕を燃やすような〕行為をなした。わが子よ、そのこともすべて御存知だ。（二三）また梵仙アウルヴァは、母の腿に隠れ住んで、諸世界〔を燃やすような〕行為をなした。わが子よ、そのこともすべて御存知だ。（二四）そしてまたハリ（ヴィシュヌ）は、ヴリトラを殺すために隠れて、インドラの金剛杵（ヴァジュラ）に入り込み、目的を達した。法（ダルマ）を知る者よ、それも御存知である。（二五）そしてまた、火神は隠れて水の中に入り、神々のためにあのような行為をした。そのこともすべて御存知だ。（二六）同様にわが子よ、最高の威光を有するヴィヴァスヴァット（太陽神）は、隠れて地上に住み、すべての敵をすっかり焼き尽くした。（二七）また恐ろしく勇猛なヴィシュヌは、〔ラーマとして〕身を隠して、ダシャラタの家に住み、十頭者（ラーヴァナ）を戦闘において殺した。（二八）このように、これらの偉大な者たちは、いたるところで身を隠し、戦闘において敵を征服した。同様にして、あなたも勝利するであろう。（二九）」

このようにして、法を知るユディシティラは、ダウミヤの言葉にすっかり満足し、もはや論書の知性と自分自身の知性から揺らぐことはなかった。（三〇）その時、強者のうちの最上者である、大力の勇士ビーマセーナは、次のように告げて王をすっかり喜ばせた。（三一）「大王よ、アルジュナはあなたの意向を考慮して、法に従おうと思い、何ら無謀なことをしなかった。（三二）敵を滅する恐ろしく勇猛なサハデーヴァとナクラは、常に私に制止されているが、奴らを粉砕する能力がある。（三三）私らはあなたが命ずる任務を捨てはしない。あなたがすべて取り決めて下さい。我々は速やかに敵どもを滅ぼします。（三四）」

ビーマセーナがこのように言った時、バラモンたちは最高の祝福の言葉を述べて、パーンダヴァたちに別れを告げて、各自の家に帰って行った。（三五）すべてのヴェーダに通じた主立った苦行者や隠者たちは、適切に祝福を述べてから、再会を望んだ。（三六）賢明なパーンダヴァの勇士たちは、ダウミヤとともに立ち上がり、クリシュナー（ドラウパディー）をともなって出発した。（三七）理由があって、その場所から一クローシャ（約二マイル）ほど離れたところに行き、翌朝になって、人中の虎たちは、隠れて生活する方法を懸命に考えた。（三八）一同はそれぞれ〔政治〕論書に通じ、すべて政策に通達して、和平と戦争の時を知っていたが、政策を協議するために座った。（三九）

（第二百九十九章）

第4巻　ヴィラータ王の巻（ヴィラータ・パルヴァン）

第一章―第六十七章

(45) ヴィラータ王（第一章―第十二章）

正体を隠してヴィラータの都に滞在する

ジャナメージャヤはたずねた。
「私の先祖たちは、どのようにしてヴィラータの都に人知れず滞在したのか。ドゥルヨーダナを恐れつつ。(一)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。——
法(ダルマ)を保つ者のうちの最上者ユディシティラは、ダルマ神から願いをかなえてもらってから隠棲所にもどり、バラモンたちに一部始終を告げた。(二) ユディシティラはバラモンたちにすべてを語ってから、火鑽棒(ひきりぼう)その他をあのバラモンに渡した。(三) それからダルマの息子ユディシティラ王は、弟たちみなを集めて、次のように言った。バーラタよ。(四)
「我々は十二年の間、王国から亡命した。ここに十三年目がやって来たが、それは困難で、最高に過ごしがたいものだ。(五) そこでアルジュナよ、敵に知られずに我々一同が滞在できるような場所を選べ。(六)」
アルジュナは言った。
「王よ、あのダルマ神御自身が願いをかなえて下さったことにより、我々は人々に知られることなく遍歴できるであろう。バラタの雄牛よ。(七) しかしながら、滞在するために、いくつかの心地よい、目立たない王国の名をあげる。そのうちのいずれかを選びなさい。(八) クル族の周囲に、心地よく食料に富む国土がある。パーンチャーラ、チェーディ、マツヤ、シューラセーナ、パタッチャラ、ダシャールナ、ナヴァラーシトラ、マッラ、シャールヴァ、ユガンダラ。(九) 王よ、これらのうちでどの国に住みたいですか。王中の王よ、我々はこの一年間、どこに住むのでしょう。(一〇)」
ユディシティラは言った。
「勇士よ、その通り、あの一切の生類の主である尊い神が言われた通りで、別様にはならないであろう。(一一) しかし、是非ともみなでいっしょに相談して、我々が住むために、心地よく吉祥で快適で、どこからの危険もない場所を見つけなければならない。(一二) あの強力なマツヤ国王ヴィラータは、パーンダヴァを守ってくれるだろう。彼は法(ダルマ)を実践し、寛大で、長老であり、大富豪である。(一三) 弟よ、この一年間、我々はヴィラータの都で、彼の仕事をして過ごそう。バーラタよ。(一四) 我々はそれぞれ彼のために種々の仕事をすることができるであろう。各々のできる仕事を言いなさい。(一五)」
アルジュナは言った。
「王よ、ヴィラータ王の王国においてあなたはどのように仕事をしますか。善き人よ、いかなる仕事により楽しまれるのか。(一六) 王よ、あなたは柔和で寛大で廉恥心あり、法を守り、約束を堅く守るが、窮迫時に陥っている。パーンダヴァよ、何をしますか。(一七) 王よ、あなたは一般の人のように、しかるべき労苦を知らない。そこで、このような恐ろしい窮迫時

に際し、それを乗り越えるか。(二八)」
ユディシティラは言った。
「人中の雄牛であるヴィラータ王のもとに行って私がやろうとする仕事を聞け。(二九)私は骰子(さいころ)遊びに通じた、賭博を好むカンカという名のバラモンになって、あの偉大な王の宮廷に仕える者となろう。(三〇)瑠璃、黄金、象牙の骰子と、輝きつやつやした木の実の骰子、魅力的な黒色の骰子、赤色の骰子をころがすであろう。(三一)もし王が私にたずねたら、『私はかつてユディシティラの刎頸(ふんけい)の友でした』と彼に答えよう。(三二)
以上、私は自分がいかに過ごすかを述べた。狼腹(ビーマ)よ、ヴィラータのところでお前はいかなる仕事により楽しむか。(三三)」

(第一章)

ビーマは言った。
「私はバッラヴァという名の厨房長と称して、ヴィラータ王に仕えよう、というのが私の考えだ。(一)私は彼のためにスープを作ろう。私は台所で巧みに調理する。私は王を喜ばせ、前に彼のスパイスを作った熟練の人々をも凌駕するであろう。(二)私は大きな薪の山を運んで来るだろう。そのすばらしい仕事を見て王は喜ぶだろう。(三)もし私が強力な象や大力の雄牛を制御する必要があれば、私はそれらをも抑制するであろう。(四)いかなる力士(格闘士)たちが競技場で挑戦して来ても、私は彼らを打ち倒すであろう。そしてあの王の喜びを増大

させるであろう。(五)しかし、私は決してそれらの挑戦者たちを殺さないであろう。彼らが死なないように、ただ倒すだけだ。(六)誰かがたずねたら、私はユディシティラに仕えたコック、牛殺し、スープ作り、力士であると彼に答えるであろう。(七)私は自分で自分を守りつつ生活するであろう。王よ、以上、私がどのように過ごすかを申し上げた。(八)」
ユディシティラは言った。
「かつて火神(アグニ)はカーンダヴァの森を燃やそうと望んで、バラモンとなって、クリシュナといっしょにいる最上の人アルジュナに会った。(九)強力で無敵な、クル族の勇士に。そのアルジュナはいかなる仕事をするのか。(一〇)そのアルジュナは、森の火事に遭遇し、火の神を満足させた。彼は一騎でインドラに勝ち、蛇(竜)や羅刹たちを殺した。その最高の戦士であるアルジュナは何をするか。(一一)
熱するもののうちで太陽が最上である。二本足のうちでバラモンが最上である。蛇のうちでコブラが最上である。輝きをもつもののうちで火が最上である。(一二)武器のうちで金剛杵(ヴァジュラ)が最上である。牛のうちでこぶ牛が最上である。水たまりのうちで海が最上である。雨降らすもののうちで雨神(パルジャニヤ)が最上である。(一三)竜のうちでドリタラーシトラ(竜王の名)が最上である。象のうちでアイラーヴァタが最上である。愛しいもののうちで息子が最上である。親密なもののうちで妻が最上である。(一四)
狼腹(ビーマ)よ、私は同類のもののうちで最も優れたものをあげたが、同様に、若きアルジュナは、すべての弓取りのうちで最上である。(一五)インドラやヴァースデーヴァ(クリシュナ)に

もひけをとらない、ガーンディーヴァ弓と白馬の持主であるこのアルジュナは何をするのか。(二六) 輝かしい神のような姿の彼は、五年間インドラの宮殿に住んで、神的な武器を得た。(二七) 私が思うに、彼は第十二のルドラだ（ルドラ神群は十一名よりなる）。アーディティヤ神群のうちの十三番目だ。彼の両腕は釣り合いがとれ、長く、弓弦があたるのでその皮膚は固くなっている。右も左も雄牛の肩のこぶように隆起している。(二八) 山々のうちのヒマーラヤのように、河川のうちの海のように、神々のうちのシャクラ（インドラ）のように、ヴァス神群のうちの火神のように、獣類のうちの虎のように、鳥類のうちのガルダ鳥のように、武士(もののふ)のうちの最上者であるアルジュナは何をなすのか。(二九―三〇)」

アルジュナは言った。

「王よ、私は女形(おやま)であると称します。というのは、王よ、私の両腕についた大きな弓弦の傷あとを隠すことはむずかしいので。(三一)〔腕環の連で腕の傷あとを隠します（異本に基づく）。〕私は両耳から火のような耳環をぶらさげ、頭は弁髪を結います。王よ、私はブリハンナダーという名です。(三二) 私は女となり、何度も物語を朗誦し、王やその他の宮中の人々を楽しませます。(三三) 王よ、私はヴィラータの王宮にいる女たちに、歌や多彩な踊りや種々の楽器を教えます。(三四) 臣下たちに礼儀作法や仕事のやり方をたくさん教えます。クンティーの息子よ、私は幻術により、自分で自分を隠します。(三五) 王にたずねられたら、ユディシティラの邸でドラウパディーの召使として住んでいたと答えます。(三六) このような詐術により、ナラのように、ヴィラータの宮廷で快適に過ごすでしょう。王中の王よ。(三七)」（第二章）

ユディシティラは言った。

「なあ、ナクラよ、お前は非常に繊細で、勇士ではあるが、見目麗しく、快適さに慣れている。何をしてそこで過ごすのか。(一)」

ナクラは言った。

「私はヴィラータ王の馬丁になり、グランティカと名乗ります。この仕事はとても気に入っています。(二) 私は馬の調教と治療に巧みです。クルの王よ、私はあなたと同じように、いつも馬が好きです。(三) ヴィラータの都で、人々が私にたずねたら、私も〔兄たちと〕同様に答え、〔隠れて〕過ごしましょう。(四)（異本を考慮して訳した。）」

ユディシティラは言った。

「サハデーヴァよ、あの王のもとでお前はどのようにして過ごすか。弟よ、お前は何をしながら隠れて暮らすか。(五)」

サハデーヴァは言った。

「私はヴィラータ王の牛飼になりましょう。私は牛を制御し、乳を搾ることができ、牛を数えることに巧みです。(六) 私はタンティパーラという名で知られるでしょう。覚えておいて下さい。うまくふるまいます。心配しないで下さい。(七) あなたは以前、いつも牛に関することで私を用いました。そこで私はその仕事に熟達しました。王よ、(八) 牛に関する特徴、

行動、瑞相、その他について、私はすべてよく心得ています。王よ。(九) 私は讃えられる特徴を持つ牡牛についても知っています。彼らの小便を嗅ぐと、不妊の牝牛でさえ妊娠するのです。(一〇) 私はこのようにふるまうでしょう。私はいつもこの仕事を好んでいますから、他人は誰も私を見抜くことはないでしょう。王よ、それがあなたの気に入りますように。(一一)」

ユディシティラは言った。

「ここにいる我々の愛しい妻は、生命よりも大切である。彼女は母のように守られるべきであり、姉のように敬われるべきである。(一二) このクリシュナー・ドラウパディーは、いかなる仕事をして過ごすか。彼女は普通の女がするような仕事を何も知らないので。(一三) 彼女は繊細で、うら若く、王女であり、誉れ高く、夫に貞節で、気高い。どのようにして過ごすか。(一四) 実に、この美しい女は、生まれて以来、花環、香、装飾品、種々の衣装のことだけしか知らないのだ。(一五)」

ドラウパディーは言った。

「サイランドリーと呼ばれる、〔好きな所に住める〕召使女たちがいます。他の女たちはそのように〔自由に〕行動できない、というのが世間の決まりです。(一六) そこで私は、調髪に巧みなサイランドリーと称して、自分の身を隠しましょう。もしあなたがどうするのかたずねられるなら。(一七) 私は誉れ高い王妃スデーシュナーに仕えましょう。私が行けば彼女は私を守ってくれるでしょう。そのように心配なさることはありません。(一八)」

ユディシティラは言った。

「よくぞ申した、クリシュナー。良家の生まれにふさわしい言葉だ。お前は貞女の誓いをよく守っているので、罪悪を知らない。(一九)」（第三章）

主君に仕える方法

ユディシティラは言った。

「お前たちはこれからやろうとする仕事について述べた。私もよくよく考えて、それに賛成する。(一) ここにいる我々の司祭は、料理人や厨房長とともに、ドルパダの邸で火供（アグニホートラ）を持続すべきである。(二) インドラセーナをはじめとする者たちは、空の戦車を操縦して、速やかにドゥヴァーラヴァティーに行くべきである。私はそう考える。(三) ここにいるドラウパディーの侍女たちは、すべて、料理人や厨房長とともに、パーンチャーラに行くべきである。(四) すべての者は、『パーンダヴァたちのことは知らない』と言うべきである。『彼らはみな、我々を捨てて、ドゥヴァイタの森から去った』と。(五)」

ダウミヤは言った。

「友達は愛情から、よく知られたことについても告げるべきである。そこで私も申し上げる。すべての道理をお聞きなさい。(六)

ああ、王子たちよ、これから王宮に住むことについてあなた方に申し上げる。王家に仕え

て暮らしても従者が身を滅ぼさない方法を。(七) パーンダヴァたちよ、よくわきまえた人の場合も、王宮に住むことはむずかしい。尊敬されるに価する者たちよ、あなた方が尊敬を受けず知られずに、一年のあいだ住むことは一層むずかしい。(八)

入口を示されたら入口から入るべきである。しかし王を信頼してはいけない。相手が座ろうとしない席に座ろうとすべきである。(九)『自分は気に入られている』と考えて、彼（王）の車、駕籠、床几、象、戦車に乗るべきではない。そうすれば彼は王宮に住める。(一〇) もしある場所に座った時、悪党どもが彼を疑うようなら、二度とその場所に座るべきではない。そうすれば彼は王宮に住める。(一一) 王がたずねない場合には、決して忠告してはならぬ。黙々として彼に仕え、適切な時に敬意を表すべきである。(一二) 実に王は不真実を言う者たちに対して怒り、同様に誤って語る顧問官たちを軽蔑する。(一三) 賢明な人は、後宮に仕える人々、王が憎んでいる人々、王に有益でない人と、（及び王の）妻たちと、決して親密になってはいけない。(一四) どのように取るに足りない仕事でも、王に知らせてからやるべきである。このように配慮する人は、王によって破滅することは決してない。(一五)

火や神に仕えるように、人は努力して王に仕えるべきである。というのは、虚偽により仕えられれば、王は疑いなくその人を害するであろう。(一六) 主君が命ずることのみに従うべきである。怠慢、軽蔑、怒りを避けるべきである。(一七) すべからく審議においては、有益なことと好ましいことを語るべきである。しかし、好ましいことより有益なことを語るべきである。(一八) あらゆることがらや会話において、王に好意的であるべきである。不愉快な

ことや有益でないことを王に語るべきではない。(一九) 賢明な人は、自分は王に気に入られていないと考えて仕えるべきである。怠ることなく、注意深く、有益なことと好ましいことをなすべきである。(二〇) 王に嫌われている者たちに仕えるべきではない。王に有益でない者たちとつき合うべきではない。自分の地位から堕ちるべきではない。そのようにする人は王宮に住める。(二一)

賢明な人は王の右側あるいは左側に座すべきである。というのは王の後ろは、武器を持つ護衛のいる場所であり、前の重大な場所に座ることは常に禁じられている。(二二) 王に会っている時は自分の隆盛を決して言ってはならぬ。たといそれが貧者の言葉でも、最高に王を傷つけるものである。(二三) 王が誤って言ったことを人々に暴露してはならぬ。また諸王がその人のことを怒っている場合、彼に告げてはならぬ。(二四) 自分は勇士であるとか、知者であるとか驕ってはならない。王の好ましいことのみをすれば、王に気に入られ、繁栄する。(二五) 王から得られがたい富貴や好意を得たら、王の気に入ることと有益なことに関して注意を怠らぬようにすべきである。(二六) 知者に尊敬されている人は、王の怒りが大きな破壊力を持ち、その恩寵が大きな果報をもたらす時、心によってすら王の不利益を望むであろうか。(二七) 決して唇をゆがめるべきではない。言葉を投げつけるべきではない。くしゃみをしたり放屁したりつばを吐く際は、常に静かに行なうべきである。(二八)

何か笑うべきことがある際には、あまり過度に喜んだり、狂人のように笑ったりすべきではない。(二九) しかし、尊大になるといけないから、あまり冷静にふるまうべきではない。

穏やかに好意的な微笑を浮かべるべきである。(三〇)何かを得ても喜ばず、軽蔑されても悩まず、迷うことがなければ、その人は王宮に住むことができる。(三一)王や王子を常に繁栄させれば(異本による)、その賢者は顧問(大臣)になり、長く栄光の座にとどまる。(三二)気に入れられていたが、何かの理由で疎んじられた顧問は、王を非難しなければ再び恩寵を得られる。(三三)賢明な人は、王の臣下であるか、あるいは王の領土に住む時は、王の面前で、あるいは王がいない場合も、その美質を語るべきである。(三四)何かを享受することを強引に王に要求する顧問は、その他位に長くとどまれず、生命を危険にさらすであろう。(三五)いつも自己の幸せを考えて、過度に王と話すべきではない。常に競技場において王に勝るべきではない。(三六)元気、強力、勇猛で、いつも影のように王につき従い、真実を語り、柔和で自制している者は、王宮に住むことができる。(三七)他の者が何かの用件で派遣されたら、前に飛び出て、『私は何をいたしましょうか』と言うなら、彼は王宮に住むことができる。(三八)暑かろうと寒かろうと、夜であろうと昼であろうと、命令されたら逡巡しないような人は、王宮に住むことができる。(三九)家から離れて住み、愛しい人々を思い出すことなく、苦労とひきかえに幸福を求めるような人は、王宮に住むことができる。(四〇)

王と同じ衣服を着るべきではない。王のそばでは、あまり高らかに笑うべきではない。何度も助言すべきではない。そうすれば王に気に入られるであろう。(四一)仕事に用いられたら、決して賄賂を受けるべきではない。というのは、もし賄賂を受ければ、拘置されるか死刑に処せられるから。(四二)王がくれた車、衣服、装飾その他を常に用いるべきである。そうすればより気に入られるであろう。(四三)わが子よ、この一年間、このような生活法を守ろうとすれば、自分の領土を取りもどし、望みのままにふるまうことができるであろう。(四四)」

ユディシティラは言った。

「よくぞお教え下さいました。我々の母のクンティーと大知者のヴィドゥラを除いて、誰もこのように教えてくれませんでした。(四五)さあ、すぐになすべきことをして下さい。この不幸を乗り越えるために。出発のため、勝利のために。(四六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王にこのように言われて、最高のバラモンであるダウミヤは、出発に際してなすべきすべてのことを作法通りに行なった。(四七)彼は彼らのために火を燃やし、呪句(マントラ)とともに火中に供物を投じた。繁栄と発展を得るように、地上を征服するようにと。(四八)そして彼ら六名は、火と苦行を積んだバラモンたちの周囲を右まわりにまわって敬礼し、ドラウパディーを先頭にして出発した。(四九)

(第四章)

五王子たちの変装

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

彼ら勇士たちは、刀を帯び、弓と箙を持ち、弓籠手と弓懸をつけ、カーリンディー（ヤムナー）川の方に行った。（一）それから勇士たちは、山や森の城砦に滞在しつつ、徒歩で南の岸にそって行った。（二）強力なパーンダヴァの勇士たちは、種々の獣を射つつ、ダシャールナの北、パーンチャーラの南、ヤクリッローマとシューラセーナを通り、猟師であると称して、森からマツヤ国の領内に入った。（三―四）

その地方に入った時、クリシュナー（ドラウパディー）は王に言った。

「御覧なさい。細い道と種々の田畑が認められます。（五）明らかにヴィラータの王都は遠くにあるようです。今夜はこれからここで休みましょう。私はすっかり疲れてしまいました。（六）」

ユディシティラは言った。

「アルジュナよ、ドラウパディーを持ち上げて運べ。この森から出て、王都で休もう。（七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

アルジュナは象王のように、急いでドラウパディーを運び、都の近くに着くと、彼女を降ろした。（八）王都に着いた時、ユディシティラはアルジュナに言った。

「我々はどこに武器を置いて都に入ろうか。（九）兄弟よ、もし我々が武器を持って入れば、疑いもなく、その住民を不安にさせるだろう。（一〇）我々のうちの一人でも人に知られたら、再び十二年間森に入らなければならないと我々は約束した。（一一）」

アルジュナは答えた。

「王よ、墓地（火葬場）の近くの峰に、茂ったシャミーの大木がある。それは枝も恐ろしく、登りがたい。（一二）王よ、そこには人っ子一人おりません。それは、道からはずれた、獣や猛獣（または蛇）の住む森に生えていますから。（一三）我々はそこに武器を掛けて都に行きましょう。そうすればそこで、望みのままに暮らすことができるでしょう。（一四）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

〔パーンダヴァたちはそこに各々の武器を隠す。（一五―二六略）〕

パーンダヴァたちは〔武器とともに〕一つの死体を結びつけた。そうすれば、人々は腐臭を嗅ぎ、死体が結びつけられていると言って、そのシャミー樹に近づかないはずである。（二七）彼らがその木に死体を結びつけていた時に、牛飼や羊飼たちがわけをたずねたが、敵を滅ぼすパーンダヴァの勇士たちは、彼らに、「これは我々の百八十歳になる母である。これは先祖から行なわれた我々一族の法である」と告げてから、都の近くに行った。（二八―二九）ユディシティラは彼らに秘密の名前をつけた。すなわち、ジャヤ、ジャヤンタ、ヴィジャヤ、ジャヤトセーナ、ジャヤバラである。（三〇）かくて彼らは、約定に従って、人に知られずその王国で十三年目を過ごすために、その大都市に入った。（三一）

（第五章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それから、まず第一にユディシティラ王が、集会場に座っているヴィラータのところに行った。彼は瑠璃をはめこんだ黄金の骰子(さいころ)を衣で包んで腋の下に持っていた。(一)誉れ高く威厳に満ちたクル族の王(ユディシティラ)は、名高い国王(ヴィラータ)のもとに進んで行った。彼は猛毒の蛇のように近寄りがたく見えた。(二)その人中の雄牛は、その力強さと容姿にかけて偉大であり、焔のような姿により神さながらであり、大雲の群に囲まれている太陽のようであり、灰におおわれた火のようであった。(三)その雲に囲まれた月のようなパーンダヴァがやって来るのを見て、ヴィラータ王は、顧問官やバラモン、吟誦者たちや実業者たち、その他、集会場に座っている人々に、誰彼なしにたずねた。

「集会場をめざして来る最初の面会人は誰か。(四)あの最高の人はバラモンではなかろう。大地の主(王)であるという気もする。彼には召使も戦車も耳環もないが、近くで彼はインドラ(帝釈天)のように輝いている。(五)身体の特徴から推量するに、彼は王族であろうと思う。彼は恐れることなく私の近くに来る。発情した象(猛々しい強い象)が蓮池に近づくように。(六)」

人中の雄牛ユディシティラは、考えこんでいるヴィラータに近づいて言った。

「皇帝陛下、私はここで生活したいと望みます。私はバラモンで、全財産を失ったのでここに来ました。(七)非の打ち所のない方よ、私はここ、あなたのおそばで、望みのままに住みたいのです。主よ。」

王は喜んで、直ちに「ようこそ」と言って彼を受け入れた。(八)

「友よ、喜んであなたにご挨拶申し上げる。あなたはどの王の領国からここに来られたのか。種姓(ゴートラ)と名前とを正しく告げなさい。また、いかなる技術を修得したか。(九)」

ユディシティラは言った。

「私は前にユディシティラの友人でした。ヴィヤーグラパダの家系に属するバラモンです。私は骰子を振るのが巧みな賭博師で、カンカという名で知られています。ヴィラータ様。(一〇)」

ヴィラータは言った。

「おお、あなたの望む願いを何でもかなえてあげよう。マツヤ国を治めるがよい。私はあなたの支配下に帰した。というのは、私はいつも抜け目のない賭博師が好きだから。神のような男よ、あなたは王位にふさわしい。(一一)」

ユディシティラは言った。

「マツヤ王よ、(賭博で)大きな争いが生じた時、負けた側から何もされませんように。私に負けた者が自分の財産を抱えこむようなことが決してありませんように。あなたの恩寵により、私のこの願いをかなえて下さい。(一二)」

ヴィラータは言った。

「もしあなたに不愉快なことをしたら、殺すべきでないものも殺すであろう。領内からバラモンたちを追放することさえする。集まったわが国の民よ、聞きなさい。カンカは私同様、この国における主である。(一三)

あなたは友として、私と同じ車に乗り、多くの衣裳、多くの飲食を得るであろう。あなたは内的、外的なことをいつも見られるであろう。私はあなたのために門戸を開いている。(二四)もし誰か仕事がなく困窮した人々があなたに訴えてきたら、彼らにいつも私の言葉によって答えなさい。私は疑いもなくすべてを与えるであろう。あなたは私のそばにいれば危険はない。(二五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

このようにして、人中の雄牛は、ヴィラータ王に面会して願いをかなえてもらい、最高に尊敬されて、幸せにそこに滞在した。しかし誰も彼の正体に気づかなかった。(二六)

(第六章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

さて、恐るべき力を持ち、栄光に輝き、獅子のように優美な足どりをした別の男がやって来た。彼は杓子と匙を手に持ち、黒光りのする傷一つない抜き身の庖丁を持っていた。(一)彼は料理人の姿をし、最高の輝きにより、太陽のようにこの世を照らしていた。漆黒の衣服を着て、山の王のように堅固な彼は、マツヤ国王に近づいて立っていた。(二)そばに来た彼を見て、王はとどめて、集まっている国民にたずねた。

「あの人中の雄牛である若者は誰か。彼は獅子のように隆起した肩をし、非常に美しい姿をしている。(三)いまだかつて見たこともないような男だ。まるで太陽のようだ。いくら考えてみても彼のすばらしさを推し量ることはできない。また、よくよく考えても、その人中の雄牛の心を正しく推し量ることもできない。(四)」

それから気高いビーマはヴィラータに近づいて、非常に落胆した様子をして、次のように言った。

「王様、私はバッラヴァという名の料理人です。最高の調理師である私を使って下さい。(五)」

ヴィラータは言った。

「立派な男よ、あなたが料理人とは信じられない。まるでインドラ(帝釈天)のように見えるから。友よ、栄光と容色と勇武にかけて、最上の人であるように見える。(六)」

ビーマは言った。

「王様、私は料理人で、あなたの召使です。とりわけ特別のスープを作ることができます。王様、以前、ユディシティラ王がいつもそれを味わっていました。(七)また、力にかけて私にかなう者はおりません。王様、私はいつも格闘を好みます。象や獅子とも戦います。非の打ち所のない王よ、私はいつもあなたの気に入ることをいたします。(八)」

ヴィラータは言った。

「おお、台所で働きたいというあなたの願いをかなえる。そこで巧みに料理を作ると言うか

ら。しかし、そのような仕事はあなたにふさわしいとは思わない。海に囲まれた大地を治めるのがあなたにふさわしい。(九) だが、あなたの望み通りにしよう。私の台所の主任になれ。そこには以前から仕えている人々がいるが、私の命により、彼らの長になれ。(一〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。

かくてビーマはヴィラータの台所の係に任じられた。彼は非常にヴィラータ王に気に入られた。そして彼がそこに滞在している間、召使もその他の人々も、誰も彼の正体に気づかなかった。(一一)

（第七章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、黒い眼のクリシュナー（ドラウパディー）は、その先が波立つ非の打ち所のない柔らかい髪を、ひとまとめに投げ出して右脇に隠した。(一) そして彼女は、非常に汚ない一枚の大きな黒衣をまとい、サイランドリー（召使女）の身なりをして、悩みがあるかのように歩きまわった。(二) 駆けまわっている彼女を見て、男や女たちが走り寄ってたずねた。

「あなたは誰か。何を求めているのか。(三)」

彼女は彼らに答えた。

「私はサイランドリーです。ここに来て、私を雇って下さる方の仕事をしたいと望んでいます。(四)」

彼女の容姿や衣服や穏やかな言葉により、食物を求めてやって来た召使女だとは誰も信じなかった。(五) ところが、最高に尊敬されているヴィラータの王妃、ケーカヤの王の娘が、楼閣から眺めていて、ドラウパディーを見かけた。(六) 王妃はそのような姿をした、身寄りのない、一枚の衣をまとった女を見ると、呼び寄せてたずねた。

「御婦人よ、あなたは誰ですか。また、何を求めているのですか。(七)」

彼女は王妃に答えた。

「私はサイランドリーです。ここに来て、私を雇って下さる方の仕事をしたいと望んでいます。(八)」

スデーシュナー（王妃の名）は言った。

「美しい女よ、あなたの言うのにふさわしい姿をしていない。逆にそのような多くの男女の召使を使うことこそふさわしい。(九) あなたの踝（くるぶし）は隠れている。両腿はぴたりとついている。あなたは〔音声、知性、臍の〕三つにおいて深い。〔鼻、眼、耳、爪、胸、首の〕六つにおいて隆起している。〔足の裏、手のひら、目尻、唇と舌、爪の〕五つの赤い場所において赤色である。ハンサ（鵞鳥の一種）のように口ごもり〔甘く〕話す。(一〇) あなたは美しい髪をし、乳房も美しく、美しい黒色の肌で、豊かな尻と乳房を持つ。まるでカシミール産の雌馬のようにあらゆる美質をそなえている。(一一) あなたのまつげは美しくカーヴしている。ビンバの実のような唇をし、その胴は細い。その首は巻貝のような〔線を持ち〕、血管は隠れ、満月

のような顔をしている。（二二） 御婦人、あなたは誰ですか。言って下さい。あなたは決して召使女ではない。夜叉女（ヤクシニー）か、女神か、ガンダルヴァ（半神の一種）の女か、天女（アプサラス）であるか。（二三）アランブサー、ミシュラケーシー、プンダリーカー、マーリニーであるか。それともインドラの妃であるか、ヴァルナの妃であるか。あるいは、トゥヴァシトリ、ダートリ（創造神）、プラジャーパティ（造物主）の妻であるか。有名な神々のうち、どなたの妃であるか。美しい方よ。（二四）」

ドラウパディーは言った。

「私は女神でも、ガンダルヴァの女でも、阿修羅の女でも、羅刹女でもありません。私は召使のサイランドリーです。本当です。（二五）

私は髪を整えることができます。私は材料を砕いてうまく香油を作ることができます。最も美しい多彩な花輪を編むことができます。（二六） 私はクリシュナの愛妃サティヤバーマーと、クル一族の随一の美女であるパーンダヴァの妻クリシュナー（ドラウパディー）を満足させました。（二七） 何か非常に美しいものを得つつ、私はあちこち歩きまわります。衣裳を得られる間は楽しいのです。（二八） あの王妃様（ドラウパディー）が自ら、私をマーリニー（花輪作り）と名づけました。王妃スデーシュナー様、私は今、あなたの家に参上しました。（二九）」

スデーシュナーは言った。

「王が一心にあなたを愛するという恐れがなければ、私は自分の頭の上にさえあなたを住まわせるでしょう。（三〇） 見なさい。王宮や館（やかた）の女たちも、あなたを見て魅了されています。あなたはいかなる男を惑わさないでしょうか。（三一） 見なさい。しっかりと立っている私の館の樹々ですら、あなたの方にたわむ。あなたはいかなる男を惑わさないでしょうか。（三二） 美しい尻をした超人的なあなたの体を見たら、美しい尻の女よ、ヴィラータ王は私を捨てて、あなたを一心に愛することでしょう。（三三） というのは、欠点のない体をした、切れ長の眼の女よ、あなたがある男を情熱的に見つめたら、彼は愛に支配されるであろうから。（三四） また、魅力的に笑う、全身欠点のない女よ、もし男がいつもあなたを見るならば、彼は愛に支配されるでしょう。（三五） ちょうど雌の蟹が妊娠して自らは死ぬように、私はあなたを住まわせれば身を滅ぼすことになると思います。美しい微笑の女よ。（三六）」

ドラウパディーは言った。

「ヴィラータも他の男も、決して私をものにすることはできません。王妃様、五名の若いガンダルヴァが私の夫なのです。（三七） 彼らはある偉大なガンダルヴァ王の息子で、いつも私を守っています。私は近寄りがたい女です。（三八） 食べ残しを私に与えたり、私に両足を洗わせたりしないような所に住むことを、私のガンダルヴァの夫たちは喜びます。（三九） 私を普通の女のように欲しがる男は、まさにその夜のうちに、他の身体に入る（死ぬ）でしょう。（四〇） 王妃様、いかなる男も私を動かすことはできません。私の非常に強力なガンダルヴァたちは気むずかしいのです。（四一）」

スデーシュナーは言った。

「喜びを与える女よ、そうであるなら、あなたの望むように、あなたをここに住まわせます。

そして、あなたが他人の足や残りものに触れることは決してないでしょう。(二二)」
　このように、ヴィラータの妻はクリシュナーを満足させた。そしてそこにいる他の者は、彼女の正体に気づかなかった。ジャナメージャヤよ。(二三)　(第八章)

　ヴァイシャンパーヤナは語った。――
　またサハデーヴァは、最高の牛飼の身なりをして、言葉もそれにふさわしくして、ヴィラータのところに行った。(一) 輝かしい人中の雄牛が来たのを見ると、王は彼に近づいてたずねた。(二)
「あなたは誰の息子か。どこから来たのか。そして友よ、何を求めているのか。私はあなたを前に見たことがない。人中の雄牛よ、真実を告げなさい。(三)」
　敵を悩ます彼は、王のもとに行って、雷雲のような大音響をたてて言った。
「私はアリシタネーミという名の実業者《ヴァイシャ》（牧畜業者）です。私はクルの雄牛（パーンダヴァ）たちの牛飼でした。(四) 王様、私はあなたのところで住みたいと望みます。私はあのパーンダヴァの獅子王たちの消息を知りませんから。他の仕事によって生きることはできません。また、あなた以外の王は私の気に入りません。(五)」

　ヴィラータは言った。
「あなたはバラモンか王族《クシャトリヤ》である。あなたは海で囲まれた領土の帝王の相をしている。敵を悩ます勇士よ、私に真実を告げて下さい。実業者の仕事はあなたにふさわしくない。(六) あなたはどの王の領地からここに来たのか。そして、いかなる技術を修得しているか。また我々のところで、いつもどのようにして住むのか。またここでどのくらいの報酬が欲しいのか。(七)」
　サハデーヴァは言った。
「パーンドゥの五人の息子たちの長男がユディシティラ王です。彼には八百、千、十万の牛の群がありました。(八) 他に一万、また他に二万の群がありました。私はそれらの牛の数を調べる係（飼牛）で、タンティパーラというものでございます。(九) 十由旬《ヨージャナ》（距離の単位）にわたって、私が調査した牛に関し、過去と現在と未来において、私が知らないことは何もありません。(一〇) 私の長所はあの偉大な方によく知られていました。クルの王ユディシティラは私に満足していました。(一一) 牛が速やかに増大する方法、牛がいかなる病気にもならない方法、私はそれらすべての方法を知っています。私にはこのような技術があります。(一二) 王様、私は優れた特徴をそなえた雄牛を見分けることができます。そのような雄牛の場合、不妊の雌牛ですら、その尿の臭いを嗅ぐと子を生むのです。(一三)」
　ヴィラータは言った。
「私は種類ごとの特性によって分類された、十万頭の牛を飼っている。その牛たちと牛飼た

ちをあなたに委ねる。ここの牛たちはあなたが世話するのだ。(二四)」

このようにして、サハデーヴァは王に正体を知られることなく、そこで幸せに暮らした。他の人々も決して彼の正体を知らなかった。そして王は、望み望りの報酬を彼に与えた。(二五)

(第九章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

さて、他の偉丈夫が現われた。彼は容姿にめぐまれ、女性の装身具をつけていた。城壁のように大きな耳環をつけ、黄金をはめこんだ輝かしい長い貝の腕輪をつけていた。(一)大きな腕を持ち、象のように力を誇る男は、多量の長い髪を波打たせ、その進行により地面をふるわせて、集会場に近づき、ヴィラータのもとにやって来た。(二)王は集会場にやって来たその男を見た。その敵を粉砕する大インドラの息子は、変装していたが、最高の光輝で輝き、象王のように闊歩していた。(三)王は彼を見て、近くにいるすべての人々にたずねた。

「彼はどこから来たのか。前に聞いたこともない。」

しかし人々は誰も彼を知っていると言わなかった。王は驚嘆して次のように述べた。(四)

「あの男は魅力的で、すべての美質をそなえている。若く、浅黒く、象王のようである。黄金をはめこんだ輝かしい貝の腕輪をつけ、弁髪を結い、両の耳環をつけている。(五)美しい髪をし、頭頂で結っているが、間違って衣裳をつけている。あなたは弓矢を持ち、鎧をつけているにふさわしい。車に乗って走りまわるがよい。わが息子たちや、私自身に等しいものとなれ。(六)私は老い、引退したいと望む。すぐに全マツヤ国を守護せよ。決してこのような者が女形(おやま)(半陰陽)であるはずはないと私は思う。(七)」

アルジュナは言った。

「私は歌い、踊り、楽器をひけます。私はすばらしく踊り、巧みに歌います。あなた御自身で、私をウッタラー様(王女の名)に与えて下さい。王様、私は王妃(女王)様の舞踊師になります。(八)私がどうしてこのような姿になったかを申し上げても、ひどく悲しさが増すだけです。王様、私はブリハンナダーという名です。父母から捨てられた息子、いや娘です。(九)」

ヴィラータは言った。

「おお、ブリハンナダーよ、あなたの願いをかなえてあげよう。私の娘と、同じような娘たちに踊りを教えてくれ。しかしそれはあなたにふさわしい仕事とは思われぬ。あなたは海に囲まれた大地を治めるにふさわしい。(一〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

マツヤ国王は技芸と舞踊と楽器についてブリハンナダーを試してから、そして彼が男でないことを確信してから、彼を王女の館に送った。(一一)アルジュナ王子はヴィラータの娘と

彼女の女友達や侍女たちに、歌と楽器を教えた。そして彼は彼女たちのお気に入りになった。(一二) こうしてアルジュナは変装し、彼女たちとともに楽しみながら、自制して暮らした。そして王宮の内外の人々は、そのような彼の正体を知らなかった。(一三)

(第十章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

さて、ヴィラータ王が馬を点検している時、別のパーンダヴァの王子が現われた。人々は、やって来た彼を見て、雲から抜け出た日輪のようだと思った。(一) 彼はあちこちで馬たちを見まわった。そして点検している彼を、マツヤ国王が見た。それから、その敵を滅ぼす王は従者たちにたずねた。

「あの神のような男はどこから来たのか。(二) 彼は私の馬たちをしっかりと点検している。きっと彼は馬のことを知悉しているに違いない。すぐに彼を私のそばに案内しなさい。あの勇士は神のように見える。(三)」

敵を滅ぼす勇士は王に近づいて言った。

「王様、あなたに勝利あれ。幸あらんことを。王よ、私は馬についての達人と尊敬されています。私はあなたの馬の巧みな御者になります。(四)」

ヴィラータは言った。

「私はあなたに車と財物と住居をあげよう。あなたは私の御者になることができる。あなたはどこから来たか。誰に属するのか。どうして来たのか。あなたの知っている技術を言いなさい。(五)」

ナクラは言った。

「パーンドゥの五人の息子たちの長男はユディシティラ王である。私は前に、その王に、馬の係りとして用いられていました。敵を悩ます王よ。(六) 私は馬の性質と調教法をすべて知っています。悪い馬にどう対処するか、また馬の治療法も、すべて知っています。(七) 私の馬は決して臆病にはなりません。私の雌馬は悪くはならず、いわんや雄馬はなおさらです。ユディシティラ王やその他の人々は、私のことをグランティカという名で呼んでいました。(八)」

ヴィラータは言った。

「私の所有する馬や乗物は何でも、今からすべてあなたにまかせる。それから私の所有する馬の調教師や御者たちも、すべてあなたに従属する。(九) 神のような男よ、望みがあるなら言いなさい。あなたが望む報酬を言いなさい。あなたには馬の仕事はふさわしいとは思われない。私にはあなたが、王のように尊敬に価すると思われる。(一〇) 見目よい者よ、私にとって、あなたの顔形はユディシティラのようだ。それにしても、あの非の打ち所のないユディシティラは、従者たちがいなくなって、森でどのように暮らしているのか。(一一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

かくてその最高のガンダルヴァのような若者は、喜んだヴィラータ王にもてなされた。そして、彼が王宮内で友好的に暮らしている間、他の人々は誰も彼の正体を知らなかった。(一二)

このようにして、徒(いたずら)に姿を現わさないパーンダヴァたちは、マツヤ国において、約定に従って滞在した。海に囲まれた大地の主たちは、非常に苦労して、注意深く、人に知られない生活を送った。(一三)（第十二章）

ジャナメージャヤはたずねた。

「パーンダヴァたちがそのようにマツヤ国の都に滞在している間に、その後、強力な者たちは何をしたか。バラモンよ。(一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クルの王子（パーンダヴァ）たちがこのように王を満足させて、隠れてそこに住んでいる間に行なったことを聞きなさい。(二)

ユディシティラは宮廷に仕えて、宮廷の人々に気に入られ、ヴィラータとその息子にも気に入られた。(三) 賭博の真髄を知るユディシティラは、賭博において、意のままに彼らを遊ばせた。糸につながれた鳥たちを遊ばせるように。(四) 人中の虎であるユディシティラは、ヴィラータに知られぬように、財産を勝ち取っては、適切に兄弟たちに与えていた。(五) ビーマセーナも、マツヤ（国王）から与えられた肉や種々の食物をユディシティラに売った。(六) アルジュナは後宮で得た古着を売って、その収入をすべてのパーンダヴァに与えた。(七) 牛飼に扮装したサハデーヴァは、凝乳(ダディ)（ヨーグルト）、乳、ギー（バター）をパーンダヴァたちに与えた。(八) ナクラは馬の世話をして、王を満足させて得た財物を、パーンダヴァたちに与えた。(九) 美しいクリシュナー（ドラウパディー）は、苦労していたが、すべての兄弟を見守って、自分の正体が知られないようにふるまっていた。(一〇) このように勇士たちは互いに助け合って、クリシュナーのことを見守りながら、隠れてそこに住んでいた。(一一)

さて、四カ月目に、マツヤ国において、人々が非常に大事にしている、盛大な梵天(ブラフマー)の大祭が行なわれた。(一二) 幾千人の力士（格闘士）がそこに集まって来た。彼らは大きな体をして、大力で、カーラカンジャ阿修羅のようであった。(一三) 気力旺盛で力みなぎり、王に歓待された。獅子のような肩と尻と首をしていた。非常に清潔で気高かった。彼らは競技場において、王の面前で何度も勝利を収めた。(一四) 彼らのうちに一人の大きな男がいて、すべての力士に戦を挑んだ。しかし競技場の中で彼が跳ねまわっている間、誰も彼に立ち向かわなかった。(一五) すべての力士が意気消沈し、度を失っていた時、マツヤ国王は例の料理人をその力士と戦わせた。(一六) ビーマはうながされて、しぶしぶ決意した。公然と王の命令を拒絶することはできなかった。(一七) それから、その人中の虎は、虎のようなゆっくりとした足どりで大競技場に入場して、ヴィラータを喜ばせた。(一八) ビーマは人々を喜ばせつつ、

帯を締めた。そして、そのヴリトラのような力士に挑戦した。(一九) その両者は二人とも非常に気力にあふれ、勇猛果敢であり、発情した巨大な象のようであった。(二〇) 敵を殺すビーマは、虎のように吼えて、象のように吼える相手を引き抜き、両腕で引っぱった。(二一) 強力な勇士は、相手を持ち上げて振りまわした。力士たちやマツヤの人々は最高に驚嘆した。(二二) 百回も振りまわすと、相手は意識を失い、生気を失った。勇士ビーマはその力士を地面にたたきつけた。(二三)

世に名高いそのジームータという力士がうち破られた時、ヴィラータは縁者たちとともに最高に喜んだ。(二四) 気高い王は歓喜のあまり、大競技場にいるバッラヴァに、毘沙門天（ヴァイシュラヴァナ）(宝財の神クベーラ) のように多くの財物を与えた。(二五) 同様にしてビーマは、多くの力士と大力の男たちをうち倒して、マツヤ国王に最高に気に入られた。(二六) 彼に匹敵する男はそこに誰もいなかったので、王は彼を虎や獅子や象たちと戦わせた。(二七) ヴィラータは更に、ビーマを後宮に連れて行き、女たちの中で、猛り狂った強力な獅子たちと戦わせた。(二八)

アルジュナもまた、歌や舞踊で、ヴィラータやすべての後宮の女たちを満足させた。(二九) ナクラは、そこに集まった駿馬たちを調教して、王を満足させた。(三〇) また、サハデーヴァによって訓練された雄牛たちを見て、王は喜んで彼に贈物を与えた。(三一) このようにして、人中の雄牛たちは、ヴィラータ王のために、仕事をして、そこに隠れて住んでいた。(三二)

(第十二章)

(46) キーチャカ殺し（第十三章―第二十三章）

キーチャカ将軍の邪恋

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

パーンダヴァの勇士たちがマツヤの都に隠れて住んでいる間に、十カ月が経った。(一)ドラウパディーは、人に仕えられるのがふさわしいのに、スデーシュナーに仕えて、非常に苦労してそこに住んでいた。(二)こうして彼女がスデーシュナーの館で働いていた時、ヴィラータの将軍（軍司令官）であるキーチャカ（王妃の弟）が、月のような顔をした彼女を見た。(三)神の子のような、女神のような彼女が働いているのを見て、キーチャカは愛の矢に苦しめられて、彼女を愛してしまった。(四)その将軍は愛の火に燃やされて、スデーシュナーのもとに行き、笑いながら次のように告げた。(五)

「以前には、ヴィラータ王の宮殿にあの美女を見かけなかった。あの美女は、酒が香りで酔わせるように、その容色でひどく私を酔わせる。(六)よい女よ、あの心を魅了する神のような姿の女は何者か。あの美女が誰であるか、またどこから来たのか、私に言ってくれ。彼女は私の心をかき乱し、私を支配する。もう、私には、他に薬がないと思う。(七)ああ、あなたのこの若くて美しい侍女は私にふさわしい。彼女はあなたのために不適切な仕事をしている。私にあるものは何でもやる。彼女は私に何でも命ずるがよい。(八)私の大邸宅には、多くの象と馬がいて、多大な財産があり、豪奢で、多くの飲食物があり、魅力的で、黄金ときらびやかな装飾がある。その私の家を、彼女が飾らんことを。(九)」

それからキーチャカは、スデーシュナーと相談して、クリシュナー（ドラウパディー）に近づき、彼女におもねって、次のように言った。森でジャッカルが獣の王（獅子）の娘に話しかけるように。(一〇)

「美しい女よ、あなたの極上の容姿と若さは、それだけでは無駄になってしまう。最上の花輪が身につけられないように。美しい女よ、美しくても輝かない。(一一)私は妻たちを捨てる。前の妻たちはあなたの奴隷になればよい。美しく笑う女よ。私もまたあなたの奴隷のようになる。美しい顔の女よ、私はいつもあなたの言いなりになる。(一二)」

ドラウパディーは言った。

「スータ（御者、または吟誦者のカースト）の息子よ、あなたは求めるべきでない女を望みました。私は身分の低い、おぞましいサイランドリーの髪結いです。(一三)それに私は他の男の妻です。あなたに幸あらんことを！　あなたのおっしゃることは適切ではありません。生類にとって、妻は愛しいものです。法（ダルマ）について考えて下さい。(一四)決して他人の妻に心を向けるべきではありません。なすべきでないことを避けること、これが善き人の誓戒です。(一五)というのは、誤って欲望を抱く邪悪な人は、迷妄に陥り、恐ろしい不名誉に至り、非常に大きな危険に達するでしょう。(一六)スータの息子よ、はしゃいではいけません。今日、生命を捨てないように。勇士たちに守られている、得られがたい私を望んで……。(一七)そしてあなたは私をものにすることはできません。ガンダルヴァ（半神）たちが私の夫です。彼らは怒ってあなた

を殺すでしょう。どうかもうやめて。身を滅ぼさないで下さい。（一八）あなたは、人間には通れない道を行こうと望んでいる（異本による）。愚かなあなたは、こちら岸に立って向こう岸に渡ろうと望んでいる無知な子供のようなことをしようと望んでいます。（一九）

あなたが地底に〔入り〕、上空を飛行できるとしても、あるいは海の向こう岸に走ることができるとしても、彼らから逃れることはできない。私の夫たちは恐ろしい神の子であるから。（二〇）キーチャカよ、あなたは今、苦しむ人が黒夜（カーララートリー）（滅亡の夜）を求めるように、何故に私を強く求めるのですか。どうして、母の膝に寝る幼児が月をつかもうと望むように、私を求めるのですか。（二一）」（第十三章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ドラウパディーに拒絶されて、キーチャカは〔姉の〕スデーシュナーに告げた。彼は際限のない恐ろしい愛欲にかられていたからである。（一）

「ケーカヤの娘よ、私がサイランドリーといっしょになれるように計らってくれ。スデーシュナーよ、彼女が私のものになるようにして下さい。さもなければ死んでしまう。（二）」

嘆いている彼の言葉を何度も聞くと、賢明なヴィラータの王妃は憐愍にかられた。（三）スデーシュナーは、自分の目的と彼の目的と、クリシュナーの恐れについて考慮して、キーチャカに言った。（四）

「あなたは祭日のためにお酒と食物を準備させなさい。その日、酒を取りに彼女をあなたのもとに遣わします。（五）そこに遣わされた彼女を、人のいないところで、何の拘束もありませんから、望みのままに口説きなさい。口説かれたら、その気になるかも知れません。（六）」

そこでキーチャカは家に帰り、姉の助言により、王にふさわしいような極上の酒を持って来させた。（七）多くの山羊や羊の料理、多くの種々の獣の料理など、腕ききの料理人にすばらしい御馳走を作らせた。（八）それが準備された時、キーチャカの知らせを受けた王妃スデーシュナーは、サイランドリーをキーチャカの家に遣わした。（九）

スデーシュナーは言った。

「さあ、サイランドリーよ、キーチャカの家に行きなさい。美しい女よ、飲物を持って来なさい。喉が渇いてたまらないの。（一〇）」

ドラウパディーは言った。

「王妃様、私は彼の家に行きたくありません。彼が破廉恥だということはよく御存知のはずです。（一一）欠点のない身体のお方よ、あなたの家でみだらなことをして、夫たちを裏切りません。（一二）王妃様、そして以前私があなたの家に入った時に約束をしたことを憶えておいでしょう。（一三）美しい髪のお方よ、キーチャカは愚かにも愛欲にかられています。彼は私を見たら辱しめるでしょう。美しいお方よ、あそこには行きません。（一四）王妃様、あなたにはたくさんの侍女たちがいます。他のものを遣わして下さい。お願いです。彼は私を辱しめるでしょうから。（一五）」

スデーシュナーは言った。
「私があなたを派遣するのですから、彼は何も悪いことをしないでしょう。(一六)」
そう言って王妃は蓋つきの酒杯を彼女に渡した。彼女は恐れて嘆きつつ、神の庇護を求めたが、酒を取りにキーチャカの家に出かけた。(一七)
ドラウパディーは祈った。
「私がパーンドゥの息子たち以外のいかなる男をも知らないことが真実なら、その真実にかけて、やって来た私をキーチャカが自由にすることがないように。(一八)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
その弱い女は少しの間太陽神(スーリヤ)を拝んだ。太陽神はその細い胴の女が祈ったことをすべて聞いた。(一九)そこで姿の見えない羅刹(ラクシャス)に彼女を守るよう命じた。その羅刹はあらゆる場合、その非の打ち所のない女から離れなかった。(二〇)おののく雌鹿のようなクリシュナーがそばに来るのを見て、キーチャカは、向こう岸に渡ろうとする人が舟を得た時のように、喜んで立ち上がった。(二一)(第十四章)

ドラウパディーを足蹴にするキーチャカ

キーチャカは言った。
「ようこそ、美しい髪の女(ひと)よ。すばらしい夜明けだ。奥方であるあなたが来られた。私を喜ばせてくれ。(一)黄金の輪、腕環、黄金の耳環、絹の着物、毛皮を持って来い。(二)あなたのために用意したすばらしいベッドがある。さあ、そこで私といっしょに蜜酒を飲め。(三)」
ドラウパディーは言った。
「王妃様はお酒を取って来るようにと、私をあなたのもとに遣わしたのです。『私にすぐに飲物を持って来なさい。喉が渇いたから』とおっしゃいました。(四)」
キーチャカは言った。
「美しい女よ、他の女が王妃に上等の酒を運ぶであろう。(五)」
ヴァイシャンパーヤナは語った。――
キーチャカはそう言って、彼女の右手をなでた。彼女は持たれてふるえ上がり、キーチャカを地面に突き飛ばした。そしてユディシティラ王のいる集会場に庇護を求めて駆けて行った。(六)キーチャカは逃げる彼女の髪をつかんだ。そして、王の見ている前で、彼女をつき倒し、足で蹴った。(七)しかし、太陽神に任命された羅刹が、風のような速さでキーチャカ

を押し退けた。(八) そこで彼は、羅刹の力に打たれてよろめき、根を着られた樹木のように、動きを止めて、地面に倒れた。(九) ビーマセーナとユディシティラは、そこに座っていたが、クリシュナー（ドラウパディー）を見て、彼女がキーチャカに足蹴にされたことに我慢できなかった。(一〇) 誇り高いビーマは、邪悪なキーチャカを殺そうと望み、怒りにかられ、歯ぎしりをした。(一一) しかしダルマ王（ユディシティラ）は、ビーマの正体が知られることを恐れ、親指と親指をこすり合わせて〔合図して〕彼を制止した。(一二)

その美しい尻のドラウパディーは、泣きながら集会場の戸口に近づき、悲痛な気持でいる夫たちを見ながら、マツヤ王に言った。自分の変装は見破られないようにし、法（ダルマ）に基づく約定を守りつつ、恐ろしい眼で燃えるかのように……。(一三―一四)

ドラウパディーは言った。

「足で地面を歩く者で、彼らの敵は眠れない。その彼らの誇り高い妻である私を、キーチャカは足蹴にした。(一五) 彼らは与えるが乞うことはない。敬虔で真実を語る。その彼らの誇り高い妻である私を、キーチャカは足蹴にした。(一六) 彼らの太鼓の音と弓弦の音は絶えず聞こえる。その彼らの誇り高い妻である私を、キーチャカは足蹴にした。(一七) 彼らは威光あり、自制し、強力で誇り高い。その彼らの誇り高い妻である私を、キーチャカは足蹴にした。(一八) 彼らは、この全世界を滅ぼせるが、法の輪縄で縛られている。その彼らの誇り高い妻である私を、キーチャカは足蹴にした。(一九) 彼らは寄る辺を求める人々の拠り所であるが、その隠れて世間を遍歴している勇士たちは、今どこにいるのか。(二〇) 彼らの貞節な

妻がキーチャカに蹴られているのに、あの強力で無尽の力を有する者たちが、どうして不能者のように我慢しているのか。(二一) 妻が悪党に蹴られているのに、彼らが助けないとは、彼らの怒り、精力、威光はどこに行ったのか。(二二) 法（ダルマ）が損なわれるのを見ながら、罪もないのに私が蹴られているのを許しているヴィラータに対し、私は何をすることができるか。(二三) 王様、あなたはキーチャカに対し、何ら王のように処置しない。あなたの法は悪魔の法で、集会において輝きません。(二四) キーチャカもマツヤ〔国王〕も、全く自己の本務を守っていません。集会場にいる王に仕える人々も法を知りません。(二五) ヴィラータ王よ、私は人々の集会において、あなたを非難したくはありません。しかしマツヤよ、あなたのそばで私が彼に蹴られるのは適切でありません。集会場にいる人たちもキーチャカの悪行を見なさい。(二六)」

ヴィラータは言った。

「あなた方の争いは私の見ていないところで起こったので、私は関知しない。真相を知らないのに、どうして私が適切に判断できるか。(二七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、会衆は事情を知って、クリシュナー（ドラウパディー）を讃えて、「善哉、善哉」と言った。そしてキーチャカを非難した。(二八)

会衆は言った。

「この全身魅力的な、切れ長の眼の女を妻とする男は、最高にもうけものだ。決して嘆くことはないであろう。(二九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そこで会衆がクリシュナーを見て、このように讃えている間、ユディシティラの額には、怒りのために汗が吹き出していた。(三〇) そして彼は、愛しい王妃に告げた。

「サイランドリーよ、ここにいてはいけない。スデーシュナーの部屋に行きなさい。(三一) 英雄の妻というものは、夫に従い、苦難に耐えるものだ。従順に仕え、苦労しながら、夫と同じ世界を獲得する。(三二) お前の夫であるガンダルヴァたちは、今が怒りの時ではないと見ていると私は思う。太陽のような威光を持つ彼らは、だからお前を助けに駆けつけないのだ。(三三) サイランドリーよ、お前は時をわきまえない。踊子のように騒ぎまわっている。お前は、王の集会場で賭博をしているマツヤの人々の邪魔をしている。サイランドリーよ、去りなさい。ガンダルヴァたちがお前の気に入ることをするであろう。(三四)」

ドラウパディーは言った。

「あまりにもお優しい彼らのために、妻の私は貞節にしている。賭博師の長兄を持つ彼らは、誰からもやられてしまうだろう。(三五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナーはそう言うと、スデーシュナーの部屋に駆けて行った。その美しい尻の女は、髪を解き、怒りのあまり眼を赤くしていた。(三六) 泣きやんだ彼女の顔は、天空で雲から脱した月輪のように輝いていた。(三七)

スデーシュナーはたずねた。

「美しい尻の女よ、誰があなたを打ったの。何故泣いているの。美しい女よ。今日、誰が(罰せられて)不幸な目に会うのか。あなた、誰があなたに不快なことをしたの。(三八)」

ドラウパディーは答えた。

「私があなたのためにお酒を取りに行った時、キーチャカが私を蹴りました。しかも集会場で、王様が見ている前で、傍若無人に。(三九)」

スデーシュナーは言った。

「美しい髪の女よ、もしあなたが望むなら、キーチャカを殺させましょう。彼は愛欲に狂って、得られがたいあなたを望んだのですから。(四〇)」

ドラウパディーは言った。

「他の者たちが彼を殺すでしょう。彼は彼らに対して罪を犯したのですから。疑いもなく、まさに今日、彼はあの世に行くと思います。(四一)」

（第十五章）

ビーマに悲痛を訴えるドラウパディー

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドルパダの王女であるクリシュナーはキーチャカに蹴られ、怒ってその将軍を殺したいと願って、自分の居間に帰った。(一) 細い胴をしたクリシュナーは、適切に身体と衣服を水で洗って浄めた。(二) そして彼女は泣きながら、その苦悩の決着をつけたいと思った。

「私は何をしようか。どこへ行こうか。どうしたら私の目的が成就するか。(三)」

と考えながら、彼女はビーマのことを想った。

「今、ビーマを除いて、誰も私の気に入るようにやってくれないだろう。(四)」

それから賢明なクリシュナーは、夜中に起き上がって、自分の寝床を離れ、大きな心の悩みを抱きつつ、頼る夫を求めて駆け出した。(五) その美しい微笑のクリシュナーは、台所に行き、ビーマセーナに近づいた。森で生まれた真白な三歳の雌牛が〔雄牛に〕近づくように。雌象が巨象に近づくように。(六) その非の打ち所のない女は、蔓草がゴーマティー川の岸に生じた花咲くシャーラの大木にからみつくように、両腕で抱きしめて、彼を目覚めさせた。深い森で、獅子の雌が眠っている雄を起こすように。(七) ガーンダーラ(「ガ」の音階)に見事に調律された、甘美な音のヴィーナー(琵琶)のように、欠点のないクリシュナーは、甘い声でビーマセーナに語りかけた。(八)

「ビーマセーナよ、起きなさい、起きなさい。どうして死んだように眠っているのです。あの極悪人は、死んでもいない男の妻に乱暴して生きているのですよ。(九) あの極悪人の将軍、私の敵が、あのような行為をして、まだ生きているのに、あなたは今、どうして眠りこけているのですか。(一〇)」

ビーマは王女に起こされて、寝台を離れ、クッションなどを備えたソファーに座った。彼はまるで雲のように見えた。(一一) ビーマは愛しい妻である王女にたずねた。

「あなたはどうしてあわてふためいて私のもとに来たのか。(一二) あなたの顔色は普通ではない。あなたはやつれ、青白く見える。私がわかるように、すべてを残らず言いなさい。(一三) 幸せなことでも不幸なことでも、厭なことでも好ましいことでも、すべてをありのままに言いなさい。聞いたら、その後は私がうまくやります。(一四) クリシュナーよ、すべての仕事において、あなたは私だけを信ずることができる。私は非常時において、何度もあなたを救った。(一五) あなたがしてもらいたいと望むことを、すぐ望みのままに告げてから、再び自分の寝台に帰りなさい。他の者たちが気づかないように。(一六)」(第十六章)

ドラウパディーは言った。

「ユディシティラを夫に持った女は哀れです。あなたはすべての苦しみを知っていながら、どうして私にたずねるのですか。(一) バーラタよ、あの時あの使い走りが私のことを奴隷女

と呼びながら、集会場で、会衆の中に私を連れて行ったことが、私を燃やします。ビーマよ。(二)私のような王の娘が、あのような苦しみを経験した後で、どうして生きていられるでしょうか。ドラウパディーを除いて……。(三)そして第二回目は、森に住んでいた時、邪悪なシンドゥ国王（ジャヤドラタ）による狼藉。いったい誰がそのようなことに耐えることができるでしょうか。(四)そしてまた、マツヤ国王の御前で、あの博徒が見ている所で、キーチャカによる足蹴。私のような女が、どうして生きていられましょう。(五)このように私が多くの苦しみに悩んでいるのに、ビーマよ、私のことを知らないとは。私は生きていて何になりましょう。(六)

人中の虎ビーマよ、ヴィラータ王の義弟である将軍キーチャカは非常に邪悪です。(七)その悪党が、サイランドリー（召使女）のなりをして王宮に住んでいる私に、いつも『私の妻になれ』と言い寄って来ます。(八)敵を殺す勇士よ、殺すに値する彼に言い寄られて、私の心は、時至って熟した果実のように裂けてしまいます。(九)

あのろくでもない賭博師の兄さんを非難しなさい。あの人の所行により、私はこの果てしない不幸に陥ったのです。(一〇)というのは、ろくでなしの賭博師を除いて誰が、王国を捨て、全財産と自分自身を捨て、賭けにより亡命することになりましょう。(一一)もし長年の間、朝夕、千ニシュカ（金貨）とその他の高価な財産を賭けたとしても、黄金、現金、衣服、乗物、牽引動物、羊と山羊、馬と騾馬（らば）の群を、決して失いはしない。(一二―一三)彼は今、賭博により富貴を奪われ、自分の仕事のことを考えながら、愚者のように沈黙している。(一四)

斑点のある、黄金の輪をつけた一万頭の象が、行進する彼に従っていたものだが、その彼が今、ここで賭博により生活している。(二五)インドラプラスタの都では、無量の威光を持つ十万人の王が、ユディシティラ大王に伺候していた。(二六)彼の台所では、いつも十万人の召使女が、食器を手に持って、昼も夜も客人たちに食事を出していた。(二七)最高に気前のよい彼は、千ニシュカを布施していた。その彼が賭博から生じた大なる災禍に陥っている。(二八)多くの美声にめぐまれた吟誦者（スータ）と讃嘆者（マーガダ）が、よく磨かれた宝玉の耳環をつけて、朝に夕に彼に仕えていた。(二九)いつも千人の聖仙が彼の集会場に集まっていた。彼らは苦行と学識を積み、すべての願望をかなえられた。(三〇)ユディシティラは親切であったから、いつも倦（う）むことなく、その王国において、盲人、老人、身寄りのない人など、すべての不幸な人々を保護した。(三一)その彼が今や悲惨な有様になり、マツヤ国王の従者となった。ユディシティラはカンカと称して、王の集会場で賭博師となっている。(三二)」(三三―二九略)

(第十七章)／(第十八章略)

ドラウパディーは言った。

「あの賭博師のせいで、私はサイランドリーの身なりをして、王宮を駆けまわり、スデーシュナーのために掃除をしています。(一)勇士よ、王女である私のひどい変わり様を見なさい。私は病人が苦痛を忍ぶように、すべての苦しみに耐えて過ごしています。(二)人間にとって

成功、勝敗は定めないものと考えて、私は夫たちの再起を待っています。(三) 人が勝利する原因であるところのものが、まさに敗れる原因でもある、と考えて私は待っています。(四) 以前は人に与えていた人々が人に乞うこともあります。殺した者たちが殺されます。敵を倒した人々が敵に倒されます。私はそのような例を聞いております。(五) 運命にとっては不可能なことはありません。運命を乗り越えることはできません。ですから運命が再び好転するのを待っています。(六) 前に水があった所に、再び水があるはずと、運が再び巡って来ることを望んで、私は再起を待っています。(七)」

〔クリシュナーの嘆きはなおも長々と続く。(八―二五略)〕

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナーはビーマセーナにその苦しみを数えあげながら、彼を見上げて静かに泣いた。(二六) 彼女は何度もため息をついて、涙で口ごもり、ビーマセーナの心を痛めさせつつ、次のように言った。(二七)

「ビーマよ、私は過去に神々に対し多くの罪を犯したのでしょう。不幸にも、死ぬべき時に生きているのだから。(二八)」

そこで敵の勇士を殺す狼腹(ビーマ)は、そのふるえている女の〔労働で〕腫れて肉刺のできた手を彼の顔にあてて泣いた。(二九) そして強力なビーマは、彼女の両手をとり、涙を流して、最高に苦悩して、次のように言った。(三〇)

(第十九章)

ビーマセーナは言った。

「以前は赤らんでいたあなたの両手にこのように肉刺ができているとは、私の腕力もアルジュナのガーンディーヴァ弓も地に落ちたものだ。(一) ヴィラータの集会場で、もしダルマ王(ユディシティラ)が目配せで私を止めなかったら、私はそこで大殺戮をしたところだ。美しい女よ、彼の意図を知って、私は動かなかったのである。(二)

王国から追放されたこと、スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)やカルナやシャクニなど、クル一族の連中を殺さなかったこと、邪悪なドゥフシャーサナの頭を切り取らなかったこと、それは心に刺さった棘のように私を燃やす。美しい尻の女よ、法を捨ててはいけない。非常に聡明な女よ、怒りを捨てなさい。(三―四) もしあなたの非難をユディシティラ王が聞いたら、美しい女よ、彼は完全に命を捨ててしまう。(五) アルジュナや双子も死んでしまう。美しい尻、細い胴の女よ。彼らがあの世に行けば、私も生きていることはできない。(六)

シャリヤーティの娘でスカニヤーという美女は、森で、蟻塚と化していたブリグの息子チヤヴァナに、〔その怒りを〕鎮めるために従った。(七) またナーダーヤニー(または、ナーラーヤニー)は、その容姿の美しさはあなたも聞いたことがあろうが、かつて千歳の老人である夫に従った。(八) また、ジャナカの娘であるヴィデーハの王女シーターについても聞いたであろう。彼女は大森林に住む夫に従った。(九) そのラーマの愛しい妻、美しい尻の王妃は、羅刹に幽閉さ

れて苦しんだが、ひたすらラーマに従った。(二〇)同様に、可愛い女よ、若さと容姿にめぐまれたローパームドラーは、人間には達しがたいすべての享楽を捨てて、アガスティヤに従った。(二一)これらの夫に貞節な美しい有名な妻たちのように、クリシュナーよ、あなたもすべての美質をそなえている。(二二)少しの間辛抱しなさい。一カ月半。十三年が満ちれば、あなたは再び王妃になる。(二三)」

ドラウパディーは言った。

「ビーマよ、私は諸々の不幸に耐えられず、悲しみによりこのように涙を流しました。王を非難しているのではありません。(二四)大力のビーマセーナよ、仕事をする時が近づきました。ぐずぐずしないで、仕事の準備をしなさい。(二五)ビーマよ、スデーシュナーは容姿の点で私の方が勝っていると心配し、いつも王が私の方に行かないかと恐れています。(二六)そのような彼女の気持を知り、また自らは誤った考えを抱き、非常に邪悪のキーチャカは、いつも私に言い寄ります。(二七)ビーマよ、私は彼に対して怒りますが、怒りをおさえ、愛欲に迷った彼に言いました。

『キーチャカよ、自分を大切にしなさい。(二八)私は五名のガンダルヴァたちの愛しい妻です。無敵で乱暴な勇士である彼らは、あなたを殺すでしょう。(二九)』

このように言われて、邪悪なキーチャカは答えました。

『美しい微笑のサイランドリーよ、私はガンダルヴァたちを恐れない。(三〇)戦闘で幾百幾千のガンダルヴァがかかって来ても、私はそれを殺すであろう。可愛い女よ、ちょっと付き

合ってくれ。(三一)』

そう言われた時、私は再び、愛欲にかられたキーチャカに言いました。

『あなたはあの誉れあるガンダルヴァたちには太刀打ちできません。(三二)私はいつも法(ダルマ)に立脚し、良家にふさわしい生活を守っています。誰かが殺されるのは望みません。ですから、キーチャカよ、生きなさい。(三三)』

このように言われても、その悪党は大声で笑い、正道にとどまらず、法を守ろうとも望みませんでした。(二四)本性邪悪で、悪い感情を抱き、愛欲に支配され、無礼なその悪党を、私は何度も拒絶しました。しかし、会うたびに彼は私を打つでしょう。そこで私は命を捨てたいのです。(二五)あなた方が法について努力しているうちに、大きな法が滅びます。あなた方が約定を守っているうちに、あなたたちの妻が死んでしまいます。(二六)しかし、妻が守られれば、子孫が守られます。子孫が守られれば、自身も守られます。(二七)バラモンたちが四姓(ヴァルナ)の法(義務)について語ったことを私は聞いております。王族(クシャトリヤ)の法は、常に、敵を滅ぼすことで、それ以外にはありません。(二八)

ダルマ王(ユディシティラ)の見ている前で、しかもあなたのいるところで、大力のビーマセーナよ、キーチャカは私を足蹴にしました。(二九)あなたはあの恐ろしいジャタースラから私を救ってくれました。そしてまた、あなたは兄弟とともに、ジャヤドラタを破りました。(三〇)私を辱めたあの悪党を殺して下さい。キーチャカは王の寵臣ですから、私を悩ませます。ビーマよ。(三一)あの愛欲に狂った男を、瓶を石にぶつけて砕くように殺して下さい。

彼は私の数々の災いの原因です。（三二）もし明日、太陽が昇った時に彼が生きているなら、私は毒を調合して飲むでしょう。キーチャカの自由にならないように。というのは、ビーマセーナよ、私にとって、あなたの前で死ぬほうがましだからです。（三三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クリシュナーはこのように言うと、ビーマの胸にとりすがって泣いた。ビーマは彼女を抱きしめて大いに慰めて、口の端を舐めまわし（戦いの準備のしぐさ）、キーチャカのことを考えた。（三四）

（第二十章）

キーチャカを殺すビーマ

ビーマセーナは言った。

「妻よ、あなたが言った通りにしよう。今日、キーチャカとその縁者を成敗しよう。（一）美しい微笑のドラウパディーよ、悩みと悲しみを捨て、〔夜が明けて〕今日の晩になったら、あいつと会いなさい。（二）マツヤ国王が作らせた演舞場がある。昼間はそこで女の子たちが踊るが、夜になると彼女たちは家に帰る。（三）可愛い女よ、そこに見事にしつらえられた、丈夫な寝台がある。私はそこで、あいつにすでに亡き御先祖様をおがませてやる（すなわち、「あいつを殺してやる」）。（四）しかし、あなたが彼と約束しているところを誰にも見られないように

しなさい。美しい女よ、彼がそこに来るように手配しなさい。（五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

二人はこのように話し合いながら、嘆いて涙を流し、こよなく恐ろしいその夜の残りを耐えて過ごした。（六）その夜が過ぎた時、朝、キーチャカは起き上がり、王宮に行ってドラウパディーに言った。（七）

「集会場で、王が見ている前で足で蹴飛ばされた時、助けを求めるあなたは、より強い者によって救助されなかった。（八）マツヤ国の人々の噂では、王とは名ばかりだと言われている。実は軍司令官である私がマツヤ国の王に他ならないということだ。（九）可愛い女よ、だから安心して私を受け入れなさい。私はあなたの召使になる。直ちに百ニシュカをあなたにあげる。美しい尻の女よ。（一〇）私は百人の召使女と百人の召使をあなたにあげる。雌騾馬（らば）をつないだ車をあげる。可愛い女よ、いっしょに寝よう。（一一）」

ドラウパディーは言った。

「キーチャカさん、一つ条件を受け入れて下さい。あなたが私と会うことを友達や兄弟も知らないようにして下さい。（一二）というのは、あの誉れあるガンダルヴァたちに知られることを恐れているからです。このように約束して下されば、私はあなたのものになります。（一三）」

キーチャカは言った。

「美しい尻の女よ、あなたの言うようにしよう。よい女よ、私はあなたしかいない部屋に一人で行く。（二四）バナナの〔幹の〕ような腿をした女よ、あなたと寝たくて、愛に迷わされている。太陽のように輝かしいガンダルヴァたちが気づかないようにしよう。（二五）」

ドラウパディーは言った。

「マツヤ国王が作らせた演舞場があります。昼間はそこで女の子たちが踊りますが、夜は家へ帰ります。（二六）暗くなったらそこへ行って下さい。ガンダルヴァたちはその場所を知りません。そこでは確かに何の障害もないでしょう。（二七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

キーチャカとそのようなことを示し合わせたクリシュナーにとって、その半日があたかも一カ月のようであった。（二八）キーチャカは大そう喜びにあふれて家に帰った。その愚か者は、サイランドリーの姿をとった死が迫っていることに気づかなかった。（二九）彼は香、装飾品、花輪が特別に好きだったが、愛欲に迷わされて、急いで身を飾った。（三〇）彼は仕事をしていても、あの切れ長の眼の女のことのみを考えていて、時間が非常に長く感じられた。（三一）これから光輝を失おうとしている彼は、よりいっそう輝いていた。灯心が燃え尽きようとする灯明が、消える時にいっそう輝くように。（三二）キーチャカは愛欲に迷わされ、すっかり信用し、密会のことを考え続けて、その日が過ぎるのを知らなかった。（三三）

一方、美しいドラウパディーは台所にいるビーマのもとに行き、夫である彼に近づいた。

（三四）美しい髪をした彼女は彼に言った。

「敵を悩ます者よ、あなたが言ったように、私はキーチャカと演舞場で会う約束をしました。（二五）キーチャカは夜、一人で誰もいない演舞場に来るでしょう。強力な人よ、キーチャカを殺しなさい。（二六）ビーマよ、演舞場に行き、あの慢心で増長したキーチャカを亡き者にしなさい。（二七）彼は増長して、ガンダルヴァたちを軽蔑しました。最高の戦士よ、象が葦を引き抜くように、彼を引き抜きなさい。（二八）ビーマよ、苦しみに打ちのめされた私の涙を拭って下さい。そして、どうかあなたと一族（クラ）の名誉を守って下さい。（二九）」

ビーマセーナは言った。

「美しい尻の女よ、ようこそ。あなたはよいことを知らせてくれた。美しい顔色の女よ、誰も彼といっしょに来ないように願っていたから。（三〇）私は以前ヒディンバを殺して嬉しかったが、キーチャカとの密会を聞いて、同じぐらい嬉しい。（三一）私は兄弟たちと法（ダルマ）にかけて誓う。神々の王（インドラ）がヴリトラを殺したように、私はキーチャカを殺すであろう。（三二）私は密かに、あるいは公然と、キーチャカを粉砕する。もしマツヤの人々が気づくならば、私は必ずや彼らをも殺す。（三三）それから、ドゥルヨーダナを殺して領土を取りもどす。ユディシティラはマツヤ国王に仕えておればいい。（三四）」

ドラウパディーは言った。

「夫よ、私のために、誓いを捨てることのないように。勇士よ、密かにキーチャカを殺しなさい。（三五）」

ビーマセーナは言った。
「可愛い女よ、あなたが言う通りにしよう。非の打ち所のない女よ、今夜、人に見られずに襲って、彼の頭を粉砕するであろう。象がビルヴァの実を砕くように。あの邪悪なキーチャカは得られがたいものを望んだのだ。（三六―三七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

さて、ビーマは先に行って、夜の闇に隠れて座っていた。獅子が隠れて鹿を待つように、彼はキーチャカを待っていた。（三八）一方キーチャカは、好みのままに身を飾って、ドラウパディーとの密会にわくわくし、約束の時間に演舞場にやって来た。（三九）彼は密会のことを考えつつ演舞場に入った。その非常に邪悪な男は、闇に包まれたその大ホールに入って、先に来て一隅にいる、無比の力を持つビーマに出くわした。（四〇―四一）その寝台に寝ている死神（すなわち、ビーマ）を、キーチャカはなでた。ビーマは、クリシュナーが乱暴されたことから生ずる怒りでめらめら燃えていた。（四二）愛欲に迷ったキーチャカは彼に近づき、歓喜で心をかき乱され、笑いながら言った。（四三）

「私は種々の無限の財物をあなたに持って来た。すべてをあなたにあげようと思って、急いでここに来たのである。（四四）家にいる女たちはいつも当然のように私を讃える。『あなたはよい衣服を着てハンサムである。あなたのような男は他にいない』と。（四五）」

ビーマセーナは言った。

「ハンサムでよかったな。よくぞ自分をほめ讃えた。しかし、このような接触はいまだかつて経験したことがないだろう。（四六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このように言って、恐ろしく勇猛な勇士ビーマは、笑って、その最低の男に飛びかかった。ビーマは、キーチャカの花輪を飾ったよい香りのする髪をつかんだ。（四七）最強の男キーチャカは、髪を力まかせにつかまれたが、その髪を急いで引っこめて、両腕でビーマをつかんだ。（四八）そして怒った二名の人獅子の間に格闘が行なわれた。春、雌象が原因で、二頭の強力な象の間に格闘が行なわれるように。（四九）ビーマがわずかに疲れ、怒りのあまり不安定な体勢になった時、強力なキーチャカは両膝で彼を地面に投げた。（五〇）強力なキーチャカによって地面に倒されたビーマは、しかし、杖で打たれた蛇のように急いではね起きた。（五一）力に酔い痴れた強力な両者は、人気（ひとけ）のない真夜中、互いに攻撃し合った。（五二）そこでその最上の建物は幾度も震動した。二人は互いに猛烈に怒って咆哮した。（五三）ビーマは強力なキーチャカの胸を両の手の平で打った。キーチャカは怒りに燃えて、一歩も動かなかった。（五四）しかし、キーチャカはその耐えがたい衝撃にしばらく耐えているうちに、ビーマの力に苦しめられて、力を失った。（五五）大力のビーマセーナは、彼が力を失ったのを知ると、勢いよく胸に引き寄せて、気絶した彼を押しつぶした。（五六）最高の勝利者である狼腹（ビーマ）は、怒りにかられ、息を吐くと、再び力をこめて彼の髪をつかんだ。（五七）キーチャカ

をつかんで、大力のビーマは咆哮した。肉を求める虎が大きな鹿を捕えて咆哮するように。(五八)ビーマは彼の両足と両手と頭と首を、すべて、彼の胴体の中に入れてしまった。ちょうどシヴァ神が獣(パシュ)に対してしたように。(五九)大力のビーマセーナは、全身を押しつぶされ肉団子のようにされた彼を、クリシュナー(ドラウパディー)に見せた。(六〇)大威光あるビーマはドラウパディーに言った。

「妻よ、さあ、あなたに言い寄った男がどのようにされたかを見なさい。(六一)」

このようにして彼は、キーチャカを殺し、怒りを鎮めると、ドラウパディーに別れを告げ、急いで台所へ行った。(六二)一方、最高の女性であるドラウパディーはキーチャカを殺してもらって、苦しみを離れて喜び、集会場の番人たちに告げた。(六三)

「私の夫であるガンダルヴァたちに殺されて、キーチャカがここに横たわっている。彼は他人の妻への愛に迷ったのです。来て下さい。御覧なさい。(六四)」

彼女の言葉を聞いて、演舞場の番人たちが幾千となく、松明(たいまつ)を持って、急いで集まって来た。(六五)そしてその建物に入ると、キーチャカが息絶え、血まみれになって、地面に倒れているのが認められた。(六六)

「彼の首はどこか。両足、両手はどこか。頭はどこか。」

彼らは考察して、彼がガンダルヴァに殺されたと考えた。(六七)

(第二十一章)

ビーマ、キーチャカの一族を殺す

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時、すべてのキーチャカの縁者たちがそこに集まって来て、まわりをぐるりと取り巻き、彼を見て泣いた。(一)陸に引き上げられた亀が手足などを引っ込めるように、すべての手足などが胴に埋まっているキーチャカを見て、人々はみな総毛立って恐れおののいた。(二)悪魔がインドラに粉砕されるように、ビーマセーナに粉砕された彼の葬式をしようとして、人々は彼を外に運び始めた。(三)その時、集まったキーチャカの一族は、遠からぬ所で柱にもたれて立っている、非の打ち所のない身体をしたクリシュナーを見た。(四)キーチャカの一族が集まった時、キーチャカの弟が彼らに言った。

「あの不貞の女のためにキーチャカは殺されたのだから、あれを早く殺すべきである。(五)あるいは、ここで殺すべきではない。彼女を愛したキーチャカとともに焼くべきである。何にせよ、死んだキーチャカに好ましいことをすべきだ。(六)」

それから彼らはヴィラータに言った。

「キーチャカはあの女のために殺されました。今、彼とともに焼くべきです。どうか許可して下さい。(七)」

王はキーチャカの勇武を考慮して、サイランドリーをキーチャカとともに焼くことを承認

した。(八) キーチャカの一族は、恐れて気絶せんばかりの、蓮の眼をした彼女に襲いかかって乱暴につかまえた。(九) それから、彼ら一同は、その美しい胴の女を縛って持ち上げ、火葬場の方にかついで行った。(一〇) しかし、その非の打ち所ないクリシュナーは、キーチャカの一族に連れられて行く時、保護者を持つ彼女は、保護者を求めて叫んだ。(一一)

ドラウパディーは言った。

「ジャヤ、ジャヤンタ、ヴィジャヤ、ジャヤトセーナ、ジャヤバラたちが、私の言葉を聞くように。キーチャカの一族の者たちが私を連れて行く。(一二) 大きな戦いにおいて、強力な彼らの弓弦と弓籠手(ゆごて)の恐ろしい音が、雷鳴のように聞こえる。(一三) 彼ら誉れあるガンダルヴァたちの、力強い戦車の音も聞こえる。その彼らが、私の言葉を聞くように。キーチャカの一族のものたちが私を連れて行く。(一四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

クリシュナーの悲痛な嘆声を聞くやいなや、ビーマは逡巡することなく寝台から飛び下りた。(一五)

ビーマセーナは言った。

「サイランドリーよ、私はあなたが言った言葉を聞いた。恐れる女よ、それ故あなたは、キーチャカの一族の者たちを恐れる必要はない。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その勇士はそう言うと、キーチャカの一族を殺そうと望んで伸(の)びをした。それから、大急ぎで〔ガンダルヴァに〕変装して、出入口を通らないで外に飛び出た。(一七) ビーマセーナは城壁から急いで樹を裂いて〔下り〕、キーチャカの一族のものたちが向かった火葬場をめざして行った。(一八) 強力な彼はその幹と枝のついた十ヴィヤーマの長さの樹をつかむと、杖(ダンダ)を手に持つ死神のように、キーチャカの一族を追い駆けた。(一九) バニヤン、アシュヴァッタ、キンシュカなどの樹々が、彼の凄まじい勢いにより、大地に倒れ、群をなしてそこに横たわった。(二〇)

ガンダルヴァが獅子のように怒ってやって来るのを見て、キーチャカの一族はすべて戦慄し、消沈し恐れてふるえた。(二一) その時、そのガンダルヴァが死神のように来るのを見て、兄を焼こうとしているキーチャカの弟たちは、消沈し恐れてふるえ、お互いに言い合った。(二二)

「強力なガンダルヴァが怒って、樹木を振り上げてやって来る。すぐにサイランドリーを解放せよ。我々に大きな危険が迫った。(二三)」

彼らは樹木を振りまわしているビーマセーナを見ると、そこにドラウパディーを捨てて都に逃げ帰った。(二四) ビーマは、インドラが悪魔たちを見るように、逃げて行く彼らを見て、百五名をヤマ(閻魔)の住処に送った。(二五) それから無敵の勇士ビーマは、涙にあふれた顔をした哀れなドラウパディーを救出して、慰めて言った。(二六)

「恐れる女（可愛い女）よ、罪もないあなたを苦しめた奴らはこの通り殺された。クリシュナーよ、都に帰りなさい。あなたには恐れるものはない。私は他の道を通ってヴィラータの台所へ行く。（二七）」

そこで百五名のものが殺されて横たわっていた。ちょうどそれは、切られて樹々が散乱している森林のようであった。（二八）王よ、このようにして、百五名のキーチャカの一族が殺された。そして前述の将軍（キーチャカ）を加えて、百六名が殺されたことになる。（二九）集まった男女は、その大奇蹟を見て最高に驚嘆し、何も言葉を発しなかった。（三〇）（第二十二章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

キーチャカの一族が殺されたのを見て、人々は王のもとに行って報告した。

「王様、百名以上のキーチャカの一族がガンダルヴァたちに殺されました。（一）キーチャカの一族が、（インドラの）金剛杵（ヴァジュラ）で裂かれた巨大な山頂のように、大地に散らばっているのが認められます。（二）サイランドリーは解放され、再び王宮に帰りました。王よ、あなたの都すべてが危機に瀕しています。（三）サイランドリーはあのような美形ですし、ガンダルヴァたちは強力です。そして男にとって、好ましい対象は必ずや性欲をそそられるものです。（四）王よ、サイランドリーに対する過失により（異本による）、あなたの都が滅亡しないように、速やかに対策を講じるべきです。（五）」

彼らの言葉を聞いて、軍隊の長ヴィラータは、「キーチャカ一族の葬式を行なえ」と命じた。（六）

「すべてのキーチャカの一族を、速やかに、宝物や香とともにすっかり、よく燃やした一つの火の中で焼くべきである。（七）」

そして恐怖を抱いた王は、王妃スデーシュナーに言った。

「帰って来たサイランドリーに、私の言葉として、次のように告げるべきである。（八）『サイランドリーよ、行きなさい。どうかお願いだ。望みのままにふるまいなさい。美しい尻の女よ、王はガンダルヴァたちにうち破られることを恐れている。（九）』というのは、私は、ガンダルヴァに守られている彼女に、自分で告げることはできない。しかし、女性というものは罪のないものだ。そこであなたが彼女に言ってもらいたいのだ。（一〇）」

キーチャカの一族は滅ぼされ、クリシュナーは危険から解放され、ビーマセーナに救われて都に帰った。（一一）その若い賢明な女は、虎を恐れる雌鹿のようであったが、身体と衣服を水で浄めた。（一二）男たちは彼女を見ると十方に逃げた。ある男たちは、ガンダルヴァたちを恐れて眼を閉じた。（一三）それからドラウパディーは、台所の戸口に立っている、発情した巨象のようなビーマセーナを見た。（一四）驚嘆して、彼女は暗号により密かに告げた。

「私を救ってくれたガンダルヴァ王に敬礼。（一五）」

ビーマセーナは言った。

「その男たちは彼女の支配下にあってここで暮らしているが、彼女のその言葉を聞いて、彼

らは負債なく暮らす（義務を果たしたと思う）だろう。（二六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから彼女は、演舞場で勇士アルジュナを見た。彼はヴィラータ王の娘たちに舞踊を教えていた。（二七）少女たちはアルジュナとともに演舞場から出て、罪もないのに苦しめられたクリシュナーが来るのを見た。（二八）

少女たちは言った。

「サイランドリーよ、幸いなことに、あなたは解放された。幸いなことに、あなたはもどって来た。幸いなことに、罪もないあなたを苦しめたキーチャカの一族は殺された。（二九）」

ブリハンナダー（アルジュナ）は言った。

「サイランドリーさん、あなたはどのようにして解放されたの。悪者たちはどのようにして殺されたの。すべてをありのままあなたから聞きたいわ。（三〇）」

サイランドリーは言った。

「ブリハンナダーよ、あなたにとって、サイランドリーが何の関係があるというの。美しい女よ、あなたはいつも少女たちの部屋で安楽に暮らしているでしょう。（三一）サイランドリーが味わったような苦しみをあなたは受けたことがないから、苦しんでいる私をからかって、そのようにたずねるのでしょう。（三二）」

ブリハンナダーは言った。

「美しい女よ、ブリハンナダーも畜生道に落ちて、この上ない苦しみを味わっている。お嬢さん、あなたは彼女のことを知らないのよ。（三三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それからドラウパディーは、少女たちとともに王宮に入り、逃げ隠れすることなく、スデーシュナーの近くに行った。（三四）王妃はヴィラータの言葉として、彼女に告げた。

「サイランドリーよ、すぐにあなたの望むところへ行きなさい。（三五）あなたに幸あらんことを。王はガンダルヴァたちに害されることを恐れています。美しい眉の女よ、あなたは若く、容姿にかけて地上に比類のない女ですから。（三六）」

サイランドリーは言った。

「王様が十三日だけ私のことを大目に見て下さいますように。王妃様、あのガンダルヴァたちは、疑いもなく、その目的を成就するでしょう。（三七）そうすれば、彼らは私を連れて去り、あなたによいことをするでしょう。彼らは必ず、王とその一族に幸せをもたらすでしょう。（三八）」

（第二十三章）

(47) 牛の略奪（第二十四章—第六十二章）

パーンダヴァたちの探索

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

キーチャカが弟たちとともに殺されたことで、人々は大きな恐怖を感じ、すっかり驚いた。（一）その都や地方のいたるところに噂が広まった。

「非常に強力なキーチャカは、その勇猛さにより王の寵臣であった。（二）しかし彼は邪で、人々を攻撃し、人妻を暴行するような男であった。その邪な悪人は、ガンダルヴァたちに殺された。（三）」

このように、人々は敵軍を滅ぼす無敵のキーチャカについて、方々で噂した。（四）

その頃、ドゥルヨーダナに用いられたスパイたちは、多くの村や国土や都市を探索していた。（五）彼らは命じられたように、国ごとの調査をしてから、考えこみながら象の都（ハースティナプラ）に帰った。（六）そこで彼らは、クルの王ドゥルヨーダナや、ドローナ、カルナ、クリパ、偉大なビーシュマに会った。（七）弟たちとトリガルタの勇士たちとともに、集会場の中央に座っているドゥルヨーダナに、彼らは次のように言った。（八）

「我々は彼らパーンダヴァたちを探索するため、絶えず、あの大森林において最大の努力を払いました。王よ。（九）森は人気はなく、獣に満ち、種々の樹木や蔓草でおおわれ、蔦葛に満ち、種々の藪におおわれています。（一〇）しかし、確固たる勇猛さを有するパーンダヴァたちがどこへ行ったかわかりません。彼らの足跡を求めてあちこち探索しました。（一一）高い山の峰、様々な地方、人々に満ちあふれた場所、山村、都市を……。（一二）王よ、我々は何度も探しましたが、パーンダヴァたちを見つけられませんでした。彼らは完全に消え失せました。人中の雄牛よ、あなた方に幸あらんことを。（一三）

最高の戦士である王よ、我々は戦車の跡を探し、しばらくの間、御者たちの後を追いました。（一四）適切に探索して、我々は事実を知りました。御者たちはパーンダヴァたちなしで、ドゥヴァーラヴァティーに着きました。敵を苦しめる勇士よ。（一五）王よ、パーンダヴァたちと貞節なクリシュナーはそこにいません。彼らはすっかり姿を消してしまいました。バラタの雄牛よ、あなたに敬礼します。（一六）彼ら偉大なパーンダヴァたちの行方も住処もわかりません。また生活も行動もわかりません。王よ、今後どうすればよいか御指示下さい。（一七）パーンダヴァたちを探索するために、更に何をすればよいでしょうか。

そして、我々にとって好ましい、めでたいことを申し上げますからお聞き下さい。（一八）マツヤ国王のスータである偉大なキーチャカは、その大軍でトリガタを破りました。（一九）ところが、その邪悪な彼が、夜中、弟たちとともに、見えざるガンダルヴァたちに殺されて亡き者となったということです。（二〇）クル族の王よ、敵の破滅という好ましいことを聞かれた後は、次になすべきことをなさって下さい。（二一）」

（第二十四章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ドゥルヨーダナ王は彼らの言葉を聞くと、長らく沈思してから、会衆に告げた。(一)

「ことの成り行きをすっかり知ることは、実に難しい。それ故、御一同は、一体どこにパーンダヴァたちが行ったか見つけてもらいたい。(二)時間はわずかしか残っていない。十三年目に彼らが人に知られずに過ごさなければならない期間はほとんど過ぎた。(三)パーンダヴァたちがこの年の残りを越せば、真実の誓いに専心する彼らは約定を果たすことになる。(四)彼らはすべて、〔こめかみから分泌液(マダ)を〕したたらせている巨象のように、猛毒の蛇のように、必ずやクル一族に対して激しく怒るであろう。(五)その期限の前に発見されれば、彼らは再び哀れな身なりをし、怒りをおさえて、また森に入らなければならぬ。(六)それ故、我々の王国が完全に不滅で、対立もなく、揺るぎなく、対抗者がなく、久しく続くように、速やかに調査すべきである。(七)」

その時カルナは言った。

「バーラタよ、すぐにもっと抜け目なく、仕事に巧みで、うまくやれる他のスパイたちを行かせなさい。(八)彼らは変装して、多くの地方のある繁栄した諸国を歩きまわるべきです。そこで種々の集会、聖者や出家者、召使たち、聖地、種々の鉱山において、それらの男たちは熟練した推理により調査すべきです。(九―一〇)種々の専門家が専念して、巧妙に変装して、隠れて住んでいるパーンダヴァたちを巧みに探索すべきです。(一一)川の茂み、聖地、村、都市、心地よい隠棲所、山々、洞窟において……。(一二)」

それから、弟のドゥフシャーサナが、邪悪な性質を愛する兄に告げた。(一三)

「カルナが言ったことを、すべて調べてみましょう。すべてのスパイたち、そしてこれらの多くの他のスパイたちは、国から国へと、あちこちを、指示された通りに、適切に探索すべきです。(一四)しかし、彼らの行方も住処も生活も知られません。彼らは完全に（異本による）姿を隠してしまいました。あるいは海の向こうに行ったかも知れません。(一五)あるいは、勇士とうぬぼれている彼らは、大森林で野獣に食われたかも知れません。あるいは、何か難儀なことに会って、永久に滅亡したかも知れません。(一六)それ故クルの王よ、心を集中して、力の限り、よいと思うことを実行しなさい。(一七)」

(第二十五章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時、真実を見る強力なドローナが言った。

「あのような者たちは、滅びることも敗れることもない。(一)彼らは勇士で、学術を修得し、知性を有し、感官を制御している。法(ダルマ)をわきまえ、恩を知り、ダルマ王（ユディシティラ）に忠実である。(二)そのダルマ王は、政略と法と実利(アルタ)の真実を知り、父のようであり、精神統一し、法を守り、堅く真実を守り、長兄であり、長老を尊敬する。(三)王よ、弟たちはその廉恥心のあるアジャータシャトル（ユディシティラ）、弟たちに誠実な偉大な兄に、忠実に従っている。(四)弟たちは従順で、穏やかで、偉大である。賢明なユディシティラが、どうして彼らのために

なることをしないであろうか。(五)それ故、彼らは隆盛の時が訪れるのを努力して待っている。彼らは決して滅びることはないと私は考える。(六)であるから、すぐに時を失することなく、よく考えてなすべきことをやりなさい。そして、すべてのものごとに対し自制しているパーンドゥの息子たちの居所を、適切に探しなさい。(七)あの勇士たちは、罪過なく、苦行を積んでいるので、見出されがたいであろう。(八)ユディシティラは心清く、美質をそなえ、約束を守り、政策を知り、清浄である。光輝のかたまりで、眼をそなえた者が把捉しても計りがたい。(九)そのように知って、対処すべきである。それ故、我々は再び探索しよう。バラモンや情報員や聖者〔に扮した者〕や、その他の専門家たちを用いて。(一〇)」

（第二十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

シャンタヌの息子ビーシュマは、バラタ族の人々の祖父であり、学識あり、時と場所をわきまえ、真実を知り、一切の法(ダルマ)を知っている。(一)その彼は、師（ドローナ）の言葉が終わると、その説を支持した。彼はバラタ族の人々に対し、有益になるように、次の言葉を告げた。(二)その言葉は、法を知るユディシティラの肩を持つもので、法にもとづくものであった。それは、常に悪しき人々には受けいれられがたく、善き人々にはいつも好まれるような言葉であった。ビーシュマは、このような善き人々に敬われる言葉を述べた。(三)

「すべての真実を知るバラモンであるドローナが言った通りである。あらゆる吉相をそなえたパーンダヴァたちが死ぬことはあり得ない。(四)彼らは学識と徳行をそなえている。よい誓戒を守っている。長老の教えに専念し、真実の誓いに専念している。(五)約定を知る彼らは約定を守り、清浄なる信条を保っている。善き人々の重い責任を果たしている彼らが滅びることはあり得ない。(六)あのパーンダヴァたちは、法(ダルマ)により、また自己の勇猛さにより守られている。彼らが滅亡することはあり得ないと私は確信する。(七)

バーラタよ、私はパーンダヴァに関する見解を示そう。見事にふるまう者の政策は、他の人々によって探ることはできないが……。(八)しかし、あのパーンダヴァたちのことを考えて、ここで我々ができることを、憎しみからでなく理性によって述べるから、それを聞きなさい。(九)わが子よ、長老の教えに従う、真実を習いとする人にとって、〔政策は〕見事に説かれ、決して政策にもとることは説かれないから。(一〇)もし賢者が立派な人々の中でどうしても論じなければならぬなら、あらゆる場合、法にかなうことを求め、その信念に従って述べるべきである。(一一)

私はこの件について、他の人々が考えるようには考えない。ユディシティラ王の住む都市や地方においては、不満を抱く人、妬みを持つ人、乱暴に語る人、慳貪(けんどん)な人はいないであろう。人々は各自の法（義務）に従事する。(一二―一三)そこはブラフマン（ヴェーダ）の音であふれ、供物に満ち、多くの祭式が行なわれ、多くの謝礼が払われている。(一四)そこでは疑いの余地なく、雨神（または「雲」）はいつも適切に雨を降らせる。大地は作物に満ち、災害を受けることはな

いであろう。(一五) 穀物は美味で、果実もおいしい。花輪は芳香あり、人々の言葉は美しい。(一六) ユディシティラ王の住む所では、風は快い感触である。人々が出会う場合は友好的である。恐怖が入り込むことはないであろう。(一七) そこには牛が多くいて、肥えており、乳を豊富に出す。牛乳、凝乳《ダディ》、サルピス(精製バター)は美味で好ましい。(一八) ユディシティラ王の住む所では、飲物は良質で食物は美味であろう。(一九) ユディシティラ王の住む所では、味、接触、香り、音声は美質をそなえ、見られる対象は清澄である。(二〇) わが子よ、十三年目にパーンダヴァが住む土地においては、あらゆるものが各自の美質をそなえている。(二一) そこでは、人々は喜びにあふれ、満足し、清浄で、滅びることはない。神々や客人に対して、全身全霊で愛情を捧げる(異本による)。(二二) ユディシティラ王の住む所では、人々は布施を好み、気力に満ち、常に法《ダルマ》に専念する。不善を憎み、善を求め、常に祭祀を行ない、殊勝な誓戒を有するであろう。(二三) ユディシティラ王の住む所では、わが子よ、人々は虚偽の言葉を捨て、清く幸せで吉祥であり、善きことを求め、殊勝なことを考え、常に望ましく好ましい誓戒を保つであろう。(二四)

わが子よ、その徳性あるプリター(クンティー)の息子のような人は、バラモンたちにも見出されないだろう。いわんや、普通の人々には、まったく見出され得ない。(二五) 彼には、真実、堅固さ、布施、最高の寂静、堅い忍耐、廉恥、繁栄、名声、最高の威光、温情、廉直がそなわっている。(二六)

それ故、以上述べたような所に、その賢者は変装して隠れて住んでいる。彼の最高の行方

について、私はこれ以上言うことはできない。(二七) クル族の王よ、このように考えて、あなたがよいと思われることを速やかに実行しなさい。もし私を信頼するなら。(二八)」

(第二十七章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、シャラドヴァットの息子クリパが次のように言った。

「長老がパーンダヴァたちについて告げたことは適切で時宜《じぎ》にかなったことである。(一) 法《ダルマ》と実利《アルタ》をともない、穏健で、真に道理にかなったことだ。このことに関する私の意見もビーシュマと同様だ。聞きなさい。(二)

彼らの行方と住処を、聖者(に扮したスパイ)たちにより調査すべきである。そして今、有益であるような政策を実行すべきだ。(三) わが子よ、繁栄を望む者は、普通の敵といえども侮ってはならぬ。いわんや、戦いにおいてすべての武器に巧みなパーンダヴァたちの場合は……。(四) それ故、時節が隆盛に向かうまで、偉大なパーンダヴァたちが変装し、ひっそりと隠れている間に、自国と他国における自己の力を知るべきである。そしてパーンダヴァたちの隆盛の時が訪れたら、疑いもなく、その偉大な勇士、気力に満ちたパーンダヴァたちは、その約定を完了し、この上ない威光をそなえるであろう。(五―七) それ故、彼らの隆盛の時が訪れたら、うまく彼らと講和できるように、軍隊と国庫を充実し、政策を講じるべきで

ある。（八）わが子よ、そこで自己の軍隊について、そのすべての友邦、その長所と短所に関し、すべて確実に知るべきである。（九）そして〔敵や友邦などの〕種々の軍隊や、中間国〔の軍〕についても知り、喜んで、または渋々、敵たちと講和すべきである。（一〇）敵に対しては、適切に懐柔策、離間策、贈与策、武力行使、貢納策を用いる。弱小の敵には軍隊で対処する。（一一）諸友邦を懐柔して、自軍に快く語りかけるべきである。そして国庫と軍隊を増強すれば、あなたはまさに成就を得るであろう。（一二）強力な敵が対峙した時も、パーンダヴァといえども、自軍と乗物を欠く場合は、あなたは戦うことができる。（一三）王よ、このようにすべてを自己の法（ダルマ）により、時に応じて決定するなら、あなたは長く幸福を享受するであろう。（一四）」

（第二十八章）

クル軍とトリガルタ軍の連合

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

その時、トリガルタの王、戦車群の長であるスシャルマンが、機会を得て、大急ぎで次のような言葉を述べた。（一）この王は以前から、幾度も、サールヴェーヤカと同盟したマツヤ軍によって、そして特にマツヤのキーチャカによってうち破られていた。（二）彼は親族たちとともに、その強力な男に力ずくで圧迫されていた。彼はカルナを見てから、ドゥルヨーダナに告げた。（三）

「マツヤ国王はその力により何度も私の国を圧迫しました。以前は、彼には強力な軍司令官キーチャカがおりました。（四）キーチャカは残酷で、短気で、邪悪であり、その武勇は地上に知れわたっていました。しかしその邪悪な悪党は、ガンダルヴァたちに殺されました。（五）王よ、彼が殺されたので、ヴィラータは誇りを失い、拠り所なく、気力も失せているだろうと私は考えます。（六）非の打ち所のない王よ、そこで、もしよろしければ、すべてのクル族と偉大なカルナは遠征すべきであると私は考えます。（七）好機到来、迅速に行なうべきであると思います。多くの穀物に富む彼の国に速やかに遠征なさい。（八）我々は彼の宝石や種々の財宝を奪いましょう。彼の村や国土を奪って分配しましょう。（九）そしてまた、彼の都を力ずくで圧迫して、種々のよい牛を幾千頭も奪いましょう。（一〇）王よ、すべてのクル軍とトリガルタ軍で連合して、我々は彼の牝牛を奪いましょう。（一一）あるいは彼と講和して、彼の勇武を抑制しましょう。そして彼のすべての軍隊を滅ぼして、支配下に置きましょう。（一二）うまく彼を支配下に置けば、私どもは安楽に過ごすことができるでしょう。そして疑いもなく、あなたの力は増大するでしょう。（一三）」

彼の言葉を聞くと、カルナは王に告げた。

「スシャルマンはよいことを言った。時機を得た、我々にとって有益な言葉だ。（一四）それ故、非の打ち所のない王よ、もしあなたがよいと思うなら、すぐに出陣しよう。軍隊を準備させ、配陣を整えて。（一五）我々みなの祖父である叡知あるクルの長老（ビーシュマ）、ドローナ師、シャラドヴァットの息子クリパ、彼らすべてがよいと考えるように遠征の準備をするべきで

ある。すぐに協議してあの王を成敗するために出発しよう。(一六―一七) 財産と勇武を失ったパーンダヴァたちなど、我々にとってどうでもよい。彼らはすっかり消滅したか、ヤマ(閻魔)の住処に行った。(一八) 王よ、我々は悩むことなくヴィラータの領土に遠征しましょう。我々は彼の牛と種々の財宝を奪いましょう。(一九)」

ドゥルヨーダナ王はカルナの言を受け入れた。そしてすぐに、常に彼の命令に忠実なドゥフシャーサナに自ら命じた。

「長老たちと協議して、速やかに軍隊の準備をせよ。(二〇―二一) 我々は指示の通り、すべてのクル軍とともに出発する。偉大な戦士スシャルマン王は、指示された地域に行け。(二二) トリガルタの人々とともに、すべての軍隊と乗物(象や馬)をともない、秘密裏に、先にマツヤの領土に行くべきである。(二三) 我々は後詰として一日後に、固く結束して、繁栄するマツヤ王国の領土に行くであろう。(二四)

彼ら(トリガルタ軍)はヴィラータの都を急襲し、速やかに牛飼たちを攻撃し、莫大な財産を奪うべきである。(二五) 我々も軍隊を二つに分け、吉相と美質をそなえた牛を何十万と奪う。(二六)」

スシャルマン王は、指示されたように、火神の方角(南東)に行き、黒月(こくげつ)の七日目に、牛を略奪した。(二七) 一日後、すべてのクル軍が集結して、黒月の八日目に、牛の群を幾千と略奪した。(二八)

(第二十九章)

トリガルタの王を捕える

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

大王よ、無量の威光を持つ偉大なパーンダヴァたちが変装して、ヴィラータ王のために仕事をして、その最高の都に巧みに住んでいるうちに、約定の期限が終了した。(一―二) その十三年目が終わった時、スシャルマンは力ずくで多くの牛の財産を奪った。(三) そこで耳環をつけた牛飼は大急ぎで都に行き、車から飛び降り、マツヤ国王に会った。(四) 王は耳環と腕環をつけた勇猛な戦士たちに囲まれ、優れた顧問官たち、人中の雄牛であるパーンダヴァたちといっしょにいた。(五) 牛飼は集会場にいる、国土を栄えさせる大王ヴィラータのもとに行き、平伏して言った。(六)

「トリガルタ軍が戦いにおいて我々と親族をうち破り、圧倒し、十万頭という牛を奪っています。王よ、あなたの牛がいなくならないように、それらを守りなさい。(七)」

それを聞くと王は、戦車兵と象兵と騎兵に富み、歩兵と旗に満ちたマツヤ国の軍隊を準備させた。(八) 王や王子たちは、それぞれの身分にふさわしい、きらびやかな輝く鎧を着けた。(九) ヴィラータの愛しい弟のシャターニーカは、金剛と鉄を含む、燃えるような黄金の鎧を着た。(一〇) シャターニーカの弟マディラーシュヴァは、美しく鍍金(めっき)した丈夫な鉄の鎧を着た。(一一) マツヤ国王は、百の太陽、百の渦巻、百の滴、百の眼の模様で飾られ、ほとんど

断ち切られない鎧を着た。（一二）（一三―一八略）

さて、マツヤ国王は弟のシャターニーカに言った。

「カンカ、牛飼のバッラヴァ、強力なダーマグランティも戦うべきであると私は判断する。それは確かだ。（一九）彼らにも旗を立てた戦車を与えよ。着心地が柔らかでしかも丈夫な、きらびやかな鎧を与えよ。そして武器を与えよ。（二〇）彼らは象王の鼻のような腕をした、勇士の身体を持つ男たちだ。彼らが戦わないことは決してないと私は考える。（二一）」

王の言葉を聞くと、シャターニーカは大急ぎで、ユディシティラとビーマと、サハデーヴァとナクラに戦車を与えるよう命じた。（二二）御者たちは王に対する忠誠心から、喜んで、王に命じられた戦車を速やかに彼らに引き渡した。（二三）汚れなき行為の彼らに、ヴィラータが与えた、着心地が柔らかでしかも丈夫な、きらびやかな鎧を、勇士たちは身にまとって武装した。（二四）堅く約束を守るクルの雄牛である、勇猛な四人のパーンダヴァ兄弟は、そろってヴィラータに従って行った。（二五）（二六―三〇略）　（第三十章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

マツヤ軍の勇猛な戦士は、陣形を整えて都から出陣し、太陽が沈むころ、トリガルタ軍と遭遇した。（一）トリガルタとマツヤの大軍は、怒り、戦いに酔い痴れ、牛を渇望して、お互いに雄叫びをあげた。（二）巧みに象を御する指揮官たちは、恐ろしい発情した象に乗り、鉄

棒や鉤棒でかりたてた。（三）太陽が沈む時、彼らの合戦は恐ろしく、けたたましく、身の毛がよだつもので、神と阿修羅（アスラ）の戦いのようであった。（四）（五―二一略）それから、〔マツヤ〕国王は十本の矢でスシャルマン（トリガルタ国王）を射貫いた。そしてその四頭の馬を、五本ずつの矢で貫いた。（二二）しかし、最高に武器に通じた、戦いに酔い痴れるスシャルマンも、五十本の鋭い矢でマツヤ国王を貫いた。（二三）夕方、ほこりに包まれて、マツヤ国王とスシャルマンの軍隊はお互いに見分けがつかなくなった。（二四）　（第三十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

世界が闇とほこりに包まれた時、戦士たちは陣形を整えて、しばらくの間動かずにいた。（一）それから、闇を払って月が登った。戦場において王族（クシャトリヤ）たちを喜ばせつつ、夜を清らかにしつつ。（二）それから、照明を得て、再び恐ろしい戦闘が始まった。そして彼らはお互いに見分けられなくなった。（三）それから、トリガルタの王スシャルマンは、弟とともに、戦車の群によって、いたるところからマツヤ国王を攻撃した。（四）それから、王族の雄牛である兄と弟は、戦車から飛び下り、棍棒を手に持ち、怒り狂って馬たちに向かって駆け寄った。（五）そしてまた、彼らの軍隊は猛り、棍棒、剣、刀、斧、鋭い先端とよく磨かれた刃を持つ槍で、お互いに攻撃し合った。（六）トリガルタの王スシャルマンは、その軍によりマツヤのすべての軍隊を粉砕し、強力なヴィラータに襲いかかった。（七）

彼ら兄弟はそれぞれ二頭の馬と両端の馬を御す二人の御者を殺し、戦車を失ったマツヤ国王を生け捕りにした。（八）スシャルマンは泣き叫ぶ若い女を手籠めにするように彼を痛めつけ、自分の戦車に乗せ、駿馬により立ち去った。（九）

非常に強力なヴィラータが、戦車を失って捕えられた時、トリガルタ軍にひどく苦しめられていたマツヤ軍は、恐怖にかられて逃げ去った。（一〇）彼らが怖気づいた時、ユディシティラは、敵を制する勇士ビーマセーナに告げた。（一一）

「トリガルタのスシャルマンがマツヤ国王を捕えた。勇士よ、彼が敵の支配下に帰さないように、彼を救出せよ。（一二）我々はみな快適に彼のもとに滞在し、すべての望みをかなえられて、よくもてなされた。ビーマセーナよ、彼のもとに滞在したことに対する恩返しをせよ。（一三）」

ビーマセーナは言った。

「王よ、あなたの命令により私は彼を救うであろう。敵どもと戦う私のめざましい働きを見よ。（一四）あなたは自分の腕力を頼りに、弟たちとともに一隅に立っていなさい。王よ、今、私の勇猛さを見なさい。（一五）立派な幹を持つ棍棒のような形の大木が立っています。私はこれを引き抜いて、敵どもを追い払ってやる。（一六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

発情した象のように大樹を見ている勇猛な弟に、ダルマ王ユディシティラは告げた。（一七）

「ビーマよ、無謀なことをしてはいかん。その木はそのままにしておけ。お前が木で超人的な行為をすれば、人々が『あれはビーマだ』と悟るといけないから。（一八）何か別の、普通の人間が使う武器を持て。弓か槍か刀か斧を。（一九）ビーマよ、他の人々に気づかれないような通常の武器を持って、速やかにマツヤ国王を救出せよ。（二〇）弟よ、お前がマツヤ国王を守ろうとして布陣している時、強力な双子がお前の車輪を守る護衛となるであろう。（二一）」

それから、彼ら一同はそろって神的な武器を取り出して、トリガルタ軍に対し敵愾心を燃やし、馬たちをかりたてた。（二二）パーンダヴァたちの戦車が引き返したのを見て、ヴィラータの大軍もこの上なく猛り立ち、こよなく驚異的に戦った。（二三）そこでユディシティラは千人を殺した。ビーマは七百人の戦士たちにあの世を見せた。ナクラも矢で七百人を殺した。（二四）栄光あるサハデーヴァは三百人の勇士を殺した。ユディシティラに命じられた人中の雄牛（ビーマ）は、トリガルタの大軍をうち破り、殺戮した。（二五）

それから、勇士ユディシティラ王は、速やかにスシャルマンを襲撃し、多くの矢を浴びせた。（二六）スシャルマンの方も怒り狂い、急いでユディシティラを九本の矢で射て、彼の四頭の馬を四本の矢で射た。（二七）それから王よ、迅速なビーマはスシャルマンに襲いかかり、彼の馬を殺した。（二八）そして猛り立つビーマは、彼の背後を守る二人の兵を最高の矢で殺し、そして彼の御者を車の座席から駆逐した。（二九）トリガルタ国王の車輪を守る護衛は、

ショーナーシュヴァという有名な勇士であったが、トリガルタ国王が戦車を失ったのを見ると、恐怖のあまり彼を見捨てた。(三〇) それから強力なヴィラータは、スシャルマンの戦車から飛び下り、棍棒をつかむと、スシャルマンを攻撃した。彼は老いてはいたが、棍棒を手にして若者のように行動した。(三一) 強力なビーマは戦車から飛び下り（異本による）、獅子が仔鹿を捕えるようにトリガルタ国王を捕えた。(三二)

トリガルタの勇士が戦車を失って捕えられた時、トリガルタのすべての軍は恐怖にかられ散り散りになった。(三三) 強力なパーンドゥの息子たちは、スシャルマンを破ってから、すべての牛を引き返させ、すべての財物を取りもどした。(三四) 彼らは腕力にめぐまれていたが、謙虚に自制し、誓いを守り、戦いの最中、その夜を快適に過ごした。(三五) それからヴィラータは、超人的な武勲をたてたパーンダヴァの勇士たちに対し、財物と名誉により敬意を表した。(三六)

ヴィラータは言った。

「私の財宝は同様にあなた方のものだ。みな望みのまま、好きなように、それらを利用してくれ。(三七) 飾りつけられた少女たち、種々の財宝……。何でもあなた方の心にかなうものはあなた方のものだ。敵を滅ぼす者たちよ。(三八) あなた方の勇武のおかげで、今日私は救われ、無事でいる。それ故、あなた方はみなマツヤ国の王であるのだ。(三九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ユディシティラをはじめとするすべてのパーンダヴァたちは、そのように告げるマツヤ国王に対し、一人一人合掌して言った。(四〇)

「王よ、我々はあなたのお言葉をすべて歓迎します。しかし、あなたが敵から解放されたということによってのみ我々は喜んでおります。(四一)」

そこでマツヤ国の最高の王である強力なヴィラータは心から喜び、再びユディシティラに告げた。

「さあ、あなたを王位につけよう。あなたは我らのマツヤ国王になって下さい。(四二) 敵を滅ぼす人よ、あなたの心にかなうものをあなたにさし上げましょう。あなたは我々の所有するすべてに値しますから。(四三) 宝物、牛、黄金、宝玉、真珠……。ヴァイヤーグラパディヤ（カンカ）よ、最高のバラモンよ、我々はすべてを捧げてあなたに敬礼します。(四四) あなたのおかげで、今、王国と自身を見ることができるのですから。我々を苦しめた敵は、我らの支配下に帰しました。(四五)」

するとユディシティラは再びマツヤ国王に言った。

「マツヤ国王よ、私はあなたが告げられた快い言葉を歓迎する。(四六) 常に穏和であるように努め、常に幸福であれ。王よ、急いで使者たちをあなたの都に派遣しなさい。親しい人々によい知らせを告げ、あなたの勝利を宣言しなさい。(四七)」

そこで、その言に従い、マツヤ国王は使者たちを派遣した。

「都へ行き、戦いに私が勝利したことを告げよ。(四八) 私の王子たちは、身を飾り、都から

ここに来るべきである。すべての楽器（楽隊）と、よく飾りつけた遊女たちも出て来るべきである。（四九）」

使者たちはその夜のうちに都へ行き、日が昇るころ、都でヴィラータの勝利を宣言した。（五〇）

（第三十二章）

女形のブリハンナダー、御者となる

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

マツヤ軍が自国の牛を取りもどそうとしてトリガルタに進軍した時、ドゥルヨーダナと重臣たちはヴィラータの領土に侵入した。（一）ビーシュマ、ドローナ、カルナ、最高の武芸者クリパ、ドローナの息子、サウバラ、ドゥフシャーサナ王、（二）ヴィヴィンシャティ、ヴィカルナ、強力なチトラセーナ、ドゥルムカ、ドゥフサハ、及びその他の勇士たちは、ヴィラータ王のマツヤ国に侵入し、速やかに牛飼たちを追い散らし、力ずくで牛の財産を奪った。（三―四）クル軍は戦車の大群で周囲を取り巻いて、六万頭の牛をかりたてた。（五）恐ろしい戦いにおいて、牧場で牛飼たちはその大軍に殺される間に、大きな叫び声をあげた。（六）恐怖にかられた牛長官は急いで戦車に乗り、嘆き悲しみつつ都に行った。（七）

彼は都に入ると王宮に行き、急いで戦車から降りると、報告するためにそこに入った。（八）彼はブーミンジャヤ（ウッタラ）という名のマツヤ国王の誇り高い王子に会い、自国の畜牛が

奪われたことをすべて報告した。（九）

「クル軍が六万頭の牛を奪いました。国土を繁栄させる牛の財産を取りもどすために立ち上がって下さい。（一〇）王子様、幸福を望まれるなら、速やかに自ら出陣して下さい。マツヤ国王はあなた様を留守居番にされましたので。（一一）（一二―一八略）あなた様は戦闘で、インドラが阿修羅たちを征服したようにクル軍をすべてうち破り、大きな名声を得て、再び都に入城しなさい。（一九）あなた様はマツヤ国王の息子で、王国の最高の寄る辺ですから。すべての領地に住む者たちが、今日、寄る辺を持ちますように。（二〇）」

彼は後宮で、女たちの中で、王子にこのような激励の言葉を述べたので、王子はその言を讃えて次のように言った。（二一）

（第三十三章）

ウッタラ王子は言った。

「屈強な弓取りである私は、今すぐに牛の跡を追うであろう。もし馬に巧みな御者が誰か私についてくれれば。（一）だが私の御者になるような者が見つからない。出陣する私の御者になれるような適切な者をすぐに探せ。（二）二十八日間か一カ月ぐらい続く、大きな戦闘があったが、そこで私の御者は殺された。（三）そこで私は、もし馬術を知る他の御者を得れば、大きな軍旗を押し立てて、今すぐに急いで進軍するであろう。（四）そして象や馬や戦車に富む敵軍に突入して、私の武器と威光の前に力を失ったクル軍をうち破り、畜牛を取りもどす。

(五)私はドゥルヨーダナ、ビーシュマ、カルナ、クリパ、ドローナとその息子など、集結した勇士たちを、戦いにおいて、インドラが悪魔たちを恐れさせるようにふるえ上がらせ、即座に畜牛を取りもどすであろう。(六―七)クル軍は手薄をつき、牛の財産を奪った。そこにいなかったので、私は何をすることができよう。(八)集結したクル軍は、今こそ私の勇武を見るであろう。『プリターの息子アルジュナ自身が我々を攻めているのであろうか』と。(九)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王子が女たちの前で何度もそのように言って、アルジュナに言及したことに、パーンチャーリー(ドラウパディー)は我慢できなかった。(一〇)そこで哀れななりをした彼女は、女たちの中から彼のもとに進み出て、恥じらうかのようなそぶりをして、静かに次のように告げた。(一一)

「あそこにいる、とても見目よい、巨象のような、ブリハンナダーとして有名な若者は、アルジュナの御者でした。(一二)彼はその偉大な方の弟子で、弓術にかけてひけを取りませんでした。勇士よ、私は以前パーンダヴァたちに仕えていた時に彼を見たことがあります。(一三)火神がカーンダヴァの大森林を燃やした時、彼はアルジュナの最高の馬たちを操縦していました。(一四)カーンダヴァの森において、アルジュナは彼を御者としてすべての生き物をみな殺しにしました。彼のような御者はおりません。(一五)勇士よ、彼はあなたの妹御である美しい尻の王女様の言葉に必ずや従うでしょう。(一六)もし彼が御者になれば、疑い

もなく、すべてのクル軍をうち破り、きっと牛を取りもどして帰れるでしょう。(一七)」

サイランドリーにこのように言われて、王子は妹に告げた。

「欠点のない身体をした女よ、行って、ブリハンナダーを連れて来なさい。(一八)」

王女は兄に遣わされて、急いで舞踊場に行った。あの強力なパーンダヴァは、変装してそこに身を隠していたのであった。(一九)

(第三十四章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ブリハンナダー(アルジュナ)は、友である切れ長の眼の王女を見て、笑いながら、どういう理由で来たのかとたずねた。(一)王女はその人中の雄牛に近づいて、親愛の情を示し、女友達の中で次のように言った。(二)

「ブリハンナダーさん。我々の国の牛がクル軍によって奪われました。私の兄は弓をとって彼らを討つために出陣します。(三)ところが彼の御者は最近の戦いにおいて殺され、兄の戦車を操縦できる彼に等しい御者がおりません。(四)ブリハンナダーさん。兄が御者を探して苦労していた時、サイランドリーが、あなたが馬術に巧みなことを告げたのです。(五)ブリハンナダーさん、どうか私の兄のために御者をして下さい。クル軍が我々の牛を更に遠くまで連れて行かないうちに。(六)もし今日、親愛からお願いしている私の言う通りにしてくれないなら、私は死んでしまいます。(七)」

美しい尻の友にこのように言われて、無量の力を持つ勇士は王子のもとに行った。(八) 彼がさかりのついた象のように急いで行った時、切れ長の眼の王女は、仔象が雌象に従うように、彼について行った。(九) 遠くから彼を見て、王子は彼に告げた。

「アルジュナはあなたを御者として、カーンダヴァの森で火神を満足させた。(一〇) そしてアルジュナは、地上すべてを征服した。サイランドリーがあなたのことを話したのだ。彼女はパーンダヴァたちを知っているから。(一一) プリハンナダーよ、私が牛の財産を取りもどそうとしてクル軍と戦っている間、私の馬たちを操縦せよ。(一二) かつてあなたはアルジュナの親しい御者であったという。パーンダヴァの雄牛は、あなたとともに地上を征服したのだ。(一三)」

このように言われて、プリハンナダーは王子に答えた。

「激戦において御者を勤める能力が、どうして私にありましょうか。(一四) 歌や踊りや楽器、そのような類のことならいたしましょう。どうかお許し下さい。御者の役などどうして私にできるでしょう。(一五)」

ウッタラ王子は言った。

「プリハンナダーよ、歌手や舞踊家なら、またやればよい。すぐに私の戦車に乗り、最高の馬を操縦せよ。(一六)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

アルジュナはすべてを知りながら、ウッタラー王女の前で、非常におどけたしぐさをした。(一七) 彼は鎧を上方に投げ上げてから身にまとった。切れ長の眼の王女はそれを見て笑った。(一八) ウッタラ王子は、彼がとまどっているのを見て、自ら高価な鎧をプリハンナダーに着させた。(一九) 彼自身は、太陽のように輝く最上の鎧を着て、獅子の旗を掲げ、戦車を操縦するよう命じた。(二〇) その勇士は、高価な弓と多くの輝かしい矢を持ち、プリハンナダーを御者として出陣した。(二一)

その時、ウッタラー王女と女友達は彼女（彼）に告げた。

「プリハンナダーよ、戦場にいるビーシュマやドローナをはじめとするクル軍をうち破り、私たちのお人形さんのために、繊細で多彩な種々の美しい着物を持って来て下さい。(二二―二三)」

そろってそのように言う少女たちに対し、アルジュナは笑って、雷鳴のような声で答えた。(二四)

「ウッタラ王子が戦いで勇士たちを破ったら、神々しい美しい着物を持って来ます。(二五)」

勇士アルジュナはこのように告げてから、種々の旗や幟を立て、クル軍めざして馬をかりたてた。(二六)

（第三十五章）

ウッタラ王子を励ますアルジュナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ヴィラータの息子ブーミンジャヤ（ウッタラ王子）は王都から出て御者に言った。

「クル軍のいるところへ行け。（一）征服しようと集結したクル軍を破って、速やかに牛を取りもどし、再び自分の都に帰るぞ。（二）」

そこでアルジュナは良馬をかりたてた。黄金の輪で飾られた馬たちは人中の獅子にかりたてられて、風のように速く、空を駆けるかのように二人を運んだ。（三）

あまり遠方に行かないうちに、敵を滅ぼすマツヤ国の王子とアルジュナは、強力なクルの軍隊を見出した（以下、原文疑問）。（四）彼らの大軍は海のような音をたて、多くの樹木の生えた森が空中を這っているかのように見えた。（五）行進するその軍隊により生じた大地の塵は、諸生物の視力を奪い、天にもとどくかのように見えた。（六）

その大軍は象兵と騎兵と戦車に富み、カルナ、ドゥルヨーダナ、クリパ、ビーシュマ、ドローナとその息子など、英邁な勇士たちに守られていた。ヴィラータの息子（ウッタラ王子）はそれを見ると総毛立ち、恐怖にかられてアルジュナに言った。（七―八）

「私はクル軍と戦うことはできない。私の鳥肌を見よ。クルの軍は数限りなく、多くの勇士を擁し、恐ろしく、神々によってさえ制しがたい。それに対抗することはできない。（九）バ

ラタ族の軍は恐るべき弓、戦車、象兵、騎兵、歩兵、軍隊に満ち、そこに入り込める望みはない。戦場にいる敵を見るだけでも私の心はふるえる。（一〇）ドローナ、ビーシュマ、クリパ、カルナ、ヴィヴィンシャティ、アシュヴァッターマン、ヴィカルナ、ソーマダッタ、バーフリーカ、（一一）最高の戦士、勇猛な王ドゥルヨーダナ。すべて戦いに通じた勇士たちである。（一二）あの陣容を整えたクルの戦士たちを見るだけで、私の身の毛がよだち、意気沮喪する。（一三）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

大胆で抜け目のないアルジュナが見ている前で、その臆病な弱虫は愚かしさから泣き出した。（一四）

「私の父は、空の都に私を置いて、全軍を率いてトリガルタ軍に対して進軍した。私にはここに軍隊はない。（一五）一人で若くて苦労知らずの私が、どうして多数で兵法に通じた敵に対抗することができようか。ブリハンナダーよ、引き返しなさい。（一六）」

アルジュナは言った。

「あなたは恐怖のあまり惨めな姿をして、敵の喜びを増大させる。しかも、まだ戦場において敵が何かをしたわけでもない。（一七）あなた自身が、『私をクル軍の方に運べ』と告げたのだ。そこで私は、多くの旗のあるところにあなたを連れて行こう。（一八）勇士よ、獲物をねらう禿鷲のように危害を加えようとしているクル軍の中にあなたを連れて行こう（原文疑問）。

（一九）あなたは女たちや男たちの中で、勇敢に戦うことを約束して、自慢して出陣したのに、どうして戦わないのか。（二〇）もし牛たちを取りもどさないで家に帰れば、勇士よ、男や女たちはこぞってあなたをあざ笑うだろう。（二一）私もサイランドリーに御者の業を褒められた。牛を取りもどさないで都に帰ることはできない。（二二）サイランドリーの称讃とあなたの命令により、私はすべてのクル軍と戦わないわけには行かない。しっかりしなさい。（二三）」

ウッタラは言った。

「クル軍はマツヤ国の莫大な財産を奪うがよい。女や男たちが私を笑おうとままよ。ブリハンナダー。（二四）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

恐怖にかられた、耳環をつけた愚か者は、このように告げると、名誉と弓矢を捨て、戦車から飛び下りて逃げ出した。（二五）

ブリハンナダーは言った。

「王族（クシャトリヤ）が逃げるなどということは前代未聞だ。恐れて逃げるより、戦って死んだほうがよい。（二六）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

アルジュナはそのように言うと、最高の戦車から飛び下りて、逃げる王子の後を追って駆け出した。長い弁髪と美しい赤い着物を揺りながら。（二七）それがアルジュナであると知らないで、弁髪を揺って駆けている、そのような姿をした彼を見て、何人かの兵士たちは笑った。（二八）しかし、迅速に駆ける彼を見て、クルの人々は言った。

「火が灰の下に隠れるように、〔女の〕衣裳に身を隠している者は誰か。（二九）男のようでもあるが、女のようでもある。アルジュナに似ているようだが、女形（おやま）の姿をしている。（三〇）あの頭と首、鉄棒のような両腕、あのような歩き方。あれはアルジュナ以外ではない。（三一）神々の中のインドラのように、人間の中のアルジュナも同様である。この世で、アルジュナ以外の誰が、一人で我々に向かって来るだろうか。（三二）ヴィラータの一人の息子が、空（から）の都に配置されている。彼は勇猛さからではなく、幼稚さから出陣した。（三三）きっとウッタラは、変装し身を隠して行動しているアルジュナを御者にして、都の外に出陣したのだ。（三四）私が思うに、ウッタラは軍旗を見て恐れて逃げ出したのだ。きっとアルジュナは、逃げる彼をつかまえようとしているのだ。（三五）」

すべてのクルの人々は、一人一人このように考えた。しかし彼らは、変装したアルジュナを見て、どちらとも決めかねていた。（三六）

一方アルジュナは、逃げるウッタラを追いかけ、百歩ほど行ったところで、すばやく彼の髪の毛をつかんだ。（三七）ヴィラータの息子（ウッタラ）は、アルジュナにつかまれ、苦しんで、この上なく哀れな有様で嘆いた。（三八）

「私は百ニシュカの純金をあなたにやる。黄金にはめられた、輝きに満ちた八つの瑠璃をやる。(三九) 黄金の旗をそなえ、良馬をつないだ(原文疑問)戦車をやる。さかりのついた十頭の象をやる。ブリハンナダーよ、私を離してくれ。(四〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ウッタラがこのように言って、気も失わんばかりに嘆いている間、人中の虎は笑って、戦車のところに彼を連れて来た。(四一) そしてアルジュナは、恐怖にかられ正気を失った彼に言った。

「敵を滅ぼす勇士よ、もしあなたが敵と戦うことができないなら、敵と戦っている私の馬たちを操縦しなさい。(四二) 私の腕の力に守られて、勇猛な戦士たちに守られた、難攻の、恐ろしい戦車隊に向けて進軍しなさい。(四三) 敵を苦しめる最高の王子よ、恐れてはなりません。あなたは王族(クシャトリヤ)です。私がクル軍と戦い、畜牛を取りもどします。(四四) 最高の人よ、あなたが御者となり、難攻で近寄りがたい戦車隊に突入しなさい。私がクル軍と戦います。(四五)」

このように言って、無敵のアルジュナは、しばらくの間ヴィラータの息子ウッタラを励まし、それから、その最高の戦士は、その正気を失った、やる気のない、恐怖にかられた男を戦車に乗せた。(四六―四七)

(第三十六章)

アルジュナの十の名前

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

女形のなりをして、戦車に乗っている雄牛のような男が、ウッタラを戦車に乗せ、シャミー樹をめざして進んでいるのを見て、ビーシュマとドローナをはじめとするクルの最高の戦士たちは、すべて、アルジュナのもたらした恐怖により驚愕した。(一―二) 気力を奪う前兆と奇蹟を見て、最上の戦士であるドローナ師は言った。(三)

「変わりやすい、烈しい、荒々しい音をたてる風が吹いている。空は灰の色のような闇におおわれている。(四) 荒々しい色の、不思議な形の雲が見える。種々の武器は鞘から抜け落ちる。(五) 恐ろしいジャッカルどもが、燃える方角で吼えている。馬たちは涙を流す。動くはずのない旗がひるがえっている。(六) このような多くの前兆が認められる。あなた方は心していなさい。戦闘が近づいているようだ。(七)

自分を守れ。軍の陣形を整えよ。殺戮を覚悟せよ。牛の財産を守れ。(八) 一切の戦士のうちの最上者、偉大な射手である勇士アルジュナが、女形の身なりをしてやって来る。疑問の余地はない。(九) 彼はあの勇猛なアルジュナだ。彼は相手がすべてのマルト神群であっても、戦わずして引き返すことはない。(一〇) あの勇士は森で苦難し、インドラに教えられ、復讐心にかられて戦うであろう。その点も疑いない。(一一) クルの人々よ、ここには彼に対抗で

きる者はいない。マハーデーヴァ（シヴァ）も、アルジュナとの戦いにおいて彼に満足させられたという話だ。（二二）」

カルナは言った。

「あなたはいつもアルジュナの美質を並べて、我々の悪口を言う。しかしアルジュナは、私やドゥルヨーダナの十六分の一にも及ばない。（二三）」

ドゥルヨーダナは言った。

「カルナよ、もし彼がアルジュナなら、我々の目的は成就したことになろう。もし見つかれば、彼らはもう一度十二年間遍歴しなければならぬ。（二四）もしあの女形の身なりをした男が誰か他の者なら、鋭い矢で大地に倒してやろう。（二五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

敵を苦しめるドゥルヨーダナがそう言った時、ビーシュマ、ドローナ、クリパ、ドローナの息子たちは、その雄々しさを称讃した。（二六）

（第三十七章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

例のシャミー樹に近づいて、アルジュナはヴィラータの息子（ウッタラ）に言った。彼は華奢（きゃしゃ）で、戦闘にあまり長けていないように見受けられた。（一）

「ウッタラよ、私に指示されたらすぐに弓を取って下さい。あなたの弓は私の力に耐えられそうもないから。（二）重圧に耐え、象を粉砕することはできない。また、敵どもをうち破ろうとする私の腕の動きに耐えることはできない。（三）ブーミンジャヤよ、それ故、この葉の茂ったシャミー樹に登れ。そこにパーンドゥの息子たちの弓が隠されている。（四）ユディシティラとビーマとアルジュナと双子たちの弓だ。それに、勇士たちの軍旗と弓と神的な鎧が……。（五）そしてあのアルジュナの強力な弓ガーンディーヴァがある。それ一本で十万の弓に匹敵し、国土を栄えさせる弓である。（六）それはこの上なく引き絞ることができ、椰子のように大きい。一切の武器のうちで最高であり、敵を制圧することができる。（七）それは黄金で飾られ、神聖で、滑らかで、長く、傷がなく、重圧に耐えることができ、恐ろしく、しかも魅力的である。他の弓もすべて強力で頑丈である。（八）」

ウッタラは言った。

「この樹には死体が結びつけられていると聞いている。王子である私が、どうしてそれに手で触れることができるか。（九）王族の生まれであり、聖句（マントラ）と祭祀を知る、正しく偉大な王子の私が、そのようなことを企てるのは適切ではない。（一〇）ブリハンナダーよ、不浄な死体運搬人のように死体にさわらせて、私をどうして落伍者にしようとするのか（原文を少し読み変えた）。（一一）」

ブリハンナダーは言った。

「王中の王よ、あなたは落伍者にならないし、清浄であろう。それらは弓だ。恐れることは

ない。そこに死体はない。(二二) マツヤ国王の後継者、良家に生まれた賢明なあなたに、どうして非難される仕事をさせるでしょうか。王子よ。(二三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

耳環をつけたヴィラータの息子は、アルジュナにこのように言われて、余儀なく、戦車から飛び下りて、シャミー樹に登った。(二四) 敵を滅ぼすアルジュナは、戦車にとどまり、彼に命じた。

「それらのおおいをすぐに取り去りなさい。(二五)」

そこでウッタラはそれらの結びをすっかり解くと、ガーンディーヴァとその他の四つの弓を見た。(二六) それらの太陽のように輝く弓が現われた時、昇る惑星のような神々しい輝きが放出した。(二七) 長々と伸びた蛇のようなそれらの弓の形を見て、ウッタラは恐怖にかられ、しばらくの間、総毛立っていた。(二八)(二九―五八略)　(第三十八章)

ウッタラは言った。

「偉大な手練の勇士アルジュナの、黄金で飾られたこれらの武器は、燦然と輝いている。(一) しかし、アルジュナ、ユディシティラ、ナクラ、サハデーヴァ、ビーマセーナはどこにいるのか。(二) 一切の敵を滅ぼすあのすべての偉大な人々は、賭博によって王国を失い、そ

の消息はまったく聞かれることはない。(三) そして、宝石のような女性と知られるあのドラウパディーはどこにいるのか。クリシュナー（ドラウパディー）は、賭博で敗れた彼らに従って森へ行ったのだが。(四)」

アルジュナは言った。

「私はアルジュナである。宮廷に仕える賭博師がユディシティラである。あなたの父の料理人のバッラヴァがビーマセーナだ。(五) 馬丁がナクラで、牛飼がサハデーヴァである。サイランドリーがドラウパディーなのだ。そのためにキーチャカは殺された。(六)」

ウッタラは言った。

「私は前にアルジュナの十の名前を聞いた。もしそれらを言うことができれば、私はあなたのことをすべて信用する。(七)」

アルジュナは言った。

「よろしい。私の十の名前をあなたに告げよう。アルジュナ、パルグナ、ジシュヌ、キリーティン、白馬の戦士、ビーバツ、ヴィジャヤ、クリシュナ、サヴィヤサーチン、ダナンジャヤである。(八)」

ウッタラは言った。

「あなたはどうしてヴィジャヤと呼ばれるのか。どうして白馬の戦士か。どうしてあなたは、キリーティンとかサヴィヤサーチンであるのか。(九) また、どうしてアルジュナ、パルグナ、ジシュヌ、クリシュナ、ビーバツ、ダナンジャヤなのか。私はあの勇士の名前の由来をすべ

て聞いたことがある。(一〇)」
アルジュナは言った。
「すべての国土を征服して、すべての財産を奪って、財産の中に立っているから、それで私はダナンジャヤ(財産を勝ち得たもの)と呼ばれる。(一一)戦場において、私は進軍し、戦いに酔い痴れる敵を征服(ジャヤ)しないでは引き返す(ヴィニヴリット)ことはないから、ヴィジャヤ(征服)と呼ばれる。(一二)黄金で飾られた白馬が、戦場で戦う私の戦車につながれているから、そこで私は白馬の戦士と呼ばれる。(一三)ウッタラ・パルグニーとプールヴァ・パルグニーという星宿が上昇星にある日に、ヒマーラヤの尾根で生まれたから、そこで私はパルグナと呼ばれる。(一四)かつて私が雄牛のような悪魔たちと戦っていた時、インドラが私の頭に、太陽のように輝く王冠(キリータ)をかぶせたから、そこで私はキリーティンと呼ばれる。(一五)私は戦っていて、決して忌わしい(ビーバツァ)行為を行なわないので、そこで神や人間たちの間で、私はビーバツと呼ばれる。(一六)ガーンディーヴァ弓を引く時、私の手は両方とも右手のようであるから、そこで神や人間たちの間で、私はサヴィヤサーチン(左きき)と呼ばれる。(一七)四辺を有する大地において、私の色に等しい色は得られがたく、また私は純粋(シュクラ、「白」)の行為をするから、そこでアルジュナ(白)と呼ばれる。(一八)私は到達されがたく、不可侵であり、敵を破る者であり、パーカ(悪魔の名)の殺戮者(インドラ)の息子である。そこで神や人間たちの間で、私はジシュヌ(勝利者)と呼ばれる。(一九)私の父は、黒く輝く子供が好きであったから、クリシュナ(黒)という私の第十の名前をつけた。(二〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
そこでヴィラータの息子(ウッタラ)はアルジュナに近づき、敬礼した。
「私はブーミンジャヤ、そしてまたウッタラという名です。(二一)アルジュナよ、幸いなことにあなたにお会いしました。ようこそ、ダナンジャヤ。赤い眼をし、大きな腕を持ち、象王の鼻のような〔腕の〕方よ。私が知らないであなたに言ったことを許して下さい。(二二)あなたは前に、行ないがたい驚異的な行為をしましたから、私の恐怖はなくなりました。私はあなたに対し、最高の喜びを感じます。(二三)」

(第三十九章)

ウッタラは言った。
「勇士よ、御者である私とともに、広い戦車にお乗り下さい。どの軍を攻撃しますか。あなたの命令通りに行きます。(一)」
アルジュナは言った。
「人中の虎よ、私は嬉しい。あなたには恐怖はない。戦いに長けた人よ、私は戦闘においてすべての敵を駆逐するであろう。(二)安心していなさい。大知者よ、私がこの戦いにおいて、非常に恐ろしい働きをし、敵と戦うのを見なさい。(三)これらのすべての箙(えびら)を急いで私の戦車に結びつけなさい。そしてその黄金で飾られた太刀を持って来なさい。私がクル軍と戦い、

あなたの畜牛を取りもどすであろう。(四)(五―六前半略) あなたの戦車の座席は私に守られて城砦都市のようになるであろう。(六) 戦場において、ガーンディーヴァ弓を持つ私に乗られて、この戦車は敵軍にうち破られることはないであろう。ヴィラータの息子よ、あなたの恐怖を捨てよ。(七)」

ウッタラは言った。

「私は彼らを恐れません。あなたが戦いにおいて揺るぎないことを知っています。戦闘にかけては、クリシュナやインドラ自身にも匹敵することを。(八) しかし、いくら考えても不思議です。愚かな私には、どうしてもわかりません。(九) このように勇士の姿形をそなえ、好相にめぐまれたあなたが、いかなる業(ごう)の異熟により女形になったのですか。(一〇) あなたは女形の身なりで暮らしているシヴァ、ガンダルヴァ王のような神、あるいはインドラであると私は考えます。(一一)」

アルジュナは言った。

「兄の命令により、一年の間、このような禁欲の誓いを守っている。私はあなたにこの真実を告げる。(一二) 勇士よ、私は女形ではない。他者に従い、法(ダルマ)を守っていた。今や私は誓戒を完了し解放されたと知りなさい。王子よ。(一三)」

ウッタラは言った。

「私の推測が誤っていなかったことは、今とても嬉しいことだ。このような最高の人物が女形の姿をしているということはおかしいから。(一四) 私はよい戦友を得た。神々と戦うことすらできるであろう。私の恐怖は消え失せた。何をしようか。言って下さい。(一五) 私は敵の戦車を滅ぼすあなたの馬を操縦しましょう。私は専門家から操縦法を教わりましたから。人中の雄牛よ。(一六) クリシュナの御者ダールカや、インドラの御者マータリのように、私は操縦法に通達しているのです。人中の雄牛よ。(一七)」(一八―二七略) (第四十章)

アルジュナの進軍

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ウッタラを御者にし、シャミー樹を右まわりにまわって〔敬意を表して〕から、アルジュナはすべての武器を持って進軍した。(一) そのウッタラを御者とする勇士は、戦車から獅子の旗を取り去り、シャミー樹の根もとに置いて出発した。(二) 戦車には、ヴィシュヴァカルマン(一切造者)により造られた、神的な幻影のような、獅子の尾を持つ猿の標がついた黄金の旗を掲げた。(三) そして火神の恩寵を心で考えた。火神は彼の考えを知り、諸々の生物に、旗の中に入るようにうながした。(四) 勇士アルジュナは、白馬にひかれ、刀を帯び、鎧を着け、弓をつかみ、最上の猿を旗標とし、旗を掲げ多彩な車体をした、階段のある戦車に乗り、それから、北方に出発した。(五―六) 敵を滅ぼす強力な勇士は、鳴り響く大法螺を力強く吹いた。それは敵を総毛立たせた。(七) それから、駿馬たちは地面に膝をついてしまった。ウッタラも恐れ、戦車の座席に座り込んだ。(八) そこでアルジュナは手綱で制御して馬を起き上がら

せ、ウッタラを抱きしめて励ました。（九）

「最上の王子よ、恐れてはいけない。敵を苦しめる者よ、あなたは王族（クシャトリヤ）である。人中の虎よ、どうして敵の真中で沈み込むのか。（一〇）法螺の音や、大きな太鼓の音や、布陣した軍隊の中にいる象たちの咆哮は聞いたことがあろう。（一一）それなのに今、どうしてこの法螺の音を恐れるのか。普通の人のように、恐怖にかられ、落胆した様子をして。（一二）」

ウッタラは言った。

「確かに私は法螺の音や、大きな太鼓の音や、布陣した軍隊の中にいる象たちの咆哮を聞いたことがあります。（一三）しかし、いまだかつて、このような法螺の音は聞いたことがありません。そして、このような旗の姿も、かつて見たことがありません。そしてまた、このような弓の音も、これまでに他で聞いたことがありません。（一四）この法螺の音、弓の音、戦車の響きにより、私は全く肝をつぶしてしまいました。（一五）私は方向感覚をすべて失い、私の心は苦しみます。すべての方角は旗でおおわれて明らかに見えず、またガーンディーヴァ弓の音により私の耳は聞こえなくなりました。（一六）」

アルジュナは言った。

「戦車の一隅に立ち、両足でふんばれ。そしてしっかりと手綱を操れ。私は再び法螺を吹く。（一七）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その法螺の音と、戦車の車輪の音と、ガーンディーヴァ弓の音によって大地は震動した。（一八）

ドローナは言った。

「戦車の響き、法螺の音、大地のふるえからして、これはアルジュナ以外ではない。（一九）我々の武器は輝きを失い、馬たちは元気を無くす。燃え上がる火は輝きを失う。（二〇）すべての獣は恐ろしい叫び声をあげて、我々の方から太陽に向いて走る。そして鴉が旗に止まる。これはよい前兆ではない。鳥たちは我々の左を飛ぶ。これは大きな危険を告げる。（二一）あのジャッカルは吠えながら軍隊の真中を走る。そしてそれは害されずに通り抜ける。これは大なる危険を告げる。あなたの身の毛がよだつのが認められる。（二二）あなたの軍隊は圧倒され、誰も戦おうとしない。すべての兵士たちはほとんど顔色（がんしょく）を失い、途方に暮れている。我々は牛たちを追い払って、戦いのために布陣しよう。（二三）」（第四十一章）

ドゥルヨーダナたちの協議

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その時、ドゥルヨーダナ王は戦場において、ビーシュマと、戦士の虎ドローナと、非常に偉大な戦士クリパに告げた。（一）

「私はカルナとともに師匠に次のことを何度も言った。私はまた言おう。それを何度告げて

も足りることはないから。(二)
賭けに敗れて、彼らは森で十二年間、そしてどこかの国で人知れず一年間過ごさなければならなかった。これが我々の約定であるから。(三) 彼らにとって、十三年目の、人に知られずに生活するという期間はまだ終了していない。ところが、我々はアルジュナに遭遇した。(四) もし亡命の期間が終わらないうちにアルジュナがやって来たのなら、パーンダヴァたちは再び十二年間森で生活しなければならない。(五) 貪欲にかられて彼らが失念したのか、あるいは我々に迷妄が入り込んだのか。その期間がまだ過ぎていないか過ぎたか、ビーシュマが知るべきである。(六) しかし、ものごとが二つの可能性がある時は、常に疑問が存する。というのは、ものごとをあるように考えていても、それは別様になる。(七) (八―一五略)
ところで、最高の戦士ビーシュマ、ドローナ、クリパ、ヴィカルナ、ドローナの息子たちは、どうして戦車の中でじっとしているのか。(一六) すべての勇士たちはこの時に臨んで途方に暮れている。戦いより優れたものは他にない。覚悟すべきである。(一七) (一八―一九の前半略)
師匠(ドローナ)を無視して政略を行なうべきである。(一九) 彼はパーンダヴァたちの考えを知っているので、我々をおどすのである。彼はアルジュナに特別の愛情を抱いていると私は考える。(二〇) アルジュナが来るのを見ると、彼はアルジュナを讃える。(二一) (二一の後半から二五まで、略)
実に師匠たちは哀れみ深く賢明で、災いを予見する。しかし、大きな危険が実際に訪れた時は、決して彼らに相談すべきではない。(二六) 賢者たちは、きらびやかな宮殿で、集会場で、邸宅で、多彩なスピーチをする時に輝かしいものだ。(二七) 賢者たちは、人々の集会において、多くの驚異的なことを行ない、祭祀という武器を向ける時に(異本にもとづくも、原文不明)輝かしいものだ。(二八) 賢者たちは、他人の弱点を知ることにおいて、人間のふるまい〔の批判〕において、食事や装飾の欠点〔の指摘〕において輝かしいものだ。(二九)
敵の美質を説く賢者たちは無視して、敵を殺すような政略を行なうべきである。(三〇) 牛たちを出発させるべきだ。すぐに軍隊の陣形を整えよ。我々が敵と戦う場所に護衛隊を配備すべきである。(三一)」

(第四十二章)

カルナは言った。
「長老たちはみな恐れ戦き、みな戦う気がなくて、優柔不断であると私は思う。(一) もしやって来るのがマツヤ国王であろうと、アルジュナであろうと、私が撃退するであろう。海岸が海を退けるように。(二) 私の弓から放たれた真っ直ぐの矢は、蛇行する蛇のように飛行し、必ず的を射抜く。(三) 手練の私が放った、金の羽根を持つ、非常に先の鋭い矢が、蝗が樹木をおおうように、アルジュナをおおうであろう。(四) 羽根のついた矢を強く押しつけられた弓弦に打たれて、両の弓籠手がたてる、打たれた太鼓のような音を聞くべきである。(五) 十三年の間、一心に戦いを望んで来たアルジュナは、私を攻撃するであろう。(六) そしてアルジュナは、徳高いバラモンがふさわしい受者であるように、私が放つ幾千もの矢の群を受けるであろう。(七) あの偉大な射手は三界において有名であるが、クルの長よ、私も決してア

ルジュナに劣るものではない。(八) あちこちで私が放つ禿鷲の羽根を持つ黄金の矢で、今日、空は蛍におおわれたようになるであろう。(九) 私は今日、戦場でアルジュナを殺して、前に約束したように、ドゥルヨーダナに長年の借りを返すであろう。(一〇)(一一―一二略)」

(第四十三章)

クリパは言った。

「カルナよ、お前の非常に残酷な心はいつも戦いを求める。お前はものごとの本性を知らない。ことの成り行きを考慮しない。(一) 教典に依拠して考察される多くの政策が存するが、それらのうちで戦闘は最悪であると過去を知る人々は説く。(二) 場所と時を得た戦いは勝利をもたらすであろう。時に遇わなければ、戦いは成果をもたらさぬ。場所と時に適う勇武が幸福をもたらす。(三) 結果が好ましいかどうかを考慮して、いずれを選ぶか決定すべきである。賢者たちは、戦車製造者の〔大口を〕尊重して決定しないものだ。(四)

ところでよく考えれば、アルジュナと交戦することは我々にとって適切ではない。彼は一人でクル軍を救出した。彼は一人で火神を満足させた。(五) 彼は一人で、五年間梵行（清浄行）を守った。彼は一人でスバドラーを〔戦車に〕乗せ、クリシュナに一騎打ちを挑んだ。まさにこの森で、アルジュナは誘拐されたクリシュナー（ドラウパディー）を奪い返した。(六) 彼は一人で、五年の間、シャクラ（インドラ）から武器について学んだ。彼は一人で敵を滅ぼして（異本による）、クル族に名声をもたらした。(七) その勇士は、一人で迅速にガンダルヴァ王チトラセーナと彼の無敵の軍隊を戦いにおいて破った。(八) また、ニヴァータカヴァチャやカーラカンジャという悪魔たちは、神々にすら殺されなかったのに、彼一人により戦闘で倒された。(九) カルナよ、お前はかつて一人で何をしたというのか。彼らの一人一人が諸王を征服したように……。(一〇) インドラといえどもアルジュナと戦場で戦うことはできない。彼と戦おうと望む者のために薬を作るべきである。(一一)(一二―一八略)

戦いに酔い痴れたアルジュナが来たら、我々はいっしょに戦おう。兵たちは戦闘の陣形を整え、準備をして待機せよ。(一九) ドローナとドゥルヨーダナとビーシュマとお前（カルナ）とドローナの息子（アシュヴァッターマン）と私で、みなしてアルジュナと戦おう。カルナよ、無謀なことをしてはならぬ。(二〇) 我々六騎が力を合わせれば、決意も固くインドラのように猛り立つアルジュナに対抗して戦うことができよう。(二一) 軍隊の陣形を整え、最高の射手たちが準備を整えて、我々は戦場においてアルジュナと戦おう。悪魔たちがインドラと戦うように。(二二)」

(第四十四章)

アシュヴァッターマンは言った。

「牛はまだ勝ち取られていない。まだ国境に達していない。まだハースティナプラに着いていない。それなのにカルナよ、あなたは自慢している。(一) 非常に多くの戦闘に勝利し、莫

大な財産を得ても、最高の土地を勝ち得ても、〔賢者たちは〕決して能力をひけらかさぬものだ。(二) 火は口をきかずに燃やす。太陽は黙って輝く。大地は動不動の世界のものたちを黙って支える。(三) 賢者たちは四姓(四階級)の仕事を定めた。それらによって財を得るべきである。そうすれば、行為をしても人は罪に陥ることはない。(四)

バラモンはヴェーダの聖典を学び、自他のために祭祀を行なうべきである。王族(クシャトリヤ)は弓に依存し、自らのために祭祀を行なうが、他者のために祭祀を行なうべきではない。実業者(ヴァイシャ)は財物を稼ぎ、ヴェーダの諸儀礼を行なわせるべきである。(五)

これらの栄光ある男たちは、教典に従って行動し、この大地を征服し、徳のない目上(グル)に対しても敬意を払う。(六) いかなる王族が、邪悪な賭博により王国を得て満足することができるであろうか。一般の人のように。(七) いかなる賢明な人が、猟師のように、人を欺く方策により、詐術によって財産が得られた時に自慢するだろうか。(八) いかなる一騎打ちで、あなたはアルジュナやナクラやサハデーヴァを破り、彼らの財産を奪ったか。(九) かつていかなる戦闘で、あなたはユディシティラや最強のビーマを破り、インドラプラスタを征服したか。(一〇) また、いかなる戦闘で、あなたはクリシュナー(ドラウパディー)を勝ち取ったか。忌わしい行為をした男よ、生理中の一衣をまとうだけの彼女を集会場に連れて来て……。(一一) あなたは価値あるものを求めて、栴檀を切るように、彼らの偉大な根を切った。勇士よ、あなたは彼らに〔召使の〕仕事をさせようとした。それについてヴィドゥラは何と言ったか。(一二)

人間は可能な限り平静さを保つ(我慢にも限度がある)と思われる。他の生き物の場合もそうだ。虫けらや蟻に至るまで……。(一三) アルジュナはドラウパディーの受難に我慢できない。アルジュナはドリタラーシトラの息子たちを懲らしめるために現われたのだ。(一四) あなたは賢者のふりをして色々と言いたがるが、敵を滅ぼすアルジュナは、我々を残らず滅ぼすであろう。(一五) クンティーの息子アルジュナは、神々やガンダルヴァや阿修羅や羅刹とも戦うことを恐れない。(一六) 怒った彼は戦場で出くわした相手を、ガルダ鳥が樹木を倒すような勢いで打ち倒して行くであろう。(一七) 彼は力にかけてあなたに勝り、弓にかけて神々の王(インドラ)に等しく、戦闘にかけてヴァースデーヴァ(クリシュナ)に等しい。そのアルジュナを、誰が尊敬しないであろうか。(一八) 彼は神の武器に対し神の武器で対抗し、人間の武器に対し人間の武器で対抗する。いかなる男がアルジュナに匹敵するか。(一九)

法(ダルマ)を知る人々は、弟子というものは息子に次いで大切であると知っている。そういうわけで、ドローナにとってアルジュナは愛しいのだ。(二〇)

賭博をしてインドラプラスタを奪ったように、クリシュナー(ドラウパディー)を集会場に連れて来たように、アルジュナと戦え。(二一) あの王族の法(クシャトラダルマ)(武士道)に通じた賢者であるあなたの叔父、いかさま賭博師のガーンダーラ国王シャクニは、今ここで戦うがよい。(二二) ガーンディーヴァ弓は「クリタ」とか「ドゥヴァーパラ」(賽の目の名)というような骰子は投げない。ガーンディーヴァ弓は燃え上がる鋭利な矢を放つ。(二三) ガーンディーヴァから放たれた、禿鷲の羽根のついた鋭い先端の威力ある矢は、山々をも貫通する。(二四) すべてを滅ぼすアンタカ

(破壊神)、ムリティユ(死神)、雌馬の顔を持つ火(海中火)でさえも幾分は生き残らせる。しかし、怒ったアルジュナはそうではない。(二五)もし望むなら師匠がアルジュナと戦えばよい。私はアルジュナと戦わない。もしマツヤ国王が牛を追跡して来るなら、我々は彼と戦うべきである。(二六)」

(第四十五章)

ビーシュマは言った。

「ドローナやクリパは正しく見ている。しかしカルナは、王族の法に従って、ふさわしく戦いたいと望んでいる。(一)よく知る人は師匠を非難できない。しかし、場所と時とを考慮して戦うべきだというのが私の意見だ。(二)太陽のような五名のライバルの戦士がいたら、賢者は彼らの優先に関しどうして迷わないだろうか。(三)法を知る人々といえども、自己の利益がからむ時は、すべて迷うのである。それ故、王よ、もしよければお前に私の意見を告げる。(四)カルナは我々の勇気を生み出すためにあのように言ったのだ。師匠の息子(アシュヴァッターマン)よ、我慢しなさい。一大事が迫っているのだ。(五)アルジュナが近づいて来るのに、争っている時ではない。師匠もクリパも、すべて堪えてくれ。(六)太陽に輝きがそなわっているように、そなたたちには武術の達人としての能力がそなわっている。月の美徴は決して取り除けないように、そなたたちにはバラモンの力とブラフマ・アストラ(梵天の武器)とが確立している。(七)四ヴェーダが一カ所にあり、王族の力が一カ所にあるのはよく見られる。

しかしその両方が同時に一カ所にあるのは聞いたことがない。(八)ただし、バラタ族の師匠とその息子とは例外だ。私はそう思う。そして、ブラフマ・アストラと諸ヴェーダとは、他には認められない。(九)師匠の息子よ、我慢しなさい。仲間割れしている時ではない。みなで力を合わせて、やって来るアルジュナに対して戦おう。(一〇)賢者たちは軍隊の災いについて述べたが、その中で離間(裂分)が最悪だというのが識者の意見だ。(一一)」

アシュヴァッターマンは言った。

「師匠は堪えて下さい。ここで仲直りしましょう。というのは、師が謗られたのは、怒りのせいであるから。(一二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

それからドゥルヨーダナは、カルナとビーシュマと偉大なクリパとともに、ドローナの許しを請うた。(一三)

ドローナは言った。

「私はビーシュマの告げた最初の言葉ですでに満足した。しかし次のようにことを運ぶべきである。(一四)ドゥルヨーダナが努力している時、無謀さからか迷妄からか、害悪が兵士たちに触れないように、そのように計るべきである。(一五)森で暮らすべき時が終わらぬうちは、アルジュナは姿を見せなかったであろう。今日、(牛の)財産を取りもどさぬうちは、彼は我々を容赦しないであろう。(一六)彼がドリタラーシトラの息子たちと接触しないよう

に、そして彼らをうち破らないようにことを計るべきである。(二七)ドゥルヨーダナが以前にたずねたことを思い出して、ビーシュマよ、ありのままに話して下さい。(二八)」

(第四十六章)

ビーシュマは言った。

「わが子よ、カラー(一分、または四十八秒、または八秒)、ムフールタ(四十八分)、一日、半月、一月、星宿、惑星、(一)季節、一年。このように、時間の区分によって、時輪(カーラ・チャクラ)は回転する。(二)時間の過剰により、また天体の逸脱(ずれ)によって、五年ごとに二つの月が追加される。(三)十三年に加えて、五カ月と十二日が経過したと私は考える。(四)彼らが約束したことは、すべてその通りに実行された。きっとこのように知って、アルジュナが来たのである。(五)彼らはすべて偉大で、すべて法(ダルマ)と実利(アルタ)に通じている。彼らの王はユディシティラである。どうして法に背くか。(六)

クンティーの息子たちは貪欲でない。彼らはなしがたいことを行なった。彼らが方策なしに、がむしゃらに王国を望むはずはない。(七)〔もしそうなら、〕まさにあの時に彼らは武勇に訴えていたろう。彼らは法の輪縄に縛られ、王族(クシャトリヤ)の誓戒からそれることはなかった。(八)もし『約束に反する』と人が言うなら、その人は滅亡するであろう(異本にもとづく)。プリター(クンティー)の息子たちは、約束を破るぐらいなら死を選ぶだろう。(九)しかしその時が来たら、

人中の雄牛であるパーンダヴァたちは、たとえそれがインドラに守られていても、達すべき目的を捨てることはないであろう。彼らはそのように強力である。(一〇)

戦闘において、我々は最強の戦士と対戦する。それ故、世の善き人々が実行する善行をすぐに行なうべきである。我々の利益が敵に行くことがないように。(一一)王中の王よ、クルの王よ、戦いにおいては常に勝利は時の運である。しかし今やアルジュナが来た。(一二)戦いが始まったら、生か死か、勝利か敗北かが、必ず一方に訪れる。このことは疑問の余地はない。(一三)それ故、王中の王よ、戦いの準備か(原文疑問)、それとも法(ダルマ)にかなった行為をすぐにやりなさい。アルジュナが来たから。(一四)」

ドゥルヨーダナは言った。

「祖父よ、私はパーンダヴァたちに王国を与えないであろう。それ故、すぐに戦いの準備をしなさい(原文疑問)。(一五)」

ビーシュマは言った。

「もしよければ、私の考えを聞きなさい。すぐに軍の四分の一を率いて都へ行きなさい。別の四分の一が牛を連れて行くべきである。(一六)私たちは軍の半分によってアルジュナと戦う。あるいは、引き返して来るマツヤ国王と戦う。あるいは、インドラとでも戦う。(一七)師匠(ドローナ)は中央に、アシュヴァッターマンは左翼に居なさい。叡知あるクリパは右翼を守りなさい。(一八)鎧を着けたカルナは前衛にいなさい。私は全軍を守りながら後衛に位置する。(一九)」

(第四十七章)

アルジュナ、カルナを退却させる

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このようにしてクル軍の勇士たちが陣形を整えた時、アルジュナは戦車の音を響かせて速やかに近づいた。(一)彼らは旗の先を見た。そして戦車の音と激しく振動するガーンディーヴァ弓の音を聞いた。(二)ドローナはそのすべてを眺めて、ガーンディーヴァ弓を持つ勇士がやって来ると見てとり、次のように言った。(三)

「遠くで輝いているのはアルジュナの旗の先である。あれが戦車のたてる音である(異本にもとづく)。(旗標の)猿が大声で吼えている。(四)あそこに、他の勇士を凌駕する最高の勇士が戦車に立ち、雷鳴のような音をたてる最高の弓ガーンディーヴァを引く。(五)この二本の矢はともに私の両足のところに立った。また他の二本の矢は、私の両耳をかすって通り過ぎた。(六)森での生活を完了し、超人的な行為を行なった後、アルジュナは(私の足もとに)平伏し、私の耳に問いかけるかのようである。(七)」

アルジュナは言った。

「御者よ、敵軍に矢が届く範囲に馬をかりたてよ。敵軍において、あのクル一族の最低の男がどこにいるか探すから。(八)他の者はすべて無視して、あの高慢な男を見つけ、その頭を落としてやろう。そうすれば彼らは敗れたことになる。(九)あそこにドローナが立っている。

その直後に彼の息子がいる。ビーシュマ、クリパ、カルナなどの偉大な射手も立っている。(一〇)しかしそこに王を見出さない。彼は生命を大事にして、牛を連れて南の方角に逃げたと思う。(一一)これらの戦車隊をほっておいて、スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)のいる所へ行け。ヴィラータの息子よ、そこで戦う。狙う獲物のない戦いはないのだ。彼をうち破り、牛を取りもどして引き返そう。(一二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このように言われて、ヴィラータの息子は努力して馬を制御し、手綱を引き絞り、クルの雄牛たちのいる方に、そして更にドゥルヨーダナの行った方に馬をかりたてた。(一三)しかし、アルジュナが戦車隊を無視して進んだ時、ドローナは彼の意図を知って次のように告げた。(一四)

「アルジュナは王以外とは対決しようとはしない。我々は急いで行き過ぎる彼の背面を攻撃しよう。(一五)戦闘において怒った彼に対し、一騎では戦うことはできない。千眼者である神(インドラ)と、デーヴァキーの息子クリシュナとを除いて。(一六)ドゥルヨーダナが舟のように、アルジュナという水に沈んだら、我々にとって、牛や莫大な財産が何になろう。(一七)」

アルジュナは自分の名を告げて進み、すばやく敵軍に蝗(いなご)のような矢を注いだ。(一八)アルジュナに射られた矢の洪水を注がれて、敵の兵士たちは、矢におおわれた大地や空を見ることがなかった。(一九)彼らは内心、戦うことも逃走することも考えなかった。心の中で、ア

ルジュナの迅速さを讃えていた。(二〇) それから彼は法螺貝を吹いて、敵たちを総毛立たせた。そして彼は最高の弓を引いて、旗にいる生き物たちを〔鳴くように〕鼓舞した。(二一) 彼の法螺貝の音により、戦車の車輪の音により、また旗に宿る超人的な生き物たちの叫び声により、牛たちは尾を上方に振り上げ、いたるところで鳴きながら、南の方角に引き返した。(二二―二三)

(第四十八章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

最高の弓取りアルジュナは、敵の軍隊を速やかに駆逐し、牛を取りもどしてから、なおも戦いを望んで、ドゥルヨーダナめざして進んで行った。(一) 牛が急いでマツヤ国に引き返した時、クルの勇士たちは、アルジュナが目的を果たしたと考え、ドゥルヨーダナめざして進んで行く彼に激しく襲いかかった。(二) 彼らの多くの軍隊が堅固に陣形を整えて、多くの旗を掲げているのを見て、敵を殺すアルジュナは、マツヤ国王ヴィラータの息子に話しかけて、次のように言った。(三)

「これらの黄金の手綱をつけた白馬たちを、速やかにあちらに向けよ。努力せよ。全速力で獅子のような戦士の群に近づけ。(四) 邪悪な御者（スータ）の息子（カルナ）は、象が象と戦うように私と戦いたいと願っている。王子よ、ドゥルヨーダナに庇護されて高慢になった彼のもとに私を連れて行け。(五)」

ヴィラータの息子は、風のように速い、黄金の腹帯をつけた大きな馬たちにより、その戦車隊を粉砕してから、戦場の真中に、アルジュナを連れて行った。(六) チトラセーナ、サングラーマジット、シャトルサハ、ジャヤなどの勇士たちは、カルナを助けようとして、種々の矢を放って、襲って来るアルジュナを迎え撃った。(七) その勇士の弓は輝き、激しい矢は熱を発した。彼は怒って、クルの雄牛たちの戦車の群を燃やした。火が森を燃やすように。(八)〔アルジュナはクル軍の勇士を次々と破り、カルナと対決する。(九―一九略)〕

ヴァイカルタナ（カルナ）は十二本の矢によってアルジュナを急襲した。彼は馬たちやヴィラータの息子の身体に矢を射かけた。(二〇) 象に攻撃された象王のようなアルジュナは、箙（えびら）から鋭い半月形の先を持つ矢を取り、弓の弦を耳まで引き絞り、カルナに矢を射かけた。(二一) そしてその敵を砕く勇士は、その戦いにおいて、ガーンディーヴァ弓から放たれた、雷電のような矢で、車上に立つカルナの腕や腿や頭や額や首を射貫いた。(二二) カルナはアルジュナの放つ矢に追い立てられ、アルジュナの矢に苦しめられ、象が象に敗れるように、速やかに戦線を離れて退却した。(二三)

(第四十九章)

クリパを圧倒するアルジュナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

カルナが退却した時、ドゥルヨーダナに率いられた者たちが、それぞれの軍隊とともに、

アルジュナを矢で攻撃した。(一) 陣形を整えて何度も矢で攻撃するその軍隊に対して進軍すべきであると考えて、ヴィラータの息子は言った。(二)

「アルジュナよ、御者である私とともに輝かしい戦車に乗り、どの軍に対して進軍しようか。私はあなたに言われた通りに行く。(三)」

アルジュナは言った。

「ウッタラよ、赤い眼をし、吉相をそなえ、虎皮をまとい、青い旗のもとに、戦車に立っている男が見えるだろう。(四) あのクリパの戦車隊のところに私を連れて行ってくれ。あの屈強の弓取りに、私の手練の早業を見せるであろう。(五) 美しい黄金製の水瓶を旗標とするあの男は、一切の武人の最高者であるドローナ師である。(六) 勇士よ、敵意を抱くことなく、澄み切った心で、彼を右まわりにまわって敬意を表しなさい。これは永遠の法(ダルマ)である。(七) もし最初にドローナが私の身体を撃てば、それから私は彼の身体を撃とう。そうすれば彼は怒らないであろう。(八)

師匠から遠からぬところに、旗の先に弓が見える者は、師匠の息子である勇士アシュヴァッターマンである。(九) 一切の武人たちと同じく、私は常に彼を尊敬している。あなたは彼の戦車を見出したら、何度でも止まるべきである。(一〇) 戦車隊の中で、黄金の鎧を着て、最も頼れる第三の最強の軍隊とともにいる男、その旗の先に黄金の地に〔描かれた〕象がいるあの男は、ドリタラーシトラの息子、栄光ある王スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）である。(一一―一二) 勇士よ、敵の戦士を苦しめる彼の前に戦車を操縦して行け。彼は威光により敵を粉砕し、戦い

に酔い痴れている。(一三) 手練の早業の彼は、ドローナの弟子たちのうちの第一とされている。私は矢により、彼に大いなる手練の早業を見せてやろう。(一四)

その旗の先に輝かしい象の腹帯が印されている男がヴァイカルタナ・カルナだ。あなたはすでに知っている。(一五) あの邪悪なカルナの戦車のところに行ったら、注意すべきである。彼はいつも戦いにおいて私と張り合う。(一六) またあそこに、青色の、五つ星のついた旗を掲げ、弓籠手(ゆごて)をつけ、大きな弓を持った強力な男が戦車に立っている。(一七) 彼の戦車には、星と太陽のように輝かしい最高の旗が立っている。彼の頭上には、汚れない白い傘がある。(一八) 彼は種々の旗や幟を掲げる戦車の大群の先頭に立っている。太陽が雲の先頭にあるように。(一九) 月や太陽のような黄金の彼の鎧が見える。そして黄金の兜をかぶっている。彼は私の心を戦慄させるかのようだ。(二〇) あれはシャーンタヌの息子ビーシュマである。我々みなの祖父だ。彼は王の富貴をそなえているが、ドゥルヨーダナの支配下にある。(二一) 彼に対しては最後に進軍すべきである。彼が私の妨害をしないように。私が彼と戦っている間は、注意して馬たちを制御せよ。(二二)」

そこでヴィラータの息子は、迷うことなく、アルジュナと戦おうとしているクリパのいるところにアルジュナを乗せて行った。(二三)　(第五十章)／(第五十一章略)

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

その間、偉大な力と勇武を有する最高の武士である高潔な勇士クリパが、アルジュナと対戦しようとしてやって来た。（一）戦おうとする、太陽のような強力な二人の戦士は対峙して、秋の雲のように輝いていた。（二）アルジュナは世に名高い最高の弓ガーンディーヴァを引き絞り、急所を貫く多くの鉄矢を射た。（三）しかしクリパは、鋭い矢を放って、そのアルジュナの血に飢えた鉄矢を、それらが飛来する前に、幾百幾千と断ち切った。（四）それから勇士アルジュナは怒り、多彩な業を発揮し、四方八方を矢でおおった。（五）限りなく高邁なアルジュナ王子は、いたるところ空を一面に陰らせ、幾百の矢によりクリパをおおった。（六）火焔のような鋭い矢で射られてクリパは怒り、無量の威力を持つ偉大なアルジュナを、速やかに幾千の矢で射て、戦場で雄叫び（おたけ）びをあげた。（七）

それから勇士アルジュナは急いで、ガーンディーヴァ弓から放たれた、金の矢筈を持つ、真っ直ぐの、鋭い四本の最高の矢により、クリパの四頭の馬を射た。（八）燃える蛇のような鋭い四本の矢で射られ、すべての馬たちは突然立ち上がった。そこでクリパは座席からずり落ちた。（九）勇士アルジュナは座席からずり落ちたガウタマ（クリパ）を見ても、彼の名誉を尊重して射なかった。（一〇）クリパは再び座席に座り直して、鷺の羽根を持つ十本の矢でアルジュナを射た。（一一）それからアルジュナは、半月形の先の鋭い一矢により、クリパの弓を断ち切り、手から弓を奪った。（一二）それから、急所を断つ鋭い矢により彼の鎧を吹き飛ばした。しかしアルジュナは彼の身体を傷つけなかった。（一三）鎧から脱け出た彼の身体は、時期が来ると脱皮する蛇の身体のように輝いた。（一四）アルジュナに弓を断ち切られたクリパは、他の弓をとって弦を張った。それは奇蹟のよう〔な早業〕であった。（一五）アルジュナはそれをも真っ直ぐの矢で断ち切った。勇士アルジュナは、同様にして、クリパの他の多くの弓を手練の業で断ち切った。（一六）

栄光あるクリパは、弓を断ち切られて、輝く稲妻のような槍をとって、アルジュナめがけて投げた。（一七）黄金で飾られた槍が、空を行く大きな流星のように飛来した時、アルジュナはそれを十本の矢で断ち切った。剛毅なアルジュナに切られた槍は、十に分れて地面に落ちた。（一八）（一九―二三略）

クリパは弓を断ち切られ、戦車を失い、馬と御者を殺された時、棍棒を手にして飛び下り、速やかにその棍棒を投げた。（二四）しかし、クリパが放ったその美しく飾られた重い棍棒は、アルジュナにより矢ではじき返されてもどって来た。（二五）それから、憤然としているクリパを救おうとして、戦場で兵士たちはいたるところからアルジュナに矢の雨を浴びせかけた。（二六）そこでヴィラータの息子は、馬たちを左にまわらせ、一対（ヤマカ）の輪円（マンダラ）を作って、その兵士たちを退けた。（二七）人中の雄牛たちは、戦車を失ったクリパを救出し、大急ぎでクンティーの息子アルジュナのもとから連れ去った。（二八）

（第五十二章）

ドローナ親子と戦うアルジュナ

アルジュナは言った。（一―六略）

「私はあの偉大なドローナと戦場において戦いたいと望む。それ故ウッタラよ、速やかにあの師匠のもとに連れて行ってくれ。(七)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

アルジュナにそう言われて、ヴィラータの息子ウッタラは、黄金で飾られた馬たちを、バラドゥヴァージャの息子(ドローナ)めざしてかりたてた。(八)最高の戦士アルジュナが全速力で襲いかかった時、ドローナは彼を迎え撃った。発情した象が発情した象を迎え撃つように。(九)それからドローナは、百の太鼓のような音をたてる法螺貝を吹き鳴らした。すべての軍は、波立つ海のように動揺した。(一〇)戦場で赤い良馬たち(ドローナの馬)が、ハンサ(鵞鳥)のような色(白)をした駿馬たち(アルジュナの馬)と混じり合ったのを見て人々は驚嘆した。(一一)戦いの最前線において、強力な二人の戦士、無敵で武術を修め思慮ある師匠と弟子、互いに対峙した強力なドローナとアルジュナとを見て、バラタ族の大軍は戦慄した。(一二—一三)

強力な勇士アルジュナは歓喜し、微笑し、ドローナの戦車に戦車を向けた。(一四)そして敵の勇士を殺す強力なアルジュナは、敬礼して、穏やかな言葉で、なごやかに告げた。(一五)

「我々は森に滞在し、報復を求めている。戦いにおいて無敵な方よ、決して我々のことを怒ってはいけない。(一六)非の打ち所のない人よ、私はまず先に攻撃された時にあなたを攻撃するでしょう。私はそう考えます。あなたは好きなようになさって下さい。(一七)」

そこでドローナは、二十本以上の矢を彼に放った。アルジュナは手練の業で、それらが到着しないうちにそれらを断ち切った。(一八)そこで強力なドローナは手練の早業を披露し、アルジュナの戦車に幾千の矢を浴びせた。(一九)

このようにして、ドローナとアルジュナの戦いが始まった。その両者は戦闘において、等しく、強烈に輝く矢を放った。(二〇)両者はともにめざましい行為で有名であった。両者とも風のように迅速であった。両者とも神的な武器に通じていた。両者とも最高の威光をそなえていた。両者はおびただしい矢を放って諸王を呆然とさせた。(二一)そこに集まったすべての戦士たちは驚嘆し、迅速に矢を放っている両者を、「やんや、やんや」と称讃した。(二二)

「アルジュナ以外の誰がドローナと戦うことができよう。師と戦うとは、王族の法(クシャトリヤダルマ)は残酷である。」

戦いの最前線にいる人々はそのように言った。(二三)(二四—五六略)

戦闘において、アルジュナが疲れを知らぬこと、その技量、迅速さ、遠方から射撃することを見て、ドローナは驚嘆した。(五七)さて猛り立ったアルジュナは、戦場において、ガーンディーヴァ弓をとり上げて、両腕で引き絞った。(五八)彼は蝗(いなご)の大群のような絶え間ない矢の雨を降らせた。その矢の間を風でさえも通り抜けられないほどであった。(五九)アルジュナはひっきりなしに矢をつがえて放ったので、彼が矢をとる合い間はまったく認められなかった。(六〇)このように非常に恐ろしい速矢の戦いが行なわれているうちに、アルジュナ

は迅速の上にもより迅速に新たなる矢を発した。(六一)そして、幾百幾千の真っ直ぐの矢が同時に、ドローナの戦車のそばに落ちた。(六二)ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナがドローナに矢を浴びせた時、兵士たちの間に、「ああ、ああ」という大きな声があがった。(六三)そこに集まって来ているインドラ、ガンダルヴァ、天女たちも、アルジュナの手練の早業を称讃した。(六四)

その時、戦車隊の長である師匠の息子（アシュヴァッターマン）が、突然、戦車の大群とともにアルジュナを制止した。(六五)アシュヴァッターマンは心では偉大なアルジュナの行為を称讃していたが、彼に対してこの上ない怒りを表わした。(六六)彼は怒りにかられ、アルジュナに戦いを挑んで襲いかかった。そして雨を降らせる雲のように、幾千の矢の雨を注いだ。(六七)勇士アルジュナはドローナの息子の方に馬を返し、ドローナが退却する余地を与えた。(六八)勇士ドローナは最高の矢に傷つけられ、鎧も旗も破れていたが、退却する余地を得て、駿馬たちをかって、速やかに退却した。(六九)

（第五十三章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

アルジュナは風のように激しく猛り立ち、雨雲が雨を注ぐように多数の矢の群を注ぐアシュヴァッターマンを迎え撃った。(一)両者の間に、神と阿修羅の戦いのような大激戦が行なわれた。両者はインドラとヴリトラ（インドラに退治された悪魔の名）のように、矢の群をまき散らした。(二)空は矢で満ち満ち、いたるところ陰り、太陽は輝かず、風も吹かなかった。(三)両者が戦い、互いに攻撃している間、燃えている竹の音のような、パチパチという大きな音が聞こえた。(四)アルジュナは相手のすべての馬を傷つけたので、相手は錯乱して方角を見失った。(五)それから、強力なドローナの息子は、アルジュナが動きまわっている間に、そのわずかな隙を見出して、馬蹄形の先の矢で彼の弓の弦を切った。彼の超人的な業を見て神々は讃えた。(六)そしてドローナの息子は、八弓長（ダヌス）の距離に離れて、鷺の羽根の矢で、人中の雄牛アルジュナの心臓を射た。(七)すると勇士アルジュナは大声で笑って、力強くガーンディーヴァに新しい弦を張った。(八)それからアルジュナは半周まわって、彼と対峙した。発情した象の群の長が発情した象と対峙するように。(九)そして戦場の中央で、地上において卓越した勇士である二人の、身の毛がよだつ戦闘が繰り広げられた。(一〇)すべてのクル族の人々は、群の長が対峙するように戦う偉大な二人の勇士を驚嘆して見ていた。(一一)その二人の人中の雄牛は、毒蛇のように燃える矢により相互に攻撃し合った。(一二)

偉大なアルジュナの神的な二つの箙（えびら）は無尽〔の矢を有する〕から、その勇士は戦場で、山のように動かずに立っていた。(一三)しかし、戦いにおいて迅速に矢を放つアシュヴァッターマンの矢はすぐに尽きてしまったので、アルジュナは優位に立った。(一四)そこでカルナは、この上なく怒って、大きな弓を引き絞って矢を浴びせた。そこで「ああ、ああ」という大きな叫び声があがった。(一五)アルジュナは弓が引かれている所に眼を向け、そこにカルナを見出して、彼の怒りはいやが上にも増大した。(一六)アルジュナは怒りにかられ、カル

ナを殺そうとして、両眼を見開いてカルナを見た。(一七) しかしアルジュナがよそを向いている間に、兵士たちはドローナの息子のために、急いで幾千もの矢を運んで来た。(一八) だが敵に勝利する勇士アルジュナは、ドローナの息子を捨て置いて、激しくカルナを襲撃した。(一九) アルジュナは怒りで眼を赤くして彼に襲いかかり、一騎打ちを望んで次のように言った。(二〇)

(第五十四章)

アルジュナ、カルナをうち破る

アルジュナは言った。

「カルナよ、お前は集会場の中でよく、『戦いにかけて自分に等しい者はいない』と大言を吐いていたが、それを実行すべき時が来た。(一) お前は法(ダルマ)を捨てて乱暴な言葉ばかり述べたが、お前の意図することは行ないがたいと私は考える。(二) 以前に私に遭遇しないでお前が言っていたことを何でも、カルナよ、今日クル族の人々の中で実行せよ。(三) お前は集会場でドラウパディーが邪悪な奴らに引きずられるのを見た。今日そのすべての果報を受けよ。(四) 私は以前は法の輪縄に縛られていたので怒りをこらえた。カルナよ、戦闘において、私のその怒りの勝利を見よ。(五) さあカルナよ、私と戦うことを承知せよ。すべてのクル族の人々と兵士たちは観客となれ。(六)」

カルナは言った。

「アルジュナよ、お前が口で言ったことを実行せよ。行為は言葉に勝ると地上でよく知られているから。(七) 以前お前が堪えたのは、無力の故に堪えたのだ。アルジュナよ、お前の勇武を見たら、お前の言うことを受け入れてやる(異本にもとづく)。(八) もし以前は法の輪縄に縛られていたので堪えたのなら、今も同じように縛られているのだ。自分では縛られていないと考えているが。(九) お前は森での生活を送ったと言うが、法と実利を知る者よ、実はお前は苦しんで約定を破ろうと望んだのだ。(一〇) アルジュナよ、もしインドラ自身がお前のために戦おうとも、武勇を発揮している私には何の痛痒もない。(一一) アルジュナよ、お前の望みはすぐにかなう。今、お前は私と戦うであろう。私の力を見るであろう。(一二)」

アルジュナは言った。

「たった今、お前は私との戦いから逃げ出した。それでお前は生きている。カルナよ、お前の弟(サングラーマジット。アルジュナに殺された。)は殺された。(一三) お前以外の誰が、弟を殺されたのに戦線を捨てて、しかも立派な人々の間でそのように偉そうに話せるか。(一四)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

無敵のアルジュナはカルナにそう告げると、鎧を貫通する矢を放って攻撃した。(一五) カルナは火焔のようなそれらの矢を、雲が雨を降らせるように矢の大雨を注いで迎撃した。(一六) いたるところ、恐ろしい矢の雨が降り注いだ。アルジュナはカルナの馬たちと両腕の弓籠手(ゆごて)を一つ一つ射貫いた。(一七) 彼は容赦なくカルナの箙(えびら)の吊紐を、鋭い先端をした真っ

直ぐの矢で断ち切った。(一八)そこでカルナは予備の箙から他の矢を取り出して、アルジュナの手を射た。彼の拳は傷ついた。(一九)

それから勇士アルジュナはカルナの弓を断ち切った。カルナは彼に槍を投じた。アルジュナは矢でそれを破壊した。(二〇)それから、カルナの多くの歩兵が襲いかかったが、アルジュナはガーンディーヴァ弓から放った矢によって彼らをヤマ(閻魔)の住処に送った。(二一)更にアルジュナは効果的な鋭い矢を、耳まで引き絞った弓で放ち、カルナの馬たちを射た。馬たちは死んで地面に倒れた。(二二)そして強力な勇士アルジュナは、他の燃えるような鋭い矢で、カルナの胸を射た。(二三)その矢はカルナの鎧を破って身体を撃った。そこでカルナは失神し、何もわからなくなった。(二四)彼はひどく苦しんで、戦場を捨てて北方に去った。そこでアルジュナと勇士ウッタラは彼の悪口を言った。(二五)

(第五十五章)

ビーシュマを苦しめるアルジュナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

アルジュナはカルナを破ってからヴィラータの息子に告げた。

「黄金の棕櫚(ビーシュマの旗標)が立っている所にいる軍団のもとに私を連れて行ってくれ。(一)そこに、我々の祖父であるビーシュマが戦車に乗っている。その神のような風貌の人は私と戦うことを望んでいる。戦いにおいて私は彼の弓の弦を断ち切るであろう。(二)今、私が多彩な神の武器を放つのを見なさい。それは空中の雷雲の稲妻のように飛ぶ。(三)クル族の人々は黄金でその背を飾られた私のガーンディーヴァ弓を見るであろう。集まったすべての敵たちは、『彼は右手か左手か、どちらで射ているのか』と考えこむであろう。(四)私は他界へ流れる越えがたい川の流れを作ろう。血が川の水で、戦車が渦巻で、象が鰐である。(五)私は半月形の先をした真っ直ぐの矢でクル族の森を断つであろう。その森は、手足、頭、背中、腕という枝で満ちている。(六)唯一の弓取りである私がクル族の軍隊をうち破る時、森の火の道のように、私には百の道ができるであろう。ただ、私に撃たれた兵士が車輪のように動きまわっているのを見るであろう。(七)

平坦な土地であろうと平坦でない土地であろうと、動揺することなく戦車に立て。私は天をおおって立っている山をも刃で断つであろう。(八)(九—一五略)」

アルジュナからこのように励まされたヴィラータの息子は、英邁なビーシュマの恐るべき戦車隊に突入した。(一六)しかしその恐ろしい行為を行なうビーシュマは、戦場で敵を破ろうと望んでやって来る勇士アルジュナと衝突することを冷静に避けていた。(一七)その時、多彩な花輪や飾りをつけ、武術を修めた賢明なドゥフシャーサナ、ヴィカルナ、ドゥフサハ、ヴィヴィンシャティが、腕で弓弦を引き、恐るべき弓取りアルジュナに襲いかかり、アルジュナを取り囲んだ。(一八—一九)勇士ドゥフシャーサナは半月形の先をした矢でヴィラータの息子を射て、第二の矢でアルジュナの胸を射た。(二〇)アルジュナは彼の方を向き、広い刃のついた、禿鷲の羽根の矢で、彼の黄金で飾られた弓を断ち切った。(二一)そしてその後で、

アルジュナは五本の矢により彼の胸を射た。彼はアルジュナの矢で傷つき、戦いを捨てて退却した。（二二）ドリタラーシトラの息子の一人ヴィカルナは、禿鷲の羽根のついた、真っ直ぐ飛ぶ鋭い矢で、勇士アルジュナを射た。（二三）アルジュナの方もすばやく、真っ直ぐの矢で彼の額を射た。相手は射られて戦車から落ちた。（二四）そこでドゥフサハとヴィヴィンシャティは、兄弟を救おうとして、アルジュナに襲いかかり、戦場において、鋭い矢を浴びせかけた。（二五）しかしアルジュナは動揺することなく、禿鷲の羽根のついた鋭い二本の矢を両者に同時に射て、彼らの馬たちを殺した。（二六）ドリタラーシトラの二人の息子は、馬を殺され、身体を貫かれた。歩兵たちが駆けつけ、彼らを他の戦車に乗せて退却した。（二七）王冠をかぶる、強力で無敵な、的を射貫くアルジュナは、あらゆる方角に襲いかかった。（二八）

（第五十六章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

さて、カウラヴァのすべての勇士たちは団結して、決意も固く、こぞってアルジュナに対して挑戦した。（一）限りなく高邁なアルジュナは、霧が山々をおおうように、矢よりなる網でそれらの勇士をすべておおった。（二）巨象たちは咆哮し、馬たちはいななき、太鼓や法螺の音が響き、その音はけたたましいものであった。（三）アルジュナが放つ矢の群は、人馬の体を貫き、鉄の鎧を貫き、幾千となく飛来した。（四）急いで矢を発射するアルジュナは、戦場において、秋の真昼の太陽のように輝いていた。（五）恐怖にかられて戦車兵は戦車から飛び下り、騎兵は馬の背から飛び下り、歩兵は地上を逃げまわった。（六）偉大な戦士たちの、銅や銀や鉄の鎧に矢があたって大きな音が響いた。（七）戦場は鋭い矢で生命を失った象兵や騎兵たちの死体ですっかりおおわれた。（八）大地は戦車の座席から落ちた人々でおおわれていた。アルジュナは弓を手にして戦場で踊るかのようであった。（九）（一〇―一九略）

（第五十七章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、ドゥルヨーダナ、カルナ、ドゥフシャーサナ、ヴィヴィンシャティ、ドローナとその息子、最高の戦士クリパは、アルジュナを殺そうとして、強力な剛弓を引き絞りつつ、猛り立って引き返して来た。（一―二）猿の旗標を持つアルジュナは、軍旗のひらめく太陽のように輝く戦車に乗って、彼ら全員と対戦した。（三）それからクリパ、カルナ、最高の戦士ドローナは、偉大な武器を持って強力なアルジュナを取り囲んだ。（四）そして雨季の雲のように、矢の洪水を注ぎ、攻撃して来る彼に矢の雨を降らせた。（五）彼らは戦場でほど遠からぬところに位置を占め、孜々として、羽根のついた多数の矢を速やかに浴びせかけた。（六）しかし、このようにいたるところから神的な武器を注がれても、彼には二指〔の幅〕ほどの隙も見出されなかった。（七）

それから勇士アルジュナは笑い、太陽のように輝く神聖なインドラの武器をガーンディーヴァ弓につがえた。(八)強力なアルジュナは、太陽が光線で熱するように、その矢ですべてのクル軍を苦しめた。(九)ガーンディーヴァ弓は雲の中の稲妻、山における火、長い虹のようであった。(一〇)雨神が雨を降らせる時、天空に稲妻がきらめくように、矢を降らせるガーンディーヴァはすべての方角をおおった。(一一)すべての戦士はすっかり恐れた。全員、専ら平安を願い、人心地もなかった。すべての戦士は心を乱し、戦場から退却した。(一二)このようにしてすべての軍がうち破られ、生きた心地もしないで、あらゆる方角に逃げ去った。(一三)　(第五十八章)

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから、シャンタヌの栄光ある息子である無敵のビーシュマは、兵士たちが殺された時、アルジュナに襲いかかった。(一)黄金で飾られた最高の弓をつかんで、急所を射貫ける鋭い先をした矢をとって、白い傘を頭上にさしかけられ、その人中の虎は日の出における山のように輝いていた。(二―三)ガンガーの息子(ビーシュマ)は、法螺を吹いてドゥルヨーダナを歓喜させつつ、アルジュナのまわりを右まわりにまわって行く手を遮った。(四)勇士アルジュナは、彼がこのようにやって来るのを見て、山が雲の来ることを喜ぶように、心から喜んで彼を迎えた。(五)

それから強力なビーシュマは、アルジュナの旗に、蛇の吐息のような音をたてる高速の八本の矢を送り込んだ。(六)それらの燃え上がる矢は、アルジュナの旗に達して、〔旗標の〕猿に当たり、そして旗の上にいる生き物たちに当たった。(七)そこでアルジュナは、広い半月形の刃のついた大きな矢で、ビーシュマの傘を断ち切った。それはすぐに地面に落ちた。(八)そしてアルジュナは、相手の旗を矢で強烈に撃った。彼はまた迅速に、相手の戦車の馬たちと、背面の二名の御者たちを撃った。(九)ビーシュマとアルジュナとの両者の戦闘は、バリ(悪魔の名)とインドラとの戦いのように、激しく総毛立つものであった。(一〇)(一一―三九略)

それからシャンタヌの息子ビーシュマは、矢を射ているアルジュナの隙をねらって、その左脇を射た。(四〇)ところがアルジュナは笑って、広い刃の、禿鷲の羽根のついた矢で、無量の威光を持つビーシュマの弓を断ち切った。(四一)そしてアルジュナは、自制し勇猛なビーシュマの胸を射た。(四二)戦いにおいて無敵の勇士ビーシュマは、傷つけられて苦しんだが、戦車の柱をつかんで、長いこと立っていた。(四三)戦車の馬の御者は、教えを思い出し、意識を失った勇士を救うために、彼を乗せて退却した。(四四)　(第五十九章)

敗走するドゥルヨーダナ

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

ビーシュマが前線を捨てて逃走した時、偉大なドゥルヨーダナは旗を掲げ雄叫びをあげ、

自ら戦おうとして、アルジュナに襲いかかった。(一) 恐るべき弓取りである非常に強力なアルジュナが敵の群の中を動きまわっている時、彼は耳まで引き絞った弓から放った矢でアルジュナの額を射た。(二) 王よ、金色に輝く鋭い矢を受けて、栄(は)えある行為のアルジュナは、一節の竹の生えた山のように輝いた。(三) 彼が矢で傷つけられた時、熱い血が絶え間なく流れ出た。それは黄金の花できらびやかな彼の花輪のように、美しく輝いていた。(四)

ドゥルヨーダナに矢で撃たれて、強力なアルジュナは大いに怒り、意気沮喪することなく、毒や火のような矢をとって、ドゥルヨーダナ王を射た。(五) 恐るべき威光を持つドゥルヨーダナはアルジュナを攻撃し、卓越した勇士アルジュナはドゥルヨーダナを攻撃した。ともにアジャミーダの末裔である勇猛な男たちは、戦場で互いに攻撃し合った。(六)

それからヴィカルナが、発情した山のような巨象に乗って、象の足もとを守る四名の戦士とともに、アルジュナを襲撃した。(七) 巨象が急襲して来た時、アルジュナは耳まで引き絞った弓で放った、高速の堅固な鉄矢で象の額の中央を射た。(八) アルジュナに放たれたその禿鷲の羽根の矢は、インドラが放った雷電が山を裂くように、大山のような象を裂いて、矢筈のところまで象に入りこんだ。(九) その巨象は、矢で苦しみ、身体をふるわせ、心を乱し、沈みこむように大地に倒れた。〔インドラの〕金剛杵(ヴァジュラ)に撃たれた山の峰のように。(一〇) 最高の象が大地に倒れた時、ヴィカルナは恐怖にかられ、あわてて降り、急いで八百歩ほど走って、ヴィヴィンシャティの車に乗った。(一一) 高山か雲のようなその象を、金剛杵のような矢で殺してから、アルジュナは同じような矢でドゥルヨーダナの胸を射た。(一二)

かくて象と王とが射貫かれ、ヴィカルナとその足もとを守る兵が敗れた時、ガーンディーヴァ弓から放たれた矢で追いまくられ、主要な戦士たちは急いで退却した。(一三) 象が矢で殺され、すべての戦士たちが逃げ出したのを見て、クルの勇士（ドゥルヨーダナ）は戦車の向きを変えて、戦場からアルジュナのいない方に逃げた。(一四) 恐ろしい姿のドゥルヨーダナが、矢で傷つき血を流しながら、急いで逃げて行くのを見て、戦いを望む勇士アルジュナは叫んだ。(一五)

アルジュナは言った。

「名声と大なる栄光を捨てて、何故に戦いをやめて逃げるのか。戦いに行くお前のために打たれた楽器も、いつものように鳴ることはない。(一六) 私はユディシティラの指示に従う、プリターの第三子である。戦いの決意をしている。引き返して顔を見せてくれ。王族の行動を思い出せ。ドリタラーシトラの息子よ。(一七) かつてお前はドゥルヨーダナ（打ち勝たれざる者）と名づけられたが、その名は地上において空しいものだ。戦いを捨てて逃げるお前には、ドゥルヨーダナという名はふさわしくない。(一八) ドゥルヨーダナよ、お前の前にも後ろにも守護する者はいない。クルの勇士よ、戦いから逃げよ。愛しい生命をアルジュナから守れ。(一九)」

(第六十章)

アルジュナの勝利

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
気高いドリタラーシトラの息子は、戦場で偉大なアルジュナに挑発されて、発情した象が鉤で引き返させられるように、彼の言葉という鉤で引き返させられた。(一)その強力な勇士は、偉大な戦士に言葉で傷つけられて我慢できず、戦車に乗って引き返した。足の裏で踏まれた蛇のように。(二)彼が引き返したのを見て、カルナは負傷していたが気を取り直して引き返し、右側からドゥルヨーダナに近づいた。そしてその黄金の首環をした勇士はアルジュナに戦いを挑んだ。(三)そしてシャンタヌの息子である勇士ビーシュマも、黄金の腹帯をした馬たちを急がせて、弓の弦を張り、後方でドゥルヨーダナをアルジュナから守った。(四)ドローナ、クリパ、ヴィヴィンシャティ、ドゥフシャーサナも速やかに引き返し、すべて前面で弓矢を引き、急いでドゥルヨーダナを守ろうと近づいた。(五)

アルジュナは洪水のような軍隊が引き返すのを見て、ハンサ鳥が現われた雲に向かうように、迅速に立ち向かった。(六)彼らはぐるりとアルジュナを取り囲み、神的な武器を使用して、いたるところから攻撃して矢を雨と注いだ。雲が山にどしゃぶりの雨を注ぐように。(七)それからガーンディーヴァ弓を持つ勇士アルジュナは、クルの雄牛たちの武器を自分の武器によって防いで、サンモーハナ(惑わせるもの)という、インドラから得た別の武器を出現させた。(八)それから強力な彼は、見事な刃と羽根を持つ鋭い矢で四方八方をおおい、ガーンディーヴァ弓の音で敵たちの心を戦慄させた。(九)そしてまた敵を滅ぼすアルジュナは、恐ろしく大きな音をたてる大法螺を両腕でつかんで、四方八方、天地に鳴り響かせた。(一〇)すべてのクルの勇士たちは、アルジュナが発した法螺の音に茫然自失して、無比の弓を捨て、専ら平和を願うようになった。(一一)

敵が正気を失った時、アルジュナはウッタラーの言葉を思い出して、「クル族が正気を失っている間に中央から退出せよ」とマツヤ国王の息子に告げた。(一二)

「師匠(ドローナ)とクリパの白い衣、カルナの黄色の輝やかしい衣、ドローナの息子と王(ドゥルヨーダナ)の濃紺の衣を奪え。勇猛な男よ。(一三)ビーシュマの意識は正常であると私は思う。彼は私のこの武器に対処する法を知っている。彼の馬をあなたの左にして行け。心迷わぬ者たちはそのようにして行くべきであるから。(一四)」

偉大なヴィラータの息子は手綱を捨て、戦車から飛び下りた。そして偉大な戦士たちの衣服を取って、速やかに再び自分の戦車に乗った。(一五)それからヴィラータの息子は、黄金の帯をつけた四頭の駿馬たちに命じた。その白馬たちは、アルジュナを運んで、旗を持つ者たちの群を通過し、戦場の中央から出て行った。(一六)

強力なビーシュマは、去り行く勇士アルジュナを矢で射た。アルジュナは十本の矢で、ビーシュマの馬たちを殺し、彼の脇を射た。(一七)それから不滅の弓取りであるアルジュナは、戦場でビーシュマを捨て去り、彼の御者を殺し、戦車の群の中から抜け出て立っていた。太

陽がラーフ（日食、月食を起こす悪魔）を抜け出るように。（一八）
クルの勇士ドゥルヨーダナは、意識を取りもどし、戦場から抜け出て一人で立っている、大インドラのようなアルジュナを見て、急いでたずねた。（一九）
「彼はどのようにしてあなた方から逃れたのか。彼が逃げないように彼をつかまえなさい。」
ビーシュマは笑って彼に告げた。
「お前の知性はどこに行ったか。勇猛心はどこに行ったか。（二〇）お前は矢と美しい弓とを捨てて、平和を求めるかのようにしていた。しかしアルジュナは決して残酷なことができない。彼の心は罪悪に沈むことはない。（二一）彼は三界のためといえども自己の法（スヴァダルマ）を捨てることはない。それ故、この戦いにおいて、すべての者は殺されなかったのである。クルの勇士よ、速やかにクルの地に引き返せ。アルジュナは牛を取りもどして引き返すがよい。（二二）」
ドゥルヨーダナ王は自分に有益な祖父の言葉を聞いて、非常に短気な彼も戦う意欲を失い、ため息をついて沈黙した。（二三）一同はビーシュマの言葉が有益であると見て、そしてアルジュナの火が勢いを増すのを見て、ドゥルヨーダナを守護しつつ引き返す決意をした。（二四）クルの勇士たちが引き返すのを見て、偉大なアルジュナは満足し、彼らに話しかけ敬意を表するために、しばらくの間、目上（グル）の人々について行った。（二五）祖父である長老ビーシュマ、師のドローナに頭を下げて敬礼し、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）、クリパ、その他すべての目上の人々に、色とりどりの矢で敬意を表した。（二六）アルジュナはドゥルヨーダナに対しては、最高の宝石で多彩な王冠を矢で断ち切った。同様に、尊敬に値する勇士たちに

別れを告げ、ガーンディーヴァ弓の音を世間に響かせた。（二七）そしてその勇士は、突然デーヴァダッタ（法螺の名）を吹き鳴らして敵の心を引き裂いた。彼はすべての敵を圧倒して、黄金の網で飾った旗で輝いていた。（二八）アルジュナは退却するクル軍を見て、喜んでマツヤ国王の息子に言った。
「馬たちを引き返させよ。牛たちは取りもどした。敵たちは去った。喜んで都に帰りなさい。（二九）」

（第六十一章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――
雄牛のような眼をしたアルジュナは、戦闘でクル軍を破って、ヴィラータの莫大な財産をすべて取りもどした。（一）ドリタラーシトラの息子たちが敗れ、すべて去った時、多くのクル族の兵士たちが深い森から出て来た。（二）彼らは恐怖に心ふるえて、あちこちから集まって来た。彼らは髪を解いて、合掌して立っていた。（三）飢えと渇きに苦しめられ、異郷にあり、途方に暮れていた。彼らは当惑し、敬礼して、「アルジュナ様、我々はあなたのために何をしたらよいでしょうか」とたずねた。（四）
アルジュナは言った。
「さようなら。どうぞ行きなさい。決して恐れることはない。私は悩む者たちを害することはない。私はしっかりとあなた方の安全を保証する。（五）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

安全を保証するアルジュナの言葉を聞いて、集まった戦士たちは、彼の長寿と名声と栄誉を願う祝福の言葉により彼を喜ばせた。(六) クルの人々は、敗れ、圧倒されて、引き返した。道中、アルジュナは次のように言った。(七)

「王子よ、牛の群と牛飼たちがすべて集められるまで待ちなさい。強力な勇士よ。(八) それから、我々は午後にはヴィラータの都に行くであろう。馬たちを休息させ、水を飲ませ、水を浴びさせてから。(九) あなたは牛飼たちを遣わして、よい知らせを告げるために急いで都に行かせなさい。そしてあなたの勝利を宣言させなさい。(一〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そこでウッタラは急いで使者に命じた。

「他ならぬアルジュナの言葉により、私の勝利を告げよ。(一一)」

（第六十二章）

(48) アビマニユの結婚（第六十三章－第六十七章）

ユディシティラ、骰子をぶつけられる

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

軍隊の長であるヴィラータもまた、財産を取りもどしてから、四名のパーンダヴァたちとともに喜んで都に入った。(一)その偉大な王は戦いでトリガルタ軍をうち破り、すべての牛を取りもどし、パーンダヴァたちとともに、栄光に囲まれて輝いていた。(二)親しい人々の喜びを増大させるその勇士が席についた時、すべての臣下たちとバラモンたちは彼に近づいて敬意を表した。(三)マツヤ国王と兵士たちは、敬意を表されて答礼してから、バラモンと臣下たちを退出させた。(四)

それから、軍隊の長であるマツヤ国王ヴィラータは、ウッタラについて、「彼はどこへ行ったか」とたずねた。(五)すると、部屋にいる女たちや娘たちや、その他の後宮の女たちが、喜ばし気に告げた。

「クル族により牛の財産が奪われました。(六)ウッタラ王子はただ一騎で、ブリハンナダーを連れ、猛り立って出陣しました。攻撃してきたドローナ、ビーシュマ、クリパ、カルナ、ドゥルヨーダナ、ドローナの息子という六名の勇士たちを破ろうとして。(七―八)」

ヴィラータ王は、勇敢な息子がブリハンナダーを御者として、一騎で行ったことを聞いて、ひどく悩んだ。そしてすべての主立った顧問官たちに言った。(九)

「クル族とその他の王たちは、すべからく、トリガルタが敗れたことを聞いたら、決してとどまらないであろう。(一〇)それ故、トリガルタ軍に傷つけられなかった私の戦士たちは、ウッタラを救うために、大軍を率いて進軍せよ。(一一)」

彼は息子のために、多彩な武器と装飾をそなえた、騎兵、象兵、戦車兵、勇猛な歩兵集団を、速やかに出陣させた。(一二)このようにして、軍隊の長であるマツヤ国王ヴィラータは、四部よりなる軍隊に急いで命令した。(一三)

「王子についてすぐに調べよ。生きているかいないか。女形(おやま)が御者として彼につき従ったが……。彼は生きていないと私は思う。(一四)」

ユディシティラは笑って、クル族のことで悩み苦しんでいるヴィラータに告げた。

「王様、ブリハンナダーが御者であれば、敵は今日、あなたの牛を連れて行かないでしょう。(一五)あなたの御子息は、あの御者に従われていれば、戦場に集まったクル族とすべての諸王はおろか、神々や阿修羅や夜叉や竜たちをも破ることができます。(一六)」

それから、ウッタラに派遣された早飛脚がヴィラータの都に着き、王子の勝利を告げた。(一七)そこで顧問官は、大勝利とクル軍の敗退とウッタラの帰還について王に報告した。(一八)

「すべての牛を取りもどしました。クル軍は敗れました。ウッタラ様は御者とともに無事です。敵を苦しめる王よ。(一九)」

カンカ(ユディシティラ)は言った。

「幸いなことに、牛を取りもどし、クル軍は敗れました。幸いなことに、あなたの御子息は御無事であるということです。王中の雄牛よ。(二〇) しかし、あなたの御子息がクル軍を破ったということは、不思議ではありません。ブリハンナダーを御者とするものは必ずや勝利するのです。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ヴィラータ王は無量の威光のある王子の勝利を聞いて、総毛立って喜んだ。彼は使者たちに衣服を与え、顧問官たちに命じた。(二二)

「私の王道を、旗で飾りつけよ。花々の贈物によってすべての神々を供養せよ。(二三) 王子たち、主立った戦士たち、よく飾られた遊女たち、すべての楽器が、私の息子を出迎えるべきだ。(二四) 鐘と太鼓を打つ者は急いで発情した象に乗り、すべての四辻において私の勝利を布告せよ。(二五) そしてウッタラー(王女)は、多くの少女たちに囲まれ、恋の風情を示す衣裳と装飾をつけて、ブリハンナダーを出迎えるべきである。(二六)」

王の言葉を聞くと、すべての人々は吉祥のものを手に持ち、太鼓やその他の楽器、法螺を持ち、美しい遊女たちは高価な衣裳を着て、吟誦者（スータ）、讃嘆者（マーガダ）たちとともに、祝福を告げる楽器、太鼓などの楽器を持ち、都から出て、無限の力を持つ強力なヴィラータの息子を迎えた。(二七―二八)

軍隊と少女たちとよく飾られた遊女たちを出迎えにやらせてから、大知者であるマツヤ国

王は、喜んで言った。

「サイランドリーよ、骰子を持って来い。カンカよ、賭博を始めなさい。(二九)」

そのように告げる彼を見て、ユディシティラは答えた。

「喜んでいる賭博者と賭けるべきではないと我らは聞いている。(三〇) 今、喜んでいるあなたと賭けることはできない。しかし、私はあなたが気に入ることを望んでいる。もしよいと思われるなら始めなさい。(三一)」

ヴィラータは言った。

「女、牛、黄金、その他の私の財産は何でも、あなたと賭博をしないでもそれを守ることはできない(喜びのあまりすべて与えてしまう)。(三二)」

カンカは言った。

「王中の王よ、誇りを与える者よ。あなたにとって多くの災いをもたらす賭博が何になるでしょう。賭博には多くの災いがあります。それ故、それを避けるべきです。(三三) あなたはパーンドゥの息子ユディシティラについて聞いたこと、見たことがあるでしょう。彼は非常に大きい栄えた王国と、神々にも等しい弟たちを失いました。(三四) 彼は賭博ですべてを失いました。それ故、私は賭博が好きではありません。しかし、もしよいと思われるなら、王よ、もしなさりたいのなら、賭博をしましょう。(三五)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

賭博が行なわれている間、マツヤ国王はユディシティラに言った。
「見よ、わが息子はあのように戦いでクル軍を破った。(三六)」
するとユディシティラはマツヤ国王に答えた。
「ブリハンナダーが彼の御者ですから、どうして彼が勝たないことがありましょう。(三七)」
そう言われて、マツヤ国王は怒ってユディシティラに言った。
「最低のバラモンよ、おまえは女形を私の息子と同等に見ているのか。(三八) お前は言ってよいことと悪いことを知らない。きっと私を馬鹿にしているのだ。ビーシュマやドローナをはじめとするすべての敵を、どうして彼が破らないであろうか。(三九) しかしバラモンよ、友情により私はお前のこの過失を大目に見よう。もし生きていたいと望むなら、二度とこのようなことを言うな。(四〇)」
ユディシティラは言った。
「王中の王よ、ドローナ、ビーシュマ、ドローナの息子、カルナ、クリパ、ドゥルヨーダナ、その他の勇士たちがいる。(四一) マルト神群に囲まれたインドラ自身がいようとも、ブリハンナダー以外の誰が、集結した彼らに対抗して戦うことができよう。(四二)」
ヴィラータは言った。
「何度も制止したのに、お前は言葉をつつしまない。もし制止する者がいなければ、誰も法(ダルマ)を実行しないであろう。(四三)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——
そこで怒った王は、ユディシティラの顔にひどい勢いで骰子をぶつけた。怒りにかられ、「このようにしてはならぬ」と叱責しながら。(四四)
鼻をひどく打たれたので、鼻から血が出た。それが地面に落ちないうちに、ユディシティラは両手でそれを受けた。(四五) 徳性ある彼は傍らに立っているドラウパディーを見た。夫の心に従う彼女は彼の意図を理解した。(四六) 非の打ち所のない彼女は、黄金の器を水で満たし、ユディシティラから流れる血をそれで受けた。(四七)
その時、ウッタラが、すばらしい香や種々の花輪を注がれながら、喜び勇んで悠々と都に入って来た。(四八) 彼は市民や女性や地方民たちに敬意を表されつつ、宮殿の門に着いて、父に取り次がせた。(四九) そこで門衛は入って行って、ヴィラータに告げた。
「ウッタラ王子様がブリハンナダーとともに門のところにおられます。(五〇)」
マツヤ国王は喜んで門衛に言った。
「急いで二人を入らせなさい。私は二人に会いたい。(五一)」
しかしユディシティラはこっそりと門衛の耳にささやいた。
「ウッタラ様だけに入っていただけ。ブリハンナダーを入れてはならぬ。(五二) 勇士よ、彼は誓いをたてたのだ。戦闘でない時に、誰かが私の身体に傷をつけるか血を流させたら、その者は必ず死ぬことになると。(五三) 彼は血を流している私を見たら、ひどく怒って、我慢しないであろう。彼はこの場で、ヴィラータと顧問官たちと、軍隊と馬たちを殺すであろう。

〈五四〉」

ウッタラ王子の帰還

（第六十三章）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

そこで国王の長子ウッタラは入り、父の両足に挨拶してから、ユディシティラを見た。〈一〉彼は罪もないのに血にまみれ、当惑し、サイランドリーに仕えられて、一隅の地面に座っていた。〈二〉そこでウッタラは、急いで父にたずねた。

「王よ、誰が彼を打ったのですか。誰がこのような悪事をなしたのですか。〈三〉」

ヴィラータは言った。

「私がこの悪党を打ったのだ。これだけでは足りないのだが。勇士であるお前を讃えている時、この男は女形を讃えるのだ。〈四〉」

ウッタラは言った。

「あなたは誤ったことをしました。王よ、すぐに彼に許しを乞いなさい。恐ろしいバラモンの毒があなたをその根もろともに焼かないように。〈五〉」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

王国を栄えさせるヴィラータは、息子の言葉を聞くと、灰に隠れた火のようなユディシティラに許しを乞うた。〈六〉ユディシティラは許しを乞う王に答えた。

「王よ、私はとっくに許している。私には怒りはない。〈七〉もし私の鼻から地面に血が落ちたら、大王よ、あなたは疑いもなく、王国もろとも滅びたであろう。〈八〉王よ、罪のない者を打ったからといって、あなたを非難しない。大王よ、強力な者には速やかに残酷さが訪れるものだから。〈九〉」

さて、血が止まった時、ブリハンナダーが入って来た。彼はヴィラータとカンカに挨拶して傍らに立っていた。〈一〇〉マツヤ国王はユディシティラに許しを乞うてから、アルジュナの聞いている前で、戦いから帰ったウッタラを称讃した。〈一一〉

「王子よ、お前によって私はまさに後継者を得た。お前に等しい息子は私にいなかったし、これからもいないであろう。〈一二〉カルナは千の的を射て一つの的も射損じない。そのカルナと、わが子よ、どのようにして対戦したのか。〈一三〉すべての人間界でビーシュマに等しい者はいない。彼は海〔の内部〕のように揺るぎなく、世界の帰滅の火のように耐えがたい。そのビーシュマと、わが子よ、どのようにして対戦したのか。〈一四〉バラモンのドローナはヴリシュニの勇士たちとパーンダヴァたちの師匠であり、すべての王族(クシャトラ)の師匠であり、一切の武士のうちの最上者である。そのドローナと、わが子よ、どのようにして対戦したのか。〈一五〉師匠の息子である、一切の武士のうちでも最高の勇士、アシュヴァッターマンとして有名な男、その彼とどのようにして対戦したか。〈一六〉戦場でクリパを見ると、人々は財産を奪われた商人のように沈み込む。そのクリパと、わが子よ、どのようにして対戦したのか。

(一七)王子ドゥルヨーダナは大きな矢で山を断つ。そのドゥルヨーダナと、わが子よ、どのようにして対戦したのか。(一八)」

ウッタラは答えた。

「私が牛を取りもどしたのではありません。私が敵を破ったのではありません。ある神の息子がすべての行為をしたのです。(一九)その神の息子は、恐れて逃げ出す私を制止しました。そしてそのインドラのような若者は、戦車の座席に立ちました。(二〇)彼が牛を取りもどしました。彼がクル軍を破りました。すべてはその勇士の行為で、私がやったのではありません。(二一)実に彼はクリパ、ドローナ、強力なドローナの息子、カルナ、ビーシュマを矢によって退却させました。(二二)象を従えた群の長のような、強力な王子ドゥルヨーダナが敗れ恐れた時、彼はドゥルヨーダナに告げました。(二三)

『ハースティナプラにお前を救う何かがあるとは思われない。クルの王子よ、努力して生命を守れ。(二四)王よ、お前は逃げても救われない。戦う決意をせよ。もし勝利すれば、お前は大地を享受するであろう。死ねば天界へ行くであろう。(二五)』

そこで人中の虎である王は引き返し、重臣たちに囲まれ、戦車の中で蛇のように息を吐き、金剛杵（ヴァジュラ）のような矢を放ちました。(二六)父上、彼が雲の群のような軍隊を矢で粉砕した時、私は総毛立ち、腿がふるえました。(二七)それからその獅子のように堅固な強い若者は、戦車隊を蹴散らし、笑って、クル族の人々の衣服を奪いました。(二八)一人のその勇士により、六人の戦士が取り巻かれたのです。猛り立った一匹の虎が森で草を食む鹿たちを取り巻くよ

うに。(二九)」

ヴィラータは言った。

「その勇猛で強力で誉れ高い神の子はどこにいるのか。クル族に奪われた私の財産を戦いで取りもどしてくれた人は。(三〇)その強力な方に会って、敬意を表したい。その神の子は、お前と牛たちを守って下さったのだから。(三一)」

ウッタラは言った。

「父上、その栄光ある神の子は消えてしまいました。しかし彼は明日か明後日に現われると思います。(三二)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

変装して素姓を隠してそこに住んでいるアルジュナについてこのように告げられても、ヴィラータは彼の正体がわからなかった。(三三)そしてアルジュナは、偉大なヴィラータの許しを得て、自ら奪った衣服をヴィラータの娘に与えた。(三四)美しいウッタラーは高価で繊細な種々の衣服を受け取って喜んだ。(三五)アルジュナは、ユディシティラ王に関してなすべきことをすべて、ウッタラとともに密かに相談した。(三六)そしてそのバラタの雄牛は、マツヤ国王の息子とともに、喜んで適切にそれを実行していた。(三七)

（第六十四章）

王女ウッタラー、アルジュナの嫁になる

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それから三日目に、パーンダヴァの五兄弟は、約定に従って誓戒を成就し、沐浴して白衣をまとった。(一) 勇士たちはユディシティラを先頭に、すべての装身具に飾られ、赤い斑点のある象のように輝いていた。(二) 火のような彼ら一同は、ヴィラータの集会場に行くと、王侯の座席に座った。火が火炉にあるように。(三) 彼らがそこに座っていた時、ヴィラータ王が一切の王の仕事をするためにその集会場に入ってきた。(四) 燃える火のような、栄光あるパーンダヴァたちを見て、マツヤ国王は神のような様子で座っているカンカに告げた。彼はマルト神群に仕えられている神々の主のようであった。(五)

「私はあなたを賭博師として廷臣にした。それなのにどうして身を飾って王の座席に座っているのか。(六)」

アルジュナは笑いたい気持を押えてヴィラータの言葉を聞くと、微笑しながら次のように告げた。(七)

「王よ、彼はインドラの座席にさえ昇ることができる。彼は神聖で、学識あり、気前がよく、祭祀を習いとし、堅く誓戒を守る。(八) 彼はクル族の雄牛、クンティーの息子ユディシティラである。彼の名声は昇る陽の輝きのように三界に確立している。(九) 彼の名声の光線は、

昇る陽の光線のように、すべての方角に行きわたる。(一〇) 王よ、彼がクルクシェートラに住んでいる間、強力な一万の象と、黄金の花輪をつけ、良馬をそなえた三万の戦士たちが常に彼の背後に従って行った。(一一―一二) かつては、よく磨いた耳環をつけた八百人の吟誦者(スータ)が、讃嘆者(マーガダ)たちとともに彼を讃えた。聖仙たちがインドラを讃えるように。(一三) クル族の人々は常に従僕のように彼に仕えた。王よ、そしてすべての王も、神々がクベーラ(毘沙門天)に仕えるように彼に仕えた。(一四) あの頃、彼はすべての王たちに貢物を納めさせた。大王よ、彼らは自立していたが、実業者(ヴァイシャ)のように否応なく貢物を納めさせられた。(一五) 八万人の偉大なヴェーダ修得者が、このよく誓戒を守る王のもとで生活した。(一六) 王よ、彼は法(ダルマ)に従って、老人、身寄りのない者、身障者、児童、臣民たちを、わが子のように保護した。(一七) この王は法と自制と怒りに関して誓戒を守り、好意にあふれ、敬虔で、真実を語る。(一八)

スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)王とその一党、カルナやシャクニは、彼の栄光に苦しんでいる。(一九) 王よ、彼の美質をすべて数えあげることはできない。ユディシティラは常に法に専念し柔和である。(二〇) 王中の雄牛であるユディシティラ大王はこのような美質をそなえている。この王はどうして王の席に座るのにふさわしくないだろうか。(二一)

(第六十五章)

ヴィラータは言った。

「もし彼がクンティーの息子であるユディシティラ王であるなら、その弟のアルジュナは誰か。強力なビーマは誰か。(一)ナクラ、サハデーヴァ、誉れあるドラウパディーは誰か。パーンダヴァたちは賭博で敗れてから、どこにも見出されていない。(二)」

アルジュナは言った。

「王よ、バッラヴァと呼ばれるあなたの料理人が、恐るべき迅速さと勇猛さを有する勇士ビーマである。(三)彼はガンダマーダナ山で、怒りにかられて（鬼神たちを）殺して、クリシュナー（ドラウパディー）のためにサウガンディカの花を取って来た。(四)彼はあの邪悪なキーチャカを殺したガンダルヴァに他ならぬ。彼はまた、あなたの後宮で、虎や熊や猪を殺した。(五)あなたの馬丁が勇士ナクラである。そして牛の番人がサハデーヴァである。これらの勇士はマードリーの双子の息子である。(六)この二人の人中の雄牛は、優美な衣服と装飾をつけ、容色にめぐまれ、誉れ高い。幾千もの戦士に匹敵することができる。(七)

そしてこの蓮弁のような眼と美しい胴を持ち、美しく微笑むサイランドリーがドラウパディーである。王よ、彼女のためにキーチャカが殺されたのである。(八)そして大王よ、私がアルジュナである。きっとお耳に達していることだろう。ビーマの弟で、双子の兄である。(九)大王よ、我々はあなたの宮殿で快適に知られずに過ごした。胎児が子宮に宿るように。(一〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

アルジュナがパーンダヴァの五名の勇士について述べた時、ヴィラータの息子（ウッタラ）はアルジュナの武勇について報告した。(一一)

「鹿たちの中の獅子のように、彼は敵中で彼らの勇士たちを殺しながら、戦車の群の間を動きまわりました。(一二)彼は戦場において、一矢で巨象を射ました。その黄金の腹帯をつけた象は、二つの牙から大地に倒れました。(一三)彼が牛を取りもどし、戦いでクル群を破ったのです。彼の法螺の音で、私の耳は聞こえなくなりました。(一四)」

ウッタラの言葉を聞くと、栄光あるマツヤ国王は、ユディシティラに対して罪を犯したと思い、ウッタラに答えた。(一五)

「パーンドゥの息子に許しを乞う時が来た。もし承知してくれれば、アルジュナにウッタラー（王女）をさし上げたい。(一六)」

ウッタラは言った。

「彼らは崇拝され、もてなされ、尊敬されるべきです。その時が来たと思います。尊敬に価する栄光あるパーンダヴァたちに敬意を表しなさい。(一七)」

ヴィラータは言った。

「私もまた、敵に捕らえられた時に、ビーマセーナに救われた。牛もまた取りもどされた。(一八)彼らの腕の力により我々は戦いに勝利したから、我々一同は、重臣たちとともに、パーンダヴァの雄牛ユディシティラとその弟たちに許しを乞おうではないか。(一九)我々が知らないでユディシティラ王に言ったことを、どうかすべて許していただきたい。ユディシテ

イラは徳性ある方だから。(二〇)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

それからヴィラータは最高に満足して、ユディシティラ王と会見して条約を定めた。偉大なヴィラータは、すべての王国と軍隊と国庫と都市を彼に引き渡した。(二一)それから、栄光あるマツヤ国王は、アルジュナをはじめとして、すべてのパーンダヴァたちに、「幸せなこと、幸せなこと……」と言った。(二二)

軍隊の長ヴィラータは、ユディシティラやビーマやマードリーの二人の息子たちの頭に何度も口づけし、何度も抱きしめて、飽くことはなかった。そして彼は満足して、ユディシティラ王に告げた。(二三—二四)

「幸いなことにあなた方はみな、無事に森から出て来た。幸いなことに悪人たちに知られることなく、苦難を越えることができた。(二五)この王国とその他の財産をすべて、躊躇することなく受けられますように。(二六)アルジュナがウッタラー(女王)を受け取りますように。最高の人物である彼は、彼女のふさわしい夫であるから。(二七)」

ダルマ王(ユディシティラ)はこのように言われて、アルジュナを見た。兄に見られたアルジュナは、マツヤ国王に言った。(二八)

「王よ、私はあなたの娘を嫁(息子の妻)として受け取ります。マツヤとバラタ族の最高者よ、我々の縁組はふさわしいものですから。(二九)」

(第六十六章)

ヴィラータは言った。

「パーンダヴァの最上者よ。私は娘をさし上げたが、どうしてあなたは自分の妻として彼女を受け取らないのか。(一)」

アルジュナは答えた。

「私は後宮に住んでいる間、いつもあなたの娘を、密かにあるいは公然と見て来た。そして彼女は父のように私を信頼している。(二)私は歌に巧みな舞踊家として気に入られ、尊敬されている。あなたの娘は常に私を師匠のように考えている。(三)王よ、私は年頃になった彼女と一年間住んだ。王よ、あなたや世間の人々に疑われても仕方ない。(四)それ故王よ、私はあなたの娘を〔嫁として〕招くのである(不純な娘を息子の妻にするはずがない)。私は清浄で、感官を制し、自制している。私は彼女の純潔を保証する。(五)彼女が〔私の〕嫁である場合も、〔あなたの〕娘である場合も、息子や自分自身に関して、私は何ら懸念を抱いていない。それ故、彼女は純潔であるということになろう。(六)私は中傷と不適切な行為を恐れる。敵を苦しめる王よ、あなたの娘のウッタラーを嫁として受け取る。(七)王よ、私の息子である勇士アビマニユは、ヴァースデーヴァ(クリシュナ)自身の甥である。神の子のようで、円盤を持つ人(クリシュナ)に愛され、子供ながら武器に巧みである。彼はあなたの娘の婿、あなたの娘の夫としてふさわしい。(八—九)」

ヴィラータは言った。

「クルの最上者アルジュナにふさわしいことだ。アルジュナは常に法（ダルマ）を実践し、知識がある。(二〇)アルジュナよ、あなたがすべきだと考えることをすぐにやりなさい。アルジュナが私の親類になれば、私のすべての願望は実るであろう。(二一)」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

王中の王がこのように言った時、ユディシティラはマツヤ国王とアルジュナとの条約における結びつきを承認した。(二二)それからアルジュナとヴィラータ王は、すべての盟友とクリシュナに使者を送った。(二三)

かくて十三年目が完了した時、五名のパーンダヴァはすべて、ヴィラータの〔都の一つ〕であるウパプラヴィヤに行って滞在した。(二四)〔そして、結婚に招待された多くの盟友が、各々すばらしい贈物を持って集結した。(二五から二五の前半まで略)〕

それから、マツヤ国王とアルジュナとの両家の婚礼が作法通りに行なわれた。(二五)かくて、アルジュナに用意された法螺、小鼓、角笛、太鼓が、マツヤ国王の宮殿で鳴り響いた。(二六)多様な種類の鹿とその他の儀式用の獣が幾百頭も殺された。そして多くの種々の酒（ラスー、マイレーヤ）が運びこまれた。(二七)歌手、語部（かたりべ）、役者、吟唱詩人（ヴァイターリカ）、吟誦者（スータ）、讃嘆者（マーガダ）たちが彼らを讃え、伺候した。(二八)スデーシュナーをはじめとするマツヤ国の貴婦人たちは、全身魅力的に装い、よく磨かれた宝石の耳飾りをつけてやって来た。(二九)婦人たちはすばらしい顔色をし、容姿にめぐまれ、美しく飾っていたが、クリシュナー（ドラウパディー）は、容姿と誉れと輝かしさにかけてすべての婦人を凌駕していた。(三〇)彼女たちは大インドラの娘のような、美しく飾られたウッタラーを取り巻き、敬意をもって付き添っていた。(三一)

アルジュナはその時、自分とスバドラーとの息子（アビマニユ）のために、全身非の打ち所のないヴィラータの娘を受け取った。(三二)偉大な王ユディシティラは、インドラのような様子をしてそこに立っていた。そして彼女を〔一族の〕娘として受け入れた。(三三)アルジュナは彼女を受け取ると、クリシュナに敬意を表してから、偉大なスバドラーの息子の婚礼をとり行なわせた。(三四)ヴィラータ王は彼に七千頭の風のように速い馬と、二百頭の最高の象と、多くの財産を与えた。(三五)婚礼がすんだ時、ダルマの息子ユディシティラは、クリシュナがもたらした財物をバラモンたちに与えた。(三六)すなわち千頭の牛、宝物、種々の衣類、最高の装飾品、乗物、寝具である。(三七)マツヤ国王の都は、喜び満腹した人々に満ち、大祭のように輝いていた。(三八)

（第六十七章）

原典訳マハーバーラタ4

二〇〇二年七月十日　第一刷発行

訳　者　上村勝彦（かみむら・かつひこ）

発行者　菊池明郎

発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三

装幀者　安野光雅

印刷所　三松堂印刷株式会社

製本所　株式会社積信堂

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三

ISBN4-480-08604-8 C0198